



# 日本漢文史

籍叢刊

第三輯

雜史

二



上海交通大學出版社  
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,  
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—  
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜



第三輯目錄

第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳（續（卷三—卷四十七）

第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳（續（卷四十八—卷七十五）

東國高僧傳（序、卷一—卷十）

續日本高僧傳（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳（續（卷十一—卷十一）

吉水實錄（序、卷第一—卷第十四）

正法山六祖傳

日本往生全傳（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

扶桑往生傳（序、卷上—卷下）

淨土真宗付法傳	四五五
---------	-----

三國高僧略傳 (序、例言、卷之上—卷之中)	四七五
-----------------------	-----

第五冊目錄 (總第66冊)

三國高僧略傳 續 (卷之下)	一
----------------	---

近世禪林僧寶傳 (序、凡例、目錄、卷之上—卷之下)	二七
---------------------------	----

高僧名士傳	一二七
-------	-----

和漢高僧傳	一五三
-------	-----

門跡傳	二四一
-----	-----

天台圓宗列祖略傳	三〇三
----------	-----

密宗血脉鈔	三二九
-------	-----

日本國大師一覽	四五一
---------	-----

唐鑑真過海大師東征傳	四五九
------------	-----

東福開山聖一國師年譜	四八七
------------	-----

蒼龍窟年譜	五〇九
-------	-----

東海一休和尚一代記 (上)	五二九
---------------	-----

第六冊目錄 (總第67冊)

東海一休和尚一代記 續 (下)	一
-----------------	---

智証大師年譜	一三
--------	----

正受老人崇行錄	三五
---------	----

東海鐵塔諸祖年譜略頌	六一
------------	----

峨山禪師行實並法語	九一
-----------	----

方廣開山無文元選禪師行狀 ..... 九九

越溪道蹟 ..... 一一三

損翁老人見聞寶永記 ..... 一二一

近世高僧年表 ..... 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) ..... 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) ..... 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) ..... 三八五

長谷寺緣起 ..... 四三九

扶桑伽藍紀要 ..... 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 ..... 四七七

### 第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) ..... 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) ..... 一四九

### 神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) ..... 三〇五

皇國神社志 ..... 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) ..... 三九三

天滿宮世家 ..... 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) ..... 四五五

### 第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) ..... 一

雜紀

古事記 (卷一—卷三) ..... 八三

春記 (卷一—卷三) ..... 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) ..... 二一七

第九冊目錄 (總第70冊)

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) ..... 一

第十冊目錄 (總第71冊)

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) ..... 一

第十一冊目錄 (總第72冊)

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) ..... 一

第十二冊目錄 (總第73冊)

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) ..... 一

明月記 (諸言、目次、第一) ..... 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊)

明月記 續 (第一、第二) ..... 一

第十四冊目錄 (總第75冊)

明月記 續 (第二、第三) ..... 一

第十五冊目錄 (總第76冊)

明月記 續 (第三、補遺) ..... 一

古語拾遺 ..... 三四三

將門記 ..... 三六一



大塔物語 ..... 三八三

保建大記 (卷上—卷下) ..... 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) ..... 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) ..... 四七五

### 第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) ..... 一

今日鈔 (卷一—卷七) ..... 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) ..... 一七七

近古史談 (卷一—卷四) ..... 二二一

近世史談 (卷一—卷四) ..... 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) ..... 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) ..... 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) ..... 四七三

### 第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) ..... 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) ..... 二五

行在或問 (卷上—卷下) ..... 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) ..... 九五

慶安小史 ..... 一七一

先朝私記 ..... 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) ..... 二一一

西京傳新記 (初編—四編) ..... 二二七

日本詩史 (卷一—卷五) ..... 三三三

回天詩史 (卷上—卷下) ..... 三九一

和漢茶誌 (卷一—卷三) ..... 四三一

本朝畫史 (卷上中下) ..... 五一一

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史 (卷上—卷下) ..... 一

近世畫史 (卷一—卷五) ..... 二七

雲煙略傳 (卷上—卷下) ..... 一一五

日本國事跡考 ..... 一五七

史館茗話 ..... 一九七

寤眠錄 ..... 二二三

幽囚錄 ..... 二三九

在津紀事 (卷一—卷二) ..... 二六五

正名緒言 (上下) ..... 二八九

本朝蒙求 (上中下) ..... 三三三

扶桑蒙求 (上中下) ..... 四〇九

神代千字文 ..... 四九五

本朝千字文 ..... 五〇九

內國千字文 ..... 五二一

日本千字文 ..... 五三三

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）

盡忠錄

涉史偶筆

（卷一—卷六）、涉史續筆（卷一—卷七）

香亭雅談

櫻史新編

酒史新編

國朝佳節錄

外史劄記

歷代君臣名功錄

傳疑小史

仙臺支傾錄

先哲醫話

奇談新編

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實

潛中紀事

正保野史

稽古要略

丙丁炯戒錄

養真亭藏泉譜

.....一九

.....一九

.....四一

.....一八九

.....二三五

.....二五五

.....二九七

.....三一

.....三三三

.....三九三

.....四〇九

.....四三七

.....五二三

.....一

.....一〇七

.....二六五

.....二七三

.....二八五

.....三二一

.....三三一

新撰寬永泉譜 (前編—後編) ..... 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) ..... 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) ..... 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) ..... 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊)

大東世語 續 (卷三—卷五) ..... 一

近世叢語 (卷一—卷六) ..... 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) ..... 一〇七

修身叢語 (上下) ..... 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) ..... 一二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) ..... 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊)

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) ..... 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) ..... 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊)

戰略新編 續 (卷六—卷十一) ..... 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) ..... 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊)

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) ..... 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) ..... 九七



日本外史 (序、例言、引用書目、目次、卷一—十八) ..... 二二九

第二十五冊目錄 (總第86冊)

日本外史 續 (卷十九—卷二十二) ..... 一

續日本外史 (卷一—卷十) ..... 七三

近世日本外史 (卷一—卷八) ..... 二五三

續近世日本外史 (卷一—卷二) ..... 三九一

日本外史補 (自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七) ..... 四四一

第二十六冊目錄 (總第87冊)

日本外史補 續 (卷八—卷十四) ..... 一

江戸將軍外史 (卷一—卷五) ..... 六一

史表

皇朝金石年表 ..... 二五五

日本金石年表 ..... 二八七

史籍年表 ..... 三一九

日本史籍年表 (前編) ..... 三五九

第二十七冊目錄 (總第88冊)

日本史籍年表 續 (前編續 後編) ..... 一

第二十八冊目錄 (總第89冊)

日本史籍年表 續 (後編續) ..... 一

銅鑄和漢年契 ..... 四五

增訂新撰年表 ..... 七七

近世儒林年表	.....	一三五
日本外史年表	.....	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	.....	二六三
年代紀略	.....	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一 卷七)	.....	三六一
國史年表	.....	五二九
逸號年表	.....	五三九

第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳 續（卷三—卷四十七）

.....

本朝高僧傳卷第三

濃州盛德沙門 師蠻 撰

法本一之三

紀州高野山金剛峯寺沙門空海傳

釋空海姓佐伯氏讚州多度郡人父田公母阿刀氏夢梵僧入懷而有娠在胎十二月寶龜五年生裁在孩穉更無他戲泥塑佛像甚精讀禮十二外舅即散大夫阿刀大足教以世典善通文義十五隨舅氏上洛博覽羣書十八入庠序就味酒淨成博士岡田學毛詩左傳嘆曰儒書日淺佛法愈高作三教指歸旌

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

一

意乃從石淵勤操僧正受虛空藏末闍持法名山絕巘事修練躋阿州大龍嶽修供寶劍一枚忽落暗天往土州室戶崎修誦五更明星飛來入口遂得悉地堪任頭陀被葛洗冬絕穀過夏精進苦節朝懺暮悔弱冠拜省操公於泉州橫尾山落髮受沙彌十戒名曰如空研習三論學大小乘二十二登東大寺戒壇稟具足戒而改空海向佛誓曰三乘十二部經有疑未能決擇願垂加祐示我正法夢一僧告曰有真祕要名大毗盧遮那神變加持現在和州高市郡久米道場東塔下卽如久米寺於塔柱下果得祕經是

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

一

養老年中善無畏三藏之所納度也被闕不解更堪惛漠因有南詢之志慕無畏之跡東大寺西南隅構廬禪坐延曆二十三年夏五月乘遣唐使越前刺史藤原能船秋八月著衡州界乃德宗貞元二十年矣冬十二月屆長安城敕館宣陽坊官舍明年春又敕居西明寺永忠法師古院巡遊諸刹拜謁青龍寺內供奉慧果阿闍黎果大廣智不空三藏之高弟也一見而喜曰吾待子久矣卽願諸徒曰是沙門者第三地菩薩也當備香華以入密壇夏六月上旬入胎藏界大曼荼羅沐五部灌頂水秋七月上旬入金剛界大曼荼羅八月月上旬授傳法阿闍黎位灌頂是日海設五百僧齋備施四眾果與金剛頂等諸密經并圖畫曼陀羅及諸法具曰昔大毗盧遮那世尊以祕密真言印付金剛薩埵薩埵傳龍猛菩薩展轉至大廣智智爲三朝灌頂國師復付我子有瑜伽大乘根器故我授此大法宜歸於本土傳敷國界然則四海安泰萬民豐樂果又命畫工摹忠信新造法具十五部集二十餘輩經生寫三部祕經等及健陀國罽荼一幅佛舍利八十粒皆併付之海獻罽荼一領雜寶手爐并



書一篇以說法恩時果之法姪玉堂寺珍智告果云  
日本座主縱地上人元非門徒只可傳顯教何暇授  
密典其夜賀夢神人來責過失詰朝到海之所懺悔  
拜謝海又逢蜀賓國般若三藏三藏曰我經歷五天  
常誓傳燈來遊此土復欲浮海遊化東域今幸逢于  
通我夙志即與自譯華嚴六波羅密經及梵夾元和  
元年秋八月歸當本朝大同改元敕令流通傳來密  
乘嗟峨帝詔入宮會諸宗碩師各論所習海賢即身  
成佛之義諸家爭折之海辯論精敏帝思見所證海  
即入五藏三摩地觀頂涌五佛寶冠放五色光明三

日本書

本朝書傳卷之五

○五

論之道昌法相之源仁華嚴之道雄天台之圓澄等  
皆見退滋弘仁元年冬十月上表請為國家修仁王  
護國經於高尾山寺朝議制可帝敕諸山各述宗義  
海據毗盧遮那經及菩提心論著十住心論配抵諸  
宗立一家言第一曰異生羗羊心第二曰愚童持齋  
心第三曰嬰童無良心第四曰唯種無我心第五曰  
拔業因種心第六曰他緣大乘心第七曰覺心不生  
心第八曰如實一道心第九曰極無自性心第十曰  
祕密莊嚴心他家駁評而密者取法七生夏上紀州  
高野山山神忽來道至平坦所施精藍地以償夙罪

初海在唐將歸之日執三鈷杵祈願曰密教入日域  
久屬流傳此杵先占靈區即向本邦擲之其杵應在  
松枝海知有緣此地歸京上表曰山高則雲雨潤物  
水積則魚龍產化是故峭閣峻嶺能仁之迹不休孤  
岸奇峰觀世之蹤相續尋其所由地勢自爾又有臺  
嶺五寺禪客比肩天山一院定侶連袂是則國之寶  
民之梁也伏惟我朝歷代皇帝留心佛乘金剎銀臺  
櫺比朝野談義龍象每寺成林法之興隆於是足矣  
但恨高山深嶺之四禪客幽藪窮品希入定實實是  
禪教未傳住處不相應之所致也今準禪經說深山

日本書

本朝書傳卷之五

○四

平地尤宜修禪空海少年日好涉覽山水從吉野南  
行一日更向西去兩日程有平原幽地名曰高野計  
當紀伊國伊度郡南四面高嶺人蹤絕跡今思上奉  
為國家下為修行者爰荒蕪聊建立修禪一院經  
中有誠山河地水悉是國主之有也若比丘受用他  
不許物即犯盜罪者加以法之興廢悉繫天心若大  
若小不敢自由望請蒙被空地早遂小願然則四時  
勤念以答雨露之施若天恩允許請宣付所司輕塵  
宸扆伏深悚越乃制可賜焉秋再躋高野山初精藍  
曰金剛峯寺十有一年賜宸奎傳燈法師位記明歲

諸州里民奏曰國有甘露池始自去年禁之隄封工  
大民少成功未期沙門空海此土八山中坐禪默觀  
鳥狎海外求道虛往實歸因茲道俗欽風民庶望影  
居則生徒成市出則追從如雲今離舊土常住京師  
百姓戀之實如父母若聞其來必創履相迎伏請在  
之杖錫令濟其事制許之及海至州不日底績秋七  
月新錢二萬施海十有三平城太上皇就海受灌  
頂法帝者密灌之始也十有四年賜以東寺海建灌  
頂院準青龍寺每歲二序修灌頂法乃置慧果所付  
健陀國架架及念珠爲寺鎮冬十一月奏以東寺爲

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○五

密場置五十比丘天長元年春三月旱重奉帝敕祈  
雨於神泉苑行期不雨海入三摩地見之守敏法師  
咒諸龍接入一瓶奏延二日告諸徒曰池中有龍號  
善女阿耨達池龍王之屬也現形則得悉地時金龍  
浮水長可九尺弟子眞雅實慧眞曉眞然等得見之  
餘不能觀帝敕和氣眞綱以幣物供神龍既而膏雨  
大澍池水至壇霖沛三日天下皆洽敕加優賞河州  
有寺龍池久涸請海加持清水俄涌今龍泉寺是也  
此歲敕任僧都上表不受帝堅制不允二年丙午敕  
改高尾神願寺名神護國祚眞言寺賜海承和元年

奏之準唐朝內道場置眞言院於宮中敕以勘解由  
司應爲曼荼羅道場每年正月始入日後一七日中  
朝廷國家泰平修法至今不絕二年正月奏置試度  
三人毗盧遮那經業金剛頂經業聲明業各一人承  
和二年春三月在金剛峰寺其諸弟子唱彌勒寶號  
二十一日結跏趺坐結毘盧印泊然氣絕蓋持定身  
期龍華會也世齡八十有二法臘四十有三諸徒相  
集修七七忌身體尚溫鬚髮日生稍過五旬剝落更  
衣封安全身疊石造壇樹率兜婆定後四日敕內舍  
人贈賜弔慰太上皇弔喪降書曰具言洪匠密教宗

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○六

師邦家憑其護持動植荷其德惠豈圖吟嘯未遍無  
常遽侵速馳州書弔慰太定海妙用無方神異非二  
修不動使者法則身出火燄入水想觀則室內成池  
雕璫佛菩薩像徧滿國界嘗在豆州桂谷山寺以指  
向空寫大般若經至魔事品字畫嚴然現於空中自  
此筆翰精工人神或拔五筆五行共書或畫水上墨  
痕不滅弘仁九年奉敕書大內南門諸額應天門額  
掛而見之應字點睛海乃飛筆塗之毫無斜邪撰述  
尤多祕密曼荼羅十住心論十卷卽身成佛義七卷  
理趣經釋四卷胎藏界私記金剛界次第教王經義

記文鏡秘府論各三卷大日經疏文次第大日經開  
題畧釋胎藏界廣記金剛界口決守護國界主經釋  
摩訶衍論指事各二卷大日經畧釋金剛頂經畧釋  
金剛界私記最勝王經畧釋法華經祕釋法華經品  
釋金剛私記瑜祇經行法記三摩耶戒作法具言問  
答書般若心經祕鍵等各一卷總計一百四十餘部  
二百二十餘卷其餘詩文見性靈集傳來佛舍利八  
十粒梵夾三經疏二百一十六部四百六十一卷諸  
曼荼羅寶器佛具不遑勝記延喜二十有一年賜諡  
弘法大師

日本書紀 本朝高僧傳卷之三

〇七

贊曰瑜伽者梵語此翻相應身口意之三業感應妙  
恆之謂也而又以信爲主意憑信而正者也空王公一  
代所修莫不憑信通五佛冠作萬乘之師乘菩薩地  
屈四宗之傑開南山董東寺雷那伽身期龍華會見  
童走卒莫不尊弘法之名焉垂今八百餘載學金剛  
定之末葉鋪衍于天下要路適祖之信而有爲者若  
是矣

### 京兆東山建仁寺沙門榮西傳

釋榮西號明菴備州吉備津人其先賀陽氏薩州刺史貞政曾孫也母田氏夢明星現而卽有妊在胎八

月永治元年四月二十日明星出時生母忌期不滿  
不乳三日而不死沙門賜嚴誡之鞠育聰敏逸  
羣八歲就父讀俱舍婆舍論二論十一師事本郡安養  
寺靜心十四祝髮登睿山壇受滿分戒十八依千命  
法兄稟虛空藏承聞持法浴灌頂水苦修精礪屢見  
靈感同儕嘲曰子有才辯身貌矮醜取笑於稠人廣  
衆時西續口曰虛無王於赤縣晏嬰相于齊國未聞  
共長也嘲者羞齒西心實恥之因期百且修求聞持  
法初入壇時躬身長於堂前柱恆期倚柱長於前四  
寸餘十九學六教於睿山有辯習密乘於伯州甚好

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

〇八

盡得灌頂還睿山重受密灌於顯意細閱太藏檢關  
八載常聽支那禪法之盛寄思南詢仁安三年夏四  
月遂乘商舶著明州界宋孝宗乾道四年也時年二  
十八會遇廣慧寺知賓之僧與之相語問曰日本有  
禪乎西曰我邦自宗始祖傳教大師延曆末年入唐  
傳密禪三宗今台密盛禪滅久矣故航海來不知  
得否知賓曰子欲究祖師禪拋下從前知見發得太  
機精礪積年自然有契當分西聽而心服去居丹丘  
道逢本邦重源相伴登天台山見青龍於石橋拜羅  
漢於餅峯供茶湯而感現異花於蓋中上廬山返明

州詣阿育山見舍利放光，是秋大旱，郡主請西祈雨，修法之間，西身發千光，上燭香漢，于時大雨，敕賜千光之號。九月上浣，重源相誘同船而歸，乃以天台新章疏三十餘部及台宗時彥酬酢之書呈座主明雲。雲公嘆曰：子於支那揄揚台教，實我國之光華也。因結菴山中，混衆而居。西復欲重渡震旦，達於天竺，拜釋迦八塔而終身。於佛國門下侍郎平賴盛與西厚常昵，遠遊及侍郎卒，以文治丁未夏再入宋城，年四十七，徑趨臨安府，行在所謁知府，按撫侍郎奏奏通竺之事，報曰：曳半影於巖嶇棧道終，全身於中平道。

日本書述 本朝高僧傳卷之三

○九

場然北蕃強大，西域皆隸，關塞不通，何行之有？素志不成，復登山，山皆虛菴，敬禪師住萬年寺，直往見之。菴問傳聞，日本密教甚盛，如端倪宗趣，一句如何？西答曰：初發心時，便成正覺，不動生死而至涅槃。菴曰：如子所言，與吾宗一般。掛搭參訊，徹格外機，淳熙之末，菴移天童山西，亦從侍。紹熙二年秋告辭，菴付僧伽梨，并與書曰：日本國千光院大法師宿有靈骨，洪持此法，不遠萬里入我炎宋，探賸示旨，竝道戊子遊天竺，見山川勝妙，生大歡喜，至石橋焚香煎茶禮往。世五百大羅漢尋返，本國夢境恰恰二十年，雖昔問

不繼而山中耆宿歷歷記其事，今又再遊此方，相從老僧宿契不淺，志操可貴，不得不示法耳。昔釋迦老子將圓寂，以正法眼藏涅槃妙心付屬摩訶迦葉二十八傳而至達磨六傳而至曹溪，又六傳而至臨濟八傳而至黃龍，又八傳而至予，今以付汝，汝當護持，佩此祖印，歸國布化，開示衆生，繼正法命，又達磨始傳衣而來，以爲法信，至六祖止而不傳，汝爲外國人，故我授此衣爲法信，則乃祖又曰：菩薩戒禪門一大事也，汝抗海來問禪，於我因以付之，副以應器，坐具寶餅拄杖白拂其圖，迦文以下十八祖達磨以來至

日本書述 本朝高僧傳卷之三

○十

虛菴五十二世嫡承系連，西頂受而出，到奉國軍乘楊三綱船，著平戶島菴浦，皆本朝建久二年也。戶部侍郎清貫營構小院請延居之，始行禪規，海參津率遂入王都，不昭示乘，先是能忍始勸禪法，指紳緇曰：疑怪毀之，今復西到，欲混忍而損菴之旨，崎有良辯者，嫉西禪化，將與台徒訴，朝寔遂議評紛如，上詔藤相國兼實乃西府裏傳主當令仲資徵問，尚書左丞宗賴與聞，爲西排片，卽黨舉揚真乘，乃謂我禪示者非今特有之，昔摩山傳教大師嘗製內證佛法相承血脉一卷，其初條卽我達磨直指之禪法也，今夫良



辯昏愚無知率意訛翻禪宗若非則傳教亦非傳教若非則台教不立台教不立則台徒豈拒我耶甚矣法裔之聞其祖意也昔公宗有識卻助西言良辯一昔夢西自宋國齋白米來音種諸州覺後改悔錢仲歸伏間有誹者辯曰勿以言之非汝等毀譽境東西示衆曰我此禪宗單傳心中不立文字教外別傳直指人心見性成佛其證散在諸經論中今且出少分以論汝等法華經曰唯佛與佛乃能究盡諸法實相諸法寂滅相不可以言宣華嚴經曰初發心時便成正覺涅槃經曰如來常住無有變易楞伽經曰如來

日本書紀 本朝書傳卷之三

〇十一

清淨禪淨名曰心淨佛土淨大般若曰第一義無有文字此廬遮那經曰我覺本不生出過語言道解節經曰自證無相法離言說四事支殊問經曰此法不思議離於心意識古察經曰一實境界者謂衆生心體從本以來不生不滅自性清淨起信論曰離言說相離心緣相智度論曰般若波羅密實法不顛倒念想觀已除言語法亦滅是等文繁若細引證更僕不盡又曰此事在行住坐臥處添一絲毫也不得減一絲毫也不得便恁麼會去更不費些兒氣力纔作奇特玄妙商量已無交涉所以動則生死之本靜則昏

沈之鄉動靜雙忘顯預佛性總不恁麼畢竟如何若是自外明宗終不言中取則直下便見撩起便行箭已離絃無返迴勢千聖也摸索不著或未到此田地切忌驕心大膽一向掠虛到臘月三十日總不著建久二年筑之香椎宮側構報恩寺始行菩薩大戒布薩六年乙卯州之博多開聖福寺建仁二年金吾大將軍賴家源公營建仁禪苑於洛東延居開山祖三年六月尚書省創置台密禪二宗於寺歸茲構景言止觀二院學徒叢萃元久二年春畿內大風都人命曰比來榮西新唱禪宗其徒衣服異製仰衆博幅直

日本書紀 本朝書傳卷之三

〇十二

祿太袖行道之時特包殿風今之風災因於西也巷謠甚喧達于天聽帝詔有司驅西出都西聞敕下曰是吾法成之秋也亟往堀川擇求材木諸徒匿笑西谷官使曰風者天地之氣其神曰飛廉豈西之所作乎若又有人能作風者其人尤靈不爲凡推此兩端西無可出都之理而聖主不可漫加放逐矣官使復奏帝曰然也重敕宜曰無所羨乎乃陳寺之營構上建仁爲官寺備有司監護殿堂盡極輪奐建永元年秋九月主東大寺幹事權四載修營成承元二年洛東法勝寺九層塔火敕門下侍郎藤公經監知修營

豫周二州充其費用三平八月未成一級又救西司  
造興落成亦如東大初平侍郎奏賜紫衣建保元年  
救權僧正三年乙亥相州龜谷營壽福寺一日辭源  
僕射實朝僕射曰師老且病寺亦未畢西曰我將入  
王城取滅耳僕射曰至人出沒豈擇地耶西曰都城  
士民初聞禪宗疑信過半我當唱末後何顯煥王都  
命駕歸京六月晦日布薩之次告衆曰孟秋初五吾  
當取滅矣都下喧傳聞于丹禁洎期帝遣中使問候  
西對官使曰期已瀕矣而資氣首健諸徒且訝晡時  
坐椅安庠而化中使路上聞稱遷化又見彩虹現於

日本書

本朝高僧傳卷之三

○廿

寺上也世齡七十五法臘六十三西在宋時捨發三  
百萬星架萬年寺三門兩廊又修觀音院智者塔院  
在天童日虛菴欲建千佛閣西啟菴曰吾歸國後當  
致良材歸朝翼歲鉅材若干稠載大舶送天童山乘  
是閣成寺主爲作堂祠焉嘗謂衆曰我歿三十年禪  
宗大興果如其言後世推爲本朝之禪祖也平生著  
述興禪護國論三卷一代經論總釋日本佛法中興  
願文三部經開題等各一卷密部特多不可盡記明  
上天竺沙門蘭開復撰塔銘焉

贊曰欲識佛性義理當觀時節因緣西公欲始取滅

於佛國而關塞不通留滯委遲傳佛心宗思出望外  
縱親拜靈山遺跡若遺於是時耶既爲本邦禪宗第  
一祖暨法幢唱大法時遇異二之難則單付是天地  
之氣法受張三之誨則偏證夫經論之文其智辯之  
無礙也如神禹之疏九河注諸海若俾疑滯三密八  
教之場安能如斯蓋皆有因緣也如今諸方遇勝因  
者鑑戒猛省迺祖之道尚存於一髮焉矣

論曰茫茫世界庶類恒沙細細幻生焉倏忽滅矣  
人處其中而顛倒邪正種子生現行現行習薰種三  
法循環生外無輟太覺世尊救此迷情相經盈海歷

日本書

本朝高僧傳卷之三

○十四

一千歲摩騰竺法蘭負歐東渡從此秋客夏僧聽言  
揣意翻譯大備本邦諸師傳其宗法道復東矣因以  
法本居首科或曰釋書本朝之僧史也初置傳智今  
何革之通曰支那之三僧傳初置譯經贊寧云譯經  
佛法之本也原夫經能詮法所詮不相差離譯經與  
法本者名異而同若一傳智雖偏於教而不偏於禪  
何者禪以心傳心不立知解謂法本則教禪通且此  
書大概取法例於三僧傳也又曰釋書慧深列古德  
科以達磨載于編首今卻反之寧爲僭越與通曰物  
有本末事序首終者常之理也台教曰昆雲雖然是

爲佛法根本也夫二師之蹟不詳若無德業百濟王  
 何貢獻之以例言之亦此方之騰蘭也居于冠篇何  
 僧越之有故以觀勒福亮智通智鳳仙那道璿同科  
 別次焉達磨片崗不須重譯唱和歌雷空棺于故  
 衣顯臨終之遺付慧觀來說中百門智之論道昭往  
 稟八五三二之品智藏說于宗於法隆寺稟無畏納  
 密經於久米道場審祥講華嚴於里盧大殿鑑真授  
 波羅提木叉而開戒壇招提二利最澄播台教於睿  
 山空海弘真言於高野榮西唱黃龍宗於建仁竺支  
 韓和之諸大乘基挹阿耨達池之本流而注扶桑神  
 州之東域矣嗟乎法主之教令廣矣哉大矣哉三千  
 大千世界靡不利而暨蓋又一心之所變緣起無方  
 天長地久劫石有消日而法本無盡時焉

日本漢述 本朝高僧傳卷之三

〇五

日本漢述

本朝高僧傳卷之三

〇六

音訓

屬 居例切 悚 息勇切 紉 音創 芟 師衙切 愆 苦堅切 賻  
 防父切 呱 庚平切 礪 力霽切 隸 力霽切 倪 研奚切 颺  
 卑遙切 匿 女力切 曾 慈秋切 訝 五駕切 塞 先代切 異  
 蘇因切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑒  
 本朝高僧傳卷三 茲業  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第三

本朝高僧傳卷第四

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之一

和州龍門寺沙門義淵傳

釋義淵姓岡連氏和州高市郡人父母無子禮觀音像一夕庭際聞有呬聲覓之帛裏嬰兒在籬香氣芬郁收養早長天智帝敕隨太子共育內宮太成顯悋好玩佛書敕傳出家從元興寺智鳳學成唯識遊訊諸方益究玄微於宇多郡開構龍門寺盛弘法相學徒闐闐受業者如玄昉行基道慈良辨宣教良敏行

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

〇一

達隆尊輩皆一時豪傑也文武帝賜稻一萬束資助齋厨大寶三年敕任僧正淵受七帝之崇樹二嚴兼備營建尤多龍蓋龍福共極輪迴神龜四年冬十二月聖武帝賜敕黃曰義淵法師禪枝早茂法染惟隆扇玄風於四方照慧炬於三界加以自先帝御世迄於朕代供奉內裏無一咎德念斯若人年德共高宜改市往氏賜岡連姓傳其兄弟翼歲十月某日示滅於高市龍蓋寺帝聞訃哀慟命治部官監護喪事賜絹一百匹絲二百疋綿三百屯布二十端矣贊曰淵公假化生質垂真實踪稟唯識訣弘法相宗

和州大安寺沙門道慈傳

七帝聖恩無八人神足丰享居菩薩行道貌何從容釋道慈姓額田氏和州添下郡人自少出家天生靈敏稟三論於法隆寺智藏學法相於龍門寺義淵涉學並有文才大寶元年入唐請益乃屈長安謁善無畏三藏受求聞持等密法遍路勝地親見明師皆唐帝選召義學高僧一百員講仁王般若經預選入官憐慈遠客特加優命在唐十八年經論史集遊練心曲貫通要義以開元戊午歸當本朝養老二年癸敕居大官寺弘三論始講慈恩疏說戒疏翌歲元正帝

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

〇二

詔曰道慈法師遠渡蒼波敷異聞於絕境遐遊赤縣研妙機於祕記參跡象龍旌英秦漢戒珠如懷滿月慧水若瀉滄溟倘使天下桑門智行如此者豈不殖善根之福田渡苦海之寶筏朕每嘉歎宜施食封五千戶標揚優賞用彰有德天平九年聖武帝將新大官寺下詔寬御監制式皆無知者慈奏曰臣僧在中學時見西明寺私念異日歸國荷逢勝緣當以此爲則寫諸堂之規冀藏巾笥今陛下聖問實臣僧之先抱也以圖上進帝大悅曰朕願滿矣詔任律師監造寺事重賜食封一百戶扶翼侍子其餘賞賜若干品



慈有巧思，延袤長短，自督繩墨，工匠數伏，歷十四生，而成賜額。大安，敕慈主席。九年丁丑冬十月，帝啟最勝會於大極殿，詔慈爲講師，聽衆二百人，稱嘆雄辯。其性耿介，不與時合解，印嘉遜竹溪山寺，愛烟霞，友麋鹿。一日，長屋王設宴招慈，以詩辭曰：素縑香然別，金漆涼難同。衲衣蔽寒體，綬鉢足肌體。結蘿爲垂幕，枕石臥巖中。抽身離俗累，滌心守真宗。黃杖登峻嶺，披襟受和風。桃花雪冷竹溪山，冲冲發春柳。雖發餘寒在，單船僧既方。外土何煩入，宴宮坐客見。詩益服高標。十六年甲申十月某日，示寂，歲七十餘。夏臘

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇三

若干

贊曰：慈公入唐，留學多歷歲月，研覈六宗，接四方賓博識高行，保後凋節。宋蔣公設宴招政黃牛，政辭以詩曰：昨日曾將今日期，出門倚杖又思惟。爲僧只合居巖谷，國士還中甚不宜。與慈公志操句格相似。而此先彼後，焉按夫西明寺取規於天竺，祇園精舍祇園摹兜率內院，本朝梵刹之制度無可與大安寺齊齒。苟俾一字存，則見者肅焉發菩提心。今已丘墟矣，悲乎！或人畜大安寺古圖，余摹寫一本，以寓懷古之歎也。

和州元興寺沙門智光傳 禮光

釋智光，河州人，從智藏僧正受三論，自性情純真，普涉經論，住元興寺講說空宗。同寺禮光亦師智藏，俱有今名。暮年誓絕言語，凝觀想數歲而卒。光歎曰：禮者，少年親友，不知受生何方，土追憶不輟。夢到禮居金殿銀樓，臺玉扉寶樹，珍禽種種勝境，乃問是何處。禮曰：極樂界也。予以常憶我，暫能至此，可速歸去。光曰：安養界，我所願也。惡用歸邪？禮曰：子無淨業，何得居光曰：願公平生之行，未有邁我，惟近來持不語耳。我何罪焉？禮曰：我昔普見經論，往生資糧無加觀

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇四

想是以絕言。謝人事，四威儀中唯觀彌陀，相好淨土莊嚴。今生樂邦，子身意散亂，無淨土，因卻詰我。邪光聞悲泣曰：何爲可得往生？禮曰：須問彌陀。引光詣佛所，莊嚴光彩又邁禮處。乃稽首曰：佛曰何等是往生正業？佛言：觀如來相好及淨土莊嚴，是爲正業。光曰：今見此界，廣傳嚴飾，心眼不及。況又如來相好，豈凡慮之所堪邪？於是彌陀卽舉金色石臂，放大光明，掌中現小淨土，嚴飾備足。令其具見，既寤，命畫工圖掌中淨土，構殿安置，號極樂房，以充觀想。後吉祥而終。其圖現在元興寺，世人爭模寫焉。光精於空宗，著

華玄略述等書。嘗曰三論有二一者部別三論中百十二是也二者義別三論破邪顯正言教是也其義別者一切邪法也故破之一切正法也故顯之邪止平等法界宛然是名言教又依曇鸞義著天親菩薩往生論疏釋五卷

贊曰禮光以觀想取生樂國智光因憶想能到回想淨念遂奉觀彌陀佛見小淨土昔梁僧濟夢無量壽佛接置於掌遍至十方是皆停觀專純感於報佛自受用身衆人若能修想如二光者莫不往淨刹也經曰阿彌陀佛去此不遠先佛豈有虛語耶

日本書述 本朝高僧傳卷之四

○五

系曰鍊師曰今之三論家皆唐之子孫也明僧高泉亦將錯就錯焉余按不爾智藏下出道慈智光禮光三傑而光下有靈睿睿下有玄覺漸安藥寶寶下有隆應品慧一燈而絕慈下有善議議下有勤操安澄二師從此宗派流行今之空宗皆慈公之裔也

### 和州元興寺沙門神睿傳

釋神睿唐國人不詳師承義淵之徒歟天資爽拔義解絕倫博究法相兼善華嚴三論詔住元興寺高立法幢黑白歸向世言得虛空藏菩薩靈威養老二年冬十一月元正帝詔僧綱曰朕聞優鉢崇智有國者

所先勸善將學爲君者所務於俗既有於道宜然神睿自幼卓絕道性夙成撫翼法林清醴定水不踐安遠之講肆學達三空未湫澄什之言河智周二諦由是伏膺請業者已知實歸函丈挹教者悉成宗匠戒珠月圓慧水波淨朕每讚勲在懷宜施食封五千戶闡揚盛賞以旌其德天平元年冬十月敕任少僧都與大安寺道慈並名時稱天下桑門之秀也九年某月日安座而化

### 和州法隆寺沙門行信傳

釋行信溫良律身從智鳳行基二師聽慈恩教廣達異部聖武帝屢召開法敕住法隆寺爲鎮寺法主太子豐聰開基已來歷一百二十歲仰藍未備天平十一年信奏興建帝命藤不比等監視創營凡歷九白寶殿回廊講堂樓閣皆悉落成敕講法華開惠之日帝親臨幸聽徒如林信又祝國家安寧撰仁王護國經疏三卷最勝王經音義一卷誦關上進敕任大僧都管七佛寺檢校欲自寫五部大乘經以度於寺追數軸成以老病化實天平寶字年中也寺衆大其功業於今忌日撞鐘供饌諷經堂中焉

### 和州元興寺沙門隆尊傳

日本書述 本朝高僧傳卷之四

○六

釋隆尊不詳何許人從義淵僧正受唯識宗兼聽華嚴綜錯積日理義入神隨衆屈請住元興寺律行粹然謙光外逼聖武帝聞任以律師尊講舍人親王曰性素頑惠未委篇聚今任律師恐不聖授且國家無戒師也尚矣我欲入異域廣於律範而才力乏慮遺國之恥故不果行方今興福寺義學生榮睿法師護鵬戒淨擊岬思覃天生隱逸警若濃州使此僧入唐請名師來流布戒法於國家是吾所願也親王執奏帝納其言卽敕睿及大安寺普照封常入唐天平勝寶四年三月中旬東大寺盧遮那佛大像成皇帝太

日本書紀

本朝高僧傳卷之四

〇七

上皇太皇后聯輿幸寺入殿拜佛是日設太會齋供養萬僧敕尊爲導師編素相稱爲一世之榮也天平寶字四年閏四月十八日寂于元興寺別院壽宣太行數焉又有釋良敏從義淵僧正受法相致要才博德邵與尊相次朝廷崇信擢于大僧都領元興寺贊曰先他而後已者並處之行也羅漢已下所絕而不爲也尊公奏榮睿普照入中華倡律匠來使天下國家始知毘尼大法焉夫本朝戒範雖權興于鑒具而其本者發軔於尊公且夫事者以發軔爲貴焉故佛說法會以發起人列于七衆之首以此故也觀尊

公之行實登地之人也哉

和州東大寺沙門良辨傳

釋良辨姓淺部氏相州人或曰百濟氏江州志賀人禪觀耳而得在襁褓時母出采桑置兒樹下大鷲攫去放于南都春日祠前義淵僧正偶詣神祠拾得養之五歲就學心地英發舉一隅而既知三隅及長剃具授以法相學解增進該貫諸部天平五年聖武皇帝建福索院於添上郡辨時在郡構一小院安居誦經一夜執金剛像發光照殿又誦經聲徹于宮中中便承命跡聲到院辨曰常祝聖安祈仰藍營臣僧愚

日本書紀

本朝高僧傳卷之四

〇八

願忍達摩慮歟中使以聞帝喜其奏賜福索院官府給粮造營已成號金鐘寺嘗發大乘心願興華嚴偶因感夢請審祥禪師始講維摩於金鐘寺列衆聽稟又招道融說梵編經修淨住法是本朝布薩之始也天平勝寶三年帝慶東大寺賞任少僧都明生夏救差住持兼司法務諸寺欽德八年轉大天平寶字進爲僧正辨以護法爲責任以修營爲皇蹟凡管主務十有二年諸堂戒壇麟次昇建皆因辨之勸奏也初帝鑄十八丈透那銅像多聚金用塗飾此時本朝之金帝語辨曰聞金峰山其地黃金也師所金剛藏王



得金裁像不亦宜乎辨乃入山持念藏王告曰此山黃金我不敢悉也江州湖西勢多懸有山是觀音靈應之地也子至彼持念必得黃金辨如勢多老翁坐大石釣辨問何人翁曰此良明神言即隱辨廬石上安如意輪像持修未幾與州貢金辨刻丈六大悲像及金剛藏王金剛神夷基顯得五尺寶鈴益以爲靈區貴賤禮成大寶刹以辨爲第一世又甲賀郡創金鐘菩提二寺相州開大安寺其爲不虛世曰辨朝出南京巡行江之三利暮歸東大辨母尋兒政涉山川祈佛禱神二十餘年竟不相知偶巡畿內丹沂

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇九

浞河或人語曰世有希事南都良辨僧正年二十餘學超儕輩擢爲帝師昔靈鷲所撰義淵僧正收取鞠養今成國寶母聞疑之乃往東大伺辨之出投書告事辨曰我行止偏如姬言尚有據否母曰我昔無子祈之觀音而得王子因刻小像繫兒末頸不知有諸辨嗚咽曰吾七歲時思親不輟先師以像授我曰吾得汝時像在不頸汝父母所繫汝思父母瞻禮此像是以奉持未嘗離身即出呈母母子相得悲喜以淚俱舍寺側終世孝養辨以寶龜四年閏十一月十六日化於所住壘於宇陀郡赤尾山林春秋八十有五

矣辨器度恢恢智福兩全付大法於聖王及皇后又有實忠良興良慧忠慧等神足八人各管東大弘華嚴教

贊曰興大法者必有勝因而存焉辨公之靈覺有太經初興之善介而是華嚴會上根熟之所成也當時有金鷲菩薩之稱者蓋又宜當矣

### 和州元興寺沙門嚴智傳

釋嚴智初學法相三論後從祥公受華嚴住元興寺倡賢首宗天平之季奉敕講華嚴於金鐘道場以標瓊性恭爲覆師畢六十卷又弟子智懷奉詔爲講師

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇十

登春福爲覆師講六十華嚴并疏二十卷

贊曰如來初轉輪之後舍利弗唱第二轉經所以使衆重知佛說也講經之覆說是其遺意而梁唐儘多訓忍證智等諸師依聖王之教互爲主賓講覆展轉演說不漏翻毘盧法海於舌端不徇結七處之緣如何能預此會豈又有如聾如啞者邪

### 和州大安寺沙門修榮傳

釋修榮不詳其氏想唐人矣久隨仙那遊刃三歲又就道璿益研戒學敕任傳燈大法師位止大安寺盛弘師道傍屬文藻風彩可觀嘗撰仙那行狀略曰昔

系曰明僧高泉云訓師南遊親傳其法於法藏歸付  
辦公其宗故此方之宗賢首者推訓師爲始祖余  
按是大不爾新羅審祥禪師人唐見賢首大師傳雜  
華來住大安寺爲本朝華嚴始祖良辨上足其至得  
親付囑稱華嚴發願初興之大士遊祥師門者靡不  
欽德而先一輩於訓公何有不足而慕之訓公元法  
相宗事唱本宗於興福傍從祥師兼學大經未聞其  
始祖且入唐之事國史不見有何所據言親見法藏  
乎賢首大師唐先天元年化先訓之歟今十六年歲  
月亦似其隔也凡編僧史者入其心不實其事尚或謬  
多矣況異域之僧而述本邦事差誤如斯誠足取無  
稽之謂焉

和州東大寺沙門鏡忍傳

釋鏡忍生英悟少事祥師早解頓教爲衆覆講祥之  
滅後承嗣良辨天平甲申奉詔與慈訓圓證講華嚴  
於金鐘道場稍及三生終八十卷開序題曰帝臨證  
明寶龜五年有旨重東大寺自律師昇進任僧都延  
曆二年某月日寂

和州大安寺沙門行表傳

釋行表不委氏族和州葛上郡人博綜經律爲江州

騰蘭事來澄什利往停跡振且之邦未踰日域之境  
計遠論勞彼有愧德自非位超修成行積永劫其孰  
契於茲乎復造仙那肖像繫贊公首其一曰至象無  
色大道無名湛然常住非滅非生隨緣汲引應物分  
形發揮正教如谷傳聲其二曰道不自弘弘之在哲  
荷歟聖主海內有截接武異人連肩英傑慈訓惟關  
慧燈斯徹其二曰德必有類道非獨顯緇紳行基幽  
贊妙典起予聖賓揄揚羣善竭誠致敬超羣惟願其  
四曰藏山易迷閣水難息仰德酬恩昊天無極幽誠  
曷寄寫像追福遍及無邊廣置有識餘略之

和州興福寺沙門慈訓傳

釋慈訓姓船氏河州人聰敏能解初隨興福寺玄昉  
學法相又依良敏僧都稟唯識訣後就審祥和尚聽  
華嚴經天平庚辰冬祥師講華嚴訓與鏡忍等遵會  
覆講其後隨處事唱法相稱德帝貴其道行賜莊田  
若干畝天平勝寶四年敕任僧都天平寶學元年奉  
詔爲興福寺主務此職以訓爲始返還學賓歸入其  
門如衆流朝於海焉寶龜八年某月日化於別房第  
子釋永嚴承訓師法任傳燈大法師位以相宗化當  
世出行賀常騰二傑

講師天平十五年表於興福寺北倉院就唐道瑤重  
受戒法時年已七十三臘五十三瑤稱曰此老比丘  
爲法忘身心無高貴可貴也乃告曰篇聚者潔身  
儀耳我有心法曰祖師禪昔二藏菩提達磨大師自  
西天來付此法於慧可僧璨道信弘忍神秀七傳至  
我師普寂我師初在高山傳唱禪法道聲聞帝后詔  
入東都居華嚴禪苑故世曰華嚴尊者我從華嚴得  
法今以付汝即廣說法要表忻然領受住大安寺熾  
弘教觀晚以心法付上足最澄延曆十六年化春秋  
一百四十歲

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

○十三

贊曰虛已應物必究千變之容挾情適事不觀萬殊  
之妙此語誠哉表公年倍瑤師獨切永善庸知先後  
於吾乎遂以虛已謙下傳心法若挾一己之情安能  
有觀佛祖妙道然耄願得道今古以爲難宋有太悲  
閑長老和有表公而已展法中之傑也

### 和州東大寺沙門堪久傳

釋堪久桓武帝之子宿殖善因希求必爲隨東大寺  
良慧僧都脫珍御服著割裁衣神情朗爽卓爾超羣  
加又好學慧解川增從事毘尼尤究華嚴延曆十四  
年住東大寺張三學之席接四來之賓是歲空海登

壇就久受具足戒一住四年寺衆歸德以戊寅歲解  
印而退不詳其所終矣

### 江州梵釋寺沙門施曉傳

釋施曉學涉內外延曆五年春桓武皇帝創梵釋寺  
於江州敕曉住持十一年春曉奏曰竊以真理無二  
帝道惟一敷化之門雖異覆載之功乃同故衛護萬  
邦唯資於佛化弘隆三寶靡非帝功又夫沙門釋子  
三界旅人離家離鄉無親無族或坐山林而求道或  
蔭松柏而思禪雖有避世出塵之操不忌護國利人  
之行而糧粒空得飢餓常切伏望本州國分之供分

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

○十四

給彼所然則繼徒得不虞而修聖恩有不替而化又  
奏曰山背之民秦氏及男女等三十一人自寶龜三  
年迄今每歲春秋悔過修練其精誠實可憐伏願天  
慈賜度又旌善之一化也制可是歲使田百畝納梵  
釋寺十四年秋九月詔曰具教有屬隆其業者人王  
法相無邊闡其要者佛子朕位膺四大情存億兆導  
國齊禮雖遵有國之規妙果勝因思弘無上之道是  
以披山水之名區卽創禪地盡土木之妙製莊嚴仰  
藍名曰梵釋寺今置禪師十員三綱在其中納江州  
田千畝越州封五千戶以充寺供修造之費所冀運

邁馳驟永流正化時變陵谷恒崇仁祠以茲良因普  
覃一切上奉七廟臨法界而增尊下及萬邦登壽域  
而洽度

和州秋篠寺沙門善珠傳

釋善珠姓阿刀氏南京人或曰藤太皇后之夢子也  
壯歲入興福寺從玄昉習法相天性神悟勉學不輟  
屬于濟暑頭如熟瓜鬚髮半落確乎不撓未至弱冠  
博該三藏通貫唯識尤精因明君臣欽尚四衆稱奉  
睿山根本中堂落慶供養之日傳教大師請珠爲導  
師初早良太子與藤黃門種繼有卻竊命近臣射殺

日本撰述

本朝高僧傳卷之四

〇十五

種繼天皇大怒將殺太子太子遣使諸寺預修冥福  
諸寺皆拒珠獨納使曰太子以宿殃受嚴譴今幸還  
債勿結怨矣論勉激切使者反命太子喜曰我聞師  
言披忍辱衣不怕逆鱗既而誦淡路遂於中路斷食  
而殂延曆十六年早良之靈逼惱皇子鑒心無効救  
珠持念珠出靈曰昔聞貧道言已披忍辱衣今何作  
怨乎講般若經皇子病瘳天皇大悅擢爲僧正是歲  
四月某日化壽七十有五臘若干歲珠常念彌勒時  
人念日上生兜率先是以誤唾僧房壁黜下鷲衣鉢  
買可查煎洗遂忘珠滅後歷數十生皆有香氣云撰

述甚多唯識燈明鈔十二卷唯識肝心八卷因明論  
燈鈔六卷了義燈增明記四卷彌勒經畧贊最勝王  
經遊心訣梵網經略鈔各三卷法華肝心藥師經疏  
八石經私記法苑珠林章記各一卷其餘者不遑錄記  
學者於今祕珍焉

系曰國史記曰珠少魯鈍學唯識宗習因明論昏室  
不通以此爲恥余謂爲百世之師者從幼穉時英氣  
自萌譬如橡櫟在蘗栽中含棟梁姿渥注驥兒落地  
千里以相宗中興之才稱慈恩之再身珠公而何骨  
鈍哉寬文丙午偶夏乎南都法隆寺九旬聽唯識論

日本撰述

本朝高僧傳卷之四

〇十六

一日寮主欵談之次抱述記鈔十卷置前曰此珍書  
也余緝閱之其政自書曰沙門善珠十九歲擢而理  
義浩辯不遺涓滴使見者拂波而鑒永爲夫慈恩大  
師註論刻意覃思簡古幽蘊老成又猶憚下筆況未  
盈弱冠著書精詳如斯非上知而何孟子曰盡信書  
則不如無書千載明語也且作史傳者搜索不周不  
照前後則多誣古德自陷瞽史之坑可不慎哉今登  
諸策革古史以立珠公傳不爲僭越耳或曰國史記  
後人之作也豈其然與濟北師復生不易我斯言矣  
和州東大寺沙門明一傳



釋明一姓和仁氏執性穎利博記經疏居東大寺論揚真教辯論秀拔學者多歸晚置婉閑時人相謂蒼荀雖凋尚含四照之色芝蘭半落亦送十步之芳延曆十七年卒壽七十一著最勝王經註十卷法華畧記四卷法華記二卷

系曰濟北和尚以時人之稱素緩未急明一慈寶竝載釋書今且隨而存其一傳如慈寶者不足言之一有博才不固晚節余謂官愍衰老或容置後房便於坐臥而追羅什之塵歟丈夫所守不死婦人之手況於沙門乎吁二子者蓋學後世之下惠耶

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇十七

### 和州興福寺沙門行賀傳

釋行賀姓上毛氏和州廣瀨郡人年至太學隨永嚴法師出家二十受具足戒依元興寺平備已講稟唯識天平勝寶五年承敕入唐學法相天台兩宗留唐三十一年歸或曰七年傳來經疏一百餘卷詔付少學三十八稟其業又敕東大寺明一歷試所學詰問二教頗有窒礙一卽罵曰久經歲華學植膚淺何乖朝寄哉賀大愧垂淚執政議曰長途一躋何妨千里之行大樹折枝豈忘百畝之蔭聖帝怜深壽授大僧都別構小房觀法閱書一日異僧來謁垂泪曰背發惡瘡

苦痛難忍醫曰截高僧左耳貼瘡得瘳不然七珍山積不可治療或人勸曰往訴上人必有方便是以特來願慈悲哀憐其瘡潰壞膿血淋漓賀曰我耳可病甚以爲易乃取剃刀截左耳與之旣以殘醜移居

輪與世絕交專修定心夢觀菩薩墟摩頂曰前年所賜今全還之慈心至深此後莫懈賀驚覺探耳朵輪廓如本感大士之妙驗悲喜交集遐邇傳聞歎未嘗有延曆二十二年二月十一日恬然而終歲七十五臘五十六賀在唐時朝廷供養百員高僧賀居第二座自少研精家學所著巨多法華弘贊二十卷或曰二十

日本書紀 本朝高僧傳卷之四

〇十八

五唯識論會記三十卷淨名經畧贊五卷百法論註二卷唯識義暉唯識樞要義唯識義精唯識比量遣偽興真章各一卷

贊曰任人之需而施身命者吾佛因地之忍修也如忍辱太子與眼睛於佞臣因緣多在經論賀公截耳施者佛弟子之所爲而是菩薩大人之行也至其滯於明一之問人或習行備而疎言論者所謂凡夫尚通三藏羅漢不知赤鹽之類也學者須要觀賀與之智行義學如何

### 和州梵福山沙門善謝傳

釋善謝姓，不破氏，濃州不破郡人。識度純粹，志標翹然。從理教法師，稟法相，困學不弛，遂通小宗。人扼高德。桓武帝尚其道，賜僧職。晚入梵福山，屏絕人事，修安養業。延曆二十三年夏五月，寂于梵福，壽齡八十。親友屢夢謝生，極樂矣。

城州愛宕山沙門慶俊傳

釋慶俊，出于河內，藤井氏在幼。純信意樂佛教，至辨李歲隨大安寺道慈，前染納戒慈教，以三論法相華嚴，又就勤操受永聞持法，專攻雜華四法界十玄談融攝指掌。住大安法華之名，蓋說諸大乘經四衆盈。

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

〇十九

席聲播輦下，敕任僧都。天平勝實夏五聖武帝崩，敕俊知法事。天應元年春，光仁帝賜愛宕山此山崔嵬獨秀，帝畿雖泰澄小角，披榛莽而梵刹未備。檀越和氣氏風靡俊德，構堂建院，僧事略整。從此陟降接踵，衆推中興，輕財重義，戒檢尤急。所到啟建，菩提道場構晉光殿，修兜率淨業。延曆某年九月三日，寂垂年九十。

和州大安寺沙門戒明傳

釋戒明，姓凡直氏，讚州人也。弱冠依大安寺慶俊，久學華嚴，究其奧旨，兼採異聞。實內緇輩欽望，慧解實。

龜李奉敕入唐謁時宗匠，遍遊勝地，往金陵龍華寺謁傳大士像，又登城南半亭山，見瑯琊王大墓碑碣，石人石柱麒麟獅子行列侍衛，道路兩廂至誌公宅，請得誌公具身觀音大士畫影，而還。安大安寺南唐院招衆供養，又以持來經論疏章，奏上關廷。十年己未，城中僧都會大安寺，曰：大佛頂經是偽經也。使明奏明請以焚燒，蓋以此經始渡收在王府也。明日毀大乘經者身壞命終，一念之間，遍歷十方地獄，盡劫無出期經有明文。吾去歲在唐，廣平皇帝親請諸山高僧講大佛頂經，何言偽經乎？諸大德欲奏朝各自。

日本撰述 本朝高僧傳卷之四

〇二十

連署我不黨也。衆僧伏理議，寢不行。明以延曆年中逝矣。

系曰：首楞嚴經者，大覺世尊以法華後涅槃前，在尸羅波城祇園精舍爲諸大菩薩說。圖大究竟法，大唐神龍元年中天竺沙門般刺密帝翻譯焉。長國沙門彌伽釋迦譯註，正議大夫清河房融筆受。總有十卷，諸佛心印菩薩行門，所謂了義之中了義也。是故教禪諸師註釋七十餘家，至今不止。聖經東來，無如斯盛也。智者大師常憾不見向西，遙禮今此衆僧，幸遇勝緣，卻生邪見，而欲燒之。凡聖相戾，一何其平鳴呼。



五逆天壽何世無之若無明公之救之阿鼻輪迴寧論劫數乎哉

和州興福寺沙門仁秀傳 正義

釋仁秀姓物部氏豫州人也從慈訓僧正學業超邁住興福寺能說法相大同三年三月某日寂出願安一人又釋正義初從慈訓學法相及華嚴訓稱才解住和之藥師寺講華嚴教資盈席矣

本朝高僧傳卷第四

日本書紀 本朝高僧傳卷之四 ○三十一止

音訓

闌闌 上亭年切 下烏結切 憊 去乾切 喉也 龍 盧容切 喉也 頤 延知切 必慈  
上薄密切下 魚列切 孽 魚子也 洼 烏瓜切 貼 他協切 麴 亦垂切 弛 詩止切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財銀  
本朝高僧傳卷四 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第五

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之二

和州大安寺沙門善議傳

釋善議姓慧賀氏河州錦織郡人爽拔和潤早捐塵緣修研道品志存傳燈從大安寺道慈稟習三論悉得蘊奧尚未滿懷絕海入唐遍尋名德深探教蹟歸住大安熾授空宗梵行備足故三論家稱以法將弘仁三年八月某日寂壽八十四遠近遺俗聞訃舉哀曰是衆生之不幸也有神足二人安澄勤操

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇一

江州普光寺沙門慈雲傳

釋慈雲姓長尾氏山城州人景雲四年試業得度才力優瞻精于藝嚴堂著五教章指事八卷五教章見闡十卷五教章復古記十二卷科文簡註各一卷在東大寺講無性攝論等奉旨爲江州普光寺講師學侶多歸大同二年某日寂歲四十九

和州元興寺沙門勝處傳

釋勝處姓凡直氏河州板野郡人初師行基受法相學後從尊應深達淵底應者神睿高第一時之俊也虞才資拔羣綜唯識委因明住元興寺皇張宗義道

儀清高森如山嶽戒行節檢凜若雪霜名望所屬四方仰抱延曆二十四年正月桓武天皇不豫有敕召處演說法義皇情感悟侍臣流淚帝好田獵是日詔放鷹犬以弘仁二年六月某日終於所住保齡八十護命守印慈實恭演出於其門時稱得人贊曰夫說法者貴感人心故金口纔開人天異類壹是得益也處公一說聖帝惻然羣臣流淚蓋又說通之人也矣

和州藥師寺沙門長朗傳

釋長朗本法相宗學者後從正義習學藝嚴英利善

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇二

解圓融之旨義公奉朝以官府官使朗嗣華嚴宗旨住藥師寺開講爲入弟子義聖善明五教章

和州大安寺沙門安澄傳

釋安澄姓身人氏丹州船井郡人學三論於善議法師究其玄蘊兼通密教權大安寺秉法柄待來學發誓志志左祖弘法敏捷天逸無出其右者唯西大寺泰演法師堪爲匹敵官中講會屢論空有問難往復關責互起暨乎不決其輪贏猶如護法清辨相待彌勒之出世也弘仁五年三月一日終於西大別院春秋五十二

和州石淵寺沙門勤操傳

釋勤操姓秦氏和州高市郡人父母憂無子禱於駕龍寺玉像其夜母夢明星入懷乃有娠而太平寶字二年生夙離閔凶母氏鞠養十二禮大安寺信靈爲師十六潛入南嶽禪坐修練依母督力還緣東大仍就善議稟三論宗慧解躋科神護景雲四年敕於宮中及山階寺度一千僧操以義學承恩披緇弘仁初年陞大極殿講最勝王經講畢就紫宸殿宣諸宗碩德各登宗義以操爲座首操尊三論爲君父片法相爲君父乃曰無著釋龍猛之中觀護法注提婆之百

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇三

論並稱歸命闍梨故理義贈博辭清珠玉相宗宿望慮挫義範莫敢誦抗帝大稱賞加任僧都兼管東大淳和帝又擢王西寺又開石淵寺於和州大張空宗兼授密法當時學匠多歸席下初在大安寺隣房有榮好者養母寺側一童爲役昔七大寺不屬庫烟廊院炊飲每至齋時駕車入寺每人四升巡房而行好受飯爲四一分奉母一分與童一分施丐一分自喫必令童送母童歸即問曰何母食否對曰已食好乃下箸不爾不喫操貴其孝純與之友善無何好卒操爲治喪事代好養母使其不知好之外一日童被酒

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇四

卒爾告好之外母聞一慟不起操大悔嘆告同志七人棄遺骸於石淵寺後便設四日二座談席分法華八軌各講一卷以修冥福每值其忌必設齋無缺名曰石淵八講諸寺相効或十講或三十講相次而出皆權輿于操也天長三年轉大僧都明年五月七日終於西寺北院壽齡七十法臘四十七越過三日茶毘於洛東烏部野南皇時雷電四會死似感傷一人動心四衆總德車馬駢出如喪考妣是日敕贈僧正焉贊曰榮好之致孝也古猶有焉操師之友于世之所無也見其所踐之義路而知其所遊之真空詩曰靡

不有初鮮克有終於操師也爲穢典焉

河州弘川寺沙門光意傳

釋光意姓河內氏河州石川郡人態度閑雅音韻清亮每臨講席道俗傾聽大同年中爲最勝會座首詰問鋒起對辯無礙後於本州開弘川寺待接學實帝崇其德賜傳燈大法師位至于暮年齋不過中弘仁五年三月四日卒於住處壽七十八弟子等收遺骸而其上立石塔婆於今存焉

和州秋篠寺沙門常樓傳

釋常樓姓秦氏山城州人自幼齡隨善珠僧正圓頂

學慈恩宗天資聰明日誦萬言兼有外學年及二十登壇稟具志行清潔延曆之末奉敕住秋篠寺闡揚真教利導四衆嘗發誓願四十年間轉法華二十二萬四千九百六十卷復日誦般若心經一百八遍雖在造大無缺日課弘仁五年十月某日化年七十四平日記述多大率亡失今僅有最勝王經鈔十卷贊曰樓公登三輪之寶轍證八解之真波金沙玉井挹彼法茲觀其壯歲已往奇想讀誦實非庸碌之事偉哉善珠師之遺愛也

和州大安寺沙門常騰傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇五

釋常騰姓高橋氏洛陽城人稟法相於教嚴太法師嚴者慈訓之高第名重社中騰純淑究諸部精唯識決釋義理獨步一時住大安寺隨衆啟講聲振南北桓武帝延曆二十二年詔曰崇福寺者先帝之所建宜令梵寺主務大法師常騰兼加檢校騰講演之暇著顯唯識疏隱文鈔十卷唯識樞要更決八卷唯識樞要鈔七卷唯識論記二卷等學者傳誦大同元年任少僧都弘仁六年某日順世春秋七十六矣

和州西大寺沙門泰演傳

釋泰演不詳其姓其許性氣邁稱人實爲緇苑英特

雖學該大小乘唯以唯識瑩心談論摧疑如倒三峽天下義學無敢敵之唯有安澄獨當顧盼每值官講抗論空有太同未住西大寺以唱相宗大揚利竿

和州興福寺沙門品慧傳

釋品慧姓大原氏平安城人年甫十四入興福寺隨衆讀經稟性篤實強學早成深達法義二十試所習射甲科登壇受戒講論馳衝邦畿知多六十八歲所雅爲維摩會講師衆溢堂外弘仁九年某月日化壽七十五

筑前觀世音寺沙門道詮傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇六

釋道詮姓百濟氏河州人早入南都研究性相風神誠純維持戒行弘仁之初朝選銓補任筑之太宰府講師所得囑施皆納常住待十方需衆貴清廉七年十一月卒壽六十一

和州元興寺沙門施平傳

釋施平才氣淑明審通法相住元興寺太長四年淳和帝造藥師佛像金書蓮華法曼荼羅宮中設會供養慶讚空海豐安載榮明福等敷說法義平預講首演論深法君臣前席卽賜優賞道福自歸終於元興寺

和州大安寺沙門奉實傳

釋奉實姓荒田氏尾州人也天性疎通不爲物繫居大安寺學綜性相哀憐像季敷演玄風既登八旬始學瑜伽研味不休恨得之晚弘仁十一年以八十四順世矣

江州延曆寺沙門義真傳

釋義真不詳氏相州人性俊利弱登睿山師最澄和尚審問不解侍澄公于和之太安寺時就鑒真律師之徒受戒範探公教能通唐言延曆甲申澄公奉敕入唐欲率真行表請畧曰竊見沙彌義真少壯聰敏

日本書紀

本朝高僧傳卷之五

〇七

頗涉經論早習漢音粗知唐語大思差義真爲求法譯語匪啻是行賴之兼令彼學加諸朝命許之貞元二十年臘月七日於公口州國清寺受圓頓戒爲大僧與澄公同入順曉灌頂壇明年夏隨澄公歸朝弘仁十四年四月十四日有敕於根本中堂始行圓頓大乘菩薩戒羯磨真爲和上受者十四人是歲嵯峨天皇詔諸宗各述一家奧護命作研心章褒相宗空海著十住心論讚密教真造天台宗義集大長九年詔任延曆寺座主此職始於真九年壬子爲興福寺維摩會講師酬對應和綽有餘地自徒預之以真爲始

也繕修禪院解印而休十年癸丑七月四日寂於本院春秋五十三矣

贊曰觀真公在唐之日其侍譯語通於中才也遠矣澄師沒永基遂排南衆沮議建睿戒壇爲和上師克繼先志嚮稟圓頓戒於國清者以素蓄在于茲歟

和州元興寺沙門護命傳

釋護命世姓秦氏濃州各務郡人十歲入本州金光明寺受業於道興法師比及兩生法華最勝二經音訓皆能通涉又讀誦百論等疏慧解之聲馳於鄉曲十五游學南京依元興寺滿耀法師專精勤策從同

日本書紀

本朝高僧傳卷之五

〇八

寺勝盧僧都學唯識論兼成薦至應僧綱試第登甲科龍單憐輩十六賜度十九隨唐法進僧都受沙彌戒明年納具進稱歎曰日本國裏如汝者希今代受度無整峻者今日受沙彌戒明日受具是以僅至信宿不能無疵汝獨遵律以俾夫詭曲者觀之自矯善哉善哉後世之優婆離也久侍左右質律究經辭入吉野山結茅宴居白月修咒黑月禪坐苦行精進殆忘寒暑延曆十年有詔入都城州山田皇菴單居去來一指語默任緣乙酉正月講最勝王經於大極殿講畢之日便延內殿受持戒法因勸修善時上不豫



翼日即瘳是歲夏六月任大法師位大同三年於山階寺講維摩經凡預此舉爲登龍門弘仁二年止和州壺坂勝處與手書曰崦嵫已逼餘命無幾思佛法華妙音以爲冥途之明燭和尚應響證羣爲我演說一七日中萬善略盡會不思行羣虞詠至走茶毘場設七日齋爲請泰信請梵網經六年壬辰任少僧都明年轉大十四年癸卯奉帝詔作研心章推舉相宗以衰老深表辭僧綱批荅不許命潛出城在梵釋寺或山田寺高臥白雲以樂今寂是歲淳和帝即位改元天長特崇釋教降優詔曰護命棲神奈苑留心練

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇九

若智劍騰輝忍鎧利物而今告老不顧維綱雖不有容許而絕跡安禪石僕射宜奉救志不可奪尤可嘉尚宜迄終餘生給大僧都從者之資天眷殷勤要其強起余播然迴慮大鷹籠渥三年丙午奉詔轉讀藥師經於新藥師寺以護國土伴僧二人各賜蔭任明年敕任僧正是年三月帝潰莊先皇御筆金字法華經請南北碩師晝夜七日演說妙典詔命爲講師命隨機濟物遵化無方然於傳法鬱爲稱首承和元年九月十一日終於元興寺小塔院保齡八十有五坐臘六十又二時善宇法師來問訊親聞音樂響空妙

香盈室也初延曆二十年夏五月命於法華寺淨土院講涅槃經爲四部衆授菩薩戒還惠廣岡寺山階寺僧歲實持舍利一粒與命收水精壺常頂禮次白玉一顆墜自命頂試投水上容齋不沈收之同器尊重讀禮在山田寺喫飯之時忽口中得舍利復在普光寺講唯識頭上感得一粒又高僧老德屢夢命相好同入序之其異蹟非一所撰之疏鈔有極要解節記十七卷法華解節記十卷法華釋義決了義燈解節記各三卷心經幽贊解節記因明解節記各六卷唐僧思託撰傳其尾曰弟子夙爲神足忝預門徒聞

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇十

所未聞見所未見記錄萬不存一何異井蛙語海仍贊曰能仁寂照法教相傳傳法攸委非聖何賢人哉哲匠粹德自然貫通千部撰出幾篇利物遺德行已味禪戒模明月節況秋天人不住地得無上緣寶珠現頂神客驚眠餘光佛日甲子化年總持像季賢賴公焉

贊曰勝處法書欽之還若弟子思託作傳贊之宛如本師命公之道盛矣哉其講筵齋鉢之際設利羅現於身口者贊意所謂瀾漪內湛葳蕤外發者乎

和州興福寺山門修圓傳



釋修圓不詳氏族和州北谷人從賢僧都習佛法相妙罕類發通大小乘人稱其解相過物冠住興福寺任少僧都開傳法院爲第十世講說敷施神異甚多時人爲大威德明主化身也初圓沐傳教大師之密灌依義真受顯教真臨遷化付以延曆寺總事而衆徒不肯許十關延依之敕使右大辨和氣真綱登山止職圖乃移居和州室生山承和二年六月十五日寂年六十五撰因明纂要記鈔二卷因明纂要記祕心一卷有四神足與昭德壹壽廣春德其後傑也

江州睿山沙門光定傳

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇十一

釋光定姓贅氏豫州風早縣人武內大臣之裔也其母夢白蓮生腹有身而誕冠喪父母嘉遯山林大同初厯觀遊上國隨大學士潛思曾詰問睿山澄師之風委實爲師又如南京謁勤操于太安操曰余聞睿山禪師常誡止徒衆遊行他方者予欲試度速歸卒業遂還故山傾意依付從義真聽止觀五年正月宮中齋會下詔得度台領宮度以定爲始也弘仁三年夏四月登東大寺戒壇受具足戒又從景深僧都重受苦陸戒律學就空海和尚于高雄傳三部祕法兼受法華儀軌五年甲午與興福寺義延持論宗

乘人稱歸定十年己亥澄公欲建北戒壇南泉沮之定受使命屢諫護命景深二師堅執不可聞朝不報及澄終世不替而成依定之勞也嵯峨帝悅村素加殊遇及睿壇立持戒疏藹敬亡宸書帝笑而書上皇聞齋廚屋空賜一囊書其面曰光定亡食袋承和五年敘傳燈大法師位嘉祥四年奉詔營四王院天安二年賀正八果賜度者八人縑八十匹布八十端綿八斤錢八十緡米八十斛是歲八月十日化於院內春秋八十夏坐四十七定與菅丞相爲方外之友屢陪嵯峨帝文宴題南嶽慧思大師影曰日本來禪影

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇十二

西唐有實形真容行實利化體入吾聽智顗從身左僧照親右亭陳朝聞太喜帝釋列香庭信者三千有賢人四者成足蹈紅花裏神遊妙曲經道傳空閑寺宗流法界生龍華看面色睿嶽禮尊靈題聖德太子古跡曰禮額登霞影身歸古跡空宗將流萬歲伏膺我靈公久仰天台教朝聽南嶽風松邊悲昔迹故室總明工自性三千埋心源四悉中圓融名實道智照號真雄顯法皇家果生蓮聖德宮思禪遊片岡智者繼無窮石累羅青下雲生曠隙通禪塵飛玉殿法水滌煩籠當後傳法記二卷一心戒文三卷日本名

僧傳

贊曰定公從弘法日草名恭範入十大弟子之員傳教送書責之因歸睿山又復今名然東國高僧傳分恭範光定兩所立傳恭範道安初從師姓爲竺後據增一阿含拾遺改釋而編僧傳者以爲兩人梁僧慧皎贊其謬矣今高泉謬亦宜乎

江州延曆寺沙門圓澄傳

釋圓澄姓士生氏武州崎玉郡人其母夢臥日光中腹生白蓮覺而卽娠寶龜二年生骨貌奇多七歲遇新羅沙門法玄摩頂曰必爲人師至能自愛十八事

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇十三

同州菩薩僧道忠卽是鑒真和尚之神足道望重時澄誠懇服勞苦無倦已須臾有問披卷誦習忠授菩薩戒呼爲法鏡行者及忠順世拜最澄和尚于睿峯削染革今名延曆二十三年四月就唐僧泰信法師受具足戒明年最澄於紫宸殿修灌頂法澄同名德上選入壇大同元年冬二十三日最澄於止觀院始授圓頓菩薩大戒受者數百人澄復預其數二年丁亥二月一日始修法華長講擇七名德各配一卷輪次爲講初軸最澄自講之第二卷澄講之二年戊子三月八日修金光明長講又以澄爲講師弘仁八

年春和尚召澄入室授法華深義圓教三身寂光土

義蓮華因思等之義曰我大唐傳來三宗與日汝既契悟當挑此燈使永永不絕尋授止觀三德之義所謂止觀心要是也天長十年正月十四日睿山者宿應詔於紫宸殿議論宗教澄詞辯奔流賞賜御衣此歲有詔補延曆寺座主山衆欽德山中上終初寂光院又建西塔院其極宏構嘗勸橘皇太后我納架染數百襲施唐國清寺大衆蓋厚其法本也承和四年十月二十六日告上足慧亮曰先師往年語曰我歸朝之時謂國清寺座主及大衆曰歸本邦後當遣請

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇十四

益留學二僧請決圓教深旨我滅後汝宜選入補我志願門屬中唯楞嚴院禪師仁可充此任故我勸其入唐請益我命在今夜不待此人爲遺恨焉今以請益大德所置三十餘條疑問并傳法記艸雜書等託汝俟彼歸國必受諮決焉其夜三更奄然化於寂光院道場世齡六十有六法臘三十有四贊曰澄公交義真圓仁之際不素鴻鴈行法網嚴整居睿嶽第三主講解入神締構竭力是以徒衆歸法帝王挹風傳教大師以台宗之奧且獨授澄公其授受之明似鏡當臺大師復命之諱同一字實不爲徒

然矣

和州西大寺沙門玄睿傳

釋玄睿隨安澄在大安寺通達空玄論補西大寺英博名顯天長四年丁未九月禁中慶讚藥師佛像四日八座講演教義豐安載榮空海恭演明福及睿等列于講主中繼壽遠實敏具圓道雄等二十員為聽法眾公卿百僚嚴肅莅事睿辭義豐允當天聽嶸峨帝代嘗奉詔撰三論大義鈔三卷以呈進焉

和州西大寺沙門壽遠傳

釋壽遠姓橘氏武州人少聰敏延曆年中抵南都東

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

○十五

大寺出家學性相法兼習因明又從安澄承蒙三論領西大寺演進二諦多士盈門承和改元有詔為維摩會講師其辯宛轉如下坂丸一會義學難為詰問賞任傳燈大法師位屢召內殿問空宗且崇信惟深五年臘月某日終西大之別房春秋六十八

和州元興寺沙門守寵傳

平備信行

釋守寵從護命受法相住元興寺常講經論才博辯富悅可衆心承和八年臘月某日寂釋平備通教乘主元興寺誘掖學徒採摘性相所著註鈔因明論疏記九卷唯識論羽足四卷般若理趣分私鈔三卷梵

綱經卷上義疏梵綱經卷上料簡各二卷梵綱經卷下私鈔

二卷最勝王經羽足一卷法苑珠林燈記釋信行住元興寺學經法有達稱著般若經音義三卷瑜伽論音義四卷於今學者用之

贊曰寵備行三人法相宗之名匠也代遠狀逸不知所裁之

和州元興寺沙門願曉傳

釋願曉從藥寶勤操二師研習三論兼通唯識宗及密教官昇僧都主元興寺延講學賓醴闢寺聖寶元興寺隆海就曉受業撰述甚多今有因明論義骨三

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

○十六

卷也

常州築波山沙門德一傳

釋德一慧美大臣仲麻呂之子隨興福寺修圓僧都京法相且才解俊逸無抗衡者住東大寺專任相宗嘗作法華新疏難破傳教相徒褒稱其性真率儻忤朝議謫遷東土性德之所存何之而不雍開常州築波山為第一祖傍近數州仰之不止多建梵宇門弟繁興惡僧華侈常修杜多麻衣藿食恬然自居以某年終於慧日寺歷日定葬全身不壞時人追崇或呼大師或稱菩薩撰述多有中邊義鏡殘二十卷唯識

論異補闕十二卷法相了義燈十卷起信論寬狹章邊異見章法華要畧慧日初足各三卷中邊義鏡章二卷學者玩誦焉

贊曰慈德厄折於風雪於人皆爾壹公難名師也觸逆緣也三師也一生所作欲直斯道宜乎呼大師稱菩薩也至軼軻沒世者豈夫翹標之厄也乎

### 和州傳法沙門壽廣傳

釋壽廣與德一同攝衣修圓門綜釋法相學至資深住傳法院講無虛日承和九半爲衆所推受維摩會講師之命流答迅歇問者屈退是歲某日以年六十

日本書紀一  
本朝高僧傳卷之五

〇十七

### 二、卒於住處

#### 和州藥師寺沙門仲繼傳

釋仲繼不詳姓所大生清逸才調有餘師元興寺護命僧止密邇左右三十餘年識智分齊有空妙理扶源竭委老德推獎稱示棟梁主領和之藥師寺大弘相宗當時學侶爭投其門天長六年春繼請修取勝會於藥師寺以爲永式制可其奏因招名德始于三月朔一七日中講最勝王經敕任律師承和十年某日化於住所不記歲臘有高第三人明証具慧隆光也詮光傳在後慧優才高臘三薰藥師寺

贊曰弘仁天長間繼師以法相鳴弘法大師性靈集申極稱其德今拾隻事片言以定照乘之美價也

#### 和州元興寺沙門守印傳

釋守印姓土師氏泉州人早師勝虞勤誦經論延曆乙酉年分得度性器聰銳心神爽明耳目所觸長記不忘精練法相兼善俱舍每臨論席衆憚致問住元興寺啟迪後學印得鼻根淨或時他適有客至而返者印歸必問近侍曰某人來此與又見童兒曰汝喫某食驗此此當爾門人問曰師奚知之曰聞香而知承和十年臘月二十八日卒年六十一時人惜有才德

日本書紀一  
本朝高僧傳卷之五

〇十八

不登宮講空化閑房矣

#### 和州興福寺沙門明福傳

延寶

釋明福姓津守氏山城州人幼事賢懷執諾之暇諷誦經論延曆十年賜恩得度敏而好學剃髮棄具以至過壯遊學不倦條貫三藏練磨唯識一時維摩講師疾作俄辭講會將廢衆議推福爲補其闕後補一磨疑冰渙釋闔座感伏價名十倍董興福寺法輪轉盛行履歷矩衣鉢索然嚙施分人終身無蓄大長四年秋九月帝召諸高德就宮開會講法慶讀福預諸位揮塵近御承和年中頗歷擢拔任大僧都嘉祥元



年八月某日終於興福寺年七十有一神足延賓以辯才博覽平七年奉敕爲維摩會講主

### 京兆東寺沙門實慧傳

釋實慧姓佐伯氏讚州人生質出凡苦學精進初事大安寺泰基僧都習唯識論後從弘法大師稟兩部密灌歲月淹久盡傳祕契弘仁之季高雄山寺置三綱維大師擢慧任摩摩帝乃與書曰實者奔虛掃爲之義慧者則惠破暗之稱遊實相之三昧真金剛之妙慧斯德斯在省名會理衆心共許余亦印可天長四年建觀心寺於河內熾敷密教承和二生敕任東

日本書

本朝高僧傳卷之五

〇十九

寺長者此任自慧始七年春自正律師轉少僧都翼歲二月慧在高野山奏朝曰金剛峯寺承和二生二月晦日預定額今在深山無燈明料難準諸寺恩施燈分并供佛聖二座制可十年冬慧欲於東寺春秋二季修結緣灌頂上表曰毘盧遮那包括萬界密印真契吞納衆經準其教宜有頓有漸漸謂聲聞小乘登壇學處頓謂菩薩大士灌頂法門是謂極之夷途爲人備之正位灌頂護持明諸佛之護念頂謂頭頂表大行之尊高超昇出離何真由斯所冀每歲春秋二節自花皆榮艸木結實當嚴淨香華以開覺眼勝

導有識以歸真境夫於灌頂有傳法結緣結緣者謂隨時競進者皆授之至云便賜官符於是季冬十二日於灌頂院始行之細素入壇者孔多嗟峨淳和帝特加崇尚踰於流輩常厭公請遂辭寺務歸休觀心寺十四年仲冬三日終於住處壽六十三大師入定遺告諸子曰吾滅度後當以實慧大德爲汝等依師行道與大德之力也人天之師邦國之寶誰若此人哉緣茲法眷敬事如海在日真紹慧運宗瞻源仁導守遺囑得慧灌頂焉

### 和州興福寺沙門延祥傳

日本書

本朝高僧傳卷之五

〇二十

釋延祥姓槻本氏江州野洲人童事護命命見敬慧加意警策弱歲登東大寺戒壇受具足戒延曆七年命講涅槃經於春日寺祥侍左右詢決真理一日命問曰汝有夢乎祥曰嚙舌之夜夢臥七級塔上三日並出光耀我身命曰是吉兆也慎毋語人太長七年入大極殿講最勝王經滿會碩德論難競起祥以河辯解結通室官僚繼徒側聽稱歎永和三年春奉敕與諸山僧統論議殿上詞鋒所指罕有敵當乃任大僧都仁壽元年進任僧正三年重陽日吉祥而化壽齡八十八法臘六十餘

和州興福寺沙門長訓傳

釋長訓姓錦氏江之滋賀里產少從玄賓僧都延曆十年登南戒壇受具足戒包括法相發揮微旨擇任本寺維摩講師不歷數年陞北關最勝講座一時論酬絕逆驚衆僧官累轉仁壽三年遂進僧正董觀福席凡若干年齊衡二年某月日化齡八十二其爲人也推已及物博愛爲務人稱慈行

和州西大寺沙門實敏傳

釋實敏姓物部氏尾州愛智郡人母夢室中建三層塔寤而有孕延曆七年生眼有重瞳耳門相通聰悟

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇三二

絕傳佩觸之歲隨伯父中安法師入平安城就讀經論強記功倍安知英物攜付玄獻獻又稱褒屬安澄師侍二師室審問饜飮二十登東大寺戒壇稟滿分戒後從永忠干梵釋寺益登智解及歸西大盛說空宗弘仁十年登維摩會講座承和九年大極殿最勝會詔任講師分決凝滯毫毛必剖聞其暨義上嘉歎久明年從律師轉少僧都嘉祥三年暮春詔讀四宗法匠講法華經於清涼殿華嚴宗正義天口示圓修法相宗明詮以敏充二論宗論衡相持宗輪輾轉帝御高座垂簾睿聞皇情悅可共賜口教仁壽三年轉

大僧都齊衡三年九月五日寂壽六十九歷臘五十敏音輪無礙聽其說法咒願者至獻歡揮涕而發清信云

本朝高僧傳卷第五

日本撰述 本朝高僧傳卷之五

〇三三

音訓

贍時念切 匹僻吉切 躐力涉切 蕤儒追切 闕丘月切  
懋莫候切 索他各切 顗養里切 隙乞逆切 襲席入切  
藿忽郭切 樞驅侯切 鑄茲難切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
本朝高僧傳卷五 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第六

濃州盛德沙門 師範 撰

淨慧二之三

和州東大寺沙門正進傳 長歲

釋正進不詳其本貫。某年嚴於等定僧都善通圓理承和十年有詔住東大寺。居之四年不整。示綱齊衡三年。敕為興福寺維摩會議師。河辯流宕。眾聽以悅。華嚴宗預此選。以進為始也。貞觀十六年。示寂。有弟子二人。長歲與智歲。研究雜華。兼通唯識。時人為日域因明祖。以和尚稱焉。

日本書紀 本朝高僧傳卷之六

〇一

城州海印寺沙門道雄傳

釋道雄姓佐伯氏。性情神軌。聰敏邁入。從慈勝法師。稟唯識訣。依長歲和尚。承華嚴宗。兼研因明。就弘法大師。傳兩部灌頂。周學廣才。聲價重世。欲營精藍。未得勝地。一夕夢山。城州乙訓木上山。境致佳麗。黎明尋到乙訓苑。如所夢。乃奏朝廷。伐木定基。官賜工料。檀信戮力。役既告竣。并合十院。其究輪奐。闕日海印寺。置華嚴經大唱。顯密。賜每歲度僧二人。嘉祥三年。敕任僧都。仁壽元年六月八日。謝世。顏色溫潤。不異平生。越過三日。茶毘於東山鳥部。南阜雷電四旦。偏

似感悼。一人含哀。四眾慕德。車馬駢田。如喪考妣。敕贈僧正。承其法者。東大寺道義基海智愷。載寶基遍共顯名矣。

城州靈巖寺沙門圓行傳

釋圓行不詳姓氏。山城州人。歲十一。從元興寺歲榮受業。十六。薙髮得度。十七。就榮承具足戒。二十七。隨弘法大師。傳兩部大法。又依某隣法師。入灌頂壇。博涉密籍。聲彩悠曠。承和五年。奉敕入唐。即文宗。開成三年冬十二月。也。明年正月入長安。城直上青龍寺。座主義真率。二十餘員之徒。迎門肅入。行先拜。惠果

日本書紀 本朝高僧傳卷之六

〇二

和尚之塔。獻日本產物於義真。皆保壽寺光辨解慧。博通試舉。經文問難。要義行解。紛開結答。辭如流集。會名德一等。感歎具共。以聞。帝乃敕為內供奉。講論大德。因賜冬法服。綠綾二十匹。并供物等。閏正月三日。行請義真和尚。重受大部灌頂。翌日告辭。真乃授與所持密經。沈香一包。念珠一串。佛舍利百餘粒。以為受授之信。中天竺三藏難陀付梵夾一具。菩提樹葉一枚。佛舍利一百餘顆。靈仙太德贈梵夾一具。佛舍利二千七百餘粒。左街僧錄三教講論太德奉。本使驛騎之帖。差三學供奉太德保壽寺常新章教寺。



弘辨招福寺齊高興唐寺光顯雲花寺海岸青龍寺  
圓鏡而縹囊經典論策若干卷錢于東歸承和六年  
十二月歸朝將來經論六十九部一百三十卷佛舍  
利三千粒佛菩薩曼陀羅圖樣三帳畫像十軀密壇  
道具十品自撰表以進呈曰入唐還學沙門圓行言  
圓行載次戊午銜命請益之列訪道西海之外其年  
臘月得到長安歲次己未正月十二日依奏奉敕住  
青龍寺幸遇彼寺灌頂主法號義真和尚以爲師主  
其太德則惠果阿闍梨弟子同聞義操和尚付法之  
弟子也明開三教妙通五部法之棟梁國之所歸圖

日本撰述

本朝高僧傳卷之六

〇三

行幸賴聖朝之鴻恩師主之深慈澤凝兩部之太法  
開悟諸尊之密法同正月二日蒙授阿闍梨灌頂也  
左街功德使并僧錄和尚供奉太德門徒悉集道場  
隨喜斯法也觀心月輪則居住凡位備佛陀之德誦  
口密言則不經長劫頓登太覺之位故龍樹言乘羊  
而行頓難致遠策馬而馳漸期差疾乘神通行發念  
則到是則顯密之別也又祕密經言一善男子建立  
道場修念三密其國界內無七難災國王大臣日日  
增長福壽是則真言之功矣雖然波浪沃漢風雨漂  
船越彼鯨海平歸聖境是則聖力之所能也伏惟皇

帝陛下功超二極道冠混元續堯寶圖復禹丕績悲  
蒼生而濡足鍾佛囑而垂衣以陛下興隆佛法沒歇  
之令利侵波遠來以陛下慈育海內祕密之經法過  
海遙到也祕法傳來非是無以也如來本有福智之  
力法界本性加持之力也大日如來金剛薩埵龍猛  
菩薩龍智菩薩金剛三藏不空三藏惠果和尚義操  
和尚義真和尚次第相傳即授圓行所授經法舍利  
道具等備表謹以奉進輕顯威嚴伏增戰越謹言敕  
居靈巖寺行復開播之大山寺大唱密乘仁壽二年  
三月六日示寂皇命五十有四坐臘三十八矣原夫

日本撰述

本朝高僧傳卷之六

〇四

行公在唐朝傳續孔多釋書力遊篇僅記名字今據  
于真言傳及請來目錄等全其行歷焉

### 江州延曆寺沙門圓仁傳

釋圓仁姓壬生氏下野州都賀郡人也崇神天皇第  
一皇子豐城入彥節察東關其第二子雷爲鄉人仁  
其裔也延曆十三年生焉是日紫雲覆其屋大慈寺  
廣智法師適見祥雲至其家曰此兒長成必與我焉  
仁幼喪父隨兄學經史性聰敏貌溫雅雖玩儒典心  
慕佛乘母見其志遂與廣智而學業日進一夜夢沙  
門長六尺餘儀容俊偉見仁含笑徧入告曰汝不知

之乎。睿山和尚也。寤於智年甫十五。智構登睿山。與最澄和尚仁及拜瞻。與夢無異。澄公觀其器宇。教以止觀。且謂曰。吾常弘傳二諦不生不滅之旨。而世人解真諦不生滅之理。未解世諦不生滅之義。汝以此法流傳于世。弘通圓教。利益有情。又指授止觀文義之骨髓。一代經論之關鍵。弘仁四年試中得第。翌年正月剃髮受度。持沙彌戒。遂就澄公承傳法灌頂。七年於東大寺受具足戒。十四年於根本中堂始行大乘羯磨。義具爲和上。仁爲教授師。尋不出山。誓以一紀山衆。縱史令利羣生。從此下山。開講於法隆天。

日本書紀

本朝高僧傳卷之六

○五

王等寺年過不惑。身疲眼昏。菴居睿山北。彌修練。待灰夢。天人與藥。曰是忉利天妙種也。其形似瓜。削喫半片。其味如蜜。覺而口中猶有餘味。繼身眼差。於是。以石墨卿筆寫法華作塔藏經名。曰如法堂。傍構二菴。修四種三昧。今之首楞嚴院是也。承和二年賜入。唐之詔。澄公夢中警策。曰汝入大唐密教。先謁天部。台宗先賢。中道五年六月二十二日。從大使尚書右丞藤常嗣著唐國揚州海陵縣。乃文宗開成三年七月十二日也。大使赴京。仁留開元寺。有上都僧宗睿者。通悉曇。仁從習梵書。又有全雅通密教。就受灌頂。

雅付兩部曼陀羅諸尊壇軌佛舍利等。節度使李德裕慰問仁。遠遊施絹十餘匹。仁受分開元寺衆僧明年藤大使來。自長安誘仁。浮海道風俄吹還登州。界仁意。我求法未充。海神有意乎。與弟子惟正等頻請下船。止海州東縣濱。其夜賊黨數十持戈來。逼資財。衣服皆脫。與之賊發善心。返衣財。曰和尚若無此物。客中何用。卻引仁送府內而去。府主憐之。付本邦船。復逢逆賊。返登州。界仁乃下船。寓赤山法華院。於是登州押衙張詠來。于日本厚受國恩。聞仁留寓。延家遇給明年巡觀州縣。禪利鱗差。乃詣赤山神祠立誓。

日本書紀

本朝高僧傳卷之六

○六

曰正法難遭。真師益難。神願加冥助。我歸本土。當建神宇。弘傳心印。其夜夢異人持囊來。仁問卿何人。曰商人有。旁僧問曰所持何物。曰非是子可買物。仁乃詰之。曰是量三千大千世界。秤子也。和尚買取。試量此地。看仁即買得。試掛大地。兼身在秤盤上。心裏豁然寤。而思忖。我必得妙法。而權衡此道。救濟羣情。不幾張詠持縣牒來。曰日本僧等任性巡禮。復命副使。每縣送牒。仁往青州府謁節度使及副使判官延館。於龍興寺判官慰問殷勤。翌朝請第珍羞供養。判官蕭氏名慶明。佛心宗得禪門祖印。仁請益參尋。遂蒙

印可辭去登五臺謁山中碩德留華嚴寺逢志遠法師受摩訶止觀兼寫公宗諸疏夏陟中臺拜文殊石像從此向西臺越二十里至北臺雲霧滿山徑路難尋少選漸露前途逢一師子形甚威悍良久不見抵普通院現五色光仁獨見之餘伴不視又五色雲覆仁頂上惟正惟嘉院中衆僧瞻望稱嘆秋禮南臺黃昏忽覩聖燈一點光照五臺仁私思言我拜聖跡幸感祥瑞倘平安歸國當建文殊樓誓首敬仰持念作禮既到長安謁左街功德使儀同三司仇士良敕居資聖寺屢往大興寺翻經院隨元政阿闍梨學金剛

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

〇七

界大法受五藏灌頂圖書金剛界大曼陀羅會昌五年夏從青龍寺義真阿闍梨入胎藏灌頂壇學毘盧遮那經真言印契並真祕法儀軌及蘊悉地大法圖胎藏大曼荼羅夢人來曰五臺和尚問訊日本大德大德圖曼荼羅我深歡喜以劍一柄授之曰此是五臺和尚所贈也學後知又殊應感大喜二年值法全阿闍梨於玄法寺習胎藏儀軌逢南天竺寶月三藏學悉曇章從醴泉寺示顯法師重受止觀尋見街東大安國寺良侃阿闍梨街西淨影寺惟謹阿闍梨共器許密付凡寓長安六年得經書五百五十餘卷念

珠法物若干品會昌五年屬武宗澄汰緇門荒蕪仁夏無歸托夢傳教大師曰我正護汝莫抱恐懼又宣宗卽位佛法重興軍牒下曰日本沙門宜歸本邦大中元年捲衣出京中散大夫楊敬之國子祭酒李元佐及官僚相共曰我國教法從和尚東矣作日學者當入日國李氏送護四十餘里臨別曰和尚祈本願惠我時時頂戴以仰高德仁脫而與之相尋抵鄭州刺史辛文昱贈衣服素帛等自衛護五十餘里揮淚而別仁過密州又到張詠宅張氏歡迎待賞甚膾又夢見達磨實誌南岳天台曹溪諸大師并本國

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

〇八

聖德太子行基菩薩傳教大師俱來護送是歲春有商舶赴日本泊登州界聞仁欲歸艤舟以待仁以爲衆聖之守護也中秋浮海九月著太宰府卽承和丁卯十四年也仁以載來經書法具等就府表進下敕賞勞唐客四十餘輩各給衣糧嘉祥元年奉詔入京卽登睿山拜先師塔闍山請法學徒胥率夏六月授大法師位明年四月詔修灌頂法入壇者一千餘人官給僧供尚書左丞伴善男監護法事三年春文德帝卽位敕修新傳密法仁奏曰除災致福熾盛光佛頂爲最是以唐朝街東街西諸內供奉恆修此法鎮

護國家今須建持念道場爲陛下修供蓋大唐青龍寺建立皇帝本命道場是其儀也便敕就延曆寺建總持院選二十七僧常修持念仁壽元年以臺山念佛法授諸徒修常行三昧四年任天台座主今茲慧亮安慧等授三部大法阿闍梨灌頂齊衡三年春帝召仁於冷泉院南殿受兩部灌頂公卿官佐入壇者多冬東宮請仁受灌頂貞觀元年帝受菩薩戒二年始修舍利會淳和太后請仁及二十四員僧果菩薩戒官僚已下受三摩耶戒入密壇者四百二十餘人冬十月慈睿承雲等授兩部阿闍梨灌頂今歲建文殊

日本書

本朝高僧傳卷之六

○九

樓仁禮五臺時就獅子所立取石與土而歸卽置其下王公卿相禮施孔阜五年十月賀藤相國忠仁公六十算請仁入灌頂壇受三摩耶戒入壇者公卿女御二百餘人六年正月十三日獨召門人常濟入室口誦真言手結契印示之曰是名密印灌頂至十四夜需水洮頰披淨衣燒香向西俄曰清淨靈場不宜取滅遷慈睿房念彌陀號令門人唱已至三更誦咒結印北首右脇而逝春秋七十有一夏臘四十有九越十六日葬于寺北天梯尾遺言曰吾在唐時嘗立二誓創禪院造文殊樓樓幸已就院尚未就吾其愧

且禪院爲赤山神所誓也以神祐我傳法歸國其可忘邪徒弟法友當代我造之遺誠數條皆護法微徒之事也齊衡之初仁作金剛頂經蘇悉地經疏各七卷私思忖此疏若契佛意當傳於世不則止之因祈佛前求其可否夢某日輝天仁放矢當之日輪轉搖覺而歡喜淳和太后上皇欲營菩薩戒壇仁撰顯揚大戒論八卷助發聖意三書依敕流行其餘述作止觀私記十卷法華觀心四種記速證菩提經集各八卷涅槃經音義七卷三寶輔行記五卷融通佛法義記法華實相記安樂行品私記法華開講各三卷百界

日本書

本朝高僧傳卷之六

○十

千如義十如是集四悉檀義各二卷總計一百五十餘卷別有目錄諸友徒隨願命建禪院神祠於睿山西麓貞觀八年七月賜諡慈覺大師贊曰仁師在唐得武宗廢教溪山幽谷勞劬身志歸主睿峯顯與密灌教授山徒著疏數千卷扶翼二教慧解之優不減師德臨終召徒密示者赤山禪刹所得之佛心印也與

### 江州睿山沙門慧亮傳

釋慧亮不詳其姓諱信州水內縣人少登睿山剃染得度敏超同隊天長六年夏從義真座主於止觀院



受菩薩大戒就圓澄和尚學顯密法拜慈覺大師日  
稟誘掖益至資深修驗之名播南北京休山衆之請  
住台嶺西塔院任十禪師大法師位嘗欲延曆寺置  
年度二人試法華維摩金光明太安樂經供神賀春  
日二神貞觀元年秋上表曰皇覺導物且實且權大  
士垂跡或王或神故聖王治國必賴神明之冥助神  
道剪累只憑調御之慧力伏惟金輪陛下乘六牙而  
降神速九歲而登九五受佛付囑轉大法輪法門餘  
慶尚在子今歟可謂維摩不二之典盛演佛境不思  
之氣高貴四德之教優談佛性常住之旨並斯如來

日本撰述

本朝高僧傳卷之六

〇十一

護國利人之門不可一度者也是以慧亮等以嘉祥  
三年八月五日陛下在東宮日所願已畢頃年特垂  
恩感每降誕日賜度者八年于茲伏冀天慈幸降恩  
敕不改素願永歲三月下旬於比睿山西塔寶幢院  
將試度之然後準弘仁十四年官符令受大戒遵先  
師式一紀不出山門一日不闕長講制可從表亮後  
移洛東妙法院貞觀元年五月二十六日得病吉祥  
而寂年五十九法臘不考焉  
系曰世云文德帝二皇子惟高惟仁有爭儲世令作  
詩歌其佳者得位而二皇子詠作其佳又慕相撲勝

者得之惟仁用善雄之法救於慧亮惟高用那都羅  
請法力於真濟當角力且亮執獨鉗杵擊破頭腦即  
投爐火精心加持善雄決勝惟仁得立貞觀帝是也  
然此事國史不見出於荒唐艸史而力士之年代亦  
違矣不足載述焉

城州神護寺沙門真濟傳

釋真濟世姓紀氏山城州人彈正大弼御園之子也  
母夢室中建三級塔覺即有妊延曆十九年生少歲  
出家學太上乘兼綜世書去從空海和尚受密法海  
喜其氣宇益加掖授兩部大法爲傳法阿闍梨年

日本撰述

本朝高僧傳卷之六

〇十二

二十五衆訝其弱入高雄山不躡陌塵將垂一紀建  
寶塔於神護寺安五大虛空藏像春秋二節設大法  
會鎮護國家嗟峨帝聞其苦修爲內供奉十禪師承  
和初曆奉敕入唐洋中船破濟乘片木隨波蕩漾三  
十二日同輩二十餘人皆餓死濟與具然加持得活  
南島居民遙見海上每夜有光怪而尋之得濟真然  
感嘆饗供送還日本復住舊院十年冬加任東寺二  
長者此職自濟始矣十四年夏轉一仁壽元年秋任  
少僧都二年冬轉權大僧都此任又始于濟也相尋  
任傳燈大法師位齊衡三年敕爲僧正濟抗表讓先



師空海帝壯其表追贈於海特賜於濟。天安二年天皇寢病濟侍看護無幾帝崩濟意快快隱休舊院貞觀二年二月二十五日遺病結定印而化春秋六十一濟有方力編弘法大師詩文十卷名曰遍照發揮性靈集自作題辭盛行于世。

論曰世人傳言具濟感色而成魔焉余常疑之弘法大師十大弟子中濟爲稱首其入唐歸朝之日舶破乘木漂海一月加持不灰歷鎮十刹臨公吉祥平生所養亦可觀焉豈斯人而有此惑乎閱真言傳所引善家祕記始決疑矣曰金峯山比丘咒藤后之病見

日本書紀

本朝高僧傳卷之六

〇十三

其容貌愛戀而外作鬼魅入帳中且清行時之鴻儒而見聞不誤其不關濟公必矣世之儒生不據本據信俗謬說幸其可非而揚於口筆於書夫不語怪者孔子之警訓也及其趙釋氏也吹毛而求疵訛言怪語無所不至胡寧謬哉爲釋氏者習聞其說因循不質之海藏師撰釋書也又採流言示之贊辭不爲無憾耳與慧亮抗驗不勝之事亦復無所取焉嗚呼菩薩羅漢者既斷微細之惑而況色欲乎初無得咎於聖門者如今八百年後吾作此論爲濟公雪其塵焉

城州法琳寺沙門常曉傳

釋常曉城州小栗栖入其母生曉置之路傍或入收養稍長俊利師元興寺豐安僧正學空宗承和五年六月從管判官朝善第四船是月著相州地乃文宗開成三年也八月下浣居淮南城廣慶館告節度使遊觀郡縣謁文璫阿闍梨於棲靈寺見元照大德於華林寺照者三教講誦精于經論就受三論璫者不空三藏弟子慧應阿闍梨之徒妙明密教隨學真言受大元帥祕法此法彼國不出都下畿外諸州不許修供璫察曉才器潛授焉明年二月從璫受傳法阿闍梨灌頂此日設大會齋普供清衆又使畫工李全

日本書紀

本朝高僧傳卷之六

〇十四

寫大元帥曼荼羅屋佛工刻元帥像並載諸經書四年八月歸朝即承和六年也仁明帝崇其法慰勞孔腆七年六月曉乃言官山城州宇治郡法琳寺地勢閑燥足修大法伏望自大唐所傳將來大元帥靈像祕軌安置此處爲修法院保護國家制從之於是始修木元法齊衡三年春天下大旱敕於神泉苑修太元法日龍現嶺上大雨普灑曉又奏朝從仁壽元年每歲正月八日太內后町行此祕法後遷於政官廳修之貞觀六年任權律師翌年十一月晦日逝矣曉公入唐之年紀釋書相違今據國史及真言傳記之

宋志磐佛祖統紀曰唐太中四年日本國遣沙門常曉入中國求釋迦密教今考歸朝之歲自阻十二年其紕繆也可知焉

贊曰太元師法金剛智不空等諸大士不盛倡於唐故傳教弘法二師不傳之至於曉公始傳而歸焉十年鎮家國護帝都其功偉哉中比小野仁海傳其法於小栗栖信海阿闍梨小栗栖之法二傳不嗣小野之傳於今相承至有大事則必修此法屢見驗也或者曰曉受太元師祕法於元照太德者不知古記而作焉

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

○十五

### 江州延曆寺沙門安慧傳

釋安慧姓貊氏河州大縣郡人父名池邊母下野州丸子氏女夢吞明星即孕從此不食薑腥延曆十三年生在孩兒時聰明超軼羣年事州之小野寺菩薩僧廣智學出離法智奇其才質攜往與傳教大師時年十三大師愛侍應對授止觀并密教弘仁十三年大師遷化慧隨圓仁受毘盧遮那孔雀明王等經天長四年試大日經及第得度紀年之間三部念誦四種三昧解修俱進承和十一年爲羽州講師德聖高時感動物情州內道俗皆學法相不知台教自慧

開講無相歸性者多矣仁明帝初定心院置十禪師撰得九人詔慧充數爲貞觀六年正月睿山座主仁公寂歎慧補處八年夏五畿內大旱詔慧祈雨於神泉苑其夜神龍現壇踰日大雨天皇睿感使右中辨文室助雄授僧正位慧辭不受仍賜年分度者十二人御衣并砂金千兩是歲六月太政官牒以止觀真言兼學者補座主立爲永式乃中其選十年四月三日安摩順世春秋七十有四左手與願右手寶印經宿不解云

### 和州室生山沙門堅慧傳

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

○十六

釋堅慧不詳何許人又不知其姓氏久遊南岳研覈三論法相駐錫和之室生山會空海和尚至山共語甚器重之不呼其名稱之曰公隨海還唐歸住東大寺眾貴之又僑居室生山眼見烟霞影不出山常使役鬼神感應如鏡在虛矣朝命授以傳燈大法師位力辭不拜貞觀四年召召宮問法奏動龍顏寵遇益渥暮年居佛隆寺而化弟子等奉全身安於室生山不悉其所自也贊曰使役鬼神感應如響者是修得之實事也然或者曰是此慧公之餘事也惡足尚邪不知密教而胡

亂指註聞證禪師料經義者大繁如斯且慧之事蹟他書不見僅出于血脈鈔蓋以其有烟霞之癖歟

### 豆州修禪寺沙門杲隣傳

釋杲隣不審何所人初居東大寺學賢首慈恩二教聞弘法大師道鳴海內特往隨仕大師嘗許授以金胎兩部其餘密軌皆悉親受莫不事理通達大師嘗暨於高雄山寺擇任三綱位以隣充其一因付書曰夫護持佛法必資綱維和合衆徒誠待其人是故沙德爲菩薩之座首遍覺則慈恩之上綱是則護法利入之雅致也今此高雄伽藍未補三綱無人護持綱

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

〇七

林鬱茂近童駢羅不因指車誰知曉暮所以近隨衆簡遠應激默之道訓擢禪師杲隣以爲上座杲者除雲霧於太虛滿光明於法界隣者養德法雲之宸宮紹位大日之覺殿名舍此德實當合契人皆具瞻上下同護太長間侍師入金剛峯精修密法大師順世後京師開修學寺教授又往豆州走湯縣建修禪寺爲第一代國內士庶信嚮如歸

### 城州神護寺沙門眞體傳

眞境 眞際

釋眞體朝臣和氣氏子早喪恃怙以宿殖善根味世間之榮名浮利如同嚼蠟竟從弘法剃髮稟戒盡捨

田園爲神護寺僧糧以贊父母之冥福精修梵行以終一生又釋眞境姓弓削氏就弘法學瑜伽教嘗爲金剛頂經以薦其親大師稱之爲有孝又釋眞際聰明博辯精於密教先於大師而卒大師嘆曰賢比顏回不終天生母期應機瀉液爲法中龍詎識人泉不歸痛哉其爲師所惜也如斯贊曰體境際者雖不齒十大弟子之科而皆傳瑜伽法具師之一體矣自非植種子於密嚴究竟之地惡能得如此祕印乎哉

### 和州元興寺沙門明詮傳

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

〇八

釋明詮奈良京八世姓利帝利種彥入皇子之裔也祖父彈正尹櫻井王天平十一年賜姓爲大原氏父石本早世母橘氏加意愛育詮幼聰慧志如老成十五母氏亦卒詮不任蓼莪之哀歸心佛乘將報親恩從元興寺施嚴法師雜髮納戒習法華最勝通大義嚴歎曰子器概弘遠非吾所及屬同寺中繼繼者法門之棟梁也詮歷法相名播京輦嘉祥二年爲維摩會講主住元興寺敷演空宗三年正月陞大極殿講師二月帝設高座於清涼殿請四宗碩德講金光明經三論者實敏華嚴者正義天台者圓修法相者詮

皆一時通人也。登法戰場義論交鋒，才辯超逸，言路  
崢嶸，猶如殺敵劍關，無可攻之勢。諸彥解圍，東宮學  
士滋野貞主參議小野篁相其歎曰：「先聞其名，恐名  
之過實。今見其實，恐實之過名。」帝顧太子曰：「朕未知  
若人。」一代聖教在茲，授以僧統。時僧綱所多惡比丘  
共抱褊心，胥謀陷詮。詮常修兜率，上生曾夢詣兜  
率內院，受彌勒授記。因於寺南別建一院，安彌勒像。  
於是惡比丘等揚言曰：「詮造私院，費常住物，絕眾僧  
食。既而率強俠六十人，各持兵仗，到寺怒聲大號，竟  
詮使云：弟子驚怖，不知所出。詮言笑自若，更無變色。」

日本書述 本朝高僧傳卷之六

〇元

是日天子追先朝旨，任詮律師，敕使人寺惡比丘等  
相顧失色，狼狽逃去。時人咸曰：「如來成道之初，魔王  
外道欲破法會，還自摧落。今之惡比丘等相似也。」詮  
慕玄井三藏之風，故名院曰玉華。井住洛陽，王華院。而其像  
宇極盡麗華。貞觀三年春三月，設大會齋，號彌勒初  
會。雅樂奏賜奏樂舞，公卿已下助其功德。詮曰：「爾  
勒出世則有三會也。今吾修其初會，第二第三會屬  
于後生。」六年，朝廷新定僧綱之位階，以詮始任太僧  
都。十年三月十六日，神足賢應已講寂詮亦病，諸檀  
越等曰：「昔釋尊欲入涅槃，而驚于先人滅，孔聖欲沒

而顏淵早歿，物類相感，自然之理也。譬如火將滅而  
煩先去，雨欲晴而雲先收。夫賢應者是亞聖之才也，  
奄忽寂矣。和尚尋病，其兆如斯，恐其不起。與初夏命  
駕歸於音石山。五月十五日語諸弟子曰：「日本師釋迦  
文佛以八十歲而取滅度，如何皆曰爾也。」曰：「急持湯  
來。」已沐浴畢，令圓俊基石，二弟子往元興寺撞鐘鼓，  
修懺悔法，便分什物為諷誦之達。曉人夜令諸弟子  
唱彌勒寶號，又為慧達真紹兩僧都作永訣之書。其  
跋曰：「此間業盡彼岸相待，即執筆署名。頃問夜如何，  
諸弟惜別，日夜未艾。漸至天明，奄然人滅。貞觀十年

日本書述 本朝高僧傳卷之六

〇十

五月十六日也。壽齡八十，戒臘五十。此夜風恬月朗，  
天氣清靖，白雲十二通起，自菴上飄飄山頭，語朝白  
虹十二道橫度。天端云：「今傳全據託律師之撰矣。」  
贊曰：「詮師之德業在乎釋書，則如玉埋於荆山而不  
發。其光焉據于僧錄，則若金出於麗水而自足厥價。  
矣。昔東福岐陽秀禪師難於釋書者多矣。詮之傳其一  
也。秀公不見僧錄，何以難之乎？」

和州元興寺沙門賢應傳

釋賢應不詳姓氏，和州人也。早就明詮圓頂受業，天  
機秀發，聲思法相研精，因明時稱亞聖之才。貞觀五



年昇維摩會主座。問義學問。挫銳解紛。住元興寺。秉相宗之柄。是歲於山階寺長講筵。與東大寺三修論。因明比量相違。前宗後因。應曰。夫前宗後因者。立者前。立邪宗。敵者後。立正。因時前。邪宗違後。正比量。故云前宗後因。修曰。立者舉邪宗。敵者未作。能違已前。其宗即違。本極成比量。雖未陳比量。言文本極成比量。本有之。故但於立者宗。因辨前後。故云前宗後因。商論未決。至三晝夜時。藥師寺隆光律師將於因明列一師。正否。而以應之。義為正。乃證曰。凡立邪等。為當時雖知違。本極成所作性。等因。然因明立破。習

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

○三

作能違。量顯其過。時方知。瓶等是常宗。違本極成。因故。先德釋云。非。不了知違。本極成。因之義。是。約立量之道理也。依之太疏。斷纂等。必作。能違顯其過。可謂以能違。因為後因。是。即正義也。五年正月初八日。大極殿。最勝會奉。敕為講師。答釋無礙。十年三月六日。不幸短命。而終。時人皆惜其才識矣。

贊曰。應修光之三師者。中古法相宗之翹才也。觀其評論。因明。二十三過。中僅比量相違之一。科而至如斯。其餘科條。可推之。知焉。古人之研幾家學。誠可愛矣。元亨之末。東大寺有沙門竟空。此又相宗之英也。

述。三千三過鈔一卷。名凡骨鈔。余其中標出三師之論。使他家學者。謾擬因明者。知其宗義。不容易矣。

和州藥師寺沙門景戒傳

釋景戒。不詳其詳。產住藥師寺。以唯識為宗。梵學之外。亦兼習。自作序曰。昔漢地有冥報記。唐朝有般若檢記。何但慎乎他國傳錄。弗信跡於自土。目瞞之。不得寢居。心思之。不能默然。因註側聞。號曰日本國現報善惡靈異記。編成三卷。以流。季葉然。景戒稟性不儒。下愚寡聞。坎井之議久迷。太方能巧之所彫。淺工加刀。只盡貪善之情。聊示濫等之業。後生賢者。幸勿嗤焉。

日本撰述 本朝高僧傳卷之六

○三

本朝高僧傳卷第六



音訓

軼杜結切 觴補曩切 諗式禁切 差楚懈切 押衙上切

下牛切 科丑正切 牒徒協切 侃空牢切 洮類上切 呼對切

暉上抽庚切 艾牛蓋切 殞羽敏切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鏤

本朝高僧傳卷六 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本經述

本朝高僧傳卷之六

〇三三 止

本朝高僧傳卷第七

濃州盛德沙門 師鑒 撰

淨慧二之四

江州安祥寺沙門慧運傳

釋慧運，平安城人，就東大寺，泰基中繼二師受戒，學法相，從東寺實慧、粟澤頂承和九年，乘唐商李氏船，秋八月著溫州樂城縣，即武宗會昌二年，突因禮青龍寺義真和尚，入灌頂壇，受諸部密印，唐武宗六年夏六月，浮張支元諱船，發自明州，經三晝夜，著肥前郡雷浦，本朝承和十四年也，以所請來密經軌樣等二

日本書紀 本朝高僧傳卷第七

〇一

百餘卷，上表進呈，初仁明帝為太皇太后壽，嘉祥元年秋八月建安祥寺於山科縣，於是詔運司馬，運在唐逢會昌沙汰，持青龍寺鎮守神體，而歸，即為今寺鎮守，貞觀元年詔曰：安祥寺每年度僧六人，可學諸宗，六年任少僧都，運憂諸寺度者受戒之廢，翌歲上表曰：謹案舊例，凡得度者，先與度緣，大令人寺就中年度者，經一生精練，沙彌行，臨時度者，經三歲，然後聽受戒，每歲三月以前，僧綱放牒，諸寺令上，當年受戒者名，而乃會集，綱所禮部醵牒，二官共勘名籍，試法華最勝威儀三經，即簡年二十以上六十已下，熟

日本書紀 本朝高僧傳卷第七

〇二

前件三經者，更牒本寺三七日修悔過，四月十五日以前定其受戒日，請傳戒大小十師於東大寺，戒壇依教問，十二難及十遮，然後登壇受戒畢，籍戒壇院差教授師，一夏九旬修學，比丘二百五十戒三千威儀，因茲戒業，誓鎮國家，或居本寺，請依止師，細學律相，若失年未滿二十或七十以下，并朝廷不許之人，負債之輩，黃門奴婢之類，非戒器，故不聽受，頃年之間，非唯忘卻舊例，兼復違背佛教，或臨受戒日，纔下官符，新剃頭髮，初著袈裟，冠幘之痕，頭額猶存，或十許歲少年，人徒有貪名之外，謀渾無慕道之中，誠未練沙彌之行，況於懺悔之事乎，加以結番之場，競上下，而鬪亂登場之大爭，先後而擊撲，遂則罵詈，有司陵轢十師，溫悖之甚，不可言也，夫得表無表戒名，曰受戒，於三師七證前，惡惡至誠作禮，乞戒之下，發得防非止惡之功能，名曰表戒，羯磨之下，發得佛殊勝之功能，名曰無表戒，既無至誠禮敬心，安得表戒，表戒未得，何得無表戒，無表戒已不得，何名得戒，登壇已後，不學律相，故不知持犯，亦不修安居，何稱比丘，伏乞依舊例，兼遵佛制，然則繼從感激，慚惡自止，戒壇清靜，佛法興繁，國土之豐樂不期而來，內

外之災殃不攘而去十一年己丑補東大寺務是歲九月二十三旦般涅槃壽年七十一臘五十二運作菩提心戒儀一卷

城州法輪寺沙門道昌傳

釋道昌諱州香河郡八世姓秦氏吾應神帝十四年秦始皇六世之孫中滿王慕國風來采邑香河中滿生融通王昌者融通王之裔也延曆十八年三月八日誕幼歲聰敏早崇佛法遂割恩愛辭上南京師元興寺明澄和尚澄授以三論不歷數日聞持洞曉十四蒙年分試甲第得度十九登東大寺戒壇受滿分

本朝書目録卷之七

〇七

戒從此諸宗諸學遊歷殆遍年三十從空海僧直於神護寺具灌頂壇受兩部秘天長六年置洛西桂井寺今法華寺修虛空藏求聞持法其得悉地聖應詔官中爲佛名懺會導師會畢帝問曰帝王臣庶應宰之罪孰重昌對曰王重臣輕左右國不其忌諱皆伏頭寒心帝良久曰王重臣輕乎對曰臣竊見國監設御饌宰魚鱗數十以供一膳羽毛隨時所饌雖寡所殺甚多臣庶不然山海有禁不許弋釣爾有所獲續貢口腹是以王罪重臣輕帝感其答稱省慮供承和三年補廣隆寺主務爲檀林寺供養導師嘉祥

本朝書目録卷之七

〇八

三年移隆城寺天安三年爲興福寺維摩會講師貞觀元年爲大極殿御齋會及藥師寺最勝會講師三會講者僧中大業關繫甚重昌每臨講會以博辯折問難六年甲申清和帝弗豫詔修法於殿裏玉體平復敕任權律師十年戊子住元興寺十六年春貞觀寺落成大相國良房藤公設大會齋供養南北名匠一百人請昌爲會首今歲在桂井寺建立伽藍安虛空藏菩薩像道俗奔赴車馬轟填改舊額號智福山法輪寺冬十二月又修宮中佛名懺昌音輪清亮聽者三數即敕爲少僧都十七年春正月招請衆僧設法輪寺落慶供齋二月九日化於隆城寺別室壽齡七十有八法臘五十有八昌自天長初至貞觀季每值法會必爲導首應檀越請登獅子座說法華經五百七十座一日宴坐虛空藏菩薩忽現衣袖上昌乃割袖圖之以鎮于法輪寺承和年中大井河溢堰破堤崩多損田畝詔監防遏昌躬荷鋤先搜搬役衆人子來土功速成父老合爪曰豈圖行基菩薩復現於世吾儕何多幸邪承應三年春敕贈僧正贊曰永開持法者菩薩心地之大茶羅尼門有邪思者不能得悉地也唐開元初天竺善無畏三藏齋來

自譯盛倡於唐此方傳之得驗者多然未有影真身於木袂答淳和帝之御問以正言批逆鱗所以其恆于咒感於是可知焉或以求那之對宋帝附會論之似柄鑿不相合也

### 和州法隆寺沙門道詮傳

釋道詮不詳姓譜武州人也承空宗於東大寺玄耀法師劉覽三藏遺珠四論住法隆寺四十年唱本宗之玄致攝七大寺之衆侶世傳詮修虛空藏求聞持法得自然智嘗曰四河入海而止皆從無熱池而出七宗分鑊而馳俱從三論而分三論七宗之本諸宗

日本書紀 卷之七

五

三論之末弘仁年中唐遍明法師齋寄釋摩訶衍論十卷當時諸師批評區別興福寺德流述作中往往用之延曆寺最澄圓珍破爲僞論東寺空海泰朝入真言三藏廣海道詮卻破爲僞論上爲真論也嘉祥三年春三月仁明帝召詮受戒持不殺戒貞觀元年清和帝召南北碩師二十人於太極殿講最勝王經詮爲第二座講師詮後退居和之富貴山深避人事貞觀十八年垂八十而化詮博涉相性之經論德望高時管七大寺尤功於法隆寺故衆僧作詮肖像安置堂裏其像於今存焉延寶三年余在法隆寺一夏

聽唯識論至夏上首講經於太子堂自朝撞鐘必至午時問之寺衆衆曰昔詮師每至齋時來自富貴勤於法事其間撞鐘待之此其舊規也余嘆謂詮公之懿德千歲之下綽有餘烈矣

### 京兆貞觀寺沙門真雅傳

釋真雅姓佐伯氏讚州人弘法大師之族弟也延曆二十年生志意不凡九歲入洛事兄十九受具足戒大師見其穎利密教祕訣盡盡傳付嗟嘆帝聞其名徵侍宮中雅誦三十七尊密咒其音宛轉嘹亮如夏環佩從此帝信日渥承和十四年主東大寺務大相

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

六

國良房藤公請祈皇后之產修尊勝法太子平誕清和帝是也嘉祥齊衡間僧官昇進任太僧都貞觀元年爲東寺長者六年甲申敕任僧正是時朝廷僧階未整雅奏曰律師已上品秩稍尊當不與凡僧同位階於是法印大和尚爲僧正階法眼和尚爲大小僧都階法橋上人位爲律師階是歲授雅法印大和尚位敕聽乘輦車出入公門僧家蒙此宜自雅始十四年領東寺法務此職始於雅初藤相國與雅相謀奏請建精舍祝寶祚制可十六年春遂落成賜額曰貞觀寺延雅主之設大會齋賀其新成雅上表請賜

年慶乃賜三人十七年夏天下旱魃雅於太極殿修壇精祈不日而雨帝眷益倍十八年秋八月雅又奏言貞觀寺者爲今上御願所建立也故太政大臣忠仁公與雅戮力推誠經略進造雕鏤莊嚴成之不已公家施入田園資財安置十六員令修其事業今堂宇輪奐資具既備非有主領誰能齊運伏望準天台宗特置座主勿令僧綱攝領其座主必簡定受學兩部大法修練苦行堪爲師範者三綱與俗校及別當共署上奏補之若有座主并定額僧中任僧綱者更還本寺不令寄住制從之雅性溫克不倦請接清和

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○七

帝治世之中祝延聖躬其勞多居歲盈七十辭僧正職抗表曰真雅言小僧今月生後再露愚衷降徧覆之仁未賜允遂之命小僧聞隨功而受世不爲貪藉才而升人與其進否則時論同口取喻於捕鼠之猫物議聚唇假議於伺魚之鶴小僧結使山峻愛著海深放毒龍而不追制魔鬼而難縛況亦幹濟無術統理非材猥居法座之上頭遠慙如來之右臂以至當今種智慧之樹開功德之花御紺馬而飛行駕白象而遊戲二十五德基匪宿和尚之羣二十萬人皆是太比丘之衆舉之而用必益於治豈使愚蒙久妨賢

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○八

路欽皎者日鑒小僧之素懷蒼蒼者天察小僧之丹慙伏冀慈仁特賜東許若得退影巖岫歸老菴廬則遙護紫殿傳禮誦於松風之聲閑臥白雲了禪觀於蘿月之曉無任知止之情謹重奉表陳請以聞是日帝降敕答言雅聞烈褻表悉之公曰業夙著玄韻孤高四無量之觀克明三菩提之心彌固朕之景慕豈一朝二十餘年賴其普濟近曾聞公寢疾助憂於懷私恨門光一收不復相得方今醫王下手保全上身朕欲依禮攝之便共議國家之事而更堅執辭退不統綱維解果塵區屬想風竇雖虛已之讓在公最高而利他之思爲朕不至持領之任永以委之矧不復嫌朕之願也至如待餘年於月壺養衰疾於石泉公自任其雲霞之心朕不致以羈束之強唯望臥治法務增鎮俗心耳宜得此趣其重表請表進三回皆有優詔元慶三年正月三日集諸門弟手結拳印口誦密咒恬然而化世齡七十有九法臘六十有一

城州圓覺寺沙門宗睿傳

釋宗睿姓池上氏平安城人真紹僧都之族甥也暨歲十四登睿山從載鎮法師劍涂勤習經論綱戒已後徧詢諸方學法相於興福寺義演法師聽台教於



延曆寺義真座主受菩薩戒傳兩部密法於智證大師稟金剛界於實慧僧正卒禮真紹於禪林寺受阿闍梨灌頂清和帝在儲宮常召睿講侍及其即位崇罷益厚故入壇供物官府資辦貞觀四年與具如親王入唐請益乃懿宗咸通三年也初謁汴州玄慶得金剛灌頂登天台山就于大華嚴寺齋供千僧值青龍寺法全受胎藏灌頂全便付金剛杵儀軌以爲傳信又隨慈恩寺造玄興善寺智慧輪等盡得真言祕蹟抵洛陽聖善寺拜瞻善無畏三藏舊址院主與以三藏所持寶杵焚夾儀器再登台山精究教觀適會

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○九

李延孝赴日本于望海濱落喜附舶經三晝夜著本宰府當貞觀九年帝悅歸朝恩渥倍前本朝宿學請演新法卽於東寺啟灌頂壇四遠麇集十六年帝就睿受金剛界三摩地法并觀音法奏建修法院持念堂於宮中安置兩部大曼陀羅十八年帝讓位太子居清和院屢召睿講華嚴涅槃等大乘經元慶三年春任東寺長者是歲夏上皇建圓覺寺就睿圓頂相設灌頂壇受三摩耶祕密戒達觀以衣服臥具珍寶車乘等睿分捨東大延曆諸寺一無所蓄冬任僧正四年夏四月上皇巡覽山城大和攝津等名山佛寺

睿隨往啟行夏五月天久霖雨詔於神泉苑修正雨法不崇二七雨止天晴睿在叡山山王明神影現告曰公修學無比吾當擁護若有遠行則以二鳥爲侍當暗夜則以炬火相照斯其驗也無何如越之白山果二鳥飛隨不散夜涉山蹊俄逢炬火行客驚怪登五臺時西臺見五色景雲東臺見聖燈聞聖鐘其誠感如斯八年三月二十六日奄然寂於禪林寺享年七十有六坐夏五十有七睿性精嚴平素不好言談食不言濃淡寢不脫衣手不離念珠在唐所得經論總計一百三十四部

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○十

贊曰得二經一論以爲滿者似泳蹄洛偉哉睿公問扶桑津又入太華遊阿字林金胎祕藏稱載而歸蓋沙門之能事也

### 江州睿山沙門圓載傳

釋圓載不詳氏族和州人也幼隨最澄和尚通貫梵典有贖儒書承和初遊唐土睿山諸師作台教疑問五十科付載寄天台山碩德乃以疑問呈廣脩維蠲二開土就學教觀開成五年答釋已成維蠲獻書於朝議郎中台州刺史滕邁以乞公憑其略曰昔南嶽高僧思太師生日本爲王天台教法大行彼國是以

內外經籍一法於唐約二十年一來朝貢貞元中僧最澄來會僧道遂爲講義陸君給判印歸國大闡玄風去年僧圓載奉本國命送太后架梁供養太影聖德太子法華經疏鎮太口藏齋疑義五十科來問抄寫所欠經論禪林寺僧廣脩答一本已蒙前使李端公判印竟維蠲答一本并付經論疏義三十本伏乞郎中賜以判印光浮日官不具遐裔恩流永劫道德日新煩聽覽不任悚懼

通書畧之

乃與公憑曰圓載聞梨是東國至人洞西竺妙理梯山航海以月較時涉百餘萬道途之勤歷三大千世界之遠經文翻於貝

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

〇十一

葉鄉路出於林桑破後學之昏迷爲空門之標表遍禮白足淹留赤城遊巡既周巾錫將返懇求印信以爲公憑行業衆知須允其請適白將還本邦名官諸士欽慕風采頻留行裝載使好仁持答釋還宣宗皇帝聽載道學敕住西明寺尋召宮殿講經皇情大悅賜紫袍衣恩遇日渥其後好仁再入唐仁明帝敕宣日在唐請益僧圓仁留學僧圓載等久遊絕域應乏旅資宜附圓載謙從僧好仁還賜各黃金二百兩者所司分付如前載敕諸師門堂顯密法大中九年秋拜清凉寺法全阿闍梨其本邦圓珍浴胎藏界灌頂

水入金剛界太曼茶羅果蘇悉地法及諸密軌乾符四年冬十月儲釋典儒書數千卷駕李延孝船大洋逆濤船艙皆碎與延孝俱一時溺歿載留唐間與諸鉅儒爲方外之交篇什唱和陸龜蒙皮日休顏萱等各有所送行之詩律陸氏詩曰九流三藏一時傾萬軸光凌渤海聲從此舊編東去後卻應荒外有諸皮氏詩曰講殿談餘著賜衣椰帆卻返舊禪扉貝多紙上經文動如意瓶中佛爪飛颺母影邊持戒宿波神官裏受齋歸家山到日將何日白象新秋十二圍其餘不殫錄焉

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

〇十一

贊曰吾邦南詢者未有如載公淹久逾于三紀揚其風聲無高妙邁入之才烏能至于茲耶若使載公布帆無恙化導之盛故土有賴焉不幸最化於龍宮海命乎悲夫

### 和州元興寺沙門隆海傳

釋隆海父清海氏仕官朝廷海生于攝州家於河上常釣河濱本州講師藥圓見而異之攜付三論碩德願曉講習出羣早預年度至試所業因舉甲科承和二年登戒壇受滿分戒學法相於中繼法師稟密灌於真如同闍梨貞觀元年太極殿最勝講爲第六座

問者十年戊子敕任和州講師十六年登維摩會講  
席七寺眾僧論難鋒起海以妙辯折之以元慶末爲  
權律師住元興寺學徒圍座仁和二年秋七月嬰風  
疾自知不復每日沐浴誦無量壽經至十二日命掃  
牀席西面端坐結跏誦龍樹羅什彌陀讚至夜氣  
絕門人等依西竺法茶毘薪盡身灰印契不壞保齡  
七十二署述之書二諦義方言義各一卷四諦義二  
智義二空比量義因明九句義各二卷

京兆東寺沙門源仁傳

釋源仁不詳其姓牒氣質真精風神爽發初從南都

日本撰述 本朝高僧傳卷之七

〇七

護命僧正學相宗後依東寺長者實慧傳密教梵膏  
繼學而不厭復就真雅宗睿二師益臻其奧元慶  
二年爲內供奉仁和初元任少僧都無幾轉正是歲  
加東寺二長者常居南池爲學侶開宗義當時推密  
乘之博衍仁和寺益信醍醐寺聖寶所由而出也仁  
和三年十一月二十二日終於所住春秋希年矣  
贊曰爲人師也難矣出入也尤難焉二難併得誠亦  
難矣哉益信聖寶二傑從茲化門宗派流衍西匯東  
迤成小野廣澤之密水無底其源濫觴於仁公也古  
謂君子垂統爲可繼之者邪

江州睿山沙門法勢傳

釋法勢延曆寺義真之徒也立性阜爾不與塵混常  
誦普門品甚勤一日過江州比良山宿和邇民家其  
婦俄患熱病不省人事忽向勢曰乞師誦觀音經我  
欲聞之勢以其狂病給曰我無經不能誦婦曰師臂  
繫非經耶勢乃燒香朗誦婦合掌曰我比良明神也  
幸聽妙音不任感喜勢曰我聞神皆有通能知三世  
事昔釋迦如來出現於天竺曾瞻禮否神曰我未行  
印度然一千數百餘年前諸天龍神多西飛行豈其  
釋尊出世之時乎勢後有詔至傳燈大法師位貞觀

日本撰述 本朝高僧傳卷之七

〇七

十年正月八日大極殿最勝王經會奉敕爲講師

江州伊吹山沙門三修傳

釋三修不知何許人及年舞勺從元興寺明詮僧都  
削染受業質唯識論特究因明旁通密教當時學者  
欽服博涉納戒已後巡遊名山勝地仁壽年中登江  
州伊吹山愛其深邃結菴禪坐誦千手陀羅尼不出  
山者二十餘年或旬一食修練絕真食齋餘者疾病  
立愈四民歸向勸護國寺自觀六年三善參議清卿  
巡按江州誘賢應已講登伊吹山訪修款談歸路應  
語善參議曰三修閑寂雖勤苦練而智觀不足言語

之際似誇名譽必受魔燒十八年春天衆奏音樂來  
日依慈氏命兜率迎師乘以玉輿凌空而去已經七  
日樵夫告曰北山松頂有僧所縛人往見之修也雇  
探鷹巢者谷龍緹下其天衆者皆魔魅也爾後勤修  
正觀靈感復本修於山中建長尾彌高太平三寺莊  
嚴佛土元慶二年春奏朝言修少年出家遍歷名山  
莫不盡蹈仁壽年中登伊吹山卽是本朝七高山之  
一也觀其形勢四面計絕人跡布至昔深州聖皇令  
建一精舍修藥師念佛三修居止以降歲月漸積堂  
舍有數誠非雲構庶幾靈山伏望賜預定額朝廷聽

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇十五

其所請爲國家安全之鎮實平二年爲維摩會講主  
神解妙辯究大乘理昌泰二年五月十二日化於護  
國壽七十餘世有三國傳記十卷載三修事其爲作  
也無所取材矣  
贊曰學佛之者要觀心熟也觀心熟則靈鑒明也鑒  
明則何物可道影邪應之先識冥然如神不熟則慢  
心生矣慢生則魔窺其便修之事可證焉及歸正觀  
轉四煩而成三慧修亦英利之人也

城州元慶寺沙門遍昭傳

釋遍昭俗名宗員亞相良峯安世之子累葉華胄也

才操相兼又能和歌事仁明帝歷近衛將補藏人頭  
嘉祥三年春帝崩不堪哀慕遂登睿山師圓仁和尙  
落飾出家受圓頓戒習串台教仁命就安慧受三部  
大法又從圓珍和尚重受灌頂密旨歲月修證多有  
効驗嘗託曰慈覺之資安然之師人品可知焉貞觀  
十一年敘法眼元慶元年任權僧正上表畧曰臣僧  
昔在承和之代給事黃門宿衛青鎖以虛革之陋姿  
沐海汗之膏澤已有日矣及於橋山下掩鼻湖始還  
不得攀龍鬚從仙島而獨留千行不禁推赤之恩在  
心萬分無益寸丹之慕推性自謂奉金輪而推轂曾

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇十六

植宿世之因侍蓮臺而祖肩當修來世之善是故剗  
除髣髴擢落簪纓委身艸萊石泉蕩其塵累晦跡閑  
介白雲知其素心夫求官貴樂榮耀者人之心也理  
之然也至於臣僧聊有微尚掃瑯邪而歸真寧莫樂  
榮之道脫銀魚而出俗非摩爵之求誓指日河瞻微  
星漢伏願俯察愚衷曲許降退則屬續之日埋恨黃  
墟不堪丹慮之至謹奉表陳請以聞帝尚優詔三年  
轉正仁和二年崇昭年德賜封二百戶重敕爲元慶  
寺座主寬平二年正月十九日寂於華山寺春秋七  
十有四歸終衆聖來迎管絃聞空中祥雲盈山上當



第三日帝賜白練三百屯調布一百五十端令修誦誦焉

### 江州園城寺沙門圓珍傳

釋圓珍姓和氣氏讚州那珂郡人弘法大師之姪也父宅成家富鄉人重母佐伯氏夢乘舟海上日輪入戶從此有妊弘仁五年二月十五日生神思警敏玉犀貫頂自有重瞳八歲曰父曰內典應有因果經我欲讀誦父驚異即索經與之珍頂受日課不止十歲讀論語毛詩漢書文選能解其義十四上京隨叔父仁德於睿山見其俊才付座主義真歲纔十五顯密

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇十七

經論周覽該習十九薙髮為沙彌天長十年試大日經以中高科夏四月拜真公於睿山戒壇受菩薩戒為大僧隨例居山一紀護持戒範精修薰練名達禁闕仁明帝親賜綸綍優加慰問官廩相給承和五年冬禪坐石龕金人修來曰汝圖我形歸命珍問為誰曰我不動明王也愛汝法器特來擁護宜勵志操為苦海之船筏熟見其形魁偉奇異威焰熾盛手把劍足躡空珍起禮拜乃命畫工光空圖其像七年夏夢明王又授立印儀軌及灌頂法曰大日智水能洗塵劫罪垢令汝住不退位珍記不忘九年夏就圓德法

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇十八

師受三種悉地法此法善無畏傳唐義林林傳之順曉曉傳之最澄所謂兩部肝心三身祕府也十四年正月預太極殿吉祥齋會與南京明詮決擇大義珍問難數關懸河難禦官僚從聞嘉祥三年春夢山王明神告曰入唐求法勿為雷滯珍曰比來仁公入唐請益研究顯密已歸本山我何汲汲於求法乎神曰世人薙髮者多子何汲汲於薙髮乎四年夏夢神又勸求法珍乃勒兩夢上表以聞帝簡心制可仁壽三年秋八月適唐商欽良暉發船伴珍浮海歷十餘日北風俄起漂琉球國邊人數百持戈立濱良暉悲為琉球所害珍令掌關目念不動尊時金色人忽立舟艙船中人皆見須臾東南風來帆輻悉吹翌日午時著唐福州連江縣即宣宗太中七年也刺史韋公軍將林師準荐加安慰寓居開元寺即聽其寺教授大德存式講嘉祥慈恩法華疏華嚴涅槃疏及律鈔俱舍義疏又遇中天竺三那蘭陀寺三藏般若若怛羅學梵字悉曇章兼受金剛界大悲胎藏大日佛印七俱知曼素室利印契怛羅付梵夾及金剛杵以為法信冬十二月往台州刺史工部郎中李肇慰問敬供奏其行由乃與公據巡遊州縣登國清寺拜智者塔因就



一房與清觀元璋二友送夏本國圖載來自越州翌歲相偕徇佛隴寺登于銀峯其南有石鼓相傳智者說法時擊以集衆大師滅後擊之無聲珍以石擊之響震山谷尋上華頂傍磳抵於石橋復回國清度夏聽物外講止觀暇日手寫章疏三百卷去如越州開元寺謁良諤和尚請益台教九年六月觀光長安拜青龍寺法全和尚受瑜伽密旨秋七月其圖載入胎藏灌頂壇本十月入金剛界大曼荼羅及果蘇悉地大法十一月請授傳法阿闍梨位灌頂全公有難色珍乃出不動明王所授密軌以呈之全公驚曰此密

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○十九

乘祕

乘祕子何自得乎珍說其由全公感心駭嘆所傳玄祕倒底完付及入定時授三摩耶戒平明付阿闍梨位灌頂曰汝蒙大毘盧遮那般若母加持遊步阿字法性之太空傳一切如來最上乘教畢珍不任歡喜是日捨財供養寺衆全公付五銖杵金剛鈴以爲傳法之印也珍益喜而出見大興寺三藏智慧輪承兩部太曼陀羅祕旨兼受新譯持念經法辭去如東都廣化寺禮善無畏舍利塔到龍門西岡拜金剛智靈塔十二生夏乘商人李延孝船經二十日著肥前松浦縣本朝天安二年也相國良房藤公遣使勞迎

秋八月官使驛于太宰府詔曰嘗聞曇止觀兩教之宗同流醍醐俱稱深祕必須師資授受父子相傳苟無機緣難遇難悟法師在本朝苦學此道遊歷漢家更通要妙堪可弘宣真理以爲國家城塹宜下知所司許其演法增光慧炬冬入帝都寓出雲寺表上所齋顯教密典諸宗經書一千餘卷胎金兩部曼荼羅等教藏之尚書省不幾有詔住睿山山王院一日新羅明神告曰此日域有靈場我先相攸師宜開朝建院宇度經典珍與新羅山王同到三井檀越大友歡迎設席比丘教待授寺契券見其地勢似唐青龍

日本書紀

本朝高僧傳卷之七

○二十

乘祕

乘祕憐而歸詣闕奏事敕造一字名曰唐坊乃移置尚書省經書事在釋書寺像志貞觀六年秋七月詔於仁壽殿構灌頂壇就珍入壇相國良相藤公已下同密灌者三十餘人續講大毘盧遮那經帝整衣聽彌傾睿心重賜顯密弘傳公據是歲奏建持念壇於冷泉院爲祝聖之場九年夏唐務州人詹景金寄法藏圖共二幀子各潤四丈自釋迦文至慧能三十四像眞儀莊麗可觀焉珍在唐間景金傾誠鑽仰故有此寄十年夏六月敕任延曆寺座主特賜江州園城寺爲傳法灌頂道場四至山林官禁侵凌攝州四天

王寺安岳講唯法華仁王兩經珍奏加最勝王經又定延曆寺暨義武十七年冬齒興福寺維摩會初傳教大師睿山構三宇北毘舍門護世堂置多門南一切經藏度經律論中一乘止觀院安藥師像歲久皆壞珍合三爲一今之中堂也或曰無背本師否珍曰昔之三宇者三諦也今之一堂者一諦也三諦卽一豈背祖意乎元慶初年帝召諸山名德講仁王經百座敕珍爲御前講師爲仁壽殿講主二年五月夜紫宸殿前有長人往還徘徊內豎傳點者見之驚悸視神冬十月帝不豫召珍於仁壽殿修護摩法僅經一宿聖躬

本傳

本朝高僧傳卷之七

〇三十一

平復帝悅敕問有何希望珍曰菩提之外無復所求乃賜半度二人珍回山資山主明神初珍赴唐藤相國寄三十金修智者塔國清寺大殿又贖珍三十金貞元年中最澄和尚創一院於國清寺會昌之後院亦隨毀珍捨三十金建止觀院以補澄師之志今清觀大德主之衆稱其有後鄉貢進士沈權記事雕石珍在睿山時語門人曰入唐留學圓載俄罹風波卒於洋中悲哉言訖垂淚門人感焉元慶四年冬沙門智聰歸日唐來語珍聰與圓載乘李延孝船其夜風濤遽作船碎載公李氏葬於魚腹聰獲浮版幸得命

存正是語門人之口也一時相傳曰大唐國清寺元璋大德人滅數日又流淚曰清觀大德亦殂數失法兄不堪哭慟越年舉哀曰開元寺良諸和尚遷化乃捨法財於延曆寺諷經修薦七年癸卯唐商桓至貢至太宰府國清寺諸友寄書言璋觀之事尋良諸和尚之訃至其示寂日無一差矣唐地同參璋觀二子尤親商舶東渡音問相繼貞觀中觀公寄詩曰睿山新月冷台嶠古風清大儒常諫議至此一聯擊節稱賞珍詣紀州熊野適逢風雨迷失行路太鳥飛來爲前導漸至神祠不遑脫蓑便講法華神排殿闥自此

本傳

本朝高僧傳卷之七

〇三十二

熊野一乘八講雖逢晴天必置蓑講座下也寬平二年冬任少僧都珍閱藏經凡三遍常修密觀其修習時雖徹曉無假寐淨鉢過時不釋精麤至年八旬識鑑尚明四年春謂諸徒曰今歲我逝矣乃辦喪葬之事十月二十八日集門生曰如來以法爲身比丘以慧爲命法慧苟傳奚死之有汝等宜知之黃昏結足印禪坐念咒至五鼓索水嗽口戴僧伽梨右脇而逝其衣爲枕時四山聞天樂經二日將舉喪弟子請所稅衣其頭自舉葬于睿山南峰僧齡七十有八法臘五十有九貞觀之季法師濟詮將入唐來訪告別問

唐風俗且乞學唐言珍默不答在憤悶而去珍謂門人曰詮雖有才辯未曉空觀異域請益似邀名聞我是故不答若抱一毫之淨心爭超萬里之嶮浪乎其後唐師往來不聽詮事料失漂瀛洋中珍之先知此類多矣珍撰傳教大師之年譜其餘述作法華論議法華開題最勝王經雜疏各十卷金光明經文句四卷仁王經注義瑜伽界記華嚴骨目各三卷總有二百餘卷其稟大法登阿闍梨位者二百餘人手度剃髮為大比丘者五百餘人入壇受戒者三千餘人延長五年冬十一月賜諡智證大師

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇三三

贊曰珍公抱上知之才加以修進之力在唐六載自疆不息言教之蘊密觀之與耳提面命無有遺應神明之感而開名藍受聖帝之招而構宮壇蓋有本者如斯其辰圖載之沒知良謂之寂者從舍摩他而得之匪啻手印口誦而已矣

本朝高僧傳卷第七

音訓

憤側格切 輾郎狄切 柄鑿上儒稅切 憂古黠切 越乞約切 竇大透切 鑊重固切 膚規雲切 獨圭洞切 黠杜谷切 貂丁聊切 庫力錦切 怛當板切 禪尺里切 邀伊切求也

日本書紀 本朝高僧傳卷之七

〇三五

江府住玉泉軒成九居士信施淨財銀  
本朝高僧傳卷七 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第八

濃州盛德沙門 師鑾 撰

淨慧二之五

江州睿山沙門安然傳

釋安然，出傳教大師之系族，其母妊然夢明星入懷，及生聰敏，出羣早，登睿山投慈覺室，剃染稟具，學業日增，顯密奧祕如指諸掌，又就華山僧正遍昭重受胎藏界法，後於睿山構五大院，屏居不出，涉獵經論，馳聘百家好事，署述輔弼，大教菩提心義教時問答，卽身成佛義被接義私記三觀義私記悉曇藏悉曇

日本經述 本朝高僧傳卷之八

〇一

章等凡著四十餘卷，其如教時問答，自設論訓，曰真言宗，立二佛一時一處一教，判攝三世十方一切佛敎，無始無終，本來常住之佛名，一切佛無始無終平等之時名，一切時無中無邊法界之宮名，一切處遍一切乘，自心成佛之教名，一切教統諸宗經疏歸真言一宗，學名密者，皆兼法焉，其悉曇章漢明梵學之奧旨，時人曰以東地之居士通西天之音韻，然公之才宏淵，哉都率超公曰然，師者顯密之博士也，又曰然師若不入我門，密教殆可墜地矣，其爲時賢所賞如此，台徒於今稱五大院先德，元慶八年敎司元慶

寺座主，任傳法阿闍梨，不記其所終。

贊曰：觀然公之學，雖顯密並馳，而觀平日著述，則其心所嚮往者，顯在瑜伽三密耳，他山之石，可以攻玉者，然之謂與。

江州延曆寺沙門惟首傳

釋惟首，號法興，姓御船氏，江州蒲生郡人也。從智證大師遍昭僧正，稟灌頂法，就德圓和尚法勢講師學天台教，自觀元年奉詔爲大極殿寂勝王經會講師，判釋明震，寬平四年夏五月任延曆寺座主，明年二月二十八日化壽六十八臘二十九號，虛空藏座主。

日本經述 本朝高僧傳卷之八

〇二

江州延曆寺沙門猷憲傳

釋猷憲，不詳姓氏，下野州鹽屋郡人也。自少入洛，從智證德圓二師受灌頂，贊台教，自觀初曆帝詔，南北諸僧講最勝王經於大極殿，憲爲問者，義辭入微，衆會稱歎，憲居持念堂，寬平五年春三月爲延曆寺座主，翌載八月二十二日卒，壽六十八臘四十八。

江州延曆寺沙門康濟傳

釋康濟，姓紀氏，越前州敦賀人也。蚤登睿山，從光定顯密兩教細究，國府後拜智證大師受傳法阿闍梨灌頂，自觀元年大極殿最勝王經講會，康濟爲問者。



辭義明辨。寬平六年秋任延曆寺座主。時年六十七。翌歲三月敕爲維摩會講師。濟上表言濟泰以非器旋磨其選雖歡而承旨信顧而懷悲。康濟學謝替古才非知新。幽求之功早倦。法藏默悟之識何涉。論場加之老耆。日增廢齡無幾。只思讀護於山門。獻鎮護於邦家。仍注不堪狀。謹辭帝許其辭表。治職三年解座主印。詔主園城寺。長吏居三年山中。靖肅昌泰二年二月八日恬然而化。壽七十二。臘四十八。

江州睿山沙門常濟傳

釋常濟。初拜慈覺大師。削髮得度。及長就慧亮學。顯

日本書紀 本朝高僧傳卷之六

〇三

密法。後入慈覺密壇受兩部大法。大師臨滅度召濟。內牀口誦神咒。手結印契。示濟曰是名密印。灌頂令親授。汝濟拜首而出。自觀四生。夏奉詔住西塔院爲第二代十八年。夏智證大師奏。朝爲延曆寺總持阿闍梨。

和州興福寺沙門昌海傳

釋昌海。南京人。從少師事善珠僧正。警敏愛閑。唯識臺奧悉其關鎖。靖居和州。廣闢相宗。爲任有樂安養。撰西方念佛集。阿彌陀悔過各一卷。出弟子基繼一人。傳在後。

和州東大寺沙門濟棟傳

戒機

釋濟棟。鄞年出家十九。納戒周旋。興福東大開得究法相。敕任傳燈大法師位。寬平四年膺維摩會講師。發其慧解。尋歷法華最勝二會。講主。六年夏住東大寺爲衆所依怙。因任律師。居之四年。退休唐禪院。延喜二年昇以僧都。四年轉大明年六月卒。年六十七。臘四十八。時人稱唐禪院僧都。又同時有釋戒撰研練法相。理義綿密。任傳燈大法師位。延喜五年主東大寺。一住四年。法儀肅如。以年六十五卒於別院。

京兆圓城寺沙門益信傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之六

〇四

釋益信。姓紀氏。備後州人。武內大臣之後裔。行教和尚之族弟也。少入南都大安寺。削染納戒初學。法相於元興寺。明詮僧都後稟密灌。於東寺源仁。仁和二年任傳法阿闍梨位。寬平二年爲東寺長者。六年甲寅同法務。宇多天皇深崇佛乘。踐祚初。曆建仁和寺。昌泰二年召信。祝髮受戒法。諱空理。三年庚申擢爲僧正。延喜元年法皇就信于東寺。稟傳法灌頂。管御室於仁和寺。側精修禪宴。初尚侍藤淑子有疾。請信持念所。慳立愈。尚侍大悅。捨洛東椿峰爲伽藍界。視日圓城寺。延信住持。六年丙寅三月七日順世。於所



住春秋八十

贊曰寬平法皇自從駐仙驛於仁和至今利利種姓相續住持殿堂門廡亦究輪奐其基業者緣信公之爲帝師也矣

城州醍醐寺沙門聖寶傳

釋聖寶讚州人

或曰和州

嗟峨帝之後也天長九年誕年

十六投真雅僧正剃髮得度初就元興寺願曉圓宗二師受學三論次受唯識於東大寺平仁華嚴於同寺玄榮後就真雅真然傳受密教元慶八年稟傳法灌頂於南池院源仁僧都顯密二教靡不該貫膺興

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇五

一福寺維摩會講師於三論宗始止賢聖義及二空比量義理論明辨性氣強大不畏邪魅初東大寺東坊有鬼燒入衆懼不敢居寶讀而住鬼出爭拒寶不驚屈鬼移他所從爾無祟一夕讀書燈下梁上有巨蛇

寶見叱之蛇即滅庭上有響石相傳寶從金峰山負來常好修練名山靈區經歷殆遍金峰嶺徑役君之後榛塞無路寶持斧而開從此苦行者相尋往來貞觀季開醍醐寺演顯密二教又建南都之東南院講三論示寶有福嚴造末六佛二十餘尊東寺食堂安金色千手觀音及四天王像開眼之日設大會齋供

養衆僧宇多法皇臨幸道場被修諷誦又勤悲濟置

衛役於金峯山設渡舟於吉野河行人賴之仁和三年敕賜傳法阿闍梨位寬平二年補真觀寺座主且延喜初曆任僧官官給月俸二年六月災旱奉敕修孔雀經法甘雨降灑賞任僧正六年丙寅補東寺長者九年己巳賜醍醐爲官寺夏四月寢病於普明寺陽成宇多兩上皇幸寺問疾七月六日遷化壽七十八其管攝處東西二寺醍醐東大興福等也寶神遊無方朝出醍醐詣吉野藏王堂至東大寺卻回醍醐值午時齋云寶有所持如意背刻五獅子面雕三鈴

日本書紀

本朝高僧傳卷之八

〇六

杵表顯密並學也滅後歷傳在東大之東南院興福之維摩講師必拈此如意以應演唱兩寺有事則不出之若無如意則厝講會於是朝廷宣東大寺出之以修法事其祕重如此

贊曰寶公繼瑜伽之祕神通妙用不可思議者也如旃聖財饒富法孫振振夫所持之如意表兼性相密者恆其實矣不以爲驕焉

江州延曆寺沙門長意傳

釋長意姓紀氏泉州大島人也自幼齡隨慈覺大師綜習顯密又依安慧座主受灌頂二十歲拜請圓澄

真金薩大戒，奉受傳法密灌，於大師精氣脫白不染紅塵時，入貴號，露地和尚貞觀，初元大極殿，最勝經會列席，詰問玄辯，流出猶臺，奮風南北，會衆擊節而稱昌泰二年冬十月帝降，內宣任延曆寺座主，翼歲十月補內供奉十禪師，領轄睿山前後六歲，延喜六年七月三日順世，年七十一，臘四十七，明年四月敕贈僧正法印大和尚位。

和州東大寺沙門道義傳

釋道義，不詳姓牒，弱年聰慧，誓求出離，從道雄平仁二師受華嚴旨，兼傳真言十八，納戒博閱經論，細筆

日本書紀 本朝高僧傳卷之六

〇七

戒珠任傳燈大法師位，昌泰元年秋主東大寺，明年冬十二月宇多上皇就義受戒，延喜二年帝造東大中門，三天供養一千二百僧，義爲導師，寺務五年僧中大和賞賜僧官，是歲取減年六十六，臘四十八矣，延喜御宇兩都高僧多及史之闕，又今觀義公之居千餘衆之道首，則其於華嚴宗高識善根之人也歟。

和州東大寺沙門圓超傳

釋圓超，從海印寺良緒和尚稟華嚴頓教，又遊南都請益耆宿，究二論法相之玄致，居東大寺專弘雜華，聲馳畿內，敕任僧都，延喜聖帝十四年春命諸山碩

師錄記一家之章疏，於是天台之英玄日三論之傑安遠法相之後平祚律宗之彥榮穩等各遵敕錄呈爲超記華嚴宗疏鈔及因明日錄并作序以進，於關日竊以佛法之興也於此有由矣，西天之境釋迦能仁駕鹿苑而疏其源，東漢之朝孝明皇帝夢金人而尋其蹤，我國家奇異之像來演微玄之教，闡空機城島金剎宮御宇欽明天皇十二年佛法始傳矣，其後至于延喜十四年經三百五十二年其間所傳法藏盡數分教，竊派書寫經論意在公私，祇願章疏但任人心或秘不傳或散不寫，諸示章疏漸續塞白馬教

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇八

法無由釋焉，伏惟禪定皇帝五百佛前親受付囑，天下中權現王身崇重聖教遠越五天，紹隆顯密近倍振旦爰皇帝敕寫傳章疏使六宗碩學進咨宗之錄圓超荷陪華嚴之末學忝獻自宗及因明日錄伏憑後哲之正奏而已，甲戌之歲四月八日謹序帝尊覽傳稱焉。

江州睿山沙門玄昭傳

由性

釋玄昭，從慈覺大師羽皇學，金剛頂經及公且示章疏復就露地和尚重受三部祕法，習鍊諸軌住西塔院以顯密鳴仁，和四年會皇太后五十之生辰陽成上皇

請諸名德八十員講論諸宗妙旨以慶壽算昭與南  
京勢範對論因明義昭問鋒銳範答辯不通時醍醐  
座主聖寶歎曰世謂昭公爲護摩王今觀之亦可稱  
因明王宮中傳爲美談延喜十一年秋大內有驚怪  
赦昭就豐樂殿修熾盛光佛頂法至第三日其怪遂  
熄昭後住清涼院賜僧官十五年二月三日遺疾跣  
坐結跏趺印奄然而終壽七十有二又釋由性華山  
僧正遍昭仕朝時之子自幼上睿山學顯密寬平八  
年住洛北雲林院昌泰年中領藥師寺教授學侶任  
少僧都延喜十四年二月中旬以年七十四卒

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇九

### 紀州金剛峯寺沙門壽長傳

釋壽長不詳其姓氏自少登高野山師事真然僧正  
其性高恢足幹於事然公器重入灌頂壇授諸密印  
然公及哀老倦僧事之勤仁和四年奏朝廷以長任  
金剛峰寺座主此職以長爲始

### 紀州金剛峰寺沙門無空傳

釋無空諱有經論名聞當世後入然公室私淑密印  
壽長滅後嗣補座主時大師筆削三十帖小策祕在  
山中傳至於空本東寺寶藏之物也於是長者定賢  
僧正責要還之空不肯事將訟朝廷喜十六年秋八

月空抱小策遁伊賀州十八年戊寅六月二十六日  
卒於伊賀

贊曰長公之事他書不見然依本師之奏始任野山  
座主其智德之圓也可以見焉空公重乎小策而輕  
乎大任去彼取此其信法之強不可以撓焉

### 和州東大寺沙門延惟傳

釋延惟居興福寺學法相又就聖寶僧正受密法因  
以博涉爲衆所知已勤法華最勝二講會延喜七年  
任維摩會講師每臨主座靡不歷衆也九年四月領  
東大寺主務大開四門教誨學賓自傳燈法師位轉

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十

### 昇僧綱

### 和州東大寺沙門智鎧傳

釋智鎧或作鎧出洛陽內藏氏傳維摩於道雄僧都兼  
綜密教任傳燈大法師位延喜十年膺維摩會講師  
答釋出意表一衆稱賞壽曆法華最勝二會講主十  
二年春董東大寺住持七年猶如一日十八年八月  
八日寂歲六十八臘五十一

### 城州元慶寺沙門寂圓傳

釋寂圓不委其姓氏久在睿山學業純動隨華山寺  
僧正遍昭受兩部密灌住元慶寺敷演顯密元慶三

年秋登睿山問圓珍和尚曰若有上臘之僧隨下臘者稟學佛教已依有受授之分上臘之僧須居下位若然可違羯磨否願垂慈誨珍公曰吾在唐國時有少臘僧學才俊逸唐帝寵崇之使諸山衆僧就之問教仍詔曰自今以後天下上臘悉居下座又圓忠和尚長於五臺志遠法師自隔三十臘其受教後常居下座唐國憲法都盧如此若尚守臘居上位者豈異禽獸哉圓曰決平生疑拜揖而出

論曰甚哉世人之不據其本也夫以戒臘分僧籍者釋氏之綱要也梵網經曰若佛子應如法次第坐先

日本書紀

本朝高僧傳卷之八

〇十一

受戒者在則坐後受戒者在後坐金口明說之且多臘之僧受教少臘已貴師受之分而居上者所以思其恩義不擇尊卑也然在私坐爲之尚可公坐爲之則不可何者禮貌制規者真俗所共由也是以古之高僧皆遵律儀焉猶如百僚朝班雖有師友不讓位也然則唐帝之詔孔非也珍公之答亦非也圓之致疑問者不遍於學故也

城州醍醐寺沙門觀賢傳

釋觀賢讚州秦氏之子聖實行化過于讚岐親路傍水而洗手兒與同輩遊戲沙場謂賢曰其水不淨也

賢曰諸法豈有淨不淨哉兒曰既無淨不淨何洗手耶賢屈其機辯見兒顏貌有聰明相因乙父母攜歸鞠養賢時居敬若寺稍長讀書記起事研精密教兼究三論實平七年冬就賢受傳法灌頂新創敬若寺大演教乘屢應興福之維摩會講師盛名播南北昌泰三年董仁和寺延喜九年爲東寺長者十四年夏旱依救於神泉苑修孔雀經法第三日夜甘雨大降帝悅稱賞二十伴僧賜各度者一人是歲住石山寺十九年己卯任醍醐座主此職自賢始也二十一年帝夢空海和尚奏曰我本弊朽願受睿重故擇其門裔之

日本書紀

本朝高僧傳卷之八

〇十二

尤者送帝衣一襲於高野山賢中選入山廣啟廟門如隔雲霧不見真容賢拜額曰吾少修道梵行無瑕況承遺法多積年所乎殷勤精祈始見蟬蛻坐於那伽定中鬚髮甚長剃落夏衣皆淳祐侍後賢顧問曰汝見真容否祐曰不敢見賢慘祐手摸索定軀祐觸膝乃覺軟暖其後淳祐兩手香氣歷歲不盡云賢與山衆胥議曰我尚難見矧不如我者乎後世浮矯者恐致疑詢因墨石固封焉今茲十月賢上表於朝請弘法大師之號先是峯禪爲高野座主於是讓其職於賢東寺長者兼高野座主以賢爲始延長三年



春任僧正之職夏六月十一日湛然示寂年七十三  
初延喜二年賢與聖寶拜賀退朝時賢持寶師之本  
篋而出公卿感其信篤焉

和州興福寺沙門增利傳 延空

釋增利姓坂氏中納言家時之子紀州人也或曰姓  
伴氏城州人事興福寺載豐空操二師學法相年邁  
弱冠納戒東大寺貞觀未從大安寺真然僧正添指  
胎金祕奧然公謂曰真言教者諸佛祕藏也苟不得  
其人則不敢妄傳公勝其器當改本宗而偏歸真言  
也利曰顯密之法並幽玄也取捨之分凡庸何辨若

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

二十

有三寶之感則當定專門矣先是利於住房經藏胥  
分東西設顯密之座東則結壇爲密觀所西則架書  
爲學文所其夜有一異人來於房藏向東禮拜曰貴  
哉真言之道又向西合爪曰與哉顯教之理可共爲  
僧寶之綱範也寢而說夢然公爾之從此居興福寺  
熾說法相兼修密法延喜三年爲維摩會講師五年  
乙丑維摩講會太安寺僧觀算登三論大義辯詮河  
懸會衆杜口無敢問析利出衆曰某雖不敏鑽仰日  
久若有僧綱之讓試法戰一場僧綱許之利卽問難  
數番詞義壯博算屈不答看會救使記事上奏帝敕

爲諸宗精問證義者連年無酬對者翌歲任律師十  
一年辛未詔爲維摩會檢題此職自利始十六年丙  
子昇少僧都延長三年轉大僧都稍倦耄期退請西  
唐院六年戊子七月十三日如睡坐脫世齡九十有  
三 作七十二  
者誤也 法臘七十有二矣  
贊曰佛法大海淼茫無涯十方敬獻舟楫般若共到  
彼岸個中何分宗流之淺深哉但所喜者學人智慧  
之不圓也利公取之左右圓其淵源可謂遺囑之佛  
弟子也耶

城州醍醐寺沙門延儼傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十四

釋延儼姓長統氏京兆人也從聖寶僧正稟三論及  
三密又受灌頂法於宇多上皇顯密之學獨步當時  
一日侍寶入宮上皇奇其才欲授以綱位儼辭不受  
寶曰上皇恩寵何固辭儼曰歷三會講席始升綱位  
國之憲章也吾安敢濫忝恩私邪聞者感歎延喜十  
年奉敕爲維摩會講師酬義學之問由建瓶之水辯  
博善論衆無能禦之延長二年住東大寺翌歲六月  
爲東寺長者越月任醍醐座主五年六月上皇請南  
北碩德行崇德寺落慶供養敕儼爲導師增利爲咒  
願至開會之朝此雲覆寺黃昏之後天樂響空一會



衆僧垂淚發心見聞貴賤歎未曾有六年春任權少僧都兼管法務敝主東大前後四載帶經學賓常填門闥晚解職印歸休東南院七年庚寅二月十三日寂於住院壽六十八或曰七十三臘若干歲敝初承最勝會通在宮中壇所不歸易直赴場會其維摩會講始秉五獅子如意而坐爾來講師者持以爲式者自敝始焉

城州醍醐寺沙門延性傳自壽

釋延性不詳何許人延喜五年受灌頂法於聖寶開念覺寺弘真言教延長六年任醍醐寺座主七年十

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十五

月二十八日化歲七十二又同門有釋自壽延喜七年春從聖寶於太覺寺稟密灌觀賢爲教授初住東大寺後退居高野山不詳其終

城州勸修寺沙門濟高傳蓮舟

釋濟高不詳姓氏初從承俊慧宿二師學密教後依聖寶入灌頂壇且質密部延喜三年秋帝建勸修寺詔高爲落慶世養導師十年秋敕領勸修寺延長三年帝御筆法華經就寺慶讚賞任律師六年十二月司東寺長者承平五年任少僧都天慶四年轉大六年中冬二十五日化歲九十一高年德共邵主東太

貞觀高野等寺務嘗於野峯建三昧堂又同時有釋蓮舟姓良淵氏從慧宿受密教嗣聖寶傳灌頂初住南都藥師寺後爲北京貞觀寺座主承平三年春加東寺三長者任僧都

紀州高野山沙門峯宿傳

釋峯宿不詳何許人又其師承及史之闕延長四年東寺長者濟高僧正兼金剛峯寺座主奏朝日南紀北京隔數百里是以難辨山中之事伏冀將撰偉崇置執行職朝議制可時宿有智行名衆議舉宿任之此高野執行職之始也宿之滅後諸若秋講師定觀

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十六

以補此職又闕其行狀

和州元興寺沙門如無傳

釋如無中納言藤山蔭之子爲兒時父任西州考滿舉家駕船歸洛兒偶在船遊戲墮水忽有神龜負兒而出楫師抱舉及長聰明絕倫父母相攜往元興寺投明詮僧正語其因緣卽爲削染名曰如無學業辛勤法相識智望其玄龜已三會講延喜十六年任少僧都承平元年轉大延長六年司法務公卿之子預僧綱者遍昭之後以無爲始天慶元年八月十日寂春秋七十二

贊曰如無僧都之事靈於后稷兒時寘之隘巷牛羊  
舐字焉蓋爲萬人之傑者有自然之感應妙而神祥  
先見焉非凡庸之所容擬也遂通五三二一之致統  
鼎重仕其始終合符也異焉哉

### 城州醍醐寺沙門壹定傳

釋壹定不詳氏族少從聖寶僧正傳習密教兼受二  
論後承嗣和州般若寺觀賢住東大寺唐院專弘顯  
密天慶七年秋七月補醍醐寺座主皆貞宗僧都膺  
維摩會講師雖病而寂推定而代博辯驚衆八年正  
月禁中御修法泰舜僧都俄病不能救定行之己講

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十七

之人未歷僧綱入內道場以爲初例是歲任權律師  
天曆元年二月九日終於所住年六十三

### 和州興福寺沙門仁敦傳

釋仁敦不詳姓譜初師如無僧都後嗣宗圓和尚天  
性敏發究法相日兼涉台密望重社中延長五年講  
主維摩會辯闡從容不遑來問承平元年任律師四  
年甲午蒙太會探題之宣天慶元年敕司法務三年  
庚子任權少僧都大曆二年轉大僧都法務已後任  
此二職數爲初例敦寵家一朝名馳千由明年六月  
二十二日微疾而化壽七十五敦常居城西世人稱

嵯峨僧都受其法者一乘院定昭太僧都一人

### 和州興福寺沙門空晴傳

釋空晴藤隆光之子初就延賓已講習串法相後從  
基繼僧都益究玄致承平二年坐維摩會講席酬學  
者問如輪鋒轉無處不摧任少僧都住喜多院闡經  
講論無有虛譽兼修密觀聲光四輝天曆三年主興  
福寺住職九年四衆欽恐天德元年臘月九日登庭  
前石冲天而去春秋八十其石於今在寺門池出四  
神足松室仲算喜多院真喜興福寺守朝東大寺平  
忍共法中之龍象也

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十八

贊曰見神足之高才而思晴公之懿德宛如目瞻之  
宜哉相徒欽之不休也至邈然騰去者不知性得乎  
修得乎身如意乎

### 和州興福寺沙門平源傳

釋平源勢州人受業於金勝寺願安體裁唯識懷抱  
本又延長元年坐維摩會義辯縱達承平元年住興  
福寺任大僧都又創新院爲第一祖學侶憧憧天曆  
二年五月二日謝世壽八十有九出弟子安秀傳在  
後卷

### 京兆圓城寺沙門眞寂傳

釋道寂者宇多帝子初諱齊世賦性睿敏讀書即記常厭紛華欣求勤息延喜三年授金剛覺空理之室落飾納戒時年十六如說修行二十三拜空理受胎金兩部灌頂法博覽諸部尤精密教益信滅後住圓城寺衆人愛敬稱圓城王子寂梵學之外雅述惟多世傳曰真如何闍梨之再身也解慧相類名字亦似而已

江州石山寺沙門淳祐傳

釋淳祐山城州人右中辨菅原淳茂之子菅丞相之孫也早就家塾學東魯書風雅可見焉俄捨儒冠所

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇十九

求佛乘師服若寺觀賢僧止剃髮納戒影附久之資灌頂部遂就賢公稟胎金太法資性多病肥遯石山居普賢院專事密觀南北學賓歸仰其德東大寺法藏受祐密灌太曆七年七月二日終於住院春秋六十四

贊曰祐公出于北野神轉金剛輪運載多方世人之貴種姓也良有由哉

和州樂師寺沙門延義傳

釋延義不詳師承居樂師寺常弘三論博涉優才每臨論席口海瀾翻一日天池院開講論延七大寺會

義爲講師出七寺僧皆學於義故座下無詰義者俄一老翁鬚髮皓然出衆立三番論義詞辯微妙一衆異之義一一答析翁曰三種論義一答已成一答未決一答不成然初果之位頗爲佳耳會衆不知其來所甚訝之翁曰我文殊也言訖不見

江州睿山沙門禪喜傳

釋禪喜世姓藤氏平安城人幼時夢睿山頂有佛舉手招之七歲從父登日嶺至中堂見藥師佛像儼如所夢喜獨感悟十六上山拜座主尊意祝髮出家隨例一紀安居習學執性聰敏繙繹諸經尊意神足有

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇二十

二百餘人以喜爲上首爲延長年中已三會講朝廷賞其優才授以僧都晚極樂寺內別構竹林院爲終焉所天曆九年六月九日令門人唱彌陀寶號喜自念佛奄然坐脫春秋八十有二喜齒及懸車自寫法華其同案時著新淨衣禮拜佛像而後下筆上從王公下至庶士感其誠心當殿講席一千餘座又天生孝純其母亡後雕自像安室中飯蔬茶果先獻其上分而後食終身不怠云

贊曰有孝乎親者必明乎道者也喜公庄則啟三千會講席死則期十萬里樂邦是皆成於孝順之心者

也豈獨稱儒門之曾子乎哉

京兆東寺沙門延鑒傳

釋延鑒姓秦氏山城州人慕真言教從蓮舟僧都受傳法灌頂博達密部官任律師天曆四年司東寺長者是秋九月爲衆修灌頂法九年乙卯敕董和之元興寺居三年移北京貞觀寺轉教令輪天德二年任少僧都應和元年敕大僧都康保二年三月二十七日卒壽七十五

和州元興寺沙門義昭傳

釋義昭出於平安城藤氏華族自幼俊發及諸師

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇三

綜研性相特優論義居元興寺皇張法相承平四年睿山良源奉敕差坐興福寺維摩會講席南衆批評選昭對論時年未滿弱冠源曰我德臘共邁於昭源豈對我乎豈仁教僧都承檢題宜望高當世謂源曰昭雖少相宗俊才何必擇年乎推爲儒講及致問難如映倒川奔源亦言泉如涌相問相酬綽有餘裕一會大衆稱如良將操戈遞不蒙創矣天曆八年臘月初五源招昭睿山修法華八講留山四日大振義辯右丞相師輔藤公登山聽講其爲名師所賞如此有檀越設八講會於藥師寺請都內名德繼次開講至

昭說法有衣冠異人臨席聽已作禮而去每講如斯昭令門人窺異人歸所見過東山數里而入淡溪水蓋神龍崇昭之講經也從此道望彌顯於世安和二年正月三日俄然最化住世五十此傳與釋書自爲表裏矣後學者二師之生且與滅日而見之知有其差焉

贊曰天曆應和之間相台爲蠻觸矣源師之坐乎南會也如過虎豹落焉昭公之值于北講也似入荆棘林矣苟不有智雄爭得出透而通旌名茲事而歸乎哉可知二師之才德不常耳而非源師不招之非昭

日本書紀 本朝高僧傳卷之八

〇三

公不行又知古人於法無私也孟子曰自反而論雖千萬人吾往矣蓋二師之謂與

本朝高僧傳卷第八

音訓

簪戈灼切 轄胡八切 歷乙甲切 蟪上呈延切 摻所

斬切 傲直刀切 敷胡孝切 寘支嚴切 館下烏員切 諸延切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷八 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本撰述 本朝高僧傳卷之八

○主



本朝高僧傳卷第九

濃州盛德沙門 師變 撰

淨慧二之六

和州東大寺沙門法藏傳

釋法藏世姓藤氏山城州人稟唯識於寬救學三藏於延徹傳密灌於定助匪資性俊敏且勉綜研經論天德四年膺維摩會講師應和宮會與磨山覺慶良源論口相異義事在良源傳康保二年壬東大寺住持四年退居西室誦經修觀以送寒暑一日黃昏經行殿陛忽見一天使持玉簡來曰切利天帝請師慶

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

〇十

讀紺琉璃觀世音像藏曰嘗聞喜見城者在須彌頂隔七金山我未得通安能得到使曰師但閉目附我肩即得到耳藏如其言須臾到切利天藏見喜見城四王天子眷屬若干行伍羅列宮殿樓觀異寶嚴飾不遑名自中安琉璃像天帝請接殷勤藏乃登座揮塵讚演詳精天眾欽聞講訖天帝命僑支迦觀天金珠珍天使又如前而歸東大寺藏又定中忽感冥使到闕王宮陞座說法王及眷屬踴躍歡喜珍寶寔瓊亦如天帝藏曰金玉隨施非吾所願我母謝世願久不知受生何處願得見知王檢罪簿在焦熱地獄乃

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

〇十一

付冥使引藏至獄所及啟鐵柵猛火迸出不可嚮避獄卒以鐵鉗輓鐵甲挑出一物狀如炭頭置藏前曰是師母也藏肝腸痛裂不敢正視乃問母曰生年作何罪受此劇苦母曰皆為生育子息多癡愛耳藏曰修何行業可以濟拔母曰冥中資糧無過法華經願子為我書之獄卒曰獄中無閑時今已移時又捉母投鐵中藏倒地悶絕冥使曰師早歸闍浮修拔罪方藏回招承一日頓為其夜夢母報曰我待經王力已脫苦輪生切利天也藏又讀最勝王經青衣異人每座來聽眾人怪之或時見惡道傍忽變作蛇蓋龍性眠即為蛇會天下旱藏謂異人曰願汝降雨曰為蒙法味欽受命然有罪業師垂救護其證雨時而見焉言訖昇天須臾大雨雜血而下藏因修其福安和元年什少僧都二年正月三日寂享年六十五坐臘四十二平日著述有般若經玄文十卷般若理趣分私記三卷岐陽秀公曰法藏赴闍王宮切利天兩請而海藏師併為一事今傳據秀公贊曰唐大莊嚴寺沙門慧因安居定中忽感幽使至闍王宮七日說般若經闍王隨喜施絹二束且視地獄眾相五苦次第而還宜律師曰非大慈該幽顯行

極感通豈能赴冥所神遊異域邪藏公慶讀帝釋殿  
說法闡王官二所聽敬非因之曠矣加之逢此世脫  
苦輪而生天沙門能事無盛之者也閱僧傳者苟有  
宣師之意則藏之聲價尚十倍於世者邪

和州興福寺沙門仲算傳

釋仲算不知何許人空晴僧都一日過興福寺北門  
適逢小兒頭髮孔赤目光射入睛見其髮宇不凡問  
所從來兒曰我但遊戲耳何所從來耶爾益異之攜  
歸寺武教經論聽悟絕倫漸長博綜內外典籍尤精  
論義南京學徒推之爲翹楚性素不喜僧官每有選

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

三

讓他人三奉維摩講詔皆辭不受常居松室而學賓  
猶敲柴扉申疑取決應和二年村上帝御筆法華經  
秋八月召南北碩匠於清涼殿賜齋慶讚五日十座  
講論法義於是相台交鋒法戰爭軋至第二日良源  
爲講師法藏平州爲問者二人詞屈時民部卿藤文  
範陪於官席默祈謂春日明神藤氏之廟也而今南  
衆旌摩是神之惠也曷得英才揚廻日又神天相之  
侵夜南行逢算於神祠側扑躍告事算聞而咬牙伴  
蘇公入宮膺詔筵之日磨山壽聖聖枝爲講師南京  
仁賀圓慈爲問者算乃代二人舉良源前所出衆生

皆成佛之文一一難詰其機辯之峻如湫傾欲倒講  
師難立言衆僧百條注目盡耳講進事竣帝召算便  
殿賜恩優賞尋以法相爲小宗長官安和二年算與  
喜多院林懷登熊野山算於那智瀑下誦般若心經  
瀑水逆上忽現千手大悲像懷令八拜瞻誦已升巖  
上于此不見或曰入慈恩寺山而後不出但遺脚鞋  
云所著作有法華音釋三卷法華略頌陀羅尼集各  
一卷

贊曰余讀算公之傳一生之舉止契丈夫之機其在  
卿菴則將與麋鹿共終焉一登金闕則亦與驪龍爭  
珠矣凡學佛者誰不欽慕乎其那智巖上同師之應  
者蓋共觀音薩埵之應化與邪

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

四

城州醍醐寺沙門觀理傳

釋觀理姓平氏南京人早喪父家亦貧理幼向佛前  
祈養母藤丞相忠平聞其敏利召侍左右愛鍾日撫  
母受其賜春日明神惜其在纏崇於藤公因授興福  
寺剃髮受戒理學法相悉達具致後隨延儼稟三論  
兼傳密教其慧解之優當時無爭衡者天曆六年有  
敕坐維摩會主席衆皆伏其賢義天德四年任權律  
師爲醍醐寺座主應和二年秋八月帝召南北法匠

於清涼殿論決宗義理講無量義經時延曆寺餘慶對偶問難理辯釋無礙繼白傾聽康保二年任少僧都安和元年轉大僧都明平二月住持東大居之二年移東南院大延二年三月某日寂於所住春秋八十一著作唯識章十五卷四種相違制三卷又有三論方言義諸經論指事文集若干卷

### 和州傳法院沙門義光傳

釋義光從興福寺基繼僧都究唯識論安和年中爲維摩會議師暨釋入微任少僧都住傳法院弘相宗後開西院爲第十世天元元年八月五日化年七十

日本書紀

本朝高僧傳卷之九

○五

一弟子三人傳法院日觀新院長保傳法院安潤共遂維摩會議師傳在後

### 和州東大寺沙門光智傳

釋光智世姓平氏山城州人從東大寺良緒學華嚴緒者維摩之英俊也智志氣恢廓研學無倦請益歲久達重重法界天曆四年有旨住東大寺應和元年任少僧都三年七月畿內大旱救智祈雨不日而驗安和元年轉大僧都智重東大前後四回計十五年國造尊實南北義學帶經輻至天元二年三月十日順世春秋八十六智雖涉諸宗獨以華嚴爲己任不

曆初年建尊勝院莊田數畝以納香積奏爲大經弘通本處主者擇德爲華嚴宗之貫首焉爾來綿綿不乏其人全此智公之助也得其法者尊勝松橋尊勝賴算東大觀具廣澤寬朝皆一時英也

### 京兆東寺沙門寬靜傳

釋寬靜平安城人姓文屋氏或曰嵯峨天皇七世孫肥後刺史源淳子幼入桑門英氣邁入從寬平法皇學密教就寬空僧正受灌頂天祿二年加任東寺二長者安和元年任權少僧都天延二年春補高野座主尋敘權大僧都貞元二年冬具大僧正兼法務常

日本書紀

本朝高僧傳卷之九

○六

居仁和西寺天元二年十月十一日寂年七十九

### 和州興福寺沙門壹和傳

釋壹和不知何許人承法相於增利僧都早馳才譽與元興寺延祥齊名祥少自和天曆二年春數祥爲維摩會議師和不同意忽捨所業往尾州熱田就神祠側與乞丐雜居有一神巫言人之禍福吉凶無不中一日巫施米衆丐獨不與和曰此沙門者本國之神猶能管顧非吾所庇也時有風馬沛艾嚙蹠人不取近和試向之其馬弭耳而止衆人驚異巫又謂和曰有春日神宣我未嘗棄卿卿何自棄天帝玉簡具

記維摩講師延祥在前而壹和在後大眷其捨諸於是幡然歸於南都大曆四年果奉講師教差初住東院移東北院敷化儀於府內有神足二人東北院平傳藥師寺增祐也傳者永祿元年坐維摩會講席祐者寬弘七年已三會講

和州興福寺沙門守朝傳

釋守朝不詳姓氏賀州山田郡人也給仕空晴僧都研習性相經疏以博識被稱於衆中連年有詔歷三會講住興福寺爲後學講法相撰述尤多有中邊論私記九卷觀音經玄贊二卷

唐書卷一百一十五

〇七

和州興福寺沙門千到傳

釋千到隨興福寺延空討究唯識涉大小乘義辯冠世應和官會睿山禪悅講法華經到爲問者對論數遍如兩刃相破天延元年膺維摩會講主能酬衆問住興福後居南成壇

和州東大寺沙門法緣傳

釋法緣出洛陽的氏稟三論於觀理僧正納成以後嚴七寺門講習之審諸師推稱安和二牛應維摩會暨義天祿二年司東大寺主務七年風義可觀任權律師補醍醐寺座主公卿通問檀闍大瞻天元三年

十月某日逝壽七十

攝州金龍寺沙門千觀傳

釋千觀姓橘氏相州刺史敏貞之子父母初無子禱於千手觀音像而生因以爲名弱齡入圓城寺雖爨受業及其爲人攻苦勵精除食時外不離案牘博涉空有錯綜口密其性慈順面無瞋色常修淨業作彌陀和讚二十餘行華夷貴賤崇爲口號結樂國緣者往往多矣夢有人謂觀曰信心惟淡豈隔極樂上品蓮乎善根無量定期彌勒內院曉矣應和二牛夏旱朝議救觀祈雨皆觀在攝之箕面山撰百他相對釋

唐書卷一百一十五

〇八

文中使到基後三里有一飛瀑上有大樹樹觀到瀑所手摩香爐樹上持誦須臾爐烟上騰散滿山谷黑雲俄覆大雨遍澍觀井中使露衣而歸初觀在國城慮其西峯高掩不便日觀仍尋勝地抵攝州安滿縣有山出金色雲惟知雲區誅茅而居里民懷德遂構精藍前池有龍因名金龍寺顯密學侶屢來詢法觀多作疏鈔著口宗旨三井暨義學者以爲證焉常以八誓誡徒衆以十願導羣生永觀元年臘月某日手握願文口唱寶號怡然蟬蛻壽六十六權中納言藤敦忠之女隨觀受淨教夢觀乘蓮華般唱自作彌陀



讀亭亭西行觀內供奉時自朝而歸會遇沙門空也於四條河上下車立談因問如何得扶來果也曰是即尊公可知下凡沙彌安得知邪欲急走過觀其袖殷勤請問也曰當先捨身而後修之拂袖而去觀從此脫帛衣著羅服深入箕山永絕名利或時出淀河邊自作馬夫惠往來人其淡於道義為如斯也贊曰多才博識渡真如海之船筏也然層比丘卻以增慢取墮惡趣譬如鎧鎗劍為珍而庸天用之則犯鋒傷手也觀公途逢也頭陀問成果之基為執鞭之士能用之濟利者也吁像季以來若人難得矣哉

日本書紀

本朝高僧傳卷之九

〇九

### 江州延曆寺沙門良源傳

釋良源姓木津氏江州淺井縣人母物部氏禱佛求子夢日光入懷即妊延喜十二年九月三日生九歲出遊田野瑞雲浮空覆其頂皆國老越中司馬出雲貞則巡祭田畯見而異之謂其父曰此兒非凡器善保育焉後隨母詣梵釋寺覺開梨曰此子豈可居家耶十二登睿山師事理仙大德敏給磨發學反三隅十七就仙剪髮及仙謝世拜尊意和尚登壇受戒往元慶寺從覺慧法師入灌頂壇又周旋於喜慶相應雲晴之門詢究顯密得俊傑名承平五年應詔坐興

福寺維摩會與義昭對論兩眾稱歎事在昭傳八年戊戌丞相師輔藤公建法華三昧堂於睿山自擊石火點定燈曰願因三昧力光榮家門即延源而居爾來藤兼增昌應和三年秋八月帝召南北名衲二十員開法華講於清涼殿第二日夕坐南京法藏為講師睿山覺慶為問者藏立定性二乘不成佛之義詞鋒其銳慶擬議源見其屈咤齒而出代慶舉衆生皆成佛之旨往覆決擇藏曰更深且止明朝當決其理窟翌朝對論辭義如流君臣前座藏鉗口無對源曰昨有扶窟之言今何不爾藏曰子之才辯不減富樓

日本書紀

本朝高僧傳卷之九

〇十

那五僧所能儀那康保元年奉詔入內為國修法舉內供奉十禪師三年秋八月補延曆寺座主天祿二年四月十五日於楞嚴院始修布薩源為導師誦梵網戒品光出於口天延元年任大僧都貞元二年轉僧正源領山門殆二十年殿堂樓閣皆復舊觀天元三年源供養根本中堂請興福寺定昭大僧都為導師屈請遍昭寺寬朝僧正為咒願又於楞嚴院勅二精舍號慧心院敕為御願寺四年八月帝不豫醫方無效乃源加持玉體平復賜菩提子念珠綾帛法服砂金二百兩度者二人敕許入宮中坐轎車無何帝



又不豫源人內加持御惱如拭卽救加轉太僧正永觀二年冬罹風痺退居東坂弘法寺明年正月三日合掌向西曰我所修善根悉資菩提回向衆生唱彌陀號奄然入滅保齡七十有四坐臘五十有八肯紫雲下覆庭樹良久乃滅藤丞相常歸崇三沙門義昭法藏及源也共正月三日寂焉藤公夢三僧乃三光天子也世評曰共是權人乘願來此界也神足明普天元初俄从夏蘇語曰我問冥官修何法當生淨刹官曰汝師良源僧正權化人信情奉任必得往生源信問曰和尚自謂列初隨位人皆信之我想和尚定

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

○七

五品位源曰五品位者智者大師之位豈同乃祖哉信曰初四品如何源曰何非初隨喜乎源道貌雄威自臨鏡寫照容曰我像設所在必避魔魅從此道俗靡卽四方競世至今人屋戶扉黏貼殆遍其標述有九品往生義私記指要記決疑集止觀微旨等寬和三年二月十六日賜追曰慈悲藤亞相齊信撰行道記焉

贊曰慈悲乘菩薩之願續傳教七世之統而出十六開士匡三千衆徒道愜君臣締構大成至今七百餘歲人民崇之猶佛世尊久矣哉遺風餘烈之不衰也

大元之間有兩門之爭亂者時運之所繫非道義之害也

### 和州興福寺沙門安秀傳

釋安秀濃州人承唯識宗於興福寺平源僧都綜研三藏馳名社中天德二年應維摩講師事任新院請益之賓常盈函丈應和二年選侍宮講睿山賀秀爲問者問難數慶秀能解鈎鎖天祿二年補興福寺主務任少僧都矣

### 和州東大寺沙門湛昭傳

釋湛昭姓菅氏山城州人受法相於實監僧都早馳

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

○七

義論之名應和二年以講師坐宮會摩山崇壽爲問者言論相責昭酬答明斷一座衆僧及百僚皆稱賞康保三年奉敕爲維摩會講首大元四年任少僧都貞元三年領東大寺主務歷五寒暑衆欽高儀初吉祥院爲終焉所寬和三年寂世人以其德臘共邵呼吉祥院僧都

贊曰應和宗論天下傳而言之今讀諸師行帖良源屈平州法藏而仲算伏壽肇聖教南北共齊得失而相台難極輟焉矣夫講習討論者雖學士之一端而遂使人我自隔纓觸爰時焉四河有淺深而大海素

無邊際也學者只要把握注之若徒弄沙而已則非佛之本意也

### 和州興福寺沙門真喜傳

釋真喜世姓平氏勢州多氣郡人也風標英逸識鑒瑩然稟法相於空晴僧都已通大義應和之官講爲第四座問者與國城寺智興對論示義若臣優其機辯天延三年爲維摩會講王居喜多院說慈恩教永祿元年春三月帝幸於春日神祠喜嘗在權大僧都尋兼法務正曆初太本相藤道隆建積善寺招諸山衆僧伸落慶供養請喜爲導師帝幸於寺見其法

日本書紀卷之九

〇七

儀敕爲權僧正是歲主興福寺法務如故五年轉正長保二年二月七日順世壽六十九喜初詣熊野神祠見那智瀑布將歸俄脚痛不能行入房即瘡將發亦痛諸優婆塞曰恐是神靈欲留師說法也師盡獻法味耶喜乃到瀑下說般若心經私自念謂神果歆法當復現靈持念畢瀑水忽逆流諸優婆塞歎未曾有合爪瞻禮

贊曰異也哉兄弟同感飛瀑逆流其德之通乎靈神也靈可知焉今時攀二山而誦心經者爲不鮮矣其不得真喜之神感者何哉

### 和州興福寺沙門主恩傳

釋主恩不詳姓氏和州十市人也稟法相於興福寺真喜僧正寬和元年任維摩會講師以義學鳴當代出齊山有寬印者自負智才不屑南北學徒嘗言天下惟有主恩當我顧瞻矣恩嘗忤朝且譏筑之博多印亦寬東州印嘆曰恩貶西海印在東關日本佛法已爲四字恩不廢放還是興福寺又弘法相永延三年六月十一日遺病而化壽五十七

### 江州石山寺沙門元果傳

釋元果京兆人太樂令藤原少子自幼就醍醐寺

日本書紀卷之九

〇八

元方太僧都剃髮得度及受灌頂法辭任兩都學二論於壹定明珍一師兼聽密教資性俊利明大小乘屢應南圓堂宣義衆皆稱其學智後果具支灌頂於蓮臺寬空僧正受密印於石山淳祐僧都有詔爲內供奉膺受寵眷常侍東宮果厭華美辭任石山專修家法靈感日進天祿三年夏旱奉敕修法於神泉苑愆期無應果作茅龍投池加持其龍漸搖須臾昇天迅雷擊天暴雨溢地君臣感感庶士讚嘆天元五年夏旱詔果修法神泉苑第五日雨任權少僧都永觀元年爲東寺長者整歲領洋務秋八月轉大僧都寬

和元年季夏又修請雨經法甘雨應期帝心有悅伴僧各各賜僕一人任果以僧正果辭而不受奏先師元方賜追寵即贈大僧都人以為知禮云永延二年和延命院辭職退居長德元年二月十七日示寂壽齡八十有五

贊曰延命師遊元方寬空之門得大法於淳祐師如入羣玉府擇於驪珠焉錄此智德聲光燦于古今然祐果二師漏先史之網者為可惜焉而已

江州延曆寺沙門暹賢傳

釋暹賢姓藤氏其父母家於江州志賀縣賢幼穉時

日本書紀卷之九

○其

與弟聖救見羣童舞樂於山王神壇普大峰飛來停兄弟之頭傍人以扇拂之神巫託宣曰其拂其拂降者山王之使令而此二兒佗日登山可成大法之祥也父母信神巫之言遂使二兒投座主慈惠之室更娶納成暨歷一紀博究顯密名敷童下初本覺院普誘來學正曆元年敕任延曆寺座主年已七十八管領八載解印歸院長德三年八月朔日寂於舊院春秋八十有五

和州大安寺沙門令晨傳

釋令晨高橋氏京兆人入大安寺學唯識宗兼涉華嚴

嚴三論又從石山元果僧正受祕密灌頂延喜二十一年應維摩會講師慧解之名雷同南北僧階歷任昇正僧都住大安寺誘引後進以天慶五年八月某日化壽八十七

和州多武峯沙門增賀傳

釋增賀京兆人父諫議大夫橘恒平母某氏夢吞橘子而妊延喜十七年生有數月二親赴東州令乳母抱一朝早發馬上倦睡遺兒於路漸經數里驚覺無奈父母慟哭曰今此驛路車馬雜遝豈得保生耶寧雖死散我思見之疾至其處見兒仰臥含笑其夜母

日本書紀卷之九

○其

夢所遺處有太衣寶座兒臥其上四天童合掌曰佛口所生子我等加衛護四歲告親請上睿山學一乘法更無餘語父母益訝又夢兒現比丘相手把梵夾傍有羅漢僧曰真驚怪何因深厚當作僧十歲二親思昔因緣送就睿山慈惠和尚其性聰穎誦記絕傳冰服襪袍名喧三塔一日省母母曰使汝入桑門惟願如說修行而好衣襲身僮僕從後如是送日父母共為地獄滓何觀省之有耶賀慙感歸山乃詣根本中堂祈發心堅固每夜千拜三年無怠遂結顯密精明三觀常慈名利放蕩不羈慈惠謂曰我知汝志操

然必須外正威儀而內捨名利也。賀曰：我先離名利後，當遵師訓高叫走出。從茲雲遊，諸方居處無定。冷泉上皇敕爲內供奉，佯狂而去。藤皇后詮子將召宮受戒，賀於殿南檻揭裳放屁，問諸宮女曰：誰人以增賀難姦毒之輩，啟達后闕？平睨視左右，而出一檀越造佛像，請賀慶讚。已就座，曰：五今說法是涉名聞也。大罵檀主拂袖而出。眷山內論義畢，衆以供膳，棄庭乞丐，競集拾之。賀忽下庭，與乞丐並坐而啖，衆皆嘲曰：增賀狂也。賀曰：我不狂，諸仁者卻狂也。慈慧拜，僧正入內謝恩，儀衛甚盛，都人聚觀，賀帶乾魚爲劍，乘

曾本集

本朝高僧傳卷之九

〇十七

瘦犍牛交前驅之列，諸徒叱而去之。賀厲聲曰：僧正之前驅捨我其誰？歟！聽者笑而伏賀臥病，慶祚來訪，三說圓旨，賀聞已病愈，其移善也可知焉。天曆三年夢一阿闍若山川明媚，梵僧衆多有，一老翁首戴青冠，身披赤裘，左手持經，右手扶杖，天童神女侍立其傍。賀問翁是何人，耶對曰：吾昆耶城居士也。住此已千餘歲，住此者多得佛智，汝遠居乎覺後不知何處，應和三年如覺法師勸上談峯山川風光宛如所夢，賀忻然駐錫住山，沙門千滿平仙執弟子禮，新建精藍，請延住持，賀乃每歲四序三七日中修法華三昧。

日本書紀

本朝高僧傳卷之九

〇十八

夢南嶽天台諸祖師摩頂，曰：善哉！佛子能勤修行，釋迦普賢加護攝取，康保元年講止觀經，年談文句，天延二年十月既望，改維摩會爲法華會，暨義問者共備永爲法式，寬和元年撰玄義鈔，學者珍玩焉。賀修不動法，惡鬼來現，三面八臂，甚可怖畏，賀乃作不動形，本尊亦現，大身威焰共熾，惡鬼即隱。本尊及賀共復本形，嘗誦法華，感觀音普賢摩頂，長保五年六月集徒，曰：西方佳期，今其不遠，即設講筵，演說深旨，令弟子等念佛起入靜室，趺坐繩牀，結金剛印，安然示寂，壽八十有七天，樂樂天紫雲覆室，遠近道俗哀歎。

終於山中。

賀曰：名利纏者人之大患也。賀公早惡而捨諸金積。



道心帶芥世事寄跡佯狂而要入之不用也及其住山四十年間理行相應且夫談空之地定慧創基善珠寶性諸師或唱法相或弘三論暨實之居始爲天台教寺繇是言之匪啻斐然成章亦能知所以裁之矣

### 江州睿山沙門聖教傳

釋聖教暹賀僧正之族弟也隨侍慈慧討習公教居睿山西塔院不墜家聲應和官舍爲夕座講師與南京仲算匹對論詰言鋒交攻官任太僧都

### 播州八德山沙門寂心傳

釋寂心賀茂忠行第二子也俗名保胤家世以天文曆數之學仕朝至胤改業觀藝場屋師管文時才藻絕倫天曆季試賦獨登高科任近江掾後司記兼雖居官署歸心淨刹寬和年中及嗣子已冠婚遂解簪纓祝髮出家登睿嶺之橫川聽止觀於增賀學淨業於源信與性空覺運安慧講習研究爾後遊歷四方佛事爲務其性慈力愛及禽獸雖乘肥牛壯馬只哀愍不加鞭焉晚到播州相八德山結宇而居山棲淡薄自心歲月淨侶泉止同社修業書寫山性空齋書贈金心喜其遠惠報之以水精念珠錦繡勝幡先是

丞相道長藤公就心受戒聞其住院遣使送寄法器數件長德三年終於洛東如意輪寺其夜或入夢心告曰吾爲利衆生來自淨刹假在娑婆今歸本土矣藤公聞心之喪賻布百端以施寺僧薦七七忌令江匡衡作諷誦又以祭之心在俗之時撰日本往生傳一卷出家之後又得往生人五六輩啟中書王兼明加入傳中兼明夢神人告曰傳中當載聖德太子行基菩薩筆削未成中書王薨心仍補入繫之卷首今行於世矣觀心生前外後實應化之人也

贊曰心公家世司曆棄游儒林及入緇門以文翰大

弘佛事使人勸善懲惡而歸向淨刹故其言曰見此記者其生疑惑願我與一切衆生往生淨刹國不結宿因焉能至此聖域耶嗚呼較徒弄筆墨排斤具教之所作自隔天淵而已矣

### 江州睿山沙門實因傳

釋實因相州刺史橘敏貞之子敏達天皇二十二世之孫也蚤出官掖仰崇佛門禮睿山弘延大德爲鶴關剎染臺戒儀容挺特志趣高邁聰慧勤學焚膏不寢只恐不及故博綜公教兼通密法音聲清暢每秉談柄聞者莫不感歎咨嗟也掛搭睿山爲衆講授長



保間聖術法性寺座主朝議不許因心快快無聊屏  
居小松寺觀心誦法華夢釋迦多寶並坐寶塔中  
放光顯明空中聲曰汝以觀心誦經得見二如來異  
日西方之生不汝慢耳送數年後誦提婆品結印契  
寂矣

和州子島寺沙門真興傳

釋真興不詳其產許弱年從松室仲算僧都學慈恩  
疏兼稟因明住子島寺任持法相世曰成唯識觀嘗  
於定中昇兜率天觀講慈氏丞相教通勝公緝方外  
交與於道場觀觀史官令丞相贈禮與一日自外歸

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

〇五

手值鬼魅數百塞於行路將侵惱與問僕曰汝等有  
所見耶皆曰無見興乃入唯識觀羣經皆仆地僕從  
始得見之長保五年坐維摩會講主其答釋為眾所  
規範相國道長藤公尤加優禮實弘元年詔赴最勝  
會議師賞其優勝任權少僧都興性真率不修緣飾  
講畢自著州屨不歸南京徑往子島是歲十月二十  
三日終於所住壽七十有一後人欽其德不敢呼名  
稱子島先德云所撰之書有私記十卷般若經音訓  
四卷觀音經釋般若心經釋各一卷其私記  
依本宗著之今行于世

贊曰嘗看私記科二百餘條而唯識之重關也俱舍  
之細瑣也無鑰鑰而自啟也豈但便於初學者雖老  
成人思過半矣妖魔數羣仆於定力者此又勝於漢  
高之臨敵揮劍矣

本朝高僧傳卷第九

日本書紀 本朝高僧傳卷之九

〇五

音訓

轅 連條切 軋 乙零切 嚙 提上重利切 咬 祖咬切 扶 一  
決切 黏 魚占切 瑩 蔡定切 凹 於交切 昆 昆智切 嫪 喜  
上郎到切 睨 倪制切 下衣海切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財契  
本朝高僧傳卷九 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第十

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之七

江州睿山沙門安海傳

釋安海，平安城人，未詳姓氏。山徒屢至其父宅，見海俊發教論題語，一聞不忘，漸記數句。後踞母膝，每眾僧至，戲以論議，人稱其宿智。遂登睿山，從興良法師剃髮受業。早通教，常居橫川，益研家學。曾膺講師，偶黑谷禪愉，愉亦一時英才，潛如金龍寺，千觀所語，曰：「安海，豎義如何？」折之，觀曰：「海學宏深，不可以口教。」

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇一

屈也。彼粗于密示，以悉曇章蓮華手種子字義難之，可沮乎愉諾而歸。既至期，始出台題辯鋒，不可嬰也。次難種子義，海曰：「悉曇非我素愉，曰已稱博涉，蓋學乎海，不肯答。」曰：「公之論方納圓鑿也。」每海豎義，其配詰之以他學，凡六度海不屈，曰：「祇直我道而已。」當時源信覺運爲台門，兩輪海常曰：「慧心淺廣，可揭厲涉檀那，深狹不過踰跨。」信公曾設二十七疑，寄問宋國智禮法師。海見其問目，曰：「是等庸義何須遙問？」乃作上中下三答，謂徒曰：「法智答釋不出我三種矣。」及禮答釋來，海已物故，果如海之中下義也。門弟子卽持

禮答及海釋，往墓讀以祭之。海骨放光，云：「余尋三釋而不得頃，始得下釋，文長不載焉。」

贊曰：智禮者，荆溪之正統爲四明之始祖，而不出海之中下釋。又慧心檀那者，睿山中古之英傑共言淺狹，也不爲屑之。然則海公之學識不可量其涯際矣。假之數年，卒可爲台嶺之華矣。惜乎短命而沒也。

江州延曆寺沙門覺慶傳

釋覺慶，和州刺史平理善子，平安城人也。早隨慈慧僧正探顯密府，應和宮講，爲夕座問者。年僅過弱，冠與東大寺法藏對論，往覆長德四年，補延曆寺座主。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇二

長保二年，敕任僧正。翌歲轉大朝野掎，其道望，太宋至道元年，夏奉先寺沙門源清法師贈自撰台教疏鈔五部，因乞此方所有台疏，而當時學者有議自撰者，錄此朝廷詔慈覺智證之兩徒指其瑕疵，慶奉敕齋諸疏，報書曰：「睿山故座主暹賀未及報陳，湫以卽世矣。覺慶偏以年臘，復得領衆，繼彼前好，寫我短懷，雖無傾蓋之昵語，自諸動履之德音，梵志之求道也。十二年師及二十生智者之閱經也，十五遍師及五十遍靜言思之匪直也。人見贈法華示珠指二卷龍女成佛義一卷十六觀經記二卷佛國莊嚴論一卷。」

心印銘一章見斯文之彰外知其才之彌中文章六  
七聊有注出不敢加雌黃唯是展情緒爰見求智者  
大師製作仁主般若經疏彌勒成佛經疏小阿彌陀  
經疏金光明經玄義并湛然禪師所撰華嚴骨目其  
無則闕如其有以呈進目錄在別不更委注便附回  
便到且檢頌僧龍之對法水更挹東流養虎之發智  
風盡振上葉投玉簡而增日域之光耀開石函而補  
天台之闕文中國之遠求有感哉臨白首而始知恨  
隔面於鰲波萬里之外仰玄趾而遙契願促膝於龍  
華三會之朝珥筆潛然珍重再拜慶開東陽房請退

日本僧述 本朝高僧傳卷之十

〇三

養老長和三年仲冬十二日化於房內春秋八十八

### 京兆清水寺沙門清範傳

釋清範不委其姓氏播州人也自幼從興福寺守朝  
稟習法相又依小嶋真興益竭清致強記博達優辯  
無礙當時僉曰文殊應化也大丞相道長藤公欲試  
其實請南北百員僧齋修佛事敷坐帖十枚其一帖  
下儉書文殊二字既而衆僧各著在範先稠人向座  
揖曰是我帖也正衣而坐從此藤公特加敬賞出住  
洛東清水寺盛講法相藤皇后定子爲先考設齋請  
範說法聽其講深微滿座感泣年三十八寂時人惜

其短命又崇其德號清水寺上綱著般若理趣分註  
一卷

### 江州睿山沙門覺運傳

釋覺運京兆人太子詹事藤貞雅子也從事慈慧僧  
正研習台教天賦英敏諸宗章疏多所暗誦每預講  
場常居勝義住檀柁院大待來學與源信僧都法義  
角立又就池上皇慶稟灌頂究其玄奧運長於慶能  
下心爲法時人稱之一日慶赴鎮西往辭相府運倚  
公門俟慶之出敬授杖笠長保五年十二月大極殿  
仁王會一條帝命運管總導師任少僧都爾後屢召

日本僧述 本朝高僧傳卷之十

〇四

內問法教轉僧正寬弘四年十月晦日示寂述作有  
實菩提心論餘皆散逸云

贊曰觀運公之立義與源信相成表裏如大宋四明  
有知禮淨覺之異論然彼互爭人執此只異法文春  
蘭秋菊各擅其英於今學者稱慧心檀那之兩義矣  
而信公之述作卷帙滿架運師之義文纔出於山衆  
之口碑爲可憾焉

### 城州勸修寺沙門雅慶傳

釋雅慶吏部尚書敦實親王之子嫌著錦綺忻求緇  
衣入仁和寺從族兄寬朝僧正落髮出家歸三寶教

性氣勇銳，學業不修，屢拜朝公，稟灌頂法，又就石山  
大僧都元昇重沐密灌。小野廣澤兩流斟挹，無餘滲  
感靈儘多。天曆九年夏住，勸修寺講授密教。永延三  
年夏敕爲東寺長者，永祿元年冬任少僧都。長德四  
年領寺務，兼法務，長保初元重東大寺，壬寅秋敘僧  
正在東大，六禮衆僧協和，寬弘六年修灌頂法於東  
寺觀音院，始行胎藏果，賜看護四十人。八年己酉轉  
大僧正。長和元年十月二十五日溘然而化，壽八十  
七。慶以字多帝爲祖父，以敦實親王爲先考，以寬朝  
元某爲師兄，濟信爲弟子，偕是密家之俊傑，而王種

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

○五

之聞人也。其道情體裁自顯，言外焉。

### 江州睿山沙門源信傳

釋源信，世姓下氏，和州葛木郡人。父名正親母清氏，  
詣郡高尾寺至心禱于夢覺僧，授曰：玉一腹，卽有姓。  
天慶五年生，信幼時嘗夢高尾山藏堂壁上有鏡數  
枚，或大或小，或明或暗。一僧取小暗鏡與之，信曰：此  
有何用？當惠大明鏡。僧曰：子只持之。至橫川摩之，寤  
而大怪，且不知橫川何在。後上睿山，事慈慧僧正，始  
知夢言勵精修習，綜大小乘。天性聰明，通達境觀，四  
種法師五種三昧無不薰練。居慧心院弘一家學，請

益者塞門。天祿年中嫌搗榮名，屏居橫川，從事著述。  
有一乘要訣，往生要集，阿彌陀經疏，大乘對俱舍鈔，  
因明相違註釋，二諦義，私記，三身義，私記等凡七十  
餘部，一百五十卷，共行於世。公嶺教法，此時爲盛，時  
稱慧心院僧都長保五年信說，曰：宗教義二十七疑，  
寄問宋國南湖智禮法師。禮見問目，嘆曰：不意東域  
有如此深解之人。乃贈答釋，從此風便往來音問相  
繼。其後宋國通書請信述作疏鈔，其一乘要訣者顯  
衆生成佛之義，片定性無性之執也。時夢西天馬鳴  
龍樹摩頂讚歎，傳教大師合掌告曰：我山教法今屬

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

○六

汝焉往生要集者，記彌陀本願，備西方之勸發也。又  
夢觀音菩薩微笑，授以金蓮華，毘沙門天王捧蓋而  
從。信又深夜獨坐思惟法義，欲覓證文，自然定火照  
輝，案几衆多妙應，匿而不說。一日告諸門人曰：今生  
相見只在今日。若教法中有所疑者，可速問之。母成  
後悔，門人且泣，且問信：一一示誨，氣息漸逼，麾去門  
人，唯留上足慶祐曰：我以一乘善根，回向淨刹，上品  
下生，我當取之。今二天童下來，曰：慈氏天尊遣我，二  
人爲師，迎接數萬天子同來，翼從我謂二童曰：兜率  
之生彌勒之謁，固所喜也。然我平日有願，欲觀彌陀



往安養之後必詣觀中爲我謹啟慈尊二童昇去須臾觀音菩薩來促樂國之行素願不誤汝其知焉慶祐聞已流淚隨喜信便結定印端坐遷化實寬仁元年六月十日也春秋七十有六豈天樂鳴天異香滿院四山艸木皆自西靡傳聞趙宋皇帝聞信道譽建塔廟置影像燒香禮讚云

贊曰慈覺智證之門裔皆兼學顯密以爲家常也信師獨以台教爲己重任七十餘部疏章靡不扶翼宗旨也至其立義之精雖四明山家之諸師而不能企及焉然宋沙門志磐著佛祖統紀以信師系於智禮

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

七

之嗣以其有疑問也殊不知信師之意欲試異域之學匠也暨答釋來多不契其意況又不出安海郡下之釋邪吁鶴是難續膠漆強粘信師尚掉頭於定中又至信伏其說西向禮謝何虛辭之甚邪

### 江州園城寺沙門慶祚傳

釋慶祚門下錄事中野師元之子從餘慶僧正學涉顯密聲光遠馳任太阿闍梨住園城寺常以化度爲任或誦神咒或讀法華口放光明眼見化佛屬乎正曆壬辰兩門相閱祚率徒移巖藏大雲寺無何又住園城四方學侶雜來盈堂三井法幢此時鼎盛也長

德三年夏宋國僧送新書五部其義膚淺山門三井碩德奉詔難破其龍女成佛義一部祚拆之增賀寢疾祚往問曰公之病於三諦中孰患乎賀曰空諦無病中諦亦有亦無今所患者假諦也祚曰公之所觀尚有隔歷也卽爲說圓融三諦及止觀病境賀聞而垂淚悲喜不止病亦尋愈寬仁元年十月值智證大師忌日修法華講太丞相道長藤公率官僚臨席忽一山鹿來跳上講堂緇白驚見藤公疑怪祚曰昔世尊初轉法輪於鹿苑今始開講席於園城瑞鹿時至可謂嘉會也況鹿是菩薩轉法輪之三摩耶又春日

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

八

神使獸也通丞相官僚又星光真神其有感乎依茲言之益世出世間之祥瑞也於是衆會大喜祚所居房號龍雲隣院失火烟焰鬱逼祚結灑水印擬之其火立滅隣房半存橫川寬印三井定基爲睿山內論義之匹源信謂印曰內論者雖是家常而新學之發軔也子有意否印曰臨建之初知有此事豈可始憚乎信曰子之言壯也然彼有慶祚必潤色基子不可實思也其爲時彦所畏如此祚性篤信精修常患將來之果弟子等各爲祚臨終修不動護摩祚說門人曰比來每眼見不動尊貴示涅槃之因乎門人以



事告之其臨公安摩而寂寬仁三年臘月十一日也  
壽六十五

贊曰通別人者三諦隔歷焉不能無病矣圓人者三  
觀融即何患之有向山家人說此事者猶如擔水賣  
河頭祇公因問疾爲演圓義增賀一聞悲喜感悟古  
人結友責善至親切也今教禪稠林中此交何葉如  
土邪

和州東大寺沙門澄心傳 朝晴

釋澄心未知氏族賀州人也學經論於觀理僧都專  
唱空宗長德三年維摩會講塵談解紛僧階昇進任

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○九

少僧都寬弘四年管東大寺一住七年攝衆管額長  
和三年二月某日卒年七十六又釋朝晴和州漆下  
郡人愛二論於禪徵僧都才慧爲衆所稱長和二年  
於興福寺南圓堂講維摩經義辯驚入相尋歷二會  
寬仁四年住東大寺明年四月卒

和州興福寺沙門扶公傳 圓緣

釋扶公左衛門督藤重扶之子從興福寺真喜研礎  
法相周遊審問聲識智之蘊寬弘四年爲維摩會講  
師住興福寺任少僧都治安元年轉大四年敘法印  
是秋興福寶塔落慶公爲導師八年七月十日歸寂

公主興福前後二十年和合僧中上下肅如也弟子  
釋圓緣出於朝臣華胄止性卓然學創有名初居中  
宮院後移興福康平三年卒

和州興福寺沙門林懷傳 明憲 日觀 長保

釋林懷勢州人嘗在幼穉與友遊從皆惟十月木葉  
黃落懷偶見之忽觀苦空歸告父母頻求桑門遂許  
其志即往南京興福寺隨喜多院真喜雅聚納具心  
地穎利聽一知十加尚辛勤習學究唯識致又就松  
室仲算益研識智長德四年登維摩會講遂折問者  
義解長和五年夏受請住興福寺領衆年久晚移喜

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○十

多院不詳其寂年有弟子三人經教明懷教懷皆是  
俊人法弟明憲義慧博辯長保四年爲維摩會講師  
任少僧都治安九年卒壽八十一又同時有日觀長  
保二沙門義光神足也以善談論馳名當時觀者住  
傳法院長和元年坐維摩會講首治安元年三月二  
十八日卒保者住新院治安初應維摩會主長元初  
年中冬十八日化壽八十二

江州睿山沙門長算傳

釋長算中納言藤朝範之子自少英敏上比睿山師  
事覺運圓示與義磨王削垢又從池上皇慶阿闍梨

東受密灌住檀那院敷演台教馳騁論場有歷塊才  
天喜五年奄爾而寂春秋六十七

### 江州睿山沙門寬印傳

釋寬印姓紀氏丹後與佐郡人也從慈慧源信二師  
博綜經論深究觀心每有論決常歷同儕嘗曰我於  
義論場揚舉七度餘隨時升降詔侍內供奉正曆中  
宋人朱仁聰來寓於越前敦賀之館舍博通內外信  
公挫印偕往見之朱指壁間画像曰此婆娑婆演帝  
守夜神也爲護渡海所奉持也二師知此神乎信憶  
華嚴經善財讚歎偈援筆書像側曰見女清淨身相

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○土

好超世間願印日子足次句印即書曰如文殊師利  
亦如寶山王書里闍筆同音誦之宋大感嘆曰太藏  
經由者二師之賜也乃設二椅延之又出國產奉  
之印後歸丹州開若古寺寺側有太池里民將罾網  
捕魚而尅日禁之不聽其夜印臨池振錫念咒明日  
下網不得一鱗里民歎伏印常守淨業修懺悔誦法  
華臨終手執香爐口唱彌陀身心安庠回西而化  
贊曰中世以來禪教之徒動玩世書外于真典信印  
二師曾蟠玉山卒答異客之問而不適面不勞搜思  
猶探懷物焉暗通他經如此則家學之明詳也不言

而可曉焉

### 江州睿山沙門覺超傳

釋覺超攝州住吉縣有武之子或曰出泉州巨勢氏  
父母禱於住吉明神感靈夢而生十三喪其父母養  
播州府主被無繼母率妹走室津音豫州太守得妹  
下國洛陽商人得超上京其夜宿鳥羽縣超爲父  
母通宵誦法華音韻清亮會慧心僧都受檀越之請  
在鳥羽縣聞超誦經知非凡器乞得商人攜歸睿山  
超夙蘊異質山古過鼻慈慧見曰是聰明之相汝必  
爲國寶矣天元年中試業得度學台教於信師受密

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○土

灌於慶圓宿慧所薰究盡二教名冠一山性喜隱約  
居兜率院後移橫川楞嚴院嘗立三誓一曰不躡羣  
塵二曰不聞世事三曰臨終正念後三誓皆足矣又  
能憤師業著述爲樂有東西曼荼羅鈔胎藏三密鈔  
兩界生起仁王護國經鈔即身成佛義私記三觀私  
記五相成身記等皆爲學者所珍嘗謂徒曰凡睿峰  
學侶初先習顯教後當受密乘是故超力究祕軌常  
修月輪觀其智冷如水會皇后有產難教超持念固  
辭不起帝重詔侍臣藤氏藤公入山曰師若不起我  
亦不去超不得已受命藤公請同駕車超不聽徒步

入宮后即分號帝加僧都超不受速出有司逐後高  
宣內旨從此有僧都名某年洛之因幡堂落慶供養  
超爲導師畿內貴賤競至瞻禮皆有自薦中乞誦誦  
文者書超之父母名以爲追善超怪請延見之乃妹  
也互語往昔悲喜交集而豫州太守洛陽商人亦共  
在座拍手相賀既而登座說法作誦誦文細演因緣  
一會緇白垂隨喜淚一日謂弟子長慧曰如平生願  
月輪現前慧問其故超曰非汝所及長元某年正月  
正心而逝友人嚴範來弔曰定結印契慧曰否只令  
掌而已嚴曰可重能見慧啟本而視結說法印儼然

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

○十

不詳

不解門人皆合爪歎息後弟子夢超告曰我已生於  
蓮座但往生者難中之難也汝等宜勉之  
贊曰五相成身記自跋曰以此身遇此教縱得紫金  
妙體思拜黃壤舊骨餘是言之瑜伽悉地之人也範  
亦何人斯知超之至深莊惠之交猶爲疎也而已

江州睿山沙門遍救傳

釋遍救京兆人左丞相仲平藤公之子夙慕桑門脫  
離華胄隨事覺運訊究教觀其性英敏慧解通暢天  
元五年朝廷選山門才學日救舉甲科初住睿山靜  
慮院後遷北山曼珠院熾唱合教任大僧都與都率

院覺超立義交攻救曰行者苟觀心總精則十界可  
共空超曰九界可空佛果不可空一日受請至平大  
原勝林院於彌陀像前設席議論超爲豎義救徵空  
義辭鋒難觸皆尊像忽隱壇上寥廓超立不空義引  
證核實尊像倏現相好儼然一會驚歎至今開山寂  
源忌日舉此論題以鋪講席爲其尊像者良工康成  
所造也現在洛北勝林院

江州延曆寺沙門院源傳

釋院源興州刺史平基平子少登睿山師慈慧就覺  
慶請益教觀略究大旨寬仁四年任延曆寺座主治

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

○十四

不詳

安二年秋七月大相國道長藤公建法成寺招南北  
碩師修落慶供養是日法駕幸寺太皇后彰子皇后  
妍子中宮威子中興入寺綺羅映日戈戟清行山川  
生輝見者如堵乃敕源爲導師辯音調適普通衆會  
大臣百僚莫不稱歎帝賜封五千戶二年癸亥敕任  
僧正兼掌法務源善唱道聞其說者莫不起信源滿  
仲累世將種武畧益代聽源演法即座祝髮拜爲戒  
師法諱滿慶其僚屬數十人同時剃髮萬壽二年冬  
十一月帝召源講仁王經仍聽輦車出入禁門源晚  
解印閑居西方院長元元年五月十六日化於住院

壽七十又五有神足實慧學術苦辛宗通說富救爲僧都

和州東大寺沙門觀真傳觀圓

釋觀真不知氏族和州葛下郡人隨事光智僧都請益華嚴得事理法界且又善談吐寬弘八年有詔爲維摩會講主對辯驚座任權律師治安三年住東大寺歷六寒暑卒于所住長元二年二月十九日也壽七十九弟子釋觀圓從事師訓殆將青水任傳燈大法師位頻歷三會住尊勝院講華嚴經及五教章

京兆東寺沙門延尋傳

日本撰述

本朝高僧傳卷之十

〇十五

釋延尋參議源扶茂之子生覺之美出於同隊自幼出家從濟高僧都受兩界密法尋究家典任權律師萬壽四年秋敕司東寺長者昔年三十六不盈四十而預此職者以尋爲初例也長元四年轉權少僧都七年十月圓教寺落成詔爲供養導師長曆二年夏昇大僧都寬德元年遭病辭諸僧職不詳其所終贊曰長者職者獨在東寺而其爲任也尤重尋公未至不惑而管此職生芻一束其人如玉也其謂之乎

江州睿山沙門紹良傳

釋紹良夙陟睿山從源信僧都學山家法得其大旨

又問諸師長元初浮杯南詢謁延慶尚賢法師賢四明智禮之高第賜號廣智者也良齋呈金字法華經留學三年三觀十乘益達幽玄歸朝之日棲遲台嶺敷演所業

贊曰長元之間慧心檀那之門英傑甚多良公升降其堂不爲厭屬遠問來地扶豎公教今據于宋志繁佛祖統紀聊補行實之闕焉

和州東大寺沙門濟慶傳

釋濟慶參議藤有國子平安城人初隨澄心傳三論宗及稟具已遊諸師門性相教體悉通精微以義學

日本撰述

本朝高僧傳卷之十

〇十六

聞南北任傳燈大法師位萬壽元年爲維摩會講師不幾坐法華最勝二會如意一拈問者憚爾長元元年董東大寺策衆五禪法施廣布從律師昇綱位承二年十月十四日卒於東南院壽六十二

江州延曆寺沙門教圓傳

釋教圓越州太守藤孝忠之次子也神志高邁宿慧括囊華山帝遜位人道法諱入覺住華山寺精於密教圓隨受灌頂後師實誓承台宗又遊南都通貫性相治安初任法橋昇至權大僧都長元七年冬十二月法性寺八講會膺選登座論說如流帝有眷感任



阿闍梨進僧綱後授此位圓爲初例也敕住法成寺尋敘法印主妙法院長曆二年轉大僧都兼爲延曆寺座主圓台教外又通唯識一日讀誦自第一卷終於第十卷庭松上異人作舞或問奚爲曰我聞圓師誦徹唯識論何樂加之故不覺手舞足蹈也又問公何人斯曰春日明神也言訖不見長久四年依病辭僧綱永承二年六月十日順世年六十九矣

江州睿山沙門延殷傳

釋延殷姓橘但州人也天賦神秀風格出塵早就家塾讀書俄厭世故年十六登睿山禮慈仁僧正剃髮

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇十七

總戒又從靜照習山家法究其大義常思南詢長保二年寂照入宋殷亦相從赴太宰府朝廷有議置殷乃謁景雲阿闍梨同皇慶受兩部密法寬仁季避衆徒入多武峰隱逸數歲三學該練明快僧正勸歸本山不從又入大原山與覺尋同社修觀黃門侍郎源顯基就殷削滌法諱圓照相率往楞嚴院結茅安居長曆二年春慈覺智證之兩門爭座主位殷厭騷擾遷醍醐山因拜小野仁海僧正重東兩部密灌永承五年三月二十六日寂

和州興福寺沙門經教傳

釋經教不委姓氏從林懷習申法相寬仁三年有詔司維摩會講師緇曰注目出住東院專唱所業長元年中遷興福寺任權僧都管轄寺務十年衆皆歸德寬德元年五月四日逝

和州多武峰沙門行眞傳

釋行眞藤丞相道長公第二子俗名顯長自幼英才學通內外官左典廩丞相愛鍾以家臣但馬刺史高雄之女將妻之眞辭不從丞相強之眞思苟欲順父命則違世義欲亡我志則反爲不孝也進退惟谷不如逃世修菩提因即擲冠纓潛上睿山時年十六會

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇十八

多武峯增賀在山乃就剃戒丞相舍怙跡之入山見其圓頂反袂而歸眞就增賀于談峰討習台教理會圓融後往睿山講止觀書不擇貴賤親疎授有志輩人靡其化云

和州東大寺沙門延幸傳

釋延幸和州高市人承法松橋橋歷三會議師而華嚴翹楚也幸請益無倦義解人妙永承四年登維摩會講座分拆事理辯河懸注尋歷二會住尊勝院爲一宗貫貞康平二年住東大寺三年七月遷那大像身潤累日寺衆以聞太史卜奏曰來歲二月當有兵



革敕幸禪之率三十僧於太寶殿誦仁王護國經五十日至翼歲春無干戈事畿內安寧幸住七年退居別院治曆二年臘月二十一日化壽八十二

### 和州興福寺沙門明懷傳

釋明懷或作快城州刺史藤宜孝子受法相於南京林懷傳密灌於東寺成慧性相源委縱其揭厲長曆三年擢維摩會講師理義融辨衆伏博記康平三年領興福寺務仕少僧都住職三年退居西唐院延久四年八月二日寂保齡八十五初懷受密時年邁於尊二十四時人以不恥下問而稱焉

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○十九

贊日記曰博問強識而讓敦行善而不忘韓氏亦云生乎吾後其聞道也亦先乎吾吾從而師之今之學佛者見其宗異其年隔雖同社而居不問不習高貴自畫焉學之不進也道之不明也於是乎窮焉廢發後學墜懷公之事融我法之膠執邪

### 江州睿山沙門藥智傳

釋藥智幼事池上皇慶有稱穎譽年僅八歲預睿山內論義而居講師何學者年問難有年智答釋如建瓶一會稱贊後三條帝在東宮時語座主勝範曰學佛者不涉儒書朝會交接言語卑陋台徒中有內外

兼通者朕其試之範擇進以智帝先問止觀并密乘對審明次至經史子集智始釋俗諦終歸真乘宏詞雄辯滾滾如江水流公卿聳聽詔祈寶祚及帝即位將大擢登不幸短折帝嘆惜久之詔其徒賜諡以旌才德焉

### 江州園城寺沙門明尊傳

釋明尊武庫令小野奉時子道風孫尊嘗者也早入園城受業餘慶研精慶祚顯密共熟住圓滿院兼法務任僧正大相國賴通藤公常欽其道貌長曆二年秋補延曆寺座主慈覺之徒捧狀沮之三年春山徒

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○二十

大會祇陀林寺藤公使使告之曰座主之職古來任重故選智行全備人而補焉不必局於慈覺門生智證之門亦多有焉方今明尊僧正智德共備慈覺之徒有相若者乎乞莫拒選山徒不肯聚相國館呼號扣門相國大怒使能州刺史平直方率兵射退從茲兩門角立園城寺沙彌不得登睿壇尊上書奏建戒壇立不於諸宗於是三論法相華嚴真言律宗一等贊可只台徒固執不應是歲皇太后彰子請尊受戒四年正月賜封七十戶寬德二年爲園城寺長吏承

承三年八月十一日奉敕補天台座主十三日上表辭曰伏奉去十一日敕命以小僧爲天台座主生前之面目既足老後榮耀亦極須勵昏耆偏從朝章而智水至淺戒珠無全濟度之力難迴照融之光猶暗況乎榆谷景暮待黃落於秋風蓮臺望溪繁素念於曉月崇班是會餘喘幾許哉抑亦大僧正法務者國家師範法宇棟梁也謂此兩個之所職誠非一愚之所居今帶三事彌益千懼伏冀鴻恩曲矜羊質早停台嶺貫首之職方授禪門差肩之任不耐懇款之至謹條狀陳乞以聞明年秋七月惟疾不堪行步帝賜

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○壬

牛車辭而不受天喜二年秋八月長谷寺落慶供養請尊爲導師五年冬十一月帝再營志賀寺詔尊住持賜以封戶康平三年尊登九齡藤本相伸賀圖釋迦像一鋪書妙經九十部就白河別業請集教門諸寺大開慶讚法筵又作贊辭曰戒定慧要忍辱我衣一乘圓融之嶺開顯之花春鮮五部總持之圖智慧之果秋盛菊究學海之波浪早爲佛家之棟梁弟子從弱冠之始迄播教之今依其護持之力全此愚昧之身方今和尚春秋之算九旬可喜可懼正是其時也仍持白河之勝形敬致丹地之懇念被姬公旦之

在洛邑也未開花文於禪文之月智法師之老菴州也誰實松年於巨川之波今日之事少超古人又源亞相詠和歌序其辭公卿大夫著座矢詩詠歌以伸其賀爲君臣所崇大概如斯四年秋東北寺成敕尊爲供養導師六年六月十六日在志賀寺以老病奄然而化齡九十有三戒臘若干歲矣

江州延曆寺沙門明快傳

釋明快石佛射藤俊家之子利仁將軍之遠孫也少登睿山從明豪覺運尋庵二師研習顯密後承法於池上皇慶天喜二年任延曆寺座主兼領法成寺慧

日本書紀 本朝高僧傳卷之十

○壬

心院檢校丁酉春太后彰子法成寺中建立八角堂命快爲供養導師康平三年秋快抗表辭諸寺職優詔不允延久二年重上表曰謬以禪門之微軀忝爲台嶽之貫首欲退之思寤寐雖深懇從之心居諸自積方今齡已過八旬病動侵五內智行惟乏老耄累來三者相並一而可堪就中近日以降沈疴競發松門日下宿霧暗以難晴疾葉飛而欲落伏願天鑒早停此職暫養殘喘於艸養專運刻念於蓮臺不任惓惓之至歸棲洛北如法而化延久二年中春十八日也保齡八十有四

江州睿山沙門慶意傳

釋慶意，字安城，入藤秀才章輔之子。幼慕佛乘，入闍城寺，座主慶圓室，剃髮，稟學嗣法。良圓僧正治曆二年冬十二月有詔於禁殿講，最勝王總詞義從容。君臣從聽，賞敘僧官，意後住睿山三昧院，遂卒於住所。

本朝高僧傳卷第十

日本經述

本朝高僧傳卷第十

〇五十五

音訓

嬰

於京切

狹

胡夾切

湍

克令切

穰

烏賄切

彌

祿蒙切

函

胡南切

鼈

牛刀切

磬

丘正切

核

通作

濠

古本切

愁

唐鍾切

喘

尺滑切

惴

苦本切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷十

茲集

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第十一

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之八

京兆東寺沙門成尊傳

釋成尊與福寺仁盛威儀師之子自孩提時俊敏聰羣仁海僧正知爲法器鄭重鞠養及稍長成家學日進至年四七遂授灌頂野澤兩流瀉餅不洩爲東寺阿闍梨住曼荼羅寺大啟密藏法驗尤夥後三條帝在儲位久尊爲法友命禱慶祚一日入宮帝時梳頭白髮數莖隨櫛而落令持以示尊尊無語而出歸

日本書紀 本朝高僧傳卷之十一

〇一

住房修愛添王供其像冠師子噴血澆壇不幾春麻思遇益渥初康平八年六月旱魃作虐率二十僧於神泉苑修請雨經法修中兩度甘雨大澍龍顏有悅賞賜多品延久元年春爲東寺長者夏六月任權僧都四年冬領寺務承保元年正月七日順世歲八十三著真言付法纂要鈔世稱小野僧都又同門有釋常寂醍醐眞範僧正之族弟十九出家博涉密書長曆三年冬就仁海僧正受灌頂居小野北尾苦修練臨終數日定坐唱佛號而化年八十五

江州園城寺沙門慶暹傳

釋慶暹源祭酒輔親之子隨明尊僧正學云密法後就明慶慶祚二師益琢所業義論拔萃又善和歌性厭名利好居下位康平二年後冷泉帝御書仁王經請三井山門碩德慶讚供養其散會敷還導師說演圓然卽座詔任律師決旬辭退重敕補園城寺長吏暹一日書金盞阿字兩版掛壁禪坐凝觀墨字變作金色云

和州東大寺沙門有慶傳

釋有慶參議藤有國之子濟慶之弟也受三論於澄心後從濟慶深究玄奧長元八年南圓堂維摩會主

日本書紀 本朝高僧傳卷之十一

〇二

領講座大振圓辯永承六年住東大寺康平六年依一衆請移元興寺兩利法儀僧中歸仰任太僧都治曆三年再領東大歷四寒暑上表讓職於神足慶信退居東南院延久二年二月十八日示寂世齡八十八又釋顯眞承三論於有慶兼質法相密教從事待範好隱混衆居東大手講經說論警策學賓

江州延曆寺沙門勝範傳

釋勝範姓清原氏江州野洲人初從座主覺慶後師都率院覺超研嚴圓教山家教乘簡練揣摩尤精止觀義釋惟多嘗謂慧光房澄豪曰一代時教多說佛

相甚不同也。一家所立有六重佛相。山家大師在唐傳之一妙。因假立佛謂前三教主皆於因位假立佛名。二色相莊嚴佛謂凡夫小乘等金色莊嚴等為佛相。三斷諸迷妄佛謂斷貪嗔癡等煩惱別得覺悟知見。四法性真如佛謂事事諸法差別不同真如妙理是一。五合節菩提佛謂眾生當體佛果也。六非迷非覺佛謂迷悟不相分。生佛未分不思議不可得。強名為佛。範居寶持院大唱慧心之道。延久二年任延曆寺座主。山中謚如承保四年正月十八日化。春秋八十有二矣。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○主

### 和州興福寺沙門眞範傳

釋眞範播州刺史平生昌子。初隨定好定照二師習法相。致見清水寺清範遂承其法。學富大小辯長。論談萬壽二年登維摩會席。以堅義所賞。出住一乘院。領興福寺務兼司元興山階長谷三大寺。永承四年敕任僧正。範素有嘉遁之志。每歷僧綱不快。於心一日潛跡江之志賀郡數年。里人崇德稍來。棄去登駿州宇津山托鉢。送歲邑人入山見之。範蔭大樹班荆默坐。知眞出家接脚。延請範聞之。其夜出山去矣。四旬尋求失其所。往後在越後國府作乞丐。入舊識達

市欲與之言。啞子之爲擊。稅急過稍歷歲月。知自死期。還和州三輪山下。向東拜春日明神。合掌坐脫。門弟子昇遺骸葬于本院。

贊曰。山如澗飲愛烟霞。友麋鹿者隱逸之常也。禪教之中其麗不可記。範公惟畏人之知。屢移拂跡。爲啞過市。亦隱中之隱也。觀其歸故山露地坐脫。豈有矯世憤時之意與。

### 和州興福寺沙門賴信傳

賴事

釋賴信甲州太守藤賴經之子。從眞範僧正於興福。祝髮果戒。曹思相宗。精于因明。住一乘院。無何董補。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○附

興福權管。大安法華山階長谷四寺爲僧正兼法務。當世稱崇。永保三年六月二十一日寂。有弟子三人。永緣賴草覺信也。緣信者傳在。後尊者出攝政家任僧正職。住一乘院。

### 江州睿山沙門暹敷傳

釋暹敷諱名曰留近。諸大德聲譽。本教兼學。他部承曆二年正月望白河帝下敕宣始修大乘會於法勝寺。初延久于子置法華最勝二會於圓宗寺。是歲又置此會。此公示北京二會之權輿也。敷應初講師。是日上幸法會。聞敷詞辯任權律師。衆以爲榮也。其後



昇進綱位不記其族里師承歷終矣

### 江州園城寺沙門賴增傳

釋賴增游目經疏巧於義論一衆推重延久二年後三條帝仁和寺南建圓宗寺置法華最勝二會差二京僧講演法義四年十月增膺講師帝率百僚幸寺聽法興福賴信問因明義增曰非家學不敢答信曰已當朝選何關博涉增曰因明唯是對破外執之論而不言勝義諦雜學駁論何爭輸贏乎

論曰因明者禦外侮之論也夫害於佛法者莫過於外道也渠究四章陀論見得八萬劫其立言之詳非

日本撰述 本朝高僧傳卷之十一

○六

如儒之談性理釋因果漫誇佛教也方之佛法差以毫釐若不以因明之三才而徵詰之奚知過之以千里哉故菩薩作論以摧之其論始於彌勒而盛於陳那也戒賢傳之支那玄奘并公傳之本朝道昭從此展轉承傳非其器則不敢受授焉至東大寺長威和尚始盛弘之南岳學者立於論場講易討論焉獨天台一家自古不學之及學者格物致知則雖世書宜學之況菩薩之真論耶但其論文依破外道事義細瑣難容易解故學者忽之夫萬法者事理之二事理不二而歸於中道者圓教之所談也然增公爲非勝

義諦者余不爲公取之虎關和尚判增公曰有得有失也實足以當君子之論且賴信之問亦似枘鑿不入也

### 江州三井沙門宗範傳

釋宗範薩州刺史久任之字自幼稱時智辯出於從三井永範習學有名承曆三年爲大乘會講師四年任最勝會講師凡官院講筵範多預故入敬其德一日異僧來謁曰遙聞德望來自遐陬常抱小疑願爲解疑範唯諾適赴小食不久而歸忽失其僧所在怪見庭除片雲掩門上雲中放金光髮髯有師子形諸徒驚望須臾乃沒於是知文殊師利應現而來也應德元年七月某日卒

日本撰述 本朝高僧傳卷之十一

○六

### 和州興福寺沙門公範傳 俊範

釋公範朝請大夫平以康子從長保法師承法相天喜元年坐維摩會講師初任新院補興福寺任權僧正以應德三年十月九日逝弟子俊範石像射藤俊家子心資穎達學究法相承和三年應維摩會講主辯傾一會應德元年四十歲寂

### 江州延曆寺沙門覺圓傳

釋覺圓大相國賴通勝公第六子也從園城寺明尊

僧正剃髮受業英氣勝世謙光照人尊公喜其法種顯密與祕開襟授與名聞達朝敕任一身同開梨補園城寺長吏事爲法務承曆元年春二月有詔領延曆寺座主山徒訴朝拒之官使登山勝結宣命於講堂欄揭告山徒於是止訴圓歷三日辭職而歸爾來召宮修法得驗者多崇信日厚任大僧正嘉保二年正月應除目修法拜牛車之宣賜官士八十人童子四人扈從七人承德二年掌法勝之寺務此任以圓爲始夏四月十六日安座而寂春秋六十八圓常居宇治精舍時人稱宇治僧正

日本書紀 本朝高僧傳卷之十一

〇七

和州齊恩寺沙門永超傳

湛秀

釋永超平安城人雲州太守橘俊孝之子受法相於興福主恩天資英敏家學出羣康平二年春應敕上維摩會講場問義山歷超答酬分破開齊恩寺不唱有宗非通真教又善俗書七寺義學二諦之中有疑則問超決之故王公崇德道俗知名寬治八年著東域傳燈目錄三卷寄呈青蓮院主分弘經講論雜述之三科以匡別宗義使學者易覽超時年八十一不詳其終所有弟子湛秀研摩經疏歷三會講師名望同超焉

和州興福寺沙門賢源傳

顯嚴

釋賢源從經教僧都承唯識旨以義學鳴康平元年維摩大會爲衆講太義延久中卒有弟子賴嚴石少辨藤實仲之子寬治四年爲維摩會講師尋坐法華最勝講席承德三年寂歲五十

和州大乘院沙門隆禪傳

釋隆禪左少將藤政兼之子從興福寺圓緣僧都傳習唯識因明二論又謁諸師益研玄致延久五年得選爲維摩會講師南圓堂上中雄辯名除大僧都補興福寺務兼領長谷大安二寺又開大乘院爲第一

日本書紀 本朝高僧傳卷之十一

〇八

世熾唱法相七太寺衆悉歸風儀康平七年七月十日寂年六十三

江州三井沙門良意傳

經圓

釋良意越前刺史藤良經子從行觀僧正受顯密兩教居三井青龍院慧行雙修康平四年補尊勝院最初中阿闍梨永長元年冬敎法印康和二年冬十月白河法皇召山門寺門學匠四十八人於鳥羽離宮俾修台教十五座俱舍五座并雙論義敎意爲證義者任大僧都翌歲轉權僧正五年春爲最勝會講之證義同年仲冬十五日化年七十又同門有經圓號圓光

房博通大小經論補唐院阿闍梨永保二年爲二會講師任權律師嘗於俱舍論自設殊勝問答者書六十卷時號圓光鈔寺權兵衛不行于世

江州三井沙門圓範傳齊尊

釋圓範備後守藤保家之子就長守僧正學公密法康平四年任龍華院阿闍梨承曆三年列最勝講會聽衆永保應德間屢爲二會講師又同門有齊尊信濃守藤齊長之子初從齊尊大僧都學古教承曆初補法勝寺最初阿闍梨後承法於覺圓太僧正四年春聽最勝會講永保應德寬治間數坐二會講師嘉

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○

保元年坐最勝會講師康和年中寂

江州三井沙門觀圓傳

釋觀圓未詳其本貫久居三井故諸師門究顯及密涉大小乘長於義論任阿闍梨康和三年冬十一月於鳥羽離宮膺第一番論席與睿山嚴勝阿闍梨論決宗義勝者通內外而山門領袖也圓問曰依天台一家意明圓教斷惑爾者住前未斷一毫惑登初住時爲二惑同時斷將當如何勝答曰十信斷見思初住無明依此圓教意明三觀一心當云三惑同時斷無云諸經論中不見十信斷惑之文若有十信斷

惑之證會衆聽衆請明示之皆證義者慶朝法印一會論匠聞之皆訝勝乃釋曰觀法雖圓銅輪已前斷惑先除但十信斷惑者仁王經云十善菩薩發大心長別三惡苦輪海此其證也難云仁王經又非其誠證十善者指十信位發大心者可指初住發心例如起信論信成就發心心信者十信發心者是初住也答云論唯言信發心不言十信初住何爲例耶至此會釋衆嘲雷同慶朝警曰御前咫尺衆何不謹邪是月嚴勝就起信論其書文證以獻離宮圓陳破以十二不可五個勘定奏上仙關勝重返詰圓加糾彈筆陣

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○

往來隔年而止初康和庚辰圓詣新羅神祠宿經藏內通夜禪坐感佛神利生之恩斜月輝照曉鐘響耳忽聞寶殿有誦經之音起排藏扉見之有僧可年二十坐誦法華二童子侍一捧寶蓋一持經函至虛空諸大菩薩法乃至諸佛神力所護故可明神出自錦帳文殊師利是法華經於無量國中與僧同誦是人得大利如上諸功德讀訖神入帳中僧降殿階圓遇靈妙之會不堪隨喜因問名字居處僧曰我住此山八百餘歲名曰教忍仙人卽向西飛去矣圓玄學端精進云

贊曰異時斷者小乘教說之同時斷者天台一家之所立也支那本朝之諸師義論甚多不遂於觀心安能徹其蘊耶奇哉圓勝之論衡義學之可憐者也

### 京兆慈尊院沙門濟暹傳

釋濟暹朝臣文綱子仁和寺性信親王之付法神足優通密教才雅挺秀官任僧都住慈尊院負荷宗任長治元年弘法忌暹獻真影供非長者職而司者希也天仁二年冬詔於仁和寺始置傳法會議理趣經衆議以暹充講師兼辯循環學侶尊重弘法大師性靈文集纂編歷世末三卷以暹搜索四方補苴脫策

### 本朝高僧傳卷之十一

○十一

成續通照發揮性靈補闕鈔三卷又有經論文集永久三年仲冬十六日化世齡九十有一贊曰弘法大師入定之後密法効驗者萃班焉至於文藻不聞其人矣暹公天假長壽縱其翰墨翻載錦繡之觀收何寺之藏庫充蠹虫之腹乎

### 紀州高野山沙門青蓮傳

教覺

釋青蓮阿州人七歲出家及成大僧遍遊密場通曉伽乘屢詣熊野神祠祈以道心堅固遂得神感靈驗如響南國經曰呼半權現晚隱高野觀修杜絕永久三年冬覺錢上高野會遇大塔下發願拜曰下性薄

緣未逢明師妄想風高利名濤渦恐違出家本志失修道期爲求解脫具祈廟院願大德垂教示運撫掌曰常聞盛名獲接顏範素願足矣遂留卅卷一夜歎談連曰久倚巖隈齡逼西山捨離衆務單期樂土熟觀今時人我山高欲情市閭狐媚取世乘戒惟緩經論文義恣任己見祕密真旨猥付凡愚佛法衰替今已窳矣我哀此弊思得偉器智燈再耀朝夕詣廟祈之定祖見公有英傑相往懋哉錢伏其高德駐錫信宿多受策發又同時有教覺字正智從北室良禪阿闍梨受密灌頂風質高邁生才卓犖屢開講筵爲揮

### 本朝高僧傳卷之十一

○十一

塵尾研義義味不拘章句人皆服其高唱永久五年八月二十日寂覺開小庵號正智院

### 江州三井沙門公伊傳

釋公伊都督藤伊房之子自幼入園城寺師事賴豪學顯密法後稟傳法灌頂於覺圓僧正益究所業承曆元年補法勝寺最初阿闍梨尋列聽衆寬治四年司二會講席康和二年爲最勝會講師承久元年轉大僧都太治五年兼證義者嘗招二衆修李講以報諸祖恩奉供妙樂夏供南岳秋冬供章安天台御應密輪名馳京衛時人稱伊及證觀禪仁魯俊呼三



井四傑咒靈尤多。一日賜命修北斗法。伊被酒及入宮中。酩酊尚甚。嘔吐殿上。朝臣皆嘲其不法。然詔請已定。不可改代。其夜帝夢神人數輩。揭北斗壇宮。天帝怪問其故。神人曰。今夜伊師修祕法。供北斗降壇。先令我等啟行。帝覺。故伊一日壇越。請伊供。毘那夜天。伊諾遂未。置行數日。後壇越來。謝曰。依師修法。所願已成矣。伊曰。我精修焉。肯壇有聲曰。我不欲供焉。壇越去。伊入壇。取天像。地溪谷曰。汝已辱我。我亦辱汝。而伊無恙。長承三年閏十二月十九日吉祥。亦遼春秋八十有二矣。

和州興福寺沙門覺信傳

〇十三

和州興福寺沙門覺信傳

釋覺信。太相國師實藤公之子。自福生入興福寺。從賴信僧正。剃髮。具習串法相。早通。太義寬治年中。住二乘院。康和二。年移興福寺。盛播宗乘。保安初。任大僧正。法相宗。下太平十七年。行基菩薩始。此藏歷三百八十年。信今預之二。年二月。遺病辭世。綱并寺務。五月八日。寂年五十五。

江州睿山沙門澄豪傳

釋澄豪。稱慧光房。初從睿山清朝僧都受圓教。後就隆範大德。綜貫三藏。精通台教。為山家模範。有弟

子辨覺。永辨智海。長耀真珍等。共是俊傑。唱檀那流義。慧檀法門。斯時為盛也。

和州興福寺沙門永緣傳 勝超

釋永緣。世姓藤氏。吏部郎中永相之子。母遠州刺史江公資之女也。緣九歲。喪怙。母氏攜至南都。憩於柞森適興福寺。慈善僧正奉詔。赴洛。儀衛甚儼。母謂緣曰。父以我寡。不能字。故將汝肄業於南寺。他日得如此師。吾願足矣。汝其懋哉。然我已老。不能見焉。言訖。潸然投一乘院師事。賴信聰穎。遂業。應德二年。承繼摩會講詔。開闢謝恩。年未不惑。其母歿久矣。及柞森

下思母言。訓感泣。不進從者促行。緣曰。我九歲時。慈母攜我。思此善。我成道。今林木依舊。慈母已非。我行遲遲。不亦且哉。緣領七大寺道福益賑。天眷優渥。乘車入宮。嘉承二年。奉詔。赴最勝會。為第二日朝座。諸師三井。禪仁僧都為問者。唱酬數番。五振金玉。事在仁傳。元永初年。慶最勝寺。供三百僧。教緣為導師。保安二年。任大僧都。轉權僧正。及老。解印。居花林院。天治二年。四月五日。化於院內。年七十又八。有神足勝超學。兼博識歷。三會講師。補興福寺主務。

贊曰。五母三遷。令其子為大賢。矣。緣公一隨妣訓。遂



成大器焉。吾法中是謂因緣輪也。

### 洛東禪林寺沙門永觀傳

釋永觀，文章博士源國經之子。慕勤息法，年僅小學，入山崎國成寺，授不動咒，一聞即記。夢中誦咒，寺主謂徒曰：「此兒宿世佛種也。」十一，從禪林寺演觀僧都剪髮受業。觀，華山帝之子，深覺之，資精於真言觀給事。左右遂稟密灌，辭往東大，登壇具戒，隨有慶顯具師資傳三論、經、論、遊社中，聽華嚴法相。年三十，而立入光明山摩尼餘營，偏修淨業。山棲谷飲，凡十年矣。道友崛起，住禪林古寺，演唱空宗，兼勸安養。洛下奔

赴大立化門於寺，異開構東南院，長坐淨修，以迄歲月。應德二年，奉敕為維摩會講師，宣治八年作上寶塔，安舍利二粒。寅昏禮讀曰：「若我生安養，則舍利當增果感分倍。」造刻丈六彌陀像，以分倍舍利，納佛之骨間。安樂王院，承德三年，應南泉舉，住東大寺。雖司鈴鐺，不用常住物，自畜資糧，以供齋鉢。眾僧犯風，寺院嚴肅，住持二年又歸洛東。性極慈仁，常往山園恤囚人苦，說法授戒，又好學不倦。然病多體弱，嘗曰：「病者人之善知識也。」我以病質，故知四大不堅，益勤修習。壯年以前唱彌陀，號日一萬遍。壯年以後至六萬

遍。漸及晚年，舌乾咽涸，只為觀想。三時誦經，一日不缺誦佛頂咒，三十八億九萬一百二十遍。夢中常見月輪中現七層塔，又禪坐時觀極樂相丈六彌陀髻髮現前。為天奉二年，秋示小恙，謂徒曰：「世尊八十涅槃，我今與佛同壽，取滅足矣。」臨終修往生講，中夜念佛頭北面西而寂。果香芬郁，紫雲垂房，實十月二日也。觀在隱約常辭綱位，任止律師著往生十因十卷，彌陀要記等。

贊曰：齊衡年中，具紹僧都洛之東山建禪林寺為禪密場。爾後南京東南院主輪次住持，歷二百一十餘

歲。永觀律師挾淨業而唱空宗，承久之比西山空公往後為專修之地矣。今過八百年間，主者之代更不知其數，而都人不謂禪林獨稱永觀者，豈其德名歲月磨而不磷者與？

### 江州三井沙門觀嚴傳

釋觀嚴，鎮西人。久在三井徧詢諸老，志氣勇毅，通大小乘。嘗謂弟子曰：「我是靈山會上五千起去，增上慢之一人也。根機未熟，雖滿在世之得益，被引勝緣遇，賊後之妙典山中諸師愛我，猶如父憐子。然本寺來會時，公家證誠座或申兩腳而臥，或揮片臂而坐，此

所以慢未止也季冬講建公伊僧都與關東定範爲對論嚴問曰大乘經中明生色究竟天聖者有二種別見其二入別者何等耶範答曰可利鈍之別嚴曰一者生無色二者發大心然色究竟天樂慧那含之生處也不可有生無色者又法華已前諸經中不明二乘成佛樂慧那含寧發大乘心耶所言利鈍別者善見已下諸大爲無利鈍別歟若無別者不足加難若有別者何獨樂色究竟天耶範不能答嚴曰若何我問分明答云見汝鈍根不足爲匹敵一會稱其爲辯矣

江州三井沙門證觀傳覺俊

釋證觀左相國俊房源公子自少入園城寺從淨覺法印落髮得度研精經疏學業早成應德二年冬爲法成寺勸學講證者承德二年補青龍院最初阿闍梨歷最勝會聽衆爲二會講師五年冬司最勝會講逸辯歷康和二年自權律師昇少僧都嘉承初轉大敘法印長治元年蒙探題宣依山徒之訴而止天治元年最勝會觀爲講師興福寺勝超爲問者問曰四依菩薩造論通經且如地持論妙樂大師爲如何耶觀曰問處甚疎濶也所問大乘論乎小乘論乎釋

義論乎勝經論乎抑亦論主菩薩乎翻譯三藏乎或黃卷朱軸之部帙乎紺紙金字之枚數乎所說教相乎傳譯時代乎可推答曰大乘論也滿座稱曰徵詰如流誰敢並肩或是秋七月瞻西上人建雲居寺慶讚八丈彌陀像請觀爲導師天承二年爲最勝會證義者長承元年主法勝寺八講會三年二月鳥羽上皇幸熊野山觀爲先登秋八月園城金堂落慶供養觀爲導師初保安二年夏山徒燒園城衆憂且悲觀笑曰本寺雖燒證觀未燒有何憂耶保延二年二月十一日寂又寺門有釋覺俊中納言資賴子從齊尊

江州園城寺沙門禪仁傳

釋禪仁越前守源基行子稟顯密於禮範僧都經論義解廣衆傳稱康和五年任尊勝院初阿闍梨嘉承元年最勝會興福寺永緣僧止坐講師仁爲問者問曰迎旂子以十力三念住等立不失法爾者龍樹大士如何破耶緣曰法相學者不玩龍樹釋能破之趣

何出之耶仁曰無著釋龍樹中觀護法註提婆百論法相學者何不披龍樹釋哉緣曰天親菩薩釋金七十論豈道僧伽之宗哉一會稱曰能問能答時人以爲美談矣嘉承元年歷二會講師天仁二年任最勝會議講師大治二年自律師轉少僧都是歲春日河鳥羽二上皇幸熊野山詔仁爲先登翌歲爲太僧都尋敘法印天承六年爲法勝寺八講會講主兼證義者其進法印日或入贈書賀之仁返翰云六欲四大之王昔所常備也小國邊鄙之位今何足喜哉七十餘歲住園城寺兼爲探題不詳其所終

日本書紀卷之五十一

十九

贊曰仁公之問處諸訛涉工緣公之答處從今中節如樂部遶參和而無一毫帶入帶我矣不置於經論奚能如此哉非翹當時爲美談亦可爲後覺之龜鏡也矣

### 江州延曆寺沙門忠尋傳

順耀  
皇覺

釋忠尋佐州刺史源忠季子其先出於清和天皇少上睿山學顯教於長豪覺尋二師承密灌於良祐阿闍梨義解廣莫二觀照修住洛北曼珠院化道孔盛保安二年正月爲最勝講師大治五年爲天台座主任大僧正天承元年春三月鳥羽上皇建得長壽院

召山門二井泉僧補洛慶供養詔尋爲導主帝及太上皇臨幸法會主官百司具仗儀衛二年冬爲最勝會議證義者保延三年春上皇慶鳥羽勝光明院其會式如得長壽院又敕尋爲導師明年十月十四日化春秋七十有四著止觀心要鈔四卷綱盡幽蹟今行于世尋自政曰余大治三年七月晦日詣十禪師社至夜濃更定燈漸微明神告曰本師釋迦以異方便述此妙義信如佛說可敬恭順我當隨逐此書庄養人法我在本身則叨利薩埵也今垂述化名號禪漢禪漢隨喜猶增法光故題漢光類聚鈔者乃依神告

日本書紀卷之五十一

二十

也慧心法義從事與南有學子四人順耀皇覺顯仰觀照耀修練口教尤善義論山泉呼養虎者疏記鈔十卷四教顯鈔二卷大論義鈔玄義鈔數十卷雜錄集三十卷覺義疏時居杉生誘學者有五時口決集一代心地鈔三十條口傳鈔一千七百條

### 和州興福寺沙門玄覺傳

慧信  
覺瑞

尊範  
信康

釋玄覺大相國師實勝公季子大僧正覺信族弟而隨承法相才識明敏通究家學大治年中兩回住興福寺領山階寺任權僧正保延三年春醍醐定海轉僧正南泉七千代嗣列訴以其越任覺亦轉正置正

三員自此時始有弟子二人慧信尋範其藤氏子學業成熟住一乘院後遷興願任大僧正又有釋覺晴字修學左僕射宗忠之子稟法相於湛秀已講善續其業永久二年膺維摩會講師酬對盡義住持唐院任大僧都移興福寺又釋信慶石中辨勝有信之子承法於賴嚴僧都精于唯識名播社中大治二年坐維摩會講師應衆僧問如洪鐘待挺擊任少僧都贊曰覺信範晴慶五師皆是法相家之英傑也俱歷南園堂講會之人而兼又琢戒珠垂密範其高山景行者吾不得而見之矣著之同傳以記其名而已

日本書紀

本朝高僧傳卷第十一

○三十一

京兆東寺沙門行運傳

釋行運號龍象從大教院學意僧都受兩部灌頂修精進熟履進無方志氣清潔不慕華靡諱名東寺金玉瓊飾本應世利一室清貧齋鉢不給侍僧諫曰無智能僧四事猶贍況師高德何至此極乎告大師具早承冥助還差爾曰吾自出家續十八道三時行之兩部行法每日修之未嘗對二寶求現世事今何驟志操終不驕焉成就院大僧正實助於東寺始修灌頂賜准二會以還臘德邵勤小灌頂依當時賞任權律師還歸房謂衆曰聞事僧官作何用乎待過三月

乃辭律師

贊曰爲比丘者無汲汲焉衣食住之資所不能免而佛尚制有餘矣何況用財官之潤身邪然像季已來不動心者林下罕逢其人也曾得見還公水雪顏於殘篇中國足滌我塵情也矣

本朝高僧傳卷第十一

日本書紀

本朝高僧傳卷第十一

○三十一

音訓

噴音問切 灑作旬切 魑蒲撥切 澍音注 還思廉切  
噴 愛筆切 啞倚買切 麗力霽切 隸力霽切 駭伯各切  
輪上商茹切 陬滑侯切 紉居有切 黼土莫古切  
輪 下餘經切 陬於口切 肄以智切 鈴其廉切 恤雪律切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
 本朝高僧傳卷十一 茲纂

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 謙



本朝高僧傳卷第十二

濃州盛德沙門 師蠻 棋

淨慧二之九

和州東南院沙門覺樹傳

釋覺樹右丞相顯房源公之子幼學讀書長慕梵經隨應信僧都於東大寺稟三論綜餘教天永元年登維摩會講堂酬辯翻闢朝家敕任權少僧都大治年中住東南院講眾填門名翼遙翔宋朝賜紫崇梵大師寄贈書簡并佛舍利八十粒以結法信保延五年二月十四日寂歲五十六有門弟十一人如寬信珍

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

〇

海重譽慧珍等皆一時英傑也

江州延曆寺沙門覺猷傳 永實

釋覺猷源亞相隆國之子稟顯密法於覺圓太僧正俱究底微鳥羽上皇聞猷慧解召鳥羽離宮問祕要構寺賜之崇遇撫至為護持僧尋任僧正天治末補園城寺長吏保延四年冬十月為延曆寺座主三日而退益避山徒之號也六半六月十六日寂於鳥羽精舍時人稱鳥羽僧正又釋永實大丞相師實藤公之早受顯密教於圓師與猷為法眷住三井圓滿院後移于治蘭若敘法印權大僧都任一身阿闍梨人

稱宇治法印有門弟十人住諸寺任僧綱

紀州傳法院沙門覺銓傳

釋覺銓號正覺肥前州人平將門之遠裔也父兼元累世有武鄉黨畏敬母桶姓有子四人皆為桑門銓第三子神志英邁裁及解嚴官吏催租喧呼自恣父匿不出銓問兄曰始我以為天下之貴無如嚴父今已不然何物更貴耶兄乃轉說官吏刺史宰官至公卿天子諸天日靡貴於佛故云無上世尊銓曰其道可得而聞與兄曰佛有三身法報應也其教有二顯與密也三身中法身為最二教中密乘為上銓曰今

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

〇

世有能登佛位者否兄曰紀州高野山弘法大師入定之地密宗之道場也其間修學精進傳密印者皆其徒也銓初志出塵適沙門慶照見其風彩誘至仁和寺與其師寬助僧正就同寺定尊習讀密典銓年十四助公謂曰昔弘法有言學金剛乘者當兼學性相命受法相於喜多院慧曉學三論於東南院覺樹二師優稱焉夢春日明神摩頂曰汝大法器後於他山必弘密教我當擁護天永元年歸隨助公剃髮得度稟十八契印護摩祕軌諸尊三昧永久元年再往南都究性相之蘊明年登東大寺戒壇受具足戒冬



十二月上高野山謁最禪院明寂阿闍梨精計密部  
保安二年回仁和寺受三摩耶戒傳灌頂法其夜場  
室現光香異冬十月抵醍醐寺見理性院賢覺法印  
覺者勝覺高弟一時達人也銓就傳五部灌頂事一  
家祕訣因問曰數修求聞持未得其驗誠精不足乎  
抑亦傳未盡乎覺曰請試說之銓述所傳覺曰宜哉  
不獲驗也仍彈蘊以授之銓重修之果得悉地矣紀  
之石手邑有清信士造神宮寺請銓而居大治初爰  
野山之再營謁鳥羽離宮先是上皇病夢南方僧來  
咒水灑體御惱即痊銓之容貌不異所夢皇情忻然

日本書紀卷之六十一

○三

睿信曰渥乃賜石手莊尋爲御願寺華神宮號爲傳  
法院安太八尊勝佛頂像蓋學侶三十六員銓以根  
來陟陞不能修大會太永元年朝奏建傳法院於野  
山講堂密室及密嚴院大極壯博十月十七日修曼  
荼羅供養如行傳法大會是日也上皇臨幸初銓陟  
和之信貴山多聞天王現形告曰爲我作講式銓卽  
製式五章奉之天王稱美持珠充謝銓辭曰無地安  
之異時必受長承元年使上足兼海上信貴山精祈  
天王授珠二顆銓日雖世及澆季本誓不虛銓嘗謂  
源一派分苟不揭厲何知淺淺便謂矣日河離宮日

日本書紀卷之六十一

○四

比牟雖受諸名德之灌頂猶未遂志不假天威曷得  
完全哉因逐次上名上皇曰曠昔夜夢八葉白蓮生  
於殿上今上人來坐於其所想登地人乎乃遣中使  
宣旨於諸師於是鳥羽離宮道場從三井覺猷傳授  
祕重至初夜時齒牙放光室內異香猷感喜曰非肉  
身菩薩安能如是幸事授受永劫不朽歷次于醍醐  
山定海勸修寺實信華藏院聖慧果祕蹟無底蘊小  
野官庫有金匱載籍多密家祕疏也運輸鳥羽宮賜  
銓劉覽鳥羽府藏殊珍器瓊物滿架充牣詔銓歷觀  
隨意取之銓乞弘法大師手畫等身影像并善女龍  
王畫像鎮傳法院其渥龍幾如斯一日到藤相國忠  
通第相國庭迎曰昨夜夢唐惠果和尚到令師來臨  
貴青龍之後身乎三年正月受上皇命以傳法院座  
主兼攝金剛峯寺保延元年解兩寺印居密嚴院禁  
止人事專修密觀龍玄兼海等竊窺之銓舉體成不  
動明王坐迦樓羅像中繇此山衆起嫌疑曰銓作傳  
法院巖於本寺欲擬高祖永開定扉瓦石珠玉其奈  
唐突鼓噪入院將毀撤定扉而不見銓惟見不動胥  
議曰其一必銓也銓鎖像時血流至地銓見悲之起  
復本身衆皆縮退無厭觸者遂率會徒往根來山有

司問罪配逐首領敕銓歸山上奏不返初圓明寺以爲終焉所詔爲御願寺銓修求聞持五百佛面從地涌出人阿字觀金字現壁入月輪觀浮現前池或喚徒曰狂狗入傳法院殿見之果然嘗曰廣智三藏依金剛智傳五字義修之十日對中秋月得除蓋障三昧我亦受此祕訣深信精修得初位三昧有信禪徒不疑吾言修鍊既久賞自知之惟願學人一生勿空過焉一日遭風疾遺誠弟子跌坐結印恬然入寂保年四十九坐夏三十康治二年十二月十二日也經日收斂顏色略然膚體猶暖鬚髮漸長二十一日聞

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

○五

維于菩提院融源來會對靈棺誦理趣般若至第二段忽聞棺中唱經首句源和誦之每段大然從茲振其流者對遺像誦理趣分必略首句矣元祿三年冬今上賜諡興教大師

贊曰銓公維持密流涓滴不漏興立家業而祖食于根領其靈威懿德不可得之稱矣暨乎閱禮之事雖澆末所不免抑亦寵赫盛而謙讓之不至也吾爲銓師之慙焉

### 紀州高野山沙門眞譽傳

釋眞譽不詳姓以登高野山師北室良禪阿闍梨受

密灌諸部其性誠實慧解過儕後入仁和承法寬助覺銓初在高野崇譽聽密譽亦欽銓重受灌頂蓋二師各有所長互相請益嘗初持明院爲國祝釐後賜旌宜準御願場爲傳法之子院長承三年夏五月因銓公奏爲羽上皇以金剛傳法之二座主職擢譽任之保延三年春三月東寺南山僧綱衆徒一百餘人捧書訟朝亡復職於東寺而朝家任譽以高野檢校明年正月十五日卒世傳譽生平精修因得忍位爲伏魔類生身入魔界云

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

○六

之言君子無所爭又無意無我老之言我有二寶不敢爲天下先故爭端一啟則正法湮矣世教弊焉當山衆侵銓公之定者嘆其座主職也繼及譽公而終訟成復之東寺後永不相和也天元長曆之間慈覺智證兩徒相軋顯密雖異其爭惟同豈翅顯密而已諸家之徒譏議皆爾何爲聖訓忽之悲夫

### 紀州高野山沙門聖仁傳

行慧

釋聖仁不知姓氏和州人也從醍醐勝覺承密印學業優富住遍明院常啟講筵保延五年司高野檢校是歲六月十二日化年八十二又釋行慧紀州湍田

人良禪之高弟。性識天悟。密學馳名。久安五年爲野山檢校。仁平三年中冬十一日。化壽八十八。嘗山中造精舍名總持院。

和州興福寺沙門隆覺傳

釋隆覺。源相國顯房子。幼歲隨南都大乘院。隆禪大僧都。落髮。稟戒。才量恢廓。長善家學。嘉承元年。應維摩會。講主。暨義明辨。保延四年。董興福寺。僧階。頻進任。僧正。住職。年久。退居。密嚴院。久壽三年。有敕。爲最勝講會。證義者。尋敕許乘牛車。以年七十餘。滅於所住矣。

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

〇七

紀州高野山沙門兼賢傳

基齊

釋兼賢。紀州海部人也。稟密於良禪。阿闍梨。神宋。額脫衆人。仰風。禪公。順世。移住北三義學。盈門不減。師德。仁平三年。冬。補高野檢校。保元二年六月十三日。以年七十。卽世。有神足基舜。就賢公。受中院流之密灌。流覽經論。善通底理。時人呼曰大智房。開大樂院。爲第十世。學密之徒。溫習絡繹。融源覺義兼海諸彥。就解受。瑜伽之指南。

和州興福寺沙門覺英傳

釋覺英。字圓松。丞相師通。公子。入興福寺。師事叔。

父覺信。僧正。學習法相。登東大寺戒壇。稟具足戒。聰穎。逸類。法華唯識。究底。竭。論場無匹。七寺相謂曰。其慈恩之再世。與抑亦護法之後身。與又善和歌。其絕詠人傳誦焉。未至壯歲。昇權少僧都。一日。猛省。義學。講論。只求勝入。全無實解。何成菩提乎。諄春日。祠夢。神告曰。子具修實行。我將擁護也。英卽潛出。南都。雲遊。四方。至興州。忍郡。一古寺。倚晦跡。菴居。朝乞村。落夜。勤禪誦。常唱春日明神後世冥助耳。臨終之期。預得神告。保元二年二月十七日。吉祥坐化。年四十一矣。明年西行法師東遊。到菴。柴扉蘿。篋。竹。覓流經。

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

〇八

麻衣古。芳。遺在座。僂破布囊中。貯法華要文三十頌。及燧香等。有小遺。蓋自述發心之事。歷又書柱題名。曰昔爲南都法相。學徒。列公家。法席。今作東國修行。乞者。住民屋。孤村。凡其夕。顧三笠山。而慕春日雲散。曉。仰。免率天。以念。尊實。臨公之記也。行詠和歌。以書其側。歸京之後。藤后璋子。語英之事。上三十頌。后令太僧正覺性。以誦習焉。

覺曰。英公有才焉。有。禪焉。若使假以年壽。而不終於東都。則大乘基之道。然復興於世矣。已。

和州草勝院沙門勝暹傳

嚴意

釋勝還，不詳其姓其所從，勝快大德，摘尋雜華爲衆，推重歷三會之講，住尊勝院，敷說華嚴，南北學侶風趣，波委有神足二人，嚴意良覺意者以博辯歷三會講師，覺者廣學日紛精於家教，共住本院，首于學實同，爲光智五世孫矣。

### 城州勤修寺沙門寬信傳 成實

釋寬信，大藏卿麻爲房之子，天性明發，加以精勤，習三論於覺樹受三密於嚴覺義解之名，揚於兩都，康和五年補勤修寺權別當職，天仁三年補別當職，承久二年冬爲維摩會講師，元永初年夏登最勝會講。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○九

座大治元年住元興寺，歷二會講，四年冬任權律師，賞修營之勞也，康治元年任東寺長者，賜敕黃曰：昔天延中定照僧都爲東寺長者，兼法相，真言之貫首，其後絕而不續，二百餘年矣，今膺此任，其才德可知，焉任權大僧都，久安元年領寺務，明年兼法務，是歲五月預最勝會證義，是三論宗證義之始也，三年夏補東大寺務初膺御齋會講師，送問者詞曰：眞言院道場忒汚，瑜伽座龍尾壇講肆苟連，論談延訪得天延古跡，隔二百回，日月歲，永治新恩，陪萬歲，最初康治久安間信於禁中修如法尊勝法於昭陽舍修仁

王經法，每修得驗，仁平三年三月七日寂，歲已稀年矣，信閱書不寢漸達五更沐浴就牀，大率爲常著類祕鈔類顯鈔若干卷，又有孫弟成實學通顯密補任僧正爲東寺兼學長者續祖芳猷建曆建保間修請雨經法有効驗。

### 和州禪那院沙門珍海傳

釋珍海，廷臣園基光之子，早從覺樹究其肯綮，器度清敏，好問於人，研核華嚴法相因明，歷三會講，每登師席詞鋒俊利，莫敢當者，時人僉曰文殊應化也，仁平年中住禪那院講法華維摩勝鬘經，暨于基年又

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

○十

修淨業，撰淨土義私記，決定往生集淨影義章，珍善丹青，與傳法院覺錢有割席之遇，畫金剛界大日像以贈之，余抵禪那院瞻禮寫照，鼻頭隆準，口角方廣，仍知其異人也。

### 和州光明山沙門重譽傳 樹明

釋重譽，不詳姓系，從覺樹於東南院研鍊三論兼通密藏，厭廣衆之交，入光明山從事淨業，終于所住著西方集三卷，又同時有樹朗稟空示於東大寺理眞律師住東南院開講三論與譽並名稱當世鸞鳳也，晚結精舍捨所業修淨刹矣。



系曰三論者祖述龍樹而蕩滌諸法之宗也然智光禮光至珍海重譽求淨土慕彌陀者無違於宗旨否通曰菩薩說智度論往往稱彌陀十住毘婆沙論彌陀爲易道是故曇鸞以龍樹爲淨教高祖迺祖已爾何違之有蓋夫事理二法者世界之所由建而先佛之所播教也色卽是空則一塵何立空卽是色則十果宛然不可以一紀三藏之單空同日而難焉

紀州傳法院沙門信慧傳

釋信慧字曜覺靈鏡之胞弟也少有旅力膽勇歷入鄉黨畏之呼鬼四郎及喪其父悟世無常人命稍脆

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

〇十二

志學出家服勤銀公多受警策學業敏捷早通密教逮錢住傳法院命學道雖會衆能雅不詳其所終矣

和州大安寺沙門慧珍傳

釋慧珍平安城人源顯嗣之子從覺樹受空宗住東南院弘演三論久安二年坐維摩會講筵能調義問任權律師長寬二年春住大安寺仁安二年轉權少僧都珍以施財修補東大寺食堂帝賞其功任主務兼法務辭讓實信嘉應元年夏奏解大安之印讓上足聖慶退于東南院以十月十五日寂歲五十二

播州性海寺沙門如幻傳

景雅

釋如幻在興福寺學唯識傳因明從良覺大德稟華嚴修觀念官任僧都後如播州開性海寺學賓蟻至修觀之暇講華嚴經一日罹病跌坐合爪向西而化香氣室外發若葬遺骸於寺後年六十二又釋景雅受華嚴於良覺以智德聞於南北棲止醍醐山側或居仁和寺岡隨處弘宗時人稱岡之法橋高辯聖詮慶宗出自其門

和州東大寺沙門顯慧傳

敏覺

釋顯慧不詳何許人從寬信受三論三密住東南院講授二教仁和二年董東大寺一住九日大衆服歸

日本書紀

本朝高僧傳卷之十二

〇十三

東寺成實從慧傳灌頂法又釋敏覺稟三論於覺樹兼通密教安元初自東南院移東大寺大啟講席

和州東大寺沙門聖慶傳

道慶

釋聖慶大藏卿藤師行之子幼隨慧珍僧都學三論天資英敏一聞師訓永記不忘未至冠歲性相理義皆貯心曲嘉應元年董大安寺繼經論表酬學者問列維摩會交錯問難講師勞答解時年十九兩寺探題與書賀曰講會以還未發之論也金闕最勝會白河八講會慶出衆問滿座驚耳平相國清盛請南北耆英講法華經聞慶演說極口褒曰鳥羽帝以來講



者不記其算未聞如公憶持文約機辯理深音輪宛轉不勝登聽頻請全軸焉關白基房藤公聞其才辯法成寺齋會將以慶充暨義者又將爲明年維摩會講師不幸短命逼病而卒承安五年三月六日也年僅二十二臨終端坐合掌誦中論觀業品諸業本無生以無定性故偈道俗聞訃皆哀惜曰朝日翳於雲霧明月入於重山也初慶生夜有優婆塞尼夢詣廣隆寺有清淨池小兒游溪隨爲淺水傍有人曰此妙莊嚴王太子故其神通遊戲如斯也問其名曰聖慶明日往語夢事其後出家諱曰聖慶於是父母及尼憶

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

〇十三

持苦夢拍手歎異焉勸修寺僧實幸夢其日東南院有西方往生人幸遣使尋報慶之滅也弟子道慶僕射源有房之子七歲從聖慶學三論稍長稟具究大小乘十九爲維摩會暨義歷學者問住東南院顯密講授未幾讓院於醍醐勝賢僧正只持不鉢入高野山修淨業而終

### 紀州高野山沙門房光傳

釋房光紀州和佐縣人器宇高峻如瞻斷山從北室兼賢受瑜伽法續北室席敷說密教不恥師德家法整密承安三年補高野檢校職治承三年八月二十

三日寂壽六十五弟子明善覺善傳在下

### 紀州高野山沙門心覺傳

釋心覺參議大夫平實親之子入圓城寺剃髮納戒學十乘觀法一日應詔禁殿與興福寺珍海論說宗義覺詞答屈從此捨顯歸密從醍醐之賢覺實運二師受小野法流入和州光明山不出山中二十五生苦修砥礪後登高野山就阿闍梨兼意究三部奧玄稟兩界灌頂精尋密部多著疏鈔素嫌僧官苦提惟求當常喜院考盤稱意三時誦經朝昏禮懺養和三年夏四月俄遭病惱不康日課六月二十四日結印

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

〇十四

生化

### 紀州高野山沙門宗賢傳

釋宗賢紀州三谷縣人少登高野創染習修學而明敏聽法相於興福寺依醍醐聖賢僧止承傳金胎兩部後回野山住東南院神氣強幹議論之場與覺銓爲匹敵承萬二年任高野檢校仁安三年依傳法院事配流薩州翌歲赦歸道俗仰風賢以檀貲建三間堂常修淨業安置金色佛像丈六五軀三尺十軀法華經二十部紺紙金泥理趣經一卷後以堂下進呈舊羽上皇爲祈願場仁平元年冬請衆供養於大日

釋迦彌陀佛前修法華光明之法，因告官家長日修之，有詔授阿闍梨位，壽永三年九月十三日念佛而化矣。

紀州高野山沙門定兼傳

釋定兼不考其姓氏，和州宇智郡人也。氣幹剛健，風格俊軼，隨侍北室兼賢，密水究源，究委教覺阿闍梨，愛其機辯，付正智院，使其立宗。於是大開教肆，啟沃來學，治承三年管高野檢校，元曆元年八月二十五日化，壽七十九。

和州尊勝院沙門慶俊傳

釋慶俊久侍隆助於尊勝院，學四法界五教章，研會圓理，接師之武，往尊勝院隨義學，請啟延講授，著探玄記鈔記若干卷，舉世玩閱，時稱大法房五師。

河州法界寺沙門如寂傳

釋如寂不知氏產，住法界寺，宗因真言傳，修淨土，元曆年中捨院，抖擻登高野山，九旬修練，有僧謂曰：此間淨邦報生之人，雖熟見聞而無緣筆之力，公其記實。其傳後世寂因纂述高野往生傳於今，行世其序略云：以庸淺之身，追方聞之跡，不整文章，無飾詞華，只傳來葉，將植善根而已。我念佛多年，引接菩提，弘家

未後學固取滅云

紀州高野山沙門明善傳 覺善

釋明善不審氏族，城州鞍馬縣人也。在仁和寺習藏密乘，涉遍經論，夙播佳名。入高野山，從于房光受灌頂法，光之滅後，遵命住北室，建久元年春補野山檢校職。山泉懷風五年七月十四日逝，年六十三。法弟覺善，紀州紺野人，風彩灑落，天機純真，久侍光公，受中院之祕，隨開引接院，大整學者，臨麻相續，法流瀟漫，世謂引接流矣。

賀州往生院沙門覺辨傳

釋覺辨不詳何許人，早登睿山研藝，後賀州山田郡開往生院為第一世。人欽其德，辨每歲春分招國內時彦，舉五部大乘經要文，輪次講說，結緣四眾，始於華嚴終於涅槃，謂之五時講也。建久之末二月修講，十四日辨膺講法華，十五日次位應講涅槃，辨謂之曰：我欲講涅槃，願公代我。我代公，其僧唯諾至十五日，辨剃髮沐浴著新衣，登座說忍成菩薩之因緣，辭義哀婉，講說方訖，告四眾曰：支那生師講涅槃經，卽座取滅，將追芳塵，瞑目低頭，就見之已逝矣。贊曰：辨公之脫灑也，雖禪門休歇之人而不多讓焉。

何通生公之應耶即與薄伽梵一路同目而行矣

和州興福寺沙門藏俊傳

藏俊出自北京貴姓從學勝勝超二師承其法相  
遊諸師門益研玄致仁安二年唐羅摩大會講義甄  
別開會美稱焉住菩提院弘敷本宗安元年中高倉  
僧殿上相宗章疏之目其以呈進治承二年董興福  
寺性氣純信神異稍多一時有故寺衆粹集俊應行  
之選衝夜趨壁突進其座衆皆驚愕平相國清盛崇  
俊之道聞其願世奏贈僧綱門人等向重其誼黃牒  
至寺藏俊即王使俄開眼願視左右無氣顯面少選

藏俊是七人覺意美蓋等名重於世矣

江州興福寺沙門顯真傳

顯真美作守應顯能之子慶登台道學顯教於座  
主顯真果顯能於法印相實學業成顯行名達藏  
藏不藏心懷肥遯辭僧都官退隱洛北大原壽永二  
年被帝幸日吉以明雲奏召賜僧官具開達門不受  
顯真曾依慈光房永辨之誘訪源空于吉水文治二  
年秋招空於大原勝林院會丈六堂問專念義空引  
道釋善導釋義極理盡辯曰此只述愚頑自分之證  
非全效大機上士之行真澄信其義捨餘行而事修

三年正月於勝林院與同志十二人修不斷念佛事  
明日夜感毘沙門天來現衆班冬十月大原山中建  
修智覺等五房爲道社所六年春三月敕任延曆  
座王避拒不赴天使臨而宣綸言無地辭免出任主  
藏五月二十四日勸最勝會證義拜權僧正繼統  
藏自率先之治山三稜法儀肅整建久三年十  
月十四日在于東塔圓融房舍安座告化春秋六十  
三終遺命敕全身於勝林院

和州東大寺沙門辨曉傳

辨曉中古之英匠也東華嚴於慶俊藏藏法相泉  
源顯真傳不遺遺德住事勝院貫首于學侶後白  
阿上最著名者要義論說初飲法印轉權大僧都建  
久十年藏東大寺常演大經修淨土法正治二年  
秋七月卒年六十國有弟子道性華玄教寬共一家  
之使茂也

本朝高僧傳卷第十二



本朝高僧傳卷第十三

濃州盛德沙門 師贊 撰

淨慧二之十

京兆仁和寺沙門守覺傳

釋守覺後曰河帝第二子母滕氏久安六年春三月  
誕焉十歲入仁和寺從侍大僧正覺性十二朝景  
納戒十九就性公受灌頂法嘉應二年董仁和席明  
年領圖宗圖融圖教等寺務承安元年補六勝寺長  
吏三年癸巳補最勝光院檢校聖觀春蓮華心院兼  
慶供養覺為導師安元二年敘二品親王治承二年

冬六波羅之亭修孔雀經法禪中宮座修中平義  
安德帝也高倉上皇賜書賞之乃讓覺感任釋大  
僧都四年冬上皇不豫修北土法於六條院神僧即  
痊元曆元年秋畿內地震奉敕修一字金輪法於六  
條院不日而止讓覺親覺而敘法服文治二年敕許  
乘牛車而出入禁門建仁二年八月二十五日順世  
壽算五十二葬於洛北紫金臺寺覺密灌究野澤書  
法華梵漢達于和歌顯曉文翰撰述儘多有修法要  
集六卷拾要集石記左記等於今以御室法流之中  
興而稱焉

贊曰覺公之皇弟八人相尋出家人顯密門各善  
佛法可謂五壇火熾六印水澄為公居其首尤為智  
德所謂天龍發奇芬者歟

泉州藥師寺沙門兼澄傳

釋兼澄世姓物氏泉州人生才出俗選格逼人早踐  
正智院定兼之門傳付祕印去住粉邑之藥師寺大  
掩密教後為羽帝賜為泉州僧統後移實光院常修  
淨業澄嫌世紛付院道範建仁二年八月三日以微  
恙化

和州寶積院沙門覺憲傳

釋覺憲康僧事通惠之子自幼依蓮社長養僧正  
髮受業唯識研心毘尼深體覺學之餘才識世典常  
居和州壺坂住寶積院遷招提寺杖錫所駐四眾景  
從住權僧正建久六年春東大之大佛殿復慶三月  
十二日供養眾僧萬指請憲於導師是日後為羽帝  
從百僚幸法會右府賴朝源公備武衛護憲之名盛  
播于四方建曆二年臘月二十七日安靖而化壽八  
十有二憲略納八宗大綱勒成三國通鈔以授門弟  
子等  
贊曰憲公有五昆季各以廣才優辯羽儀教林實繼



門之一盛事也

京兆大谷寺沙門源空傳

釋源空姓漆間氏作州稻岡人也父名時國母秦氏  
父母無子常禱佛神一昔夢吞刺力能而語諸夫  
夫曰汝其有身於菴漆之人乎從此母誓不茹葷腥  
長承二年四月七日生頭好而後眼黃而光宗族異  
焉至四五歲舉止動向西九歲其父爲源長明所害  
一室廢逃空潛於屏處持小弓矢一發中眉間其冠  
者填河帝之衛其曹也畏其額創隱而不仕皆人呼  
空爲小朱兒父遺言令出家人郡之菩提寺隨事林

入道授以四教儀試致問難酬答如響尤歎曰此  
也豈朽索所能驅哉付功德院皇圖阿闍梨闍者  
當世之博達也空時十五歲遂就圓公落髮其戒  
仕三載究申公教又從睿德黑谷庵空是又智德隱  
還山衆推重空爲事果實乘及菩薩大成年僅二十  
四凡大藏經卷他宗疏章莫不披閱之至其與義有  
自得處欲著所論遍問南都諸典福寺藏俊僧正述  
唯識達東大寺景雅僧都演華嚴就東南院寬雅大  
德說三論三師證明又見中川實範律師授祕密灌

頂及密疏之受其足戒事實律規空自記曰讀三  
遍其義自通不經勞苦既觀睿空空公時開慧心僧  
都往生要集於是基淨教思過半矣及見善導觀經  
疏大喜遂廢所習專修稱號承安四年移洛東吉水  
盛說專念法及圓頓菩薩大戒都下靡然高倉帝特  
加禮敬詔入宮中受菩薩戒相國兼實藤公請第問  
淨土法空述選擇本願念佛集進之蓮社之徒傳爲  
祕要空勸化四衆遷大智茂河原屋勝尾寺大谷寺  
到處人民若肩奔波顯真靜嚴明遍證衆公胤細林  
之題也也從空兩專念法空修法華三昧普賢衆曰

東理於道場讀華嚴大經護神化青蛇蟠於案下  
太皇后於上西門院誦空七日說戒門屢有蛇屈蟠  
不動每有說戒在側耳執空敬日久其頭破有物髮  
髻似人昇天去矣後曰河上皇召山門三井碩德於  
摩宮修法華懺法空爲導師於法住寺就受一乘圓  
戒又詔山門三井名德請往生要集空列講大教寫  
空之真置于蓮華王院實惠空夢高僧乘紫雲來黑  
彌衫金褱子威嚴正空曰我善道也感汝稱名念佛  
特來證明焉翌朝命畫上乘臺圖之於今其從展轉  
模寫焉大炊御門左丞相經宗藤公花山院左丞相

兼雅藤公受圓頓戒聽專念法藤相國就于月輪聖  
請講淨教空出相國隨後拜之謂左右曰空師頂上  
湧金色圓光若等見之乎空於三昧牀屢見淨土勝  
相或入水想觀現琉璃妙境入地想觀宮殿寶樹等  
現或彌陀觀音勢至並現於室中或暗夜看書兩眼  
放光建永二年門生之中有犯王制者責歸於空春  
二月竄讀州謫居五稔誘導日多空日不因播遷豈  
利於海濱邪是亦弘化之幸也建曆元年承恩還都  
二年正月在大谷寺染疾問弟子曰有所見乎皆曰  
無之空曰我十餘年存視極樂相及佛菩薩真身今

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○五

又來現也二十五日朝高唱佛號諸徒助和久皆聲  
渴空獨不嘔至停牛時被慈覺大師僧伽梨頭北面  
西誦光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨之偈  
如睡而寂享年八十坐臘六十有六示寂之前紫雲  
降垂元祿十年春征夷大將軍兼左丞相綱吉源公  
奏朝教謚圓光大師

贊曰空公累米節儉不昇僧官謹律息心全無入我  
相兼決定心入稱名門以他力本願而警發勸掖創  
立一家之業矣說說法齋慎哉勿違于先祖之志焉

城州笠置寺沙門貞慶傳

釋貞慶左少辨慶貞憲之子也母夢一高僧自稱貞  
慶入其懷從茲有孕久壽二年夏五月生在孩孺冀  
貞乘年甫小學師興福寺權僧正覺意及十一剃髮  
受戒字曰貞慶母聞之曰實比丘之再來也奇氣深  
重防止守嚴習訓皇皇爲時所欽壽永初年陞維摩  
會主座文治二年再充公撰在興福寺二十餘年居  
資慶空一日應詔赴最勝會宮講衆皆先到從服整  
美慶獨殿而至歷階直登衣衫破弊乘僕借入官僚  
綈伍低頭匿笑慶曰杜多之行先佛之遺訓也方今  
釋氏不據法儀競尚浮誇不可同伍焉講畢不還隱

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○六

乎城州笠置寺時年二十九名聲彌著後爲羽上皇  
樂楊柞游好射慶應暮年悔過落慶梵宇以薦鹿福  
聞慶德望詔爲導師慶攜一筇一笠飄然而來以筇  
笠植階側意氣自若據座說法舉鹿苑事辭辯流暢  
因譬壯麗君臣感歎貴其朴素慶詣春日祠羣鹿屈  
踞承元二年移海住山寺一住六年學資遂跡本業  
者多慶雖以法相立宗而律規爲務平居肅然罔違  
尋憲作警誡十一條號儀觀欽其辭義深長固足策  
進後學也嘗訓衆曰色相如水上月似有非有富貴  
如夢中樂一覺永空色卽是空故不捨法外而至菩

提空卽是色故不住涅槃而度衆生學者須了知十  
界淨淨只依一心者耶建曆二年在于海住山初冬  
示疾明年二月三日坐化春秋五十九夏臘四十九  
朝廷崇其德謚解脫上人慶兄弟四人爲僧諱籍延  
曆園城貞雅自覺實玄貞圓研究家法各稱已講又  
神足數輩明光院覺遍東北院圓玄新院良算角院  
瑋圓等當世之俊人也其枝葉蕃衍具列于法相宗  
系圖焉

贊曰世之不知稱解脫上人者千載不磨之口碑也  
使遠想高潔之儀操是以春日明神屢現影於般若

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

〇七

臺間法戒誠協于神人之德也哉

江州睿山沙門證良傳

釋證良神銳強達從隆慧永辨二師慧心檀那之法  
流盡其源委入寶處院離世閉戶翻閱大藏十有六  
遍不知源平之擾亂也住東塔華王院大張講席後  
構寶地房獨任署述撰私記三十卷扶登公教山家  
學者至今珍玩焉雅言衆曰遠師太聖世尊近師天  
台荆溪其餘者不足用之嘗膺太會講師止義曰三  
惑者異時斷石非無明者等覺智斷也我看一代經  
論未嘗見同時斷妙思知斷之文衆伏其宏覽矣安

居院澄憲爲題者調衆義曰豎者已振智劍題者豈  
不拔鈍力耶山中以爲美談也文治五年奉敕爲論  
義探題尋任法印嘗謁源空果圓頓戒問專念且元  
久元年真勸座主慈鎮選四谷之碩才二百七十八  
於根本中堂九旬安居論講決擇法華仁主等經高  
倉上皇賜院具令真判正衆義維講會者長保年中  
覺通僧都奉詔權輿中廢不行真復興之也

贊曰真公駸駸不黨滯思著書人無知之故逸於釋  
書大筆耳頃世興聖寺圓耳始獲其書於睿山僧金  
自爾繡梓盛世玩之質文要焉析義精焉其扶翼之口

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

〇八

教也雄視宋四明之諸師而博洽不讓實山家之魁  
才也或傳真公當謂智者賢藏十五遍吾尚加之大  
師現曰汝十六遍不如我一遍也是謬識之言而無  
所取材焉

筑前香正寺沙門良祐傳

釋良祐號安覺一名色定卽建仁榮西禪師之弟也  
甫七歲歸釋氏習業良印學頭剛記捷窺種智風發  
讀書五行並下操觚千言立成未盈冠歲博涉精通  
誦法華四功德之文始志全藏書寫之願奔走四方  
紙墨化入一時緇口資助者多華筆力書造天不歇

雖行程間必具筆硯，筑之古源觀，首香椎箱崎豐之  
彥山，淡之武嶋等地，遊歷踏遍，踰海在宋，餘十寒煥，  
暗記一藏，不舍寸陰，還止筑前田島住，香正寺，祈素  
願之速成，且誦北大寺神胸帶經案，行步揮筆，承元  
初生終功，一筆凡經律論該計其部六百三十八其  
卷二千七百四十五其帙二百五十八也，太官司宗  
像氏國與祐雅好捨財，建堂度神祠，側祐自彫像，守  
護真典，鎮西奔瞻，奉奉禮焉，以其年仲春，祐告徒  
曰：望日吾行矣，至期持念珠安坐念佛，諸徒圍繞及  
日亭午，瑞雲覆院，甘樂聞天，祐忽曰：時至矣，又手當

日本書

本朝高僧傳卷之十三

〇九

胸辭衆而逝，顏容如生，葬於高天陵，歲七十三臘，若  
于夏矣。

贊曰：宋羅大經鶴林玉露載祐公之事，云余少年時  
於鐘陸邂逅日本一僧名安覺，自言離其國已十年，  
欲盡記一部藏經，乃歸念誦甚苦，不舍晝夜，每有遺  
忘，則叩頭佛前，祈佛陰相，是時已記藏經一半矣，嗚  
呼無邊南洲佛涅槃後，或有記一二經百書三五部，  
金文一藏，暗記暗書者，我未聞之，古今一人而已矣，  
吾國東瞰之初，浴處瀛海，混濛之氣象，人鍾其神秀，  
而斯瓊奇倬詭產焉，以爲扶桑萬世之盛美也。

### 江州園城寺沙門公胤傳

釋公胤，未詳其姓里，自初學時，稟賦敏黠，夙投三井  
習貫經論，偶會相者曰：公才出羣，惜不冠歲矣，其師  
藝之，令胤誦尊勝陀羅尼，每日二十遍，以祈延齡也，  
胤日精誦，增以數遍，三年之後，相者見曰：公積何力，  
至于壽逾八十乎？釋子之相實不可測也，胤周覽三  
藏，粹于顯密，衆稱佛法補處之人也，補園城長吏任，  
僧正，常嫌源空唱專念法，而作決疑鈔三卷，一日與  
空宮中相逢，一談而遂，燒決疑鈔，爾來屢往吉水，問  
往生法，永平道元在睿山時，往問法身自性之旨，胤

日本書

本朝高僧傳卷之十三

〇十

曰：此問難酬家傳，不善有佛心，宗能明此事，若欲精  
究，往問彼宗胤，晚解職屏居禪林寺側，靜觀欣求，以  
送炎涼，建保四年閏六月二十日，齡八十餘，奄然而  
寂，臨亡，頂上放太光明，奇香發越，紫雲覆院，天樂湯  
空，是歸樂土之相也。

贊曰：唐懷感初聞念佛，疑冰不消，依善導之勸，遂證  
三昧，乃作決疑論七卷，胤公之事，粗似其筆，與炬之  
共君子之舉也，訓道元之言不謬於宗，亦君子之公  
舉也矣。

肥後飯田山沙門眞俊傳 相俊



釋其俊少上睿山從座主忠尋承稟台教就皇慶門  
齋灌沐密水爾後陞高野山隨心蓮大德傳南院流  
謁俊覺法師受中院法凡顯密兩教大小諸疏無不  
罄盡矣鎮西之人稱般若房密撰祕密莊嚴記一百  
卷有弟相俊從兄稟學括囊顯密知行連壁真俊語  
曰子才解博人復稱呼乎俊卒果曰後般若房泉涌  
俊仍律師久侍一俊受顯密法

和州興福寺沙門恩覺傳

釋恩覺字法明就隆覺僧正研習宗教兼內外典往  
洛之法勝寺首於學徒還居興福任傳燈大法師位

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

○十一

仔肩法相以爲己任應保二年著應和宗論記南北  
戒律勝劣違偽與真章追撰台宗春日明神敬其才  
識由是異多一日坐室廬入達之覺豪毅不衆交常  
居南大門上衆畏憚之出入鞠躬於今衆徒翳焉過  
門職而斯由也覺欲移他所春日神雷之不可而行  
至於巖淵迅雷履躡保齡七十餘矣

贊曰余看興真章等書彈壓日教登崇相宗雖又裁  
拙而周證縱逸可謂義學之沙門也使邪損其猶裁  
之圓成實則何有彼我之介懷哉觀律於雷公亦豪  
餘之所致也與

紀州華王院沙門覺海傳

釋覺海字南證未委其氏對馬島人觀遊上國從醍  
醐座主定海承稟真教神氣俊發義解絕倫後住野  
山之華王院皇張密席時之義虎法性道範等俱遊  
其門建保五年爲三山檢校海嘗祈弘法大師塔知  
七生事行蹟多奇山中振古魔事熾盛動擾行者障  
礙善事海誓欲調伏以護教一日兩腋忽生羽翮踰  
倒門扉凌空而去時年八十有二貞應二年八月十  
七日也山中於今往往見海云

系曰心者天地萬物之根本也矣以得正途之以入

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

○十二

邪路之止觀修焉阿字觀焉所以復根知本爲心之  
祖而不待遣之魔自沮伏也海公定力不足將憑咒  
力伏之還成墮其中冠僧爲蓋以法執膠固而根  
本不明之過矣前已辯之近世此弊多故重言耳

京兆禪林寺沙門靜遍傳

釋靜遍大納言平賴盛之子師醍醐座主勝憲傳小  
野流依仁和上乘院仁隆掬廣澤流初居仁和寺有  
瑜伽之譽誦源空拾聖道門立專修法欲著書破之  
會見選擇集反思其益於末世著作續選擇集高倉  
上皇敕住禪林寺遍外說密乘內修淨業貞應二年



四月二十日唱彌陀寶號正念而寂

紀州高野山沙門明遍傳

釋明遍京兆人藤給事通憲季子也自幼入南都東南院從敏覺明海二師承三論兼學密教遊行諸方年三十一入和之光明山絕交菴居朝命累召謝恩不起承安年中源空弘化遍始出山受專念義即上高野不下麓者殆二十年矣給事多子皆是英特緇林尤蕃所謂靜賢勝賢澄憲覺憲及遍也藤給事遠忌諸昆弟議將修八講使遍掌一軸乃遣使告事遍曰我已逃世隱棲此山菴中誦經報恩足矣又何出

日本書紀一本朝高僧傳卷之十三

○十五

山揖退使命諸昆弟曰遍才被世吾儕不若故議充散事人言已然也豈逃世之士念孝乎重使人報之遍曰念孝乎只怕人諸哥之隊耳夫身世俱棄者逃之全者也而棄世不棄身者逃之闕者也今之諸名德是也且諸兄者二都之高德也我廁其間効薄伎慣孤鳴已失隱約之素非念孝也便以友慧智入京代法事諸兄曰遍稱時議論屈我曹今猶然也輩下相傳高其操矣遍以貞應三年六月既望頭北面西唱彌陀寶號合掌而化壽八十有二矣

系曰孟子曰不揣其本而齊其末方寸之水可使盈

於岑樓平治之亂給事自終非命爲天下之所笑遍公恥痛絕世深隱每聞諸兄之舍垢權大利昇綱位常頻顧之故危言而微諷焉非矯激而高尚者又謂凡事有宜不宜之分澗溪之毛潢汙之水可薦之可祭之而況身爲釋子有禪悅之食法身之香則各自薰修以清淨齋可報孝思耳何追福若之哉必比高貴家用太講會乎其意如斯然則遍公之法供廣操守全而孝忌具焉可謂具修之人也濟北師之論而謹之余不敢聞命矣

京兆長樂寺沙門隆寬傳

日本書紀一本朝高僧傳卷之十三

○十六

釋隆寬字道空一諱無我給事中藤資隆第三子幼陞睿山師範源大德落纓得度從座主慈圓探盡玄蹟學業方成慕源空之風屢從乞教空出選擇集曰專念日要詳於此書公博瞻篤誠劉覽得益餘是廢先習欣淨刹八萬四千稱號日別無闕遂出睿峰居洛東長樂禪院專念結樂邦緣緇口相集如鳥入林寬立多念義設問答發明之建久年中睿山根本中堂安居結願衆議招寬爲導師辭說婉轉聳動衆聽嘉祿二年夏以山徒訴朝議以寬謫于興州寬申承訣之思於長樂之來迎院一七日中修如法念佛散

延之日白芙蓉一朵生庭陸觀異香天華之奇祥初秋出洛抵鎌倉府森氏西阿傷其遠滿啟平元帥使弟子實成代赴配所而編實於相州飯山仲冬嬰風疾臘月十二日端坐合掌誦彌陀身色如金山相好光明照十方唯有念佛蒙光攝當知本願最爲強之文而終彩雲垂宅天樂鳴空異香襲發壽登八十也寬看善導蛇文始致講輔制作鈔章扶淨土門有弟子敬日智度等各依所承教化華夷矣贊曰以寬之才識學行高弟于法然之門善慧聖光宜爲鼎立焉昔唐玄奘三藏講經白蓮生地前後一

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○廿五

按修得之所感不可客疑也

### 紀州高野山沙門明任傳

釋明任不記姓氏紀州神宮縣人也志氣嶄新辭辯激沸從事定兼受傳法灌頂又見北京瑜伽師抱小野廣澤密水兼公滅後住正智院繼以家學教育英才法性道範等十餘員出於其門下嘉祿二年補高野山檢校職德達禁展敕任法服寬喜元年十一月十日無疾而化壽八十有二矣

贊曰法性道範稱八傑者曰皆出於門任公之精于金剛乘也可推而知焉搜尋狀實不盈十行不文之

歎古今以然

### 京兆白河沙門信空傳

釋信空字法蓮左中將藤行通之子誕而匍匐聰明見面考顯時乞育將入釋門及長讀書吟咏流暢至年十二藤公乃製羣布伽梨直授投黑谷睿空室剃戒服習睿空寂後隨侍源空受圓頓戒教學專修菴居白河開導道俗思沙門堂明禪宗之雄匠也一日邂逅談內外典禪曰公見何人如此辯利耶空曰吾就源空學性相教別無長所禪嘆曰聞公之辯才慕空師之道貌也其後禪公逢入稱焉空以安貞二

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○十六

年重陽日披鬱陀羅衣奉空師之靈骨唱寶號數遍合掌而化壽八十三

### 筑後善導寺沙門辨長傳

釋辨長號聖光筑之前州香月莊人應保二年生七歲入州之菩提寺師妙法肄經業十四剃度歷侍于白巖寺唯心明星寺常寂學習圓教義解川增受寂指揮隨觀睿于睿山睿試問曰第一義爲教體耶三諦俱爲耶長曰開權顯實之日三諦俱是廢權立實之時中道獨在焉又親炙實地房證具探八教之幽致往于攝之三寶院謁能忍問禪要聽宗鏡錄忍以

俊快推之。逮久三年還鄉之油山寺。在于學頭職會弟之祖。棄修淨業。明星寺果請以住持。居之八年久。廢繼復同八年入洛。見于源空。空殷勤說曰。不修雜行。但念彌陀。服誨三月辭回。鎮西安。居稱號曰六萬遍九年。秋往化。豫州縹素雲集。元久初歸。明星倡淨教州之高良山下。有一精宇。安丈六彌陀佛。邑民招長。修千日念佛會。良山徒眾嫉其誘化。曰。此山口密二教之地。而今辦長喧呼稱名。將驅其黨。約期明日。其夜眾夢。光明赫然。自西方來。照于道場。傍有人言。聖光稱修化佛向臨。故瑞如此。一眾驚識。助其弘通。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

〇十七

有要阿作阿。夫妻家富。歸法就山本鄉創善導寺。延長主之。殿堂聯字。四部林會。六時禮讚不失。蓮漏暇講。聖經警策。學徒空師將寂。親盛問曰。當決疑於誰人。空曰。聖光聖覺在焉。安貞二年。應肥後往生院之招。四十八日修別時念佛。感善導之來。嘉禎二年。撰微選擇集。授門弟子。嘗謂徒曰。在昔睿山得諸法實相之說。後來吉水傳念佛往生之義。料簡二教。理義融焉。聖道人不不知佛意。唯念佛者難契。教曰。夫欲開太聖之祕藏。須用三事之管鑰。我斯言。龍鏡學者宜屏心若闕。一法慈。二信。三願。局矣。長平居或見樂土之

變相。或值法會。暴雨不霽。則檐端精初。白日忽照焉。一日疾告曰。樂國聖眾充于半天。阿彌陀佛今來迎攝矣。因聚門人。廣說如常沐浴披衣。向西端坐。持彌陀經。與眾念佛。唱光明遍照之句。偈音未終。如眠絕氣。四支柔溫。顏容怡然。世齡七十有七。法臘六十有四。嘉禎四年閏二月二十九日也。葬全身於寺後封築墳墓。門人檀越。感其往生之相者多云。贊曰。源空之徒三十餘輩。各化一方。而不及十世有一二之遺續者。落落之長庚矣。耳唯聖光善慧之裔林。正基布是。謂鎮西西山之兩義也。自邦畿千里暨

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

〇十八

乎。燕服四邊成羣。作隊。靡不唱號相應。處世者實念佛之一門。與若夫祕藏管鑰之藥言。儼起於其徒之膏肓焉。

### 江州睿山沙門幸西傳

釋幸西字成覺。住睿山西塔院。究天台經疏名。于三塔及喪弟子。後觀幻世。謁源空。學專念法。探淨土教。依天台義立本迹。一門釋真佛曰十劫正覺。迹門彌陀也。無始本覺。本門彌陀也。即與眾生所具性無有差別。然則真佛在眾生。一念因立。二念義曰一念者佛智。一念正指佛心。凡夫信心冥會。佛智一念是彌陀。

本願故行者信念與佛心契則能所無二信智惟一  
念念相續決定往生此外尚有義釋數條又述略料  
簡二諦記其扶淨教門人甚多正定明信入真善性  
勤信等各事弘敷

本朝高僧傳卷第十三

本朝高僧傳卷第十三

音訓

驢 吉器切 索 昔各切 託 丑亞切 若 汝也 竄 丑亂切 播  
補過切 渴 丘滿切 頃 所嫁切 謫 子淡切 乙六切 醫  
本也 哥 居何切 厠 初寺切 謫 舌戰切 陟 之石切  
藏也 哥 兄為哥 厠 圓也 謫 舌戰切 陟 登也  
新 牀成切 匍 匍 上蒲切 下步黑切

江府住玉泉新成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷十三

茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘

撰

本朝高僧傳卷第十四

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之十一

城州高山寺沙門高辨傳

釋高辨號明慧父平重國紀州在田郡人母藤氏無嗣禪佛夢人與金橘人懷有妊承安三年正月八日生容貌端正纔在玩境聞誦梵經忻然不去年甫四歲其父獻以冠巾加兒曰安得長成速登朝階辨謂我慕佛法無意世榮不如殘體止官途思首陞垂堂家人走救復欲以火筋通紅創面試擬左脅傷入止

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

〇一

之八歲父母相繼背喪上高尾山師事伯叔上覺讀羣經五藏章俱全領教歷旬決皆能開誦偶與羣穉戲自省曰二親既沒未知昇淪若在三途我有何樂生天無礙見我遊放從此戒懼益勤研習十歲遊學關西乘於醞醕實尊習羣嚴於南都景雅又就尊印學悉畢至微字義辨意款然一夕夢覺僧授以深義皆印所未聞者也十二自惟云諸佛修因不惜身命救饑餓虎宜修苦行或上山椒終日禪坐往屍陀林通夜止宿羣獸滿地臭氣難禁狼狗集冷顯辨而去歸命文殊持五字咒禱曰以大聖加被得如實智

救濟有情十六就上覺剃髮受品具於東大寺戒壇

謁尊勝院聖詮詮者其雅神足精于雜華辨所昏請益深究圓理十九從小野與然阿闍梨栗雨部密灌止梅尾山又登紀州白峯山菴居修觀依不火食患痢數日夢神僧與杯羹瘳後餘甘猶在即時疾愈一時久旱辨作一龍修大佛頂法加持香水登山灑下即雨三日矣文覺法師常語人曰鶯子目連是證果人三學之功我難得擬然至心法了達潔白爭若明慧乎建久之季招住梅尾山四眾歸德於是講探玄記梵網經等榮西禪師新弘禪法辨往來參請得其

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

〇二

心訣西徒圓空問禪觀法西曰明慧長老坐久功積成就此事往彼參取辨常以我國慧學者多定修者寡是為大患便入北山嵩岳修禪定五門禪要達摩多羅禪經以為心術製講式五章以祭達磨大師又依華嚴宗義撰坐禪次第入解脫義各二卷嘗曰首楞嚴經者聖經之眼目也禪觀之眼目為眾開講常修佛眼明妃法夜出堂外經行待念忽見羣猪背負五大星光明燦爛自西而過又夢明妃告曰明日授子般若理趣分翌午壇上有微妙音誦理趣分辨援筆記之又辯才天女來現談法修不動法忽見道場



變成寶苑奇花妙香幢幡羅網嚴飾備足寶鈴右邊辨身梵僧三十餘人手執香爐歌頌讚歎一日截耳供養佛眼其血淋漓像及壇壺其夜夢梵僧謂曰三世諸佛悉以身肉布施子其庶幾乎於石水院講梵網經梵僧列座又文殊來授持戒印明至今寺僧相傳讀摩嚴經至如來在他化自在天宮說十地法門之句天莊嚴相自然現前又見文殊乘金毛獅子現於空中光明赫奕侍僧皆見辨謂徒曰不爲奇特不爲殊勝如說修法汝亦如斯或行道時額間骨際放光照室衆皆見之或鬼類託人受辨戒法元久二年春

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

○三

與同志欲從昇丹達於天竺一果糧已備屢疾不果知春日神尼其遠遊而遂止焉是冬臘夜智禪達曉凍際忽天童來摩頂安慰與語其後常隨給侍建永元年冬十一月後鳥羽上皇敕賜梅尾山永爲華嚴興隆之地號高山寺此處者古蘭若之地廢積年久從辨移住院宇興復盛明賢首之宗相國兼實藤公請修此寺供後夜七星降臨道場承久初年詔爲京都草勝院實自後泉二夏辭回本山建保六年賀茂神山結菴禪坐大祝能久挹風歸法施以藏經平皇后德子建禮門院請辨受戒乃在簾中令辨坐下辨曰持戒

比丘不拜神明不敬王臣下生說法則師資墮罪經有明文須請他人將起出宮平后褰簾趨出悔謝延辨高座稟戒益敬承久之亂敗土匪山東兵義景搜捕及辨主將平恭時素聞辨德望下庭延拜辨曰僻處山間所學忘失況於世間荷負何事吾山禁殺飛禽走獸亦常避害是以逃去兵或竟結界本師諫訓遇苦即救不愛身命含忍驅逐之有妨政令劉老僧頃志氣自若恭時垂淚曰武人不知漫入淨刹請上人來無所謝罪然幸拜謁因問生外事大其後入山問法詢以政道辨雜儒釋殷勤說示平氏供以丹波莊

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

○四

田辨辭拒曰沙門只當貧窮若處富貴必有放逸邪僻我屬給足矣辭而不受平氏常曰我治家國偏依辨師之教化也城介義景後從辨出家曰覺知常隨給事私淑其道辨與空置貞慶松尾勝月友善月於松尾慶讚寶塔辨爲導師實喜二生後堀河帝詔辨說法講訖出宮中納言藤定家揖送曰聽教妙說結緣感悅其爲時意所賞如斯三生今得微志四年正月十五日夜對彌勒像端坐入觀口放白光移時出定告門人曰吾行期近矣因言臨終法儀十九日朝廣說修學始卒即唱慈尊寶號右脇而逝微笑見而

異香襲入春秋六十夏臘四十六塋梅尾禪堂院後  
辨三學兼備大小權實顯密二教因明內明孔老二  
經及數論勝論外道書策莫不錯綜焉爲民部卿藤  
長房詮釋金師子章撰光顯鈔二卷其餘述作華嚴  
唯心義釋華嚴修禪觀照入解脫門義各二卷孟蘭  
盆經總釋善知識科文功德義鈔菩薩戒儀各一卷  
摧邪輪三卷菩提樹寶塔式四卷凡有七十餘卷其  
摧邪輪博引經論疏釋破源空之選擇集承其法者  
五人喜海道澄隆詮高信了辨也海公集辨師行狀  
贊曰辦公者本朝華嚴宗始祖審祥十七世之的孫

日本書紀

本朝高僧傳卷之十四

○五

也嗣香象緒傳黃龍禪使昆盧華藏海湧騰太覺中  
與清涼主峯長水行事相似爲其好仇雖此方高僧  
多而如辦公者鮮亦僕指焉昔唐開成中僞甘露發  
李訓等叛臣入終南山托宗密禪師仇士良捕密左  
軍數不告之罪將害之密公怡然曰貧道識訓年深  
亦知其叛然本師教法遇害即救不受身命死固甘  
心魚恒志貴之奏釋朝士聞之扼密公腕皆出涕焉  
此又與辦公舉厝特似也

### 城州醍醐寺沙門賴賢傳

釋賴賢字意教性氣深厚明敏出儔隨侍成賢稟受

家法成賢謂曰我有三願一千日修彌陀護摩供慈  
母二暗誦法華一部三遷世閑居有故未果汝代我  
而修之乎賢即修彌陀供暗誦法華實其散日告成  
賢曰二願今滿矣朗誦數軸音如流泉一字無滯成  
賢大悅授密灌及祕軌口訣付以信書賢即辭去肥  
遁野山一生不出三願克終焉

### 京兆九品寺沙門長西傳

空寂

釋長西號覺明讚州人九歲上京肄業管家十九厭  
世拜源空於大谷寺薙髮從事六時稱號時空公年  
七十及空歸寂乃遊諸寺博問教乘謁出雲路住心

日本書紀

本朝高僧傳卷之十四

○六

大德聽公教見泉涌寺俊衍律師受止觀及戒範參  
淡岬道元禪師探教外旨又依同門衆念佛法義周  
遍習串後還故鄉開西三谷寺弘淨土法又上京師  
闢城北九品寺日夜專修都下緇白憧憧徇門嘗于  
義曰念佛諸行彌陀本願穢土衆生機且異故有九  
品別隨所修業皆生報土已生報土齊是不退通是  
極樂藏世界海會衆生直受法樂管至十方於諸佛  
所歷事供養現前蒙記頃歷十地忽至補處或於十  
方速成正覺或以大悲起闍提願應遷拔濟盡未來  
際業用無方第十八願念佛衆生第十九願聖衆來

迎第二十願諸行往生第十八中有三業念前十二願是觀行觀修習定善思惟方便正受觀成三輩散善歸終見佛眼開證境是觀瞻觀觀佛念佛定散門思得定證境二味是同故觀佛念佛兩三昧爲宗或約章提請定善爲宗約佛自開散定爲宗由定善故觀佛爲宗由散定故念佛爲宗二門互取互成一宗也弟子空寂精于淨教於先達釋多著疏鈔觀無量壽經著疏五卷善導觀經疏述記八卷元照彌陀經疏集鈔三卷南都知足院了敏隨寂承淨教此外門英甚多所謂澄空理圓覺心十地道教上行證忍各

日本書錄

本朝高僧傳卷之十四

〇七

隨所承勸講淨教

和州興福寺沙門信圓傳 實草

釋信圓大丞相忠通藤公之子投興福寺侍太僧正慧信承唯識學廣通性相常看經論造次不釋遂奉帝敕住興福寺尋爲法務領長谷金勝二寺司金峯山檢校僧階頻進任太僧正居大乘院兼帶一乘院爲和之菩提山及內山第一祖建仁三年大佛毀成落慶供養修千僧會敕圓爲導師上皇行幸賞賜有差神足實尊大相國基房藤公之子性敏達善法相正治元年爲維摩會講師玄辯聲衆嘉祿二年補興

福寺主務領長谷寺堂金峯山檢校任太僧正後解諸寺印屏居禪定院嘉禎二年二月十九日逝矣

和州東大寺沙門聖禪傳

釋聖禪參州刺史藤任尊子早嫌俗諱向慕真教在東大單思三學皆社中有四學匠其究性相粹於俱舍所謂秀慧顯範覺雄尊玄也時人喻之須彌牛腹有四天王矣禪從尊玄勤稟華嚴兼學俱舍又寓洛之仁和承密宥尊行遍二師以弘二諦馳名當代尊勝院示性維摩之英俊疑於俱舍必從實之後往北京締構城西之常樂寺講誘四衆與梅尾明慧松

日本書錄

本朝高僧傳卷之十四

〇八

尾勝月爲法喜之遊云

和州東大寺沙門良忠傳 喜海

釋良忠尊勝院承性之神足也自少遊學審問無倦華嚴法相執之左右發智六足刮垢俱舍婆沙摩訶祿籍東大恢張講肆任名聖禪學侶奔歸又釋喜海久侍明慧學解日益慧稱辛勤傳華嚴教住高山寺城州遍智院沙門道教傳

釋道教唐橋大納言源雅親子稟性貞實讀書求道成賢僧都見其法器卽爲剃戒二十三歲得賢灌頂隨憲溪溪賢二法兄承諸口訣住遍智院任權少僧

都天福元年冬賢付祕軌付具寺院又與日展遍戶鈔曰余鍾根謫智從上尸訣悉難暗記但任師傳大率記之一家大事皆在此中勿散失焉是以學密之者以教為三寶院正統嘉祿二年五月二十六日卒歲三十七

城州毘沙門堂沙門明禪傳

圖守

釋明禪藤參議成賴子蚤上睿山從于顯真智海二師稟習檀那的流隨法曼陀仙雲受密灌頂傳小野流當時僉稱顯密良匠也開毘沙門堂為第一世堂好隱逸不進僧官晚看源空之選擇集專修淨業屢

日本書述

本朝高僧傳卷之十四

〇九

通教論問念佛旨因勸其徒曰求來世報須修專念今遇勝因莫空過日臨終唱極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂之句禪坐而化年七十六仁治三年五月三日也又釋圓守藤黃門道經子兄弟五人剃髮出家皆山門三井英達也而守為秀發從睿山宗源法印琢磨顯密坐二會講首尋為最勝講會證義者以智德稱焉

江州睿山沙門俊範傳

俊承

釋俊範久在南都學慈恩宗後從範源受智者且性相研精二諦融通承久三年任僧都即為探題能調

義解後嵯峨上皇就受止觀範是睿覺太和莊誘掖學徒出靜明經海承瑜俊承四神足俊承居橫川華林房著智法藏重門畧訣

高野山寶性院沙門法性傳

釋法性未詳俗姓師正智院明任神府恢潤慧才爽俊博探經典洞曉密部開法性院後改寶性闡揚真教當時英彦多窺其門仁治年中傳法院罹飛馬之災而保延已降傳法與金剛峯不相和合一百餘年矣遂以誣告性及眾傑二十餘輩謫於遠島山中學侶數逢時之不祥寬元三年十月二十一日寂于謫所性

日本書述

本朝高僧傳卷之十四

〇十

嘗語同門道範曰季春二十一日遇祖弘法大師入定之日也我亦他後當以此日取滅矣至是果然當時野山有中興密教者若道範信日等八人號為八傑而性居其首焉滅後顯神異道俗咸欽其遺烈

高野山心南院沙門尚祚傳

觀覺

釋尚祚不記姓許為入篤實神氣清奇開心南院安彌陀二像密誦之外兼修淨業一時修彌陀法與眾行道忽見異僧乃彌陀像也祚問曰二像中為孰乎僧指二像從此一像云指佛一像云行道佛寬元三年十一月二十五日結印而化著述數篇行于世祚



亦八條之一也。又有釋觀覺心行清寂善記密書時人字曰多聞。建治年中丹生明神託遍明院童子告者宿言。道範觀覺出凡位衆欽其德。曾稱小庵號多聞院。

城州三鈔寺沙門證空傳

釋證空號善慧。京兆人。村上天皇之裔。資州刺史源親季子也。治承元年。誡相長聰敏。丞相通親源公乞爲種子。暨年十四。將加冠纓。啟出家志。源公不許。宿植所根。其志難奪。附吉水房。剃髮得度。源空器重。加意誨導。二十一受菩薩大戒。傳事念旨。通達空公。二十

日本書錄 本朝高僧傳卷之十四

〇十一

十餘年。善導五部九卷。釋義他教。大綱潛思。講貫正治。元年。丞相兼實藤公召空。府第講選。擇集以精。觀經。相國乞鈔空述。秘記十卷。空又聽台教於願蓮。稟密教於政春。隨摩山座主慈圓。琢磨日久。後就公圓承灌頂法。戒持潔清。勤修猛利。三部淨經及梵網經。讀誦一過。稱號上六萬日。爲作業堂。曰利度衆生。專在觀經。觀經所本。專在念佛。草提夫人緣起。未現。佛隨順聖道。施設諸教。是爲顯行門。草提緣起已現。說此經時。彌陀本願念佛法要顯示開發。是爲示觀門。然則諸經是方便說。觀經是真實門。於是取他經七種。

題以攝觀經化前序中。是擬智者釋法華經題。以爾前爲權。以法華爲實。而立施開廢三譬也。又觀經曰。諸佛如來有異方便。令汝得見。而善導釋云。十三觀已來盡名異方便。空曰。是當十六觀異方便矣。時人不信。以爲臆說也。建保五年遊仁和寺時。見衆僧涼曬藏函。縹囊細帙。殿上紛羅。其中一裹題般舟三昧行道往生讚開帙闕之。善導讀也。其序曰。釋迦如來實是慈悲。父母種種方便發起我等無上信心。又曰。種種方便教門非一。但爲我等創見。凡夫若能依教修行者。即門門見佛。得生淨土。果合平日立義之意。

日本書錄 本朝高僧傳卷之十四

〇十二

矣。歸以說衆議者信伏。野宮左僕射公綱藤公爲時名卿。稱嘆曰。公實吾邦彌天道安也。初住小坂。勸投都人。建保之季。受慈鎮之囑。遷居西山。三鈔寺盛說淨教。顯密要義。圓頓戒法。隨機說授。遠近靡風。實喜二年。寶塔落成。中央掛佛眼。曼陀羅。前安天台善導兩像。後度聖經。供養千僧。薦於慈鎮和尚。千日忌辰。矣。諸堂繼建。爲淨教地。晚開白川歡喜寺。後嵯峨帝屋名。禁裏受戒。問法。以歡喜寺陞于官寺。賜江之小野莊。以資厨給。空又攝之武庫河。建淨橋寺。構四面堂。安置彌陀觀音勢至像。造十二級寶塔。收佛舍利。



度沿海民大相國道家藤公法性寺內構遣迎院便  
于空之化道嘉禎四年秋空率徒於攝之天王寺聖  
靈院修專念法四果塞門寶治元年在遣迎院初冬  
染病二十三日拔僧伽梨夜分聚眾說觀經要叮嚀  
指授二十五日謂門人曰吾尋常作化他門今日直  
示自利相乃具威儀結定印坐是日泉涌明觀律師  
特來問疾寒溫已畢空問天台菩薩戒義記二重玄  
中釋名章所明四教階位往復移時永訣觀去二十  
六日辰朝與眾同音誦彌陀經至公方段眾慮病倦  
隔越北方一段故移下章空勵聲曰北方世界雖廣

日本書述

本朝高僧傳卷之十四

○五

外間矩義不弛誦訖為眾說六念法平時齋丁對彌  
陀像燒香贊頌向西端坐持百八珠唱念佛號九十  
餘遍指過殘珠至母珠所合掌而寂世齡七十有一  
法臘五十有八繼日聞訃嗚咽反袂門弟相議葬全  
身於良峯三鉢寺築塔號華臺焉空二歲之餘檀興  
特窟其於畿內開寺四所建寶塔二皆極輪奐置常  
行念佛所納燈油田和州禪林寺攝州天王寺信州  
善光寺聖靈院是也又五部大乘經天台疏鈔皆印  
鍍置諸寺其述作有觀經秘訣集二十卷曼陀羅註  
記十卷選擇密要訣四十八願鈔等受法弟子證入

證慧隆信為上首有十餘人矣

系曰世稱西山鎮西此書何繫於聖光之後耶通曰  
以日繫月以月繫時以時繫年者春秋之法也雖釋  
氏之史莫不據茲且又以歷定位者先佛之制也光  
之於善慧者年臘踰長矣且可系前後于若失傳法  
之先也學業之優也檀興之廣也淨修之勤也者於  
善慧師吾亦心乎愛矣今只據於史法而已矣

播州書寫山沙門寬昌傳

釋寬昌字淨雲文治初榮西禪師將入宋寓太宰府  
有一老嫗攜童子來見西竊語曰此平宰相教盛之

日本書述

本朝高僧傳卷之十四

○十四

季子也平氏敗亡之時我為乳母奉見逃匿匿名此  
邑無人知之其出英敏乞師刺度西公見其容貌不  
凡納為弟子其後入都即上睿山學顯密法就常謙  
謙為長學世書發跡跨海思南遊宋國謁天台山道  
法師教者道遂十七世之裔也又逢峨眉山文伯先  
生討論儒典得顯密書百餘卷外書七百餘卷歸住  
書寫圓宗寺俱顯密法性空之後青山傳密法者且  
之支流也昌有文才製作書山講式讚章一時夏皇  
禱修無應州王請昌書三永字作請雨文以祭天即  
時雨降云

播州姫路山沙門正覺傳

釋正覺播州人少登睿山遊諸師門研覈台教明發解成歸姫路山獨事著述宗要科文著鈔三卷名姫路鈔又天台三大部細加定東著鈔三十卷公徒珍之謙遜假書道遂和尚時人覺呼播磨道遂其餘鈔述在增位寺云

江州園城寺沙門道智傳

釋道智大丞相道家藤公子兄弟說先釋服九人共居二京爲顯密相之名匠矣智其中子英氣特秀師園城寺道譽僧正十乘觀法兩部密灌俱究淵源學

日本書紀 本朝南傳卷之十四

○五

威登開教補園城長吏任大僧正初住雜東禪林寺三井常喜院性嫌繁香備居泊瀑坐密修不躡紅塵遂以天年終於所住世俗稱泊僧正弘安年中龜山上皇造離宮於東山地接泊瀑而僧正神靈日夜爲累今諸名德修持密法官怪尚起及詔東福無開禪師靈崇永絕焉

贊曰天祐順公傳北禪禪居神河與智上隣意者當時心服順之道矣乎因欲此山爲禪者之有而或爲祟離宮也智之靈怪者南禪開闢之洪基歟於公龍山每月初二祭僧正忌蓋擬之護法神也

城州醍醐寺沙門光實傳

釋光實中納言光雅子從勸修寺成實教發善學後師醍醐成賢受兩部灌頂不幾賢公讓座主職師資不協退座主位齊家傳書赴于東關賢公訴朝令官更追至稻下亭吏告官命實乃終夜自寫祕籍遂居關左又開密肆弟子守海定憲宗禪各化一方云

城州隨心院沙門顯嚴傳

釋顯嚴直講朝請大夫中原廣宗子少歲入小野隨心院禮增俊阿闍梨落髮就業傳灌頂法據其主席司東寺長者事任僧都實喜初教行七日御修法賞

日本書紀 本朝南傳卷之十四

○十六

舉隨心院爲祈願場嚴歷德高歷順德後堀河四條三朝爲護持僧久侍帝展照駕平車出入禁門不記其終焉

紀州高野山沙門實弘傳

明範

釋實弘號定月不詳何許人自以登高野山敲知識門往悉地院學者樞木仁治四年坐根嶺事竟還未還寂于淡州沒靈異多州人貴德祭祀以時號實弘祠凡有所祈者無不應焉又有釋明範泉州人也承法明任法性道範相爲伯仲志節高簡而有度量道範謫去補正智席學侶多依

高野山正智院沙門道範傳

釋道範不詳其姓譜泉州船尾縣人容貌魁疑心地玲瓏年甫十四憑明任法眼剃染為驢鳥志行精勤學術蚤成為時彥所賞建仁二年秋寶光院兼澄示寂囑範主院以其法姪而有才量也時年二十三猶好問而不止遍遊畿內有安密場嘗從華王院覺海太德仁和寺覺法親王淬刃瑜伽寢食都忘後就禪林寺靜遍僧都金剛王院實賢僧正傳諸真祕歸休舊院專任著述啟發幽蹟輔弼宗猷住正智院大乘宗柄仁治四年春坐傳法院事諡於讚州州司慰問

日本書道

本朝高僧傳卷之十四

○七

勤信待以師禮不加嚴禁由是巡遊南海之名區所至歌詠寫志憂州有善通寺是即弘法大師誕彌之所故正寢號誕生院範幸寓居恢啟講席談誨四衆南人挹風謫居七年漫如一日建長元年夏逢赦歸再住寶光四年夏嬰於痘疾而誦觀如常至二十二月恬然而化歷年六十有九坐臘若干歲平日述作有遍明鈔瑜祇鈔相應祕訣寶鑰註二教手鏡等凡七十餘部二百餘卷其外有祕記四十餘條皆為學人所珍範亦八儼之一也範自造肖像置寶光院每逢講日集同門衆講法像前一日問者至遭反詰

自造臆語云範師釋肖像乍出聲曰吾無此語問者恥退聞會聞之交目驚愕其威靈如此山衆相傳為口實無不恭敬焉

贊曰梅經寒苦始發清香者是正學人之事也範公勞劬身志為野山之傑首於今學者稱其名矣雖此生質之美抑亦積學之至也遺像不容問者之偽者亦奇哉若認此照靈者恐落驢前馬後

和州興福寺沙門賴圓傳

釋賴圓中納言藤賴資子山城州人天生俊逸才擢華族父母奇之從興福寺良兼僧都學出世法兼者

日本書道

本朝高僧傳卷之十四

○六

時之哲匠即圓之叔父也加意提獎性相典策過服即空及稍長大得度稟戒至年十三坐最勝會講師引證義解的確宛轉如走盤玉一會從聽擊節稱歎住興福寺移東光院闡衆欽德

贊曰李唐聲州俱胝和尚會裏有一童子悟了大事此禪林古今一人而已圓公以僅志學師坐公會豎義縱橫此又教苑前後儔希也然古記但書其始而虧其終矣若詳其顛末必有諸法建立之妙致為相宗之憲章者惜夫

和州知足院沙門英弘傳

意圖  
圖經

釋英弘承法相於興福寺信憲歷三會講居葉恩坊長講唯識多衆常隨又同袍憲圓濃州人建保五年坐維摩會主位熾說相宗時人稱美濃僧都又同門釋圓經解脫上人之上足義學出家建保四年爲維摩會講師任權少僧都

和州興福寺沙門公緣傳教尹 乘範

釋公緣藤參議實明子初從興福寺憲圓學法相宗嗣承東北院圓玄因接其武博涉經疏長於義論建曆三年有詔主維摩會講師酬對淒然稱其抵海後領興福寺務任權僧正建長年中六十九歲寂又釋

日本經史 本朝高僧傳卷之十四 ○十九

教尹從東北院經圓受五重唯識建長六年冬爲維摩會講師弟子乘範康元二年應維摩會講請豎義歷合席住竹林院講說不倦

和州修行院沙門貞弘傳實算 專英 定算

釋貞弘字勤慶正嘉二年維摩會秉講主柄釋實算建長四年爲維摩會講師釋專英實治二年司講師於維摩會此三師者新院良算僧都之門弟而相宗學匠也又定算者實算之高弟僅至冠歲遂三會講時稱少納言已講

和州興福寺沙門尊信傳慈信

釋尊信太丞相教實藤公子從圓實僧正落巾稟戒研習法相又就圓憲專英二師益究祕蘊天賦英才加以勤勞匪啻本宗通涉他教實治元年主坐大會講維摩經理義幽暢得富有稱後遵師命住大乘院無幾管興福寺尋任法務兼領長谷寺菩提山轉大僧正弘安六年七月十一日寂弟子慈信大相國實經藤公子慧辯齊師化迹不滅住興福寺管司法務領長谷寺橘寺補金峯山檢校

和州興福寺沙門範憲傳良繼 清心

釋範憲修行院貞弘之上足有義學名弘安元年坐

日本經史 本朝高僧傳卷之十四 ○二十

維摩會講師住興福寺開三藏院化儀甚盛又釋良繼初從高順受唯識良繼統良印仁治二年膺維摩會講師一經通明又釋清心以學識聞時維摩講經久不續應永三年奉詔任講師尋轉權大僧都永享五年卒

贊曰齊明帝四年太織冠錄足藤公建山階寺始設維摩會請吳國僧福亮爲講師慶雲四年十月中旬其子淡海公不比等再營大會請新羅僧智鳳爲講首於是四海碩德駕說論決爾後每歲撰碩才者爲講會師修營不絕歷品詮之人以爲登龍門之客其

爲任也重矣今舉歷科之數師取平同傳庶幾不湮  
盛名焉

本朝高僧傳卷第十四

日本撰述 本朝高僧傳卷之十四

○王止

音訓

款苦黠切 𢇛許救切 羹古耕切 𣎵之六切 刮古滑切

獲胡郭切 拍苦洽切 𢇛乞吉切 嫗依據切 拍匹各切

龍盧容切 疽子余切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷十四 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識



本朝高僧傳卷第十五

濃州盛德沙門 師蠻 模

淨慧二之十二

和州知足院沙門覺澄傳

釋覺澄號性舜從少辭親遍遊南京諸寺習貫法相  
通餘部其中所最法華玄贊上生經制玉研光大  
小戒律索隱記顯建長年中住知足院一夏隨請講  
說玄贊圓照證玄一時羣英抱袂列筵自爾所開  
席若干不詳其所入焉

紀州高野山沙門仁然傳 良覺

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇一

釋仁然不詳姓里風情瀟灑氣格離羣久侍淨菩提  
院賢定稟灌頂法定者道範之高第爲衆所重師逸  
功倍通其幽鍵奉法尚祚住心南院柳拂密主大待  
來學法流繁衍號心南院流又釋良覺紀州在田縣  
人從日輪寺親性受祕密灌頂該貫經律有辯辭譽  
住華王院日揮塵尾建長初年司高野檢校職僧官  
至法眼六年甲寅辭檢校職不記其所終焉

洛西二尊院沙門湛空傳

釋湛空字正信俗姓藤氏左丞相實能之孫也幼上  
台嶺從圓實僧都剃髮納戒以其敏利付座主實金

年過二十遍學諸方顯密教法分明納懷世稱無著  
菩薩權化也晚捨所學欣求淨邦年耳順餘謁隨法  
然受圓頓戒專念稱號與單沙門堂明禪爲莫逆友  
互誓出離差表二尊院法然掃地之地空移弘教又  
構楞嚴雲林二院結同志衆修二十五三昧公卿士  
庶雜沓信歸法然隨行隨到讚州當在船窻棚紙空  
成模然眞容置于二尊院以建長五年七月二十二  
日西望念佛終于住院壽七十八臘六十夏  
系曰支那僧傳不有師資同諱者獨南山宣律師未  
有與寧寺義宣者宋贊寧師委辯之本朝教家人犯

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇二

師祖諱卻以爲榮法然門下特多二字復稱則害雖  
少以一字呼之師資不分其爲害也甚余嘗聞二尊  
院有法然碑一日事徒往而讀之此湛空碑也題其  
碑額曰空公行狀世人見此題字誤以爲源空碑此  
其爲害之微也然沿尚之風今也無可如何

和州東大寺沙門智舜傳

釋智舜其生緣姓牒未詳之早遊南京綜研八宗從  
東南院樹慶承嗣空宗補任僧都初在東大專說三  
論後移和之光明山四方學實蟻聚山房正嘉元年  
中道守公爲衆延請因講中論於知足院七大寺學

侶及海龍王寺照寂淨禪覺淨白毫寺入圓實教禪  
林寺生觀觀聖唯心在京英俊執卷承旨永永六年  
實和照公招講三論於戒壇院重禪聖然見塔道明  
七十餘員皆是當世聞人旅進求益亦講筵之一盛  
會也凡學空宗者靡不受其教誨也不記謝世之地  
有門弟九人聖然證禪等能唱師道矣

江州睿山沙門靜明傳 政海

釋靜明山城州人藤丞相實能之遠孫左典廩實能  
之子也資稟聰敏自少出塵從範源學古教後嗣俊  
範三觀十乘五重六印沈浸醲郁英花共苑靜達義

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇三

論雄視檀場曾謁東福聖一國師教禪供問一日問  
絕待妙國師示以玄機明疑情頓釋起而禮拜後嗟  
峨帝召明仙宮問天口表奏對契日教敘法印常居  
栗田口好學緇侶戶外屢盈嘗撰論題百條台從於  
今秉法有四神足惟還靜運心賀政海共居橫川講  
演台教海在無動寺松林房著宗要類聚若干卷  
贊曰宋國長水瑤法師問瑯琊覺禪師曰清淨本然  
云何忽生山河大地瑤答曰清淨本然云何忽  
生山河大地瑤於言下頓裂經綱明公問聖一國師  
絕待妙顯其關樞知解際斷因曰不見和尚安得親

佛祖玄機異域異宗機緣相似夫法華華嚴圓頓之  
機設而從教入禪振古此二宗而已魯一變至於道  
之謂與

江州睿山沙門經海傳

釋經海右丞相宣秀藤公之子弱就俊範學天台日  
理觀朗徹慧悟圓融與靜明俊承承瑜綜錯家法極  
於毫芒著坐禪用心鈔本懷鈔後嗟峨上皇屢召說  
止觀之要因任僧正居橫川妙觀院或寓里沙門堂  
隨衆講教負笈之者屢止采說

武州泉福寺沙門信尊傳

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇四

釋信尊少從幸範難染得度受顯密教又就能信崇  
三部台教後登睿山謁燈明院承瑜傳一心三觀一  
念三千奧日寬元年中於武州河田谷開建精舍居  
第一世山曰東睿寺號泉福盛談教乘出弟子四人  
海日朗日廣海尊海也

和州菩提山沙門如性傳

釋如性字禪空南京人也寓興福寺講習法相其性  
英利好學勤業後住菩提山與經照上人割席同學  
琢磨宗教罄其玄微又從智舜受三論且學聽法益  
義疏論辯縱逸攻難無敵有體日者來自高野爲著

提山座首開講上位性屬難之其僧指口去千金峯山正元元年性謁圓照于戒壇院受戒聽律不詳其後矣

紀州高野山沙門眞辨傳 師通

眞辨氏族未詳焉紀州名手縣人資生穎悟高邁其行密學之精獨步當時住十輪院屢啟講席誘引義學正元元年管高野檢校職警衆山衆如風偃州居職三載弘長元年某日化述作甚多紛逸不傳辨亦八條之一也又同時有釋祐遍不知其姓紀州紺野人生來氣高一衆具瞻從引接院良任大德扼中

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

○五

院流住智莊嚴院播瑜伽法學人傳其法號智莊嚴院流弘長二年夏任高野檢校職其終闕焉

城州醍醐寺沙門憲淡傳

釋憲淡侍從藤通成子悟籍笏之榮非菩提之事從醍醐寺成賢僧正圓顯納戒給仕積歲入灌頂壇尋受密印口訣住報恩院大開教場聲華四馳賴瑜教舜聖守等羣英條歸密壇下執弟子禮受灌頂法諸尊祕訣建長三年補醍醐寺教任僧正指紳百條車馬充塞弘長二年九月六日安然示寂春秋七十又二淡誘導甚盛受其密灌者有五十人矣

和州東大寺沙門示性傳

釋宗性不詳鄉譜自少出家居東大寺學華嚴於道隆光曉二師請益聖禪良忠兩匠經海論江隨意泳游後承良禪僧正住大安寺唱揚五教常坐尊勝院性相兼說講授多衆後嵯峨上皇歸心佛教召諸宿德各演宗要性談華嚴深理依本宗義撰鈔數卷以備御覽上皇大賞乃命官府賜玉版六十帖任權大僧都海印寺者乃祖道雄建業之場也中古之主他人有之性奏先緒乞復本宗制可賜寺於是檀贈委積久廢皆舉文應庚申奉敕董東大寺住職三年休

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

○六

于尊勝以享年七十餘化於所住性善俱舍論著本義鈔香熏鈔若干卷戒壇院疑然稱性曰華嚴因明兼俱舍薩婆多二宗玄蹟究底幽微盡顯圓解孤絕之德博才高標之譽如日輪映羣耀同大海吞衆流焉可謂性之才實爲得盡矣

紀州高野山沙門慧淡傳

釋慧淡不詳氏族泉州大島郡人從仁和寺覺法親王受兩部密灌風度高尚才調有餘法公察其學解付櫻池院勤覽密典苦學失明然剛記憶能誦家法每有論場不虛其席妙辯天逸難爲抗衡冬永五年

冬合山胥議補檢校職時人曰曾檢校七年六月六日示有小惱如法而化

贊曰左丘失明厥著國語千歲以爲稀也溪公亦冠論場焉管檢校焉雖衆之公議而溪之智德不出凡庸豈能致之邪

### 醍醐遍智院沙門親快傳

釋親快初從醍醐道教剃髮學密教天依同寺淨尊受一家祕訣又隨溪賢稟具支灌頂後就座主憲溪重受傳法灌頂住遍智院初管三寶院後移地藏院憲溪滅後上足定濟以帝之護持僧相繼居座主位

■本朝高僧傳卷之十五

〇七

快常怙德望補其職屢請求而不得朝命所清龍神久而不驗於是恨帝怒神離去本山屏于太秦桂宮院以怨憤不止受瘡疾同門徒衆慮害於事申奏爲之令座主職廷命既出官使到院快俄然起曰嚮壁不聽今臨亡賜恩還似弄人劈破口宣投牀不拜衆皆驚懼未幾遂卒建治二年五月二十六日也著于去鈔幸心鈔數部

系曰吾佛之立漸次級差者欲教精進階於聖位也制頭陀木叉者警防惰逸之行也何美華靡而奔利路邪親快貪區區座主位而不知浩茫虛場起

怨恨至烈官宜無禮無義之甚也不足鳴鼓而攻之夫知命乘時者世間法之士猶在況是出世間僧不義而求之快何不疑阿字觀耶

### 城州醍醐寺沙門定濟傳

釋定濟久我內大臣定通源公子母氏爲後嵯峨帝之乳母童弟依憲溪僧正剃髮受業聰明出隊稍及齡生隨母見帝帝曰他日學道成熟當以汝爲護持僧濟從此辛勤精進博學性相初就東南院樹慶習三論通幽旨又歸醍醐依定親僧正受兩部灌頂寬元元年畢三會講衆稱立義僧官連昇建長三年敘

■本朝高僧傳卷之十五

〇八

法印八年秋任醍醐座主正元元年春兼法務弘長二年司東寺長者又永元年祝禱朝家就清龍祠讀經中願賞以俊譽任權少僧都二年五月爲權僧正四年春補東大寺務十年六月旱又祈清瀧受賞七月十六日祈月蝕得驗無關優賞轉正是歲冬十一月讓座主職於前權僧正道朝帝崇龍日渥遂任木僧都二年夏旱奉詔禱法雨於神泉而有應弘安四年正月奉敕詣伊勢太神調伏元我夏六月於西院修不動使者法降伏蒙古五年十月二日奄然而化



年臘不詳。濟道福富饒三寶院回祿之後堂宇未建。自捨本財。悉復舊觀。又屢修結緣灌頂。有弟子三人。定勝通海定海門葉蕃矣。

城州眞宗院沙門隆信傳眞空

釋隆信字圓空。不詳姓氏。歲甫十五。翼侍善慧學。專念法。二十餘年。窺其門牆。殆盡美富。遂就洛南溪艸。創眞宗院。徧弘念佛。歸向者多。後溪艸上皇召問淨法。敕建大殿。廊門經藏。別構般若堂。令修念佛三昧。賜以資糧。皇太后召問往生旨。久我內大臣源具實往來問法。乃給齋糧。信講論便便。聞者忘起。嘗與

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

○九

經疏十卷。當時行世。中年隨同門請往。往生道迎。二院盛唱。宗表四眾羣聚焉。晚歸舊院。專修精勤晝夜無止。臨終拜彌陀像。而化。弘安七年四月十八日也。皆瑞雲覆室。久而不散。見者嘆異。享年七十二。有弟子眞空明戒信一法慧亮號如蘭。左右大夫藤信實猶子。學性相法尤精。淨教依信之囑。繼住艸山。又移龍護常啟談席。餘法眷皆化。一方是謂溪艸立義也。

京兆仁和寺沙門法助傳

釋法助。攝政關白道家藤公第五子。母氏太政大臣公經藤公女。安貞元年二月五日。生風姿閑雅。有出

塵標。年十二入仁和寺。道深僧正室。落飾得度。皆父相國台麻人寺諸司陪列。法會濟濟。是歲冬登東大寺戒壇。受滿分戒。延應元年。敕爲一身阿闍梨。任准三后僧家此職。以助爲始。寬元元年冬十二月。受溪之灌頂。於觀音院相國以本帛等施。一會衆各有差。建長元年秋。領仁和寺正嘉二年解。仁和印退。君開田。文永元年秋八月。就北院始修孔雀經。祝延國祚。弘安七年十一月二十一日。寂。年五十八。

高野山蓮華院沙門俊晴傳

會慶觀心

釋俊晴。巡謁諸師。質灌頂部。初爲傳法院學頭。初蓮

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

○十

華院居第一世。每登論席。暨義審詳學者。秉則又同時。有釋會慶字覺顯。居傳法院座。直能善論義。與晴齊名。開華遊院爲第一代。今論條中稱蓮華華遊之義。而爲兩門之異矣。又有釋觀心學識博衍。爲時儕所重。初司傳法院學頭。後主華遊院。

紀州高野山沙門忠俊傳

釋忠俊。字道悟。不詳姓氏。師傳所住之房號東別所。周覽經論。夙慧滂發。尤長義論。一衆欽才。請司傳法院學頭職。中性院賴瑜。具俗雜記。稱俊爲當世學匠。則其爲人也。可知焉。生緣外所亦莫得而詳也已。



紀州高野山沙門覺和傳 新信

釋覺和八條之一也。入櫻池院，慧溪之室，稟灌頂法。生才俊逸，細審密教，特善音聲輪住。三藏院掌執行職。正和二年後，宇多法皇幸於高野山，和於弘法大師之影前，為諷經，辭音清亮，聞者感嘆。法皇優賞，不止後移，成就院而終焉。又有釋祐信，紀州河南人，舉厝閑端，操節自持，以密學名。弘安七年，補檢校任權律師。十年丁亥卒。于遍明院，又有釋寬範，泉州宇多人，師寶光院澄辨，承密教，有才智，住青蓮院，為衆開講。正應六年任檢校職僧官，昇權少僧都。

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

〇十

河州磯長沙門十乘傳

釋十乘，不考其產其姓，神識明敏，孤標卓然。棲遯台嶺，擇師尋友，研貫五時八教，修練一心三觀。後嘉遊河內，磯長樂智者之道矣。學徒仰止，敲扉受教。正元年中，實相照公住金山院，招乘為衆講，摩訶止觀，千指環列，講訓專任。居洛二年，又歸舊隱，不記其終焉。

攝州光明福寺沙門智真傳 一何

釋智真，號一遍，本姓越智，為世將家。孝靈天皇之裔，豫州刺史河野通廣子。髮生穎敏，應響過人，不喜騎射，志尚佛乘。建長二年往太宰府，隨給聖達，前家裏

戒受淨土法，達證空之徒，聲高鎮西。真一紀研習，論

釋得繼，弘長之初遊學兩都，經肆律場，負笈掛鉢，建治之末，登熊野山，辨真光寺，出法燈。國師端居，由良興國寺，真屢請參禪。國師示念起，即覺之語，真精信參羣，遂得省處，因作和歌，通其消息。國師肯之，即付手巾，以為信印。當發猛志，拯羣事，利濟祈禱，熊野祠蒙神託示，巡遊諸州，徧勸念佛。所到道俗響附，成羣。正應二年，在于兵庫縣，光明福寺秋染，徵恙。八月二十三日，遺誠門人，俄然而逝。春秋五十一。法臘若干歲。真有五兄弟，後皆出家，就真受教。其中仙阿聖戒二弟

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

〇十一

信心精守，勸化一方。矣復有釋一何，又隨聖達受專念法，與真同業，共行共坐，共唱寶號。一夕偕真詣賀茂神，打鼓念佛，雷鳴風烈，山木動搖，急雨傾盆，河水暴漲。二人遂巡憩立殿門，神託社司以祠前所掛之鉦，從日拆為兩片，分賜真何。從此二人崇神之賜，遞持鉦片，考擊念佛，勸誘州里。時人是謂鉦鼓也。何之鄉貫姓系，與歷事終所未見其詳矣。

贊曰：遍何二師，匹茲難覓。五片鉦一木遊履，華夷音勸，稱號道貌之淨，可以掬挹焉。是故到處國邑，神人歸仰，肯也。之後市廛佛事一廢，又興何之貽厥，無得聞

焉今以時宗名於家者以遍爲祖矣

京兆東山沙門證入傳

釋證入字觀鏡久隨事善慧于西山三部淨經九卷疏釋習貫有日其師資鄭重猶如善慧於法然也在東山宮街字講敷淨教聽徒至門晚鴉入林其所立義五祖一轍成淨土門正因正行開發法苑門業著多之正乘豫之蓮宿備中覺入觀日觀明唯覺各分門戶勸弘淨業觀日弟子了觀京城建三福院唱祖父之法矣

京兆東山沙門證佛傳

釋證佛備中人本在官士雄武邁入俄觀幻世截髮上京隨逐證入學專念法杖立遊歷習串不二登高野山從道範于正智院稟學具言又往南都就實相于戒壇院受木叉戒建寺華洛弘淨土教又住八幡某寺開敷如洛不記其化緣所畢矣

和州東大寺沙門定春傳

快圖

釋定春及年舞勺出家於東大寺從東南院樹慶學練空論破從橫兼精于俱舍論在後嵯峨帝御宇聲高朝野又同時有釋快圓隨智舜于東南院受三論日雖空破於諸相而精詳七十五法常在東大與

定俱名時人連稱曰空宗之龍蛇俱舍之麟鳳也

京兆大光明寺沙門寬海傳

釋寬海字空藏關東人從長樂寺信教研學淨教平安城下建大光明寺說隆寬義多化洛人又承甲戌冬如南都拜實相上人受比丘戒兼傳真言又回北京管領寺院誘掖門輩大敷所承

備後蓮臺寺沙門見性傳

觀蓮快喜

釋見性長州人初依覺入受專注法建蓮臺寺於備後州觀所學法當立三心所廢之義流通付囑曰廢前定散十六觀門唯立名號以本願故是九品散善

亦廢上上三心亘通九品各有十一門故既廢十一門故三心亦廢三心正因第四門故稱名念佛即成半自力半他力南無二字是自力故阿彌陀佛即他力故有弟子觀蓮快喜蓮在備後宇多島喜在伊豫宇和郡以念佛門互倡弘通

京兆淨金剛院沙門證慧傳

釋證慧字道觀依于善慧證入二師修稱號門受西山義寬元年中弘法洛社後嵯峨帝召慧宮殿聽其所說建淨金剛院令慧爲開山永擇有德六代住持善慧於善導觀經疏著章鈔數十卷便於學者

洛北沙門見塔傳 照源

釋見塔京兆人初居睿山天台觀法得其極致後往南都之戒壇院實相室內受具足戒遊白毫寺稟謁圓珠思順二師傳金剛乘萬東大寺依止智舜聽破相說勤苦精進學達三藏辯論湧泉義解應鏡表顯三論內證密教結菴洛北集衆演法仙院后官屢蒙敕召槐門赫路常敷法音世俗勝義莫不向往焉復同時有照源字道明者本京師產人金山院落髮染緇往戒壇院受實相之本又留真言院習學三論聞智舜之風卷衣登光明山待命左右益探空宗之玄

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

〇十五

續戒珠嚴淨慧鏡虛明不詳菴棺之處

和州東大寺沙門英訓傳 英憲

釋英訓山田氏山城州人串究三論兼有密學律行清白定智圓明居觀音院焚修終年一日有鹿入院額現金色舍利訓隨喜取而納之後住東大寺緇白歸仰著大乘玄論不審鈔又同寺有英憲字密乘胸甄三論通包俱舍著頌疏鈔三十卷

讚州西三谷沙門覺心傳 滿願

釋覺心反覆俱舍玩索釋論受長西囑居西三谷說淨土義有弟子西學兼承又釋滿願稟學長西後歸

聖光淨土經疏善得瑩練嘗立義曰諸行非是彌陀別願雖非別願而得往生約就四弘總願門故一切萬行隨意得度在總願門故得往生觀佛念佛兩三昧字雖有兩名唯是一體兩名互通定散門故又釋了慧祖有文才弘安甲申撰聖光行狀

京兆發心院沙門公聖傳

釋公聖號淨印平安城人世胄清華志操堅貞鑽研無悔初入和州中山寺稟學祕藏練智聲明往返南北仁和醍醐勸修諸流究底傳焉文永六年於戒壇院稟戒圓照卻回北京創建發心盛唱密教解行兼

日本書紀 本朝高僧傳卷之十五

〇十六

備靈徵儘多都人歸崇門庭多士時稱中納言阿闍梨余檢藤氏系圖疑是藤公恭子醍醐寺實海同傳原歟

相州光明寺沙門良忠傳

釋良忠字然阿石州三隅縣人相國道長藤公八世之孫諫議平章賴定子其母伴氏夢一貴女授以明鏡及寢即娠正治元年生我在提孩器度踰羣十一歲聞三智法師談往生要集忻慕淨土十三從雲州解淵寺信進法師讀書一時誦八十行十六剃髮納戒常持法華或夢中誦經文或感不動明王閱太聖

竹林寺記。至於文殊普賢各法照禪師因緣。掩卷歎曰。二大菩薩。豈欺我哉。我從此歸心。淨刹日唱彌陀。實號萬遍。又好問人。負及諸家學。只教於睿山附近。圓信信暹二師。稟傳。經湖寺。密藏高野山。朝源得密灌頂。歷參長樂寺。榮朝。永平寺。道元。問教外宗。管律範。於泉涌寺。俊秀。又走南都。周聽法相三論。華嚴。慧解增加。息永初年。住石州多陀寺。修不斷念佛。四方同志來集。入社有生。佛者謂忠曰。聖光者。法然高弟。今在鎮西大弘淨教。何不往受記。荆乎。光時在筑後天福寺。忠謁見。問曰。天台善導。報土爲同。爲異。光曰。入

日本書述

本朝高僧傳卷之十五

〇十七

門雖異。到真則同。自爾日陪謝席。問難往覆。光喜得入。乃以善道所述。論註宗要。安樂集。一乘戒儀等。九卷。自撰。徵選擇集。授與。謂曰。先師門生。離君異說。冒躡先師。我徒亦爾。苟非智德。難得此法。汝能任器。宜以此度。未來際矣。嘉禎二年。返石州舊院。未幾。受請往于藝州。其聞法者。不減石州。延應元年。杖策入帝都有尼淨意。是聖惠妹。延應私院說軍念法。畿內大摩。明年詣信州善光寺。邑人盟招。四十八日說觀經疏。遊化常州野之上下總之上下四州。到處僧俗歸集。仁治元年。屆相之鎌倉。往吉谷悟真寺。勸唱念

佛。副平帥。平經時請忠館內。受戒聽法。忠信日勤於佐竹谷。建蓮華寺。延爲開山祖。割附武州箕田地。備三寶供。暇日相從。問法。平帥夢光明一道從寺起。而照日本國。事而益信。遂革寺額。以光明寺。嗣子時賴相續。忠信實治二年。復在洛之尼院。日講三部淨教。後嵯峨上皇召忠。離宮。聞淨土教。稟喜。嚧大戒。賜香木并上人號。建長元年。歸鎌倉。副帥時賴割由良地。寄光明寺。諸士崇嚮。聘招尋至。武之淨國寺野之善導寺共爲始祖。建治二年。應道舊之招。又上京師。後深帥上皇召忠。仙院。聞淨業。自受大乘佛戒。賜以紫

日本書述

本朝高僧傳卷之十五

〇十九

袍法衣。殿上紫朱簾下。緇白聞法結緣。陪於昔日未盈期年。一條法照寺三條十念寺木庵。尊勝院成化寶坊。內空我相。外輕塵世。王公顯貴。賤長少志氣一節。無有間隔。是以歸仰日多。攝化甚廣。弘安九年。歸光明寺。府檀。據潤興馬塞門。明年季夏。罹痢。不愈。初秋。大漸。念佛不退。近邑道俗。或見紫雲。發靈。結果上。或聞奇樂。髮虛空中。自五日。嘯異香。發室。六日。中夜向。西端坐。拜彌陀像。鳴磬唱佛。三百餘遍。湛然氣絕。年齡八十九。坐臘七十四。門侶檀那等。齊歎曰。法燭長滅。慈航已摧。翌日茶。具。葬靈骨於住吉。瓶。中。



山下其遺灰成紫色見者歎異包裹歸奉一姬裹中獲舍利五粒華分一粒姬贈忠門人諸人往往得之五色大小依入各殊初聖光滅後檀越要阿夢光語曰平昔所演義談疏章皆契佛意但涉紛冗弟子然阿可以削定焉夢寤思以故忠所著作五十餘卷合併名題以報夢鈔所謂論註記五卷安樂集記二卷善導疏記二十三卷宗要鈔五卷要集鈔八卷選擇鈔五卷授手印決答二卷三心私記一卷也永仁元年賜諡記王上人弟子六人禮阿尊觀性心良空道光寂慧也

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇十九

贊曰忠公垂年九十修勵猶健化導之暇寄心宗記蒙兩朝自寵遇一將歸崇梵宇並興二于東地三于北京其極輪奐關東淨刹有十八談林以光明寺為唱首忠公之遺德餘風於是乎可證焉

### 和州東大寺沙門聖兼傳

釋聖兼大丞相家實慶公之子自幼年時入東南院就族兄聖實大僧正讀三論書實公博涉性相為南京證義者慕風入元不歸而終兼既為人顯密幽致研修日進論辯無礙住東南院開播講席誘四來眾甄別二諦佳名達朝補醍醐寺座主領三寶院任大

僧正兼管法務建治弘安之間權東大寺兩大永仁元年九月十一日寂年五十二弟子聖忠傳在下

### 本朝高僧傳卷第十五

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

〇二十止

#### 音訓

釀 奴冬切 戾 力霽切 濬 須晉切 釳 諸戒切 貽 老月切  
攄 拙居切 航 胡剛切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑲  
本朝高僧傳卷十五 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識



本朝高僧傳卷第十六

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之十三

京兆觀勝寺沙門良胤傳

釋良胤號大圓光祿大夫源賴政之裔丹州三重鄉人也建曆二年十二月生十歲投國府大谷寺開觀從驅烏列十六薙染天賦慈忍精修肅嚴冠歲思惟佛法幽玄不逢明師爭成菩提嘉禎二年策錫上京詣清水寺懇祈冥助衛兵曹盛景見之問故胤語素願盛景感曰爲公擇師實賢僧正勝賢的承擅其渾

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇十

瓶外之何往胤謁賢公于北白河峯殿

藤道家別墅也

三寶

金剛兩流傾底密付文永五年盛景延以洛東觀勝寺此寺行基之開地而園城寺行圓僧正領之連年荒廢胤結數橡敷行宗義燒松葉煮栗根會宴清節自宴如也五條若官別當實深僧正常歸依胤臨其湫爲青銅三千緒送備冥福衆曰買田寄寺不爾終富家藏以其贏可修忌薦也胤曰追忘不依長知誠心爲善菩薩六度之行以檀波羅蜜爲第一也我欲供養法界便求定朝所作彌陀觀音勢至像安于寺餘賙貧窮或與乞手一錢不畱一夜賊來室無餘長

與佛供米慰諭遣之恐入殺賊胤自送門一時隣舍僮兒被酒打狗寺僧呵叱之僮止搏狗擊房戶房戶皆壞諸徒啟胤曰此僮在屋乙官治之今若恕宥後不可測也胤曰諸徒從我學佛愧我訓之不足也且佛法以平等待有情一切衆生自性清淨飲無明酒惹煩惱魔狂醉辭諸賢迷不度我輩逢此宜發哀調訓彼暴如何卻益嗔恚將非自醉耶豈不聞我門以六度之將攻六弊之賊施將攻懼賊禪將攻散賊忍將攻恚賊進將攻懈賊戒將攻犯賊智將攻癡賊汝等任慈忍之將則嗔怨之賊不擊而自潰耳豈假世

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇二

之宣法乎諸徒愧服異日偉王謁謝曰嚮頑僮狂醉撻亂清衆乞聽指揮嚴加譴罰胤笑曰釋兒戲劇蓋常事耳我徒呵之添我不德於兒何責焉其主以胤爲長者益加敬洛邑有狂女神異難測兇僧加持女笑曰我亦知之罵詈日嘲授之祕符唾擲蹂躪傷人叱之女曰惡名利僧不嫌佛法與胤祕符畏伏拜禮焉弘安四年秋八幡神祠降伏蒙古胤亦預敕重奉敕旨刻五大尊像安于觀勝歷於元戎龜山上皇召離宮問宗乘正應三年上皇落飾受胤密灌法與胤入山胤嫌受皇恩或匿石山巖窟或遁高野山翠成

五月二十六日叙于觀勝壽齡八十一法臘六十六著璫囊鈔十卷今行於世矣

贊曰先輩載釋僧打狗一事至胤學修化事者無絕而筆焉夫慈忍者六度之一也審見胤公之始卒六皆備焉蓋史傳者以實錄爲本而文章末也今據於璫囊鈔矣

尾州性海寺沙門良敏傳 證圖

釋良敏字叔忍尾州熱田大官司之子性質和順學識深廣隨本州淨心濃州照寂學太日宗從觀勝寺大圓受真言教往東大寺教圓照至受戒學律弘長

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇三

末年居八幡善法寺招戒壇院毅然講四分戒本定寶略疏又隨照公在洛之鷲嶺聽末無表章大日經照亦使敏講古教疏籍真言秘典衆服資深鄉之大塚縣開性海寺及池鈴山兼演宗義唱密教於尾州以敏爲始也爾後洛東吉水構彌廬居有弟子七人禪心光遍觀海定祐證圖良範其尾州人質性英利學究顯密圖字淨達文永年中稟戒圖照切問律部範傳在後

醍醐覺洞院沙門實勝傳

釋實勝大相國公經藤公子幼入禪林學書典久侍

覺洞院親快僧正受兩部祕蓋其家傳往覺洞院煥唱瑜伽學者敲門正應四年三月十三日得小恙而寂年五十一

城州釋迦院沙門顯意傳

釋顯意字道教俗姓平氏薩州島津人曆仁二年生僅及二歲其父出家母攜徙肥前州意幼求真孤標出羣投原山聖達法師及十一歲剃髮稟戒從侍隆信于淡州縣多歷寒煥通帶家教年逾三十住嵯峨釋迦院移竹林寺未學推門嘗謂徒曰善導疏釋振千講者多陳己見翻失真義於是著古今指定記三

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇四

十卷略標綱紐屬辭明晰焉弘安九年春於龜山上皇仙院與顯空法師論淨土三心之義述問答鈔一卷平居著述有回帖疏疑端淨土宗要各三卷一乘海義二道血脈圖研藏章五方便各一卷嘉元二年生染微疾五月十九日寂實寄雲垂房見者嘆異壽六十七弟子戒圓良圓共在輩下弘西山義

根來中性院沙門賴瑜傳

釋賴瑜字俊音世姓源氏紀州那賀郡人形貌奇偉目有重瞳英敏強記幼習世典夜以繼更性苦昏睡夢一僧教以印呪加持兩眼玄心阿闍梨察其不凡

乞爲弟子。前髮納戒。授兩部法。暨受胎藏界悲生。印明。始知夢中所受此密印也。上高野山。諱名傳法。院從事。義學。慧解秀拔。無能及者。建長初。如南京學。三論。華嚴。於東大。智瑜伽唯識。於興福。知瑜精於密。教衆請就于戒壇院。講釋摩訶衍論。康元初。寓仁和寺。受廣澤之流義。正嘉元年。歸高野山。著十住心論。辨稿并印身義。顯得鈔。夢僧閱鈔。曰。須作文殊疏。由是述祕鍵鈔二卷。名開藏鈔。蓋祕鍵是顯文殊。三摩地故也。文應改元。寓木幡觀音院。講侍眞空。受祕密口訣。承其支灌頂。傳實諸宗章疏。因由醍醐報恩院。

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

○五

隨憲深僧正。受十八契印口訣金胎兩界法。記其所聞。述野道鈔指心鈔。野金野胎護摩鈔。深公覽之。賞著政語。又居木幡南院。作大乘義首卷及八識義鈔。筆削勞神。患健忘。疾夢有入示。以咒印。曰。每持此。則不忘也。如教。即夢常求佛舍利。吉祥天像。就于醍醐山房。修獻都祕法。僅垂周歲。忽於壇上。感舍利三粒。尋得天像及二脇侍。妙刻端嚴。殆非人工。文永三年。任傳法院學頭。職住丈六堂。行傳法大會。四年。冬。達摩院資深講。瑜住中性院。厥後瑜所住處。皆名中性。八年。在傳法院錄十住心論。愚州三十八卷。明生筆。

記菩提心論。愚州十一生。夏往南京。眞言院傳受祕鈔。臘月。功畢。弘安二年。覺洞院實勝在。高野請于中性道場。受傳法灌頂。奉秋回。醍醐中性院。皆有訟事。衆憂慮之。瑜建寂災壇。修愛染法。至斷決。且以元吉告。三年。秋。從勝公受三重印可。雖包衆流。以勝之統立。中性流。四年。辛巳。撰阿字祕釋兩卷。夢見文殊。問臨滅要。太士曰。不過所撰阿字祕釋。凌空而去。少。歸文殊多。感應應。凡所住處。画像隨身。一日。日文殊現。瑜伽壇。擬以散放。太士即隱。正應元年。遷傳法密嚴。二基於根嶺。未及締構。寓神宮寺。修傳法大會。是根來

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

○六

修會之始也。永仁間。在根山中性院。撰祕鈔問答十六卷。寶龜論議。正安元年。冬。十二月。於神宮寺。肇行醫義。以爲永式。嘉元元年。集釋論。愚州十二卷。是歲。仲冬。風疾。日知不起。遺囑後事。翌歲正月朔日。晏坐。正受結彌陀印。湛然而化。享年七十有九。坐臘若干歲。所著疏鈔一百餘品。四百五十餘卷。矣。天文初。追贈僧正焉。贊曰。學密教者。言必以賴瑜。果實爲口實。焉觀其阿字祕釋。爲文殊所印可。則平日所修契本不生。與宜哉。密者之稱。而不止也耶。

高野山大樂院沙門信日傳

釋信日。紀州名卿郡神官。父。世神官母。泉州大鳥  
官吏。女與正菩薩之外甥也。有緣佛種。幼慕出家。依  
櫻池院。惠淡阿闍梨。剃髮受學。十九。隨大樂院賢雄  
阿闍梨。學釋摩訶衍論。歲二十一。就淡公受傳法灌  
頂。去隨西大寺。信惠受具足戒。習篇聚開遮法。歲二  
十五。住大樂院。講太日經疏及釋論義解。入貞德治  
二年二月二十四日。泊然而化。作金胎曼荼羅鈔四  
卷。其餘鈔記若干卷。爲家學者所寵在焉。日亦八條  
之一也。

城州醍醐寺沙門嚴家傳

釋嚴家。一條關曰家經。勝公之子。從大僧正靜康受  
灌頂法。傳諸密軌。嘉元元年。同東寺長者。衆服其德。  
三年。春。領寺務并法務。尋任大僧正。德治元年。春。  
修愛染法於仙洞。受實。夏四月。爲護持僧。有旨任醍  
醐寺座主。其性多病。退居隨心院。延慶元年十一月  
三日逝。

紀州高野山沙門信堅傳

釋信堅。信日之同母弟也。卓軼高懷。才識應舉。嘉元  
初龜山上皇。召官講釋摩訶衍論。普弘法大師奏。以

此論爲密教所依。堅抑顯揚。密義辯婉。究皇心有。關  
時維冬月。寒威逼殿。幅裂御袖。手賜蒙頭。其經儀。及  
題祕密藏。背書六。大無礙。偈奎深。以賜寵復。敕錄所  
講之義。堅編釋譯論私記二卷。備御覽焉。述作猶多。  
爲密學者所樞要矣。堅亦八條之一也。

贊曰。龜山上皇。在東山。離宮常召。禪教耆英。各說宗  
要。備法喜禪悅之遊。焉堅公當是時。龍袖分寵。著於  
宗美。焉後之教學者。襲爲章服。而榮徽之。今呼縹帽  
子者也。

和州東南院沙門貞禪傳

義海  
承信

釋貞禪。隨自敏。承三論久遊。兩京通大小乘。以博達  
而稱焉。住東南院。挾俱舍婆娑發智論等。以弘宗。與  
覺澄齊時名。又釋義海侍。東南院。重喜大德。窮三論  
受密教。善俱舍。住持本院。以慧解鳴。又釋承信。與義  
海同。師承於小乘論。解析節目。居東南院。啟敷講席。  
應衆之需矣。

贊曰。澄禪海信。四講師者。中古空宗之闡人也。非越  
精於家教。俱舍婆娑。瑩玉發智。六足擇金。故當時稱  
之。四傑矣。依博辯之稱。而裁記名焉。

京兆清水坂沙門良範傳



釋良範號了圓後改興實興州人隨事性海寺良敏推範顯密兩輪習聲明於周防僧都稟本又於實相上人常持受染明王感驗異多永仁年中洛東清水坂建愛染堂利益衆人都下奔馳延慶初寂

和州新禪院沙門聖然傳

釋聖然字道明從中道守公人真言院刺染受業就圓照證玄二師稟具學律後嗣智舜雖通三藏獨家三論爲空宗中興矣住新禪院提顯密綱門脩尤多正和元年八月十五日化于本院嘗著戒壇院緣起二十卷矣

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇九

城州醍醐寺沙門聖雲傳

釋聖雲龜山帝子隨實勝僧正落飾得慶生質剛雅家學染指住覺洞院從中性院賴瑜受具支灌頂補醍醐寺座主有敕敘親王爲太僧正住職稍久能整寺法正和二平端午日遷化壽算四十一

和州戒壇院沙門凝然傳

釋凝然號示觀豫州高橋郡人仁治元年春二月生于藤氏天機聰明如有宿契僅在孩提樂聞佛教人授何文憶記能誦年至志學投戒壇院人圓照室刺髮果業照察其俊秀鄭重誘共誓歲弱冠得三聚戒

遊證玄淨因之講席擇問律鈔受密灌於聖守稟華嚴於宗性既而三論法相之玄致細釋研貫溫置丹府又遊京城參佛心宗旁通孔老百氏之道歸侍照公正元初至文永季凡十有年間照每講經疏使然覆講碩學通方靡其渴瓶雖括諸宗華嚴命家弘安初開講大佛殿七寺龍象執卷唇市然振大辯才舌翻法界道俗喜逢甘露之舍照公之後住戒壇院講經說戒四序無輟正應四年講敷大經於和之金剛山寺四衆雲集先是招提寺慈真和尚夢善財童子覆於戒壇院具問此何種也曰雜華之種也真常怪

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇十

之至此始知然公是華嚴會中根熟之人也正和二平移招提寺繼曰復集爲禪兩審乘等授別受戒住職五年回戒壇院然管寺院一十八所寄懷著述卷帙充棟後宇多上皇巡幸南都登授戒堂就然受菩薩戒其後召宮講五教章賜國師號元亨元年九月五日唱滅於戒壇院葬於鸞尾山報齡八十二僧臘六十三皇情震悼卿庶舉哀然多才宏記華嚴天台真言三論法相俱舍成實律淨土及國史神書音樂科條莫不該綜悉有疏鈔探玄記洞幽鈔一百二十卷華嚴五教賢聖鈔六十卷五教章通略記五十二



卷二種生義三卷梵網香象疏日珠鈔八十卷孔目章登悟記二十三卷十重唯識帝鑑記七卷律宗華嚴取真心章二十卷太子法華疏慧光記九十卷太子勝鬘疏詳玄記八十卷太子維摩疏卷羅記四十卷四分律本定實疏贊宗記二十卷律宗瓊鑑章六十卷南山義章三十卷淨土教海章四十卷淨土義記二十卷十住心論義批二十卷十住心論鈔十七卷佛法傳通章十八卷諸宗傳通錄六十卷三國佛法傳通緣起三卷餘難其記一代接連凡有一千一百餘卷弟子十二人挾律而宗華嚴各化一方矣

日本書紀一 本朝高僧傳卷之十六

○十一

贊曰然師在東大日上足禪爾從容問曰見師下筆書不用藁文不加點鉅篇魁冊不日而成凡有撰述已來鮮有如此盛不知勞心思否然曰吾不經意也猶神和章何勞之有爾歎曰富哉著述古今罕疇焉余與戒壇院主面熟情親藏書架架隨意汎覽永祿兵火半秦灰矣今在府庫者纔存十一而又多厄蠹逸編殘編細觀顛末實間出英才也吁世無博雅君子不知有高德悲夫

和州戒壇院沙門空月傳 性憲

釋空月字禪性初入戒壇稟學圓照受滿分戒通律

關鎖又在東南院細究三論玄致登高野山承兩部密灌回戒壇院兼持羯磨纂教外凡問宋諸刹還說禪教接化二京又釋性憲字本實濠州人從事照公五篇七聚分其序秩又從圓珠承灌頂法三學研幾慧解拔萃後入宋國留學辛勤終於支那

醍醐地藏院沙門親玄傳

釋親玄太相國通忠藤公字性地柔和早從親快受業醍醐文和九年稟灌頂法快與信書囑付相承聖經祕軌住地藏院持真言教敎任僧正西粟大榮元亨二年二月十七日化年七十四玄著惠按訣灌頂

日本書紀一 本朝高僧傳卷之十六

○十二

記有弟子二人覺雄房玄玄下有親慧慧下有弘願於是宗脈相續小野三寶院爲東密之正傳云

武州星野山沙門尊海傳 宥海

釋尊海字圓頓武州足立郡人納拜信尊剃髮稟戒神機穎脫解顯密旨初住武之慈光寺處處隨請弘演妙經郡主崇信仙波東地營構延居海又通經宗之睿山究研宗教闢七寒暑入心實僧正室傳七科法要極三重脈路歸創佛地院不弘台教細白歸抱東關台學海中興之由是東州天台教寺五百八丁屬附波山矣建佛藏院修求聞持法感明星現樹今

波山之明星水明星宮者其影臨之地也昔慈覺太師駐錫此寺修法得感六百年後海同修感海止三科義自擬一家法門一曰止觀非法華大意二曰十行出假菩薩不習圓無作三曰變易名言不且實報信尊滅後領泉福眾波山泉福往還乘牛口不絕誦十行出假所依文琵琶橋邊之農夫慣聞誦之仲夏捕魚男女謠曰十行出假菩薩習圓無作邪習今不習今看所依之文邪海以慧心以來十九通之印信收在泉福為累代相承之譜矣其七科傳授者一曰一心三觀二曰心境義三曰止觀大旨四曰法華深義五曰圓教三身六曰常寂光土義七曰蓮華因果是教重七科一曰一心三觀者同體境智塔中圓戒二曰心境義成道世間相常住三曰止觀大旨圓頌法門太意本覺四曰法華深義本地妙法心教相常住寶塔五曰圓教三身六曰常寂光土義七曰蓮華因果是行重七科五是塔中法門也弟子省海博識顯密嗣住泉福著顯密論談鈔肝心要義鈔心觀明了鈔等數十卷余昔訪上之談林龍增寺主廣觀法印一夏交談觀公精教好學因搜索信尊尊海存海實海子許師之事蹟而歸

日本書紀

本朝高僧傳卷之十六

〇十三

釋曰七箇法要者本傳教所唐傳之奧旨也不入其門而傳之則不易知焉三科義者先輩之未發也波山之裔傳而家之以俾謬稱蓋聖法門良有旨哉

紀州高野山沙門良殿傳

印俊支書

釋良殿不委姓所少從賴瑜十五年間不離左右晨昏夢夢習修密法三千登三摩耶戒壇入兩部曼荼羅性耐頭陀遊歷曠懷聲名遠播為眾所慕嘉元二年為傳法院學頭任權律師元弘三年轉少僧都一日無病結印坐化延元元年九月五日也年七十二臘五十九又同時有修學院印俊教王院玄雲寶積院實算親近賴瑜有功密教相次居傳法院學頭職盛蹟闕之

日本書紀

本朝高僧傳卷之十六

〇十四

高野山蓮華院沙門賴豪傳

釋賴豪字行心不詳其氏族出于實尊阿闍梨之門又就賴瑜究諸教法英辯確論雄鳴壇場元德二年繼尊公席住蓮華院學者敲門咨問密訣後膺學頭之選首傳法院之眾不知其所終

高野山迎接院沙門順繼傳

釋順繼字勝圓學于賴瑜有博密名嘉元初生火輪召繼曰吾欲作十題論科註未暇命筆疾不起矣

續我志者非予不能庶作註疏以惠後世之暨義者  
予其念哉繼受顧囑明年九月註成題曰勸分向勝  
不退門廣短冊時年四十五歲爲傳法院學頭大輔  
宗教其所述作法事文章數十篇門流傳存焉

京兆廬山寺沙門照源傳

釋照源字明道源僕射有房子少登峯峰陪諸師席  
該貫顯密才優義富住大原來迎院誘集四衆講台  
密乘授圓頓戒勸淨土業後隨僧請移京之金剛院  
改額廬山四方來就源有四宗兼學之名天子屢召  
宣問台教賜如法衣在猪熊亭講二大部學者筆記

日本書紀

本朝高僧傳卷之十六

○十五

成一百卷名猪熊鉢或曰廬談今行于世矣

濃州實相院沙門賴申傳

宗珍

釋賴申字宗佐越前龍谷寺住侶也十八從濃州實  
相院宗印受瑜伽法學識俊逸同儕憚之州有宗珍  
僧都者隨日州日胤習學十六生盡其玄祕後回濃州  
住松山寺講說宗教啟迪學者一時倭僚皆受宗訣  
申隨九日承顯密法繼補實相院密論導者觀心登  
源道焉

京兆悟真寺沙門道光傳

釋道光字了慧隨光明寺良忠稟淨土法爲其上首

巡學諸方智辯縱逸嘗入支那謁時名近歸開悟真  
弘專念法朝廷敕賜廣濟之號永仁正安間著無量  
壽經鈔語燈錄各七卷淨土詮註鈔二卷大綱鈔四  
卷永觀律師十因記二卷共行于世遷化年月日舊  
記失之

贊曰余見記傳之書古書者虛少實多矣中古以來  
虛多實少矣至於今時附會牽強僞書質本梓印紛  
然語燈七卷皆實錄也乃知光之名不實焉

相州光明寺沙門良曉傳

釋良曉字叔慧相州白旗縣人幼俊發觀苦空及年

日本書紀

本朝高僧傳卷之十六

○十六

十八登比睿山從東塔仙曉剪髮學教二十還鄉師  
禮良忠稟圓頓戒習安養修不出門垣給侍九年一  
家義旨涵蓄心府弘安二年還忠願什繼爲光明之  
第二世曉輕己重法慈攝加衆慧辯流暢聽者隨喜  
專注攝引三十餘年正和二生總州海上郡船水中  
務某建稱名寺請第一代曉居四年還光明寺正慶  
元年二月示疾三月朔日入念佛乘恬然氣絕紫雲  
掩室歌頌聞空道俗悲哀聲震山谷火浴得舍利數  
百粒收於本山築塔其上俗齡八十一法臘六十有  
餘矣曉著傳通記見聞十五卷述聞鈔口傳鈔各一

卷決疑鈔見聞論記鈔等數十卷共行于世當時東關淨土宗義蓋有三流以曉爲白旗義之祖焉

高野山金剛三昧院沙門實融傳

釋實融號證道藤氏之子世爲華族初就泉涌明觀戒壇圓照泉戒習律隨勝覺院圓珠傳密軌督律鈔侍尊勝院宗性周聽華嚴及五教章領會在心慧證增進嘗在洛東鷲尾山日教授衆會後上野山從安養院賴賢承傳法灌頂嘉元二年春補金剛三昧院三學兼備以密應機四遠道俗翬德如市大將軍草氏源公聞其風猷崇信供給曆應二年正月十九日

日本漢文史籍叢刊 第三輯 卷之十六

以微恙化壽齡九十其所傳密法曰證道流

筑前觀音寺沙門道譽傳

釋道譽字洲月本在白木之隱嘗與乍入續前志其真乘從泉涌寺智鏡淨因學四分律時人稱爲示家棟梁入戒壇院就實相照公受具足戒又上唐山親近碩德稟問教觀之要久居鎮西止觀音寺移往藝州其卷習定不記其終矣

和州菩提山沙門唯空傳

釋唯空字經照初在興福寺學法相兼院遊方學無常師拜事興正受沙彌戒師東圓照納比丘戒周族

洛之善法金山掛搭東福修習禪那上菩提山受密唯觀祕軌奧義有括囊譽因爲灌頂大阿闍梨偉德法儀甚有威重又釋圓海字道本居東大寺受具圓照巡遊海龍王戒壇院好學博辯常玩華嚴又就聖守圓珠二師傳習具言

和州菩提山沙門澄海傳

釋澄海字本心山城州人居長樂寺初可僧官登延曆寺習學口教入戒壇院受圓照之本又掛搭東福參詣聖一國師曉上菩提山稟承密印據坐主職門畫茂育又釋理然字如空南京人興福寺圓緣僧都

日本漢文史籍叢刊 第三輯 卷之十六

神足也不置一隅最好下問得法相宗疏通因明學識優積爲衆領袖拜近圓照受滿分戒戒習大小左祖通受大賢古迹及宗華等善解其結往越之永平參道元禪師門派粗把曹洞旨歸旋京華隨空願上人受真言教并後建寺大播令名

和州東大寺沙門道玄傳

釋道玄號自覺示觀國師授滿分戒親承因丈究賢首教寓居東大高蹈終世律儀嚴身翰墨自樂作華嚴五十二略頌新舊會中鈔各一卷性極仁慈行不騎馬俗呼華嚴老僧又稱自覺大享矣

本朝高僧傳卷第十六

音訓

廐 羊晉切 墅 承與切 贏 餘輕切 怪 丘關切 撓 乃交切

蹂躪 上而由切 墮 於蓋切 煽 尸連切 組 女九切 晰 列切

也 切明 跋 北未切 瘳 丑鳩切 甥 師庚切 縹 匹沼切 韞匱

上委窘切 厝 上克蓋切 迥 杜歷切 炙 之夜切

本朝高僧傳卷之十六 止

江府住玉泉新成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷十六 法其

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識



本朝高僧傳卷第十七

濃州盛德沙門 師變 撰

淨慧二之十四

泉州久米多寺沙門禪爾傳

釋禪爾字圓戒平安城人姓阿部氏陰陽博士晴明遠裔也十九捨業就八幡太乘院琳海脫白披緇明年師事凝然國師學二受戒探五教理稟賦爽利義解恢達歲二十二拜圓照席受具足戒住京兆金山院移賀之無量壽福寺爲衆常講華嚴及律周禪旋于南都隨真三院聖守果密入灌頂壇聽法旋國師

日本書紀 本朝高僧傳卷之十七

〇一

之道風提攜餅錫住于興國燈預謂徒曰三日之後當嘉客來及至爾謁慰歡待接傾誠參尋遂得玄旨弘安六年泉州久米多寺主顯尊招爾繼任禪堂晝夜二時率衆靜坐禪餘閑席講雜華及三大律疏一住四十年猶如一日法規肅整化被遠邇正中元年臘月之杪告諸徒曰來春正月五將取滅緣令時生緣散故滅四大夢路往來五蘊空華開落此尋常事汝等各自懇哉苦口叮識聞者激越孟既五日示風疾而禪坐如常至第八日晏然而逝享齡七十有三坐臘五十有一門人相集葬於寺後有神足十

七人盛化四方矣

京兆淨華院沙門證賢傳

釋證賢字向阿本姓源氏藝州刺史武田時綱之子官至光祿太夫人園城寺剃染出家寅昏勉強學解日新及謁禮阿賴捨舊業入專念門阿者良忠之徒仁和西谷保結蓮社勤修念佛賢久隨附承其法義洛陽富家崇賢延招建淨華院爲第一世說化方盛誘蒙惟多嘗謂修淨業者異論瓜副門戶區別法然所立豈如此耶宿具如堂夢聞彌陀釋迦化爲二僧演說淨土奧義宿醒我清凉寺重感應佛勝相於是

日本書紀 本朝高僧傳卷之十七

〇二

宿疑未解因錄所見編輯歸命本願鈔西要鈔又撰往生至要訣記法然以來授受之旨授其徒玄心賢梵學外善詠和歌載在新選千載集貞和元年六月二日端心念佛吉祥坐寂年八十二臘若干歲

和州東大寺沙門聖忠傳 聖壽

釋聖忠字基忠藤公子僅至綺年投東南院從聖兼大僧正習稟落升登東大寺戒壇受具足戒入賴瑜室承灌頂法忠風格神秀止儀直方嗜學不倦早通三藏坐三會講酬解逸發住東南院公調宗乘補醍醐寺座主任大僧正德治元年冬十月拜東寺一

長者延慶元年三月領東寺法務正應初至正和五年連賜宣旨二營東大兼法橋者前後十餘年晚辭職務老于東南矣有弟子聖壽忠之令弟學業通明盡其深祕正中初補醍醐寺座主任大僧正嘉曆二年夏補東寺一長者元年二年住東大寺又爲傳法院座主

贊曰聖寶集三論於願曉置東南院於南京爲弘宗之場其裔相受多兼空密二教而主之今求忠尋師資之遷歷克踐寶之躋者也

### 京兆東寺沙門榮海傳

日本僧述 本朝高僧傳卷之十七

○三

釋榮海大舍人藤俊業子母大江氏有七兄弟太半出家歸顯密宗爲紺苑英海幼聰敏就父讀書既及爲人志崇佛乘入醍醐山從慈尊院聖濟僧正稟灌頂法達諸密部初住慈尊領隨心院移高雄神護寺兼任僧正貞和元年春正月補東寺長者當時名賓多遊其門東寺景實爲本稟之首矣

贊曰海公著真言傳七卷上自傳來八家至諸師士庶面授之審也身行之練也有靈感者靡不載敘也余多採之獨憾公之德蹟不存而已

### 相州稱名寺沙門湛庵傳

釋湛庵字本如不知生緣姓譜少隨凝然從事羯磨遊雜華海冲融圓理後嗣禪爾爲戒壇院學頭二學共備一衆服德元應初受檀請住鎌倉稱名寺授戒講經法席日盛元年二年著教理鈔建武元年撰纂釋三十二卷集解華嚴大疏以其年卒於所住焉

### 讚州善通寺沙門宥範傳

釋宥範不詳氏讚州柳井縣人少入郡之新善光寺剪髮受戒學淨土教夢梵僧持聖經數卷令諸人任意而取範執一軸看之梵字不可明焉問曰是何經也僧曰密經也汝有緣範乃入州無量壽院隨事覺

日本僧述 本朝高僧傳卷之十七

○四

道僧正習稟八年胎金兩部小野密派究其源底往西三谷聽俱舍論永仁二生上高野山值有事故不得留寓即抵下野謁錫足寺學頭賴尊受三寶院法流而謁同州衣寺妙祥請聽大日經疏祥曰我昔應泉涌寺願行上人之招將講此疏於東寺偶值其家無意講久臬州如法寺有道性法印是信日之神足當往求焉性公拒請復還下野行路飢饉往反甚窘祥感至懇始開講進一年畢軸正安元年祥開疏於武之廣田寺翌歲春又應耳州密嚴院之請講於走湯山範皆預聽凡從祥公前後九白毘盧印文大率

入手祥公謂曰此疏無妙學者病諸公爲記之範軌所聞編三十卷祥公命題名妙印鈔嘉元三年祥應平帥之請赴鎌倉府範回觀本師覺道道自移常福院命住無量壽院範好靜修開逸寺側初妙祥曰公他日還過安祥寺傳慧運流範憶其言延慶二年如江州安祥謁寺主光譽譽者成慧僧正之高弟名稱鳴世範往來十八年盡得家祕嘉曆木再治妙印鈔成八十卷妙祥之徒來受密訣且請東遊範將赴招善通寺衆曰我寺頽廢非師難興見此散落而他之哉範不獲已移東北院元弘年中創誕生院曆應三

日本書紀 本朝高僧傳卷之十七

○五

年護摩堂火餘燄及院一衆駭劇範時修定初不起座加持灑水猛火便消弟子入堂告曰火滅範跌坐莞爾尋住善通十餘年間力而興復殿塔厨庫隨序壯成觀應二年七月朔日奄然喟化壽八十三應安四年春敕贈僧正弟子宿源州其行狀焉

京兆仁和寺沙門寬性傳 實果

釋寬性伏見帝第三子正安二年立爲親王十三歲入仁和寺從禪助僧正落外納戒清穆好學耐瑱伽器乾元初年補仁和主務嘉元三年春爲一身阿闍梨就助公受兩部灌頂夏五月任總法務兼管六

勝寺主應長元年昇敘二百四正和元年春上皇弗豫奉敕修愛染法御惱即瘳嘉曆元年解仁和印移居開田貞和二年九月晦日順世壽算五十八矣又釋實果字金胎從玄海受灌頂學密籍住悉地院聲名遠馳延文元年領檢校職貞治五年七月二十五日寂矣

和州戒壇院沙門俊才傳

釋俊才號十達妙年出家慧性卓拔冠年隨師登壇受具從新禪院聖然受華嚴教真言毘尼兼探冲奧初住京大通寺一策發興巡遊西州歸董戒壇移真

日本書紀 本朝高僧傳卷之十七

○六

言院後醍醐帝受菩薩戒賜國師號後住鎌倉稱名文和二年十月二日謝世壽九十有五臘七十有六著五教章要文集三十二卷

和州戒壇院沙門盛譽傳

釋盛譽字明智天賦俊逸受業禪窟抱素凝然精練三學初住久米多寺遷戒壇院皇張羯磨闡示華嚴兼授密乘世稱良匠也曆應二年夏五在久米多演說義鈔講畢夜夢自金峯山衣冠人來曰我金峯明神之使者也師於澆季演微妙義諸神隨喜使吾報告譽寤而有願焉康安二年正月二十一日化於所

住著五教章鈔五卷

和州戒壇院沙門照玄傳

釋照玄字覺行人戒壇院得度本無納具俊才律部密教討習受持常業華嚴屬意精銳康永四年三月奉敕幹化東關建東大寺齋堂相之極樂和之戒壇洛之大通三遷主盟學人盈席講無虛日延文三年六月五日寂于大通寺行年五十八矣

尾州密藏院沙門慈妙傳

釋慈妙鹿島氏常州神田縣人正應四年四月八日生歲十七脫世隱登睿山師尊辨明生難髮受具居

日本撰述

本朝高僧傳卷之十七

〇七

山一紀勤學精進聲顯密藏詣伊勢神期一千日轉大般若心乞神授及其散日虛空聲曰美濃尾張利生相應也乃屈濃州國主土岐善忠喜其來化建寺延之說宗義三載往尾條木縣民前夜俱夢猿猴持炬數萬羣至訊之占夢曰山王圓頓靈神而後使令也火炬般若智光也今從睿山智人來與其日午時妙分衛至開密藏院請延唱宗妙安藥師佛於殿壇遠近人民包資瞻禮學徒負笈蓋有二千應安元年八月八日誦觀音咒入三摩地年七十八臘六十一門人如法修荼毗儀全身銷骨綴成舍利云

贊曰長阿舍經曰前佛悉皆二月八日誕生八月八日入涅槃妙公生滅同其居諸偶而爾乎抑亦有本乎可以為奇而巳矣

相州極樂寺沙門正為傳

釋正為字圓成弱齡出家隨侍俊才琢磨戒律游泳教海凡七次寺每有開講靡不持卷而臨席為是故三藏之奧義統括納之靈臺然所重思者單雜華也延文三年秋接照玄之跡住持相之極樂遷南都戒壇院亟講三大律部華嚴大經後歸鎌倉應安元年八月二十一日寂于極樂寺

日本撰述

本朝高僧傳卷之十七

〇八

江州睿山沙門慈遍傳

釋慈遍京師人吉田卜部兼顯子兼好東也弱登睿山剃髮稟戒近事碩匠學大日教又以世業精博神書後醍醐帝召問佛法神道常在南朝任大僧正遍著神風和記三卷世人玩之不詳其卒矣

東寺觀智院沙門果實傳

釋果實不詳其本貫或曰源姓但州人也釋投東寺稟寧嚴院賴實法印後往小野面拜榮海傳灌頂法尋受諸尊印契儀軌又去南都求益性相住觀智院院有五大虛空藏像寶修求聞持法白米降壇塔日



不微世福唯請道果遂得悉地性氣靈敏眼空三藏胸蟠五車於真言教特極精義故時論曰南山有快刺瑜得空海之皮肉東寺果實得其骨髓寶不任僧綱專意著述大日經疏勘註二十七卷釋摩訶衍論勘註二十四卷二教論鈔十三卷即身義東聞記悉曇字義鈔各十卷心經祕鍵鈔菩提心論鈔各六卷祕藏要門玉印鈔各五卷東寶記門心鈔各三卷十住心論鈔金剛頂經開題鈔理趣經略鈔等都有二百餘卷其師賴寶著真言本母集三十四卷或曰真言名目體大東門記弟子元寶撰釋祕要鈔十二卷

日本書錄 本朝高僧傳卷之十七

○九

覺母集七卷寶冊鈔祕要鈔五卷世謂東寺三寶古稱吐珠主於前振金聲於後者歟系曰寶公以博衍才述汗牛書實當稱密苑僧寶焉然觀於歎天已子昉之遺蹟而議評禪宗此即有心地未鋤荒艸者耶君子於其所不知蓋闕如也且吟義學之佔畢而比擬格外之玄機者固矣哉高叟之爲詩也

泉州阿彌陀寺沙門澄圓傳

釋澄圓諱旭宋國人廣覽經論淨教爲宗後醍醐朝航海而來駐錫京畿勸發四部一時卿庶望風追陪

崇濟北虎關禪師亟詣函丈談雜和宋時獻采果書信遞通關師答書稱句有云伏惟白蓮和尚宋地偉才日域先導開法都城之內馳譽縑素之間旭後遊化畿內泉州堺縣建立精舍唱淨土教四遠鱗集檀輓相仍稱旭蓮社一日出寺而遂不還衆人遍尋不知行處皆應安五年七月十七日也旭無遺弟檀越故舊以其出日擬爲忌辰嘗撰淨土十勝論十卷松風論三卷今行于世矣旭平日律身慈仁稱澄圓菩薩云

和州戒壇院沙門照慧傳

日本書錄 本朝高僧傳卷之十七

○十

釋照慧字淨心從照玄受具戒遊歷諸寺探問三藏文和年中遠涉諸夏者宿門頭請益而還盛覺上人延置久米多寺又隨衆請管戒壇院雖開戒密二壇以華嚴爲誓門晚移八幡善法寺邑民趨德或送齋供應安四年十一月二日取滅於所住矣

和州戒壇院沙門靈波傳

釋靈波號性通足利氏相州鎌倉人隨湛庵于稱名剗染肄業及入南京得沙彌戒於盛譽稟菩薩戒於俊才遊行七寺研諸經論主張毘尼光輔雜華和之戒壇相之稱名移錫匡衆說教隨宜永和三年八月



十五日化。于稱名。壽米。臘年。章述尤多。律與要傳十卷。五教儀解集三十卷。五教章鈔八卷。五教章性通記鈔五教斷惑分齊鈔各二卷。起信論私鈔十二卷。戒壇系圖通詳記五卷。學者寶焉。

### 和州戒壇院沙門總融傳

釋總融字通識。別號雪心。久侍靈波習室。律範學涉諸教。尤通華嚴。當時學者貴稱先德。住和之龍華院。移戒壇院。二學均等。衆會悅可。至德三年四月二十一日卒。

贊曰。看融公之譜畧云。公釋諸經疏著鈔千卷。當時

日本撰述

本朝高僧傳卷之十七

〇十一

比於世親太士也。不知何經疏。其書目題名半紙。隻行遂未得之。聞見搜索不周。至于實然。緇門之巨擘而太士之稱比亦宜也。

### 根來中性院沙門聖憲傳

釋聖憲字定林。泉州人也。幼駿逸。侍彌勒院。實俊法印。歲過弱冠。隨中性院增喜學。密教喜公孔器重授。以祕藏出入。順繼賴豪二室。益臻壹奧。兼嚴諸流。而至洞徹矣。學成德立。掌中性務。一衆服重。推爲學頭。憲晚年慮法場論題事義繁多。初學望洋。撰定太疏百條。論艸十卷。自證說法十八段。論艸一卷。又釋論

百條。論艸口授。左右筆成。十卷。自跋卷尾。今密嚴下用爲手鏡。憲之從弟大徹禪師住攝之護國寺。唱洞上之宗。憲著阿字觀法一篇。以示學侶。乃呈徹公。徹雜禪語。以加雌黃。憲保遐壽。扶樹者多矣。明德三年五月晦日晏然。而逝。行年八十有六。法臘若干。訖今。鑒門葉者。每年忌日展講筵。薦法味云。

### 睿山神藏寺沙門存海傳

釋存海住睿山東谷神藏寺。性情閑雅。不慕榮名。不好議論。禪觀爲樂。入西谷行光房。久疑阿字觀祕密。書籍無不塗指。往慧日山探佛心宗。常閱楞嚴經宗。

日本撰述

本朝高僧傳卷之十七

〇十二

鏡錄海制立口稱念佛。某年無病而化。當述觀心類聚九卷。正因果鈔二卷。三重鈔三卷。自心決。字大意直顯集各一卷。又立直要十一條。一日發心條。二日四性匹得。三日四運心。四日三識。五日三諦。六日五陰。七日根境識。八日中論四句。九日初於聞中入流。人所共知。如是漸增。聞所聞盡。十一日生滅已滅。寂滅現前。台徒修觀者至今用之。

### 根來妙音院沙門賴譽傳

聖譽

釋賴譽字定嚴。遊學南北。密典顯墳達奧。窺藩長於義論。兼開梵儀者。行法要集論義私記若干部。學者

傳寫以爲格式與聖所屬立爲化主譽稱妙音院傍有小池時人呼曰小池法印當時同院有聖瑜字玄正密乘足爲人之師論衡常歷衆之匹矣

根來妙音院沙門玄性傳 玄譽

釋玄性字空深不知其產不詳師承粹于密說詞辯拔羣住妙音院誘訓學生作論義私記二十卷初學者以爲爲式老成人極加優稱同院有玄譽字亮運善學之秀衆請化主矣

根來十輪院沙門道瑜傳

釋道瑜字玄首懷抱利器論辯驚衆雖臘不高衆議

日本書紀

本朝高僧傳卷之十七

〇十三

權爲一百三十人之上首開金剛藏普待方來學侶欽重呼爲能化衆稱所化能化所化之名於是始也歸教底績退居十輪院所撰疏鈔數十卷共行於世上野龍增寺沙門豪尊傳

釋豪尊武州金鑽人永和年中上比睿山就無動寺心聰法務傳教之重聰者心賀高弟慧心八世之裔也又從心圓心源二師受行之重於今出川柳御所再謁心聰淡決證位及歸鄉邑恢播台教道俗靡化時上州滿願寺有界尊法師興福之人應安三年開龍增寺招尊而居爲開山祖重張講陣學徒集歸贊

成談林應永七年十月五日以病滅矣

江州成菩提院沙門貞舜傳

釋貞舜登睿山親附貞濟多歲習學居西塔寶園院英達之名落落聞時應永年中江州柏原開成菩提院圓頓法繼素會集頓化寶所常敷日教之衰有志回瀾因卅七帖見聞四教條貫五時法儀諸宗體裁撮要啟蒙又於慈慧僧正九十餘算作問答鈔名曰寶要安立應永二十九年正月上日化年八十九其後第十世住持眞海法師一日窓前看七帖見聞小蛇蟠几拂之還來怪而視之蛇登一旦海謂傳聞舜

日本書紀

本朝高僧傳卷之十七

〇十四

師發於一旦殫精此書意以珍祕以一念差又孔醜乎我當開濟離其纏報明日開卷蛇復來矣海乃誦觀法雖正著心同邪文以梅梢打小蛇倏失後不再來云

高野山實性院沙門宥快傳

釋宥快京城人羽林次將藤實光子總角黠慧歆美桑門陟金剛峯師實性院信弘阿闍梨入壇灌頂素好博士涉獵該貫應安七年住實性院密藏洞達龜侶赴集龍樹之論無畏之疏弘法義章探蹟索隱剖析文理糾紛開通義路室塞裴然成章五百餘條義

學之興於是爲盛矣復欲慧運流之甯水挹彼注茲  
永和三年適安祥寺謁興雅僧正振衣升堂雅公者  
藤實博之子隆雅僧止之嗣遠承運師二十三世密

印相續脈絡在堂喜快氣宇竭底授與故安祥正流  
歸入實性歷今三百餘歲綿綿不絕也至德年中禁  
中修法後圓融上皇賜御製和歌快卽應製奉和作  
悉曇鈔有疑未決一夕神女冠珎珊珊持燈來告曰  
我此山神丹生津姬也感師之精勤故來矣快舉悉  
曇七決疑處神乃一一指授快復問曰旣稱明神何  
用燈耶曰實無昏暗以師挑法燈而示其標相耳因

本朝高僧傳卷之十七

○十五

詠和歌忽失所在晚老于善集院應永二十三年七  
月十七日手結契印口誦神咒如入定而逝享年七  
十有二坐夏若干所撰疏鈔凡數百卷有太日經鈔  
三十一卷宗義鈔二十二卷釋論決擇二十卷悉曇  
決擇鈔五卷悉曇字記鈔悉曇考覈鈔各六卷十住  
心論義林二卷心經秘鍵信力鈔二卷等二家學者  
用爲龜鏡焉神足成雄記云快師唐一行禪師之再  
來也

贊曰安祥寺之法流三百四十餘年間繩繩相承二  
十五世光意僧正之後不開統屬矣蓋以逢時之亂

而人法俱泯歟快公若不承稟之千鈞祕法不爲世  
寶焉錄是觀之其金剛薩埵之遙孫也耶神女決悉  
曇之疑詠法燈之歌者我常疑楚人之賦焉

高野山無量壽院沙門長覺傳

釋長覺羽州人青年出鄉詣禪野山面承真祕將寒  
冰焉資稟厚重義辯如流嘗聞城州鎌倉俊譽阿闍  
梨極西院流振錫登門傳其真印應永初年住無量  
壽院登金剛幢管轄密門法席填委導利羣物二十  
三年丙申十一月十五日化緣旣盡奄然終矣報齡  
七十有一僧臘若干歲平生撰述卷素甚多覺與宥

日本書紀 本朝高僧傳卷之十七

○十六

快年相若道相似齊雄名焉

武州無量山傳通院沙門聖岡傳

釋聖岡字一譽本貫常州父志摩守源某佐竹義光  
之裔也母患無嗣禱嚴瀨神感靈夢而生頂骨高峙  
眼稜電寒五歲父戰外岡求出離九歲依瓜連常福  
寺了實難髮染衣氣如囊錫日記數百言間舉誓疑  
辭有老童及年志學付大田蓮勝見其俊利曰大象  
何可雷鬼徑指赴鎌倉定慧之所先夜慧夢文殊太  
士乘白象持赤軸來贊侍未久悉得真義年二十一  
述口決鈔二卷慧見而大稱二十五入大澤輪藏翻

一代教遍學諸方傳密祐存習顯真源問禪月菴天明二師往野之鹽田寺宋聽俱舍唯識永祿四年住下野往生寺始演淨教又受千葉貞胤之招移相馬曾根鄉說專念法嘉慶二年續實師席淨侶輻湊暫避州亂隱不輕山復歸常福一日白龜負八角鏡出自崑瀨獻問之室因圖其形常安凡上上足聖聰及開武江之增上寺遂同養焉應永二十二年相彼於小石川結茅專修檀願如廩遂成梵刹號傳通院同居六年老病時至澡浴新衣書辭偈曰放行把住滿八十年即今端的識不識日輝東嶽月西天擲筆合

日本書錄 本朝高僧傳卷之十七

〇十七

掌念佛唱化應永二十七年九月二十七日也世壽如偈臘六十五壙封全身於寺裏焉同宗學外神籍和歌測微屬思著述特多標鈔四十八卷直牒十卷二藏名目二卷二藏頌一卷二藏頌義三十卷二藏見聞三卷顯正記淨土傳戒論心具往生記淨渭分流集各一卷神道麗氣記鈔和歌註解等行于代矣贊曰以同公之書比淨家先作可謂藍冰之克家也白龜負而出者有似圖書之祥矣吾佛弟子之中感於四靈之瑞者往往有之蓋皆以誠心而守法王之制也雖澆濁而不能無驗夫可不懋乎哉

紀州高野山沙門長譽傳

釋長譽能州人神志高尚義論無礙應永十四年以丹生神之託啟論席於山王院宿快為證義者譽為賢者兩雄往覆言鋒相交更深夜坐久眾聽忘倦常居無量壽院誘被學徒同三十年七月十四日卒

本朝高僧傳卷第十七

日本書錄 本朝高僧傳卷之十七

〇十八

音訓

爽陳兩切 禪詳子切 嗽將候切 蹟資昔切 諧博古切  
莞胡管切 穆莫卜切 佔尺占切 壺苦本切 間何艱切  
歌虛今切 獵力涉切 岡居永切 校盧登切 藍盧談切  
澆上堅姚切 澆下都侯切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
本朝高僧傳卷十七 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第十八

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨慧二之十五

武州增上寺沙門聖聰傳

釋聖聰字曾譽下總人千葉氏貞胤之第四子貞治五年誕自孩提時不茹葷血天生智慧小學出隊授常福寺聖問室十五剪戒通習三典不捨晝夜同授圓頓戒付自撰二藏義略頌聰從此大行化四方應永季於武州月塚營增上寺勸弘淨業學侶圍座談法不倦般舟三昧老益精進一日遘病念佛坐寂永

日本書紀 本朝高僧傳卷第十八

〇十一

享十二二年七月十八日也春秋七十五夏臘六十一火浴遺骸塔於本山述作無量壽經要註記二十四卷論註記見聞十卷大原見聞萬德集金明集論藏集微隨鈔當麻曼陀羅鈔等各一卷

贊曰宿殖德本果必待時而成也增上插岬之日戴爾一方暨東照源君徽舊一新涌殿飛樓金碧煥輝江海房寮編町衆恆萬指舉以爲關東十八談林之首不因當時栽八福田安得今日仰三菩提之如斯也邪

高野山寶性院沙門成雄傳

釋成雄甲州人冠歲好學尋問東關應永年中觀遊洛城貫究顯密徧通性相後登野山謁害性院宥快

先一夜快夢熊野神告曰明日爲人師國害者當入密室翌日雄至神機從持矩石投水師資道合遂傳兩部大法補害性席主伴討論常無虛日害德三年五月八日化於住院壽七十一

江州淨嚴院沙門隆堯傳

釋隆堯江州人僅九歲早英邁陟睿山學台教千如十界諦見幽旨俄思念佛捷徑法門欣修淨土應永癸未詣石山寺祈求冥助觀音現身示教利喜本郡

日本書紀 本朝高僧傳卷之十八

〇二

淡谷卓菴專修一行三昧道俗崇信淨嚴院成寶德元年十二月十二日庵雨而逝年八十一臘六十餘著念佛安心大要遺於門侶云

紀州高野山沙門宥信傳 快全

釋宥信常州產少出東鄙入寶性院師事宥快侍密壇久神氣高峻睿相發眉一日隨快入宮後圓融帝直任僧都灌頂已後遊諸師門縱探密蹟顯綱既極快師印契住如意輪寺衆歸如林享德二年司高野檢校職不考其終又同門有釋快全頗有才力果宥快之祕印住釋迦文院唱瑜伽法多作疏章啓迪後



學云

和州東大寺沙門志玉傳

釋志玉字總圓別號渡西或稱談宗利帝利種姓也  
僅垂髫年師戒壇院總融律師落飾受業從同寺融  
存太德承三聚淨戒學三大律疏兼聽華嚴貫遠精  
微究大小乘未至壯歲解歷南北遂以應永二十  
年截溟入明即永樂十五年也列利宗匠推以廣學  
太宗召宮講率嚴經賜普一國師之號在明五年經  
疏什具滿船載歸住東大寺遮那大殿講華嚴經圓  
辯驚衆稱光帝重賜國師之號一歲兼備化儀甚盛

日本書述

本朝高僧傳卷之十八

〇三

相之極樂寺稱名寺阿彌陀寺賀之大華嚴寺洛西  
高山寺玉皆游其讀州屋島寺屢更歲霜廢久玉不  
忍見勸化西州營復再成乃付上足普開律師玉丁  
日奔檀越還歸過春日神祠俄雷雷擊空疾風折木  
守祠巫祝皆畏縮太肯神出殿謂玉曰我忘灰穢上  
人既有觸事何過祠前耶玉曰始知衆生本來成佛  
生必涅槃猶如昨夢神其不思之乎神喜微言詠和  
歌卽隱寬正四年九月示寂於北京梅尾山春秋八  
十一東大凝然之後興太經者玉之方居多京師相  
國寺瑞溪鳳公寶幢寺大梁梓公從玉問教玉亦就

鳳聽禪要云

贊日南遊諸師唐宋元明賜紫拜號放禪俱有玉公  
亦崇才德昇金殿講獅子吼經不膺太寵揚國之華  
歸朝奉敕講太疏於舍那寶殿重拜師號吁使迦文  
最初之太法再蒙漢季繼白北道之煥幾乎光前絕  
後也矣

京兆誓願寺沙門真阿傳

釋真阿平安城人後醍醐天皇之孫明辨內外觀世  
相變年二十六入誓願寺剃髮出家未安法諱其夜  
殿裏尊像告曰汝當名真阿彌陀佛夢寤不勝感喜

日本書述

本朝高僧傳卷之十八

〇四

益樂念西方業大將軍義放源公入寺問訊禮敬甚  
至有刑罪人欲憑阿免阿往台府訴之不許一揖而  
出源公起送見阿頂上圓光髮鬚源公下庭惹衣令  
掌欽受稱號因有罪人特卜寺側建十念寺請阿安  
居二十餘年不出寺門淨業無虧臨終浴軀剃髮端  
坐合爪唱彌陀寂香薰豆滿奇華墜庭壽六十六永  
享十二年七月二日也遺命門人水葬於下鳥羽淵  
飼諸鱗介都城僧俗奔波讚禮公府下制其淵禁漁  
子今尚在云

紀州高野山沙門快尊傳

釋快尊泉州人十一入宥快室侍應對十六得度洗  
指三密英歌秀發早稟灌頂持錫遊化隨處張講應  
承末良雄讓實性院與尊住持在管野山有問答講  
星移物換論席久廢尊常有心回倒瀾矣一管定坐  
異人來曰我兩所明神之使者也神感師之志使我  
傳言欲遂所願兩所神祠當設兒童之論議言訖飛  
空去二月既望於天野宮始啓論席登者西方院華  
壽題者五智院朝算問答酬酢稚辯泉湧衆會拍手  
稱未曾有仁和寺法務傳聞喟嘆曰了童張場振古  
希豈有神之感助乎奏納紀州名手莊租稅五果充

日本書紀 本朝高僧傳卷之十八

○五

問答講之供每歲四季恆行法會文正元年七月二  
十三日化春秋七十六

系曰畜了童勝華靡吾佛制之神借尊之手使其習  
論場者護法之心在干茲我之言非平是也與

睿麓西教寺沙門眞盛傳

釋眞盛紀氏之子貫之遠裔其母歸命地藏菩薩誓  
絕軍糧夢吞寶珠寤即身盛嘉吉三年生于勢陽壹  
志郡容貌端嚴稟性朗拔七歲入郡之光明寺從盛  
源律師讀內外書典十四剃戒十六遊學居尾州密  
藏院學眞言教公登睿山依西塔慧秀和尚二十四

年不下山頂傳承兩部密灌三觀法門文明九年爲  
大乘會講師任權大僧都十四年秋退居黑谷青龍  
寺課彌陀號日六萬遍周看藏經夢傳敎大師摩頂  
授往生要集曰欲度衆生無如此軸盛遂於坂本源  
生寺講說要集橫川衆僧招以西教寺曰此寺慈悲  
源信墜基繼緒遲賀源空修淨業說圓戒實先德修  
法之地爾來爲墟請開法音盛乃入寺說戒念佛無  
有虛日四衆作市檀施輻湊堂閣僧房四十餘所未  
至數稔鬱全備焉長享二年洛之誓願寺主招盛一  
七日中說專念法大將軍義政源公入寺就盛受啓

日本書紀 本朝高僧傳卷之十八

○六

薩戒一家將種共受五戒十念源公親贈佛具木蘭  
色袈裟銅錢二百緡盛受不雷寄入洛東元應寺是  
秋往信之善光寺還而留越前府一七日說淨教府  
內大廳建引接寺延德元年弘化勢州安野郡民構  
西來寺延請一夜神女告寺衆曰聽盛師敎脫無始  
苦欲報此恩妾無所任此志雲津川矢野淵有太良  
木已歷千年人無知之取用塔材妄爲護神持奉銅  
錢百緡隱太翌朝募人以索組腰探淵獲木徑七尺  
餘二十五尋大殿講堂揮斧丁丁其百緡錢日用不  
盡精藍功竣皆化小蛇寺鄰沿海井鹹不食神女告

日勿憂。當變明晨扼之。列爲甘泉。二年八月。越前府主朝倉貞景招盛於安養寺。受五戒十念。弛關放囚。其家臣上田氏造西光寺。延盛供養。畢華雨地。三光耀天。又歸西教寺。修不斷念佛。明應元年。帝召盛於清涼殿。稟圓頓無作大戒。尋上念佛旨要。宸書傳戒。國師眞盛上人八大字。以賜之。河州刺史畠山義就招盛聽法。義就荒禽盛爲說罪。即放犬鷹。初西蓮寺迎爲第一世。三年甲寅。勢州小田莊成願寺檀請繼至。四年正月。在賀州西蓮寺。四十八夜念佛說法。二月晦日。俄病。法筵雲集。力疾登座。演宣眞要。詞辯特

日本書紀 本朝高僧傳卷之十八

〇七

鮮。既歸寢室。集門人曰。我至黃昏。必當取滅。未後。囑示一言。蔽之。寡欲清淨。當勤念佛。漸及期。至可音念佛聲氣。噉盡口。搖唇吻。顏含微笑。安詳而寂。香氣薰。暖瑞光照。夜享年五十有二。坐夏三十有九。椅奉全身。七日結緣。黑白弟子五百餘人。楊聲泣曰。慈顏何日又得拜瞻。存日行時。牛馬屈膝。耳伏地。受盛十念。或別時念佛。神龍點靈燈。一時日吉。明神現來。曰。上人。所度之衆生。皆生極樂。在世化益。當五十二。神言有驗矣。

贊曰。天元之間。源信僧都在西教寺。持西方券。過年

半千。盛公則之。頃王者。是受將軍贊。明神垂威。興類。歸法古稱。當五百年。命世者出。是其定數。與。

相州光明寺沙門祐崇傳

釋祐崇字觀譽。巡歷東關。習學精勤。住相之光明寺。講經多衆。明應四年。唱導都下。遂入禁宮。講彌陀經。奏說協旨。敕令諷慈覺大師傳來。聲明乃率眞如堂之衆僧。就于內殿。誦唱彌陀經。及念佛。賜香衣。上人號崇泰。以殿修式。永世移行。于光明寺。重賜紫袍。於光明寺。方今專念之寺。初冬。唱十夜念佛者。自崇而始。一日微疾。有瑞雲下。知必期至。威儀端坐。高聲念

日本書紀 本朝高僧傳卷之十八

〇八

佛。遽曰。西方佛來。言未終。化。豈永正六年十一月八日也。未詳春秋夏臘者。二歲義見聞十卷。

紀州高野山沙門什遍傳

釋什遍。少巡諸方。慕眞言教。年二十四。歸高野山。拜寶性院。良雄阿闍梨。服承訓。獎得兩部灌頂法。質問者。願義學。名著文明九年。住寶性院。講布顯密。宿學憚之。永正十二年五月十日。順世。年六十二矣。

紀州高野山沙門印融傳

釋印融。武州久保縣人。生氣含英。特具志節。羣籍經旨。自朕憶持。鄉邑無足爲師者。弱冠。杖策過關。南北

駐高野山。萍練業成。主無量光院。品藻宗教。筆削著  
志。嘗憂關左密法之衰。晚年東行。居武州鳥山三會  
寺。性好讀書。或赴外。請必駕小牛。載著。又卓行誦。且  
吟。東關細白。崇德歸風。永正十六年八月。中旬夜半。  
取滅。壽八十五。關東八州有古義。談林六十餘院。寫  
融小肖。歲時饗祭。平生撰述有。仙保隱道鈔二十卷。  
釋論指南鈔十卷。大日經指南鈔九卷。釋論愚案鈔  
七卷。古筆拾遺鈔十住心論。廣名目各六卷。大日經  
愚案鈔。金胎曼荼羅鈔各三卷。大日經奧之疏。詮要  
鈔諸真言句義釋論名目各二卷等。凡數十百卷。學

日本書道 本朝高僧傳卷之十八

〇九

者為珍行于世

### 武州喜多院沙門實海傳

釋實海。武州川崎人。或曰品川自幼俊利。思出羣輩。入  
教寺。剃髮。肄業。嘗在檀越大田道灌宅。呼僕夫曰。將  
盥水之水來。俗語。淋瓶。謂為手水。道灌在傍。曰。盥水而足矣。將  
非刺語乎。海曰。若唯盥水。或持湯來。道灌動容。深服。  
敏捷。長涉論場。負魁博名。住星野山喜多院。關左。台  
徒負。及通塞。化衆之暇。著述。東希集。敕屋各十卷。鹽  
味集二卷。放觀大綱。見聞鈔三卷。天文二年。示寂。壽  
八十八。在星野山時。有真禮者。兇惡無比。次日請海。

送終。化人來曰。彼罪彌天。必莫法救。海謂釋氏之道  
善惡齊利。豈忍拒之。乃整威儀。出於郊外。俄怒雷轟。  
天雷擊逆空。海舉扇曰。我代受苦。須臾雷止。雷收。而  
克葬。海寂。二年寺後杉上有聲曰。我代莫禮人地獄  
受苦。今已免之。即不見矣。

贊曰。一切如來大慈悲觀音一人代受苦海之言。迹  
與經符合矣。夫內祕菩薩之人也。與

### 勢州真常院沙門亮典傳

釋亮典。字文性。俗諱倉垣內氏。勢州宇治縣人。母夢  
異僧振錫來而妊。慶長丁未四月。幾望生。自幼聰慧。

日本書道 本朝高僧傳卷之十八

〇十

有出家之志。十二入郡之建國寺。剃髮。通誦法華。十  
三隨憲式學。真言教。又投化主空鏡。義解通利。久留  
山。融銓乞為弟子。改以今名。乃授沙彌。十戒。尋受四  
度。瑜伽十七。公登金剛峰寺。軒昂論席。蚤發宣名。掛  
錫洛之智積謁。日譽元壽。二僧止。聞振嶺之祕奧。學  
餘備書。取辨不食。歸就。饒師。稟兩部灌頂。任阿闍梨。  
位為衆開延。講大日經疏。華華。于學業。獨尚質素。包  
笠并。鞋遊遍四方。尋禪人問。禪要。逢。教者。探。教義。卷  
衣。還。鄉。隱于宮崎。據樹構寓。傍崖。石架。於新採果。專  
注。送。歲。弊。不。疏。食。生涯以足。又卜品井田。神路山下。



登真常院日率同伴腰鎌肩鋤荊棘平堆阜容衆  
雖狹講說無闕謂其徒曰吾見瑜伽中月輪宛然皎  
徹圓明拂之不變又謂賴音曰靜心安住久久純熟  
三摩地成子其勿遲聖言不浪密乘院有雄乏承囑  
賢使人諭招典卽往攝之蓮華院傳雄亦信地藏流  
之密靈妙訣盡得面付到處應請法華梵網攝摩便  
便所述亦多承應王辰謁心蓮院有品僧止引入漫  
茶羅場授與廣澤祕流寓密乘院會病不起八月十  
二日右脇而寂歲四十六臘二十六葬于法金剛院  
仁和寺法親王追贈上人號智積院僧止運啟行

日本撰述 本朝高僧傳卷之十八

〇十一

業記及銘墓上焉

贊曰承應初元文性上人在仁和密乘院寄講起信  
論疏辯之建饒能折結角與余語及妙心門派負包  
褊參曰沙門行履皆當如斯季世言行相應亦罕也  
展若之人鑲乎鐘鼎不爲虛美焉

論曰太覺世尊利見竺莖四十餘年天上人間所說  
半滿根文其數八億家駁負而無窮龍舟載而有剩  
寔非二西五車之可比而幽妙深遙淺知暴聰於是  
諸大論師間出製作微言亦有冠卷鉅泰充棟汗牛  
東漸之後震丹諸師乘運逢時所瑩註釋推明經綱

論紀遂立宗義流覃日域而今獨盛世著潤美凡八  
宗備矣蓋法本一理分爲萬品所謂日月星辰山河  
草木在其中間則人倫禮義之文章與羽毛鱗介之  
異類是其大者也至森羅羣像之細瑣者千差萬別  
巧曆不能籌之非夫辯慧何以明哉以人心本具之  
靈慧窮衆物所具之事體慧之時義大矣哉本朝齊  
明之代吳國福亮始維摩會神睿道慈繼慧解名鏡  
忍嚴智登覆講選慈訓摘雜華任法相善珠妙年摘  
藻述記勝虞善議唯識三論之法將常樓常騰宗鈔  
多矣安澄泰演衡持空有勤操尊三論以君父中繼

日本撰述 本朝高僧傳卷之十八

〇十二

講最勝王經義真護命奏書護宗三論玄睿著六義  
鈔因明修圓濟思記鈔平備信行有宗達者以記述  
鳴施平明福博行長論德一疏破傳教道詮崇真釋  
論慈覺智證前後入唐有顯密作良源法藏仲并壽  
肇官論名高人皆知之義昭真喜千到湛昭秀應  
和角論之徒源信覺運難弟難兄分慧心檀那兩流  
安海中立不屑兩門安然在顯研密玄照善珍通  
因明真興貞慶相宗翹英自儉葆光源空據臂修  
有接擇集高辨中興華嚴多著疏鈔修禪密感神敬  
承久之間南京有秀慧顯範覺雄尊玄四學正元俱



舍成實通三論華嚴時人比四天王聖禪宗性遊四  
正門研一經二論道範賴瑜宥快印融真言英達多  
著家書賴寶泉寶元寶亦博宗經書是謂三寶智舜  
說空延當世賓凝然著書千卷獨步古今良忠學窺  
諸家筆削淨教聖問聖聰標述甲於其家靈波入海  
華海觀瀾章富志玉講華嚴犯龍顏支那本朝共署  
國師亮典殿出三學均唱三密濟濟多師揭慧光照  
搏桑矣或問三學六度慧在於後此篇何第二耶通  
日以菩薩急於化化有檀戒忍等之序由聲聞求於  
自度有戒定慧之序若以修學而序之必當慧在弟

日本撰述 本朝高僧傳卷之十八

○其

一菩提資糧論云般若波羅密是覺初資糧也古人  
云法門次第戒定慧觀門次第定慧戒學門次第慧  
戒定又六度總舉三學別說其本一而隨時可序故  
支那三傳本朝釋書皆以慧置第一也此書前後十  
科倣於古法不可以一例而詰焉

本朝高僧傳卷第十八

音訓

會 慈秋切 黠 胡八切 惹 爾者切 了 於加切 臘 尸連切

緇 蒲鄰切 囚 慈秋切 吻 武粉切 冕 莫典切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
本朝高僧傳卷十八 茲冀  
上報四恩下資三有家庭繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本撰述 本朝高僧傳卷之十八

○其止

本朝高僧傳卷第十九

濃州盛德沙門 師賢 撰

淨禪三之一

洛陽檀林寺沙門義空傳

釋義空唐國人久依鹽官齊安國師室中擢爲上首我橘皇后常崇佛教召諸宗名哲各說其法一日詔空海問密法海盛稱舉之后曰更有法諭于此否海曰唐有佛心宗乃達磨氏所傳此法最尊無上也空海雖少聞之未遑究焉於是皇后裁造繡袈裟并寶幢遣慧華法師入唐聘請有道禪師專抵杭都獻袈

本朝高僧傳卷之十九

〇一

裟於一時名衲施寶幡鏡匱之具於五臺山尋往鹽官縣海昌院謁齊安國師啟曰吾國經論之宗鼎盛禪宗未傳願得國師神足以爲本邦之始祖國后之志也國師感其誠信命空受請空與法弟道助等及尊之海著太宰府尊先入京城具奏皇后大悅館於東寺之西院尉勤擊就詔入宮詢禪奏對稱旨敕住檀林寺爲開山祖禮問相繼天皇聽其道聲寵賜優渥官僚擢卿參問者多如中散大夫藤公兄弟是其選也尊復入唐空以方物書問贈海昌同袍及官僚僧雲敘報書曰夢關黎至在蒙手字兼惠方物太

海間福如是留意不忘細微寄以方物若非吾人情至曷臻於是捧受不勝悚佩吾人在彼雖是異域行於大法利物爲心沾濡品類彼此豈殊況又國恩渥澤稠疊亦人間盛事也勉之勉之雲敘以太教淪胥曾爲所恥慙慙顏被縫掖之衣末路阻望烟之食尋遇王臣外護塔寺爰興禪林重暢掄材朽質蒙狀入籍微願既通永固可修鄙情不勝慶幸今蒙衆令勾當造寺道力輕微庶車荒淺且竭蹶鈍敢有怠息無物表微誠白角如意謹寄上望垂檢納幸甚迴使還狀不宜僧雲敘狀上李璘報書曰去年十月中信

本朝高僧傳卷之十九

〇二

到奉迴示兼惠及龍鬚席一領謹依命檢受訖滄溟遠地遺及珍寄不勝感戴孟夏漸熱伏惟和尚法體萬福即日璘蒙恩不審近者何如伏計不失調慎伏奉來示承國家供養勤厚頗深長幼官僚無不欽奉此亦和尚道德所感方獲如斯久承眷恤遙資忻愜拜頂末由空增馳結伏惟珍重謹因信附狀不宜弟子李璘再拜其餘清涼山無無和尚僧志圓務州衙前散將徐公直徐公祐廖公著等有書簡贈物事繁不記焉空歷數載歸於大唐尋謁蘇州開元寺主契元勒事雕碑題日本首傳禪宗記附舶寄來立都城

南羅城門側永祚二年秋畿內大風門楹倒而碑隨碎其碑石四片至於元弘末尚在東寺講堂東南隅虎關和尚自如東寺印片石之字而歸

贊曰佛法漸于日東二百六十餘年矣教法鼎盛禪宗未到焉白雉天平之間道昭道瑤二師雖傳此法來而內秘焉不外行焉橘皇后發獨脫之機私淑單傳之旨遠承鹽官之證幣請其徒義空唱教外之法於是國民始知有禪宗也然實參實悟者橘后一人而已空公知時未熟辭之歸唐語句不傳為可憾焉唐人書翰十七通現在梅尾之文庫今爰載一通使

看者知義空禪道煥於昔時焉

### 蜀國碧雞坊沙門能光傳

釋能光字瓦屋不知姓氏航海入唐參洞山价禪師親承法印天復初遊化入蜀永泰軍節度使祿虔展拒其追獵捨碧雞坊宅為禪院請光而居僧俗嚮化大振禪風以後梁長興年末遷化壽一百六十三歲宋有勾今玄居士蜀都人博識文才深明禪宗嗣法張平雲嘗著火蓮集法印傳有拜瓦屋塔偈曰太空無盡劫為塵玄步孤高物外人日本國來尋彼岸洞山林下過迷津流流法乳誰無分了了教知我最親

一百六十三歲後方於此塔葬全身

贊曰瓦屋禪師之事出于宋沈存中之夢溪筆談矣李唐之代自此方載海求法者大率法相三論天台真言而已獨瓦屋師傳洞山古佛之禪而振玄風於支那以長齡之高終於西蜀展如之人兮吾邦之媛也矣

### 江州睿山沙門覺阿傳

釋覺阿世姓藤氏十四上睿峰削染得度肄大小乘有講場傍嗜文翰善梵漢書常看教理疑心地不穩聞商客稱宋國禪宗之盛奮然志遐遊遂以承安

元年夏共法弟金慶浮海年已二十九初秋達於杭州即孝宗乾道七年也皆佛海遠禪師住靈隱道化高輦下阿袖香誦函丈海問其來由阿未通語音輒執筆書而對海復問我國風阿復書曰國王無姓氏號金輪王一種系投未有移革僧無進納而講義高者賜度風俗和順奉佛法僧然無禪宗只講五宗經論其等仰服和尚之名特詣丈室禮拜願傳心印以度迷津且如心佛及眾生是三無差別離相離言假言顯之和尚如何開示海曰眾生虛妄見見佛見世

界阿復書曰無明因何而有海便打阿仍請海陞座

決疑登歲秋遊金陵抵長蘆江岸聞鼓聲忽然大悟始知佛海垂手旨趣回靈隱述五偈呈所悟一曰航海來探教外傳要誰知見脫蹄筌諸方參遍草鞋破水在澄潭月在天一曰掃盡葛藤與知見信手拈來全體現腦後圓光微太虛千機萬機一時轉三曰求真滅妄元非妙卽妄明真都是錯堪笑靈山老古錘當陽拋下破木杓餘慮番而不記焉海印其所證尋辭海書偈贈行阿歸朝巷居睿山安元初阿與延曆寺座主基道僧通信於海贈水晶降魔杵并數珠二臂綵扇二十事貯以寶函海憐而納焉壽永元年夏

日本書紀 本朝南傳集卷之十九

〇五

阿通嗣書海已遷化矣高倉帝聞阿禪行召宮問禪要阿卽舉笛吹之或曰八時機未發君臣其測阿直歸書庵不復出世矣余謂自本朝入中華參師得悟卽時呈偈者宋元之間甚多矣而看彼方之諸錄不記一項但受雷菴普燈錄濟大川五燈會元獨載覺阿五偈豈以意尙共通歟其不爲皮裏陽秋也可見焉

攝州三寶寺沙門能忍傳

釋能忍號大日平家士將景清叔父也少遊講肆究諸經論天生好禪礪精工夫卒有悟處建三寶寺於攝州水田縣堀唱禪法畿內緇白歸風者多或說以

無師承文治己酉夏忍使弟子練中勝辨齋書幣入宋謁育王山拙菴光禪師呈其所悟拙菴大證明乃付法衣道號並贊達磨像練中勝辨使畫工繪拙菴像以求贊菴卽書曰這僧無面目撥轉天關掀翻地軸忍師脫體見得親外道天魔俱竄伏一弟歸朝之後忍聲名益馳華夷上足覺晏得忍印記居和州之多武峰丕唱禪要永平孤雲井公久隨覺晏晏臨終勸梵依道元禪師便付自撰心要提示并自忍師所受之什物元公見其提示大嘆賞曰晏師明眼之人也依之常稱能忍以和尚鎮西聖光來忍會下質宗

日本書紀 本朝南傳集卷之十九

〇六

鏡錄要文一夜景清訪來忍喜其邂逅相逢使弟子需酒於杏家景清疑告事於官府乃擐劍刺殺而去其餘雜書中忍之事班班見焉

贊曰大凡物者以資始爲功也夫秦陳勝者繩樞之子叱隸之人一起於滎陽六國諸侯繼興以秦室而漢高立竟定天下其本者由勝首於事也故司馬遷編修史記立陳勝世家與孔子傳爲隣者良有以哉嗟哉帝曆養空之後禪法不興者殆四百年矣當是之時忍公奮起復倡其踰於庸人也十層高矣自忍公之啓行而諸師東渡南遊並鑣浮興則不爲其功



不在資始焉而元亨釋書濟北師托言榮西而謗之者悉涉偏頗矣應永戊戌天龍寺古篆印著佛祖宗派圖以忍公系佛性禪師下可謂公述也余亦拾其事蹟列於僧傳以任後學之評焉

越前吉祥山永平寺沙門道元傳

釋道元平安城人源亞相通忠<sub>我</sub>之子其先村上天皇九世之孫也母某姓懷妊時有吉徵及生白光照室四歲讀李嶠百詠七歲習毛詩左傳相通大義人以爲奇童八歲喪母哀毀過禮因志于沙門讀俱舍論人問其條目辯答如流丞相基房藤公<sub>殿</sub>見其英

本朝高僧傳卷之十九

〇七

敏<sub>也</sub>以爲子志願所薰深嫌世爵年至舞勺潛上睿山投外舅良顯大德顯詢志故元曰母臨亡欲我出家遂遺命而來丞相愛情誓而不聽翌歲拜座主公圓僧正洛州浚衣即登壇受菩薩戒誓止五載台宗教述善究圓義聞三井公胤僧正密于觀心往問法身自性之旨胤曰雖我傳家法事涉義路若欲質其理問於佛心宗元公其言直抵建仁參明菴西公菴見其法器殷勤提獎遂更衣參侍菴遷化後依明全禪師歷六寒暑因閱太藏經貞應二年隨全公入宋達明州界當寧宗嘉定十八年直登天童山時無際

派公據王位謁見器重辭隋徑山禮浙翁琰公問答機語不契去遊諸刹謁一時名匠明年甲申將理歸帆有一禪者勸參見天童長翁淨和尚元乃策錫再登太白翁相看忻然曰疇昔夜夢悟本大師至你是再來人也他日當大弘吾宗即許參堂一日翁巡堂輒僧坐睡呵曰夫坐禪者爲脫落身心也祇管打睡堪作什麼元在傍聞之豁然大悟明晨謁室薰香禮拜翁便印證焉隨侍四載悉得其秘訣欲履靈區策杖往江西暮宿荒村一猛虎鼓牙而來拄杖忽化成龍虎即怖走黎明有一童子告曰師當歸國豈無勝

本朝高僧傳卷之十九

〇八

幢唱直指之道毋滯於茲元曰卿何人也曰我韋將軍也言訖不見元由是回太白辭長翁翁付僧伽黎并白頂相屬之曰你旋本邦隱溪山遠叵勿近國王太臣元拜禮而出以寶慶丁亥年駕商舶洋中濤平著太宰府本朝安貞元年也乃入京城寓止建仁士庶聞風拜謁天福榮已春弘誓院正覺尼相地於城南淺草縣營構精藍名興聖寶林寺請元爲第一世嘉應二年開堂演法懷中瓣香爲長翁和尚拈出參玄之徒歸趨如市其叢規典刑一則太白實元甲辰雲州太守波多野義重慕其道價創精藍於越前州



志比號吉祥山永平寺敦請元爲開山始祖其清規復如興聖四來包笠常盈萬指上堂身心脫落聲色俱非個中無悟何處著迷座中誰是江南客聽取鷓鴣聲外詞上堂忽聞佛法二字早是汚我耳目諸人未到法堂已前喫三十棒也雖然如是山僧今日也是爲衆竭力喝一喝下座結夏上堂以拂子作圓相云結制安居超越遮個又作圓相云九旬禁足完明遮個所以道威音王佛裏遮個而假名爲佛歷代祖師憑遮個而號令人天處處安居時時禁足雖然怎麼莫將遮個爲極則莫將遮個爲向上掃除極則踏翻向上永平只此是安居堪與叢林爲標樣解夏上堂四月十五日握手爲拳七月十五日開拳作掌中間一句子超越兩頭作麼生是超越底一句眼皮纔綻鼻孔遶天上堂如今雲水兄弟還有得底人麼時有僧出禮拜元曰有自有只是未在問得個甚麼元曰不信道乃曰要識得底人麼心不負人面無慙色長翁忌上堂入唐學步失耶耶鼻直眼橫無兩般莫道天童瞞學者天童曾被瞞永平寶治元年副元帥平時賴聘請元於鎌倉受菩薩戒執弟子禮陪臣士庶受戒者不知幾千人平帥欲別建精藍以駐錫

元不就歸比越平帥欲割莊田以納於永平元又不受己酉春元修羅漢供應真放光自空降臨夜嗟峨上皇聞元道化賜紫方袍并禪師號元再三固辭皇詔不許不獲已而受上榻謝恩平不搭肩建長五年示微疾京城親族遣使迎之中秋初五命駕入都館于西洞院上皇敕國醫診脈僧俗拜瞻朝昏填門元酬對如平時二十八日夜澡沐易衣晝偈辭衆端坐而化世齡五十有四法臘四十有一華夷聞訃無不嘆吁門人等移龕於興聖寺延喪三日顏色如生異香滿室如實茶毘得舍利羅無數上足并公奉靈骨歸於越前收于永平寺北隅元平日不換彩衣只用緇服遺誡傳不設牌位其道義之顯槩乎可觀焉法高弟孤雲懷辨剃度弟子三百餘人受戒者不記其算平生著述有正法眼藏若干卷永平清規學道用心集等又廣錄十卷寒巖尹持入宋瑞巖無外遠靈隱退耕寧經山虛堂愚諸老爲之序跋焉贊曰衣食住之三者世俗之所盥也沙門本守佛體杜茶生涯僅能知足何有所求然觀世已來自他宗徒華靡飾紛然競奔道元和尚堅遵佛教始終不變非有大道心安能臻於茲耶余歷覽廣錄其應用

之處自有洞山古佛之家風固再來人也今其宗派  
洋溢乎東西海算數不能及焉蓋有本者如是與

京兆建仁寺沙門明全傳

釋明全俗姓蘇氏勢州人也依附明菴薰陶歲久遂  
傳心要又善毘尼威儀永雪明菴遷化後住建仁僅  
八月貞應二年誘永平道元帆海入宋歷遊諸老之  
門登天童山拜先師明菴祠堂值其忌日捐楮券千  
緡設大會齋供山中衆居三年化於了然齋火浴泥  
舍利無算元公齋靈歸於本邦

相州淨妙寺沙門行勇傳

釋行勇號退耕不詳姓氏相州酒勾人陽曰壬子  
童穉鉗髮銷絲密乘石屏薄肆爲鉢舍八幡宮住僧  
權承福大慈二院將軍賴朝源公夫人二位平氏尼  
真如從勇受戒禮贖甚厚屬明菴開壽福大攝歸化  
易衣頂謁問曰祖意與教意是同是別菴曰放下同  
別知見來與汝道勇益信入勤侍左右久之達法源  
尼真如於高野山建金剛三昧院請明菴爲落慶俱  
養壽師建保乙亥明菴遷化右府實朝源公延勇爲  
第二世久移京兆建仁再歸三昧院準建仁寺規置  
台密禪二宗有密者問脫要勇曰舉足下足皆是密

印其應機酬對大率類此承應己亥壽福虛席得請  
復如鉢舍學人齋集士庶大歸副元帥平泰時建淨  
妙東勝二刹請勇爲開山初祖所住之寺海衆滿堂  
仁治二年七月五日寂於東勝正寢壽七十九有神  
足大歌心公余抵於淨妙寺視開山入滅牌曰永仁  
二年十月二十日寂壽八十若然明菴禪師之寂年  
與勇公之誕歲同年其爲謬也明矣今據野峰名德  
傳定年月日焉

上野長樂寺沙門榮朝傳

釋榮朝字釋圓不詳其氏其產初建顯密二教後從

建仁明菴西禪師受宗門要旨上州世良田縣開創  
長樂寺大弘禪教東關緇曰歸其德化如百咄靡風  
有僧詣室問佛法如何用心朝曰忍辱精進不立一  
塵以寶治元年九月二十六日初更示寂皆異光灼  
燦庭室如晝徒衆爲奇采筆記事過於炬燭寺隣居  
民以爲失火周章奔見朝坐室而逝皆莫不駭嘆矣  
壽福朗譽東福圓爾初共朝之徒也

洛東勝林寺沙門思順傳

釋思順號天祐不詳姓譜初學台教三觀十乘咸證  
其蘊寄思禪法航海入宋歷參諸老及見北禪簡禪

師命居侍局坐卧著精而有所得既承印記一日告辭簡公贈偈曰粟散王都賴其知星分基布海中添三韓未遠須重譯九土雖中其秉彝但見神僧幾臻水弗聞君子陋居夷由餘季札高千古更復區區築蹊爲在宋一十二載歸朝就洛東州河朔勝林寺唱大慧之禪都下嚮風者多法燈初參順順示一偈以警策其一曰學道工夫須著力從門入者被人瞞三條椽下容身易六尺單前參話難退步遠觀明歷歷運思近覓黑漫漫銀山鐵壁雖無路透出透來且自看其二曰大道本然何費功不通一步卻能通慮談萬物皆無味身靜諸緣盡在空法界聖凡兼念外微塵刹海出胸中入疑個事吾應答野興春來花自紅順又善和歌多詠宗乘晚年閉門謝絕人事以無待者不記其終矣

贊曰敬申簡禪師有宋之名匠道高才博而無契其機者只出物初觀一人今觀順公之稟其左證則驪龍領下之珠豈道難獲乎順公歸國之後淵潛高舉不與世交故人多不記其履踐也余今取數偈載列于僧傳使人知北牖和尚之的予而師資之風雅匪但蘭菊擅榮自是艾蒿利病而已矣

奧州圓福寺沙門法心傳

釋法心字性才年過壯齒厭世出家不知文字單契明個事聞宋地禪宗之盛即附商舶抵臨安府直登徑山謁佛鑑禪師求開示鑑於圓相中書一丁字示之心西席下寅夕參究至寢食忘骨體爛志氣不撓四歲儀中觀丁字現心復不爲真如是者九年遂得悟處鑑印證焉辭歸本國就奧州松島開圓福寺唱佛鑑禪心臨終前七日謂徒曰某日吾當去矣然身無病諸徒疑之至期齋罷整衣踞禪林待僧乞書偈心素不能作字乃齧口唱曰來時明明去時明明是個何物將問侍僧曰猶欠後句在心靈處一喝便化世言法心俗名平四郎嘗仕其壘郡守郡守有事以展蹴之心憤然厭世踰海入宋參徑山無準和尚遂悟大事而歸謁郡守郡守大喜乃建圓福寺講心爲開山始祖恭敬日座東開禪客塵風集會心說偈示衆曰遠上徑山分風月歸來開圓福道場透得法心無一物元是真壁平四郎是復一說也載以垂世矣

贊曰宋圓通寺法秀禪師臨終說偈曰來時無物去時空南北東西事一同六處住持無所補秀良久默

寺進云和尚何不道末後句秀曰珍重珍重即展去  
與心公遺偈自然相似然如心公一偈有迅雷擊  
之象信乎臨濟門下別有生涯矣

### 洛北妙見堂沙門道祐傳

釋道祐不詳其氏族筑前州博多人嘉祿年中泛海  
入宋徧謁諸善知識後依徑山佛鑑禪師研幾參訊  
一日入室鑑問曰日本國裏有禪也無祐應聲曰太  
唐國裏亦無鑑深肯之從此一衆矚目淳祐乙巳夏  
告辭寫鑑頂相需讚鑑乃題曰從來震旦本無禪少  
室單傳亦妄傳卻被道祐等開眼破便知老僧鼻孔

不在口邊漫把虛空強描遠好兒終不使筆錢祐  
朝隱逸乎洛北妙見堂不與世接建長八年二月五  
日寂於東福延壽堂有遺偈曰五十六年無伎倆不  
問諸祖與諸佛今日今時告行來月日且從東畔出  
相州壽福寺沙門朗譽傳了心

釋朗譽號藏叟參侍釋圓朝公悟證明白朝公滅後  
住上之長樂正元間移相之壽福禪講雙行學者盈  
滿晚旋長樂建治三年六月三日巡觀山林定安藏  
地翌日集眾談出世始卒向觀音像據椅書偈結印  
而化壽八十四偈曰清夜月靜松風爲琴自非我客

誰是知音又同門有釋了心號大歇從退耕旁公究  
明己事又入宋徧遊禪林歸首眾于壽福出世本山  
後遷建仁精于楞嚴撰註十卷名曰心書本朝禪苑  
雖始於明菴衣服禮典至於心備焉

### 相州巨福山建長寺沙門道隆傳

釋道隆號蘭溪丹氏宋西蜀涪江人童稚俊邁年方  
十三投成都大慈寺薙髮稟具初遊講肆棄去入浙  
謁無準範癡絕冲北欄簡諸太老雖力參究漫無所  
證又屆陽山依無明性禪師錢下一日聞性室中舉  
東山牛過意語話平日碌屑一時撲落辭止明州天

童山嘗聞人謂此方教說盛禪宗之常志遂化淳祐  
六年日本商船在來遠亭陸往見之於浮橋頭忽有  
傳人謂隆曰師緣在東方時已至矣言訖不見師宗  
山隆乃率義翁龍江等數神足泛海者太宰府本  
朝寬元四年也時年三十三寓于筑之圓覺明年入  
都城憩于泉涌寺之來迎院院主智鏡在宋舊交待

遇甚肅指赴相陽時大歇心公住龜谷山隆掛錫席  
下副元帥平時賴聞之大喜迎居常樂寺軍務之暇  
命駕問道建長壬子冬府城東營大伽藍號巨福山  
建長興國禪寺講隆爲開山初祖兼施莊田若干畝



人傑地靈海內奔湊上堂一切智慧從禪定而生百  
千法門自悟心而得有一人不從禪定而生不自悟  
心而得且道此人還有成佛分也無昨夜三更月到  
聽上堂汝等諸人每日向外馳求了無休歇建長指  
示諸人休歇處去也召大眾云僧堂後衆寮前東廊  
下西屋邊纔涉思惟萬八千示衆曰參學人日用中  
雖履踐這一片妙湛靈明田地然於其中不識且爲  
者多若識得祖翁我且問你契券在何處得契券之  
後此一片田地任你操持今時人全身在裏許而不  
知裏許事病在於何蓋不了目前便有許多萬緣萬

日本漢文

本朝高僧傳卷之十九

〇十七

境入汝眼內入汝耳中眼又不曾收視耳亦不能返  
聽未免只隨聲色所轉無自由分此乃非他所障是  
汝自障自障者何不會卻物只管逐他所以道卻物  
爲上逐物爲下上堂紅稀綠暗春將暮欲問春歸那  
一方戲蝶尚貪殘藥蜜狂蜂猶戀故園香新池蓮挺  
玉錢細古岸柳飛金線長莫謂蘭溪不分付誰家好  
子言承當居十二年有詔遷雄之建仁都下繼素香  
華瞻禮節序提唱不異常樂建長之時值開山明菴  
禪師忌辰上堂曰蜀地雲高扶桑水快前身後身一  
彩兩賽昔年今日死而不亡今日斯景在而不在諸

人還知落處麼香風吹萎花更雨新好者於是寺衆  
益加畏敬後嵯峨上皇欽其道譽召見宮中隆進偶  
曰夙緣深厚到扶桑奉主精藍十五霜太國八宗今  
鼎盛建禪門廢仰賢王上皇感護宗志篤歷三禩返  
東關副元帥平時宗開禪興寺而居無何還建長其  
丈室後有松樹一日其枝垂及室衆僧疑訝隆曰有  
一偉服人居于松上與我敘話問其所居則曰在山  
之左鶴岡言已卽隱故偃耳諸徒曰鶴岡者八幡大  
神之廟也神崇和尚之道歸資于此乎自此其徒漸  
循其樹名曰靈松徒屬中有悖逆之輩惡之平帥平

日本漢文

本朝高僧傳卷之十九

〇十八

帥惡於流言謠隆於甲州甲之官民幸其左遷拜禮  
歸仰若親佛日隆亦安處曰我爲弘法來于日國僅  
得周旋皇歲未遑退臥今罹謫至此龍天豈有意于  
斯乎謫居三載又歸錄倉主龜谷山流言復起再移  
于甲不幾六羣之黨皆得惡疾平帥遣使迎隆又居  
壽福入室參禪執弟子禮弘安元年孟夏再旋建長  
平帥欲別營精藍隆爲開山一日相偕出於郊外隆  
指一處曰此地宜建梵刹西覺將鏹鏹地故基三下午帥  
亦隨鏹三下揮草屨而歸秋七月初示微疾至二十  
四日沐浴更衣書偈曰用翳睛術二十餘年打翻筋



日本橋通

本朝二徵傳傳卷之十九

足平帥駭歎自起奉置臺上。梅詡作禮。暨圓覺寺成。建觀音閣。紉靈鏡於太士像中。請梯光禪師作贊。相繼一山。寧月江印靈石芝靈山隱虎關鍊龍山見伯英俊等。一世名衲皆爲著記贊焉。應安七年。圓覺寺火。衆皆以爲像鏡亦燬。燼矣。福山守嚴首座夢像鏡在其所嚴異往覓果在於州中。奉持回。建長僧俗奔禮。其靈鏡現今在福山寶庫。太弟子約翁檢公依虎關和尚之需而記。隆師行狀以列于釋書。然匿諸靈感之末。只顯先師本色之要焉。爾來有賤憎別作傳。至靈鏡之事附會特多。或者不委取之爲證。憎傳之

中飾言系贊焉

贊曰大覺禪師聞此方禪宗之乏而飛錫來儀承英  
檀平公之歸宗開營大仰藍始倡松源之禪自爾序  
遷之名流所躋爲龍象之淵藪焉是故額門以天下  
禪林海東法窟矣觀其住錫之建仁舉開山忌日提  
綱則與明菴禪師之懸議自相符合焉因當時有再  
來之稱也復滅後畱觀音之正真於所持之鏡裏而  
見示諸弟者此又非楞嚴所謂賢聖應化不泄密因  
但除臨終有遺付耶

本朝高僧傳卷第十九

東坡先生集

本朝高僧傳卷之十九

○子

音訓

擢直角切  
萼逆各切  
聘同正切  
杭胡剛切  
鑑力重切

**拏** 紀兩切 **摯** 支義切  
**沾濡** 下人知廉切  
**稠疊** 下徒協切

薺 蘇珍切  
 鬚 忌胃切  
 忻 許斤切  
 慍 下乞切  
 慍 餘輕切  
 价 呂

弄切展之聲也  
淳無反切  
舞勺上岡古切  
稽堅溪切

瑛 以舟切  
 瞰 苦盞切  
 邯鄲 下上  
 錫 思積切  
 搭 茶

合切  
 診  
 候止忍  
 服也切  
 豔  
 以賺切  
 輓  
 武維切  
 楮  
 上聲  
 芥  
 下聲

鏟切初諄  
寢七種可  
灼上切  
燂光略切  
貌下戈  
藪呂助切

也切  
遶  
**榮**  
下之石切  
**瀝**  
上目石切  
**膚**  
和祥切  
**進**  
才各切

爺以述也 涪房也 賽大也 鏤大也 曉切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷十九 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本漢文史籍叢刊 本朝高僧傳卷之十九

〇三十一 止

本朝高僧傳卷第二十

濃州盛德沙門 師密 撰

淨禪三之二

京兆慧日山東福寺沙門辨圓傳

釋辨圓字圓爾俗姓平氏駿州藥科人母夢採明星有妊從此常夢天女相隨母疑怪謂久野山謁堯辯法師欲決疑怪見壁間有畫像如夢所見便問曰此何像辯曰辯才天女也母曰我有身以來夢此天女何也辯曰懷中恐有聖子乎母大喜曰果爾他日宜授師爲弟二建仁二年十月望日卯時誕時天降瑞

雪金光照室明年冬爾抱雪問母此何物母曰雪爾

○十一

曰我生時亦有此雪一家異之三歲聞人言語能辨是非方五歲母懷付辯師稍長學台教早通太義十五則止觀講席至故四諸外別立法性之句講師帶濕爾進前解釋詞義渙然講師歎稱十八幼髮於園城寺登東大寺戒壇入洛聽外學又歸三井綜錯教乘慕禪法棄往上海從釋圓朝公于長樂問教外之旨誓叩久矣得禪門太戒兼浴瑜伽三部灌頂抵相州壽福寺謁行勇禪師其徒大歇心公講首楞嚴爾屢問難心澄解答有賴意僧正演究教乘時稱三井

大鏡鶴岡神祠開八講會與爾對論憲便屈爾笑曰

久審大鏡是鏡非鏡惑凡乎一會作色憲顧衆曰莫

訝是則妙德驚子再來損我痕瑕也爾在壽福閱太

藏四更涼燠歸長樂辭朝公嘉禪元年浮海經十日

達明州界即理宗皇帝端平二年也寓景福院聽月

宗主談律入天童山見寢絕冲公漸抵都下謁天竺

寺柏庭月公質性具月月公優禮授自機楞嚴楞伽

圖覺金剛疏鈔并台宗相承之圖又參笑翁堪於淨

慈謁石田薰公於靈隱嘗退耕軍司知賓相爾見徑

山無準範和尚範公一面器許尋侍巾瓶親薰參詳

○十二

○十二

遂了太事一日範公告爾曰你學海浩渺於我什草

下一時乾枯他日歸國須於無涓滴處橫起波瀾

無勝幢發揮吾道踵從上乃祖遺芳永利未來際淨

祐元年三月朔夜範公召爾燒香謂曰你化道時至

早歸日本撰唱祖道便授親書宗派圖上畫拈華像

左右西天四七東土二三南嶽以下迄無準的的相

承其尾畧曰久野爾禪師并住密庵祖師法衣及自

贊頂相復書教賜萬年崇福禪寺八字囑曰最初住

持當揭此額爾曰教賜一字如何範公曰你必爲王

公所崇只將去爾拜受而出皆會中龍象覺即卷日

東山慧西巖倫斷橋智別山一環溪敬簡翁雲希更  
等相送至山下只絕岸湘雪巖欽眷眷來行在惜別  
而歸仲夏發四明孟秋著博多本朝仁治二年也太  
宰府港慧就橫嶽山初營精藍即日迎請爾乃名崇  
福開堂說法肥前水上山榮尊草教寺爲禪利請爾  
爲開山祖壬寅秋宋人謝國明建承天寺於博多延  
爾而主有智山徒衆嫉爾禪化欲毀承天寺執事聞  
于朝宣元癸卯敕陞承天崇福一寺爲官寺熄衆僧  
之聲叨爾便揭無準所書敕賜大字丕振宗乘四方  
學資駢田來萃湛慧有車入京訴於藤府大相國道  
家藤公延見問法慧宗說泛濫藤公大稱曰上人隨  
誰得此智辯慧曰我師圓爾入宋得禪山無準正印  
現今住崇福承天盛唱禪宗我謝識其其髮髯藤公  
乃發使聘請館于光明峰終日間道恨相見之晚就  
受禪門大成等東密灌因任僧正爾辭不受復補日  
本國總持師爾又辭重親書聖一和尚四生授之擬  
唐代宗賜徑山法欽于國一也先是藤公洛之東南  
構太伽藍名東福寺取東大將爲八宗衆國禪國家  
安寧聖聞爾道延請爲開山始祖令其二子以弟子  
禮文武百官拜禮相繼甲辰秋秋往東關藤公差爾

州刺史行範以爲宿衛至長樂觀朝公過駁州省老  
母贈羅綺珍服等諸洛寓止月輪別墅翌歲請開進  
宗鏡錄帝睿覽不輟四年丙午藤公以東福洪管晚  
成建普門寺延爾假居藤丞相兼經風爾請宗鏡錄  
性相碩師如圓憲真空守眞理圓等列座預聞筆下  
以爲勝會竹林寺良遍撰眞心要決呈書乞跋不輒  
回心問二諦之義磨山靜明誨四種三昧延曆寺座  
主慈源問顯密奧祕戒壇院圓照受禪戒探心要建  
長甲寅往相州館驛谷平元帥時賴請府內栗禪戒  
問曰諸方說法各異或曰妄念緣起而有生滅眞心  
不動不生不滅或曰學者須看念起處之回光返照  
未審孰親孰疎爾曰者裏是何所在說親說疎師曰  
豈無方便爾曰說似一物卽不中師有省卽受袈裟  
誓曰願爲法之外護翌載回京乙卯六月東福洛慶  
樓營冠于都下實經藤公請爾入寺冬至小參朕先  
未分虛空無背面一氣已動萬象自呼喚各運推轂  
日南長至向本分田地撥轉向上機一段家風輝騰  
今古釋迦彌勒無路退身臨濟德山目瞪口呿千里  
萬里無片雲擬議不來三十棒正恁麼時諸人還委  
悉麼雪陰消剝盡來日是書雲復來僧問藤山如何

是冬來事山曰京師出太黃拈曰疎山明立信旗寶  
排陣敵不犯鋒銳收放自在雖然如是東福若有問  
冬來事劈脊便棒何故殺人刀活人劍具眼底辨取  
上堂靈山獨付欽光少室單傳可祖黃梅夜半授衣  
臨濟臨石付屬東福門下無密傳付屬底事今日普  
爲諸人直示這箇事且道與古人有優劣麼各宜著  
眼看無準忌拈香我背行脚航海梯山挖泥帶水徧  
歷南方當時五髻峰頭不覺撞著這老師遭儂毒手  
無回避處眼上安眉湯盡生涯直至如今無言可說  
無理可伸而今對衆盡底揭翻舉香曰劫石有消日

日本報

本朝高僧傳卷之二十

五

此恨幾時休正嘉丁巳後嗟哦上皇召爾於龜山宮  
受大乘戒留宮七日敷宣禪要上皇大悅手親賜御  
扇是歲平元帥再招爾入相州請問禪錄尋董壽福  
此寺明菴開基以來禪規未全住持藏叟退居偏室  
爾南面行事鐘鼓木魚一時改響二年戊午平帥啟  
皇子大將軍宗尊公俾爾主洛之東山寺嬰回祿後  
諸堂索然爾遷僅二年佛殿雲堂等咸復舊觀弘長  
辛酉爾往相陽賀兀菴住建長菴喜鳴鼓上堂衆亦  
請爾普說文永初膺詔幹法成天王尊勝三大刹事  
興建甚多大相國基具源公河間三教太旨爾述其

要略呈之管諫議爲長爲時儒宗常歷釋氏一日偶  
會莊嚴藏院藤丞相曰兩雄相遇願決儒釋論爾曰  
承聞管公從事儒術是不諫議曰然爾曰我法中佛  
佛授手祖祖相傳不因師授則爲虛設某甲自世尊  
五十五世達磨以降二十七葉強弩窮矢雖不穿魯  
縞猶以系授稱釋氏以釋例儒亦當如此不知公於  
孔子得幾世乎諫議指口而退謂人曰欲與爾師論  
儒佛被詰以世系我已陷重圍中六年領東大寺幹  
事以周訪歲貢充其費八年總州別駕源滿氏建實  
相寺於參州請爾爲開山祖壬申春後嗟哦上皇不

日本報

本朝高僧傳卷之二十

六

豫召爾聽法弘安三年春示疾夏後常樂菴龜山上  
皇遣官醫診脉丞相實經藤公入山問候信宿而回  
秋稍愈衆皆喜十月朔就菴祝聖宜出世法終告太  
衆曰卻後翌日當還本寺寶華王座說末後句入太  
涅槃便下座十四日晚命侍僧昇歸寺後顯等曰和  
尚老病不可以風爾曰我昔委命鯨波傳心印而歸  
今將上法堂唱涅槃使人知佛法有靈驗須急具轎  
諸徒皆議不聽十五日兩序耆舊詣菴問訊爾曰我  
明日欲登座說法俾汝等知有末後奇特事衆亦不  
聽爾咬牙曰汝等爲我法魔障至暮召普門慧曉爾



性授灌頂十六日命行者灑掃房宇晚間客來及昏  
果無傳來自越後兩披衣而坐傳燒香作禮爾曰最  
後相見須致九拜傳拜畢坐爾曰相別二十年與傳  
曰十九年耳爾微笑曰予未知滿數也傳將辭爾留  
之示理致機關向上三宗旨夜已更深馳使藤丞相  
告辭少選問左右曰今幾時曰雞已鳴爾乃登椅端  
坐諸徒乞遺偈便書曰利生方便七十九年欲知端  
的佛祖不傳投筆而化張龜三日顏色如常坐全身  
於常樂庵緇白來哭聲撼山叢寥癯之後林木變白

梧桐自枯爾器量宏邈性好諧調雖沙彌童行輒語

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十

〇七

爾汝暨秉槌拂觚稜難近室中舉理致機關向上三  
科以接學者究八宗奧義而智辯無礙性相講者來  
問禪要先詰其所蘊彼早指口爾曰子未委教乘豈  
堪問別傳乎故自教歸禪者多文曆中高麗國王聽  
爾道義附貢船齋書幣求法語爾書宗教大旨答之  
其在徑山雖居侍局無準只呼爾老徑山火後爾告  
藤丞相通鉅材珍貨寶治初承天寺火爾如關西謝  
國明驪其來一日中建諸堂十八宇弘安庚辰春爾  
立法性寺五太堂其二歲之敦大概類之有語錄盛  
行于世正和初敕賜國師徽號本朝國師自爾始也

贊曰專一家之法者不粹于他教況教外之宗乎是  
座主家之常也爾師初顯密性相之源委審究揭厲  
後入大宋得單傳宗從前所蘊猶捐諸掌爲王公之  
師開烹佛煨祖之爐竊於是南北講學來質家家之  
要訣若不明教眼曷能屈服若義龍律虎邪泊乎能  
事曰畢末後唱佛祖不傳之句聲光輝古今虎關和  
尚贊曰禦外侮而立正宗整教綱而提禪綱蓋得祖  
道之時春其言實非銜焉

紀州鷲峰山興國寺沙門覺心傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十

〇八

觀音像求子其不夢太士持燈授母覺而卽娠及誕  
英氣逼人稍長不屑處俗年十五投神宮寺讀佛書  
略知大意十九落髮披緇適和州東大寺禮忠覺律  
師登壇進具乃上高野山學密印於傳法院覺佛習  
秘軌於正智院道範因謁金剛三昧院行勇禪師問  
教外之旨易衣服侍又稟金剛乘於三輪蓮道受菩  
薩戒於深草道元延應己亥勇公遷相之龜峰心隨  
司紀綱寶治丁未春抵上野長樂寺通法焿之好參  
釋圓朝公今茲秋朝公寂又歸壽福謁載叟譽公明  
年秋入京參勝林天祐順公順者入宋傳法之僧爲

之歲創從此有南詢之志辭居東福聖一國師國師勸之曰公參無準必有所悟爲修書通謁建長乙酉春附商舶入宋直趨雙徑無準已遷化癡絕冲公來補其席心拜謁掛搭與衆同單未嘗出堂而機不契翌載秋參荆叟珙公於道場猶未契夏了遊四明駐錫育王奉台嶺供應真上太梅拜祖塔浙東靈區杖輟殆遍寶祐癸丑春值鄉僧源心因問予久遊此地還遇明眼師否源心曰護國佛眼禪師一代宗匠可往參見相率抵護國佛眼問汝名什麼心曰覺心眼即說偈曰心即是佛佛即是心心心佛如如亘古亘今

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十

〇九

因徵詰數番機機相投即承印記甲寅春告歸眼付月林和尚語對御錄無門關等又授像贊曰月迷于訣飛紅爐雪一喝當鋒崖崩石裂化死蛇作活龍點黃金爲生鐵去縛解粘抽釘拔楔更將佛祖不傳機此界他界俱漏洩心辭如務州寶林寺拜虛堂和尚堂付法語勉其化導及至海中太風簸浪心至誠念觀音忽有太日輪現於檣上風浪即息尋着太宰府即建長六年也心徑居高野金剛三昧院拜觀受業行勇禪師喜延居第一座丙辰春心齋水晶數珠并書簡獻佛眼禪師眼以偈報曰百八摩尼願願圓達

天鼻孔一齊穿恒河沙數佛菩薩日日呼來跳一圈心遊鷲峰愛其絕勝有終焉之思沙門願性俗姓藤氏仕大將軍實朝源公源公薨後登高野山剪髻出家稟習密灌興建爲任修營金剛三昧院司別當職建西方寺爲功德主崇心道德拜請爲開山始祖今號興國寺由良地素多妖怪至者必遭惑亂自心住居或授戒或誦呪皆悉潛蹤文應庚申秋佛眼寄書并法衣一頂七葉圖一鋪月林和尚體道銘賜對十段錦誨語深切龜山上皇聞心高風三降詔書俾往城東勝林寺相繼迎宮問法要心玄談入理宏機縱

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十

〇十

辯上皇始知宗門有過量事乃改皇居爲禪刹扁曰禪林請心而居睿問不絕聲震震區然厭帝畿繁富潛回紀之舊院永仁二年丞相師繼藤公捐城北別業初妙光寺將招心爲始祖諸徒亦戮力樹壽塔榜名歲寒屢以連署乞心倦遊心復入洛邑龜山上皇及後宇多上皇召嗟峨離宮睿問禪道時年已八十奏對彌詳皇情大喜嚮信倍於昔日緇白上下聯袂拜謁俱願心之終老此地居之未幾亦歸舊院心住鷲峰四十餘禪南紀大化江湖參徒常盈千指茅屋蔬菜與衆共處或有贏糧山下或結菴樹下請舌參

者室中常舉狗子話。攝學者示衆曰：諸佛悟心，衆生迷心。諸佛源一，迷悟境分，不假他力。自心能知，欲至佛果，須參自心。凡有所問，但曰念起是病，不續是藥。一切善惡都莫思量。至有敎家義學問宗旨事，折其枝葉，直曉根源。當時相爲法窟。永仁六年，示微恙。冬十月十三日集徒，醺醉如常人。夜神色稍異，左右請遺偈。心笑曰：我平生屏筆墨，今何特地乎？左右曰：師今臥，不端坐，無告滅歟？曰：諾。即時脫去，世齡九十有二。臘七十有四停龕八日，面範儼然，闍維得五色舍利，無算諸徒分奉。塔於京，與紀之本菴龜山上皇。

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十

○十一

法燈禪師

敎法燈禪師，心平昔異靈尤夥。一日陞座說法，白曰：晴空迅雷大鳴，隆鷲峰東南聲聞四十里。諸衆往相其故，有一顆寶珠心乃埋之，爲山門鎮心。登熊野妙法山，青天忽星祥雲，下覆爾來神屢入室。問法，心在紉河，謂寺僧曰：爲我開殿。拜太士相，寺僧不肯，心坐垂堂，默禱須臾，續闢自開。太士與心對談，醺醉寺僧驚起禮拜，乃革院爲禪宇。今誓度寺仁和寺僧正某久病不起，諸家加持無效，就心乞法救。心只禪坐，其病立瘳。僧正起拜曰：希有禪師，感驗何如此耶？心曰：佛法無別，乃以念珠與之。僧正感喜，寄附紫金臺。今日主山

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十

○十二

法燈禪師

紫金臺畔有盤石，心常禪坐，人只見太士變相。心在宋登五臺山，文殊太士付藕絲伽黎，歸朝之後鄭重受持。一日詣勢州神祠，神出自關宮受法要，就求衆心，卽獻之。永德二年神託祝巫付衆衆，於別峰殊禪師。車見別傳心滅後三十年，小師孤山遠公持心肖像求贊，辭於建長。明極和尚時極有違和卷，而置屏風上。一日極坐牀，屏下肖像踴跳扣屏風，歎聲極謂：惟眞訝贊語之遲，卽起掛案上，燒香拜謝，援筆爲贊。其終系偈曰：法燈遺像來求贊，老值病餘機思遲。忽聽牀屏聲剝啄，祖師靈驗有如斯。卽呼遠曰：先師靈威吁可畏乎！因以實告之。遠持肖像贊偈，謁圓覺清拙和尚，將陳其事。拙曰：遲緩建長和尚來舉似我，了卽薰香拜瞻。遠曰：願和尚著一偈而證清拙次韻書曰：法燈豈曾有動相，建長被惑見何遲。白日牀屏聞跣跳，笑翻南海黑波斯。遠近相傳，駢闐瞻仰，遠又上京師具事。奏後醍醐帝乃迎宮供養，歎曰：先帝二代面晤對譚，淡生信托朕今對眞如逢生身可謂二代有緣之師也。重敎諡法燈圓明國師。贊曰：法燈國師問敎問禪，審祥篤信如渴鹿求水也。雷宋六禪承佛眼之印，歸而播化，猷內非翹受寵遇。

於王公又俾大廟皇神崇敬禪化其靈驗奇跡皆是自禪定而得余常向人曰真正禪者若修密法其應影響今學金剛乘者不知其本而卻以謗禪膠執猶未除乞觀唐一行禪師之事蹟與今國師之撰可以爲證焉

### 相州建長寺沙門普寧傳

釋普寧號兀菴某氏宋國西蜀人自幼出俗英靈振舉初遊教場稍久棄去出峽南詢凡諸知識門庭次第歷參及到蔣山值長老凝絕中上堂聞舉覆船僧到雪峰話忽爾有省尋登育王山依無準範公又聞

日本書述

本朝高僧傳卷之二十

○十三

準上堂舉僧問古德深山巖崖有佛法也無德曰有僧曰如何是巖崖佛法德曰石頭大底大小底小寧於言下如夢醒爾後每逢入室機辯滄發端平初準住徑山寧從侍焉一日準謂曰昔演祖請益白雲端和尚端曰近有數禪客自廬山來教他說禪也說得下語也下得批判也判得祖曰和尚如何端曰我向彼道直是未在祖聞此語七日忘食方論其旨寧聞已無言可對只向未在處着力自是入室不下語準楊住曰你尋常口旁舌沸如何不下語打一竹篋寧當下撲破漆桶尋入室通所悟準曰汝徹矣只是得

道易守道難須默默守之久久自然感驗也寧退守兀菴兀菴度日準大書兀菴二字遺之因以爲號既而遊將徑間既見厭聞聲名遐驚靈隱天童皆居第一座適象山靈巖虛席諸山公舉府帖頻至寧不能辭入寺開堂嗣香供佛鑑準寄法衣信書附諭切當結夏上堂諸方安居結制靈巖結制安居雖是一般規矩於中大有差殊作麼生趙州東壁掛胡蘆遷常州南禪徑山偃溪和尚來訪寧搥鼓上堂東澗水清且泚源遠流長波騰鼎沸從這裏入不知其幾是則是只如國一禪師經過梁溪暮將泗州大聖鼻孔一捏

日本書述

本朝高僧傳卷之二十

○十四

直得無處出氣爲復歷良爲賤爲復神通遊戲良久曰君子可八下座時北虜獵放雖寺院皆受虐偶本朝道舊每逢商船寄書聘招遂以景定庚申一錫浮海及至洋中有龍捧太珠七顆現於檣上舉眾仰視僉曰東海龍王迎護於師俄乘順風遠博多津高聖福寺尋入京城東福聖一與寧爲法中昆李掃客位而迎待遇至渥都下繼白爭先瞻禮則元帥平時賴聆其道價還至鎌倉寓止福山住持蘭溪即寧舊友相見甚歡先是平帥夢高僧警訓曰公勤參禪覺後異之繪像拜誓及見寧與所夢像宛爾惟肖示是信



嚮日厚命據正室寧連至十五偈以力辭其命益堅不獲已而就上堂問答罷迺曰諸佛未出世祖師未西來人人真智湛然好箇清平世界無端胡種萌孽便見毒惡流行平地干戈無風起波遂致分疆列界移東補西荆棘參天葛藤遍地然雖如是只如世界未立佛祖未興已前如何通信良久曰鯨吞海水盡露出珊瑚枝復舉臨濟和尚因王常侍相訪因緣拈曰臨濟老漢氣吞寰宇只要勘破一切人卻被王常侍等閑勘破諸人還知麼且聽下箇註腳一換復一授一踢復一拳今古應無墜分明在目前上堂卸卸千斤重擔惟要在處清閑老來業債未脫復墜建長一闢語音未辨醅酢猶艱說者聽者難復難只據一條白棒南來者北來者俱與痛棒忽然打著一箇半箇獨脫底從教知道酌然不在說處不說處三乘十二分教總是指空話空撒土撒沙必竟如何摘楊花摘揚花東福法兄至上堂同飲龍因同依師席切瑳琢磨相滋相益分袂東西各提祖令越漠來投心膽傾盡執別恰恰一周千里俯垂輝映舉眾再奉慈光無異撥雲見日若是向上向下總將靠之一壁何也憶得凌霄臺毒之家水也不曾沾他一滴呵呵呵會

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十

○十五

也麼青山不鎖長飛勢滄海合知來處高寧禪規濟

濟號令積密包笠盈堂得法若干人東方叢社捐爲法窟平師乘暇入室參禪遂有所證其機緣語句在延寶傳燈錄弘長癸亥冬平師道宗居士卒嗣子平時宗任嗣元帥寧抱歸宋之思前住持衆中是非父起偶有觸忤者寧急率不羈勇退搥鼓辭衆曰無心遊此方有心復宋國有心無心中通天路頭活舉拄杖曰拄杖頭邊批日月下座決然而去闔國強雷堅執不聽平師差部屬護送到西府既而達明州受省劄住婺之雙林捨去漫遊江浙晚董溫州江心至元十二年十一月二十四日寂于龍翔寺敕諡宗覺禪師有嗣法弟子大夢和尚法孫通闡楚寧有四會語錄若干卷侍讀尤煥跋其尾盛行于世矣贊曰元菴禪師悟解出陰界提唱包域中闡浮樹下隨緣駐錫寥寥行李灑灑胸襟大唐日本素無定處擲遺藪於建長闢國雷拂衣而邁猶如達磨之一革屐履而去易曰君子見機而作不俟終日者夫寧師有焉

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十

○十六

越前永平寺沙門懷英傳

釋懷英號孤雲世姓藤氏九條相國爲通之裔孫也



十八從橫川圓能法師落州年二十一登睿山戒壇受菩薩大戒學顯密教兼修淨業一日歎曰直饒雖究三藏經竟非出離法丈夫豈可瓠瓜乎捨參多武峰覺晏禪師晏大日忍公之嗣示以首楞嚴頌御瓶之喻英即知無空之去來明無識之生滅晏曰你已曠劫無明今日永消於是一衆推重聞道元和尚親傳曹洞之宗旨還自太宋寓居建仁特往拜謁問答數番知有長處傾誠歸附元開法洛之興聖英親侍參叩急於救頭然聞元舉一毫穿衆穴因緣言下契悟元鳴鼓報衆分座說法及元開越之永平英又從

日本橫述 本朝高僧傳卷之二十

〇十七

馬英年邁元公二歲凡有寺制必命英施行英曰和尚號令奈何不自行偏命某甲元曰此山他日傳佛法流傳無窮者在公一人耳建長五年秋元邁疾退休命英補處以就醫于京師英亦侍湯藥無何元遷化英躬負靈骨如法歸葬一衆悅服四方歸崇不與元師異文永四年退居東堂命上足介公繼其席弘安二年夏嬰病檀越雲州太守藤公來自京師問候英念其遠來殷勤誨示檀越涕泣而還又垂誡門人曰我滅後火浴而收遺骨瘞於先師塔旁勿別造塔至八月二十四日沐浴入室待接如常及曉謂左右

曰先師夜半遷化我當効之時至鳴鐘集衆晝偈畢擲筆顧視大衆曰珍重溢然而化世壽八十有二法臘六十有二停龕七日面如生而氣尚暖道俗瞻禮道路絡繹

### 肥後大慈寺沙門義尹傳

釋義尹號寒巖順德帝第三子也自少登睿山爲苾芻學一心三觀之旨俄慕教外宗謁道元和尚於興聖易衣參究遂得契悟建長癸丑秋元公默化尹卽卷被遊函夏時年三十七徧歷諸山謁無外遠廬堂愿退耕寧等諸老皆蒙優禮又躋熊耳峰禮初祖塔

日本橫述 本朝高僧傳卷之二十

〇十八

三千五百拜時舍利三粒現於坐具上光彩耀灼見聞莫不驚歎之在宋十餘年而歸直寓博多聖福寺繼往肥後州創如來寺建治年中尹募衆緣造大渡長橋人民皆被其利濟刺史源泰明嚮仰道風誓爲外護弘安六年勸諸檀信復建一寺於大渡設梵像室堵牆曰太慈金碧煥爛飛出林梢參玄之徒鳥立鸞振龜山上皇特薦宸翰賜額正安二年八月某日謝世壽齡八十有四塔曰靈根焉出得法弟子五人系曰世人言尹公初參永平道元禪師後入太宋嗣法天童山如淨和尚無與今之傳相違耶通曰此庸

僧之覺言也元師語錄其寂之後尹公持入宋無外  
通虛堂愚題語稱美釋見其文為元師之嗣分明也  
又義堂信公日工集中壁山鐵公宗派圖俱以尹公  
為元師之資項世或者作尹公傳為顯德帝子復言  
入宋謁如淨殊不知元師在日淨和尚已遷化故永  
平錄中有植長貌忌日拈香此時淨和尚過去而久  
矣考索不至而信筆妄作今其本在在令人疑惑半  
也或書為徹通介嗣亦非也

京兆永興菴沙門詮慧傳 僧海

釋詮慧姓源氏江州人也幼齡出家于橫川習經密

日本漢書

本朝高僧傳卷之二十

〇十九

之教有聲議論一日自念我於大小乘既得通曉頃  
間有元法師傳禪於異域來彼有何長處當往試之  
即往漢草偶逢元公上堂在旁傾聽元曰有人道得  
一句法界量滅未免春夢說吉凶更道得一句破塵  
出經也是紅粉飾佳人直下照了非夢之真覺便見  
法界未為大微塵未為小兩既不實一句如何道良  
久曰井底蝦蟇吞卻天邊玉兔慧聞之茫然問測易  
服隨侍久之契悟開永興菴而居未幾四來包笠靡  
然歸風鶴為一方之叢社焉又有法弟僧海生機像  
受元公印首眾於興聖不幸短命而寂歸終偈曰

二十七年古債未轉踏觀虛空投獄如箭  
寶日當聞僧海首座契告真正今觀臨亡偈不失洞  
上之曲又有濟下之風

本朝高僧傳卷第二十

日本漢書

本朝高僧傳卷之二十

〇二十

音訓

痕瑕 上胡居切 梯 天都切 浩渺 上胡老切 呿 區遇切 鉞 無方切  
春 資肯切 梯 天都切 施 湯何切 弩 奴古切 縞 古老切  
猪 其廉切 脉 時吏切 轎 渠與切 龕 苦含切 瘞 其計切  
諸 雄皆切 輓 乳演切 暨 至也 觚稜 上及乎切 貨 呼計切  
玉日 肩 先 蘇切 箴 諸波切 遼 連索切 齊 齊前切 圈 巨卷  
之 養音 貫 呼驕切 瞻 古咸切 聯 上連切 藕 語口切 贏 巨卷  
餘 龍切 攸 於尤切 垂堂 上直連切 闔 他達切 藕 語口切 贏 巨卷  
闕 九彌切 踣跳 下他切 遲纒 上陳知切 剝啄 上竹角切 橫 古猛切  
撰 難產切 嘮 郎刀切 沸 敷勿切 此 此禮切 橫 古猛切

迓五駕切 鯨渠京切 挨四皆切 抄宗滑切 卸司侯切

困古淵字 靠口到切 蠱公土切 碱古得切 燿上戎切

下余切 焜謝本切 蘸莊簡切 蠲于貴切 蝦下何加切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財興

本朝高僧傳卷二十 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 謹

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十

本朝高僧傳卷第二十一

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之三

筑前首羅山沙門敬念傳

釋敬念號悟空不審姓氏筑前州太宰府人既及冠歲脫離塵囂拜聖一國師於承天寺爲受業師其性剛毅道志敦厚寬元年中越漠入宋參禪山佛鑑禪師久之不契時道祐前承記佛鑑混處衆中念白祐公言其參方雖久實未有人頭處望公慈悲方便祐驚曰卽今在懷念言下契悟罷歸東歸菴居松里

○十

○十

○十

文永元年元菴將歸宋寓止聖福念特往相見夜話次與一僧評品初祖傳法偈僧曰一華開五葉結果自然成此祖師識意宗後分爲五家念笑曰胡亂指注此是吾祖末後全提句卽問菴那個親那個疎菴卽書曰吾本來此土無法與人傳成蛇而入脚成龍而上天念還舉示其僧低頭無語三年丙寅東巖安公營福田菴於碓東請念開法輦下塵風冠綵禮謁上堂曰釋迦不出世達磨不西來正當恁麼時佛法遍天下人人具足纖毫無相隔進前退後全體現前何有會與不會西天教法傳震旦之後翻邪歸正檢

惡修善然後達磨大師來震旦國面壁九年待機待時唯傳二祖念上座來於此菴僅十餘日恣坐椅子道行未調機緣未熟雖然恁麼吾今欲說佛祖相傳底解脫法門拈拄杖曰旣說解脫法門有什麼疑大衆著眼看畫一畫擲下拄杖下座爲衆講圓覺經東巖先誦文念數宣玄致一時宰官列座傾聽後返西府棲遲于首羅山九年壬申十月八日將滅度集衆上堂拈拄杖卓一下曰三世諸佛證得法六代祖師傳授法皆悉在拄杖頭上又卓一下曰看看卽坐脫閱世五十六坐臘三十三

○十

○十

○十

肥前萬壽寺沙門榮尊傳

釋榮尊號神子父平康賴仕朝任判官母藤氏移居鎮西生尊于筑後州在胎動搖三十餘日逮誕口放異光父母恐畏捨之隘巷而牛馬不蹈體又淨潔忽有異媼抱之歸家父母爲奇而愛育焉及長從本州永勝寺嚴琳僧都前蒙進具學天台教琳者榮西之徒也給仕年久往肥前州小松山結茅菴居專修淨業嫌名相之煩欲聞直指之旨詣豐前宇佐神祠祈冥助逢一神僧謂尊曰子緣在東方不可留此尊趣裝東邁抵上野州謁長樂釋圓朝公聖一在衆中勸

尊參問久而有省嘉禪中入宋見徑山無準和尚時年四十餘以言語不通無所契聖一復在待者寮就而研究多所發明因謂聖一吾先歸國建立精藍令師開堂在宋三載而歸海中遭大風尊持舍利舟人以爲舍利所致迫尊棄去尊不得已投之及抵岸有巨鼈負之而出尊喜而得之本邦有復婆塞隆範者於水上山構真言寺開尊求勝地歡迎駐錫其地高岳北接長河東流風景極麗尊與檀越戮力遂化寶坊改教寺爲禪刹慕徑山之徽號名興聖萬壽禪寺仁治二年聖一歸自宋乃請坐主席尊居版首行輩

本朝高僧傳卷之二十一

本朝高僧傳卷之二十一

○三

林法又開報恩朝日薦福圖通妙樂諸刹大化道俗尊神異甚多一日詣宇佐神祠與神款語久矣侍僧怪而問之尊曰我爲神授無相甚深正戒神隨喜禮謝號吾爲神師尊授改子上京師省聖一因將至賀茂祠路值一峨冠人下車語曰吾賀茂神巫也瞻昔夢神告曰明日有金色如來至吾所汝當出迎出行到此即遇如來今果逢師乃引尊登殿又在彌勒寺時將造金堂寺前有一大石尊以拄杖石上縱橫畫畢曰當爲金堂四楞磔盤此夜雷雨大震黎明石裂表爲四片其形如鏡觀者驚異二條大相國藤公隨尊受戒

泰禪遂有省所乞其杖拂尊付之副書曰昔趙州和尚以拄杖白拂獻趙王此是老僧一生受用不盡底今殿下欲學古風因以付之當爲縱橫受用藤公答書曰拄杖相傳受用隨意老夫歌舞拄杖亦歌舞云云藤公嘗寫尊肖像自題讚辭贈之文長不錄焉文永九年十二月二十八日坐脫春秋七十有八有弟子一人微宗諱道英出世萬壽寺

### 信州安樂寺沙門惟僊傳

釋惟僊號樵谷不詳其姓里建長宋渡海入宋與本邦明南浦儉約翁照無象同參虛堂愚偃溪聞介石

本朝高僧傳卷之二十一

本朝高僧傳卷之二十一

○四

鵬南翁諸大老後於天童別山智和尚輪下頓罷參詢及告辭育王山觀物初贈偈曰三應聲中密意通分明飯布裏春風休論親切不親切巨舶回程至海東僊歸國後不求聞達隱逸信州開安樂寺不蹈紅塵四十餘載而湖海包笠憧憧旁午上堂舉曹山辭洞山因緣後來佛鑑曰好大衆田地穩密血脉貫通即不無曹洞父子檢點將來俗氣猶在拈曰山僧不然曹洞父子似田地穩密血脉貫通相似仔細點檢將來佛法見解猶在僊後卒於住處贊曰儉約翁拈香語曰樵谷和尚昔年抄透萬松關



太白峰頭談別山。藏真摩尼親。拾得堪天鑑。地。寒。四十四載名。真橫。六十餘州雷。電。馳。兩。藍。弘。大法。縱。擒。殺。活。在。臨。時。此。是。維。谷。平。生。得。作。磨。生。是。涅。槃。後。有。底。大。人。相。良。久。日。描。不。成。今。畫。不。象。十。古。爲。叢。林。榜。樣。繇。是。觀。之。其。爲。一。世。宗。師。也。昭。晰。矣。只。見。其。略。而。未。見。其。全。可。爲。嘆。惜。焉。

洛北正傳寺沙門慧安傳

釋慧安號東巖。不考氏族。播州人。也。生氣俊發。壯歲登本州書寫山習台教。及披削。東。暮。夕。辛。勤。不。怠。積。臥。歷。十。餘。載。究。一。心。三。觀。之。旨。年。三。十。八。抵。城。州。

石清水。八幡宮。前。龍。樹。寺。隱。大。論。一。百。餘。卷。正。嘉。三。年。段。入。宋。之。志。杖。錫。至。太。宰。府。傳。通。智。三。念。公。所。繼。宗。乘。始。知。義。解。無。用。易。本。隨。付。一。日。問。本。寺。和。尚。皆。時。在。先。師。處。有。什。麼。因。緣。了。一。大。事。願。聞。緣。由。念。師。舉。曰。吾。聞。先。師。移。方。雖。久。實。未。有。人。頭。處。望。慈。惠。方。便。先。師。抗。聲。曰。即。今。在。爾。我。當。下。疑。滯。水。清。安。曰。者。個。正。是。其。處。處。和。尚。豈。無。方。便。麼。念。曰。解。德。應。道。也。是。何。如。安。於。言。下。默。契。念。即。說。心。辭。左。右。後。洛。東。中。山。福。禪。寺。出。鉢。光。明。居。弘。長。二。生。講。元。菴。軍。公。於。建。長。通。其。所。惜。是。一。面。如。畫。畫。是。趙。州。狗。子。話。

後。間。安。機。辨。無。滯。在。是。臺。臺。商。摧。湖。臭。菴。曰。西。來。單。傳。分。付。慧。安。辭。歸。舊。隱。及。元。菴。歸。宋。安。送。至。焉。羽。菴。付。法。衣。及。頂。相。而。去。三。年。丙。辰。安。欲。報。法。乳。之。恩。還。國。心。二。侍。者。請。悟。空。和。尚。住。福。田。菴。拜。禮。甚。勤。空。默。坐。將。西。歸。安。寫。自。像。乞。讚。空。即。書。曰。吾。無。法。與。人。傳。天。是。天。地。是。地。若。要。知。個。中。意。回。首。即。自。見。矣。其。後。書。曰。自。世。尊。至。徑。山。無。準。禪。師。五。十。四。世。道。祐。和。尚。嗣。法。徑。山。吾。嗣。道。祐。東。巖。嗣。吾。佛。佛。授。手。祖。祖。相。傳。的。的。無。私。繩。繩。有。準。文。承。五。年。靜。感。法。師。崇。其。德。望。不。泯。之。今。出。河。建。正。傳。寺。敦。請。住。持。西。巖。蟻。聚。來。及。百。徒。欲。剽。掠。於。寺。安。乃。擲。衣。東。行。訪。大。修。念。公。於。壽。福。念。公。下。榻。待。遇。東。州。太。守。平。卷。盛。期。聖。海。寺。請。之。住。職。敷。禪。大。接。玄。徒。建。治。三。年。夏。夏。微。疾。中。冬。朔。日。召。門。人。曰。我。幻。軀。近。日。當。謝。汝。等。盡。各。各。決。所。疑。請。徒。請。益。安。應。機。不。異。平。時。至。初。三。日。禮。越。間。疾。安。召。禮。越。曰。近。前。來。禮。越。近。前。側。耳。安。曰。遠。來。近。前。已。全。體。分。明。及。平。側。耳。早。是。千。里。萬。里。即。虎。然。示。寂。春。秋。五。十。有。二。建。治。三。年。仲。冬。三。日。也。聖。日。甚。見。有。五。色。舍利。粲。然。於。骨。石。門。人。收。諸。琅。函。塔。于。福。光。山。應。永。二。十。年。三。月。二。十。三。日。敕。諡。宏。覺。禪。師。

系曰古來謂東巖之宗派者念曰兀菴之嗣也余曾  
考之安公自謂吾雖受兀菴之印證而無絲毫從化  
得只於念公言下打破漆桶兀菴道眼清明故為證  
明焉須請念公報孔恩又其門人撰巖行狀曰今時  
競嗣鉅利廣衆大名之人大忘其本此以契證不正  
賣名逐利之故也師不嗣兀菴名翼飛兩朝德望高  
一代而繼嗣晦隱遂無賴底之漢如吾師者誠非貴  
肩旁位者之所及也夫禪法者以實於師承為的傳  
宗故今斷為念公之嗣先是修延寶傳燈錄時以東  
巖之事語於前僧錄司金地禪師禪師亦以為然焉

京兆三聖寺沙門湛照傳

釋湛照字東山別號十地不詳姓諸佛中州一萬壽  
人初遊講肆兼修中養業聞聖一國師禪化夏末入  
室遂得密契開三聖寺為第一世伏見帝召官問道  
照童萬壽帝賜寺產此夏大旱救照祈雨即日有應  
特賜水紋仰梨弘安康辰冬聖一順世遺命補東照  
照讓于德弗嗣丞相藤公以有國師之命再四堅請  
為國開堂為第二世指門云大道無門諸人擬向甚  
麼處入看有無位異人這裏趣入上堂乾坤大地嘆  
作一句擔枷帶鎖不作一句紫雲漢法慶前得句意

外明宗透是非關出羅籠表十字街頭垂手孤峰頂  
上眠雲的的無私頭頭有據以此安樂生民以此康  
福天下以此播揚太教以此扶起正宗豎抹橫該七  
穿八穴正與麼時如何靠拄杖曰四海浪平九夫雲  
靜纔經九旬便回三聖正應四年中秋初八盜伺其  
室委順而逝年六十一臘四十一開維收骨第七之  
朝其徒欲分骨而開因舍利粲然不可勝數塔于圓  
通先是覺禪師計至或人曰大覺禪師火浴流舍  
利可哉照曰我亦他日空子奇哉之言矣至此果然  
東皆欽服之先知焉哉蓋實覺禪師

京兆三聖寺沙門正念傳

釋曰余見支那諸師傳戒後現舍利者復推可尊者  
唯此方先達特為最多而未有如實覺禪師生前預  
知有真骨者夫設利聖者雖非禪人之強而所要然  
不因多劫三學之薰不能感得壽且壽以至菩薩辟  
支壹是皆備所以浮屠氏有而維振者無者蓋以此  
也審觀禪師之事自非虛虛法印安能不合其言  
至如斯耶

相州淨智寺沙門正念傳

釋正念自號大休宋溫州永嘉郡人初參東谷光於  
靈隱聞公舉張拙秀才問長沙百千諸佛但聞其名

未審是何國土話。有省作偈呈。在日右軍王羲之。聖最爲奇。淡書千佛。楊濃寫四賢詩。後參石溪和尚。溪間達磨。坐熊耳。因甚。隻履西歸。念日眼觀東南。首在西北。溪打一拂子。念當下。脫然。咸淳五年夏。乘商舶東渡。本朝文永六年也。繼屆相州。建長蘭溪和尚。延爲高賓。副元帥平時宗備禮貌主禪興精藍。懷中辦香爲石溪拈出。次遷建長壽福圓覺諸刹。上堂是法不可示言。詞相寂滅。抗拄杖云。這個是法作麼生說個。不可示。卓一下云。這個是聲作麼生說個。相寂滅。直下會去。便知道。山色清淨。身溪聲。廣長舌者也。

日本漢文史籍叢刊 第三輯

〇九

不會。發裏何曾走。卻慳慳拄杖下。座上堂夫爲善知。識者驅耕夫之牛。食飢人之食。棒棒條條。掌掌握血。夜叉頭。菩薩面。繡佛手。伸驢腕。于眼觀之。不見可怪。可疑。堪笑。堪悲。韶陽知後夏。誰知上堂聲色。頭上行住。坐臥。魔宮虎穴。禪定宴安。刀山劍聚。出沒遊戲。菜蕒園苑。開演妙門。且道。此人全甚。摩力良久云。不欺之力。中夏上堂飯白如雪。扇團如月。喫飯搖扇。猶嫌道熱。君不見。炎天壠上。耨耕夫日炙背皮。汗流血。又不見。香積厨中。營事人變生作熟。不輕歇。端坐受食。何所爲。只要教君成道業。參玄。上土宜返思。莫墮人。

時狐兔窟。燦石流金。不變心。晝三夜三。勿間隙。移得通身白汗流。笑倒雲門。乾屎橛。示衆從上。諸大宗匠。開甘露門。垂示機語。截鐵斬釘。除疑破執。如盤走明珠。不住中邊。擊塗毒鼓。遠近俱響。所以道宗乘一唱三藏絕詮。機輪轉處。作者猶迷。此五宗本分事。非權立漸次階梯也。蓋緣此方緇白素尚。教理十常八九。於達磨直指之道。未深信受。間有人此宗根本不明。沿襲過謬。多生異見。總曰教門有所據。宗門無所依。遂乃廣尋文義。意識分別。如水中捉月。鏡裏求形。卻將諸祖觀面提持。超情離見。底機要。隨語生解。穿鑿

日本漢文史籍叢刊 第三輯

〇十

理路。通相印證。夏有一等執。平常無事。疑心待悟者。況諸聖大解脫門。唯過量人乃能徹證。要須玄路絕。聖量盡。如冲天丹鳳。翔碧漢。出海鯨龍。興騰雲雨。若不爾者。皆依他作解。記問傳習。認目前光影。隨逐聲色。墮斷常坑塹。互入邪途。元正上堂。天無爲以之。清地無爲以之。寧萬物無爲以之。化且道。初僧無爲時。如何良久。日數聲清磬。是非外。一個閑人。天地間。彼岸上堂。日本風俗。有春二月。秋八月。彼岸修崇之辰。教中道。譬如船師。不著此岸。不著彼岸。不住中流。唯欲度此岸衆生。至於彼岸。雖然。古帆到岸。卽不問。

洗脚上船一句作麼生道良久曰撒手到家人不識  
更無一物獻尊堂念在禪興夢觀音太士告曰逢強  
則止後十年從建長移壽福仰見龜谷山額始明聖  
識釋書曰仰見龜谷山額始明聖識即鑿西南巖壁  
紉一字以安太士像又創小菴於山巔扁曰藏六就  
築壽塔爲歸藏之地自著圓湛無生銘識行李始卒  
正應二年冬寢病於圓覺十一月病革遷正觀寺晦  
日書偈曰拈起須彌槌擊碎虛空鼓藏身沒影踪日  
輪正當午置筆而化春秋七十五關維收靈骨得諡  
利羅於灰裏無算諸徒奉閱于龜谷之塔有語錄六

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十一

○五

卷八 證佛源禪師

嘗曰念公於石溪拂手下得達摩骨髓淹留此方二  
十二年住五大刹接龍象衆橫說豎談露淨嵐磨其  
示衆歎當時邪解多正宗不行至今四百年此憾終  
不消非千萬人英傑難徹佛祖根源焉懿哉美證與  
德相符矣

相州瑞鹿山圓覺寺沙門祖元傳

釋祖元字子元別號無學宋之明州慶元府人世姓  
許氏父伯濟曾祖皆爲高族母陳氏夢僧抱嬰兒果  
之寤即有娠母思煩苦欲不作舉忽日夜婦人謂曰

胎中男子非凡善自保育須臾不見及生有白光照  
室辟日父母列書籍玩具試其所嗜獨取梵經一卷  
寵珍不放七歲就家塾習誦強記穎脫夷倫性沈重  
不狎聲色不喜童遊見屠宰肅然戚頓十二偕父遊  
山寺聞僧吟竹影掃階塵不動月穿潭底水無痕殊  
有警省十三父憂乃求脫塵羈伯氏冲虛禪師攜  
往杭之淨慈禮北磬簡和尚圖頂進具服勤五載辭  
趣徑山依無準和尚俾提撕狗子無佛性話元不出  
雲堂體究五霜一夜四更聞首座寮前版聲忽爾有  
省衝口作偈曰一槌擊碎精靈窟突出那吒鐵面皮

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十一

○五

兩耳如聾口如啞等閒觸著火星飛星準準更香  
嚴擊竹頌問之元溫應對準順世元起單謁石溪月  
於靈隱參偈溪聞於育王寄錫於小方峰皆虛堂愚  
公居鷲峰菴峻極遠辯未易溪泊元常往來講明終  
日見其禪海波瀾湛洋罔擬時石帆石林橫川三師  
之天台堂作偈送之有相送當門有脩竹爲君葉葉  
起清風之句舉以示元元曰和尚此偈只是閒言語  
中間無些子禪堂拈起頌子曰者個聖元擬對堂劈  
面一揮自此得句語三昧後旋故里依大慈物初觀  
公持淨二載江湖高其操一日登井樓把水牽動轆



驢廊然開悟同諸老所示話頭一旦釋然矣時年三  
十六明年邑宰羅季莊招以東湖白雲菴其地近母  
家復於省觀喜而應之居七年母亡歸靈隱退耕寧  
鍾下居第二座大傳賈秋經採興論請補公州真如  
一香熟向無準唱道七祖聲光四輝德祐乙亥北虜  
兵戰包圍中國元避兵於溫之能仁明年元兵壓溫  
境軍衆竄匿元獨踞堂裏虜酋揮刀已擬頸元神色  
不動說偈曰乾坤無地卓孤鋒喜得人空法亦空珍  
重太元三尺劍電光影裏斬春風羣虜感之懺謝而  
去登歲歸四明訪天童法兄環溪一公溪雷石印版

日本漢史 本朝高僧傳卷之二十一

○二十一

爲衆說法弘安乙卯冬建長虛席副元帥平時宗具  
書幣遣詮慧二禪德入元聘請有德禪師明牧以元  
充還招環溪即授佛鑑法衣元拈起云世尊傳金襴  
外別傳個甚麼以手指云師兄過在你殃及我乃披  
衣上堂問客說乃云祖師逾海越漠而至中華有太  
法可傳今日日本平將軍遠招山僧山僧不知有甚  
巴鼻良久顧視大衆云所以道羽嘉生應龍應龍生  
鳳凰鳳凰生衆羽但看雲駛月運莫說舟行岸移諸  
人若也會得朝朝相見其或未然遠引孤帆不勝依  
戀結座世路艱危別故人相看握手不知頻今朝宿

驚草前客明日扶桑國裏雲祥興二年夏五月離太  
白山六月晦日著太宰府即弘安二年也秋八月到  
相州平帥郊迎慰勞請住建長寺上堂就座曰我此  
法印爲欲利益世間故說在所遊方勿妄宣傳釋迎  
老子將此印付囑摩訶大迦葉摩訶大迦葉二十  
傳而至菩提達磨菩提達磨二十餘傳而至千休  
視大衆良久云山僧未離大唐已前將謂日本僧  
白日點燈將鹽止渴及乎到來個個眼橫鼻直人人  
立地頂天山僧當初也要如何如何到此一場懺懺  
只得便將此印與諸人一印印定更不移一絲毫

日本漢史 本朝高僧傳卷之二十一

許爲甚如此卓拄杖一下云秋高天影直海濶浪無  
聲復舉白侍郎問鵲巢和尚如何是佛法大意巢云  
諸惡莫作衆善奉行白曰三歲孩兒也道得巢曰八  
十翁翁行不得白有省拈曰鵲巢用處如龍王宮殿  
在千波萬浪之外若非白侍郎航海梯山鎮海明珠  
爭得到國雖然如是笑我者多晒我者少上堂老胡  
西來擔柴引火白曰堂堂漆桶話墮良久曰俊鶴猶  
空瞎驢推磨上堂密說顯說直說曲說橫說豎說事  
說理說一切智智清淨無一無二分無別無斷故良  
久云西河弄獅子南泉斬猫兒上堂正中來兼中至



鐵壁銀山通身泥水是汝諸人還護惜也無卓拄杖曰有智無智較三十里五年壬午冬十一月副元帥平公建圓覺寺請元爲開山第一祖開堂之日羣鹿來迎海衆驚異元以爲吉徵因名山爲瑞鹿擬此尊初道場也上堂示衆曰參禪須是打併胸中淨潔去卻情識中所重單單只將自己參取自己如何參取自己既是自己因其然自己蓋緣你被知見解會日夜差排日夜纏縛不能得解脫不能得出頭此是第一種牢獄你若去得許多知見解會元邊湯處參處豁豁處行不是大徹大悟也是一個無依倚衲子只

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十一

○十一

者無依倚處諸佛放身捨命處也又曰奉勸兄弟若已得些子柄欄入手於祖師公案言教中透教淨潔主賓回互處先用後照處權實相待處康唱俱行處須是玲瓏八面始得既得玲瓏八面了須是一時打疊教淨盡始得若不如是墮在毒海元謂徒曰我在宋時於禪定中屢見一神人我冠偉服手持圭笏揖予而告曰願和尚臨光我國哀愍衆生每其到時必有一金龍數珠鵲入神中上膝上予竟不曉及入此國詣八幡宮祝殿梁上有木鶴數個問侍僧則曰是神之使鳥也始知定中所見卽此神也汝等他日作

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十一

○十六

老僧陋質併造龍鶴置椅左右門人如命以表神靈先辛巳春平帥來謁元書其煩惱二字呈之平帥曰是何言句元曰春夏之交博多騷擾而不日得靜謐公莫爲慮焉果孟秋海虜百萬將侵元四一夜風浪皆悉敗沒平帥來問曰和尚以何先知之元言爾曰當過二生說與太守歷後三年平帥謝世嗣子貞時相續舊信是秋太早平帥作龍命元法寺元備金展入府授筆贊曰偉哉戴角擎頭觸處崩崖列石蒼生久矣焦枯助汝一聲霹靂書訖以筆管扣龍角應時雷雨大謝年穀乃登闔國感戴九年初秋庭前桂楠

于卷盛行于世。敕謚佛光禪師。光嚴皇帝重賜圓滿常照國師。元之淨慈靈石芝公製行狀。翰林學士揭傒斯謚塔銘。四明東陵璵公撰碑銘。其碑現今在洛北真如寺。

贊曰。余見常照國師道蹟中。玲瓏無毫髮瑕。竊外存再。有許多光輝至。其句語宛轉自在。曾襟臺翰動而愈出。雖雪竇顯保寧。更有所不讓焉。虎關和尚採十。四章載于釋書。譬如長安鄜果羅綺萬品出。其錦繡段片而俾買者。定高價也。學禪者宜看讀焉。然近世儒者見其臨刀偈。曰此本平晉聲法師與劍難之偈。

日本書紀 本朝高僧傳卷之十一

〇七

也。凡爲世儒者。不窺禪家之藩籬。只信一己情慮。妄取句法。以胡亂指注。和宋俱然。殊以不知了悟之人。自然有高妙之格矣。夫至白力揮時。迅自閃電。豈容思惟於其間乎。國師自言。知見之害。載在本傳。秉此不爲己之戒。反討文句。以吟佔算。實可愍之民也。

上州長樂寺沙門院豪傳

釋院豪字。一翁。自壯慕禪。悉訊諸師。已有悟處。寬元初入宋。直上徑山。謁佛鑑禪師。問答大星。二偈。鑑不許。一日問曰。不假方便。直示一句。鑑曰。燒卻。二偈來。與你示一句。豪曰。燒卻了也。鑑曰。作麼生受用。豪舉

手。開合。鑑呵呵大笑。乃秉筆書曰。豪上座有問道之姿。豪辭歸而住上野。長樂文應。初元菴禪師來。豪屢請益菴。與法語。稱其篤實。佛光和尚東渡。豪到。建長拜謁。呈偈曰。師是太唐間。世人我儂。日域一夢。身奇哉。今日重相會。替首和南。笑轉新豪時。垂七十。其悟解始終如一。光舉香嚴擊竹偈。徵詰。豪應對如響。光鳴鼓上堂說偈。普告大眾曰。如來正法眼。非今亦非古。父子親不傳。千載密相付。香嚴擊竹偈。幾人錯。指注昨朝問。長樂直答無。騰語如人白晝行。不用將火炬。又如香象王。擺壞鐵鎖。去摩醯正眼。開大樹塗毒。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十一

〇八

鼓普告。大眾知說偈。作證據。公驗甚。分明。鴉王。撰乳以法水。一頂付之。豪還。長樂大闢玄化雲堂之衆。盈半千。指臨其示疾。修書辭。光往返數回。彼此叮嚀。又錄平生提唱之語。以呈焉。光稱賞之。臨終說偈曰。火裏汲清泉。已七十二年。雞頭翻身去。觸破於大千。蛻然長往。弘安四年八月二十一日也。敕謚圓明佛演禪師。

系曰。豪公歷參諸方。悟解已成。意欲承名師之證明。參佛鑑於徑山。謁元菴於福山。二師賞而不印。焉後見佛光於建長。光獨大證其悟。告衆付衣。父子之禪。

何顓歸耶通曰蓋師資授受之際有因緣而存古德其例儘多矣龍淵一派水豈可分以涇渭邪只是豪公疎緣于佛鑑元菴而親緣于佛光耳與龍牙初參翠微臨濟而後嗣於洞山不可同跡而語焉

### 相州淨智寺沙門靜照傳

釋靜照號無象世系平姓相州鎌倉人也自稱出家掛搭東福侍聖一國師尋就諸師習稟不倦涉閱內外道學早成建長四年慕風入宋時年十九直上徑山參石溪和尚俾究趙州放下著話一日入室方呈見解被溪一掌當下大悟溪付衣而證服勤五載與

日本書述

本朝高僧傳卷之三十一

〇七

大休念子元元等聚首誦唱辭去遊方知賓於育王景定壬戌秋躋天台石橋供茶湯於五百羅漢感靈洞聞梵鐘作偈二篇其一曰崎嶇得得爲煎茶五百聲聞出晚霞三弄起來開夢眼方知法法總空華其二曰瀑飛雙磬雷聲急雲歛千峰金殿開尊者家風只如是何須賺我東海來一時名衲如琪橫川度虛舟等四十二人廣韻和之照又隨虛堂愚和尚於天童淨慈間益蒙追琢咸淳元年乙丑與鄉僧圓海同船而歸當文水二年矣乃往鎌倉構真際精舍而居翼歲圓海建佛心寺於京城招照開堂嗣香供石溪

和尚佐野氏創寶林寺於丹州聘爲開山始祖尋返相州住法源寺常州太守造興禪寺以居建治三年應衆請董筑之聖福寺居二年遷相之大慶寺所到諸刹羣徒影附焉佛光禪師開圓覺寺屈照分座爲衆說法正安元年副元帥平貞時延王淨智歸崇日熾元宵上堂今日上元佳令節按星燈燭不須燃人本地靈光種當續祖燈萬古傳正當恁麼時如何掃地燒香歌聲日罵佛呵祖樂幾年上堂青春既暮朱夏初臨風動柳帶鶯吟綠陰迥超色聲相爲得方知赤土是黃金上堂金不博金水不洗水敢問諸人

日本書述

本朝高僧傳卷之三十一

〇二

是何宗旨會麼上大人丘乙巳結制上堂十方雲水客九旬同禁足搜轉牯牛鼻莫犯他人穀常在選佛場要見心空廓報告諸人急猛省六六元來三十六上堂拈拄杖云今朝五月初端午金寶收得一件藥得之者長生服之者不久耆婆不知其名扁鵲未得其傳破除佛祖一切毛病掃蕩無明塵勞煩惱金寶不敢祕惜今日普施大衆去也要見此藥麼乃卓一下云物物頭頭不獲藏靈光洞徹輝天地上堂現成公案莫思量直截分明爲舉揚夏日炎炎相逼處青衲屬子足風涼大衆無師智自然智不用借他人鼻孔

出氣上堂當門盡是參天棘挾路更從布蔭梨舉步若能按得入蒼龍一躍過天池德治元年五月十五日照集諸徒條畫喪儀書遺偈曰諸佛來也如是諸佛去也如是諸佛來去一般今我說也如是端坐而化壽七十二臘五十五有四會語錄救謫法海禪師贊曰照公初石溪師之一掌下撞著趙州之口皮禪平生情解一時蕩盡及歸本邦以宗身爲付肩暨于佛光禪師開圓覺寺捨名利印居表率位扶道舊之化瀟洒古風迥出常隊文永末台徒奏朝將破吾宗照公作興禪記入都上進於是橫議自寢余貴其功

日本撰述 本朝高僧傳卷之十一

○壬

烈以載僧傳及燈錄俾後學知其傑出之行焉

### 賀州大乘寺沙門義介傳

釋義介字徹通越前足羽縣人鎮守府將軍藤利仁之裔也年五舞勺師本州波著寺懷鑑禪德下髮鑑承印記於覺曼真大戒於道元聲高越國十四登睿山戒壇進具習聽台教歸侍鑑公採楞嚴深廣兼修淨業仁治二年參道元於洛之興聖一日聞元示衆有省由是駐錫服侍左右寅夕參訊竟元初元如越前寓止吉峰古精舍結制安居介掌典座不分寒暑自擔飯粮供一會衆明年秋元開新永平寺自務娚

集介管帶四載終無難色又充監寺晝則管辦衆事夜則坐禪達旦元見其行操曰眞道人也建長辛亥春鑑公遺病以佛照下印書并菩薩大戒儀軌付介曰吾觀汝學解堪受洞上宗位隨元和尙綿密參尋苦口警告介反袂而退癸丑秋元依病上洛召介曰聞受鑑公之付囑善委悉否介以實告之元嘆曰鑑公明眼衲僧有知人之見汝他後當爲我門之巨魁我去京師須守制撫衆及葬公補席命介首衆一日問葬師兄先師尋常垂示諸法實相外別有密意否笑曰實無密意豈不聞先師曰吾平生垂示爲人之

日本撰述 本朝高僧傳卷之十一

○壬

外更無覆藏底法介又曰某甲近日會得先師身心脫落語并曰你作麼生會介曰將謂赤髮胡更有胡鬚亦并領之乃告之曰先師在日語下義介於法拔羣他日必能弘通吾法今又於先師悟處親會其意先師太寂定中必爲你作證吾今以洞上之宗付你善自護持復曰佛法中得人爲難若不得人不免所滅佛種之罪縱使得人不堪其器亦不免斯罪此是佛祖所欽吾今得你免斯罪耳又屬以遵先師訓建立宗旨矣介乃遊歷洛之建仁東福相之壽福建長具見寺規正元元年遂入諸夏登徑山天童諸刹謁



一時名利見聞圖寫叢林禮樂而歸永平王慕化緣竭九經營凡禪利所有始備焉文永四年夏開堂像香酬孤雲之恩鐘鼓鏗鏘龍象踞踞時稱永平中興住持六載造養母堂退位養母二十餘歲不赴外請并公臨滅付先永平所傳法水勿令斷絕賀州大乘寺澄海阿闍梨慕其道望參禪服膺華密院為禪利與檀越藤家尚請介為第一世國中緇白星聚雲奔鬱為叢林一日示疾囑諸沙彌童行悉令剃髮受戒尋集門人示出世始末畢說偈曰七顛八倒九十一

年蘆花覆雪午夜月圓少頃坐脫時延慶二年九月

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十一

○壬午

十四日也世齡如偈法臘七十有人塔於寺菴隅院曰定光焉

贊曰介公初事元師辦眾務劇繁後嗣葉兄任新寺興建巡訪和宋之名刹觀制取準於是晨鐘夕鼓朔望演說大方禮樂一旦完備夫永平清規雖瑩山核定之其基只是介公之功也遂為第二祖年及耆餘唱新豐曲而歸正位實百世之模範也

相州建長寺沙門紹仁傳

釋紹仁字義翁宋國西蜀涪江人也寬元丙午秋隨大覺禪師東渡參叩精切一旦廓爾徹法源首于一

會初出世建長後移建仁盛唱大覺之道學者四至晚屏居東山正傳菴以某年六月二日滅賜諡普覺禪師

本朝高僧傳卷第二十一

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十一

○壬午

音訓

輻	居良切	綏	如道切	隘	上烏降切	綦	此宰切	礫	明		
下不切	船	無匪切	螳	語綺切	剽	下力灼切	流	力永切	抽	虛回切	
畫	他刀切	脅	虛業切	柳	居牙切	榮	倉晏切	啐	生須切	較	若效切
儻	虛也切	釘	當經切	謬	康切	撒	桑轄切	啐	生須切	較	若效切
儻	與逆切	駛	師止切	晒	始忍切	捐	所交切	較	若效切	較	若效切
切	必駕切	揭	上居列切	臍	府正切	蟪	上滋消切	蹴	下滋消切	蹴	下滋消切
兵	輪切	疾	上疾切	蟪	府正切	蟪	上滋消切	蹴	下滋消切	蹴	下滋消切
子	六切	疾	上疾切	蟪	府正切	蟪	上滋消切	蹴	下滋消切	蹴	下滋消切



江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
本朝高僧傳卷二十一 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本漢文

本朝高僧傳卷之二十一

○ 十五 止

本朝高僧傳卷第二十二

淨禪三之四

濃州盛德沙門 師發 撰

京兆瑞龍山南禪寺沙門普門傳

釋普門號無闢信州保科人。世次源姓母某氏夢登富士山見日輪出海執而吞之覺而開目日光燭室尋即有妊僅方五月聲聞於外處胎十二月而生口具雙齒目有重瞳耳長帶重輪甫七歲母攜往越後附伯父正圓寺寂圓法師爲驅烏十二祝髮染指釋典長回信州宿鹽田適發熱病家主忌之置於郊野時黑日一天來擁於頭脚羣狼競來二犬防吠使不得噬如是三夕家主往視二犬在旁門語其緒家主以爲異人背負歸家殷勤看養無何病尋瘥家主曰公非常之人他日必與大法勿忘我言門乃辭去負笈講肆十九從長樂釋圓朝公稟菩薩大戒習顯密二教聞聖一國師旺化京師特往參謁機鋒契合依止五載日入玄奧旋越之華報寺寺主本智法師欣然讓席革教爲禪居五禪幻成叢社忽歎曰丈夫當翱翔於大方豈可粘著於鵲殼哉遂杖錫入宋抵會稽參荆叟珏禪師繼登淨慈見斷橋倫和尚橋一見

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十二

〇十

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十三

〇二

器許參請得徹證景定二年夏橋將入寂以架梁自贊頂相付門表信印門周旋兩浙十有二載乘卿船而歸省侍國師乃命分座說法職滿見壽福藏叟譽公更請以第十座不就回越住安樂寺尋移正圓寺北越大麋風弘安三年冬聞國師不安上京春國師遷化衆議令門繼席門法往攝州居光雲寺包笠請益者衆矣辛巳秋東山照公退慧日太丞相實經藤公請門補席爐中辦香醕國師法恩臨衆十餘載內外清肅正應間龜山上皇在龍山離宮妖怪荐作妃嬪媵嬙屢遭魅惑上皇大惡之乃集羣臣議其事會曰此地妖怪聞之久矣非佛法力決不可治於是命南北高德百計無効時西大寺摩尊律師有承行譽救棲宮闈尊率沙門二十員晝夜振鈴誦咒至三闋凡而妖魅尚驕投飛礮於護摩壇尊不辭而退羣臣奏門德望乃召下宮且宣曰卿能居宇門奏曰妖不勝德世書尚有之況釋氏乎釋子是之何怪之有上皇壯其言救有司俾門入宮門但與衆安居禪坐更無他事自爾宮怪永息上皇大悅乃傾心宗門執弟子禮習坐禪受木鉢因革宮爲寺雖梵制未備特數門爲開山始祖後來伽藍具體號太平興國南禪

禪寺一條大丞相家經藤公北山大相國實兼藤公  
一時名卿皆申弟子禮止應四年冬門臥病于東福  
丈室上皇幸臨慰問諸醫皆言者回不作上皇私念  
宮怪銷伏是禪家尋常事也我見寂迹定門德業十  
二月十二日上皇復幸寢室綺紈與壞衲相交前一  
日本丞相家經藤公入寢問候門謂曰吾今日將去  
特遲相公來明日行安藤公掩淚而出既而打鼓衆  
皆入室繪其頂相門逐件應需筆力勇健漸至中夜  
換衣安坐上皇乙遺偈親研墨泚毫門受頂按即書  
曰來無所住去無方所畢竟如何喝不離當處置其

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

○五

而化世齡八十法臘八十二火浴收遺骨塔於慧日  
之龍吟峰上皇益固心禪門明生賜御製贊曰叢林  
老作人夫眼電卷星馳追也難二尺竹篋三尺鐵衣  
曾動著逼人寒嘉元間敕諡佛心禪師元亨三年加  
賜大明國師

系曰睿尊師嘗在南都四律匠之一也戒修密嚴當  
時推之而九旬持念好怪尚憍及無關入宮其怪自  
熄者何也通曰此非依持念之精只乘契機之變也  
夫宮怪者本駒憎正之所祟而密咒祕奧彼業已知  
之是以尊師之持念愈修愈差如無關者大悟無事

底人不假修持不涉知解安居禪宴但是平常耳此  
所以契其機也昔文殊至諸佛集處值諸佛各還本  
處惟有一女人近彼佛座入於三昧世尊敕文殊令  
從三昧起文殊違女人三匝鳴指一下乃至抵梵天  
盡其神力而不能出世尊言假使百千文殊亦出此  
女人不得下方過一十二億河沙國土有闍明菩薩  
能出此女人定須臾闍明大士從地涌出禮拜佛足  
世尊敕闍明闍明即至女人前鳴指一下女人於是  
定起而出與此杆軸相類吁佛大遍知故敕一大士  
俾衆知其機變此吾之家一則之公案也學者當自

日本書紀 本朝高僧傳卷之十二

○四

參雨知焉

京兆東福寺沙門慧曉傳

釋慧曉字白雲不詳其氏族讚州美濃縣人性清  
喜釋門即登睿山從行泉法師學法華玄義十七得  
度果具內觀十乘外欽三業爲衆所歎二十五入泉  
涌寺就明觀律師專事毘尼俄猛省曰守株待兔有  
何所得拜聖一國師問別傳旨國師執筆畫一圓相  
示之不契又與偈曰無內無外亦圓一輪忘光忘影  
諸聖出身曉服勤八載有所默契文永三年遠入大  
宋歷遊兩浙依希叟臺公於台之瑞嚴一日室中舉

百丈撥火公案曉聞得人悟叟付杖拂乃罷參而歸  
厭世緣紛擾痛自韜晦無學元公東渡住圓覺寺曉  
呈偈相見元公大優賞雖跡陸沈緇白欽尚正應五  
年太丞相藤公起曉主慧日山開堂出世嗣香翰出  
為聖一酬冬夜小參胡地抽石笋京師出大黃達磨  
失巴鼻衲僧沒商量叫咤到頭看夜月任運落前溪  
結夏上堂拈拄杖畫一圓相曰過去諸佛未來如來  
現在十方若凡若聖若有情若無情盡在個圈子裏  
今朝禁足安居了禁足已畢且道蒲團上事如何動  
用蹈規矩朝霞不出門日聞合古風暮霞行千里解

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十二

○五

夏上堂打開布袋口推出鐵崑崙兩四與三五人行  
明月村謹白行脚高士上堂行脚先須識取拄杖子  
識取拄杖子雖在途中又用家裏事其或未然拗抗  
拄杖子參蒲團上事曉今日無帽侍僧請購之曉曰  
無貴侍僧曰已報知事曉曰一頂價多少曰五百文  
曉曰五百文可資我查積四分之一不可也卒不購  
用暮年結菴於城北扁曰栗棘帝聞質之賜額聖壽  
曉初在杭州北虜入境將加刀害曉至心念觀音忽  
四十二臂大悲像現其肩上帝首驚見恭敬而去曉  
攜歸奉持在聖壽焉小仁五年臘月二十五日寂於

本菴臨終偈曰來也如是去也如是更問如何如是  
如是閱世七十五坐夏五十四有語錄二卷存在于  
世敕謚佛照禪師塔曰常寂

### 肥前圓通寺沙門若訥傳

釋若訥字宏辯未詳其氏肥前州人初學古衡教謙  
名言紛綽回心歸禪開圓通寺以道自許寬元丙午  
蘭溪隆和尚西來在太宰府開法訥特往謁是日早  
晨溪謂徒曰今日有嘉賓至當洒掃以待午時訥至  
一見機契即受衣盂就弟子列謁溪住圓通自居偏  
室至於溪開山建長謁隨侍刻意意上大事溪命住

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十三

○六

鏡之菴屋寺弘安戊寅溪示疾建長謁至室中親侍  
湯藥臨終授與拂子拄杖訥返圓通闢揚玄化  
景從焉永仁元年臘月二十七日沐浴淨衣據室端  
坐書辭偈曰假成幻質七十七年一蹈踏碎萬里青  
天置筆而化弟子等茶毗藏遺骨於本寺曉曰傳心  
塔焉

### 京兆東福寺沙門慧雲傳

釋慧雲字山叟姓丹治氏母平氏武州飯澤人十七  
祝髮十九入洛從聖一國師稟單傳之旨正嘉二年  
入大宋國徑抵杭州會新橋倫公路南屏山雲拜謁

問曰如何是祖師西來意橋指壁間墨梅示之雲呈  
偈曰一段工夫歷雪霜嶺南消息露堂堂花開月上  
兩明日不待春風滿院香橋笑曰和闍梨會得梅  
時和宋新到者三百人獨許雲參堂又誦方卷圻清  
虛心懷香請益二師稱之登天台石橋獻茶於羅漢  
感殿中現出山之二字咸淳四年理歸帆以本朝文  
永五年觀聖一國師乃命分座出世說承天繼遷  
宰府之崇福興州檀越聞雲道望創勝南寺備幣請  
之雲拒之其請益堅無已而應又建東昌寺以權焉  
雲在興州十年東方緇素翕然靡風永仁三年東福

日本書錄 本朝高僧傳卷之三十一

○七

虛席丞相忠教康公下鈞帖俾雲禪處上堂舉大禪  
佛到仰山題一足曰西天二十八祖亦如是東土六  
祖亦如是景通亦如是仰山下打四藤條拈曰大禪  
佛食兒不富仰山念行甚難要知古人相見處麼良  
久曰毘婆尸佛早瞋心直到而今不得妙龜山上皇  
欽雲德幸駕聽法雲年六十九道貌朴古吐演純質  
上皇大悅語侍臣曰道人質朴亦一儀也副元帥平  
負時割三莊給食輪六年冬復住筑之崇福不幾歸  
東福正安三年初秋屬違和九月晚召侍僧曰昇吾  
置法堂上當取滅度即令誦法鼓侍僧背議曰師甚

不取滅於堂上恐貽悔慢急止鼓聲衆擁丈室雲乃  
書偈辭大眾曰忘去來機無依獨歸照天夜月滿地  
光輝放筆而逝壽七十臘五十三藤永相聞雲遷化  
入山啟龕燒香作禮雲天資淳素大忘人世只爲道  
勇猛脫不沾席者五十餘載是以一會衆服其道義  
正和四年敕諡佛智禪師

相州建長寺沙門道然傳

釋道然自號葦航不記其姓信州人覺天賦俊逸機  
辯縱橫稟大覺禪師記莧涉遊諸方弘安辛巳佛光  
禪師住建長擢然爲第一座出歷往諸刹及佛光遇

日本書錄 本朝高僧傳卷之三十一

○八

圓覺繼董巨福寺衆奉承英俊來集主營漸久退休  
正宗建隆終說偈曰空華亂墜八十三年觀今依舊  
葦航道然時正安三年十二月六日也敕諡大興禪  
師以寵章之

贊曰大覺禪師受蜀山浩氣搏桑國裏化門孔廣所  
出神足二十餘員皆叢林爪牙也當時以葦航桃溪  
無及約翁稱之四傑焉雖然公爲稱首爭奈年代綿  
邈偉蹟高行以湮不傳也惜乎哉

相州圓覺寺沙門德悟傳

釋德悟字桃溪鎮西人少時就瑜伽師傅灌頂法精



於密部知有別傳人佛心宗參大覺禪師機語略契  
又喻海人宋徧扣諸刹謁育王頑極彌公待命記室  
至節兼拂一會仰服職解遊名區祥興已外春伴子  
元和尚來歸依元公於建長居第一座無何受命出  
世筑之聖福元公以二偈送行其一曰說盡山雲海  
月情老懷終是欠惺惺雖然桃李分蹊徑又喜清塵  
滿祖庭居之未久遷董圓覺為侶登聚望高一時上  
堂舉圓悟夏旦示眾曰今夜無可與諸人供養收得  
一串金剛圈拾得一籬栗棘蓬與諸人切剋拈曰圓  
悟老漢恁麼供養盡謂大開東閣享華龍肝鳳髓殊

日本書紀

本朝高僧傳卷之五十二

〇九

不知以官路作人情圓覺只有鐵酸饒與諸人咬嚼  
舌頭具眼者何曾通身汗流構大仙菴而退靖晚依  
檀越之請開居武之東漸寺其地臨海風景鮮也一  
時名宿多以題贈溪亦作偈曰冥心丘壑絕近攀放  
曠希夷宇宙寬重疊山遮名利路渺茫海隔是非關  
蒼松翠竹烟籠淡古岸平沙月照寒即此逍遙無外  
事白雲饒得伴清閑溪以其年終於所住春秋六十  
七歸終書偈曰芭蕉虛幻體片片總成真為地歸根  
去露出法王身救謫宏覺禪師

贊曰宏覺禪師從教歸禪名德俱高虎關和尚欲

于釋書竟之行實當時實沒又如雲山叟圓鏡堂明  
南浦慧癡元日高峰負時名者不共載列吾今搜索  
編修焉所惜古人之懿德高躅不經大匠之斧還落  
小人之筆也不能無憾焉

### 相州禪興寺沙門德詮傳

空性

釋德詮字無及不記其本貫少侍大覺禪師機機相  
投卒稟印契初在福山第一座結制兼拂日梅雨漲  
深溪玄機全露槐風生圓閣妙信密通頭頭露古佛  
心宗物物現祖師已鼻姪坊酒肆盡是圓覺伽藍得  
失是非無非平等性智便恁麼會去一千九百前舊窠

日本書紀

本朝高僧傳卷之五十二

〇十

窟也建長門下別立家風高提祖令峭嶽巍夏沒依  
倚淨艱艱也絕承當碧眼黃頭隱身無地狸奴白牯  
寸土難行正恁麼時夏說甚九旬禁足三月護生雖  
然如是兼拂上座忍俊不禁借上方威光要通一線  
去也驀拈拄杖曰座中盡是江南客何必樽前唱鷓  
鴒詮後住相之禪興一香為大覺記弘安壬午春佛  
光無象諸師遊東漸寺各有賦咏詮所賦曰峭壁嗟  
峨碧浪深樓臺倒影蘸波心目前盡是普門境時聽  
海潮鼓梵音某年月日終於福源山又同門有凝鈍  
空性禪師和州人二階堂氏禪道古高住建仁建長

二刹熾秉法柄遊化東奧開創三精藍靈山普門禪  
福是也正安三年閏七月二十八日寂臨終示徒曰  
雲翳都盡萬里一天

京兆建仁寺沙門覺圓傳

釋覺圓自號鏡堂宋國蜀人詩僊白玉蟾之後也蚤  
通經籍兼有雅思志求心宗出峽遊吳越聞諸老門  
躋太白峯參環溪一和尚玄機頓明巾侍數禪江湖  
欽之祥興二年春年三十六與無學元禪師同船東  
渡副元帥平時宗慰勞崇敬首開法相之禪興辦香  
醕環溪之記移領淨智為興之興德開山祖再住禪

日本書

本朝高僧傳卷之三十二

〇七

興經十寒暑從圓覺明年昇建長正安二年董稚之  
建仁到處名藍禪客盈堂元正上堂三陽交泰萬象  
爭榮春風浩蕩和氣氤氳老梅香綴玉嫩柳色拖金  
佛祖門庭又見新拭藏經上堂五千餘軸眼中塵不  
識無端貴似金盡底掀翻知落處掃階松影又沈西  
上堂若論此事一切語言道斷心行處滅向者裏明  
得始有少分相應論是說非探玄索妙玄沙道底要  
會既納被蒙頭萬事休此時山僧都不會上堂東叢  
西磴指南話北雖則曲爲今時爭如口唾舌禿任你  
鵲自白鳥自玄松自直棘自曲何故鳳凰不食鴉腐

日本書

本朝高僧傳卷之三十二

〇七

猛虎豈食伏肉上堂叢林秋晚堪笑堪悲蟾光爛爛  
重韻悽悽眼裏耳裏無欠缺腳頭腳底良有餘雖然  
機梭不掛絲頭路文彩縱橫意自殊上堂秋露灑灑  
滋泥稻根秋蟾皓皓洞照八表秋蛩唧唧入于牆壁  
秋砧琅琅徹乎枕傍無文印子重重露般若微言恣  
舉揚山僧恁麼饒舌諸人已錯搏量別有靈蹤在上  
方圓住建仁七禪聲華達寰宇王公歸嚮如天旱得  
霖雨年垂卦人唱滅於寺之正寢實德治元年九月  
二十六日也臨入有偈曰甲子六十二無法與人說  
任運自去來天上只一月諸徒分靈骨塔于兩處在

建長曰瑞光在建仁曰靈光救謚大圓禪師有四會  
語錄三卷

贊曰予聞大圓禪師遺錄語脈出塵標格驚世白玉  
瑩之風雅用之格外宗旨言言句句蘭秀菊香可謂  
西川十樣錦添花色轉鮮者也不入濟北師之高覽  
可惜也已

相州建長寺沙門圓範傳

釋圓範字無隱不考其族譜紀州人也妙年出家隨  
侍大覺禪師多歷年所辭去入元飫遊叢社歸觀大  
覺徹證玄機永仁初住稚之建仁移相之圓覺建長

提綱整肅衆會歸心年垂耄期謝事居傳芳菴德治  
二年十一月十二日無病而化辭世偈曰來去無方  
行去來更沒蹤要知吾住處明月與清風壽七十又  
八弟子等收靈骨各塔于本菴在洛之東山相之福  
山其日傳芳歎謚覺雄禪師

相州壽福寺沙門德瓊傳道本

釋德瓊字林叟族千葉氏蚤依大覺禪師參議證悟  
又遊支那謁諸知識飛錫東歸居肥前小味寺暨入  
相陽初住禪興後移壽福寶單禪侶遠來掛搭僧問  
如何是祖師西來意瓊便打僧擬開口瓊曰止止不

日本僧傳 本朝高僧傳卷之二十二

○十一

須說我法妙難思構桂光菴解印休居瓊遊東漸寺  
偈曰寺在江濱馴白鷗石屏如畫入幽眸釣船一曲  
漁歌曉明月蘆花天地秋某年月日終於所住歎謚  
覺照禪師又同門有道本字同原住信州保福繼徒  
崇尚一日有僧辭本曰何處去僧曰參方去本曰如  
何是參方事僧擬答本便打僧有省

相州淨妙寺沙門了然傳

釋了然號月峯平安城人失其姓譜初仕皇朝爲太  
學博士領袖儒林遽擲簪笏棲心真乘聞大覺禪師  
道價杖錫東行久依座下契證純精覺耀居版首正

嘉元元年住相之淨妙寺江湖學實來會如林上堂在  
耳曰聞在眼曰見一點靈光萬化千變靜則月印寒  
潭動則波生水而佛性與精魂不隔一條線諸人還  
鼻省麼從來濁富不若清貧解夏上堂九旬清制已  
圓成借問寒山作麼生皎潔直饒同滿月更須下手  
暗中行臘八值雪上堂今朝臘八好時節不見明星  
惟見雪露地白牛在目前象王行處孤蹤絕說述說  
悟孰區分且喜來年臘麥熟這裏有入猶未悟釋迦  
老子若爲說臨終偈曰七十一年夜夢紛然一旦覺  
來有何事水在澄潭月在青天有攜其語入宋者南屏

日本僧傳 本朝高僧傳卷之二十二

○十二

石帆衍乳竇希叟臺耆諸稱美焉

相州淨智寺沙門道海傳

釋道海號桑田播州人姓氏未考初習大小乘棄歸  
大覺騎下依附最久承嗣其法佛光開圓覺往任興  
座百務不介每有光說法海出問答光謂衆曰海典  
座出一言半句必有撞著處後應世東勝不幾退居  
又起蓋禪興淨智二刹凡滌篆處僧籍遍及大都隴  
於酬對動即舍去晚退休龜山菴以延慶二年正月  
初八日謝世闍維收得舍利如菽粟者百餘顆塔于  
福山之西來菴側歎謚智覺禪師

京兆東福寺沙門順空傳

釋順空號藏山其父源氏夢一沙門投宿問名答寂  
昭自是其妻藤氏有孕天福元年正月元日生國俗  
兒生三歲試問前身多有當也父母問空曰圓通太  
師父意此名與夢齟齬經旬聞倡妓謠曰寂昭入茶  
宋號圓通大師始信昔夢之不虛焉及長依水上山  
神子尊公剃髮出家博綜內外典籍神子攜觀聖一  
國師曰此子非吾池中物必當游於龍門國師笑而  
納之服侍三載聞蘭溪和尚道聲震於東關往參于  
建長先夜溪公夢得舍摩詰且謂左右曰今日必有

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

〇十五

俊初至果空止謁溪公大喜命領紀綱平元帥時順  
變其俗利屢勸遊宋地遂上徑山參偃溪開禪師時  
宋之景定三年癸卯年溪寂寂荆叟玉淮海肇續重庵  
空歷參三師又訪斷溪用於東山退耕寧於萬壽西  
巖慧於太白後參石林肇和尚所得尤多因周旋吳  
越頗久林送行偈曰十載中原一棹還碧瑠璃外更  
無山扣舷三下知誰會自作吳音唱月彎歸東福掌  
記室文永七年開肥後高城爲聖一蒸嗣香遷住筑  
之承天正安二年領鈞帖主東福上堂山房夜雨曉  
來晴風葉飄零自接聲夢破小窗空生白不須鷄鳴

報天明良久云直饒恁麼會猶是較半程拈拄杖云  
唯此一事實餘二則非真業在杖云拄杖依然黑  
鐵中秋上堂吾心似秋月碧潭清皎潔拈拄杖云良  
哉老瞿曇止止不須說草一下云打刀須是別州鐵  
題自頂相曰桑榆論齒蒲柳模姿手控干界懷藏二  
儀全無拈筆笑亦忘攜履機無名無字無消息誰喚  
藏山老古錐延慶元年五月九日滅於雙輪菴有詩  
偈曰無生一曲調滿指端九山崩倒八海枯乾春秋  
七十六教謚圓鑑禪師

相州淨智寺沙門宏海傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之十三

〇十六

釋宏海號南洲不詳其氏諱賜冠出家參波參問聞  
支那禪法之盛更奮入宋典賓於南屏山及遊諸刹  
皆得推賞東歸依元菴寧公於建長看趙州洗鉢孟  
話而得徹底受菴付屬出世金峰爐鞴熾然緇素仰  
風構藏雲菴爲終焉處臨滅度說偈曰大唐日本六  
十七年欲知此事看取目前弟子等收遺骸於本菴  
樹塔曰兩曜賜謚眞應禪師海公以高德而有功山  
中寺衆推爲準開山余少時在鎌倉尋深公事不記  
其遷化之年月日況其餘語句耶以屬傳亂獲乎

相州淨智寺沙門德紹傳



釋德紹字無弦世家指紳風神挺秀自獲大覺之證  
賓遊諸方爲一山寧公所稱出住相之淨智列刹尚  
其儀表題東漸作日一竿抹過幾重山歷盡崎嶇沙  
際寬與未窮今回首去松風帶浪海風寒臨亡偈曰  
受淨智壽命行無生國裏一機嘗轉清風萬里

### 參州寶相寺沙門爾然傳

釋爾然號無外山城州人自少侍聖一國師咨參窮  
明嘗掌藏鑰解職入宋訪尋知識歸依國師文永辛  
未總州刺史源滿氏就參之郡治建寶相寺國師應  
請爲第一世據席僅一日命然主之國師臨終囑曰

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○十一

正法眼藏付囑爾然其契師機如斯滅後教誡應通  
禪師

### 京兆東福寺沙門昭元傳

釋昭元字無爲平安城人早入聖一國師室遊大覺  
佛光二尊宿之門瑞世苑之承天繼遷維之三聖東  
福相之圓覺上堂舉僧問趙州萬法歸一一歸何處  
州曰我在青州作一領布衫重七斤頃曰一領布衫  
重七斤古今輕重屬諸人太悲下手難提起不假剪  
裁歷幾春應長元年春因病退圓覺寓寶滿寺五月  
十六日書偈曰倒卻刹竿縱橫自在左右逢源感音

王外捨筆而化火餘五色舍利燦爛黏骨有如瑠璃  
如粟粒者道俗奔瞻爭求供養或不求得者但求雪  
骨少許生難遭想至心禮拜隨感舍利現於骨片或  
供一粒者久之爲數十相陽管內傳爲奇事塔于東  
光寺敕諡大智海禪師

贊曰設利羅者梵語此云真骨蓋法身之標幟而不  
可思議者也金光明經曰此之舍利乃是無量戒定  
慧香之所熏積最上福田極難逢遇余謂雖二學之  
所重而定觀急者特得之故教者寡而禪者多夫禪  
者自空入法爲自空入法則與虛空同體焉與虛空  
同體則冥叶法身焉冥叶法身則身世俱舍利也乘  
是言之從大智禪師而前後流堅固予之諸師者一  
等俱是蹈毘盧頂額而行人也

### 相州建長寺沙門紹明傳

釋紹明號南浦縣姓鞍州安部縣人幼事本州建德  
寺淨辯法師學教英氣出同隊十五受染受戒盤桓  
數載棄去參建長蘭溪隆禪師正元間入中華徧問  
諸刹時虛堂愚和尚主淨慈門庭高峻非宿學莫敢  
闖其牆明往拜謁堂便問曰古帆未掛時如何明日  
懸頭眼裏五須彌堂曰掛後如何明曰黃河向北流

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○十八



堂曰未更道明曰某甲恁麼和尚又作麼生堂曰黃河向北流明曰和尚莫謾人好堂曰參堂去令典賓客听夕參決咸淳改元之夏明寫堂頂相請贊堂即書曰紹既明白語不失宗手頭數弄全園栗蓬大唐國裏無人會又卻乘流過海東茲秋八月堂奉詔遷徑山攜明俱行明益策勵一夕定起太悟呈偈曰忽然心境其忘時太地山河透脫機法王法身全體現時人相對不相知堂巡寮報衆曰明知客參禪太微矣自是一衆改觀咸淳三年秋辭堂東歸堂贈偈曰敲磬門庭細掃摩路頭盡處再經過明明說與虛

本叢書 本朝高僧傳卷之五

〇十九

堂叟東海兒孫日轉多當本朝文永四年也謁蘭溪禪師知藏鑰於建長秉拂提唱曰十載中華歷徧歸未將佛法掛唇皮無端今夜始開口鐵樹生花正是時七年庚午冬出世策州興德上堂與刹竿便回正在半途見招手橫超猶隔江在何處棒頭領口喝下承當萬里崖州未爲遠在所以道向上一路千聖不傳未嘗親近早隔大千與麼言報盡法無民退身三步如何相見暨拂子云還見麼霜華和月冷梅雪帶烟寒若向這裏見得徹去是恩佛恩一時報畢其或未然切忌喚鑑作鏡復舉你壽開堂公案云大衆要

知二大老落處麼象王回顧師子嘯咩凜凜神威誰敢近傍雖然如是點檢將來總被這僧勘破且道那裏是他勘破處具眼者辨取上堂一言道盡崖崩石裂一著當機頭頭漏泄洞山果子爲仰家風陳年滯貨不用施設畢竟今朝如何可說早拄杖云時哉時哉一陽復來家家開熱明以嗣法書并入寺語因臺侍者呈上徑山虛堂問之大喜謂衆曰吾道東矣九年壬申遷太宰府之崇福寺指門云山橫翠壁水出高源解脫門開大衆歸去來佛殿云麻三斤殿裏底狹路相逢卒難回避相杓云還見麼若也遲疑古佛

本叢書 本朝高僧傳卷之五

〇二十

過去久矣上堂道遠乎哉嶺頭雲淡淡聖遠乎哉澗下水泠泠須知瞿曇日出出現達磨時時西來靈山一會何異今日少室家風在此時便見佛日增輝臺風永扇世出世間能事云畢然雖如是與麼告報也是應箇時機若是向上全提遠之遠矣何故青山不鎖長飛勢滄海合知來處高復舉張無盡相公請玉泉皓老開堂陞座云君不見君不見無盡云見皓便下座拈云恁麼事過恁麼人拈出故是且道無盡相公云見畢竟見箇甚麼若也會得明上座今日開堂功不浪施其如未審切忌妄通消息住職三十餘年

關西觀風門庭日盛。嘉元三年秋奉詔入京師。伏見太上皇召對宮掖。問答稱旨。敕主萬壽寺。上堂問答罷。乃云。目前無法。門外車馬開浩浩。意在目前。屋頭松竹冷青青。不是目前法。非耳目所到。清寥寥。白皚皚的。只這些兒。得人憎。且古且今。不變易。釋迦老子四十餘年。橫說豎說。說不到達摩祖師。十萬里來。東觀西觀。覷不破。臣僧紹明。今日開堂。不覺搔痒。昨一覷覷。若無端開口。一句說著。說者覷者。追回太古之風。純樂無爲之化。正恁麼時。知恩報恩。一句作麼生。道。卓拄杖。一下。云。四海而今清似鏡。三邊誰敢犯封疆。舉

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○主

太宗皇帝因有僧朝見。賜座。宣問從何處來。僧奏曰。廬山臥雲菴。帝云。臥雲深處。不朝天爲甚麼。至這裏僧無語。拈曰。太宗日照天。臨無幽。不燭。當時若問。臣僧臥雲深處。不朝天爲甚麼。至這裏便奏云。遠蒙聖恩。管取皇情大悅。冠纓頂謁。輪蹄駢闐。帝又以東山故址。興造嘉元禪刹。延明爲第一祖。德治二年。副元帥平貞時聘赴相州。留正觀寺。請就署所。演法復敷。奏董建長興國禪寺。指門云。南來北來。從東過西。歷遍諸方。門戶卻向這裏。知歸且道。是甚所在。一喝云。到者方知。結夏小參。我宗無語。句無一法。與人須知。

當人分上箇箇眼蓋乾坤。人人舌住梵天。舉足下足無非。圓覺伽藍。語默動靜。總是平等性智。劒樹刀山。鑊湯爐炭。一切處安居。一切處禁足。未爲分外。建長與麼。告報只要諸人自行一條活路子。其如未然。不許夜行。投明須到復舉。黃檗示衆。汝等諸人。盡是噉酒糟漢。與麼行脚。何處有今日還知。大唐國裏無禪師。麼公案云。這老漢敗缺不少。且道那裏是他敗缺處。諸人若又勘辨得出。非但親見黃檗爲人處。亦乃表顯自己光明。登歲太上皇降手詔。存問恩禮。優至明建長入寺。之夕。小參有曰。今年臘月二十九日來。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十三

○主

無所來。明年臘月二十九日去。無所去。大衆驚訝。莫論其意。明年延慶戊申臘月二十九日。忽示微疾。至二更書偈曰。訶風罵雨。佛祖不知。一機瞥轉。閃電猶遲收筆。踞跌而逝。閱世七十有四。坐夏六十。耶旬獲舍利。無算事聞。上皇哀臨。不輟救護。圓通大應國師重敕建寺。西京額曰龍翔樹塔。於寺之後。崦嵫曰普光菴。曰祥雲。弟子在建長崇禎者。各奉舍利。建塔。建長之塔曰天源崇福之塔。曰瑞雲。有語錄三卷。明之禪山。及愚菴天界。泐季潭題其首。俊明極臺。西彌跋其尾。杭州中天竺。住持延俊大師撰塔銘。

贊曰：虛堂和尚間出，宋季眼目正，波瀾富，嚴明之象，似日照十虛，纔觸著，則見入肺腑，南浦師祖操戈，其室科微，心境撥亂乾坤，付受之密，盛水不泄，道屈至尊，黑豆芽生，四會提唱，為不慙德焉，言來歲死，不違尅期，出其門者，齊如龍蛇，今其兒孫中，分扶桑國裏，息耕老子，贖行之，偈實當于懸識也。

本朝高僧傳卷第二十二

日本漢文 本朝高僧傳卷第二十二

○壬子

音訓

噬時智切 旺于放切 蝸古華切 玃吉岳切 荇在  
也 勝上以證切 磔即秋切 紉胡官切 吽許俱切  
也 於巧切 購居候切 羈昌瑞切 圻五根切 臤烏侯  
切 翕許及切 帖他協切 脗武粉切 凡事相 儼力鹽切  
實 羽欲切 搏徒官切 汴秦故切 韞步拜切 搖楚委切  
駢 蒲眠切 贖楚忍切

日本漢文

本朝高僧傳卷之二十二

○壬子

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錢  
 本朝高僧傳卷二十二 茲冀  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃川路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第二十三

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之五

相州建長寺沙門子曇傳

釋子曇號西礪俗姓黃氏宋之台州仙居郡人自幼聰敏志操踔絕入本郡紫雲山廣度寺出家身長七尺目光射入才思潛發特善筆翰十七遊方在蘇州承天石樓明禪師會裏典內記咸淳乙丑石帆衍和尚赴詔淨慈道價歷時曇腰包參詣頓息馳求復隨行遇天童執侍六載常志東遊遂以文永八年觀光

本朝高僧傳卷第二十三

〇一

吾國時年二十三東福聖一建長大覺下榻相待而以羊弱不童一利弘安戊寅卷不歸元依天童環溪和尚主司藏鑰至元二十三年出世台州紫雲嗣香供石帆一住四載攝衣入枕徑山雲峯和尚招歸首座職解遊嶽因寅董蓮之天柱歷數觀回廬阜圓通玉崖振公舉第一座與一山萬壽江恩月江印往來酬唱聲流江湖大德元年謁南洲珍公于平江萬壽亦延居首座寮正安元年半偈一山寧禪師重來年五十有一嗣元帥平貞時欽執弟子禮請住圓覺公務之暇參尋宗乘海眾屯聚聲光建慶後宇多上皇親

降綸綍諮詢禪要曇獻法語一段大恠聖旨嘉元元年遷董建長四夏歲序緇白歸樞益多矣曇覺贊初祖圖真曰一言梁主不相投蘆葉翻波太甚爾九載嵩山人影絕神光隻臂渡相酬無中號曰內外念能所東西絕往來空王遍摩利門戶鎮長開德治元年冬十月退居于正觀精舍二十八日凌晨手簡道平師曰子曇茲風火相通弗及面達佛法正宗全賴鼎力主盟至囑因召門人付後事復書遺偈擲筆而化春秋五十有八諸徒奉遺殖葬于福山傳燈菴塔曰定明教誡大通禪師

本朝高僧傳卷第二十三

〇二

贊曰曇公道貌偉奇材力雄富年僅十八觸石帆之風振松源之宗再來此國管轄大利想夫夢覺玄唱堆冊盈帙而今難得半稿隻簡益乏於貽厥也又六代祖師真贊在法山之庫余幸獲高踞之道既書藏燈錄

洛東勝林寺沙門瓊林傳

釋瓊林文永年中入宋參禪山虛舟度和尚舟住傳法偈并衣歸居神河朝晦不出高尚天祐順公之風嘉元年中虛舟和尚語錄附商舶至林慕緣壽梓為之序曰瓊林昔年範海遊宋往來吳越多侍先師於

武林湖山間每聞火爐頭話間舉平昔提唱以其未  
許學者流通紙襖所錄才公筆冷泉兩會語耳別德  
三十年不見大篇全章爲恨痛切不意忽獲八會全  
錄喜不自勝卷不釋手觀其語句詞氣簡古機鋒脫  
略如侍座隅親聞謦欬真未泐光明幢也然沒恐此  
書湮沒則非爲人後者故命工錢梓垂之無窮儻  
閱此而知有松源師祖的傳之旨則孰謂無補於宗  
門哉林後携見山菴而終

贊曰寬元之間天祐順公入宋傳止觀師之禪而歸  
構勝林寺懷藏利器獨樂佛祖之道矣過六十年林

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十三

〇三

公嗣虛舟和尚之法復居此地而不與世交與順公  
名望相繼余適看虛舟語錄始知其名因載其序立  
爲傳焉

### 京兆東福寺沙門琛海傳

琛海字月船住于播州賀古郡管世氣骨不凡  
厥在繼羅髮本州書寫山負及南北京凡三藏聖教  
靡不該貫持粹于密典既歸本山結廬西偏恒以禪  
觀爲務一衆師事稟顯密者多龜山帝聞海學業器  
權法眼海觀名如從東往之上長樂終一翁豪公翁  
是以盛禮令居別室敷禪兩陣旦夕相戰海每倒之

於此輩不相從數稔日臻玄奧始信臨濟宗旨趣出  
常情有阿佛罵祖之事時聖一唱佛鑑之禪海渴心  
日熾登慧日山目擊道契服勤數載弘安四年一翁  
順世其上足斷岸空公繼補長樂越年岸寂鎌倉副  
元帥平時宗特起海出世開堂爲聖一之嗣是時叢  
惴祖備四方學者輻湊海住長樂二十一年以禪律  
應和示導大開化門高峰和尚亦居雲巖奔競龍象  
因有東方二甘露門之稱武州太守平氏創東永精  
舍聘海爲開山祖拜受衣盂執弟子禮赤城山有一  
練行者三十年影不下山木食澗飲甚有神異海偶

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十三

〇四

至其地行者出迎曰弟子仰師道法久矣然有願故  
不出此今幸炎臨願受戒法以結勝因海授與三歸  
安名曰了儒一朝其人忽詣丈室海問汝從何來曰  
赤城來海曰幾時離彼曰今晨海微笑其人乃作禮  
而公自爾或一月兩月頻來率皆凌晨而至野之日  
兆山修灌頂法誦海爲大阿闍梨壇上有鈴體輿出  
聖一振之衆鈴皆應老僧語曰昔有異僧持此密鈴  
坐磐石上見獵者來捐鈴而去獵者得之以獻寺主  
藏之神庫多歷年所今因諸師啓神出之海執鈴驚  
曰希有神鈴我今值此法筵爲阿闍梨師實是夙德



之所感也。與用無量珍瓏。於老僧不如施一青鈴。卽懷鈴而歸。衆皆愕然。不能護惜。焉今在。普光云。一時逢新歲。會衆闕糧。有一冠人面黑身矮。謂河越檀氏曰。吾長樂和尚使也。平氏曰。有何所示。冠人曰。今半米價翔貴。寺厨乏糧。衆將他往。檀越豈無意耶。平氏請之。冠人謝曰。善哉。檀越謹領。尊旨。平氏卽施送米百斛。一衆瞻足。余謂冠人乃本寺所供之大黑神也。德治二年。關白師教藤公九條聘海主東福未替手。屢徵疾。謂左右曰。先師聖一國師坐常樂閣而入涅槃。老僧亦憶夢之。卽至國師遺像右屹然而坐。門人及

寺衆皆怪之。少遇宗筆書稱曰。國大僧舍七十八年。

○

未後。一何威音王前放筆而化。異香發越。觀者不減。寶延慶元年六月二十六日也。門人築塔曰正統長樂牧翁一公。海之神足也。擬爲海樹塔。擇地未決。夢草埔之內。一色純清如琉璃世界。有大日輪自東方來。墮於寺南。卽而視之。化爲大士。告曰。我名普光。菩薩實。藥師如來之應現也。汝欲爲師擇塔地。此處最吉。言訖。卽隱。遂就所夢建塔。曰普光親賜說法。照禪師。

贊曰。大黑神者梵天眷屬也。竺乾諸寺本彫其像。奉

祀。飯食珍羞。香火甚盛。寄歸傳引經具記其來久矣。至其爲寺主。使往檀越家勸化。僧糧賜給。一會可以爲靈。焉又受日光富鈴。伏赤城山人。皆是海師道德之所感也。吾謂得悟之人若修密法。靈感影響豈私言耶。

### 京兆東福寺沙門大慧傳

釋大慧號癡兀。勢州人大相國平濟盛之胤也。初累平等爲磨山之徒。聰英博識。本朝八宗之學無不綜覈。其最精者。眞言教。多所發明。當時東台密者。傳爲平等義。聞聖一國師之福化。憤然欲與之角。卽往

東福謁見。問答教詰。國師曰。經不曰乎。緣心聽法。此

○

法亦緣非得。法性汝何涉。義解慧使。佛頓靈。易衣入室。參詳日淹。遂有所契。初掌記室。後爲第一座。慧嘗於勢州開兩寺。唱單傳宗旨。一日長松山安養寺。一日瑞雲山大福寺。晚年自構塔院於安養側。槐曰。壽德應長辛亥秋。藤丞相降釣幣起主。東福衆歛其德義之高。正和元年仲冬二日。示寂。臨終偈曰。高起方便。自證自然。爲物應世八十四年。茶毘復五色舍利。無算塔曰。大慈滅後三十三年。歲。諸佛通禪師所著有法華要鈔。枯木集十牛訣。

尾州長母寺沙門一圓傳

釋一圓號無住。相州錄倉縣人。梶原氏其先世。仕源將軍曉幼。除喪。父依常州親族。十九投州之山寺。薙髮。稟具。此時教門名德太半在。東關曉習。俱舍須臾。於幸圓僧都。聽法。華玄義。於法身大德。二十七。通上之長樂寺。依藏史。學公參禪之暇。聽釋論及圓覺論。二年。謁園城實道。法師。質止觀之旨。又趨南京。持犯開遮。盡得其蘊。居菩提山五載。迴。密水。備通。法相玄致。凡當時講說之場。莫不經歷。後見聖一國師。於東福間。經論與義服。其資。茂就弟子。別遂受禪要。文

本傳

本朝高僧傳卷之三

〇七

永初尾州。本賀曉。終長母寺。禪教兼弘。圓性篤誠。靈異尤夥。熟田明神。屢入室。問法。賜以般若全函。一時久早。邑人請曉。浴雲。三日之後。雷雨大注。藤相國崇其道。行下。鉤帳。重東福。三請殷勤。曉固拒。不受。正和元年。十月十日。終於桑名蓮華寺。辭世。偈曰。一漚浮海。八十七半風休。波靜。依舊坦然。當著沙石。集十卷聖財集。三卷雜談集。十卷小鑑。一卷。今皆行于世。贊日月輪。凝兀無住。三師本。獲于台密之教。大抵經論家者。嫌毀神。然。三師入。宗門。定有因緣之存焉。聖一國師。無四攝之博。安又使之歸服耶。三師以至

誠。故感驗。儘多。余三十年前。兩次往。長母寺。尋無住之事。又考其述作。中以備今之撰。

京兆建仁寺沙門宗鑑傳

釋宗鑑字明憲。不詳其姓。其許於大覺禪師。槌下。究大事。因緣。弘安四年。住武之東漸寺。嘗題偈曰。此地分形。隣少林。二株嫩桂。綠陰深。前村不鎖。漁歌曲。遠谷遙聞。石磬音親。說舌頭。無味話。全提鼻祖正傳心。但仰聖加頻。懇禱。締構速成。容衆際。後移洛之建仁。參禪者益多。晚構普光菴。而居。滅後。教證。明覺禪師。野州東山雲巖寺沙門顯日傳。

本傳

本朝高僧傳卷之三

〇八

釋顯日號高峯。後醍醐帝之子。母藤氏。仁治二年。美于城西離宮。今龍翔寺是也。其夜有異光。上徹霄漢。添金剛院。僧徒以爲失火。及旦。詢之。乃知聖子誕生之瑞也。日龍章鳳質。不浴自然。香潔自幼。不茹葷。不嬉戲。坐必跏趺。年甫十六。從聖一國師。落髮。披緇。分戒行業。純真。就一老宿。因問。錄中意。宿曰。宗門話頭。非言說所及。日日參麼。如何。知其意趣。宿曰。須是自悟始得。日便歸堂裏。端坐參究。值普請。次見人刻。牌。誤斷。蚯蚓。即問。聖一曰。蚯蚓。爲兩段。兩頭。其搖。未審佛性在那頭。國師曰。須爾不高。大海不深。日便領旨。

聯年二十，南都律師某訪國師，次見日，英敏白，國師  
攝而太居之不久，潛遁歸東福市，傳數載會元庵和  
尚來，自宋住，建長日往，掛搭菴，會湯藥，因謁府內諸  
老，皆以高賓待之，後入下野，那須山誅茅隱棲，道香  
發聞，禪客跡路而至，日堅拒，不許若有，被其接容者，  
謂之登龍門，有檀越欲爲日建精舍，日痛罵呵之，檀  
越曰：昔須達長者爲佛世尊立精舍，未聞如來禁止，  
師何謂辭？日乃許之，富者以金帛施貧者，以力巧施  
嚴堂門，不日而成，建開雲堂，日衆盈萬，指卽東山  
雲巖寺是也，時佛光禪師住巨福山，一翁豪公素與

日善，數書招之，令見佛光，一日光舉百丈捲席，公案  
間之，日日一狀領過，光曰：你因什麼？何老僧鉢盂裏  
沐浴，日日百鉢碎光呵呵大笑，日辭旋雲巖，光致書  
求其平日述作，日以偈答，日一見明師，意轉開寂，慈  
終日生烟，煙飽紫飽，水無餘事，禪道文章何處安及  
再觀佛光，問答數返，如明珠走玉盤，更無凝滯，光卽  
付信衣并浴盥，印之，日卽歸雲巖，鳴鼓開堂，燒香，酬  
佛光之深恩，問答罷，乃日靈山密付，不在微笑，遊少  
室，單傳不在安心處，絕毫絕釐，時如如，如如如，如  
如如，絕毫絕釐，直得刮龜毛，於鐵牛背上截兔角，於

石女腰邊，左旋右轉，風行，卽偃，正按倒提，星飛電激，  
正恁麼時，還當得從上宗乘麼？良久，曰：千重百匝俱  
粉碎，倚天長劍逼人寒，舉達磨大師逾海，越漢，爲恁  
求人，少林九季冷坐，淩雪中，得一個，未後問他所得，  
只禮三拜，依位而立，太師曰：汝得吾髓，遂以不浴俱  
付，日上座，近日見建長和尚泊問所得，無語而可對  
無理，而可伸，直得一場懨懨然，睡恁麼，借路經過，試  
送一偈，師資相看，口耳忘得，皮得髓，髓商量東山，  
下左邊底，突出機前，不覆藏，喝一喝，下座，歲旦上堂，  
不正佳節，歲月一新，大用繁興，舉必全真，雖然，新地

金華因甚，賢者不露，禪師因甚，瑞世來珍，  
林曰：聖人不仁，上堂三月，好景景溪山，春色滿堂，  
著眉，眼裏玄沙藏鋒，袖中大衆要見，一老落處，  
良久，日人面不知何處，太桃華依舊笑，春風解夏上堂，  
鳥有兩翼飛，無遠近道出一隔行，無前後所以道有  
時，結結時有解，有時解解時有結，雙明又雙暗，全  
又全收若恁麼會得，諸人在這裏亦不空過，一夏  
冬風直催，何參子，曲彎彎，丙戌冬佛光遺書至，  
日卽獻供，上堂舉南泉示衆云：來日設馬祖齋，未嘗  
先師還來，否衆皆無語，洞山出衆云：待有伴卽來，舉

云此子雖後生其堪。雕琢山云和尚莫歷良作賤拙。日南泉說世來錢遺罪雲巖今日不問他來與不來何故大海若知足百川應倒流即日往建長治喪又返東山日久住雲巖大闢玄化時大應國師住筑之崇福天下學徒指那須橫嶽爲一耳露門正安二年師年六十董相之淨妙嘉元癸卯住乾明山萬壽寺三牛乙巳移淨智正和甲申主建長江湖雲衲每利壇堂歷兩歲歸東山壬午丙辰十月二十日中夜書偈坐化報齡七十有六僧臘六十有七。于東山塔于淨智廬正統後長敕益佛國應世廣濟國師有五

日本書紀

本朝書紀卷之三十三

三

日本書紀

本朝書紀卷之三十三

三

處七言語錄若干卷元之鳳臺古林茂公龜足清拙澄公本覺靈石芝公爲之序跋見今行世

贊曰高峯國師寬元帝之子志氣天然別除白慧日師承佛光開雲巖寺接度千衆一耳露之稱不虛譽其法者二十餘人皆有龍虎超角住五山十刹豈其從大演出者其流必長之謂與余昔蒙歲置建長正統庵院主名吾日顯昌屢入饗堂拜奉國師之像當時尊其真容清穆異於庸人而已今觀語錄行狀尊慕之心眷眷猶徒于昔生矣

京兆南禪寺沙門祖國傳

釋祖國號規庵不詳其姓氏信州長池縣人母氏夢麗着沙門持般若心經授之尋卽有娠弘長元年誕童名師相之淨妙龍江宣禪師下髮受戒稍長在福鹿間參佛光國師光器託病下錫剎命充內記嗣元師平時宗謂國日子他日必興法憲教乘名何豈非恭財乎國爾之及佛光示寂卷祇人東福謁大明國師入室請益禪講交馳又往紀之蕭峯法燈國師舉落版省一夜坐堂中見月色穿窗偶爾成四句吟興愜懷定中動念燈在禪牀知之喚圓至呵之曰首座莫妄想國驚起汗下忽然省得已事正應問大明開瑞龍山率國行命堂筆翰屢稱於龜山上皇辛卯冬大明寂焉上皇敕圓繼席時年三十一圓乃往相州拜佛光之塔供漆乳之香高峯日公與之證明既還龍山四方英儒翕然臻集冬至上堂烏兔杳恍不改舊時光彩乾坤寂爾猶涉造化輪旋豎起拂子曰獨有這個哉玄機於未兆藏冥運於卽化還委悉麼擊禪牀下座圓爲人頽長疎斜秀目對人溫柔臨衆威嚴上皇晨昏孜孜參請一夕源儀射有房六寢中心動忽起思惟恐宸東有虞手乃馳入龍山時上皇在下宮元坐如思觀有房有急劇之貌問曰卿何中夜



而至乎有房奏事上皇笑曰今日與圓師舉論宗乘  
圓師微詰抑逼不少假也朕旗靡陣披是以胸懷梗  
塞未能寐也如卿之忠襟與朕通乎有房扣頭曰陛  
下風受佛記善聞思修然陛下聞思因圓師激發也  
臣之恩忠又因陛下感發耳上皇肯肯上皇病中有  
御製偈以賜圓師圓師讀上進曰玉皇仙是病無垢一  
朶紅雲擁九關常寂光中塵不到上方香散午盂盤  
如是酬和不可勝記然南禪惟仍舊貫梵制未全圓  
住持二十四載盡力造營於是大殿法堂厨庫雲堂  
以至三門廊廡叢林賞有者皆悉具體止和二午暮

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十三

三

春寢疾背夏二日中夜坐化有辭世偈曰一躍躍翻  
黃鶴樓一拳拳倒鸚鵡洲臨行一著元無別黃鶴樓  
前鸚鵡洲閱世五十有三傳金三日鄰封來祭門第  
子遵遺命葬于歸雲庵圓丈室東偏手植篁竹入寂  
時其色變日二日後復青教誡南院國師

贊曰南院國師生氣倜儻求己參究造次顛沛必於  
斯偶動念禪林為法燈所呵而有省所謂觀過斯知  
仁矣者與古稱菩薩於定中聽香象之渡河者法燈  
之誦與當時師學之嚴切懸與今時殊其拜佛炎之  
塔供關法之香添兄高峯為之證明者非古塔主之

嗣雲門之類蓋不忘其本也及後南禪規營太伽藍  
以極輪奐其功幾多居耶

### 相州建長寺沙門世源傳

釋世源字太古不詳姓氏常州人初參元庵和尚粗  
有省所住庵十年以庵中未習在又依佛光光舉香  
嚴擊竹偈下語不契自謂曰吾為此事出家誓不  
宜不措光遷巨祖源從侍專心參究未經數月廓然  
契悟因作偈曰轉機破處脚頭穿纔到家時洗脚眠  
昔日枉成岐路泣今朝見得火中蓮光舉居第一座  
永仁年中開法光福壽移萬壽建長後構向上庵於

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十三

三

福山中屏居養志元亨元年九月二十五日奄然終  
於住庵春秋八十有九教誡國一禪師

### 京兆南禪寺沙門一寧傳

釋一寧自號一山世姓胡氏宋國台州人稟生端重  
氣宇神秀辭齡就學唔吟琅琅鄉黨稱其英敏稍長  
慕桑門投郡之鴻福寺無等融公童侍二年辭往四  
明隨普光寺處謙習法華等諸經疏二歲得度進具  
戒律部於應真寺學台教於延慶寺嫌義學支解棄  
到天童質疑簡翁敬和尚敬問曰一心三觀以何為  
體寧即一笑敬許參堂坐究二暮上育主山依藏



珍公珍退而後東叟愷寂胞照頑極彌相繼住持寧  
奉事四師獨欽頑極一日慙乞宗要極曰我無一法  
與人寧印契悟尋與大藏開鑰解印雲遊天台鴈蕩  
間謁環溪一橫川琪巧庵祥清溪沈諸老敵愾酬酢  
益溪造詣至元甲申夏住四明祖印寺上堂祖師心  
印古篆分明無端後來胡擔亂擔失真了也今日在  
寧上座手裏試倒用看拈拄杖卓一下曰錦繡全開  
朱點不露運靈樞於劫外敷大化於寰中直得巨鯨  
不動三山常登於太虛萬國來賓帝祚永隆於億載  
雖然只如鉢象未形已前又作麼生卓一下曰收復

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十三

〇十五

舉楊岐問慈明幽鳥語喃喃公案拈曰是則是猛虎  
不食其子因其慈明連喝兩喝楊岐禮拜一衆稱之  
居十載遷慶元府補陀山指山門曰海濤澎湃鐘鼓  
鏗鏘莫是人理之門麼上堂舉雲門示衆云聞聲悟  
道見色明心觀世音菩薩將錢買胡餅放下手卻是  
饅頭豎起拂子曰者個是色擊拂子曰者個是聲道  
作麼生信心作麼生明擲拂於後曰莫教錯認定盤  
星住持六年海岸靈區寧之道義光輝並騰一日謁  
巖洞忽見大士現於圓光中隨喜作禮先是至元十  
八年世宗欲兼併日本發戰艦六萬軍卒二十萬來

屯于五龍山一夜神風大吹海軍悉沒成宗泰心亦  
歇欲遣有道名衲勸誘以爲附庸大德三年吾國商  
舶偶在明州於是遴選俊髦臺評漢寧乃賜寧金襴  
伽梨并袈絛慈弘濟號榮慶元府判官僧錄司知書及  
官員五十人至寧陀山勸寧東渡軟語闊榮寧通不  
可追受命駕船旬有三日屆太宰府本朝正安元年  
也舶主以書白帥府發遣相州副元帥平貞時疑寧  
爲游偵編置豆州修禪寺寧晝夜禪誦悠然樂道或  
說平帥曰寧公彼國望士來出于抑逼有道之士無  
心於萬物也豈必區區慕子卿之節哉且夫沙門者

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十三

〇十六

福田也在元國元之福也在我邦我之福也由此起  
相陽初東方縹素聞寧錮居畫然傷心至此隨喜摩  
禮山內館舍門外作市冬十一月主建長大道場火  
無隔其地日十方無壁落四面亦無門指一下曰者  
裏入得別是乾坤上堂拈拄杖卓一下曰建長愆愆又  
一下曰立宗旨恣愆已建宗旨已立極微塵刹海只  
在一毫端盡無量億劫悉歸彈指頃塵塵不昧法法  
全彰如帝網珠交光相羅如師子兒遊行無畏豈有  
本來之相何曾彼此之分便見拈華付法笑裏刀鎗  
面壁安心口頭人事不立傳授屈辱當仁拈喝交馳

取笑作者自餘張弓架箭列王分賓正是鑒空造端欺胡騙漢畢竟太平時世記甚干戈所以山僧萬里西來只麼素面相呈更無勞攘然雖如是卓一下曰將此身心奉塵刹是則名爲報佛恩復舉首山和尚示衆云佛法付屬國王大臣有力檀那人人燈燈相續至于今日且道續個甚麼須是迦葉師兄始得指曰昔山和尚發揚靈山付屬固是光明要且只是一期方便爭如今日有大力量人親承記莭向一千年後於日本國內續此一燈直得輝今輝古諸人還見麼若也不見山僧更爲點出靈山佛法付王臣今日

日本僧錄

本朝高僧傳卷之二十三

〇七

扶桑話又新一道恩光福塵刹東溟天曉湧金輪一住四載添規濟濟諸檀信服萬納鑽仰壬寅十月遷住圓覺元正上堂新牛頭舊牛尾四序已更端三陽猶未啓不是佛法亦非世諦不是因緣亦非自爾豎拂子曰會得遍地祥風普天和氣上堂睦州耨版漢趙州喫茶去口如崖蜜甜心似黃連苦所以圓覺尋常於諸人不放鎗毫鎗恨良久曰射虎不眞徒勞沒我住職二禪復歸福山謝兩序者舊曰普化成禪臨濟珍重下本楊岐輔佐慈明時出慈語是皆硤硤之質豈爲瑚璉之材福山者裏左既則冰清玉潔右願

則虎驟龍馳機鋒閃星電號令鼓風雷山僧贏得放憨癡閑看峯雲日公來雖然莫便是福山爲人處麼良久曰妙舞真詩迴雪手三臺須是大家催不後移淨智道望愈高正和癸丑秋南禪虛席後宇多上皇敬平元帥促寧住持荐入山問道續神官輔車馬載路士庶趨謁恐後寧以老病屢乞免退優詔不允潛遁越州上皇宸書慰諭促回曰親書特告南禪長老一山禪師朕聞師之道債久矣所以下詔關東以官坐請來也一得會晤宛如舊司南之車也慕德欽風三閱青黃而聞有心退席而數數理行裝也太半親

日本僧錄

本朝高僧傳卷之二十三

〇八

詣審判爲勾之也近者亦聽打拚行李書以慰諭公乃屈蒲輪來諾許朕意不料暗裏出城遠涉山川矣若得回來再相見必託隨自便養病菴中追於懷璉之古風也何須更歸東關矣直饒燕居南禪東堂使小師等如元安若有何不可寧又有魔賊之擾乎大都公長化此方廣結四衆之緣則朕所願者也宜快歸來也文保元年季秋示疾上皇幸寺駐蹕龜山廟塔時特問疾二十四日曉手書遺表獻于廟塔曰一寧頓首恭沐皇陛下聖駕幸本山定繙門觀光也一寧不幸臥疾數日百體舉而不仁不能再瞻龍顏大憂

時至幻質將摧。簡機忠情入。無生三昧耳。又書偈曰。橫行一世。佛祖吞氣。箭已離弦。虛空墜地。置筆奄爾。而逝。壽七十有一。上皇得表。念忙幸。寢室默坐。儼然如生。皇情震悼。復薦宸奎。贈國師號。宜源像射有房。作文祭之。敕建塔於龜山廟側。奎畫賜漆兩額。又御製像贊曰。宋地萬人。傑本朝一國師。其爲人主。被崇如此。寧性仁慈。和氣通物。釋典諸部。儒道百家。稗官小說。鄉談俚語。綜錯汎濫。常坐一榻。不須通謁。舊侍新到。出入無間。神策中古。事方諸之難曉。學者病諸賢寧。戾止就質之。寧運管。酬之若入羣玉府。信手執之。寧又善筆翰。持荷帛。畫畫者常盈門限。因會者述若干帙。寧手刪成。一卷有門人齋入元者。靈石芝古林茂中。峯本各著題尾。以證焉。

贊曰。一心法界。渾然平齊。自方何方。何偏之有。所以諸佛諸祖。三身爲家。隨緣度生。雖逢順逆。境未曾勞。心思。寧師逼元帝命來止。此方住。四太剎德化王侯。藐焉幻身。浩蕩不比。其胸宇之恢。與天地同大。不知其本者。美爲閭閻。又猶如以管見月。曷能知大明無私照邪。

相州建長寺沙門弘會傳

釋弘會或曰德慧號東里。固知姓氏。宋國明州人。幼齡出家。編參後歸西禪。月潭圓公親受。記苑聞此。方國風延慶元年。半浮海東渡。錄倉副元帥平貞時。請住禪興不絕。遷建長江湖學賓。參請絡繹。以文保二年八月二十八日。順世。臨亡書偈曰。無始無終。不生不滅。虛空消殞。大海枯竭。築塔禪興。扁曰傳宗。

贊曰。宋元之僧。雖光吾國者。大概支那之豪傑也。故受王侯之盛禮。道光于千載。會公密庵和尚四世之孫。宗派昭晰。其爲宗匠也。可見焉。惜乎其行實之沒也。福山住持薄僅存者。大耳是以今人罕聞其名。余江湖漫遊之時。雖庸活套之中。搜索其土查。又得諸偈一廿。因以立小傳焉。

筑前承天寺沙門仙原傳

釋仙原號耕叟。不委姓。諸州里人。久依聖一國師。歷任高職。後往錄倉。講無學元公。歸來嗣國師出世。筑前承天。肥後檀越某。經竹林寺。延源爲開山始祖。學徒多歸。因雪示衆偈曰。寥寥宇宙。無遮欄佛國。三千一百。問誰把須彌藏。芥子白乾坤。外更無山不詳。其終所年月。

京兆普門寺沙門圓然傳

釋圓然字奇山駿州人聖一國師之族姪也久侍國師悟徹已事密受印記學識尤博住洛之普門恢弘宗猷大丞相內經藤公修一室參禪達磨成法并祖承執弟子禮因號城南山崎邑建感恩寺講然為開山祖齋遇甚渥然後終於普門寺

相州壽福寺沙門上昭傳

釋上昭號寂庵師事藏叟譽公發明心地後南遊入宋與南浦約翁無象樵谷同參虛堂愚偃溪聞金石朋簡翁敬諸老皆蒙優賞及還鄉依大休念公分座壽福一眾優賞不絕出世嗣藏叟昭失行錄有示衆

日本僧錄 本朝高僧傳卷之十三

○王

語曰離念相徧虛空界是雖出論文殆有禁門旨汝等作麼生會晚退休松塢庵正和五年六月十六日吉祥坐化壽齡八十有八教諭宏光禪師

本朝高僧傳卷第二十三

音訓

踰竹角切 籀他各切 董多動切 挹一入切 瘧登職切

轄胡八切 鉸七林切 輻湊上六切 款苦黠切 一訖

魚乞切 憤房吻切 角厭上吉切 詰欺吉切 伎倆上

荷切 下力淹衣炎切 篋乞協切 邇胡為切 夥胡

切 多剗楚簡切 擣準回切 庫魯堂切 慙火含切 膊伯

肩 麓鄰溪切 十懷懼上化果切 龍侗上力董切 各

蓓花上想里切 錐朱惟切 報乃版切 幹烏活切 梗塞

上古杏切 跛龍上補火切 縮所六切 澎洋上蒲庚

下悉則切 必列切 下千 燈胡覽切 遶良慎切 髦莫毫

切 鏗鏘羊切 金玉聲 燈胡覽切 遶良慎切 髦莫毫

追胡玩切 游偵上干求切 下並 錮古慕切 鎗抽庚切

穰汝兩切 甜徒兼切 穢音地 瑟書谷切 砥硤上閭古

無切 瑚璉上洪敷切 閃失丹切 蹕壁吉 稗薄邁切 便

良以切 汎濫上扶茂切 謀徒協切 荊必列切 套他到

土苴上他魯切 遮欄上之蒼切 下離閑切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷二十三 茲其

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識



本朝高僧傳卷第二十四

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之六

京兆南禪寺沙門德儉傳

釋德儉號約翁相州鎌倉縣路傍之棄穉子也始縣著姓見拾歸乳養在羣兒中嬉戲出隊每見佛僧合爪禮拜舞勺歲從父過福山大覺禪師奇其骨貌乞爲童役教以經書後拔警敏宛如宿習十六落髮往東大寺登壇具戒還侍洛之建仁覺問雪覆千山爲甚孤峯不白儉曰書龍行處州不生覺稱其答謂人

日本書

本朝高僧傳卷之二十四

〇一

曰儉今十九歲更加三十年垂蔭於天下覺復董福山儉參從各決遂微玄機欲遊支那駕船徑達台之九山首見寂憲照公於白王尋謁天童石帆衍淨慈東叟讀靈隱虛舟度徑山藏叟珍簡翁敬覺菴真咸推器重又一時太宗匠晦機照一山萬末宗本寂菴相等皆樂與之遊往來興越者八年所聞滋勝所說益遠屬乎宋末運邊烽火警禪利擾紛遂返棹而東省大覺於巨福會覺移壽福卽昇侍香轉司藏鑰及其還領巨福典藏如故覺順世後低回福鹿間發揚所蘊詠言句皆爲人所然大休無學二師特爲愛

之永仁丙申葦航和尚主福山界爲首座有檀越創寺山內號長勝請儉住持堂頭葦航引座上堂儉乃拈瓣香酬大覺之汰乳次遷東勝淨妙據室曰正令全提佛祖碩額抑下威光君子可八住禪興德治元年有詔董洛之建仁湖海雲衲素聞其名來集如羣鳥入林後字多上皇風慕儉道詔入西郊離宮咨扣禪要奏對稱旨乃賜故丞相良教藤公花苑一區以爲壽藏之地儉揭牧護延慶二年秋歸休東關庚戌春應福山之選初儉在淨妙時夢有大龍橫福山門烟雲相擁遂化爲男子揖儉曰弟子爲師作檀度言

日本書

本朝高僧傳卷之二十四

〇二

訖而隱至是二月初八日入寺乃土地神之誕辰也儉云前微矣因扁東菴曰龍峯儉以受法之地討論舊典任重提示閨府刈利概出水之冰也正和乙卯秋寺罹火災儉坐瓦礫場接納恬然仲冬過退鼓屏居龍峯菴請雷屢至堅臥不起文保丁巳冬南禪寧一山寂後字多上皇傳召儉儉上表力辭乃詔平元帥貞時起儉平帥備驛衛士護送輦下上皇敕御史大夫源有房迎勞于道開堂日上皇率貴戚臨法筵回來龍象列班序實法門嘉會也上堂祝聖罷就座適日屋角青山塵空峭峻全彰舊嶺真覺門外白

河微底深沈清發曹溪正脈若有二人半人登其頂竄其源少室家風未至泯絕佛日與舜日長明堯風興祖風永扇正恁麼時以何爲驗卓拄杖曰一條拄杖觸刺律探得黃河微底清復舉阿育王問賓頭盧尊者承聞尊者親見佛來是否尊者策起省毛良久云會麼王云不會尊者云阿耨達池龍王請佛齋食道是時亦預其數拈曰一曲兩曲無人會和風吹過汨羅灣上堂樓閣門開洞見彌勒覺城東際觀體文殊諸人每日朝參暮參東討西討還見龍山巖崖也無若也見得天上無彌勒地下無彌勒無有一文殊

日本撰述

本朝高僧傳卷之五十四

○五

登有一文殊繫拂子下座元應元年十一月示微疾中使慰問翌歲春表謝院事將還相之舊菴上皇諭告不免幸黃門侍郎源有忠私策賜齋問法卽宜還山大駕亦從入寺夏四月僉病厚上皇親臨問候僉奏以蒙恩際遇將辭盛世仰冀安國弘宗教上皇歎惜久之遣國醫診治僉卻藥不納上皇重敕源黃門時賜佛燈大光國師之號僉起坐謝恩徐謂黃門曰生唐國署者本朝未之有某豈敢當黃門曰上皇以非常之禮待非常之人宜毋辭僉曰苟有佛燈何必大光此辭不歡黃門反奏上皇以謂謙謝四字彌

加欽歎重命曰大光二字裁損惟意佛燈之稱揆義惟允僉知詔旨難辭遂始祇受五月十七日疾革浴髮墮不集衆訣別垂語曰未後一旬始到牢關汝等諸人各下轉語一衆進語僉不敢可否明日自書遺表復召諸門人區分後事且曰毋厚喪禮維那投炬十聲念誦不可行餘佛事吾昔在靈隱親見退耕入滅大約類之訓節諄諄夜將三鼓有僧問九旬聖制未半師將行脚未審龍山拄杖卓在何處僉便登拳僧曰世尊雙林示雙趺國師龍山豎隻拳是二一僉曰一任大衆證明僧曰恩大難酬便禮拜僉以手

日本撰述

本朝高僧傳卷之五十四

○四

揮一揮曰你見甚麼道理便禮拜十九日詰旦衆環丈室僉示衆曰佛陀和尚曰一釋迦二元和三佛陀其餘是甚麼梔躡丘你作麼生會有僧擬進語僉便捉拳又曰汝等俱赴晨粥待吾午時行至期欽不跌坐書偈曰七十六年不生不死雲散長空月行萬里擲筆而化閱世如辭僉坐夏六十又一上皇見遺表嗟嘆不已曰朕重失此國寶世復得若人乎門弟子遵遺命就于收護菴閣維乃分靈骨樹塔於相之龍峯上皇親灑宸筆特賜佛燈國師無相之塔復御製真贊六十六字賜之敕制讚州垂冰莊助收護香

燈後醍醐帝嘉曆改元之夏降旨易菴爲寺賜壽聖額儉律已嚴正造詣亦深人望其詞色凜然畏敬有七會語錄元圓通竺田心道場月江印作序淨慈靈石芝跋上天竺沙門匡道大師撰塔銘奉議大夫趙雍書中奉大夫王都中篆額

贊曰約翁西來之克家弱歲英奇觀答孤峯不日之間青松出羣木成天下蔭涼之象蔚然既見覺之議記不差南遊道謁太方宗師皆以悟解真正優才博瞻稱爲七會之語渾厚斬新於今學者傳誦虎關鍊公友欽諡道建治上皇師崇問禪歎其教化日朕失此國害世豈復得若人耶非道山之高爭能感動龍顏至于茲乎哉

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

○五

### 相州圓覺寺沙門慧輪傳

釋慧輪字雲屋京兆人初踐涉諸方錯綜內外後參佛光國師得休歇地允付衣與偈不幾出世圓覺法令稍嚴學人欽服掛鐘佛事曰天宇寥寥潮氣海中峯大器以圓成高懸寶篋洪音振萬歲千秋祝清明合造化不言之信壯叢林正令之行得可悟心一片路輪皎皎停酸息苦三千利界海澄澄誰聞不喜誰聞不驚且道末後一槌如何告報圓通門裏無遮護

皆謂諸人眼裏驪後剎長壽院爲遠焉處臨以書偈置筆脫衣春秋七十四元亨元年五月十日也敕諡佛地禪師

### 京兆南禪寺沙門崇喜傳

釋崇喜字見山上野州人久參佛光了畢大事辭歸粉邑允付偈印可再入宋國請益宗近有初祖贊曰遙望赤縣氣迢迢入殊左吐毒氣於頑石得展拜於神光只應伏六宗兮化五印不須歷魏邦兮遊大梁至今日微而不瞬口闕而不張記什麼單傳直指五葉芬芳咄首住相之淨智後遷洛之南禪道價宜蓋下帝召問禪要特賜佛宗禪師之號解印歸東開常之三會寺引接四來學人又應檀信招剎信之興禪寺爲第一代元亨三年六月八日化於金峯之正紹菴中

日本書紀 本朝高僧傳卷之十四

○六

### 京兆南禪寺沙門鏡圓傳

釋鏡圓號通義一名淨光不詳其姓其許蚤歲出家志幹挺特聰明超伍初遊講肆徧搜曾許內外載籍靡不綜錄既而嘆曰此非究竟之法棄去歸禪屈野之雲巖依高峯和尚久之不契辭往筑之崇福參南浦禪師晨昏剋核不知端倪質疑諸方如飢馳尋州

凡創奈須十七回上橫獄前後十八度矣。一日有僧指屋上松曰：「一切州木以山河大地爲緣，渠獨以何爲緣？」僧曰：「以無緣爲緣。」圓在傍聞之，忽然大悟，不覺失笑。趨告南浦，卽受記疏。後統州菴於洛西，扁曰「正眼鍾彩」，潛居無出世意。暮，雪實圓悟之風，碧巖百則公案下一拈，振華園帝皇詔荐臻，出世萬壽及後醍醐帝龍飛，敕住南禪。時時召詢，恣要寵遇，其無特賜。普照大光國師之號，并御製贊，朝野以爲榮也。豈小宗競起，排斥禪宗，蓋圓勝者數四矣。元亨四年正月二十一日，帝召延曆園城東寺南都諸講師於

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十四

○七

清涼殿與圓對辯宗要，帝宣藤原相

其露寺

除詔召圓

圓會罹風疾而關繫至重，承詔召昇殿。宗峯超爲侍者，侍側公卿百官須班，傾聽圓奏曰：「今對聖上商量宗旨，應須直問直答，不假繁辭。若負墮者，卽作弟子矣。」諸講師先出，徒屬驗強弱。圓乃命侍者與之斥擯衆鳥，一鶚講徒屈退，有沙印玄慧者出問如何。是尋外別傳禪侍者曰八角，磨盤空裏走玄慧，不會又有園城僧匠其攜函而出，侍者曰：「是什麼僧匠？」曰：「此是乾坤函侍者，卽以瓦擊碎。」曰：「乾坤打破時如何？」僧匠情然因測有東寺虎聖奏曰：「昔嵯峨朝諸宗角論了，」

七日夜也。今何限？一問一答乎？帝從焉。於是諸講師不勝憤激，攘臂切齒，問難鋒起。圓以無礙辯，下一折之，猶如洪鐘，隨敲擊大小其應也。至一十七日，虎聖出問如何。是禪圓曰：「箭已離弦，無返回勢。」聖曰：「吾宗亦復如是。」圓舉扇子曰：「你試射看。」聖曰：「中也。」圓乃袖扇子曰：「重發看。」聖曰：「箭既盡矣。」圓曰：「欲知吾禪，白雲萬里，聖曰：「禪可得。」聖曰：「近前來爲你道。」著聖近前，圓便一踏，陷倒。聖起來禮拜，於是諸講師旗靡陳，我各執弟子禮。皇情悅懌，羣臣駭歎。圓以七日堅坐病至，彌重，將歸途，中說偈曰：「清風匝地，景日當空，十

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十四

○八

方俱通塞徧界沒，行踪泊然而化。實元亨四年正月二十七日也。壽六十八。門弟子扶昇歸寺，閣維，獲舍利羅，無算。塔于山下，闕曰最勝輪菴。曰正眼贊曰：「昔雪峯禪師三上投子，九到洞山，千載之美談，以爲行脚之榜樣也。今大光國師復二倍于此矣。曾郎未足稱勤之，故使逆水波翻，歸巨海耳。夫教禪角論之事，世但聞其略而未見其全焉。是以疑心過半矣。瑞龍山典座簿牒兩家往返數書，宗論輪贏具記在。今又東福大愚智公主南禪時值國師之一百半已就正眼菴，陞座拈香，其散說中委舉贊揚現在錄



中余今併取記之。鄒決世人之疑焉

豐後蔣山萬壽寺沙門智侃傳

釋智侃字直翁工部侍郎源泰氏足利子。上野州產。早歲出離學天台教。兼通密乘。聞有別傳之旨。夏衣遊方。初參蘭溪和尚於建長溪。一面器許。待左右著精彩。久之有南詢之思。脫屣入宋。面謁諸老。知法無別致歸。首蘭溪後往東福。見聖一國師。便問從上宗乘。事學人還有分也。無。國師曰。是甚麼事。侃提起坐具。曰。今日親見和尚。便禮拜。國師曰。這癡漢參堂。太侃止。輪下且浴。學海嘉元末筑之。承天寺虛席。衆請

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十四 ○九

侃住持。嗣香供聖一德治初。半羽州太守藤親平友大

氏號玉山。建萬壽寺於豐後。招侃爲開山第一祖。九州禪

客會同堂中。盈一千指。晨昏鐘鼓鏗爾。卯午粥飯嚴

規。其規矩禮樂。鬱鬱大方叢林也。延慶三。半大相國

忠教藤公修九下釣帖。主慧日山。侃據室。拈拄杖曰。初

僧行履全無。方所銅頭鐵額。收放臨時。佛來祖來。勘

破了。打卓一下。日龍得水。時添意氣。虎逢山色。長威

揚。謝新舊兩序。上堂叢林綱紀之設。貴在得人。是故

有新有舊。一進一退。如國家拜將。相似。行解相應。宗

說俱通明。如杲日寬若太虛。普令一切有情無情。不

隨有爲。不往無爲。開鑒人天。權衡佛祖。雖然不涉新舊。一句畢竟如何。芍藥華開。菩薩面櫻。欄葉散。夜叉

頭居。一載檀越藤氏疾。發使招侃。請蒙末後誨勵。卽

擊退鼓歸。豐後爲檀越。說末後安樂法門。復住萬壽

十牛論。導其博元亨二年四月十二日集衆。囑後事。已書偈曰。應世隨緣七十八。半撒手。便行古路坦然

擲筆坐脫。三山茶毘烟氣所及。若木若州五色舍利粲然。如鏡土有神祠大祝隨侃受戒。若有事不赴茶

毘所。乃登高遠望。瞻禮華儀。忽有香烟一道隨風。襲衣抵而觀之。舍利數粒煌然在袖。大祝涕泣拜捧。血

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十四 ○十

歸還近見聞。歎未曾有。諸徒分靈。骨塔于各寺。在蔣山曰。常樂在慧日曰。光明藏。南禪精庭壽公作塔銘

敕諡佛印禪師

相州建長寺沙門道隱傳

釋道隱號靈山。不詳其姓族。宋杭州人。蚤脫塵纒。參

仰山雪巖禪師。嚴密看狗子無佛性話。久之契悟。呈

偈曰。妖燒萬態逞餘芳。華品名中占得王。莫把傾城

比。顏色從來家國爲伊。嚴便印可。萍遊江湖。謁一

時名衲。後入經藏多。歷寒燠。聞此方風。元應初。半浮

杯東渡。副元帥平高特喜迎。住建長。叢規嚴整。七衆

崇信夢窻石公在三浦泊松菴往復酬唱動經信信  
矣隱題惜血書華嚴經感舍利曰百城烟水螺螄眼  
五十三人驢馬羣領有圓珠皮有血針鋒毫末定功  
勳題血書添華經曰轉男成佛夢中夢不裏明珠泥  
彈丸血脈貫通親欲何紅蓮華綻紫毫端血書金剛  
經曰三心歸一一非心十指何須痛著針山雨乍收  
秋日薄丹霞散彩落風林隱後於巨福山中結正受  
菴爲菴裝地正中二年三月二日唱遺偈曰還源歌  
還源歌還源一吹脫娑婆哩哩囉跌坐而化春秋七  
十有一勅諡佛慧禪師

本朝高僧傳卷之二十四

十一

贊曰尊公觀此此國據名盛八生矣竟其提唱以失  
不見辭偈一首載錄倉五山記又在宋之日雪遊行  
卷號業識團體裁新鮮傳中所載題血書華嚴經等  
是也然或者之言曰禪師住淨智建仁收衆之暇自  
瀝指血書華嚴八十軌矣夫隱公無準的孫雪巖高  
弟正欲東歸濟本分鑣鉤以接得此方學人豈煩模  
糊聖經而憤朴實頭漢耶以己眼之暗鈍置明眼宗  
師其過不少看者辨焉

### 京兆普門寺沙門慧椿傳

釋慧椿字玉溪涪指經典覃思密部兼參聖一國

遂受記號出世洛之普門不詳其所終上足無夢清  
公齋瑤之頂相入元請讀於徑山古鼎銘禪師銘公  
贊曰無相之相太虛蕩蕩絕點絕清一爲無量生山  
陽之道場走東海之龍象用文武火煅聖鎔凡示機  
顧機興風作浪叢林著龜人天榜樣雙徑如此讚揚  
後代從教鑽仰夫是之謂東福聖一之眞子凌霄圓  
照之的子玉溪和尚

### 京兆萬壽寺沙門智義傳

智翁

釋智義號松嶺後浚州帝子幼從靈覺禪師脫錦紉  
著細服學出世法及其成人徧參諸方天性俊邁得

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十四

十三

宿命智侍鏡堂圓禪師於建仁益歲證解回嗣靈覺  
歷遷圓通三聖萬壽三刹所在秉法病後退休如意  
菴嘉曆元年十月十一日化遺偈曰昔年恁麼來甚  
趙州布衫今日恁麼去脫貼肉布衫一太一來莫相  
嫌發明千山與萬巖又有釋智翁字無才幼稱侍聖  
一國師後從靈覺悟心地法初開堂萬壽後住江州  
青蓮寺爲第十世管題自頂相曰爾不似吾吾不似  
爾畢竟如何是不是

### 能州諸嶽山總持寺沙門紹瑾傳

釋紹瑾號瑩山俗姓藤氏越前多福郡人母某氏夢

否朝日有孕自此每日禮觀音像三百二十拜誦普  
門品三十二卷胎中爲首男也及生顏貌異常稍  
長慕出世法年甫十三隨永平孤雲井公剃髮爲  
舉厝純如志趣高邁井公曰你有太人之度他日當  
爲人天師逮井遷化依大乘徹通介公晝夜參究脇  
不至席食不其味聞通舉趙州平常心是道語豁然  
契悟卽云我會也通曰你作麼生會通曰黑漆崑崙  
夜裏奔通曰未在更道通曰逢茶喫茶逢飯喫飯通  
卽曰你向後當起洞上宗風尋以審鏡三昧三種淨  
漏五位顯談等一一究盡無剩蘊矣乾元初年住大

本傳

本朝高僧傳卷之十四

○十五

乘寺大唱宗乘四海龍象競集會下正和二牛同州  
滋野信直妻崇隨道義施洞谷山藤氏家方建永光  
寺延理住持資州檀信建淨住寺招理而主能州權  
比縣有定賢律師屢來問法遂革教寺講理爲開山  
始祖未幾檀顯雲委堂宇周備號曰總持寺禪客憧  
憧恢復祖風上堂舉拈華微笑因緣曰靈山會上八  
萬人天無知拈華微笑又是什麼時節若人直下見  
得古今一時透徹太也可謂不因今日事爭語昨夜  
夢後來徑山清了禪師拈云世尊有密語古渡春殘  
迦葉不覆藏落華流水雪竇智鑑禪師云世尊有密

語迦葉不覆藏一夜落華雨滿城流水香此是古人  
舉古明今模樣也我且問諸人當昔拈何華笑何華  
端的道看以拂擊牀曰離過了也元亨年中後醍醐  
帝降十疑問理奏答明詳帝特賜綸綍以總持爲賜  
紫出世道場正中二牛八月初臘微疾至十五日夜  
半召門人曰吾化緣已盡泥洹時至沐浴整衣鳴鐘  
集衆指示法要門人請遺偈便書曰自耕自種開田  
地幾度賣來買太新無限靈苗繁茂處處法堂上見種  
鉢人捨筆而寂世齡五十八卒臘四十六如法荼毘  
得舍利若干粒建塔於大乘永光淨住總持四處扁

本傳

本朝高僧傳卷之十四

○十六

日傳燈蓮著正法眼藏語一卷清規二卷坐禪用心  
記嗣法弟子無涯洪壺菴簡明峯哲我山碩珍山秋  
諡佛慈禪師  
贊曰瑾公祖述道元憲章井介宗尊號令秩然有序  
膺受紫袍之寵賜炎昭乃祖之道場整頓下家規典  
爲後學之矜式如佛慈禪師可稱河上之中興焉  
京兆南禪寺沙門處謙傳  
釋處謙號潛溪本貫武州初參佛光於圓覺後隨聖  
一於東福參究純真遂有悟處在建長興藏在建仁  
首衆正和九年夏出世筑之承天指門曰家風斬新

匪地普天不立門限大道湛然常晚小參拈拄杖曰  
生佛未分有一句子岌岌然超出六合之外湛湛焉  
透徹萬化之中無邊事門出此成就更不與萬法爲  
侶無量三昧由此建立而不與千聖同途卓一下曰  
大衆還會麼若何者裏見得微公坐斷報化佛頂豁  
開頂門正眼融十虛於毫端置塵劫於當念便乃不  
離南瞻部洲而遊北鬱檀越直得木雲雜沓聖凡交  
參彼我忘情主賓道合雖然如是某乍到此間未免  
井竈同背門限高低從頭問過何故良久曰一回拈  
出一回新尋住東福陞董南禪後醍醐帝除諱禪道

日本僧述

本朝高僧傳卷之十四

○十五

日本僧述

召宮問沐要奏對稱旨賜龍涎念珠金紙御扇爾來  
屢屢枉駕踰於南禪受密灌并衣孟時賜晉圓國師  
之號奉旨陞座祝聖復說偈曰從來皇道自平平人  
樂妻風舜日天卿木百年新雨露乾坤一統舊山川  
謙後創播之壽光寺以居國中禪林之權輿也又攝  
之澄心勢之淨法講所開基也元德二年五月二日  
遷化塔于慧山之本成寺小師紹侍者持誦照容入  
元從本覺靈石芝公請真贊石贊語曰燈燭釋龍耶  
耽律虎戒潔腑冰食不過午持咒泣鬼神揪捩吼佛  
祖四坐道場宗風振舉是所謂聖一國師密授親傳

之嗣子

贊曰東福岐陽秀禪師曰弘安正應間禪門諸老棟  
梁大汰者後前輩出迨泔溪遷瑞龍元應帝召對清  
涼殿問佛法大意奏對稱旨帝通加號禮自後襲屈  
嗣於龍衰在警蹕於禪苑吾宗龍光前未曾有也秀  
公博覽宏才知人眼正其言至于如斯故余全龍系  
之贊尾

相州建長寺沙門巧安傳

釋巧安號嶮崖肥前州人幼年出家初學天台止觀  
通達圓理講場議論爲同儕所推後參佛源禪師于

日本僧述

本朝高僧傳卷之十四

○十六

日本僧述

建長源謂安曰義理之學多滯在知解名曰理障亦  
名法愛所以道思而知慮而解鬼家活計因使提撕  
有句無句如藤倚樹公安奮激參尋洞徹本根源  
命可藏經統制秉拂列刹相共稱其提唱初開法於  
肥之朝日山安國寺後相之世尊寺相續住壽福建  
長等大剎接化雲衆遊瑞泉寺題偈徧界一覽亭曰  
一峯正露半空間孤峻清高絕頂寒眼力窮邊休著  
意古今十世似天寬晚居龜谷悟本菴元弘元年七  
月二十三日以疾遷化遺偈曰臨行一著不假兩脚  
踢倒須彌踏翻碧落世壽八十門人奉遺胤塔于本



菴教益佛智圓應禪師

贊曰安公初學合教覃思觀心逢佛源之鍼起膏肓從前知覺一時際斷及分曉大方控御海衆震霹靂之舌落魔外之膽搜索其全錄我未之見也拾取一二策載傳燈錄及此猶爐薰一炷嘉會過纔有殘香積馥者歟

京兆建仁寺沙門道生傳

釋道生號鐵菴不詳姓氏羽州人也久參佛源瑩徹心源本遊諸方殆三十年所至諸刹授以高職秉拂說法各翼翥叢林出世本州資福庵據筑之聖福洛

日本書錄 本朝高僧傳卷之三十四

〇十七

之建仁相之壽福包笠景從大關松源之道除夜小參風樓雪灑蝶驚夢奈此寒威徹骨何樓上角吹殘臘月短檠燈吐兩宵華便恁麼告報已落諸方普請邊不涉功勳如何舉揚資福今夜向爆竹未鳴已前與諸人開一路子太也卓拄杖一下曰舊歲今宵太新年明日來謝秉拂幹齋上堂土鼓簪符賞音者以明水大羹知味者稀聞者飄豚聽聲者禿豚舌何也卓拄杖一下曰朕聞上古其風朴略十堂三世諸佛說虛誑實六代祖師圖模起樣東山不然何故西風五更雨南鴈數行書佛涅槃上堂雪嶺成道金河願

命靡不有初鮮克有終波旬袖濕慶喜淚濃又添杜

宇哭春風誰知事上堂石窻不點公燈而古佛光明

盛大楊岐挾衾入庫而慈明法道森嚴只如以三文

錢買片生薑又作麼生貪者不與廉者不取開爐上

堂知寒只說普通半雲鎖八紘欲雪天休向諸方貪

暖熟誰家竈裏火無烟臘八辭衆上堂認得漁篷離

岸火瞿曇夜半作明星一聲鐘動海天曉依舊數峰

江上靑生以不弘元年正月初八寂于東山瑞應菴

書遺偈曰罵詈佛祖今七十年一舌拄地兩腳踏天

火化念珠不壞得堅固子無算塔曰海性剎論本源

日本書錄 本朝高僧傳卷之三十四

〇大

禪師生天資秀拔博探內外特富文學有詩錄外集

若干卷元之育王月江印雪峰樵隱逸四明東陵璣

本朝乾峯星學諸老爲之序跋

贊曰雷霆鳴夏也霜雪降冬也聞見驚騰出自根本

者自然而然宗門從上諸師吐一言半句則坐斷天

下之人舌頭而百世之下使人興起焉蓋亦自心源

上流出來也余看鐵菴和尚語錄逸格高古秉心塞

淵雙先覺而無所懸焉垂後昆而可爲範矣今舉其

提唱七章以載于傳中學者宜詳讀之

京兆東福寺沙門宗吳傳

釋宗吳字天柱。驤州久能郡人。奇山然公之姪也。嗣  
太聖一禪學之外通。顯密教。宛有家風。又入元。謁見  
諸師。依藤丞相之勸。出世。東福正慶元年八月二十  
七日。遘病。書偈曰。不離當處。直下則行。地獄天堂。  
一片打成。拋筆而化。塔于大雄菴。

洛北靈鷲寺沙門良真傳

釋良真。號夢嵩。時人稱靈巖。與州人也。幼有老成之  
智。不其處俗。辭親出家。遊行教肆。該貫三藏。俄嘆古  
人糟粕徒勞。斟酌棄去。參一翁豪公侍長樂函丈者  
十年。卒徹禪源。翁指見佛先禪師。先宵夢一僧自

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十四

〇九

嵩山少林寺來持十六應真像。惠之十五。愼而映。  
怪而問之。曰。明日有肉身大士來斯。其一也。翌晨真  
至。先笑而參堂。及卻回。長樂一翁既寂矣。諸徒以入  
佛先。爐薰來。欲以叔父待之。真不可。上洛依大明國  
師于東福。充典座之職。大明禪餘講說。經論真。每臨  
其席。屢致問難。其徒慕之。真柴崖太入。城北靈巖開  
門。不與世接。大相國實衡藤公西園寺愛真枯澹。相從  
論道。因繩小廬於靈鷲。以居。禪榻蕭然。萬象為徒。藤  
公欲廣其居。真曰。風穴州菴楊岐疎壁。古人尚爾。況  
於吾儕乎。學人往來無虛日。隨叩應之。或問師何姓。

真曰。無姓。姓性空。故問壽算多少。真曰。與虛空同年。  
一日無病。澡浴新衣召諸徒。曰。我今日行矣。汝等努  
力過一紀。後當發。真視之。全身不壞矣。索筆書偈。書  
訖。端坐。侍僧撼之。已脫太。門人檀信等。具全身。塔于  
本山。至期。高第等議曰。色體之壞。與不壞。漆身何干。  
哉。慎勿動。那伽定竟不發。焉有嗣法弟子。二人釋曰。  
淨字意翁開。因之興聖。後先嚴帝勅賜佛通禪師釋  
良忠字直翁為慈德第十代。

本朝高僧傳卷第二十四

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十四

〇十

音訓

瓦 五算切 汨瀾 上莫狄切 下海 烏運切 枕 寢丘 寢他  
謂無用 壓 備六切 灑 胡老切 箕 筆九切 趙 核 上乞格  
物也 緝 計切 篋 邊迷切 櫛 莫紅切 蹈 杜到切 樣 徐兩  
切 煌 胡光切 妖 燒 上伊妖切 瑤 止倫切 邁 莫解切 鈿  
也 遙 炭 忌立切 平 蒲眠切 衰 古本切 霹 靂 上匹亦切  
切 糟 柏 上則刀切 悵 朱孟切 藹 薄通切 嶺 音街有柴崖  
上 林 皆切 下 宜 皆切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財銀

本朝高僧傳卷二十四 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第二十五

濃州盛德沙門 師蠻 棋

淨禪三之七

京兆南禪寺沙門本元傳

釋本元號元翁從佛國禪師得度稟具氣質清美知機出羣與夢憲石公同參罷休之後遊從林泉正和二牛抵濃之古溪愛其山水明媚木石奇秀卓庵而居枯澹自娛及夢憲應南禪之詔率元入洛性厭紛華寓比睿山隱醍醐山而學徒接武相隨於寂寞之濱嘉唐二牛應請出世相之萬壽辦香供佛國一住

日本後述 本朝高僧傳卷之二十五

〇一

未周禪化東橋元德初年夜醍醐帝特下綸綽玉南禪指門云瑞龍門八字開直出直入腳下風雷上堂問答罷乃云鸞鶴拈華不萌枝上十分春色金色微笑鳥界馨香少室塵觀暗裏書字文彩已露神光斷臂文不加點從此遞代相承東西繩繩未下叢林南北浩浩騰騰正法眼輝古騰今蹶脚新定機星飛電閃偏正回互玉轉珠回體用雙輪橫花簇錦是曹源一滴水通玄不是人間或棒下悟無生或喝下撒白雨或掛羊頭賣狗肉或以特石包錦團子細點檢將來我王庫裏無如是乃山僧雖則伎倆全無不作這

般見解既不作這般見解畢竟如何施設拈拄杖卓

一下云金輪永御三千界玉葉長敷億萬春十月望上堂拈拄杖曰本年今日住萬壽水無聲今自朝東今年今月住瑞龍雲無心今自從龍溪山各異雲月是同巖叢露冷林葉墜紅同中異異中同大眾還會麼卓一下曰蛇吞龍鼻虎咬太虫帝屢召內問法鳳興幸山元槌鼓上堂天得一以清有星皆拱北地得一以寧萬波自朝宗君王得一以端拱家國鼎盛堦老謳歌直得萬瑞咸臻神物孕祐布義軒無私之化追盤鳩太古之風四夷拜舞八表歡呼便見靈山密

日本後述 本朝高僧傳卷之二十五

〇二

付少室祕訣千古之下玉振金相率土姓民衆無爲之化行不言之教天下衲僧頂門上放光腳跟下壓落個個電卷星飛人人玉轉珠回非唯扶豎叢林亦乃流通正眼豈不是聖恩正當恁麼時報聖恩下句作麼生道卓拄杖曰龍圖鳳曆幾千劫爐烟爲瑞國風清舉肅宗皇帝問忠國師如何是十身調御國師曰檀越蹈毘盧頂上行帝曰不會國師曰莫認自己清淨法身拈曰龐容雖龐猶待鏡以照形明德雖明終假言而榮行國師答可謂臣能固爭至忠雖然未免觸諱在且道作麼生得回互不觸諱良久曰下氣



不言含。有象萬靈何處謝。無私帝聞提唱。崇信益渥。都督親王傾心參詢。執弟子禮。元初正。的菴退靖。謝事後歸。古溪正慶元年七月四日安詳。就化。遺偈曰。太。不。太。雷。不。雷。月。西。沈。水。東。流。騰。驤。不。會。晉。化。直。發。一。鐸。聲。盡。碧。天。悠。悠。春。秋。五。十。有。一。教。誡。佛。德。禪。師。有。語。錄。一。卷。傳。于。世。矣。

贊曰。好隱逸者。質勝文。而野也。走世間者。文勝質。而史也。余觀佛德禪師之行解。文質彬彬。不野。不史。可稱祖苑君子矣。

越前永平寺沙門義雲傳

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

○五

釋義雲。自舞勺比隨。寂圓和尚於越之薦福。剪髮歸。業冠歲。遊方偏歷江湖。究明本性。歸省圓和尚。遂受洞上訣。正安元年。冬。住薦福。結夏上堂。九旬繩墨。非長短。曲直縱橫。功業新。水馬泥牛。混雜處。嘶風吼月。力耕親。諸禪德。摩竭提室。少林面壁。有什麼意。良久。云。一粒在。荒田不。耘。苗自秀。上堂。感應道交。山呼谷響。因果絕待。果熟。華開。菩提本。無樹。明鏡亦非臺。每常行異類。又且好輪回。不見古德道。煩惱海中。爲雨露。無明山上。作雪霜。於是薦得。鑊湯爐炭。火。放。放。劍樹刀山。喝令。推。正。和二。年。左金吾藤貞通。波多。請。野氏。

住越之永平寺。指山門。云。金鷄報曉。解脫門開。依然引步。腳下風雷。上堂。拈香供寂圓。就座。問。答。罷。乃云。半路作新豐吟。驀頭轉空劫身。谷。含。應。聲。之。響。山。屬。愛。寂。之。人。腦。後。繼。踵。溫。故。目。前。以。對。知。新。孤。輪。高。耀。寰。中。不。夜。五。葉。不。凋。劫。外。逢。春。若。又。於。此。薦。取。懷。甕。之。愚。非。是。外。枯。樸。之。巧。不。必。親。動。容。不。出。本。來。地。誰。向。清。空。拂。客。塵。祖。祖。於。此。作。大。佛。事。佛。佛。於。此。轉。大。法輪。山。僧。於。此。開。堂。演。法。作。麼。生。與。佛。祖。相。見。明。月。滿。空。天。水。淨。第。兄。俱。在。合。同。船。住。職。未。久。鼎。新。堂。宇。整。頓。宗。乘。稱。爲。中。興。解。印。返。審。慶。以。正。慶。二。年。十。月。

日本撰述 本朝高僧傳卷之十五

○四

十一日書偈而寂壽齡八十一矣

京兆南禪寺沙門宗卓傳

釋宗卓。字絕崖。親附大應國師。參請年久。得其法源。如瀉。斷水。旁。善。翰。墨。開。法。豐。之。萬。壽。住。菴。之。崇。福。洛。之。萬。壽。後。宇。多。帝。降。詔。昇。南。禪。後。董。相。之。淨。智。卓。風。格。孤。硬。痛。斥。諸。方。權。蠹。之。徒。其。會。如。林。焉。卓。祭。一。山。國。師。文。曰。萬。人。遜。德。兩。國。稱。師。其。德。有。鄰。其。化。無。涯。獨。步。四。海。橫。行。一。世。迅。機。翻。電。佛。祖。飲。氣。惻。隱。施。仁。緇。日。傾。心。大。節。寬。行。輝。古。騰。今。赤。縣。神。洲。無。生。可。度。化。洽。扶。桑。道。感。天。子。鑽。之。仰。之。峨。峨。龍。峰。左。之。右。之。

恢協宸衷大變未臨預請塔樣相南潭北豈用伎倆  
澶淵夢裏箭既離弦追之不及淚雨潸然法幢云摧  
虛空落地轉香證名文詞兼賜恩渥重重泉石光光  
承蕭唐肅連下號章迺祖遺風今亦再新惜乎此去  
主盟欠人噫我之與師夙緣尤厚自初入朝刻心參  
扣爲師忘身始終不輩倒指回思閱二十白我也兩  
冬養疾村落去年良月聞師退席今年良月告師歸  
寂扶恙忍苦促行接浙九原難起熙連浪激飲光後  
至擲見雙足我今不幸徒拜骨右換手椎胸聲氣俱  
索歷誠憶離莫勿嫌薄卓開京南薪山妙勝寺豐後  
日本書錄 本朝高僧傳卷之二十五 ○五

圓福寺奉大應爲始祖自居第二世建武元年六月  
二十七日書辭偈曰逆行順行自在縱橫天堂地獄  
禁足護生拋筆順叙壽若干歲塔曰大明教證廣智  
禪師

京兆建仁寺沙門仁恭傳

釋仁恭號石梁元之台州人一山國師之外甥也天  
生英特超出羣倫禮石溪月禪師祝髮聚具既而遊  
方徧參知識後歸一山國師輪下承嗣心印恭長于  
梵唄嘗在雪竇爲悅衆正安元年從一山東渡出住  
信之慈雲檀越創慈壽寺延之遷筑之聖福洛之建

仁所至秉向上鉗鎚接得禪客後退居興雲菴又起  
住相之壽福以建武甲戌歲臘月十八日唱滅壽室  
遺偈曰太宋咸淳丙寅生日東建武甲戌滅滅不滅  
生不生長空萬里一圓月壽六十九塔于本菴謚賜  
慈照慧燈禪師嗣其法者南禪竺芳裔安國大閑雲  
也建仁雪村梅公讚其真曰雅而淵和而儼活而圓  
清而儉謂其秀也挿天華頂曷足爲高指其機也架  
經石梁曷足爲險金鎚影動兮乳竇雲寒羽水車飛  
兮扶桑道漸金欄傳得祝鳳闕地久天長鉗斧提來  
攪龍門雷訇電閃至於慈雲聯芳聖福開簾建仁話

日本書錄 本朝高僧傳卷之二十五

○六

行壽福關掩則人只見其師玉雲而絕倫祖癡頑而  
不秦若迺銘塔以導潤之功錫號以慧燈之證則孰  
得而褒孰得而貶而辱弟替穎拜手謬書此語猶若  
太清片雲之一點者也余謂此讚如畫出真個石梁  
師故系于傳末以代吾贊辭焉

相州建長寺沙門德璇傳

釋德璇字玉山不記姓氏信州人也自少侍大覺禪  
師參禪不弛遂有所發明而受印記嘗應興州檀越  
之請住幽谷山爲第一世遐邇緇白翕然歸風後住  
建長同門昆弟歡忻助化海衆日多晚創回春菴以

養老期既臨，滅度說偈曰：三世塵數諸如來，無所從來，亦無去。山僧當機，桂輪正午安席，而化。壽齡八十八。建武元年十月十八日也。賜諡佛覺禪師。

京兆南禪寺沙門宗源傳

釋宗源號雙峰，筑前州人在。幼敏給，風格不凡。十三入洛，拜聖一國師，落髮受戒，服勤六載，造證尤深。去遊相州，謁于元元於福山，命掌箋翰，職滿周遊。大休念西欄雲一山寧寂菴，昭之門二十餘年分座。諸山聲華日著。嘉元年中出世，筑之崇福懷中，辦香爲聖一拈出。次興東福南禪，結夏上堂，如行而行，如說而

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十五

〇七

說：西天此土一團生鐵，拈拄杖卓一下曰：「怎麼說話？」還當得。向上宗乘麼？又一下曰：「百丈耳聾，黃鶯吐舌，冬節小參，一冬二冬，天寒人寒，雪似楊花，楊花似雪，粉髻白髮爲誰理，嶮嶮病骨冷於鐵，熊耳峰前人不歸，夜渡猶看欄干月，或衆中有大闍提，輩無慚愧，漢出來道：備之與法生，冤家禪之與道大妄語。」拈拄杖曰：「拄杖子作麼生，保住作麼生，委悉。」卓一下曰：「不見道水盈科而流，弦持滿而發，大權修利菩薩安座，語曰：一會靈山親記，荊叢林萬古自扶持，鴻樞運轉無今古，坐斷乾坤有永期，恭惟護法護人提，欲行不行。」

之令據令而行，吉無不利，有當斷不斷之機，而斷無不宜。太衆還會麼？慧峰高聳處自在，聖明時後宇多上皇聆源道望，游召宮問法，就受禪門，菩薩戒，罷禮日熾。李部親王屢詣室，詢心要，所得頗多。因於洛東創精藍，曰正法山大聖寺，諱源爲開山之祖。有旨陞爲官寺，源慧日東偏築菴，上皇親書，敕賜萬年桂昌精舍之八字，賜之。丞相藤公就源參禪禮遇尤渥，厚請再住東福。建武二年仲冬，示有微疾。二十一日中夜更衣，端坐。太衆環圍，源遺誡諄諄。李部親王持源頂相，請語。源乃援筆，讚曰：「泥洹一句，無人吝參。」雲收。

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十五

〇八

碧嶂月落寒潭，翌日書辭偈曰：「幻生幻滅，畢竟非實。本地風光無固無，必擲筆而化。閱世七十三，坐夏六十一，闍維塔于桂昌，源有住三刹之語，若干紙意句斬新，人僉稱焉。曆應三年，敕賜國師之號。」

京兆東福寺沙門士雲傳

釋士雲號南山，遠州人。姓藤家，世簪纓也。生質不常，豐頰犀角，神志高邁，閭里以神童稱之。蚤依聖一國師，稍長，敲諸老之門，從侍佛源禪師。於建長壽福圓覺源示以國師三喚侍者公案，久之不契。源曰：「侍者他日友知國師年老心孤，去參佛光禪師，研精入室。」

有所契悟。光以聖一所贈之衣付之首。衆于圓覺永仁五年應請住。筑之承天。一香醜聖一時。大林西礪鏡堂。一山約翁玉山鐵菴等諸大宗匠以偈賀出世。遷濃之法藏相之東勝。延慶二年副元帥平貞時奏雲。行業勸住東福。指門云。衲僧關捩祖師門庭如山。嶮似砥平。喝一喝入大播。法雨同門。瓜葛皆悉。蒙潤正和二年退院上堂。五歲耕開祖父田。不離頌破。又蹄穿。如今力盡。擬伏檻。穩臥清風明月前。未幾起董壽福圓覺住。職稍久。構傳宗菴而退居。元應庚申主建長。雖世已騷擾。領衆不倦。元亨辛酉創崇壽寺。隆

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

七

諸山之列年邁。八旬入都。居莊嚴藏院。朝旨主南禪。固辭不就。建武二年十月初七化。臨終書偈曰。達三世撥轉一機。祖也不會。佛也不知。壽八十又二。茶毘獲五色。談利羅烟。燭所及。粲然無算云。

### 筑前承天寺沙門圓心傳

釋圓心字鐵牛。久侍聖一國師。飲厭道味。及國師溘焉侍而不離。國師顧命曰。我平日行業雖不足取。而汝詳記以貽。後昆心乃遵遺命。集爲年譜。弘安三年仲冬五日。夜夢國師告心曰。我嘗授汝菩薩戒。汝還知戒體否。心曰。經曰。非青黃赤白黑。非色。非心。非有。

非無。非因果法。不是戒體乎。國師曰。此則果體。而非行體。菩薩當以四弘誓願爲其戒體也。其師資神交之撫。至如此矣。心後出世。筑之承天寺。

### 京兆南禪寺沙門正澄傳

釋正澄號清拙。元之福州連江邑劉氏子。家世業儒。母孫氏夢僧伽授以神珠。有娠。暨乎誕。彌白光滿。室四歲就學。英智邁倫。年登十五。父母察其志。俾依伯父月谿圓公於城南報恩寺落髮。十六稟具足戒。於開元寺。明年參鼓山平楚資禪師。歸僧堂。誓然臂香危坐。六年會中有谷源岳無方普大歇真。既稱飽參。澄隨敲問。粗受發業。年二十三。爾足入浙。謁慈極慧禪師于淨慈。偶值寶蓋新成。極上堂有不下禪牀。接太王之語。澄呈偈。首句曰。虛空掣下作。禪牀極曰。你還拽得下麼。澄曰。終不向別人借力。極笑令歸堂看。有句無句。如藤倚樹。公案澄入室下語。每被喝出。迨極順世。方山寶公來補其席。命掌經函。職滿陞沈衆底。十有五年後杖策遊方。見靈隱虎巖育王東巖蔣山月庭等諸老。皆器重之。一時龍象如古林茂東巖海竺田心。斷江恩其同參莫逆也。後謁虛谷陵禪師于仰山。陵公喜其來。擲單歸衆。一肯危坐。提有句無。

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

十



句公案忽憶琅琊覺曰樹倒藤枯好一堆爛柴霍然  
徹見極老婆心處陵公舉居版首澄舉肩尊嚴不失  
禮法一衆肅然叢規大整陵公平生寡言見澄則談  
論不輟乃云唯佛與佛乃能知之陵公奉旨遷徑山  
晦機照公補其席澄亦首衆袁州太守王本齋一面  
問道如膠漆相入翌日公舉疏請出世雞足山澄裝  
腰跨門顧左右云重門巨關作者同歸便入知客寮  
濯足上堂懷香供憑極和尚一住四載道俗仰風又  
應衆請補松江眞淨不振法柄至於叢林所未備者  
無不乘時竣功矣泰定丙寅夏六月受我國之請與

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

〇十一

神足永鎮等浮海至秋著博多濱乃嘉曆元年矣明  
年正月入平安城副元帥平高時遣專使迎請住建  
長行華夏製規鐘鼓改響上堂促無量劫爲一刹那  
頃延一瞬息爲三大僧祇古今十世不隔毫釐如是  
也白牯驚奴來作伴不如是也金烏玉兔去如飛新  
新不住念念遷移無影可尋荷貼水有枝未放荷穿  
籬堂中衆滿五千指平帥施糧二千石以資食餼居  
三載移淨智結制上堂金寶峰前象龍圍繞今當聖  
制斯臨與諸人約法三章長夏之中犯令者貶向無  
佛世界一不得認自己清淨法身如猢猻弄膠糍一

不得即目前萬境爲只這便是如人認賊爲子三不  
得著守頑空生斷滅見如落空亡外道自餘迅機敏  
捷妙辯縱橫與麼不與麼不與麼與麼玄中玄七中  
七八中八悉令改除各安己分青蘿實緣直上寒松  
之頂白雲滄汙出沒太虛之中萬法本閑咄切忌錯  
會明年受圓覺請辭衆上堂蕩蕩十虛無內無外住  
無靜相去無動心住也與二百禪流眉毛剔結去也  
赴瑞鹿名藍賢守佳招所以道法隨法行法幢隨處  
建立肩橫拄杖子下座云拄杖子化爲龍爲雨爲霖  
過別峰徑入瑞鹿山上堂祝聖訖就座乃云若據有

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

〇十二

祖以來傳持正命假使智如鶻子辯若滿慈到這裏  
如何放齒天人雲擁檀花光臨且事無一向大覺世  
尊於靈山會上拈起一枝金色波羅夷華普示大衆  
百萬天人悉皆罔措唯飲光尊者破顏微笑澄召大  
衆云諦觀世尊父子二人授受之際灼然地擎天覆  
雷厲風飛三百六十餘會何曾有這箇消息三世諸  
佛天下祖師誰敢正眼觀者直得二乘膽顫十地魂  
驚播揚曠劫之眞風拍塞普天之和氣只今靈鷲峰  
移來頓在諸人面前二千年事昭然在目更無絲毫  
隱蔽伶俐衲僧便可高懸慧日大振玄宗固檀度之

金湯補王朝之至化舉保壽開堂三聖推出一僧因緣云二大老扶登臨濟門風灼然頭正尾正且道這僧還具眼也無若不具眼辜負他保壽三聖瑞峰今日開堂若有人推僧出來便喚維那明窓下安排一日上堂澄至法座前喚首座曰今日如何首座曰無事澄曰無事不如休歇去好上堂據坐良久召侍者侍者應諾澄曰收取拂子便下座住職四歲退閑於福山禪居菴元弘三年後醍醐天皇龍馭回維詔澄住建仁賜莊田若干畝居三載與眾同苦甘一日帝詔澄入大內命主南禪澄堅辭而退尋天使捧紫封

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

○十三

而到始拜恩命凡住南禪前後兩回際時孔艱集眾提唱一如建仁信州太守源貞宗小笠原氏欽澄道貌就受戒法執弟子禮初開善寺於本州伊賀良縣迎澄為開山第一世住二載擢退鼓隆堂自持拄杖徑歸東山禪居菴朝廷有旨再董建仁澄辭以疾詔三至乃就焉湖海雲袂歡喜踴躍隨曆應二年正月十日俄嬰微疾十二日信州太守有女將終請澄剃度受戒已歸疲甚然有學徒求語者輒秉筆不輟至十五日自著衣進謝主上又書頌偈遺諸尊宿及宰官殊無勸色有進藥餌者澄笑而卻之至十七日剃髮沐浴

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十五

○十四

著新衣談笑如平常伯州太守源存孝居士土岐氏諱賴貞子彈正少弼賴遠孫刑部侍郎賴康共來問疾澄從容謂曰今天下稍定寰中已安公等乘願力現身宰輔宜為邦家羽翼外護佛法親書遺偈并付古銅香爐以表永訣之意又足利親衛基大友吏部基共來求戒法澄付法名衣孟乃喚密侍者曰汝是末後侍者還會末後何麼密潛然無語澄呵呵大笑曰今日乃百丈祖忌之辰吾將行矣命請璞翁古田二首座及玉峰都寺至榻前索筆書偈曰毘嵐卷空海水立三十三天星斗溼地神怒把鐵牛鞭石火電光追不及擲筆而逝世齡六十有六僧臘五十又三停龕三日容顏紅潤如生都下道俗香華瞻禮憧憧爭先勝典庶其聞計函至榻前泣拜澄俄開目授戒衣號即閉目如初火浴于東山西南之岡五色設利不可勝計緇白爭取灰土共盡塔于建仁建長之禪居菴上見遺表盡然哀歎賜諡大鑑禪師澄初在建仁時無隱晦首座持禪林備用請益澄看至百丈忌曰此間叢林不設斯忌若吾化白偶在茲反吾小師等當同設齋至斯泉爾矣其徒堅齋能奉遺命捨本鉢買田歸南禪常住承允百丈忌之供澄專行百丈清規叢

林禮樂於斯爲盛有諸錄七卷并大鑑清規其行於世元四明東陵與公金山卽休了公登之故舊爲塔銘旌其德焉

贊曰世尊鶴林般涅槃迦葉不在達來拜金棺涕淚悲泣世尊顯示雙趺此佛身法身遊化三昧不可得而議焉唐明洞山价和尚入定之後因弟子悲再甦生起設思齊南來禪徒之中如斯者僕指可數焉然未聞之如大鑑禪師爲檀越哀移時聞眼懇授法義者又其句語無礙從容若禹之行水而不鑿於智耳大凡東渡宗師十有餘人皆是法中獅也至大鑑

師可謂獅中主矣

澧州大圓寺沙門祖一傳

釋祖一號峰翁不記其姓里家居讀書學涉內外歲二十四暮歲外宗掛搭雲巖一夏參高峰禪師往西筑巖嶽拜南浦和尚留侍六載長時不卧辛勤苦修得勞瘁疾浦語人曰一侍者資生貞實爲法忘軀今誰資給俾渠成禪法器者時海邑縣有一信士聞之歡喜曰吾得如是好師僧供養足矣便稟和尚迎歸醫療一自念我有些子所省至此一點不能用心頭惱亂寤寐不安告信士以將歸寺士尼之不聽乘駕

回橫嶽問曰善惡競頭夢寐不穩佛說寤寐恒一如何得到恁麼田地浦曰前輩已有此疑寤寐恒一且置你比來辨道時穿衣噉飯屙屎放尿還作實會那一言下領旨不覺失笑浦拍掌一下便歸方丈次付印記病亦卽廖乃至紫野訪宗峰國師日舉揚碧島集遞有出身處同門從史出世崇福聲價播華夷濃州郡守某具禮招致建寺遠山號明覺山大圓寺一爲始祖江海參徒望會而集歲旦上堂拈拄杖曰天得一以爲天地得一以爲地人得一以爲人且道山僧手裏拄杖子承甚恩力使得七縱八橫與奪自在

大眾進退會座車一下下座上堂登起拂子云和僧已鼻總在這裏便擲下云看看放過一著落在第二示衆正法眼藏涅槃妙心只在現成公案所謂現成公案者卽今眼見形色耳聞音聲是也若又纔涉商量刺破你眼睛穿卻你耳根你只起大信心勵勇猛志看色前非境界色夜非我時忽然當如眼耳滅盡而你解盡底忘卻了始是你歸家穩坐處也若恁麼碌碌去十二時中逢境應緣千端萬端受用卽是清淨解脫十世古今洞然明白爲所以風穴和尚道祖師心印狀似鐵牛之機去卽印住住卽印破豈其不快

哉一嘗上自七佛下至密菴咸傑列臨濟下正傳之  
大較編佛祖直傳一卷當時侵枉行于世矣延文二  
年三月某日安坐而化壽八十四敷謚正宗大曉禪  
師也

贊曰大悟之人胸襟與虛空齊以現成底之心對現  
成底之境譬如風吹水成文千言萬說初無所經意  
焉大曉禪師全具乃祖之風而語脈自出於意表蓋  
以語解出塵矣大凡飲天澤天源之派水者別有生  
涯乎哉

京兆南禪寺沙門祖裔傳

本朝高僧傳卷之二十五

〇十七

釋祖裔字竺芳達江州人禪教俱通兼有文藻曆應  
年中接本師石梁之武住信州慈壽寺東西包笠攀  
棧路而集貞和初奉詔歷遷洛之建仁南禪晚構小  
院於東山扁名海雲解印退居以應永元年七月二  
十七日寂齡八十三齋嘗登筑之吞碧樓次東陵與  
公韻曰樓吞碧海景殊奇不是登臨孰敢知雙躍清  
波明月夜錦翻孤島夕陽輝星植秋至期無心海島  
忘機狎有宜祇爲雲中風味好未知日影向西移又  
東漸寺作曰傑出東州仙境地千峰環拱鎖烟雲林  
頭活落生平眼月印海心玉一痕

濃州正法寺沙門正榮傳

釋正榮字嶽桂不詳姓氏親承法燈國師之記荊嘗  
在建仁掌藏典遊方徧問靡不參見後菴居濃之大  
桑斗絕人事二十年矣三衣一鉢蕭然送歲依同門  
之請住紀之常興及鷲峰濃之州守士岐氏於厚見  
郡建靈藥山正法寺爲香火之墳寺請榮爲開山祖  
學賓雲委常充千指榮博通應問如鐘在簾其性篤  
信矯人薄而責己厚是以緇白歸心爲國中仰藍文  
和二年正月二十一日晝偈而化壽八十有八朝廷  
賜謚大醫禪師

本朝高僧傳卷之二十五

〇十八

贊曰膺于大醫禪師之忌辰建仁物外什萬壽直巷  
舉淨妙象先有陞座拈香讚說其德爲一代之宗師  
也可知焉且正法寺廢毀者尚矣至慶長年中遂夷  
築城僅存其名耳余棲遲乎厚見郡親聞見之所謂  
高岸成爲舊谷成陵詩人之言非遠矣大凡法燈國  
師之法不嗣十世今掃土而盡悲夫

相州壽福寺沙門文岑傳

釋文岑字象先承桃溪悟公瑞世相之壽福法規稍  
嚴有題東漸寺作曰徑通幽處海天寬潮落沙汀曉  
鷺閑憶得高秋清夜景寒濤搗月浸欄干先晚休居



大澤菴

相州淨妙寺沙門本立傳

釋本立號千峰神機秀發特屬文章稟法無及詮公浮舶入元遍參諸禪匠屢飲而歸出世相之淨妙禪徒望風聲高列利嘗題東漸寺曰千載桃翁舊典刑焚修繼續德惟馨門庭臨岸接蛟室殿閣倚空對石屏氣霽前灘烟浪濶風回別海水雲腥奇蹤恰類焦山景只欠沙頭瘞鶴銘

相州淨妙寺沙門慧廣傳

釋慧廣號天岸世姓伴氏武州比企縣人及年十三

本立傳

本立傳卷之二十五

〇十九

投佛光國師於建長賜黃紙度牒及漆印往南都受戒於東大戒壇歸依佛國禪師於雲巖其性伶利禪學之外粗達文翰既受印訣出敵諸利造詣益深後歸圓覺居第一座元應二年間天目中峰和尚道風興同志物外什公等數十人往太宰府明年春浮洋時年四十九廣於船中忽知中峰遷化舉哀一偈曰萬斛堅舟何所載都盧一個大疑團中峰昨夜利竿倒打破疑團無應看時同船上首物外等眾唱和編已巨海一滴廣登天目山以前偈呈寺主主爲希有之想以拄杖井中峰和尚真蹟及幻住菴記與廣誨

本立傳

本立傳卷之二十五

〇二十

古林茂清拙澄等皆悉優賞詣諸靈區拜徑山正續塔廣謁翰林學士揭傒斯請製佛光塔銘俾資政大夫全岳柱篆額焉正中元年歸寓物外菴元德二年春受府帖住相之淨妙捐三門曰推門者多拔關者少即今要拔關廢因莫道雞鳴天曉江湖無絕妙開堂祝聖辦香供佛國四來禪客圍遶隨侍建武元年伊豫守源家時足利氏建報國寺請廣爲第一世副元帥平高時豆之香山寺敦請又有淨智之請高卧不就建武二年三月八日遘病跌坐書辭偈曰未後一句佛祖不知揭翻大海躍倒須彌叉手而寂行年六十三戒臘五十諸徒塔于報國之側菴曰林耕敦證佛乘禪師所著偈讚曰東歸集贊曰延寶丙辰春三月余往報國寺尋天岸和尚行狀住持驪迎而曰異哉今日開山正忌日也因獲戒帖及元國遊覽之偈等以載于傳焉

京兆龍寶山大德寺沙門妙超傳

釋妙超號宗峰族姓紀氏播州指西藏人父母嘗禱書寫山觀音太土得吉夢而生肌膚瑩潔頂骨秀出伏岸插額目稜逼人及七歲見磨刀人問曰不快利處卻有快利子知之乎其人罔測驚歎十一父母以

有因緣投圖教寺住戒信律師未幾台宗與秘慈純  
心府慕達磨禪馳求心切謁高峰禪師于萬壽樓語  
相契遂易衣親附偶聞僧讀百丈語至靈光獨耀迥  
脫塵塵體露真常不拘文字豁然有省峰乃肯可嘉  
元乙巳秋大應國師奉詔來自筑紫館于洛之朝光  
齋起徑至請問應受萬壽請起隨參住應令看雲門  
關字起屢下語應不許曰汝能著精彩他時別須有  
生涯起憤悶精究德治丁未應住相之建長起又隨  
侍來經旬日當案上放在鑰鎖忽然大悟滿背汗流  
急趨方丈挑簾曰即今與和尚同趣應忻然曰噫貴

夜夢雲門大師垂光貴豈偶然哉起掩耳而出翌日  
呈二偈其一曰一回透過雲關了南北東西活路通  
外處朝遊沒賓主脚頭脚尾起清風應便書其後曰  
你既明投暗合吾宗到你大興於世但是二十年長  
養然後使人知有吾證明起時年二十六矣延慶戊  
申應嚴化回都遊居洛東雲居寺初居數輩枯淡自  
甘垂二十年一夜夢六神僧至告曰我是六代傳衣  
祖也子因緣時至何不出世起曰仁義盡從貧處顯  
一僧云貧肉土牆門即割取其腦後肉一僧以竹鍼  
刺頂上云連出連出覺後腦尚痛嘉曆丙寅抵城北

紫野菴小院而居華下緇白參問者多有法印玄慧  
者其博通內外元亨官論後歸齋於起屢來參禪  
祖有造請因捨私宅為建方丈又有都人宗印者素  
實家也自為北主營諸堂宇鑿成禪刹胸為龍寶山  
大德寺久參上士握衣歸會榮冒高官捧香抱風超  
此冬開堂辦香供大應就座顧視大眾曰便怎麼相  
見早隔五須彌若也待開口三生六十劫是有知個  
中事麼出來對眾決擇看問答罷通曰我本無心有  
所希求冰銀澤泉聲細碎今此寶藏自然而至風搖  
寒木影響拳沉我宗印禪者與海潮應應冒宵谷華

幽林親擇曰梵堆山積岳挂瀑水與海通銀波映  
嶺解透路駁白牛於露地結軌於百里塢成風於大  
野響奔於一城或費郊外丁夫或勞山中普請樹雲  
間之朱堂布五彩之檣樣安燈王之廣座莊三道之  
寶座區區役役今日開堂高答君臣徧報過現未來  
太覺海中一切聖賢生生所參見諸善知識家中衣  
鉢道友師僧父母一切恩門一切含靈為便是自然  
而至為復是從功而成諸人於此會得去山僧不  
解說若也不會曲勢速說擊拂子云所以前釋迦不  
前後彌勒不後無邊剎境自他不隔於毫釐十世古

今始終不離於當念，一毛頭上現寶王刹，一彈指頃轉大法輪，雖然如是，猶是變化門中事也。向上宗乘事又作麼生？又擊一拂子云：有意氣時添意氣，得風流處且風流。佛誕生上堂本，不曾上天，何論下天？本不曾託胎誰說，出胎所以道淨法界身本無出沒，既然如是，因其東家杓柄長，西家杓柄短，會得各各惡水尋頭沒，不然齊之以禮。結夏上堂五祖曰：今日結夏無可保養，大眾作一家宴，管待諸人。遂舉手曰：羅漢格羅囉遜羅囉遜，莫怪空疎，休惟珍重。拈云：五祖老人與麼宴宴，可謂管待十足百味無欠。雖然如是，只是有一轉之機，伏太極今日結夏也。有僧家宴宴者，正者俱成，萬年歡見者聞者同，唱太平歌，且道其中誰拍又作麼生？以拂子擊禪牀，一下云：薰風自南來，殿閣生微涼。舉臨濟道：有一人論劫在途中，不離家舍，有一人離家舍不在途中，那箇合受人天供養？拈云：諸人要向者裏道取須向，那裏透過？若是人天供養，秋風吹渭水，落葉滿長安。花園上皇聞，超道義，詔入宮上皇著僧伽梨對坐上皇曰：佛法不思議，與王者對坐超曰：王法不思議，與佛子對坐上皇動龍藏，玄談移時，皇情大悅，特賜興禪大燈國師之號。後

醍醐帝恩寵益渥，超因進法語一篇，上亦賜偈曰：二十年來辛苦人，迎春不換舊風烟。著衣製飯恁麼去，大地那曾有，一塵一日有。詔就清涼殿，陞座上與百官親聽，提唱說法罷，下座乃奏曰：臣僧適來許多言說，歸什麼處？上指面前百丈頂相曰：大智禪師證明超曰：此外更無有人證明。麼上便豎起拳頭，超曰：舉麼則南山朝，北闕夜見明星，上瞬目而祇揖，超鞠躬而退。次日加賜高照正燈國師，并資養金線帛重，教舉大德寺相並南禪上利為祝聖道場，仍給莊田若干畝，以充香積。正中年間南禪虛席上三詔超堅辭不受，宰府都督司馬少卿蔡賴尚大夫請住崇禮，超以先師開法之地，忻然應之。住職一期，退院上堂，稱子從來無定處，天涯海角任情遊，一毫頭上解尋活，三教聲中出九州。徑歸大德室中常垂三轉語，示眾曰：朝結眉，夕交肩，我何似？生露柱盡日往來我，因甚不動？若透得箇兩轉語，一生參學事了畢。建武四年冬，示疾，召亨首座，叮囑後事。至臘月二十一夜，遣諸弟子曰：我滅後火化，置骨石於丈室，勿別造塔。翌日午時，欲端坐示滅，而因久患足疾，不能跏坐，首座復誚之，超竟以兩手撐足，而左膝傷折，血流，淚衣

乃書偈曰：截斷佛祖，吹毛常磨，機輪轉處，虛空咬牙。擲筆而逝。世齡五十六。法臘三十四。遵治命奉靈骨藏丈室中。賜額靈光。時清拙澄公住南禪，聞其遺偈，嘆曰：不意有若明眼。宗師恨生前不會面，欲赴茶毘處。有朝事不果，乃率大眾出山門，頭誦經，更遣清權

正清閣中

翁山二侍者，贈瓣香，帛祭焉。超氣宇如王，度視

諸方，自非龍蟠鳳逸之士，難為湊泊。嗣法者十有五人。有語錄若干卷。夜話記一卷。盛行于世。貞享三年，聖旨加謚大慈雲匡真國師。

贊曰：佛祖之道，有小悟焉，有大悟焉。傳妙理區中者，

日本書

本朝高僧傳卷之二十五

〇三十五

日本書

小悟也。出玄機格外者，大悟也。靈山拈華，唯杜多迦葉破顏微笑，佛即付正法眼藏。黃梅七百員，悉會佛法之人。獨盧行者傳信衣，此小大之分也。列祖以是定師資之屬，宗旨家若無此，秘豈得為最上乘之宗歟？大燈國師初數得，有後依大應，當禪鑰子。從前家珍一時擺盡。第五橋邊長養沈，蘊殆乎二十年。與乞巧厲人將終其身矣。暨於神人推出，開龍寶山，氣吞佛祖，眼蓋乾坤。雖時值亂世而危言危行，喝雷棒雨，天轟地裂，生為帝者之師，沒受良匠之證。茫茫宇宙之間，復有幾居人耶？實是虛堂的骨之孫，大應克家。

之子也

本朝高僧傳卷第二十五

音訓

義虛宜切 媯古華切 禪丁括切 鐸達各切 桔上各切 棹上各切

下姑卑切 卑現然切 澶呈延切 索音各切 鉗上其廉切 鉗下直追切

日本書 本朝高僧傳卷之二十五 〇三十六

禪蒲開切 鉗音各切 攪古巧切 劄音各切 頑五還切 瑯音各切

朱綠切 雙將光切 鬚上步勝切 峻上離呈切 科上離呈切

青案切 疥在殷切 菟上土故切 嶂知亮切 簪上離呈切 科上離呈切

度也下於切 頰古協切 砥諸氏切 瓜上各切 領上各切 領上各切

京切冠索切 頰古協切 砥諸氏切 瓜上各切 領上各切 領上各切

切項切 頰古協切 砥諸氏切 瓜上各切 領上各切 領上各切

色精細切 澹上徒藍切 霍忽郭切 膠居有切 煎居有切 煎居有切

觀七惠切 頭之勝切 頰都困切 蔽必弊切 排步甘切 排步甘切

較古教切 忒惕德切 揭都揭切 蛟居有切 因因切 因因切

悶其困切 抗口浪切 貫失類切 鉗音各切 鉗音各切 鉗音各切

鑾上郎旬切 穿去弓切 檣上各切 檣上各切 檣上各切



種 供 骨 切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑲  
本朝高僧傳卷二十五 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本雜述

本朝高僧傳卷之二十五

〇三七 止

本朝高僧傳卷第二十六

濃州盛德沙門 師鑒 撰

淨禪三之八

京兆南禪寺沙門楚俊傳

釋楚俊字明極元明州慶元府黃氏子母李氏感神光香氣而誕性姿閑雅不好戲弄幼入鄉庠誦課強記殆冠倫輩雖處富貴之宅厭汨塵俗年甫十二投靈巖竹隱喜和尚別髮受具學出世法久之辭去參橫川瑛禪師於玉几峰昕夕研精兼餐食漸歷歲時有所私淑聞虎巖伏和尚旺化於冷泉特懷香入室一日昂問曰是甚麼俊拱而前曰和尚莫騎某甲好巖曰未住更道俊曰某甲無待者祇對和尚巖休去因俛服待香既而屈天童掌藏鑰於止泓鑒公會裏出世金陵之奉聖焚香嗣虎巖繼選瑞巖普慈二寺解印發之雙林而徑山靈隱天童淨慈皆以第十座聘之所至諸刹包笠填門爐鞴宏敞至順庚午俊年六十九應書幣東渡當元德二年矣乃入上都後醍醐帝聆異邦名德召宮帝問曰梯山航海得得來和尚以何度生俊曰以佛法緊要處度生帝曰正當恁麼時如何俊曰天上有星皆拱北人間無水不朝

本朝高僧傳卷第二十六

○一

本朝高僧傳卷第二十六

○二

東帝大悅明日遣中使賜佛目隱慧禪師號勅建攝之廣嚴寺為第一代續抵相州平帥高時請住建長觀新兩班上堂百丈已前無住持事也無兩序之稱亦無進退之說百丈已後古風漸散法出姦生選賢擇能量才補職以宗眼明戒行潔者為住持謂之長老以參請多叢林熟者歸西序謂之頭首以廉於己世法通者歸東序謂之知事匡持法社左輔右弼可謂至矣盡矣無以加矣逗到末梢無賢可選無能可擇不陳其力而就其列者往往有之以故叢林凋弊佛法陵陷沒可傷歎建長今日選賢中之賢能中之能列為兩序雖未見其設施亦是可觀標格何以言之古者道龍得水時添意氣虎逢山色長威猊果然上堂天上月圓人間月半佛手驢蹄日面月面攤向大門前打鼓普請看展開兩手云薦俊住持二載退靖雲澤菴不幾應府帖再住建長湖海雲霧需著山中看檀越華律為禪名報恩寺請俊為開山祖陞座祝聖罷乃云馬鳴龍樹共稟釋迦之道而執空執性故派其源南能北秀皆傳達磨之心而分頭分漸故殊其軌佛祖本同風謬分禪教律禪是佛之心教是佛之語律是佛之行有偏有圓有半有滿有漸有頓

豈可一而言之耶若欲一之須是禪定了悟則佛語  
佛行自然蘊攝其中又何必標顯而特出耶若只依  
文解義徒自疲勞執法修行自取纏縛欲了自心雖  
年夢見以故達磨西來傳佛心宗初到梁朝便言不  
立文字直指人心見性成佛斯語甚當修心爲緊明  
心爲最其餘語言戒行皆是外邊之邊緒餘土苴之  
事不見西天九十六種皆是大修行人只因心外有  
法故曰外道心法最難明亦復最難見以心照境但  
見境不見心以境照心但見心不見境心境雙照心  
境雙忘自然見性成佛這些道理名不得狀不得直  
須自了自悟方可縱使神機提出妙用縱橫也出這  
些道理不得直饒將五須彌山擎向手中將四大部  
洲頂在頭上向滾滾海底徐步而行向高高峰頂獨  
足而立也出這些道理不得直饒拈占波國與新羅  
國鬪額拈一莖草作丈六金身用向一毫頭上現寶  
王刹華嚴樓閣涉入無盡向一微塵裏轉太法輪大  
藏教文詮註不及也出這些道理不得且道這些道  
理有甚麼長處有甚麼奇特慧拈拄杖卓一下云若  
無舉鼎拔山力千里爲難不易騎喝一喝不幾奉詔  
遷洛之南禪建仁釋氏宿願儒宗傳彥望風而至以

日本漢文史籍叢刊 第三輯

○主

日本漢文史籍叢刊 第三輯

○附

建武三年九月二十七日寂于建仁方丈辭世頌曰  
七十五年一條生鐵大地粉碎虛空迸裂七日闍維  
得堅固子無算五色璨然門人併爪髮分藏於雲澤  
長在建少林在南二塔閱世如頃僧臘六十有三嗣法  
神足六人皆分據大利有支那日國九會錄行于世  
明天台國清禪寺文懿大師夢堂靈公銘其塔焉  
贊曰猗慧禪師在元董歷定林龍峰四刹爲人天衆  
豎拂拈錢年垂古稀爲弘道而來雖時孔艱願輪不  
撓以臘德共邵夷華悉靡風面壁九年能事云畢自  
非容攝三世十方於屋裏點發九流百氏於毫端豈  
能至斯耶

### 相州壽福寺沙門道泉傳

釋道泉號秋礪獲佛源之記後依熊谷偃公于相之  
禪興典藏鑰結制秉拂後出世相之壽福有寫照自  
讚曰松源正脈佛眼的傳秋礪無底波浸青天全體  
恁麼參得如何失卻半邊

### 洛東華頂山沙門良真傳

釋良真號無相不知何許人依一山國師甚久山命  
分座接納名播叢社而性沈靜無意應世及山滅後  
蒼居洛東華頂山請方以名利請之擲檢不應過年

七十操履不撓。炷香清坐。誦法華經。以爲日課。寒暑不輟。終六萬部。至於慕道之士來叩。禪要機辯捷疾。不啻陳迹。議者以爲有老隱山之風標。而兼陳尊宿之作略。移居法樂。清拙和尚贈偈曰。七十年頭心已受。隨方去住似雲閑。又攜華頂千重翠。藏向深深清。水山晚返華頂。靖退操行始終如一。曆應二年二月十日晝。偈畢。蛻然化去。真常感天童持齋俱酒掃庭內。其地至今。艸不生云。

相州圓覺寺沙門通川傳

釋通川字東峰。不記姓氏。邠州人。大休念禪師之高

弟。初住龜谷。後移鹿山。法令嚴肅。學者望。晚移鹿山。利濟蒼生。其戒度。跣坐書偈。曰。太用現前。不存規則。此是什麼規則。上天堂。入地獄。卽時脫去。春秋七十九矣。

相州建長寺沙門慧日傳

釋慧日號東明。俗姓沈氏。宋明州定海縣人。自孩兒時。志幹清爽。九歲投奉化大同寺爲童侍。十二祝髮。十七稟滿分戒。參直翁舉和尚於本郡天寧。一日翁以空劫已前自己話。徵詰。日返覆酬對語未竟。翁卽棒出。翌日詣室問曰。空劫已前。自己和尚意作麼生。

翁曰。爲我將蒲團來。日遂過與蒲團。翁纔接卽打。日當下契悟。尋典侍香。辭遊天童。西渡。經靈隱。萬壽。蔣山。一時尊宿優賞待接。後族姑蘇掌藏鑰於承天。又東歸。開法於明堂。白雲寺。辦香爲直翁。拈出一居六載。海衆歸風。至元戊申。屬日本書聘。明年東來。當本朝廷慶二年時。歲三十八。繼入相州。副元帥平貞時請住。禪興乃受戒。執弟子禮。崇信且腆。是歲臘八。平帥請陞座。日拈香曰。此香太悲願力薰成。開示悟佛。知見釋迦老子成道之辰爲菩薩戒。弟子崇演焚向寶爐。普爲法界衆生同伸希有之慶。就座問答罷。乃

云。子夜逾重城。明修棧道。午夜觀明星。暗度陳倉。釋迦老子只知入艸求人。不覺通身泥水。諸人若向者裡薦得無。一時不是。諸佛出現底時節。無一時不是。諸佛成道底時節。無一時不是。諸佛說法底時節。無一時不是。四聖六凡各各得度底時節。乃至無一時不是。山河大地。草木叢林。呈祥瑞。現瑞底時節。若也。一見得。個儻分明。非唯令法久住。亦乃不孤負太極。那金湯外護之志。其或未然。金雞未報。家林曉隱。隱行人過雪山。山復舉。大覺世尊臘月八夜觀明星悟道。乃云。奇哉。奇哉。遍觀大地衆生。具有如來智慧德相。



但以妄想執著不能證得最初爲五比丘轉四諦法輪拈云去妄想而取智慧德相取捨之心未忘安能證得山僧達蒙大檀那自唐請至佛成道日命轉最初法輪其最初得度者麼良久曰花須連夜發莫待曉風吹登歲平帥請還圖覺上堂有時靜悄悄有時開浩浩開浩浩時打失自己靜悄悄時翻成寐曰二由二有一亦莫守擬欲藏身北斗中應須含掌南辰後一住七年東關禪客旁午請謁日就寺之隴西卓白雲菴爲靖閑所府帖累至歷住建長萬壽東勝壽福垂三十年引接海衆始終如一聲達于丹墀建武

日本書紀

本朝書紀卷之二十六

〇七

馬已

不止乃書曰六十九年有生有死古渡雲收青山在水擲筆而逝卽孟冬四日卯時也世壽如偈法臘五十三門弟子昇全身瘞于本菴塔曰太明有七處卜一會諸元國天童雲外岫禪師跋之

贊曰洞上之宗興於授子青焉芙蓉楷續而愈盛丹霞淳受而卽制真歇了宏智覺兄弟回互出於宋朝君臣道合正偏位序真歇之法永平元公承如淨而歸宏智之禪東明禪師傳舉翁而來矣爍爍東明師歷任六大利堆然接海衆其體裁布置隨時應機如弄春花似向新月吾欲讀東明師之道馳書不到家

日本書紀

本朝書紀卷之二十六

〇八

馬已

### 賀州傳燈寺沙門運良傳

二年秋後醍醐帝下敕爲朝廷上堂日乃陞座祝聖聖躬曆應三年以府命復住建長爲第五登焉夏六月示微恙退居菴中繼白問訊者需法語眞讀者晝夜接武填門日酬酢如常執筆無難色十月朔病至彌留親製檀那故舊遺書二日夜漏將盡問侍僧曰塔已成否曰已成日曰畢竟事作麼生侍僧無語首座別源出衆曰青山白雲日曰我去也首座曰和尚要那裏去日登拳示之首座便禮拜日曰你見箇甚麼道理首座曰三十年後有人舉在日曰則得你錯舉侍僧視其神色具紙翰請遺偈日揮手卻之其遺

釋運良字恭翁不詳姓氏鄉邑或曰羽州人生質頤然神慧陳明一切文字不假師訓而通曉受業於本州玉泉寺了然明禪師十九歲登壇受戒萍遊參瑩山瑾公于洞谷盡得洞上之旨當授受間竊自惟曰禪若有傳授豈佛祖自證自悟之法乎去謁法燈國師于鷲峰燈示趙州狗子話良歸單下勇奮提撕從昏鐘至五鼓豁然大悟趨扣丈室將呈所悟私自念曰耆老和尚不可讓燈觀其來便曰除卻汝胸中劍

良不覺白汗浹背便問和尚八十二與某甲隔二十  
二是同是別燈曰同從此鍼芥相投親附數載燈燭  
曰子緣在北地遭十則止良抵南都東大寺聽戒壇  
院疑然講華嚴至六相義良屢問難然公以問出意  
表滯滯答釋就良問禪要良曰我佛祖單傳之旨豈  
義學者所能階邪然公請益不止良示以宗門關棧  
然公疑網頓釋乃作禮曰若不遇師安能窺見佛祖  
之玄樞良謂然公曰昔睿尊律師問禪於法燈有省  
因爲雲水建且過於戒壇院側而今不給願公興廢  
然公卽營之良尋如洛依南浦明和尚於萬壽浦因

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十六

○九

舉礪山末後句話衆下語不契良曰酥酪醍醐攪爲  
一味浦擊節稱善浦住相之壽福建長兩利良隨往  
激揚宗門公案浦徵詰其節角諸訛處良答無礙如  
包丁解牛浦稱衆曰乃是再來人也辭遊北地會賀  
州大乘缺主席瑩山和尚命良住持付以拂子應器  
檀施川臻學實雲華鐘鼓魚版一時改響視事一期  
衆中有六羣之黨嫉其盛化良不吝去留乃退寓白  
山之下真光寺時衆多染瘟疫良責土地神妙理不  
能加護投之於河不日疫止州民有覺圓居士崇欽  
良德捨山林田畝建梵刹曰瑞應山傳燈寺請良爲

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十六

○十

開山始祖洞濟包笠不期雲集隣民構寶光山興禪  
寺延良爲一代良後往越中屈放生津偶聞羣兒戲  
曰十文字河邊出遊忽憶法燈之識架茅而居四方  
歸者如市大化寶坊興化是也又開梵率寺二利相  
並堂宇翼翼焉徒說說良每陞座演法則破諸方邪  
解死學者偷心預其會者靡不虛往實歸縉白翁然  
攝風如侵曇華一現於世也良又以丹青作佛事嘗  
畫大悲像自製讚辭藏諸賀州大野尼寺一日寺火  
而像不壞遠邇歎異曆應四年八月初示微疾至十  
二日剃浴更衣垂訓衆僧付囑後事書偈而化報齡  
七十五夏臘五十六火浴烟氣所及獲五色設利諸  
徒樹塔曰大光旛室曰常寂後光嚴帝敕謚佛慧禪  
師後小松帝加謚佛林慧日禪師良在日每出野遊  
驚鷺一羣飛鳴隨其後一日蟋蟀羣飛至前良叱之  
變成舍利良所剪爪髮所墮齒牙皆現舍利若綴金  
粟時人號肉身佛竟率回祿火勢甚急將逼於良之  
塔俄見神人數輩注瓶水於烟焰之上而塔無恙異  
迹孔多不遑悉記所著述作有正法眼藏語禪戒正  
傳血脈相承說見性鈔并語錄若干卷

贊曰佛林禪師究曹洞玄妙得臨濟正宗其心地之

明也如日月照三千世界乾坤之內宇宙之間何物有所隱其影耶種種妙用種種靈驗亦是自大覺中所派出也夫睿尊凝然者律苑雜華之英傑及二聞禪要致誠破疑非具信根焉能至如斯耶余逢戒壇院主尋旦過寮之事主捐其收有舊疆之跡勸作茂卿因自歎惟昔者禪教共信實底人故皆有得益今也自他之宗人我山峻互執矛盾吁古人之風日以盡矣痛夫

越前淨福寺沙門總覺傳

釋總覺自幼齡侍兀菴寧公於建長後入支那遍歷

日本集 本朝高僧傳卷之二十六

〇十一

叢社歸參佛源禪師於福山提持趙州狗子無佛性公案偶閱大慧法語至不壞世間相而談實相有信入處趨告佛源源呵之曰不見道從門入者不是家珍一日源上堂舉狗子話曰不得作有無會但直下提個無遂高聲曰無覺聞得豁然大悟源爲之助喜付衣印可擢居第一座於是聲華四著越前檀主某創淨福寺招覺爲開山祖大開化門多歷年所卒

三州願成寺沙門圓慧傳

釋圓慧號可菴世姓藤氏尾州海東郡人也母源氏初以無嗣禱州之甚自寺觀自在像一夕夢懷佛衆

衆而孕生於文永六年豐上短下天質不凡幼穉有老成之智及八歲父母憚其處俗投郡教寺習天台教未歷幾年三藏名目皆能強記十三父惜其偉器棄教歸禪依實相寺應通禪師剃具親炙數載洞徹本源應告曰子年尚少須涉獵諸宗馳聘百氏以輔龍大道行矣毋滯於茲慧乃往南京周歷講席肄三論唯識華嚴等又登睿山質八教之旨兼受密灌宿學咸推許之永仁四年慧年二十八南遊元國歷參江浙之諸刹十有三年以延慶元年歸來省應通時實相爲龍象淵藪通命分座通臨遷化親授從上佛

日本集 本朝高僧傳卷之二十六

〇十二

祖相承之圖以爲信印檀越總州太守源滿氏

吉良氏

請慧補實相席住持四禩揄揚玄風四衆歸心慧築寶珠菴爲退靖所又寺南一里有靈地曰巨海初吉良長氏夫人本成太師厚信佛乘建願成寺爲般舟道場太守源公革爲禪林繕修全備延慧爲開山祖慧不自任奉先師應通以爲始祖自居副貳準應通開實相而奉聖一國師以爲開山也住職未久感微疾沐浴更衣端坐文室索筆書偈曰平生活路七十五年金剛眼目只對吾禪少頃而逝康永二年十一月初六日也世齡如偈法臘六十門人檀越等罔全

身於本山樹塔曰覺場朝廷追褒其德應永丙申秋賜諡圓光禪師其塔上銘南禪東漸易公撰余昔遊願成寺自寫銘文今之傳援證而據焉

京兆建仁寺沙門慈照傳

釋慈照號高山洛陽白川人俗系管姓丞相道真公之裔孫也二歲喪父稍及齒生母源氏試使讀書能通大義十一歸心空門誓不茹葷十四白母出家禮淨土寺觀闍黎削髮學天台教馳聲講場拜戒壇院示觀律師登壇具戒自爾誦念法華等諸大乘經及行業八十一事已盡形壽未嘗怠變慕佛心宗參法

日本書

本朝高僧傳卷之三十六

〇十二

燈國師于鶯峰燈問汝名甚麼照曰本名心鏡燈曰何不呈似老僧照畫一圓相曰請和尚鑑燈曰百緣碑隨侍六載悟徹本源一日呈百丈野狐頌燈見而印可去謁白雲曉公於東福機語相投見南浦明公於洛之萬壽浦問學者未得入頭時如何照出眾曰逼犬透牆浦稱異侍香職滿東下謁高峰和尚於相之萬壽峰又問學徒得入頭時如何照曰開口見騰峰大器重參寂菴昭公於壽福菴素聞其名命居擇木寮繼掌雙輪則跡建長圓覺兩利隨雲西禪寧一山一挨一拶追琢金玉紀之大慈虛席諸山舉照使

者三返堅卧不起檀越勤舊百計請之不獲已而應命辨香嗣法燈如喝崑聰肯山悟固山肇大道以緇林英傑皆歸推下辨諸職一時之盛事也常舉釋迦彌勒猶是他奴他是阿誰學者下語未嘗首肯遷泉之香山洛之妙光紀之楞嚴報恩長樂鶯峰而大雄龜山興禪海藏延福福城等皆徇檀請為開山始正也再住大慈三十餘年始平如一日左武衛將軍源直義以洛之萬壽缺主庶擇住持人南禪虎關鍊公建仁嵩山中公天龍夢憲石公稱照充選照住僅兩月廢者共興俄承旨遷建仁移東海源公補處萬壽

日本書

本朝高僧傳卷之三十六

〇十四

兄弟相倡如鼓瑟琴法燈之道此時鼎盛曆應三年六月太早敕輦下諸宗法雪七日無効源直義奉旨命照祈雨期以三日照默坐丈室至二日夕雲騰大雨返適周給咸稱道力之驗住職一年乞還故山河內太守橋公初寺西浦曰楞伽山寶壽寺請照演法南都興福寺眾僧胥議曰昔吾第三祖道昭法師發足南遊參慧滿禪師於隆化寺傳佛心宗受楞伽經四卷又謁玄井法師於福光授西天戒賢論師衣鉢且囑曰他日此宗盛化東方今始於汝法師歸朝大弘法相宗為慈恩之初祖焉嘗記我歿後六百歲有



一肉身太士名慈照者於吾生地初寶壽寺與佛心宗歲數既符高山禪師適此說法異哉乃專使齋讚奉賀其與先德密契毫髮無差非乘願輪能若是乎康永二年秋八月訪舊山之主可翁然公會諸山耆宿歛雷熏爐茗椀彌月而不忍別十月返楞嚴十二月十五日示疾十九日夜半山岳震動鳥獸悲號寺衆莫不驚懼照謂左右曰吾行之徵其在自在天神閑忌之日至二十五日戌時沐浴剃髮趺坐訓諸徒訖索筆書偈曰呵佛罵祖七十八年末後一句臘雪連天擲筆而逝享年如偈法臘六十四門人遵命還靈山停龕七日如法荼毘烟氣所及兩舍利如菽備五色平居無恙時爪髮齒牙皆綴設利弟子無塵不與喪會後來涕泣就茶毘所求之七日遂得精瑩如珠者三粒拜頂奉持照前後住山四十餘年衆未嘗富斯須去體衣鉢之外不蓄利物檀嚙資具盡納常住與衆作息住名藍十有三所嗣其法者二十餘員嗣度弟子二十餘人受戒者不知其數分設利塔于東山鷲峰之靈洞及太慈龜山寶壽敕誡廣濟禪師上足約菴久公蒙照行狀入明請天寧楚石琦公撰塔銘資善大夫周伯琦篆額

贊曰靈山八萬之衆歸釋尊者欲學以似天人師也故得佛之一體各階聖位焉三千之徒服孔子亦復然法燈國師道行一世承其心印而揚化四方者十有五人矣就中廣濟禪師悟證之粹也定力之靈也於國師之道貌具體而微非翹外其堂而能入室也又應道昭師六百之懸記異乎哉

京兆建仁寺沙門竺源傳

釋竺源字東海姓滕紀州人母夢懷日輪而誕童役法燈國師十四剪髮稟戒責己參決既及雲遊參無關門公於東福相羊久之侍南院國師于南禪充記室及藏主冬節兼拂龜山上皇臨筵聞提唱幸寮顧問一衆榮稱西欄雲公主圓覺日平即招源以典藏職滿謁約翁儉公於建仁掌箋翰及翁移建長登居後版歷遊江湖銓補要職建武末紀之誓度寺虛席光嚴上皇降敕住持辦香證法燈之嗣同門與議董鷲峰席尋以公選領筑之聖福解印至京師帝召廷問法特賜綸旨再住聖福又有育外洛之萬壽建仁共揚法燈之道晚年退居洛西妙光一日示疾門人請進藥源曰老病不可醫只待死耳臨終遺誡書偈安然歸寂時康永三年十月十六日也世壽七十五

法臘六十二闍維坐具數珠不壞諸徒收石髓并不壞者瘞于東山東北隅建寧堵波扁曰寂光菴曰太中敕謚法光安祇禪師

### 相州建長寺沙門素安傳

釋素安號了堂不考姓氏筑之博多人至年十三禮同原本公於州之保寧披削稟具參訊久之一日辭原原曰何處去安曰參方去原曰參方事作麼生安擬開口原便打安忽然開悟去遊相州謁西禪雲和尚于圓覺禪問甚處來安曰鎮西禪曰見阿誰來安曰卽今見和尚禪休去禪常對衆稱之東明日和尚

本朝高僧傳卷之二十一

本朝高僧傳卷之二十一

○十七

董建長延安居第一座海衆肅然名著叢林紀州太守源國清島山景仰其德執弟子禮部下諸士罔不歸心相州城西建法泉寺請爲開山祖又創吉祥寺於豆州延爲第一世越州檀越某氏開長禪寺遣使致之後應諸山之選歷遷東勝壽福建長三大刹所至侯伯宗信檀施充牣安不私一芥悉備修補晚構寶珠菴以退靖延文五年十月二十日聚徒謂曰汝等勿徒送歲月以扶起法門爲務誠訖而逝闍世六十有九坐夏四十有三茶毘數珠不壞現設利數百粒塔于本菴勝曰如意賜謚本覺禪師

### 相州圓覺寺沙門道通傳

釋道通字大川史失其姓牒佛源禪師東渡以來從侍參叩省發己事又通外學出世相之壽福後移圓覺二刹住持提唱無缺有題東漸寺作曰山圍平海小坤維曰鳥衝潮映落暉空盡十霜飄泊恨水天上下碧琉璃曆應二年正月受建長之請未及入寺俄然示疾二月朔日化於鹿山卧龍菴辭世偈曰未後一句始到牢關不墮凡聖潭北湘南

### 丹州高原寺沙門祖雄傳

釋祖雄號達溪丹州冰上郡佐治莊藤光基之子在孩兒時識量曠等年方舞勺無意世緣宅邊有古松樹盤結如蒲輪雄每踟躕其上父知其駿逸不可繫許俾出家十九投一山寺落髮受戒歷涉諸刹德治元年入元參天目山中峰禪師勤侍十霜密得心印并禪門戒法一昔峰夢日本丹州一山形似天目上有盤石安觀音太士像明日圖以召雄詢之雄亦同夢峰曰子於此山緣已熟矣當亟歸雄曰和尚年尊何忍遽違復畱三載得萱堂之書乃理歸楫峰以自譏頂相異之延祐丙辰離天目山以本朝正和五年著筑之冷泉津時有鄉僧來殺母氏之喪雄乃懷

筑之巖穴。經十餘載。後還粉榆。擇卜一處。宛如所夢。  
結茅宴坐。四方禪侶。逕山溪至。漸成叢席。號瑞巖山。  
高源寺。名達九重。屢蒙寵錫。一日設齋會。諸檀越道  
話快活。齋罷。徧告永訣。援筆作偈曰。悟了生死。五十  
九年來來去去。白日青天。置筆脫蛻。實康永三年六  
月二十七日也。世壽如偈。法臘四十一。滿座緇白。歎  
未曾有。門弟子以陶器奉全身葬松樹下。築宇其上。  
勝曰。靈光雄平素垂誡曰。於我滅後。不可畫肖像。安  
牌也。嗣其法者。了菴悟公一人。

贊曰中峰和尚坐禪子嚴掃除自己閑枝葉不打諸

方爛著麓其自晦之風高于一世雄公入其堂與  
寒冰焉不出大方端居高源終一生涯誠哉斯父乃  
有斯子也矣

野州神護山興禪寺沙門妙應傳

釋妙應字真空印心於佛國常爲典座每日齋畢盥  
漱食滓躬在寮內溫煮資益畱自一分給與丐者或  
譖之佛國曰典座別炊香飯國往物色始知其言之  
誣而對衆稱之一衆欽尚雲巖檀越土岐氏亡遺言  
曰請典座秉炬其子以啟佛國請應應便往墓所拈  
出橋木與杓子曰橋木直杓子曲投炬徑歸從此墓

典座之名宣于叢林後開野之興禪場爲第一世盛  
唱佛國之禪觀應二年十月二十五日逝矣

本朝高僧傳卷第二十六

育訓

汨古忽切  
沒也剔他歷切  
削髮也昕許斤切  
旦新明瞞謨官切  
欺也葵無來切

敵昌兩切 緊居忍切 拱居練切 些思遙切 擎聚京切

雕 朱惟切  
 彥 昆廉切  
 醜 逆各切  
 椰揄 上以連切 下雲俱切  
 鬚 計

切朋棧 鉅限切 偶儻 上他歷切 窠臼 上古禾切 難 乃

本朝而傳傳卷之二十六  
○子止

醅上  
 下  
 屋務  
 各切  
 擊吉  
 瘟上  
 疫下  
 卒上  
 律下

也切終  
款留  
留上  
也苦  
管切  
梔  
同  
梔  
溪切  
俾  
使  
也  
委切  
卑

付與也切穀古厥切粉榆下雲俱切澄慮上直良切

也洋  
 澤  
 祖此  
 也切  
 可  
 居大  
 切  
 譖  
 側禁  
 誤切  
 也切  
 擣  
 盧同  
 研切

工  
千  
三  
五  
十  
公  
一  
十  
五  
元  
七  
角

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

木朝高作傳卷二十六 趙冀

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺  
知藏比丘 藏

本朝高僧傳卷第二十七

濃州盛德沙門 師賢 撰

淨禪三之九

京兆南禪寺沙門師鍊傳

釋師鍊號虎關俗諱藤姓平安城人父左金吾校尉母源氏俱有賢行事佛甚謹產三子鍊其季子也生于弘安元年四月既望伏犀插額駢齒疎眉穎悟出羣幼好讀書日記千言時號文殊童子而性多病母慮成勞奪卷浚藏搜索讀之八歲依寶覺和尚於三聖寺覺一見喜曰是誠千里駒也十歲祝髮具于

本朝高僧傳卷第二十七

○一

○一

唐山戒壇歸侍寶覺覺不加策勵嘗曰北溟之物遠其目化鰲耳覺授起信論明日俛其背讀不謬一字覺大駭異之覺一日上堂鍊出衆問如何是正法眼藏覺曰破沙盆鍊曰休將常住物作自己受用覺曰打紳唯要蛇驚鍊曰忽化龍去時作麼生覺曰擎雲履鍊時年十四叢林傳以爲奇諱鍊知明教高公參禪超悟之外兼有警悟之才心竊慕焉覺見其志趣指謂人曰與吾道者師鍊也所應者吾老不及見焉正應辛卯秋覺順世前一年以青袈裟一頂託侍僧曰以付師鍊既至遊方依規菴圓公於南禪參桃溪

本朝高僧傳卷第二十七

○一

○一

悟公於圓覺踰年歸洛謁名緇碩儒差別奧義竭其餘貫又參無隱一山約翁是皆命世宗師不輕許人咸以傑出憚之年二十餘二歲聖教諸家語錄及九流百家本朝神書單籠漁獵靡不記誦嘗謂今時此方庸流奔波入宋是偏遺國之恥也我其南遊今欲知國有人正安元年將浮海母氏強止之又遍歷東西者二十名聲轟於天下正和二年前寓居城西巖城後伏見帝詔館鍊於河東歡喜光院屢問法要明年梅坡道人就白河側剏濟北菴招之鍊掩室謝事專以著述爲務文保二年勢州檀越師亨居士創本

帝遣門下侍郎藤經顯勸修臨法筵鍊至三門云相



部空宗一百十二總持正受八萬四千無言額云  
好個太平興國南禪上堂畢誦謝恩帝問教外旨  
奏對稱旨夏五月詔講所著之十勝論鍊排斥諸家  
獨歸心宗詞辯如建瓴帝益知禪法之邁他家崇信  
日厚於是繼自瞻仰如佛祖出興於世五月旦上堂  
結夏已半月水牯牛如何溪礪東西足水牯不妨隨  
分納些些結夏已半月寒山子如何縱步山巔兼水  
際煙雲風月長吟哦與麼告報猶落舊窠新鮮巧妙  
一句如何文犀剌剌穿林筆翠鑿田田出水荷開爐  
次日衆請普說曰人之心剎那無不在境上而不知

日本漢文

本朝高僧傳卷之二十七

○王

境即心矣蓋萬境皆六塵也六塵寧離心乎是不知  
心境一如故耳古人云未有無心境曾無無境心之  
謂矣然萬境之中心之所愛亦有之矣夏天之水冬  
日之火是所愛之切者也自今兄弟家當凜寒沍陰  
之時家家人人靡不有一爐火以爲境焉其向火時  
乞詳思察火之爲物也善治爲用不善治毀用昔者  
上古未有火焉燧人氏始出火烹飪以享上帝自是  
天下民知火食而免生食之患矣不啻火食也祭之  
重者岱柴也祀之盛者庭燎也夜寢之燈燭繼晷焉  
冬閣之薪炭迎春焉豈非善治之用乎燎原之不可

遏也燒城之不能救也既焚而不問焉庫火而失古  
寶寧非不善治之毀乎心亦如彼豈有異乎上古繼  
繩而治伏羲以來書契起焉道德仁義禮樂忠孝皆  
治心之善者也小以治身大以治天下君臣父子夫  
婦夷狄無不和睦不善治者反斯焉而皆世教而非  
出世之道矣我能仁氏以五戒十善治八天心心以四  
諦十二緣治一乘心以六度萬行治菩薩心八天之  
化及三界一乘之化及界外菩薩之化被塵刹治心  
之巨細可見矣我禪門之治心也亦有異焉君不見  
南泉與杉山向火次泉云不用指東書西本分事直

日本漢文

本朝高僧傳卷之二十七

○四

下道將來杉山以火筴插向爐內泉云直饒如是猶  
較王老師一線道是朋友之中質治心之切者也諸  
人且道指東書西與火筴插爐爲同爲異南泉之道  
較一線道爲縱語爲奪語若能檢點得出治心之明  
効也又不見百丈問潯山看爐內有火也無山看了  
來報云無丈躬自至爐邊撥得星火乃挾起云你道  
無這個潯山乃契悟次日丈同山入山作務丈云還  
得火來麼山云將得來丈云在甚麼處山拾一枯柴  
吹二吹度與丈丈云如虫蝕木是父子之中質治心  
之切者也諸人且道潯山之撥火與百丈之撥火爲

高爲異，馮山之吹枯柴爲有火，爲無火，百丈道如虫蝕木，爲褒語爲貶語，若能檢點得出，爲治心之明効耳。凡禪冊之中，此類多矣。若能著得一隻眼，皆是治心之要術也。又有一於此，雲門大師示衆云：「阿耶耶，新羅國裏打鐵，火星燒著我指頭。」自代云：「非但指頭，諸人且道。」新羅與大唐隔萬里，滄溟火星爲什麼燒雲門？指頭又爲什麼？自代語言非但指頭，想這跛脚阿師被全身燒却，不然何言非但指頭？唯此新羅國鐵火星終日燒你諸人指頭，你何不覺不知？若能覺知，不但指頭，雲門是知痛痒底，漢故曰：「不但指頭。」

日本書

本朝高僧傳卷之二十七

五

頭自今諸人行住坐臥，覺得火星痛痒，也得從前諸火雖儒釋禪教之異，皆一火也。只其所治不同，多皆施於爐邊，獨此火星春夏秋冬二六時中無不觸著。諸人只是知痛痒者，鮮矣。若能檢點得出，不爲閑向火人耳。四年辛巳，解南禪，即居海藏院。在東京康永元年，南主後村上帝崇其道，價賜國師號。二年甲申，光嚴上皇賜地城北，柏野鍊就建楞伽寺。貞和元年，大將軍尊氏源公具書幣聘，補建長辭以老病。鍊久患臂疾，一日剃浴跏趺坐，與衆永訣。衆涕泣乞，偶鍊以手不仁，不能作字，命侍僧書曰：「勿啓予手，勿啓予足，脫

體現成其人如玉，泊然而逝。實貞和二年七月二十四日也。世齡六十九。法臘六十。停龕一日，顏色如常。丞相藤公左武衛將軍源直義遣使弔慰，如法荼毗。五彩舍利如芥子大者，其麗不億。燦爛于灰沙中。門弟子併靈骨闕于海藏之塔。鍊性健而順溫，而嚴對人寡言。若語及支那扶桑之先言，往往行則便便，終日嘗謂衆曰：「吾自幼旁涉儒典，學綜顯密，皆有以也。汝等唯究心於祖宗，則善，不則非吾徒也。」又曰：「余正和已前，以書質心，正和已後，以心質心。」鍊比壯逢一山寧公于建長，雜儒釋古今書，細釋審詢，山因問本朝

日本書

本朝高僧傳卷之二十七

六

高僧事蹟，鍊不記者多。山曰：「公之博辯涉異域事，章章可悅，而至本邦事，頗溢于酬對，何哉？」鍊慙服其言矣。於是遍考國史並雜記等，著元亨釋書三十卷。其餘述作有佛語心論十八卷，十禪支錄二卷，禪餘或問禪儀外文各二卷，正修論禪戒規各一卷，聚分韻略五卷。又所著文集二十卷，名濟北集，其盛行于世。鍊傳迹甚多，具在其高弟龍泉淳公所撰之紀年錄焉已。

贊曰：吾國山川之倬，詭物產之魁殊，金銀銅鐵之外，珍奇衆夥，而非吾所歌美也。夫山有富士，僧有鍊公，

是吾之所瞻仰也矣。鍊公生稟天地靈粹，年登弱冠，八宗之奧祕百氏之經書卷帙，丹府鼓學海，波瀾照其清襟，賢乎出臨太刹，把佛祖鉗鎚，換入天眼，目常蔑視，皎宣寧而不屑，洪曇噩遂撰成釋書二十卷，爲本朝僧史之權輿也。至著宗門十勝論，諸家宗英問難鋒起，一當其雄辯，皆陣靡旗披。凡佛法東漸已來，集大成者無盛於鍊公也。然晚近義學有擬其書者，是猶如居塾教而度泰山，懷勺水而測滄海，不知己量者也。蓋以跡拾之，則雖遷固不能無疵，庶幾學者大觀而可焉。

日本書紀 本朝書紀卷之二十七

〇七

### 京兆南禪寺沙門宗然傳

釋宗然字可翁，筑前州人。童穉禮大應國師，圓具隨侍久，而稟許可。文保初，年偕叔室光鈍翁俊南詢入元首參中峰本于天目大謁，絕學誠元叟端古林茂，無見觀斷崖義等，請尊宿所得愈浚。在元十年及還本國出世，筑之崇福，一香供大應移洛之萬壽，建仁泉州太守某創長松山禪通寺，延然爲第一世住持。不久命弟子大用任公繼席，歸都奉詔升南禪道香發越雲衲，塵至然威儀嚴肅，脇不沾席二十年矣。諸方難之，又得丹青之妙，世人至今得之者靡不祕重。

晚年謝事，退居天潤菴。仁建貞和元年四月二十五日入寂。塔曰毗盧勅證，普濟大聖禪師。

### 京兆建仁寺沙門友梅傳

釋友梅號雪村，別號幻空。越後州白鳥縣源氏子，母須田氏夢吞南都東大寺大鐘，尋有僧來借宿，詢之答曰：我南都沙門衆乘也。覺即有身，逮生丰姿秀挺，夙緣所動，蚤慕梵法。禮一山國師於建長，服勤左右，苦學絕倫，稍長登壇受具，掛錫洛之建仁。參禪之暇，染指世書，特通莊子。年十八渡海南詢謁元叟端虛，谷陵東嶼海晦機照諸老，機鋒不讓昔期，以法器後登禪之道場。依叔平隆公命主經藏，至節秉拂初元，世宗欲略日本水軍不利，仁宗相繼將償先志，而以梅日本入捕而入雪川之獄，鞠勘萬端水火條治，不可具陳。坐逮叔平而然于獄中，梅及刑官加刃，怡然不愆。朗誦佛光禪師偈曰：乾坤無地卓孤竿，且喜入空法亦空。珍重大元三丈劍，電光影裏斬春風。刑官感伏，敷奏歸是，獲免名聞天下。然尚在獄中，次佛光韻演成五偈曰：百城煙水一枝筇，觸目無非是幻空。童子曾參無厭足，錢湯爐炭起清風。四偈既而朝議竄梅於西蜀，梅志不少屈，出函關度秦隴賦詠以見。

志其一曰函谷關西放逐僧生涯善以拙爲能千鈞  
解發離邊雀警落博風化海鵬其二曰函谷關西放  
逐僧黃皮瘦寒骨峻嶒有時宴坐幽巖石只欠空生  
作友朋餘八首及至西川大官鴻儒問道者多矣十  
年後蒙恩召還雷運長安二載忽思桑梓老母將理  
歸轍會文宗即位有詔董京兆翠微寺開堂說法懷  
香爲一山拈出繙白歡呼扇其德風帝特賜寶覺真  
空禪師梅傳叔平和尚次子獄畫肖像以記之無何  
解印還遊諸名剎天曆元年夏附商舶而歸時年四  
十矣未知母所在先赴相州經由比濱偶所乘馬蹶

墮梅墮瓦渾入路傷人家索水澣衣一老嫗自門而  
出睹梅涕泣梅問其故嫗曰我有一子曾出家一子  
還遊不歸今我老不及一面且暮倚門耳梅熱視之  
乃母也於是母子邂逅悲喜交集梅嘗藏一金意欲  
遺母恐盡飢寒不敢自用卽出以獻母因與母同居  
嫗諱奉養元德二年春抵鎌倉寓福山玉雲菴會信  
州慈雲庵原郡守金刺一了居士一山國師受衣弟  
子喜梅歸國懇請棲位清拙竺二僊製靴從史初夏入  
寺入境道合湖山改觀元弘元年秋神氏爲賴創德  
堂幸爲開山始建明年春有金吾校尉藤範秀小序

敬請住京西禪建武元年夏董豐之萬壽一住三載  
解印上京嘉遊城北梅尾播州刺史圓心居士赤松氏  
建大伽藍號金華山法雲寺招梅爲開山始祖曆應  
二年冬迎接宸翰寺額綸旨及諸山帖上堂空劫已  
前威音那畔滴水滴凍絕毫絕盡好諸禪德斬新日  
月特地乾坤把住放行有我無你只如奎章遠降列  
嶽讓高皇恩佛恩天長地久文經武緯國泰民安一  
句作麼生道近聞南嶽僧來說萬年松在祝融峰拈  
拄杖左邊卓曰寰中天子勅鐵樹花開右邊卓曰塞  
外將軍令本河伯發中邊卓曰佛日增輝法雲騰瑞

君子遠長小人道消正當恁麼時摩訶衍法隱即覺  
總自非必竟是何人所說良久曰當初兄弟相識  
還得龍門有幾人韋馱天點眼法華曰食輪轉處願  
轉堅金甲嚴身位屬天拈起香曰以此頂門開正眼  
萬年千歲照金田大將軍尊氏源公請以洛之萬壽  
梅辭不應竊遁掩關於良峰圓心居士自往城西排  
闥而入具陳源公之意不獲已而應居周歲退閑清  
水清住院貞和乙酉春有朝命住建仁寺凡所至實  
稱道俗瞻禮德音清迥山川增氣四大王應讚語曰  
分鎮須彌四角頭多生悲願在兜率豁開正眼輝天



地南北東西一點收只這一點在凡同凡如石含玉在聖同聖似地擎山理事圓融性相平等隱顯自在去住無方所以道昭昭於心目之間相不可觀是見於塵之內真不可求直得契理天上陰陽洗光域中日月轉萬機於造化和一氣於天倫至矣哉大矣哉妙不可得而言者也到這裏持國增長逞威神劍戟霜寒分明珠燦爛廣日多聞現通力等毫春動宇寶塔巍巍許多異獸既傾心無量非人能捧足縱使摩金鑲玉未免合水和泥雖然不離初禪帝釋宮且教儼立二世如來殿正當焦慶時現天大將軍身爲

法苑珠林卷之二十七

○十

詳說法利生還見度嶽嶺海嶽等知亡撥亂乾坤致太平貞和二生冬十一月梅寄香貴於石梁和尚塔頭曰法弟不久行脚兄忌在來月十八日我不能預故先忌設齋二十六日梅臨齋誦楞嚴咒至第五會燒香大展起立未定忽右手不仁朝廷賜醫并藥餌梅堅謝不受臘月二日早晨呼紙筆以左手書偈字畫不端憤然擲筆於屏上墨痕未乾泊然就化閱世五十有七坐夏若干歲二日火浴流堅固子無算煙氣所觸點綴如露珠而五彩璨然緇白爭取讚歎供養不預其會後日而至者至心懇求悉皆得之有語

錄并岷峨集四卷

贊曰余閱寶覺禪師提唱高格雄韻攢花簇錦及將臨刑不自作頌而誦佛光偈者夫白刃已揮時迅自閃電光當是時也雖長于文章翰林學士不能磨一辭矣然禪師不涉思慮誦以蔽末後句禪僧氣槩用得之奇自與佛光同一機杼非獨免其害却歆元帝之寵而住翠微道場特賜徽號輝華異域及歸本朝開一大刹董二名藍王都侯國隨貢接化是以盡心宗乘而見作家來也

相州建長寺沙門慧崇傳 慧崇

法苑珠林卷之二十七

○十

釋慧崇字白雲下野州人嗣法佛光禪師初住圓覺後移建長法規道義爲衆所尊晚還廣觀史菴貞和二生十月晦日無病而寂有遺偈曰人間逆旅來往如織久客即今歸去來清風明月興無極壽八十四勸益佛頂禪師又同門有釋慧堪字大用京師人受佛光之印住相之壽福不振家風構正隆菴休居養老貞和二生五月二十五日化辭偈曰諸佛凡夫不生不滅今日天風庭柏吹折賜諡靈光禪師

京兆西禪寺沙門旨明傳

釋旨明字石菴獲法辯訥公之證辭往相州請益諸

剎掛錫，福山居第十座。結制秉拂問答罷，乃曰：釋迦老漢二千年前張漫天網，喚作圓覺伽藍。西天此土，古聖先賢盡向者裏墜跟。禁娘生足，克九旬期，守蠟人水關，向上事拈拄杖曰：有個黑漆先生底無面目，漢時跳出來卓一下，曰：驀地掀翻通身依。舊刺葉上挂天下挂地，因甚怎麼靠拄杖？曰：風從虎，雲從龍。元亨初，右金吾藤範秀重興洛西檀林寺，金碧嚴成，革額西禪，招明爲第一世禪客。望風競請掛搭，明後住，相之長勝年久，取滅於寺云。

京兆三聖寺沙門師侃傳

日本僧傳卷之二十七

○ 七

釋師侃字愚直，歷參諸方，見地穩實。實覺禪師付以水紋僧伽梨，永仁間入元謁諸老宿及歸國，出世洛之圓通寺。次徙三聖，性好隱逸，嘗作偈曰：寂寞山房春又和，曾無人跡到柴扉。屋頭自有一溪水，洗盡多年兩耳非。臨終書偈曰：隨緣出生隨緣入，本來面目青山綠水。

京兆西禪寺沙門良緣傳

釋良緣號無著，久在一山和尚，鏖下得泯所知。又南遊入元謁古林茂一山，萬清拙澄等諸尊宿。凡在元二十餘年，及還本國，埋照鏤彩，以道自牧，暨乎清拙。

東渡住巨福，以有支那契分招居第十座，分化說法。檀越藤氏九請出世洛之西禪，拙作偈送之：緣禪規高古，諸方憚之。有集曰：新羅箭。

京兆南禪寺沙門居中傳

釋居中號嵩山，世姓源氏，遠州吉最縣人。年十九辭親上洛禮興聖，敬翁欽公剪髮圓具，去參無爲元桂堂林一老堂，謂人曰：看此後生志趣宏淵，異時必弘吾宗。又見心地白雲南浦高峰鏡堂無象，諸大老一山西礪開法，建長圓覺鏡堂作偈賀。二師來遊，副元帥平貞時命諸山和之，中亦預焉。軸成，平帥求證。

日本僧傳卷之二十七

○ 七

於西礪礪賞中偈曰：衆角雖多一麟足矣。平帥乃舉中侍客于巨福及礪，遷董掌內記，延慶二年春泛海入元。參日東巖于天童，替止不久，偕鄉友回依一山于龜谷龍山。文保二年再遊元國謁古林茂于永福，雲外岫于太白，後造蔣山住持曇芳忠舉居第一座。職滿見虛谷陵定山一靈石之獨孤朋東嶼海元叟端竺二元道中峰本歷扣離六寒暑所至靡不蒙辨議。至治三年秋東還出世洛西西禪，辨香嗣西礪居二載退休愛宕山應檀越請開精藍于丹之天橋。元德初年有詔補衆林精舍稱疾不起。元弘二年奉詔昇。

南禪英衲齊會明年秋帝召入內詢心要奏對稱旨  
寵光尤渥以何往播州卜居集雲峰未嘗月天下分  
崩劫賊侵疆中亦逃竄於丹丘大將軍尊氏源公敦  
請住建仁公及弟左武衛將軍直義入山問法諸官  
景仰中宏學淵才所作偈頌高雅可觀頌拄杖曰脫  
體分明活似龍黑漫漫地起威風等閑吞却乾坤了  
滿山雲山翠倚空題白雲和尚書寫梵語心經曰萬  
古標榜無字脚太虛空紙一毫端宗師手段人難測  
翻作西天梵語看一住五歲退居廣燈菴在建源亞  
相通冬中以中名聞于朝廷特賜大本禪師之號中

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十七

○上

末

固辭不受康永元年牛狗請董相之圓覺尋與建長學  
人隨高步晚年結瑞雲菴於鹿山側以居貞和二牛  
二月初六遘病書偈曰生於涅槃春行冬令將銷就  
銷仲和提景擲筆而化春秋六十九坐夏五十一闍  
維收遺骸塔于廣燈瑞雲菴曰圓照通冬不堪哀慕  
以徽號鎮塔下有語錄外集曰少林一曲

贊曰世之學伎藝者夙夜不勤焉則不能續其家法  
矣況包襄一世十方佛祖大法豈容易而悟之哉是  
以雪峰二登洞山九到投子後於鰲山店始得穩坐  
地非獨雪峰辛勤得之歷代祖師豈是皆爾中公初

參本朝十餘員名匠再入元國請益十利善知歸  
據華夷名藍接四海雲衲天子崇其德寵以嘉號畏  
避不屑就其行脚之眼與今時和明之僧玩文字知  
解逸居無事稱傳法者涇渭自分焉其號少林一曲  
者二百餘載之下教誰聞之

### 相州淨妙寺沙門妙詰傳

釋妙詰字大同不記氏族與州人也參佛國禪師于  
野之雲巖達穩密之地都下藤氏嘗聞其風建北禪  
曆應初於城北聘請詰為開山祖詰後歷遷洛之真  
改安國如相之淨妙解印佚老于建長正印菴臨終書偈曰

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十七

○下

末

末後一句透過牢關金鉞影動寶劍光寒

### 江州青蓮寺沙門道空傳

釋道空字谷翁尾州人幼齡入洛之慧日山拜一老  
宿創具就業老宿知是法器令其偏參空詣備前古  
備津宮祈逢明師夢神告曰汝往藝州必逢知識時  
白雲曉公踞應海山英衲趨風空徑往通謁雲不許  
掛搭空懇求三日第一座啓白昨來新到道心惇厚  
請和尚接納雲乃相見參請久之去謁南浦明公于  
筑之崇福浦舉靈雲悟道偈使空下語二十年來尋  
劍客空曰騎牛求牛幾回葉落又抽枝空口勞而無

功自從一見桃花後空日面自現在直至于今夏不  
疑空便喝浦曰是則是不肯承當得空舉坐具曰和  
尚能看浦領之空後住江之青蓮而終遺偈曰機先  
活路無來無去欲知住處泥牛哮吼

雲州華藏寺沙門慧劍傳 曇現

釋慧劍號靈鋒少從山叟雲公于東福削髮進戒生  
機俊捷承雲印荊去遊東關司藏於龜谷後歸京師  
居南禪第一座冬節秉拂達鸞輿幸寺聽其說法劍  
辯如懸水名馳輩下徇請出世播之法雲爐香供山  
叟謝事如雲州道俗崇信初華藏寺為開山始祖繼

本朝高僧傳卷之二十七 ○七

開數刹劍志操純淑生平慕永明壽禪師之風日課  
百八件事終身不怠云又有法弟曇現字瑞巖律身  
清嚴平日舍利現於首髮臨終說偈曰大悲願力示  
現生滅松風水月全機漏泄

播州圓應寺沙門玄素傳

釋玄素字大朴鈞叟江禪師之上足也元應閒遊元  
見中峰古林靈石月江諸名宿又依如菴千百丈知  
藏謁雲屋于智者分座說法宣宗聆其聲譽賜號真  
覺廣慧大師在元二十日而歸曆應二年如播州開  
圓應而居赤松圓心居士延以金華之新寺素讓於

雪村梅公後住豐之崇祥參學之徒凌海津集臨終  
據座示眾曰大用現前無途無轍長劍光寒虛空騰  
裂拈拄杖曰披毛也得作佛也得要知本後句麼乃  
擔拄杖而化實貞和二年正月二十八日也春秋五  
十九

贊曰曾子有言人之將死其言也善子路遇衛亂結  
纓而死世間法之士猶能用心如斯矧出世間之士  
至此可不正耶故先覺之謝世坐脫立亡據步臥倒  
各呈臨終之遊戲三昧也然而未有若廣慧大師墮  
座說法擔杖而化者可謂列聖堆中尤前絕後也

本朝高僧傳卷之二十七 ○十八

京兆南禪寺沙門梵僊傳

釋梵僊字竺僊自號來來禪子元之明州象山縣人  
世姓徐氏太父某為校官父應字景陽隱德不仕母  
歐陽氏生三子僊其季也六歲就學未一晷通韻書  
翻切聞人誦心經輒能記焉體貌清羸性惡葷腥父  
母視其無適俗胤方十歲投吳興資福寺別流源公  
為驅鳥十有八行枕之靈山依瑞雲隱公既得度牒  
拜其師虎巖伏禪師塔落髮稟具僊機鋒穎脫英氣  
逼人去叩諸刹首謁晦機照雲外岫景元端東嶼海  
止巖成中峰本諸老宿皆受優賞而以礙膺未脫為



憂有僧來自建康盛語古林茂和尚鉗鎚辛粹即杖錫省往適遇林座座一聞舉唱心地寥廓座下進拜問答往來林欣然許參堂示以已菴在禪果處襍妄想之話僊不覺汗流浹背無語可對一日遊湯泉偶聞大慧廣錄豁然開悟回通所悟林曰你前日因甚納敗關僊曰不敢林曰放你三十棒自此師資相契林曰你異時當大化於東方泊興藏清涼聲名藉甚道舊招以白龍僊曰我方問道其可爲入還東浙遊荆楚一錫去雷爲人所慕天曆己巳夏登徑山會明極和尚赴日本挽僊浮海以本朝元德元年六月達

日本書

本朝高僧傳卷之二十七

〇九

太宰府太守麻士迎館於大慶精舍州守大友直菴居士即欲以豐後萬壽寺處僊衆議曰師名已達幕府不可淹留于茲矣明年二月入鎌倉平元帥高時請明極住建長僊居第一座藤別駕高景欲奏住之南禪俾其嗣明極僊笑而却之直菴復以萬壽聘僊亦不赴正慶元年平帥以淨妙起僊高景峻拒平帥曰惟我命開堂日辦香爲古林熱向泊平氏獨頑源將軍尊氏弟直義相共敬僊爲其母夫人請迎私第供薦無虛日建武元年以付帖主淨智源公給金三萬地二千畝明年施天柱峰故址爲壽塔其地下瞰

日本書

本朝高僧傳卷之二十七

〇二十

大海絕類楞伽山僊樂其勝初楞伽院直菴之子吏部侍郎氏泰以三浦無量寺請僊爲開山祖曆應元年退淨智居東堂四年春奉旨住南禪朝廷身爲天下第十一刹上堂南禪無意上諸方院宰朝臣力主張合把虛空爲法座立將大地爲禪牀寶書曆應年中降檀越毗盧頂上行孰解出頭天外看霜鐘金鼓振高堂五年正月木雲菴災將延及本寺而止直殿行者法照執炬啓扇遽入門限恍見佛前第八位金剛飛下地上其狀如馳驚走以告一衆奔視則實在殿庭當其火起都人遠見出入煙焰之間而斫拔撲滅之者皆金剛力士也僊上堂曰金剛自佛前飛下地上藥巴於帝側嘆酒成都是法非思量分別之所能解何以故泥多佛大水長船高大將軍尊氏源公左武衛將軍源直義入寺齋僧請師陞座嘉歎而去康永二年夏五月太上皇臨幸對御玄談皇情大悅賜僊曰師其加食毋視朕也世皆榮之明年亦初楞伽院退居大將軍源公施田資香燈貞和二年春赴真如命翌年住建長土地堂曰祠出張大帝天下鬼神爺誰知鄉曲裏出來共一家佛涅槃上堂無有佛涅槃無有涅槃佛因甚又道今日佛涅槃僊上座要斷

者公案去乃以拂子敲禪牀下座凡所至住持叢規  
典禮俛後學見古道顏色焉再住淨智達磨忌拈香  
自從五葉一花開橫出孫枝遍九垓無地卓錫僊上  
座靈苗拈向火中栽貞和四年初夏遘疾謝事居布  
金館孟秋回金峰楞伽院緇素問疾者多酬對如常  
左典廡義詮源公捨房州正木鄉田莊若干畝以贖  
其塔十六日門人競求真贊僊隨手應之既垂誠畢  
書遺偈而逝世壽五十又七法臘三十又九藏全身  
於最勝塔有語錄若干卷行于世元之靈巖了菴次  
公撰行狀翰林學士臨川危素製塔銘資善太夫番

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十七

○三一

易周伯琦篆額

贊曰達磨大師闡支那之平世航海來爲梁王示直  
指之旨梁王不契遂涉江往魏入熊耳山面牆九白  
接得神光焉當僊師之東渡此方多故雖干戈叢裏  
承王侯之寵禮揚化四處之名蓋無丈夫之氣息焉  
有亨此屯難耶然吾國之君臣不拘路遠能守佛軌  
邁于異域也可復觀焉

濃州正法寺沙門自敬傳

釋自敬字信中別號一心久侍琳桂榮公參究得悟  
出遊諸刹益長學解延文中與月心圓等泛溟入

明福歷四明列剎參謁一時耆宿季潭無著等又抵  
天寧參了堂一公侍香職掌藏鑰見佛日楚石琦公  
請先師大醫真贊琦公又贈以一心歌并說及歸國  
自衆于龜谷無何出世濃之正法辨香獻大醫上堂  
世尊拈華劍去久矣迦葉微笑切忌刻愆誰知正法  
眼藏自然常光現前昭昭於心目之間且古且今是  
是於色塵之內無黨無偏管甚祖師西來直下單傳  
何況行棒行喝豎指豎拳若約禪僧門下家鄉萬人  
千且道禪僧門下有甚奇特豎起拂子云看看三世  
諸佛歷代祖師即今盡在山僧拂子頭上轉大法輪

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十七

○三二

去諸人還聽麼以拂子擊禪牀云靈山一會尚儼然  
後遷紀警峰題西梅曰此梅不香此雀無聲識底處  
寂正好觀聽敬以六十餘歲率於所住

相州建長寺沙門可什傳

釋可什號物外不詳何許人從侍大應國師得擇法  
眼元應二年與天岸廣等相偕入元謁一時禪匠福  
躡名區天曆己巳明極俊禪師赴本國之聘誘三僊  
天岸及什同就木路次明極禮風韻曰太師駕空滄  
海東扶桑猶隔片雲中龍王有願不爲囑莫惜竿頭  
五兩風始見富士山喜作日見山同立喚山山便覺

歡心海樣寬他日莫談波浪險使人特地骨毛寒既而著博多濱時秀崖胤公解崇福印太宰府都督藤賴尚大友氏舉請開堂辦香供南浦和尚住職稍久鎮西歸風錄倉源元帥遠請主張建長東方學人參訪絡繹聲光益熾膺濃之正法開山大醫禪師七周忌門人等讀什指香語日靈根遠自大唐瑞枝遍覆扶桑薰天炙地久矣聲價何用商量恭惟大醫禪師宗門本鐸昏衢慧燈說其法則全機落洛匡其徒則家法綽綽變荆棘作栴檀林所蜂房建太法幢是則這老和尚平生用過底之一著子也只如今日伏值斯

日本漢文史籍叢刊 第三輯

○ 子

日本漢文史籍叢刊 第三輯

本朝高僧傳卷第二十七

音訓

鵬蒲庚切 擊女居切 禦侮上魚據切 罩陟敎切 呼  
宏切 咬嚼上居肴切 跌芳無切 倬詭上竹角切 整敦  
上岡甫切 丰敷容切 挺徒門切 雲直甲切 鞠居六切  
下音堆切 思忌遇切 搏伯各切 峻上離呈切 梓祖此切 蹶顛  
上居月切 渾乃教切 齡胡管切 從上足用切 下尹  
下多年切 機上堅溪切 塚上徒果切 娘女良切  
遜從因切 各領切 詰同哲 嚆上座交切 泄私列  
蔣子良切 駱各領切 武籍切 凋下許偶切 禱都  
切朴匹各切 禱音雜挽 武籍切 凋下許偶切 禱都  
稿切 禱盛也

日本漢文史籍叢刊 第三輯

○ 子

日本漢文史籍叢刊 第三輯

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
 本朝高僧傳卷二十七 茲冀  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第二十八

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十

京兆靈龜山天龍寺沙門疎石傳

釋疎石號夢窻勢州源姓子字多天皇九世裔孫也母求嗣禱觀音大士夢吞金色光而娠歷十二月始生昔異光盈其室在兒見佛像必拜聽梵音將誦四歲喪母九歲出家依甲州平鹽山空阿法師試授羣書一覽輒記翼載誦法華以報先妣自圖外厥九相之變掛壁觀想了知色身如空華十八祝髮初名智

日本書紀 本朝高僧傳卷第二十八

〇一

驢抵南都戒壇院禮示觀律師受滿分戒尋負笈學顯密二教久之歎曰佛法非義學所詣焉爰慕教外之旨一昔夢遊支那疎山石頭一刹有一龐眉僧持達磨像授之曰你善奉持已寤自謂吾於禪宗有因緣因改今名上洛易衣依無隱範公于建仁元坐榻下殆忘寢食明年往鎌倉參無及詮葦航然桃溪悟癡鈍性諸禪師皆以法器稱焉止安初一山和尚住建長舉石居擇木寮因詢尋諸家語錄日增慧解又適興州憩圓福寺寺傍有講止觀僧理義甚精石就聽之得無礙辯然素非所好復見一山于圓覺曰某

日本書紀 本朝高僧傳卷第二十八

〇二

甲己事未明請師直指山曰我宗無語句亦無一法與入石曰請和尚慈悲方便山曰也無慈悲也無方便石益疑悶目不交睫往萬壽參高峰和尚峰曰一山有何言句石舉前語峰勵聲曰你何不道和尚漏逗不少石心尚未穩辭如常州曰庭誅茅而居自誓曰若不得休歇不觀高峰一夕坐久起欲棄壁誤喫顛仆豁然大悟乃作頌曰多年掘地覓青天添得重重礙膺物一夜暗中颺碌輒等閑擊碎虛空骨亟往淨智呈高峰和尚峰勘驗實謂石酬對如流峰大喜囑曰西來密意汝今已得善自護持辭回甲州省親



人欲請石到關東石聞之入土州五臺山隱吸江菴  
夫人重遣專使命國守起石不獲已而抵相陽夫人  
大喜館勝榮寺待禮甚渥厭喧構泊船菴於三浦綿  
退耕菴於總州正中二年石歲五十一後醍醐帝勅  
平帥釐召石詣宮帝御便殿特賜錦座說佛心宗天  
顏大悅移刻不倦乃降南禪之詔石奏言臣僧志在  
煙霞不願出世陛下春閒下詔言但樂聞法要今授  
此重任恐非達綸言乎帝曰俞朕以南禪請師者萬  
機之暇欲朝昏問道耳石遂感睿旨八月入寺開堂  
辦香拈出供佛國之恩據座曰法母固必道絕方偶

日本書紀

本朝前僧傳卷之二十八

〇三

雙放雙收即默即說曉月眠雲處不離古渡頭邊和  
泥合水時常坐孤峰頂上少林花開果結達磨未肯  
救迷情南嶽煙暗霧深思大何曾儼豹變現成法席  
誰卷誰舒廣大施門非關非闔便見物物同揚皇道  
不言之化頭頭同表祖宗絕唱之猷石上座恁麼舉  
唱此是建化門中私通車馬也只如官不容針底又  
且如何低聲低聲一字人公門九牛拽不出復舉世  
尊曰佛法付囑國王大臣有力檀那拈云釋迦老子  
量才補職不失其宜二千餘年遺風未墜要知他付  
囑底佛法麼以拂子擊牀云道泰不傳天子令行人

盡唱太平歌山川得入增色僧俗求法塞門嘉曆元  
年解南禪之印開勢之善應寺季秋寓相之南芳菴  
平帥延住淨智聖嚴開錦屏山瑞泉寺元德元年權  
圓覺住持二年百廢皆舉羽州太守藤道蘊居士  
堂創慧林寺於甲州請石為開山第十世元弘二年  
帝已復辟勅相模守源直義降官使召石秋七月詣  
關謝恩帝喜慰勞以介子都督親王之邸更為靈龜  
山臨川禪寺命石主之特賜國師號建武元年秋皇  
后崩帝置石宮中供養二七日因受衣有旨再住南  
禪近臣勸帝欲廢禪宗者衆矣帝將試其行業冬十

日本書紀

本朝前僧傳卷之二十八

〇四

一月率百官入寺駐龍馭其夜二夏帝親巡堂而見  
衆僧禪坐嚴肅早晨命石為衆入室又入僧堂見齋  
粥有序以為禮樂備焉齋罷置石上堂命四頭直秉  
拂帝嘉歎不輟繇是信嚮益深賜腴田若干畝以贍  
香積石作偈謝恩二年春京師大亂因退南禪居臨  
川大將軍尊氏源公請石於幕府欽求示誨曆應己  
卯春攝州太守藤親秀輩西方教寺為禪刹厚禮居  
石此地本行基菩薩及真如親王之舊址年久荒蕪  
及石住殿堂閣廊寶塔池亭構營改觀秋八月後醍  
醐帝崩于南朝尊氏源公奉勅建天龍資聖禪寺慈

帝冥福像設極麗請石爲住持阿州太守源賴春細川

氏造補陀寺延石爲開山祖康永元年夏光嚴上皇

幸西芳寺稟衣孟武州太守源師直高華景愛寺名

眞如寺傳石兼管秋八月奉詔慶贊東山八坂塔紫

雲如傘垂覆塔上緇白瞻仰稱歎貞和元年秋八月

值先皇七周忌天龍寺慶讚石開堂陞座勅使入山

特賜金襴衣紫袍太上皇上皇及光明帝師百官臨

幸諸山英傑依位而立實法會壯觀也敷宣之際感

一星降於庭帝賜錦帛二十襲水晶數珠白銀華莖

等源公承勅噫嘆銅錢二百萬貫鞍馬二十四匹二年

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

○五

春令上足無極玄公續其住職退請雲居菴天皇召

石入宮展師資之儀加正覺之號四年十月值佛國

禪師三十二回忌請議內禪律寺院八十餘所僧尼

就於天龍寺修大會齋當諷誦之時紫雲作益瑞彩

溢目一會四眾嘆未曾有五年春左武衛將軍源直

義受衣孟冬十月鎌倉源元帥朝京拜石於西山受

僧伽梨觀應元年春光明上皇及國母皇太后請石

於內道場受衣鉢并法名一年春石告衆曰天龍殿

宇幸皆就緒僧堂獨闕當力造之夏四月運斧秋七

月僞功其延袤寬廣殆容一千衆今茲無極謝天龍

主廷議再起石四來盈堂提唱老不倦光嚴上皇自

藤宸翰加賜心宗普濟之號新開僧堂安奉聖僧日

識心滅盡現威儀內外圓明發了知好是天眞三昧

力無邊利濟適機立恭惟西天鼻祖摩訶迦葉尊者

形容長耀金色爲稱鬚髮自除衲衣著體分半座處

十頭陀悉放眞光拈一枝時百萬大衆同推微笑

正法眼藏八字打開教外宗風十方流布詢其祖宗

繁興之來歷徧托尊者廣大之庇蔭其德至矣感而

遂通其慈浩然請則必應將謂鷄足山中遐俟慈氏

下生且喜天龍寺裏正現聖僧全體大坐不動覆蔭

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

○六

後昆於億萬年真儀常存紹隆玄旨於未來際畢竟

如何保住此事去休言選佛難及策那個衆生心不

空二年八月聖德太子十二回忌就多寶院陞座說

法翌日示微疾鳴鼓辭衆退休三會院四來道俗欲

受衣孟法名結菩提之緣者雲委川輪石開室炷香

授戒付衣不盈七日記籍者一千五百餘人九月朔

告衆曰我世緣在近有疑者可問焉衆競入室請詢

隨機開發朝廷遣國醫診治石不可曰老病所逼非

藥餌所救先是地震一次又西芳山崩衆僉謂師滅

度之兆也事達天聽兩太上皇幸寺問疾石欽謝恩

爲說法十九日重臨幸御問親切石又爲衆垂示問答緊自平日二十七日東陵和尚問候石對坐道話特與手書囑以寺務復書遺誠數條以貽門人二十九日贈偈辭檀越曰眞淨界中無別離何須再會待他時靈山付囑在今日護法權威更仰誰辭偈曰轉身一路橫該豎抹畢竟如何彭八刺札書畢乃曰老僧已覺手臂不仁明日行矣晦日粥罷請天龍臨川兩寺衆僧并遠方耆宿及官客等親面告別怡然而化世齡七十六法臘六十方夏禪服手足屈伸不異平時顏色紅潤如生背白氣一道射正寢上四衆號

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

〇七

哭聲動山川門人依遺命昇全身塔於三會院居常所剪爪髮綴設利羅燭燭然如粟粒者無算收于雲居塔天皇哀慟輟視朝政石性質溫雅自然感於物上自王公下至匹夫一接音容者無不鑽仰凡度僧尼四千餘人經律論師執弟子禮者一千有餘實稱嗣法者五十餘員付衣授戒者不可勝記後醍醐帝以來賜七朝之師號有語錄五卷現今鐫梓行於世矣高弟春屋葩公記其年譜元四明東陵瑛公撰塔上銘明翰林學士宋文憲景濂述碑銘以旌其德焉贊曰佛有十號依智德圓滿而立稱焉如夢覺國師

十號之中備其半矣爲天子公族之師出如麟如鳳五十餘員神足者非是天人師乎到所實刹並興士庶歸嚮願施充牣者非是應供乎漢諷和歌之外萬般工藝不習而善人世諸訛聞即解紛當時執政或有難決之事試質于國師一言之下合其要領非是世間解乎善逝丈夫之二者可待言而知焉倚與國師眞佛弟子而達磨單傳之的孫也矣哉後學貝其句語三昧則知悟證之分明也

京兆大梅山長福寺沙門道皎傳

釋道皎號月林山城州人黃門侍郎源具房我子其

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

〇八

先村上天皇十一世之胤也母藤氏皎幼喪父隨母往越前入平泉寺爲童役力讀經典能曉大義十六薙染慕宗門事依高峰日和尚于建長晝與衆作務夜禪坐達旦峰見其志氣懇加提獎逮峰順世居京之北巖舍謁大燈國師商摧宗要花園上皇聞其名屢召離宮尋問心法元亨初年皎歲二十九將入支那上皇延皎受衣鉢翌日賜宸翰以送其行明年春入元徑往金陵參保寧古林和尚研精入室無端授機辭去謁志心誠公于大仰即命司藏典職滿歸觀保寧一日古林問曰斬爲二段時如何衆酬答皆不

契後至林舉前話。皎曰：勞而無功，林大肯之。從此名馳朝野。文宗賜號佛慧知鑑大師。林命居後版。冬，節兼拂無想和尚聞皎提唱語，擊節嘆賞，寄以偈曰：道人來扶桑，肝膽金石堅。遶天鼻孔正，不愛傷人穿。繞牀振錫，今古風臺前。夜夢說法，今兜率陀天。揭性天之慧日，發智海之源淵。皎依古林凡八易涼燠，舉古人公案作拈頌。呈林，林題其後云：此錄乃真正道流，深證實悟者之能事也。異時流通，祖道起學者之疾。予膏肓不復疑矣。天曆二年冬，古林將辭世之日，以法衣付皎。明年春歸本朝，乃元德二年矣。結茅於

日本雜記

本朝高僧傳卷之二十八

○九

城西法華山，傍楊曰妙峰。大燈國師喜皎歸，遣使通問。皎一日訪大燈，談及古林和尚機用。大燈稱嘆，不正有教門大德。欽皎風華梅津，教寺為禪刹，迎請為開山祖。山曰：大梅寺號長福，花園上皇崇信益隆。或詔入宮，或幸寺，問法當時。公卿靡不禮敬。皎舉示道人曰：既學此道，十二時中遇物應緣，處不得令惡念相續。或照顧不着起一惡念，當急著精彩，攬轉頭來。若一向隨他去，相續不斷，非獨障道，亦謂之無智慧。人昔為山問懶安，汝十二時中當何所務？安云：牧牛。山云：汝作麼生牧？安云：一回入艸去，暮鼻拽將回。山

云：子真牧牛也。學道人制惡念，當如懶安之牧牛，則久久自純熟矣。寫照自贊曰：鳳凰臺上，皎首座大梅山中，主人翁聖名凡號虛聲了，殊相劣形色即空手裏，竹杖當頭底江南江北勞，無功不知半身為誰。以真個如畫弄宗風，洞山麻三斤，頌曰：麻三斤是具，崇的佛是西天老比丘，無味之談塞斷口。月明不覺上高樓，趙州相樹子，頌曰：枯柏空垂露，似珠霜天有月輪孤。灼然欲說西來意，鐵嘴當時解更無。皎後樹塔院於長福之北，曰清涼，以安吉林和尚肖像觀應。二年二月十二日示微恙，十八日葉室久我二相公

日本雜記

本朝高僧傳卷之二十八

○十

入寺問疾，二十五日午前與月菴清公問答畢，安坐而寂。壽五十有九，臘四十有四，門人奉全身窆于清涼之塔。都下緇白莫不哀慕。後光嚴帝賜諡，晉光大幢國師。贊曰：世之學伎藝者，臨其事則工拙自見焉。矧欲究大法，祖師門下客，言語動作閒，迷悟焉度哉？故明眼之人纔見，即分其緇素。歷代列祖若無此正眼，豈足立教外之宗耶？古林和尚見皎公之拈古大賞曰：此乃真正道流，深證實悟者之能事也。蓋以皎之悟處，出知見之表也。因載頌古數章，備于後學之鑑焉。



防州高山寺沙門賢仙傳

釋賢仙字基山姓藤生時白光旦天見者奇之受具已後登磨山學智者之教既而泛濫諸宗當時講肆之義虎也一旦歎謂修多羅教如標月指大覺心性登可以見聞覺知造耶棄參無隱範和尚密受心印於是聲華四著有建仁之命仙力辭不應大將軍尊氏源公置防之安國寺聘仙住持毒衣之徒輻湊輪下肥州刺史性理居士欲建梵刹以延請屬國有故不果而沒其夫人妙觀營構請仙為第一代乃高山寺也本州太守大內弘世歆美仙德具禮招請開創

日本書錄

本朝高僧傳卷之二十八

○十一

數刹為演法之地仙性溫淳道貌朴古不貯長物祿紙為衣尋常不談世事勸以心要以故緇白懷風者多嘗題自肖曰無德可望無名可揚德名共舍後誰說短兼長文和元年十一月十一日寂于本山歲八十六不考其臘勅諡照覺普濟禪師

相州淨妙寺沙門道昭傳

釋道昭字靈巖不詳其姓其許妙齡得度服勤桑田海公于淨智密參精鍊遂入壺奧辭去瞻風所臻知謙延以高賓首舉于建長秉拂舉揚一振塵尾機辯圓活學人憚進聲名鳴府內副元帥請主荷山昭

嘗遊東漸寺賦曰水遶山腰碧似藍月離雲嶠落波濤數聲款乃漁歌外風捲蘆花洲渚寒昭某年月日終於淨妙瑞龍菴

豫州觀念寺沙門景印傳

釋海

釋景印號鐵牛從無為元和尚出家元亨年中入元謁靈石芝獨孤朋月江印龍巖具古林茂明極俊等諸尊宿各作偈贈之古林偈曰昔日盧陂跨不行如今爐竈豈能烹南來萬里傳心印莫認蹄涔水一泓明極偈曰黃金百鍊鑄來新脚力應堪負萬鈞耕遍劫空田地了閒眠少室度餘春印在元十餘年飽參

日本書錄

本朝高僧傳卷之二十八

○十一

而歸開豫州觀念寺為第一代開堂乳香酬無為之證又法弟有釋禪海字無涯出世東福化儀甚精臨滅度侍僧乞偈海曰辭世偈者非老僧所欲喝一喝便化勅諡法源禪師

京兆南禪寺沙門義冲傳

釋義冲號大陽出筑前藤姓自少睿敏讀書善記別歲投無為之室出家為問曰儒子在家讀何等書答曰論語為試令誦誦冲誦至半卷不遺一字為器許之為剃髮納戒研精困學絕出羣羣比壯往相州盤桓福鹿間參禪之暇染指於魯諸世二墳復善密法閱

十寒暑歸洛首衆于南禪曆應元年出世筑之承天辦香供無爲繼遷參之實相康永元年董洛之晉門癸未夏東福虛席檀越博陸藤公下鈞帖補其席觀應元年冬承勅住南禪帝召入太內受菩薩戒講毗盧遮那經講畢宣問卽心卽佛話奏對稱旨龍顏大悅中條氏武庫郎威公勗長興寺於參州高橋郡延冲爲開山祖又應檀越之請開清凉寺於江州高嶋冲稟氣簡諄天賦明敏涵九流於胸次翻二藏於舌端尋常不妄發言則人以爲重虎關和尚闍維日設利璨然冲聞之曰是般若所薰也人傳爲口實日

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

○ 七

課金剛經二十卷兼持密咒都下人嘗夢空中聲曰帝釋喜見城善法堂中諸聖輪次講經今日大陽和尚充說法第一座也冲一夕夢直山侃公持觀音畫像請秉炬冲乃唱曰正法明如來無刹不現身古溪流漸漸長江水粼粼直爲苦衆生結成冤家因且結因一句作麼生道以火炬打一圓相曰火裏果發發刺耳底不著聞塵覺後尚記之文和元年正月十一日因病鳩弟子遺誡書偈曰直證無生忍重轉大法輪南辰後合掌北斗裏藏身放筆而寂壽七十又一相州淨智寺沙門妙準傳 妙準

釋妙準號太平幼隨高峰和尚于雲巖又依約禪儉公于建長掌翰墨職滿遊方後歸省高峰優崇參徹峰命繼其席移住相之淨智尋客追隨堂宇充闡準機辯文雅道標可觀晚退正源菴臨終書偈曰末後一句向下文長處處無蹤跡地獄與天堂勅諡佛應禪師又法菴有釋妙環樞翁自雲巖寺遷建長寺法令嚴緻徒衆肅如翔雲外菴以圖終焉文和三平二月十八日化遺偈曰蹈破虛空踴翻大地別有未後句今年八十一塔于本菴環出雪峰霖大岳積大綱整天初廟四神足

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

○ 十

### 相州建長寺沙門禪鑑傳

釋禪鑑字象外肥前州人嗣法桃溪悟公宗說縱橫屢住諸刹後遷建長題通界一覽亭偈曰等見乾坤沒兩般飛鳥走兔遶欄干不徒絕頂施牀座只貴人向上看晚構同契菴於山中解印而休文和四年仲冬十八日化有偈曰上無攀仰下絕己躬若又有生可度不妨隨處露蹤及火浴眼根不壞且漏舍利若干粒府下道俗歎未曾有朝廷勅諡妙覺禪師贊曰火浴舌本不燒者先達或亦有之唯眼根不壞者振古都無苟亦認真實則還倍妙覺師之禪矣

京兆東福寺沙門了愚傳

釋了愚號鈍翁不詳何許人初出世上之長樂辨香供月船海公次遷洛之普門後升慧日山天性真率絕無排飾虎關和尚修釋書之日訪愚曰聞先師月船和尚示寂之際異香滿室有諸果爾當載于僧史以傳後世其實如何愚作色曰和尚莫誦先師好先師未後無半點屎臭氣更何說異香滿室以手挪揄言止止勿誤上紙墨虎關悚然而歸愚臨終書偈曰提空劫印去來在大萬年一念一念萬年擲筆而化觀應三年四月六日也

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

〇十五

京兆建仁寺沙門妙胤傳

釋妙胤號別傳不詳其姓出參徑山虛谷陵禪師承心印康永末駕船而來太將軍尊氏源公奏朝請住建仁祖師堂曰這一火落全無已鼻以心傳心遞相鈍置動地清風來未已拈帖曰從上諸大老出世舉帖曰纔得者個人手便見殺活在我縱奪臨機今日某既得者個人手畢竟如何施設度帖曰看取令行時拈山門疏曰貶中有褒褒中有貶一貶一褒難識難見聲破虛空成兩片登座問答罷乃云釋迦老子二千年前爲大事因緣故出現於世解道諸法寂滅

相不可以言宜早是漏逗不少達磨大師十萬里外

觀東土有大乘氣象航海而來解道淨智圓妙體自空寂又是一場麼羅山僧今日雖是被入撒撒強出頭來喚長老不欲向淨潔地上撒沙撒土且教拄杖子出來略通消息應今時節去也拈拄杖卓一下云將個空心奉塵刹恭祝吾皇億萬年及移鉢倉金峰山構大圓菴以退居弟子玉崗珍出世圓覺

贊曰自寬元至元德中宋元禪匠相次東來及康永末別傳禪師獨殿而至此時騷亂未熄君臣奔命不遑以故法幢不熾振行錄亦公矣余偶併得其住建

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

〇十六

仁之語及高弟珍公之遺偈於陳策中喜以載于燈錄若無此語則父子之名終世不聞焉韓文公所謂文章豈不貴者於是乎有焉

攝州福海寺沙門圓有傳

釋圓有字在菴棟樑南北商略教義後入城北正傳寺參法位性禪師掃除枝葉廓徹根源即承印券住吉祥山大將軍尊氏源公建福海寺於兵庫縣請有爲開山祖江湖水雲湊泊座下貞和五年十一月二十一日遺教書偈曰八十四年笑樹祖佛一句臨行寒嵐拂拂珍重脫去

常州清音寺沙門宗己傳

釋宗己稱復菴弘安三年生于常州宮家氏自少出塵奮志禪趣發奔東關參叩殆徧延慶二年與無隱晦等同參浮海入元直上天目山從中峰和尚時年三十餘峰見其慧實淺加器重俾參狗子無佛性話己晨昏提撕杳無所契峰授法語警策又說偈曰趙州因甚道無字自己與宗都莫論盡力直教參到底優於無佛處稱尊己得示誨益著精勵凡侍中峰周旋大覺獅巖間歷六寒暑一日觸境發機趙州無字渙然冰消急走丈室通所悟峰即證焉復服勤三載

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

○七

及峰遷化守其塔者三載前後一紀東還粉里寄跡林泉無何聲光高輝諸山公選連至己高蹈不就而信心擅越列國著姓如總之二階堂氏常之佐竹氏野之結城氏各拔荊榛建大精藍延招懇摯己遍而出應首住常州法雲禪香薰供晉應國師相續築波禪源結城華藏會津實相古內清音皆請己為開山始祖其為東關叢席當時江湖雲衲不到其輪下不以爲偏參僧衆常有一千指所到國都道俗瞻禮稱爲活佛貞和二年使神足慧侍者齎書幣入元呈蘇州幻住住持玉庭月公及杭州天目山塔主榮公以

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十八

○八

通嗣法之趣月公答書略曰開堂演法不忘所自特令神足不憚鯨波之險遠齎香信以通嗣法之由真所謂吾道東矣榮公答書曰當記延祐間先廣慧歸隱天目愚侍巾版之側公等航海遠來參叩預先師會中龍象由是獲瞻儀範迨掩光之後水流雲散不相知者二十餘載公以不忘所自專神足慧上人犯鯨波之險而至伏領丙戌解制日所賜珍翰恭審榮董大方辨香爲先師拈出乃知臨濟佛法一枝流播遠國信不誣矣乃有香信念珠之惠爲塔下燈供而設而先師於大寂定中感格感心而未已也人還無可爲意塔下所有先師法衣二頂眞寶頂相一軸寄納己平生談禪病議教理激勵提警常舉趙州栢樹子話應接學人後光嚴帝聞其道價隆詔詣闕詔曰迎天下太平之氣象得佛法紹隆之時節爰上居於雲水馳聲於華夏起以重傾睿心再命勅黃肥遁之志雖堅蘊輝之稱何隱早起蒲坐速詣丹墀則協列聖尊崇之洪基正爲佛祖出興之太旨嘉會既是一遇謙讓莫及三詔己謝老不應旨大將軍尊氏源公馳書詢禪要己乃呈法語一篇曰凡雖做工夫當疾病時不得力者以平生工夫不純一故也痛苦之時



不能作主。至生於岸頭則必不得自由矣。永嘉曰：假使鐵輪頂上旋，定慧圓明，不失此語，可為學道人龜鑑也。父母未生以前，那個是我本來面目？日用十二時中就此話頭上，猛著精彩，念念滾切，如救頭燃，自參自究，工夫熟時，節到忽然，穿透虛空，便是本來面目。現前時也正當是時，何迷可滅？何悟可存？何生可度？何佛可成？生於涅槃猶如昨夢，天堂地獄道遙自在。有什麼閑工夫，純一不純一乎？但在猛決耳。以延文三年九月二十六日坐滅于法雲壽七十九。五年九月勅益大光禪師有語錄一卷。

日本漢書 本朝高僧傳卷之二十八

○十九

贊曰：天和三年秋七月，余應水戶侯中納言光國源公之請，往太古山清音寺，因尋大光禪師之事。先住持著持語錄一卷，乞獲觀之。其所出機緣，概見于語中。今傳大率據于本錄。延慶間，禪人踰海參，普應國師者不可勝記。稱其嗣法者復多矣。觀大光之舉措清白，解行並有，得幻住之骨格者，獨屬于己公與。

本朝高僧傳卷第二十八

音訓

厥 申之切 曙 忽郭切 睫 卽涉切 仆 芳故切 礙 磨 上牛切  
 下於京切 賜 餘亮切 碌 盧谷切 釐 鄰溪切 辦 備覓切 輪 輪  
 商 謙切 熠 一入切 膏 膏 切 上姑勞切 下呼光切 觜 烏喙切  
 泛 濫 上季揉切 而由可切 泓 胡盲切 漸 恩積切 刺 郎達切  
 切 闌 烏結切 攢 取亂切 櫟 極 絕逐也 嵐 盧含切

日本漢書 本朝高僧傳卷之二十八

○二十

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
 本朝高僧傳卷二十八 茲冀  
 上報四恩下資三有 家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第二十九

澁州盛德沙門 師鑾 撰

淨禪三之十一

京兆南禪寺沙門德見傳

釋德見號龍山總之下州香取郡平氏子桓武天皇之裔也母氏娠時夢吞日輪處母胎十二月既生聰慧不羣混俗至年漸長投相之壽祖師事寂菴昭公暗記法華不勞復習思慧夙薰尤通義理通外典五車該覽菴嘆爲再來人十七具滿律戒服左右無難色參謁一山和尚于鹿山同求掛搭者四十餘員

本朝高僧傳卷第二十九

〇十

山指禪牀曰各式呈頌可者許參堂見授筆正成卽居侍司年二十一發志南詢菴許遠遊密付心印維時蒙古興古有惡船達四明不許著岸見自謂古人爲法亡軀今正是秋也夜濯發就投身維摩隨豪貴庭中平檣捉家主問曰何因至此見索筆書曰我在日本聞天童和尚道風故遠來將禮拜其人素歸宗門憐見惻誠白官獲免檣登天童其陳來由住持東巖嘉淡志令歸堂及巖人叙西補席命充侍香辭往吳門謁東洲古林又遊江西諸名山駐錫匡廬東林暨至分寧平山濟川相續住雲巖雷見分座四衆

本朝高僧傳卷第二十九

〇三

仰抱州守舉住兜率時寧州官員諸山耆宿備香華幡蓋護送青蛇下頭盤法座下人皆異之乳香酬寂菴一居十年百廢具舉議者謂悅禪師之再來也謝事寄客大龍翔集慶寺笑隱新公下榻待遇寧俗頻乞再歸兜率及返本朝歲六十六當貢和五年也左武衛將軍源直義請住洛之東山大將軍尊氏源公奏王南禪天龍德觀俱仰公侯士庶望塵拜伏歷三大利巨闡禪風朝廷聆其聲價特賜真源大照禪師之號南禪小叅今朝陞座一期事已畢此晚小叅更復何說別此事人人本具觀體現前猶知萬里無雲十日昔照有甚遮掩處直得離一切有無離一切幻化離一切浮虛離一切真實語言不及比况不得知不可知識不可識坐斷千筵路不立一纖塵應聲應色空舒縱橫無拘無束得大自在豈不見羅山關堂方欽情傳教珍重便下座闍王近前執手云靈山一會何異今日好諸人若識得羅山與闍王相見處三世諸佛諸大祖師種種要妙一一玄機以至山僧所說細大法門一時識得無絲髮許透漏喝曰夜渡歸本使歸太待得天明見日頭上堂目前無異法遍東絕無欄卓爾超然正體獨露雖本來而不涉本來

住著而未嘗住著所以道祖師心印狀似鐵牛之機太則印住住則印破一向把斷要津若聖若凡如何搭定放開線路俯仰時緣便見主伴交參風雲會合再轉法輪於知足天上重映道光於末運之時木叢林增顯煥九州四海樂文明延文三年中冬十日蓮病召諸弟子屬以後事十二日沐浴而寢中夜起坐披新淨衣書遺教數紙待者請偈見乃書曰西浦東渡南往北來末後一句掘地深埋起出戶外仰看月色已斜復歸座誌偈尾曰十一月十三日放筆而化春秋七十五夏臘五十七門人定身於東山知

日本書紀 本朝前代天皇之十九

○三

足院樹塔曰靈淵

贊曰古稱丈夫蓋棺毀譽正定若夫出世悟達之人日用現前自然契規待蓋棺堪作甚邪真源禪師爲活南詢捨身戟城卻免以難異域本邦轉大法輪其末後大就復甚奇異可謂初中後期生死太雷脫著自由也

筑前崇福寺沙門宗心傳

釋宗心字即菴拜大應國師妙年削滌及長遊方遍踵叢社大應言下馳求頓止出世筑之廣德歷遷豐之萬壽筑之報恩崇福三刹四方景從月堂規公贈

偈曰橫嶽峰頭古道場單傳妙旨復提綱全機度越今時令幾使祖宗眉壽長後主洛之萬壽心將順世說偈曰一蹈蹈翻如來地一拳拳破祖師關閃電奔中山河走天堂地獄譬如閑救謫弘宗普門禪師塔日正宗

相州建長寺沙門祖輝傳智越

釋祖輝號獨照平安城人得義翁仁公之法初受興州太守之請住松島寺徙筑之聖福相之淨妙洛之建仁終升建長所歷四本利咸整法令能事云畢元弘五年二月二十四日說偈曰生如幻本來如電

日本書紀 本朝前代天皇之十九

○四

生如本來打成一片即時脫本教益真覺禪師又有釋智越字雲山久參無隱範和尚遂承印券出世圓覺後移淨妙宗說兼貫列刹所崇晚退禪昌菴臨終謂徒日間佛佛不知問祖祖不會百不會百不知是講生是講死

紀州興國寺沙門思賢傳

釋思賢號無住世姓藤氏華山院右丞相家忠之裔也慕法燈國師之禪捨錦綺隨尋承久之有所悟住紀之興國洛西妙光道價負重創相之開修寺爲第一代長壽寺殿尊氏源公尊茶佛事日承靈山記爲法金

湯大展叢林戈甲，豈止爭先，旗槍點出，無邊春色，與一切人，極骨洗腸，個是仁山義公，平生常用底，號令即今，餘水獻花，太也度，蓋云青兔齋裏，雪花香賢滅，後門人樹塔，鸞峰日普濟，有弟子香林大震等，不數世而絕矣。

### 京兆東福寺沙門士顏傳

釋士顏號中菴，不詳姓氏，長安城人，承南山之印訣，漫遊諸方，曲箋輸於壽福，乘塵尾於圓覺，開堂策之，承天遷相之崇壽終，升東福，不振法幢，延文元年七月七日化于莊嚴菴，有謝世偈，日七十四年不談禪。

日本僧錄 本朝高僧傳卷之二十九

〇五

道更問如何，七類八倒。

### 相州建長寺沙門友丘傳

良鑑

釋友丘字東林幼師，一山和尚圓頂受具之，其人請益名神所得尤深，依育王，月江和尚主藏兼拂名聲且著，及其告辭，大宰楚石琦公作偈送行，日十月朔風號，古木金陵遠也行，何速，菩提達磨未來前，准北淮南山簾簾不立，文字直指人心，自題值木，輟芥投針，從本以來無佛祖了知，此事非今古國師侍者意如何，汝負吾兮，吾負汝，丘既歸國，出世建長，一香供一山尋住，圓覺某年月終于雲光菴，又有法弟仲

和良睦侍者自少英邁不幸短折遺偈曰清風吹著落明月照青空，一唱還鄉曲，淵高興不窮，睦與太虛充少林眷友，善二公賡韻助京建長圓覺禪衲屬和者四十人，少林華之作快義堂信公序盛為時輩所愛如此，其為人可以見焉。

### 京兆建仁寺沙門仁浩傳

釋仁浩號無涯，不考姓，誰羽州人也，得鐵菴庄公之印，攜錫入元謁名宿歸住，肥之淨土，相之東勝洛之建仁，辦香醪，鐵菴上堂達磨不來東土，佛法只是這個，二祖不往西入佛法只是這個，只這個從來撲碎。

日本僧錄 本朝高僧傳卷之二十九

〇六

不破卓拄杖，日那吒頂上與一掣，金剛腳下流出血，重陽上堂玉露滴開八枝九枝之黃菊，金風剪下三片兩片之丹楓，大功不宰不同，而同取之，無禁用之，無竅現成公案百市千重喝一喝，日恰似獅獅與毛虫，冬至小參目前無法意在目前，不是目前法，非耳目之所到，恁麼說話不妨滴水滴凍水泄不通，藕枯拄杖，日且道在，稍僧分上，合作麼生，卓一下，日掀翻海岳寬，知己撥亂乾坤建，太平復舉雲門大師日觀音菩薩將錢買胡餅，放下手，元來是個饅頭，日雲門大師如是告報也，是官路取私鹽，以延文四年



月初五日寂于永源菴壽六十六塔日審明

京兆天龍寺沙門志玄傳

釋志玄號無極平安城人順德帝四世裔也幼事南  
洲海公于願成王舞勺舞勺受戒東寺習密久而捨  
太參無爲元公于東福圓覺透得本源聲播叢林元  
德年中夢應國師住圓覺寺法席鼎盛玄負氣不願  
有僧縱吏謁見國師素聞其名延之上座與語機契  
擢爲版首國師再住南禪復舉分座出據臨川貞和  
二年國師付七處說法之衣銘天龍席會中多士濟  
濟如麟鳳之欲漫皆歸玄輪下助化辨衆事凡住龜

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十九

〇七

峰間六寒暑鐘鼓交響整頓宗放光明皇帝屢幸聽  
法寵賜甚厚上堂示衆曰諸佛不出世亦無一法與  
入說然迷妄衆生造迷妄業隨其業力輪回六趣是  
以大權菩薩修空華萬行坐水月道場降鏡像魔軍  
成夢中佛果然後隨病施藥遂有三乘十二分教如  
將蜜果換苦葫蘆福智二嚴只破空有之習海諸人  
業根而已生佛爲之伏矣今時叢林說禪說道者如  
稻麻竹草觀其舉措多違教誨因茲後生泥學爭機  
鋒於棒喝之間且道旨妙暗棒能拔生外業得麼胡  
喝亂喝能救生外苦得麼豈不見道參須實參悟須

實悟如斬一線絲一斬一切斷然後向千聖仰望不

及處抄出父母未生已前面目直是風凜凜地方可  
稱爲太解脫人只能如此何憂不辨乎退院上堂拂  
柄提持經六夏爲人無法作閑惠如今山下藏踪跡  
不類別峰看德雲休老于衆景及國師唱滅奉詔再  
住天龍大衆悅解解印退居舊院文和三平降南禪  
之旨玄以老辭延文四年中春屬微疾謂門人曰吾  
十六日行矣至期聚衆遺誡坐逝享年七十八坐脫  
六十六諸徒龕奉塔于慈濟救謚佛慈禪師玄雄辯  
強記當機不讓一日華嚴講師謁雲居菴問難宗旨

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十九

〇八

國師引華嚴證入講師笑曰經無此文玄在傍曰聞  
衆只知舊譯未知新本和尚所引在新譯經聞衆自  
宗猶且不委欲探教外之旨可得乎講師赧然玄有  
語錄曰天龍一指

贊曰玄公者正覺國師第一上足所悟純白無世智  
塵當其機前有青藍處一家諸弟常畏敬焉觀其師  
資之閒宛如雪巖欽公之於無準和尚也再膺受天  
龍命晚謙光南禪詔賜呼松柏之有高標也雖飽風  
霜而爲人所瞻仰焉

京兆東福寺沙門士昭傳

釋士昭字鑑翁嗣法南山和尚有博識高行之名在天龍居版育受帖出世歷遷之後至慧日山都下禪風長壽寺殿尊湯佛事日佛國香樹正覺果熟甘露門一味無別喚作濟世術三十年坐柳營而建太平喚作活國方百萬軍望梅林而得止渴惡毒時卻平和眼眩處也辛辣應變臨時受用無極遺芳千載屬甘棠子華孫枝陰鬱密質釋書入藏日四海清平一事無討論文籍萬機餘喜聞教下龍宮殿祕在元亨釋氏書間休審壽菴延文五年十一月四日書偈而寂傳錄

日本書錄 本朝高僧傳卷之二十九

○本

### 京兆東福寺沙門一羣傳

釋一羣字因山源姓肥前佐嘉郡人母夢圓鑑禪師以益孟授日後當還我持之入內有孕而誕容貌殊異鄰里父攜詣高城寺謁藏山和尚羣進問日和尚名何山日無量羣日我是無邊山知法器耳提面命舞勺落髮往策之觀音寺登壇受戒正安元年一山西禪雙錫東渡留太宰府羣特往謁禪夜無中之號贈焉十七上京之三聖叅無爲元公又往相州侍西禪于湯藥禪問萬法歸一一歸何處羣日黃鶴樓前鸚鵡洲明月之隨藏山住東福歷武要職叅南山月

船松嶺直翁諸老得公知解貞和元年出世東福懷香報藏山文和初年升天龍警策四來法令三載投老正覺菴延文五年正月嬰小恙預書遺誡數條二月十一日病革侍僧乞辭傷羣乃書日來時空手太時赤腳一公一來單重交析投筆告寂春秋七十有七門人遵遺命葬于圓鑑禪師之塔左扁日正光

### 京兆正法山妙心寺沙門慧玄傳

釋慧玄號關山源姓信州高黎氏之子其先清和天皇之裔也器度高介抵巨福之廣嚴菴拜東傳啟和尚剪髮草具泐默衆底無所點化適值開山大覺忌

日本書錄 本朝高僧傳卷之二十九

○十

赴于西來菴問同列僧日海內叢林誰稱活手僧日洛之大燈國師殺人不少取因語其作用玄聞忻然日是真知識也即日束包菴下直上大德方丈鳳聲日新到相看國師據位纔展於巾便問如何是宗門向上事峰日關玄拂袖便出峰日作家禪客天然有在從乞掛搭峰令侍者日若要掛搭先須持紹介來玄日夫善知識者具金剛正眼才跨門見徹學人心肝說什麼紹介峰許叅堂玄頓機倏發一夕無端衝破關字至到丈室告其所悟峰拍手日你再來之人也初來前宵吾夢雲門大師至指示關字而今透徹

如是宜號關山仍證以頌日鎖斷路頭難透處寒雲  
長帶翠巒峰韶陽一字藏機太正眼看來隔萬重親  
炙左右唱酬契機後醍醐帝詔峰入內峰偶不安命  
玄起詔帝問不與萬法爲侶者是什麼人玄起鞠躬  
奏曰不與萬法爲侶者是什麼人帝以手中圭畫一  
畫曰者個聲玄便退身稱歎帝情元德二年峰付法  
語曰此事卓犖挺拔清虛乃佛乃祖惟以之而務苟  
有其人則於壁立萬仞處輕輕推將去到不回頭時  
節直與個惡辣手脚全體作用使化到勦絕日的之  
地古人得旨之後溪隱堅韜不必長養虛廓之聖胎

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十九

○十二

專亦有意憂於後昆者也上人既與本來相應起居  
幽邃受用確乎切須細綿不通風密密緊護惜忙時  
異日將吾道而光輝便是孤負老僧微困之恩耳  
玄太入濃之伊波山盤結艸庵沒迹錫光延元二年  
峰示違和花園上皇遣中使宣曰和尚百年之後朕  
隨誰問法請法嗣中得大機用人願承指教峰奏曰  
有開山者得吾骨髓天生風顛居無定處我滅後宜  
微誦之中使回奏上皇重遣藤原相日朕將改花園  
離宮以成梵刹而請關山住持和尚預標峰進呈以  
正法山妙心禪寺之名上皇乃審察象俾勿訪四方

或曰在濃之山中其形惟肖天使入山具宜聖旨玄  
堅坐不起天使勸之曰國師最化上皇失南鍼於雲  
海大法付托幸屬于師且有國師遺命安得自便乎  
玄幡然曰公之言然也徑入花園上皇大悅艸創妙  
心特降敕黃開堂住持上皇就丈室後別開玉鳳晨  
昏入室演道佛祖闡域焉玄不拘威儀禮典唯以向  
上一著務得四來非大機大用者不能窺其藩牆嘗  
拈趙州柏樹子話示學者曰柏樹子話有賊之機衆  
無契者永源寂室和尚會裏僧來相看玄曰聞飯高  
山平日禪坐是否僧曰不敢玄曰試坐看僧偃面壁

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十九

○十三

跏趺坐玄曰這掠虛頭漢連棒趁出又見僧來忝便罵  
僧曰某甲爲生從事大特來參見和尚因甚怒罵玄  
曰我這裏無生从便打趕出一時屋漏玄急召日持  
器物來一童亟持粥鉢來玄大賞之或有索施桶來  
玄叱曰者鈍顛頑堪作何用信州高梨氏通世誦好  
來拜謁次見屋朽壞謂侍者曰益葺補之若其資用  
我當辦之玄聞而罵曰者俗漢來相看則止管我屋  
上作什麼或爲客設浴浴主曰薪既盡矣玄曰毀撤  
櫛版猶有餘薪晉請撥茶會細雨下濺山謂知事奈  
何需溼清泉須伐茶樹來就庫內摘之住山號令峭

峻如斯嘗會夢窻國師便問金翅鳥主當宇宙未審  
天龍藏何處國師卽藏屏風後山繼行而拜當時人  
稱曰一師有出羣之作略矣在審山時大燈國師每  
過村齋路有小蛇蟠屈垂頭待僧或爲誦咒而過玄  
一日從行蛇復出焉乃拾石擊殺國師顧之莞爾十  
日東裝頂笠告授翁曰我今行脚太矣相攜到風水  
泉樹下立談出世願未泊然而化屹如槁木遠報一  
衆扶奉全身安于本山良隅樹塔旃以微笑實延文  
五年十二月十一日也享齡八十有四坐夏六十有  
四玄機字高敞因事世緣殿堂不雕道具不飾至禪

日本書述 本朝高僧傳卷之二十九

〇十三

藤作架裝環且巖棲欄如以至爲王者歸教始終如  
一室無剩物獨有兩朝宸奎一篋往日大燈國師在  
時稱舊叅者雲山峨公爲上首十又六人國師唱化  
後歸玄會中峨遭打出二十五度其餘可知焉以故  
嗣其法者唯授翁一人耳教誡本有圓成佛心覺照  
國師後柏原帝陞妙心位相並大德爲祝聖道場從  
玄創建至今垂二百五十年隆樓傑閣繼究輪奐兒  
孫以誦遍於天下也

補入 實永丙戌 今上特降  
聖教加 大定聖應之四字

贊曰柏樹子話者標的宗門鐵鉢子鐵蒺藜難爲下  
口縱明三藏教講師至此捋口又突五車書儒者至

此結嵩關山國師別具天眼正拈提比于雪峰言  
臨濟大有白拈賊手段咬又下崖可謂截斷佛祖命  
脈瞎卻人天眼目余竊國師語句而無有焉幸個拈  
語落在江湖古人曰若其賞音一變足矣國師平素  
愛栲栳禪嫌瑠璃禪坐斷本分上不存軌則邊纔有  
陰界氣者不能望其崖今稱法孫者盈乎日本及琉  
球此皮栲栳之禪與是瑠璃餅之禪與

雲州雲樹寺沙門覺明傳

釋覺明號孤峰平姓與之會津人生有夙慧看佛書  
合八不輟七歲窓母父令就鄉校無意世典願從事

日本書述 本朝高僧傳卷之二十九

〇十四

桑門十七依良範講師下髮登廬山受具足戒習台  
教八禪究性具之旨既知有宗門事叅法燈國師于  
鷲峰問如何是學人自己燈曰卽今問底是誰明卽  
領旨燈曰聰明利智須求妙悟然後自胸中流出蓋  
天蓋地若於文字言語中學得來底如數他寔於己  
無益服膺三載益臻玄奧參了然明公于羽州專注  
禪觀偶看僧書力盡神疲無處覓只聞楓樹晚蟬吟  
豁然了悟趨欲呈解然見其來把地爐火筋匿背後  
曰汝道火筋在什麼處明日從來在和尚手裏然首  
肯曰汝作後半斷天下人舌頭在講高峰日於雪巖



南浦明於橫嶽咸以法器稱之罷叅之後菴居信州應長元年附舶入元叅中峰和尚于天目親蒙獎識尋見元翁信古林茂蘄崖義雲外岫抵天台山謁無見觀公居第一座因陟石橋供茶於五百羅漢感夢中現花下到護國拜佛眼塔東歸依南浦于建長命居版首不就北往訪瑩山理於洞谷山問本朝支那叅得何邊事明以手指曰面前法堂背後方丈山呵呵大笑由是駐錫相與博約山記曰汝緣在雲州行矣無滯於茲授菩薩大戒曰盡未來際無令斷絕明乃往雲州字賀莊誅茨棘居年五十五人取無親疎

日本書紀

本朝高僧傳卷之十九

○五

之無何歸鄉者衆室無所容檀施雲委鬱成叢林先是嘗夢一僧持刀擬其臂且授雲樹二字曰作後雲門靈樹太至是徵所夢名以雲樹開堂拈香爲法燈之嗣有僧宿杵築神祠夢神語曰爲我求雲樹和尚戒法并僧伽梨僧以告明詣大社說戒住衣其衣現今存于社中云元弘初年後醍醐帝姓伯州詔以行在受戒法衣益特賜國濟國師之號親臨宸翰賜天長雲樹與聖禪寺之額及大駕歸洛復至關問道謁叢龍山明堅辭不就貞和元年驚峰虛席衆延致之明日先師道場不敢離杖錫而至雲水奔赴盈八千

指寺選舞馬之變荒蕪者甚明力舉之未幾有加於舊法燈嘗曰吾滅後五十年有一大士再興茲寺於是皆謂唐燈懸記又徇衆請住洛西妙光大將軍尊氏源公弟直義將創伽藍延之三請不可夜竊逃太後村上帝繼先朝志留神宗門召明宸廷罷崇特厚帝與皇后太子受衣益戒法加號三災國師錫金襴伽藍救泉之高石建大雄寺詔明爲開山始祖開堂日大駕親臨四衆懽呼謂靈山付囑今猶儼然明感兩朝之恩遇爲終焉之地康安元年五月申許示微疾二十四日集衆激勵曰吾行矣門人覺賢智訥請

日本書紀

本朝高僧傳卷之十九

○六

末後句明日出息不涉諸緣入息不居陰界又曰視死如生視生如死生歟無隔豈有一法可當情耶言訖長往享壽九十有一坐臘七十有五帝聞訃不勝哀悼賜香幣敕百官會葬火浴得五彩舍利無數土民淘沙土搜伽藍得之者多門弟子分之塔于寺之西隅京之妙光雲州雲樹應安戊申門人仲藏主入元國請杭之淨慈住持用章俊禪師撰塔上銘焉贊曰明公法燈國師第一弟子悟解相似志操相似壽齡亦相若也心證照晰戒行玲瓏南帝相繼崇爲師源公三請掉頭不就矣當時與顯頑蓮幕而求

利達者涇渭隔止賜三光之號自然而然乎抑亦有因緣乎爲異也而已

### 京兆萬壽寺沙門明千傳

釋明千號古鏡蚤參清拙和尚得悟又遊元朝參謁諸老依樵隱逸公子雪峰司藏經隱遯淨慈千亦從侍宿銀鑲鍊益臻間與在元二十年而東還源丞相請住洛之真如乳香嗣清拙遷信之開善洛之萬壽輦下挹風者衆矣延文三年九月初八陞萬壽齒列五山之位千上堂曰萬壽本爲皇后寺將軍今賜五山名山僧坐著黃直夜擲鼓陞堂祝聖直菴愚首座

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十九

〇七

起龕日終日如愚一生擔版無端與佛同涅槃切忌棺木裏瞠眼噴鐵蛇鑽破鐵門限一日於典庫讀法永一頂賜其衣裏有二圖璽卽是迺祖愚極及樵隱之所印也千大喜曰法王大審自然而至卽令擲鼓上堂敘得法衣之因緒先是樵隱自修雪峰塔銘有言天荒地老扶桑日本其永元一派流入東海之證於是徵英文和丙申春千檢檀輿印刻百丈清規書其尾云龍翔笑隱百丈東陽迺天下名師也同時奉教以重編校止百丈古清規本定元朝叢林之盛典生解禮數頭未便于觀覽者智者東林兩本之所不

及矣予故慕緣繡梓于版以廣流通千延文五年五月二十二日遘疾坐化

### 依前聖福寺沙門宗規傳

釋宗規字月堂號水月老人姓宗氏依前太宰府人也母夢抱彌勒佛聖像寤而產師自幼敏慧嬉戲常作佛事年志學入觀音寺從照律師影滌納戒抵州之醍醐寺就良範阿闍黎習毘尼稟密法去上京城遊南北講場聽性相之法捲被歸鄉一夕坐書窗暴風俄來吹滅檠燭規瞥爾嘆曰直饒究一代時教解無量妙言不明心地焉能得賢於自己覺旨乃撥

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十九

〇十八

經卷一炬燒卻徑登橫嶽拜謁南浦和尚高聲問云佛心從來千聖不傳因甚道放外別傳浦便劈脊扛日蝦跳不出手規云和尚卻落在圈續作麼生別傳的意聲未絕浦擲下拄杖以手掩其口規當下豁豁癡瘖冰消卽作偈呈曰踏破太毘盧腳跟轉處殊虛空鞭鐵馬昨夜過雲衢浦許可付衣命侍左右嘉元初浦住都下萬壽規典輪藏及浦城化歷遊湖海到處主張皆稱高賓正和五年粉邑檀越結菴石城之舊址邀爲長養休靖之地規安居餘十載獨照輝公徒董聖福建仁之日請屈分座規起扶化皆維之難

潮虛主席同門封疏請規出世嗣香奉大應國師拈  
出鐵內賢初乘時而集住職稍久解印還鎮西延元  
初應輪請住崇福謝書記上堂達磨禪也不會夫子  
字也不知不知不會無縫罅倚天長劍寒光輝直下  
薦取文不加點竹思停機魚魯參差上堂崇福今夏  
三百眾一日益盛兩度供色身法身不二智識識食  
共空聖凡絕跡魔外潛蹤無價得六月松風七月日  
上堂拈拄杖云太火西流一葉報秋山蟬苦殘暑候  
虫訴新愁只箇王丈子未曾離手頭要會此中意卓  
一下云蚊子上鐵牛貞和二生再移崇福諸檀越草

日本撰述 本朝高僧傳卷之二十九

〇十九

石城菴成一叢林改額妙樂圓滿禪寺規為第一祖  
凡住崇福十有三百敗損者修補焉朱亡者全備焉  
士庶懷德發心者衆光明幢之稱達于輦下遷日本  
最初禪窟傳多聖福彼地尊信如化佛出現焉端午  
上堂善財拈出一莖艸千古教人護度量端的機先  
諸藥性應須無病人膏肓退院上堂排空間闊久寂  
寂出入隨緣似不曾江月松風舊相識五湖四海一  
烏藤規後退居石城康安元年九月二十七日示微  
恙至中夜集大眾告別書遺偈日脫身一路無古來  
今朝朝日上夜夜月沈投筆長逝春秋七十七夏臘

五十八閻維收舍利靈骨塔於本山扁曰知足焉規  
平日不許錄其語纔見火之門人宗吾宗應等采槐  
十二編輯成卷明之承天新仲銘天寧琦楚石淨慈  
俊用章靈隱良用貞為之序跋焉  
贊曰大應國師參虛堂祖歸接學人自契師範月堂  
規公垂教來問稟其順眩之藥從前之膏肓一時徹  
隨而得無礙三昧接其嗣無我與紙燭吹滅誦而  
聖顯于虛空焉凡天澤之門客別有生涯其活法之  
相屬也十世可知焉

本朝高僧傳卷第二十九

日本撰述

本朝高僧傳卷之二十九

〇十九

音訓

堞徒協切 堵董五切 饒謨官切 淘徒刀切 瞎許轄切  
緞力霄切 亂初亂切 鞠居六切 粹郎達切 韋女氏切  
肖先弔切 趁丑慎切 欣側敬切 箍攻乎切 葦七人切  
欄移廉切 濺作甸切 變渠追切 莽母黨切 撥都發切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑲

本朝高僧傳卷二十九

茲其

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第三十

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十二

京兆南禪寺沙門士曇傳

釋士曇號乾峰。一稱少雲。筑前博多人。母欲求才子。禪志賀島文殊夢。大士持劍擬割其胸。覺而即娠。弘安八年生。頭起三峰。眼如電爛。幼而神異。經書過目。善記嬉戲書。少常書佛字羣兒各言其姓。曇獨曰釋氏。十四入承天寺求禪。南山和尚無人導。乃坐艸上背誦尚書。山聞而異之。爲難捺稟具。待山于鎌倉。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇一

諸利應長辛亥山住。東福諱曰我。四十年前在此山。參生師舉。四賓主話。胸次豁如。爾來徧叩諸方。道無異味。曇曰若四賓主。則不須參。山曰你作麼生。曇曰賓主。歷歷然。山曰以何爲驗。曇曰痛還不少。山休太。參佛國禪師于淨智舉。法眼答佛。詰國曰燒尾金鱗。卽今在什麼處。曇曰當面。隣過國振威。一喝曇曰。揭。日一夜金峰下。一喝。早知平地起風雷。蒼龍不臥。澄潭底爲雨。爲霖徧九垓。因讀廣燈錄。有省。會明極禪師東渡。住建長。曇乃掛搭極見其氣宇。極曰。稱曰浙之東西。不見若人。不意還左。亦有奇物。舉居。飯首結。

制乘拂僧問如何。是教意答。日影沉。寒水。鴈過。長空。

問如何。是祖意答。日鳳凰元。不在梧桐。問祖意教意。畢竟如何。答。日異曲同工。問向上還。有事否。答。日八角磨盤。空。問酬對用韻。寧有古格。答。日看取博陵王。見牛頭融僧云。此是旁出。非正傳。答。日雖死蛇。能弄作活龍。一特酬唱。膾炙人口。避元弘之授。寓上野山院。院有大般若經六百卷。而失兩軸。曇詣記書之。後以別本對閱。不差一字。訪明極於南禪。極命鳴洪鐘。海眾出迎。請入首座寮。分座乘拂。僧問。曾騎鐵馬入重城。救下。傳聞六國清。曇曰威鳳翔翔。瑞龍踰。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇二

躍僧云。寺是皇朝寺。僧是本朝僧。適當書雲。節大開。法戰場。願聞太平。一曲。日賣刀買。僧云。三九二十七。籬頭吹簫。不歸宮。適是何曲。調日。還拍版。無孔笛。僧云。記得靈樹二十年。不請首座。意在。那裏。日。龔鼻。處。豈須正石。僧云。我首座生也。生緣在什麼處。日。不是河南。是河北。僧云。我首座牧牛也。莫是犯。化苗稼麼。日。徒勞鞭策。僧云。我首座行脚。可謂官路。分岐。日。朝往。西天暮。歸南嶽。僧云。一日鳴鐘。忽接韶陽。入首座寮。時節到來也。麼。日。儀封人見孔子。爲木。鐸。僧云。堂上和尚久。不請首座。俄接公來。與化古人。



有優劣。應曰：毫釐有差，天地懸隔。僧云：不審何出生。昨日記得今朝忘。卻僧云：牧牛又作麼生。日艸茸。茸烟暮。暮僧云：還具行脚眼。麼日：歸濟退身。德山斫額。僧云：人天眼目。堂中首座曰：將錯就錯。及省。南山會承府帖出世相之崇壽。一辦奉。南山繼歷住。洛之普門安禪。東福南禪相之圓覺。建長上堂。衆生界即諸佛界。因迷爲衆生。諸佛心即衆生心。因悟成諸佛。當頭坐。斷生佛二邊。直下超脫。迷悟二轍。直饒逗到恁麼田地。向上玄關尚未透得。建長試問大衆：什麼處是。向上玄關良久。曰：前是。得月樓後是。逢春閣。南

日本書紀 本朝南僧傳卷之三十一

○五

禪入寺。小參上堂。靈山密付。飲光一笑。閒少室單傳。神光一臂。端佛佛授手。全提不起。祖祖指心。半提還難。惟我日本國有城名平安。古皇聖蹟巨闢禪關。設問諸仁。還委悉麼。良久。曰：九州朝禹穴。四海仰堯靈。文和四年。自相歸洛。有詔入內。帝御清涼殿。聽曇演法。龍顏大悅。丞相藤公。勅菩提院爲曇壽塔。曇性純誠。靈異甚多。在東福時。賀茂明神入室受戒。并求法名。曇乃書勝岳與之。賀茂山也。次日結制上堂。有一青衣我冠。捧以玉篋奉僧伽梨。曰：表昨夜受戒之觀。侍者問奚自來。曰：賀茂言訖。不見曇。即著其衣。說法。在今在昔。

提院在南禪時。夢北野天神遣使。贈筆求書。金剛經。既覺。而雙筆在几上。曇書而獻之。佛國禪師三十三回忌。夢窻石公設齋供。衆請曇陞座。時朱雀街有律僧暴死三日。而蘇。謂人曰：我在廣野見百兩車中有王者面如渥丹。極有威嚴。問之。從者曰：閻羅大王也。今日南瞻部洲有佛說法。往預其會。大將軍義詮源公爲先考仁山居士請曇陞座。僧問承聞和尚說法。聞王來聽。是不曇曰：認著。依然不是。僧曰：今日爲仁山居士陞座。還有國王問麼。曇曰：閑神野鬼窺覷。燕門康安元年臘月十一日。書偈而化。曰：馬鳴出西天。龍

日本書紀 本朝南僧傳卷之三十一

○四

樹入東海。聖箭已離弦。猶有返回勢。世壽七十七。法臘六十四。空全身於菩提院塔。日大定在南禪。日龍興救謫。廣智國師著見性義記。拔關要贊。曰：廣智國師壯歲還鄉。追憶母之旨。所抵志賀島。誓斷飲食。誦金剛般若五千四十卷。至三七日。人士持劍插入口中。爾後通貫三藏。今觀其欲神祇之崇。爲補大般若之逸本。說法句文宛轉自在。豈其得生修之二報乎。然此非國師之所爲。本旨只是妙悟之餘華也矣。

備中吞海寺沙門法穆傳

釋法穆字靈岳姓藤氏本州卑島人母夢吞朝日而有娠在胎十二月而誕幼齡倭悟七歲密父入福山教寺圓頂當受經法軍思放外十三易衣依開谷雲公十七掛錫洛之建仁太在相州叅太平准公于淨智久而不契尋見一山寧清拙證明極俊二大老憤排精究乾峰居福山版首穆時時請益峰董萬壽穆往依之中悅衆遷第一座結制兼拂福鹿兩山諸兄弟摩肩連袂聽其提唱莫不歎服峰遷京兆普門穆又從焉時中原騷擾盜賊盈衢慧日空齋衆僧遁逃聞爾無人穆獨切齒救其兵燹有賊脅以白刃穆無

本朝高僧傳卷之三十

○五

懼色賦金什具太穆呵土地神曰我爲佛法不惜驅命爾貴在尸素取木偶則向壁閒越三日賊來還其幽標固山聳公住慧日招穆首於來僧職滿寓備之願成文和末省峰於菩提院商略宗要一夕無端打破福平替叅得渙然冰釋辭入肥州寂鹿山中誅茅而居阻絕人烟數十里魍魎異獸之窟宅也有樵夫日餉一椀芋羹不下山殆八半禪坐不動或至五三且里民以爲神也移備之信藏寺魔時爲擾遂降伏之受三歸五戒居元妙精舍寃鬼託人曰我不平在太臣重盛之護持僧也願靈法味爲護佑藍穆爲說

法要鬼拜謝而太護法明神是也穆又開箕島之吞海寺延文三年備之成道虛席繼自讀之高臥不起乾峰製疏促之遣大義書記付南山衣藤丞相招以東福會有脚疾不就康安元年十二月十三日書偈而逝日向上下背後面前末後一句先聖頂邊壽七十三臘五十六寢獨尊之塔乾峰寂寂獨曰馬鳴出西天龍樹入東海又謂侍僧曰後三日靈岳亦當謝世於是果爾故世以一師爲馬鳴龍樹再世云

日州大光寺沙門長甫傳

釋長甫字獻翁勢州中原人叅乾峰和尙機語投契

本朝高僧傳卷之三十

○六

峰付法不偈日千佛傳來一纏頭太空縛住半肩收當機分付嶽翁了勾引兒孫弘祖臥從此一錫行化諸方因至日州郡主田島氏崇信其德營建一刹強駐杖錫大光寺是也傑閣隆樓蕩摩雲烟擁毳之徒跋扈而至除夜小叅先照後用疎影橫斜水清淺先用後照暗香浮動月黃昏照用同時霜會飲下先偷眼照用不同時粉蝶如知金蠟魂拈拄杖草一下曰恁麼批判只作孤山處上詩話會不知分陽老人開悟門何故寒梅雪綻在前村甫於州中開六精舍與聖大乘等也康安二年八月二日集衆垂誡書偈坐

化塔曰多福

筑前顯孝寺沙門正具傳

釋正具字闡提嗣法洛之法觀寺救海和尚明菴禪師六世之孫也初住法觀開法者多江州太守藤貞宗大友氏聘請董豐之萬壽包笠峰集檀越又筑前州建顯孝寺請具爲開祖鎮西道俗傾誠歸禪臨終偈曰離卻惡漏處處相見馬腹驢胎日面月面

京兆東福寺沙門至孝傳

釋至孝號無德姓藤氏越前平葦人幼年上京拜無爲元和尙圓頂進具特會中皆江湖俊髦頭角崢嶸

日本書紀 本朝書紀卷之三十一

〇七

孝不能頤頤憤然東遊歷參叢社勵志習學僅歷三載宗說兼通且精于易義辯縱橫氣壓諸方聞虎關錄公掌東福大藏兼拂欲法戰一場入浴至期出衆問答往返百轉時無爲住持憐一會久立携而入衆孝敲後版曰面前較此子背後打不著其言句唱酬人天聳聽至性變直每謂人曰越國人無靈性唯鍾於我耳應長元年春無爲求于露滿茶毘感舍利諸徒歎異孝謔言曰諸老有舍利者多爲時人所疑指其真僞取直礎上鐵鎚擊之礎鎚共陷舍利無損壞元弘元年一仙和尚舉爲南禪之第一座俄有詔

日本書紀 本朝書紀卷之三十一

〇八

令版首兼拂聖駕臨延凌晨大雪孝垂語曰雪覆千山孤峰不自異中之異一任探索問答罷乃曰曉樹放開花意思夜窻捲起月精神冷冰冰地纔短有平地依然埋沒人所以少室峰前表真像假鰲山店上表假像真短道從門人者真個不是家珍只如不通凡聖把斷要津又作麼生擊拂子曰陽氣發時無硬地嶺梅先放十分春帝心大悅兼拂垂語曰語默並離後是非徒爾爲若能通不犯開合任屑皮問答既畢乃曰圓覺伽藍紅塵紫陌平等性智綠水青山時具足日日團圓西天蠟人瞞它自瞞東土鐵彈好肉徒刺鴟那舍元殷裏誰敢更問長安拍膝日午窻已愛槐風清夜楊柳開麥雨寒結夏兼拂毘座日摩訶衍法離四句絕百非太小仰山白日寐語作麼克由耐耐過者邊看稍僧門下我愛吾廬檻前山溪水寒天際日上月下且要同此禁足同此安居亞近日王令稍嚴不許擺行套市正中三年朝旨謚無爲曰智海禪師孝奏請加大字朝議以無例不許孝重奏引清凉大法眼禪師謚焉於是制可初住城北北禪寺曆應二年大將軍尊氏源公管天下兵馬之權嘗謂安國利民莫如佛藥乃令各州置安國寺先改北

禪爲京之安國遷西條大宮之西列于十刹以孝爲  
興建開山緇白靡隨有牀六觚石幢於桂河側者往  
告夢窓國師使人洗磨題曰尊勝幢又有雕造沙門  
安國之六字甚鮮餘漫漶不見斯乃管檀林皇后遣  
沙門慧夢入唐迎義空禪師創安國寺唱佛心宗夢  
重入唐雇妙筆書尊勝陀羅尼經刻之貞石以鎮國  
家者也國師贈孝曰想天和尚再世義空也孝置寺  
之巽間廬其上扁審幢東傳祖公作記證之源公喜  
曰兆已如此國其安矣遷重東福又住讚州長興寺  
帝敕與南禪貞治二年正月十一日化于審幢院春

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇九

秋八十

京兆建仁寺沙門圓旨傳

釋圓旨字別源自稱縱性越前平氏也母依無嗣禱  
藥師佛像夢吞明珠有孕永仁二年冬十月生齡歲  
隨父郡之帆山寺瞻禮觀音像大喜又見寺僧忻然  
如舊識歸求出家父母知是夙緣隨志遂依佛種寺  
竹菴圭和尚爲童行十六鬋具一日圭謂曰觀汝氣  
宇不當久滯村院頃聞東明日和尚來自元國盛以  
洞宗唱于東關亟往拜之旨受命而行時明主圓覺  
一面許叅堂執持十二載純壹叅詳師資契投元應

二年附舶入元謁一時英衲古林茂雲外岫中峰本  
無見觀靈石芝古智哲竺三田心南楚悅龍巖真般若  
誠等當機不讓咸器稱之嘗在鳳臺古林會中掌藏  
秉拂一衆屬目以元至順庚午回任圓覺後版轉建  
長前版康永初還越州朝舍金吾開弘祥寺延爲第  
一世赴鎮西壽勝之請明半返弘祥又有檀越創善  
應吉祥二寺奉爲開山第十世文和三年東陵興和  
尚住南禪封書邀招旨作偈題善應可休亭曰孤松  
三尺竹三年招我時時來倚欄細雨隨風斜入座輕  
煙籠日薄遮山沙田千畝牛馬瘦野水一溪鷗鷺閑

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇十

自笑可休休未得浮雲出岫幾時還及孤龍山分座  
說法延文二年承鈎旨匡洛之具如翌歲患脚疾解  
印歸越貞治三年大將軍義詮源公以建仁請公命  
荐至旨不得已乃疾應之九日上堂籬邊不見白衣  
客爭得淵明興味濃今日黃花應笑我白頭扶病上  
東山十日晚叅罷病革鳴鼓離衆諸尊宿詣室問  
疾旨應接如常國醫診視謂必不待明日旨笑曰吾  
精神未耗尚可待三十日有求偈贊者走筆應之十  
月朔日大將軍遣使慰問陞弘祥寺位列諸山重其  
道義也初八日諸弟子就建仁東偏築塔基構卷日



洞春興至塔所旨環視曰此地鄰于光禪師人定之處老僧歸此不亦幸乎招中巖月公曰後事煩老兄耳至十日三鼓夏衣書偈坐化閱世七十有一坐夏五十有六諸子瘞全身於壽塔院曰定光首領偈甚多以作者鳴有南遊東歸二集天童雲外岫南禪清拙澄竺仙仙及東明著語稱讚今集下叢林贊曰別源和尚觀光元國逢一時龍象往復示義悟解無礙而才章有餘其離文字性也顯述作中矣

若州高成寺沙門法延傳

釋法延字大年豫州藤姓子蚤脫塵累質具足經

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十

〇十一

行四方徧見諸太老參竺仙和尚于淨妙一言之下頓釋疑情仙印可之付以從上的傳之衣擢充版置後入京師大將軍尊氏源公爲其道風源公慕僚伊豫刺史大高重成於若州治內葺放生寺爲禪刹聘延爲開山之祖高成寺是也德馨發越緇日鳥焦以貞治二年十月初二日端坐示寂

京兆真如寺沙門齊哲傳

釋齊哲字明交文保二年與復菴己無隱晦古先元等踰海入元參中峰本禪師于天目山辛勤得旨徧遊名利謁一時知識嘉曆初偕鄉友六人與清拙和

尚同船而歸對錫建仁時竺仙仙公住建長與哲在冷泉時舊識也哲訪福山相得互驪呈五偈公仙犬韻送之其一日誰復于今話道情不堪相送出門行斷腸過似聞猿日墮淚無因霜夜聲普住維之真如爲中峰慈香次從甲之慧林後闢正法寺爲始祖枯禪清薄頗有古人之風別源旨公贈偈曰開堂演法聽敷揚一朵優曇世上香幻住老人鼻無竅只將天目見祥光貞和三年七月二日逝矣

京兆南禪寺沙門慈均傳

釋慈均號平田不詳姓氏相州鎌倉人徧遊講肆知

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十

〇十二

解甚博後上京師參慧日道山展禪師得單傳且早有南遊之志嘗歷指血書五部大乘經年二十七遠抵金陵謁古林茂公林問祖意敬意是同是別均豎起拳頭林便喝均亦喝欬倒禪牀林呼侍者曰參堂太均便辭去見中峰本于天目月江印于何山又遊靈石芝竺雲曇無言宜清拙登雪竇常鴈山派之門皆盡之均遊天台常公送偈曰大唐國裡無禪師航海東來要見誰此太天台如問路平田婆子不相欺既及東歸曆應二年冬出世豐之崇禪嗣香酬道山歷遷播之圓應洛之普門東福延文二年夏訖陞南

禪上堂膏雨促畊田春風二月天野梅翻落雪牆柳未飛綿黃鳥浚林語白牛露地眠優遊聲色裡且說老婆禪卓拄杖曰不會待驢年半夏因建新浴室上堂前半夏已過少處不減後半夏未來多處不添不添不減九九何曾八十一六六不成三十六覺得百千香水海遠塵離垢常三昧跋陀婆羅笑點頭般若多神身無礙也大差也大奇金剛與泥人拈背退休龍吟菴臨順世書偈曰生於太來無此無彼明月行空清風匝地置筆而化時貞治三年九月十六日樹塔南禪之雲興菴有語錄一卷

日本撰述 本朝高僧傳卷之十

〇五

### 京兆南禪寺沙門仰元傳

釋仰元號古源俗姓源氏越前人初侍南山雲公後依雙峰源和尚遂承密契嘉曆二年入元見樵隱逸於雪峰問法呈偈太登天台禮無見觀以語未通疏筆來意觀誦呵曰你有什麼閑工夫至如此語妙激發誘誨至方廣寺度石橋供茶羅漢感願中現羣謁斷崖義於天且參千巖長於龍山就靈法語長劈胸一拳曰吾者裡無法語元曰謝和尚法語爾後每見元啓奉示之因有所啓發禮中峰國師塔投徧塔下夢國師親爲說法舉夢中云妙性圓明離諸名相元

感激不已留數日太遊五臺山見聖光接衆人皆驚異元在玉泉少林居版首寓二祖菴菴上常有紫雲作蓋人怪跡之唯見元宴坐會朝廷選僧百員禁中轉大藏元預焉後居水月閱大般若經忽夢母氏因然指誓曰我母若存則身心康安則超昇樂土在元二十一年以本朝貞和丁亥而歸母已去世計其日乃現夢之時也依夢愈國師居天龍前堂貞和三平住冷之大聖一香供雙峰次移等持東福及播之法雲丞相藤公請再住東福指門曰此門廣大合客法界是聖是凡出人無礙喝一喝曰汝等諸人爲什

日本撰述 本朝高僧傳卷之十

〇六

麼在門外上堂我本無心有所希求今法王太害自然而至所以道欲識佛性義當觀時節因緣時節既至其理自彰直得慧日峰頭嫩桂抽枝偃月橋邊清風匝地祖師心印一印印定古佛家風八字打開一靈明天真物物現成受用祖道大行王道大統山蒼蒼水茫茫但見皇風成一片不知何處立封疆退休南泉菴貞治三年十一月十一日因病書偈曰未後一句始到牢關擊碎鐵壁踢倒銀山呵呵書訖告衆世壽七十九元號如如道人又稱物外子

### 京兆南禪寺沙門智明傳

釋智明號蒙山。不詳姓氏。攝州玉造縣人。方辟。恃怙。但。密。元國萬戶將軍降。在本州。頗博識之士也。愍。明。幼孤。養。以爲子。操。鄉音。教。四書。明性敏。點就。下。能。誦。鄉黨相勸。投。施藥院。難。染。習。毘尼。法。厭。其。細瑣。十六。棄。公。依規菴和尚。于南禪。示。以。本來面目。公案。坐臥。注念。不捨寸陰。卒。微。父母未生。已前。事。曲司。藏。鑰。秉。拂。垂。語。日。滅。龜。焚。舟。用。盡。機。籌。單。力。直。入。要。見。俊。流。菴。稱。善。菴。滅。後。一。山。和。尚。踵。席。以。明。充。書。記。禪。冊。中。所未。論。者。不。須。重。譯。而。質。之。靡。不。通。曉。嘉。曆。末。振。錫。入。相。州。到。處。禪。利。待。以。伉。禮。明。極。和。尚。住。鹿。福。間。舉。

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○十五

居。第一座。會中龍象。極。衣。請。益。既。而。杜。關。閑。毘。盧。大。藏。徑。復。疾。于。福。山。之。宗。蒲。作。問。吟。十。偈。有。地。水。火。風。元。屬。我。孤。燈。相。對。眼。如。眉。之。句。清。拙。竺。三。仙。序。跋。賞。焉。曆。應。初。大。將。軍。尊。氏。源。公。聘。請。開。法。筑。之。聖。福。辦。香。供。規。菴。一。居。六。載。解。印。入。洛。左。武。衛。將。軍。源。直。義。延。見。問。法。恨。相。知。之。晚。乃。董。建。仁。尋。舉。南。禪。以。臘。德。高。四。衆。斗。仰。如。百。川。歸。宗。擬。上。乘。院。爲。先。喪。地。大。將。軍。義。詮。源。公。爲。先。妣。一。品。夫。人。講。明。陞。座。闡。揚。宗。要。後。光。嚴。帝。臨。幸。其。第。垂。簾。睿。聽。皇。情。大。悅。敕。賜。金。字。法。華。經。一。部。水。精。念。珠。一。臂。錦。被。三。領。明。自。少。至。老。日。

課。法。華。經。一。部。寒。暑。無。闕。每。夏。講。首。楞。嚴。辭。辯。無。礙。聽。者。忘。執。下。日。示。疾。遺。誡。門。人。書。偈。日。住。安。想。境。滿。九。十。年。虛。空。崩。裂。倒。上。梵。天。薨。逝。卽。化。時。貞。治。五。年。八。月。二。十。日。也。世。齡。如。偈。法。臘。七。十。又。五。火。浴。五。色。設。利。爛。然。以。平。生。所。持。楞。嚴。殉。于。閻。維。而。無。欲。一。字。不。盡。見。聞。歎。異。門。人。琢。水。精。輪。到。中。與。舍。利。俱。安。之。字。畫。炳。然。見。于。外。號。無。欲。舍。利。塔。焉。

京兆南禪寺沙門元晦傳

釋元晦字無隱豐前州人。遍歷本邦叢社。又遊元國。參天目山中峰和尚。太謁諸尊宿。旋止中峰。鉅下遂。

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○十六

得悟達。奉定三年。與清拙和尚同船。而歸。拙住。建仁。晦爲第一座。江州太守大友直菴居士聘請開法。筑之顯孝。嗣香供中峰。歷遷聖福及相之園覺。建長洛之建仁。說法提唱。如雷破柱。寺衆食日。開山千光國師再生。王臣歸嚮。輩下傳風。有詔董南禪。繼白蟻禮。不絕。壹州檀越創安國寺。晦爲第一世。後歸粉里。建天目寺。卻掃養老。凡學人有所問。晦曰。趙州因甚。道個無字。學人擬開口。晦便怒罵。以延文三年十月十七日。示于福智寺。敕諡法雲普濟禪師。

相州建長寺沙門妙悅傳

釋妙悅字可翁大友氏日州人也。參仕佛國禪師久，而機契出遊名區，抵遠之貞永寺訪玉峰圭公，因賦一律，曰：遠江名利甚清鮮，此土徑山日本東。南北佛樓高聳嶽東西，靈水淡湛深三塗。趣類脫三惡，七谷風煙橫七峰。到此難成常樂夢，嶺松風勢數更鐘。後承府帖出世，建長一香供佛國僧中，鸞鳳集天下禪林。構正本菴為終焉處。某年八月二十二日晝，偈而化。傳燈錄

上州長樂寺沙門得藏傳

釋得藏號放外參明極俊和尚，發明心機，出世攝之。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇十七

樓賢移上長樂，高識博辯快若懸水，垂侶輻湊得實而歸。靈光獨耀，迥脫根塵，上士悟之，明中不見跡。下士迷之，暗裏施文彩，所以道三級浪高魚化。龍癡人猶屋夜塘水，且道迷悟明暗作麼生。分向下文長，上待來日藏遊化諸方在。常州鹿島菴根本寺而居。治四年正月三日化于長樂壽光院。

賀州大樂寺沙門素哲傳

釋素哲字明峰，能州人。或曰幼出家，台嶺長掛搭建仁後往賀州參瑩山瑄公。山見其器度，命司侍司，遂山遷諸刹，參侍影附，常喚哲侍者。哲應諾，山曰：是甚

麼？哲終不契如是喚者二十許年，猶如香林遠公於雲門也。一日悟徹，山問：日有一人能變作萬物，你還知麼？哲曰：知之久矣。山曰：皮膚脫落盡，只有一真實。又作麼生？哲曰：本不脫落，何有真實？山領之，印可。因請益達磨不說話，山乃付書參同州傳燈寺恭翁禪師。翁相見畢，都無宗說，只申寒溫。耳哲亦不舉話，七宿而太翁返。簡曰：這僧參徹不識話了也。山以說示哲曰：明眼宗師有發藥也。山開永光命哲分座尋，屬日因緣正熟，時節亦至。你宜代我繼大乘席，乃付傳來。衣說偈曰：永光燈下列焰，人照破劫空氣象新。凸

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇十八

出明峰難藏匿，全功轉側露全身。哲頂受衣偈，亦呈偈曰：永平付法傳不信，嫡嫡師資面授來。東嶺華言提不起，而今著得化門開。遂住大乘寺，移永光越之檀越，勸充禪寺延為開山始祖。三三三，道場風規真密，參徒歸心。觀應元年三月二十八日示疾，鐘聚眾書偈而化。壽七十有四，臘五十有八。門人火浴分舍利靈骨，塔于大乘永光禪三寺有嗣其法者二十餘員。

能州洞谷山沙門了光傳

釋了光字寂室，侍瑩山和尚于總持，參無涯洪公于



賀之常住。一日厓問于還就父時如何。光曰。今日親入室。厓耳之。果承印訣。出世洞谷山。洞上翠賓日盈。寮內有弟子宗可字中庭幼。從寂室得五位之祕訣。泛海入元。偏謁濟洞諸老。登太白山拜長翁淨禪師。塔先是有雕。乃祖道元和尚牌。入南谷菴。祖堂者。歲月已久。牌亦湮沒。可命工刊牌。再入祖堂。後在發之。雙林叢明極。極問汝。諸方必有付授。若有呈露。老僧是則與汝證明。不是則剋卻可展兩手。曰。是什麼。極休休。及辭歸。東極書法語贈之。可出世洞谷有弟子七人。

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇十九

京兆南禪寺沙門永興傳

釋永興。元國四明人。東陵其號也。自少參方。隨天童雲外岫和尚。得洞上之宗。開法本州天寧。學徒奔歸。常志游扶桑。而無由渡海。至正十一年。春。崑山客。謂曰。大倉縣有往日本船。興欣然登也。附載來過。風順。濤穩。經二旬餘。著博多津。本朝觀應二年也。憩聖福寺。秋七月。入都。謁夢隱國師。稿其還涉。延館西芳蘭。若待遇。溪翁會玄。無極謝天龍事。國師亦坐病牀。即屬興以寺務。上堂未離南土。白日青天。既到扶桑。山長水遠。應緣而住。似鏡臨形。幸無彼此之分。那有本

日本書紀

本朝高僧傳卷之十

〇二十

來之間。若使提持綱要。接物利生。豈是小事。況茲山乃奉後醍醐帝。道場實大。國師開山。力建真獅子窟。非驢所堪。退讓出於至公。不免經過。僧路且道。即心即佛。非心非佛。不是心。不是佛。不是物。又且如何。語會溪山各異。雲月是同。只如今日開堂祝聖。一句如何。舉似。但見皇風成一片。不知何處是封疆。明年秋奉詔。遷南禪上堂。若論此事。如某日常空。無幽不顯。法法皆是。真乘物物悉為妙用。廓人天正眼。控佛祖玄機。截斷衆流。更無回互。心外無法。法外無心。坐斷十方。壁立萬仞。且道。明功僧位玉轉珠回。開堂祝聖。奇特一句作麼生。道。四方盡沐。無為化。萬姓咸歌。樂太平。晚參上堂。南泉十八上。解做活計。趙州十八上。破家徹宅。二老未免作得失商量。山僧遠來。茲土若老。太大本年蒙天龍國師以爲出格上流。交在持。今年承左大將軍以爲遠方禪補席。南禪天下西邊。衆難拾得。東邊本杓。但得有鹽有醬。有米有柴。自然國家安和。說甚人我非是。卻不得平地生堆。無風起浪。何故事無。太公當心者。憂復舉馬祖問。華山日見處。如何。山口皮膚脫落盡。惟有真實在。祖日子之所得。可謂。慨於心體。布於四肢。既然如此。宜將三條

篋東取肚皮隨處住山太輒成下頌藥山病在皮膚  
上馬祖改散入腹心卻把肚皮二後來看他真色是  
黃金璣在大仰與清拙友善及至此方大鑑遷化璣  
大息不已因作塔上之銘璣後住相之圓覺建長化  
導甚盛貞治四年五月六日吉祥而逝塔於南禪寺  
西雲菴朝廷崇德敕諡妙應光國慧海慈濟禪師之  
於貽厥故行實不全焉

贊曰禪祖之來自支那者以慮十有五人皆是一時  
英傑也歷遷五岳宗規傳世璣公殿後來唱新豐曲  
禪海之深雖不及古而非今時明僧之類然觀其署

日本書紀 本朝高僧傳卷之三

〇三十一

述間有所蔽於說鮮為璣公慙之學者詳焉

本朝高僧傳卷第三十

音訓

椿 測洽切 昨敷凡切 闌 苦鼻切 切干結切 瑟 蘇典切

脅 虛業切 懽 質涉切 鹵掠 上郎古切 下力 魍魎 上抽切

下真殼漏 約切 擠 嚴西切 讎 多量切 礎 諸溪切 精 漫

漣 上真半切 下胡 雇 古慕切 楷 丘皆切 嫩 奴困切 恃

帖 上時吏切 操 七到切 雜 丈凡切 伉 口浪切 杜 徒古切

也 朝 空胡切 虛 炳 補永切 涿 徂紅切 厚 荒故切 凸 訥

切 璣 雲俱切 犒 口到切 松 苦貢切 鹽 移廉切 醬 子亮切

度 補列切 柝 設 兵彌切 篋 竹筠也

日本書紀 本朝高僧傳卷之三

〇三十二

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
本朝高僧傳卷三十 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第三十一

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十三

能州總持寺沙門紹碩傳

釋紹碩號義山姓源能州瓜生田人母室禪又殊大士求智慧之兒夢吞利劍有妊及生骨相清奇漸長操執密顯厭處置塵年十六陟睿嶽落髮果戒學一心三觀之旨雖圓理妙心尚懷疑年二十三聞堂山禪師闡法於賀州大乘特往謁問曰祖意教意是同是別山曰別碩曰別處作麼生山便入寢堂碩盤桓

本朝高僧傳卷第三十一

〇一

沈思因夏衣掛搭勵力參詳一日問曰智不到處請師道一句山曰踰過了也碩又無指山曰何不道將來碩擬開口山便打碩於是省從此機辯浩浩無觸其鋒者一夜對月坐至三更心身湛寂物我俱忘山於碩耳畔彈指一聲碩豁然開悟辭遊諸方勘驗知識謁恭翁良禪師翁一日命碩煎紙風吹撩亂翁問是風動是紙動碩即舉尺翁曰真我弟子也碩曰祇承和尚證明走而後歸粉里山舉住一方碩不肯就養胎間房下十餘年元享四年山自製疏召碩曰吾已耄矣子當代吾接衆碩導命繼其席玄學濟

濟山中謁著示衆曰至大休大歇處指骨一句子葛直踏著本有田地不落古今事物表獨進誰能親淨裸裸赤灑灑地絕瑕纇自己真照淵源是名智不到處可哀墮在解脫溪坑不免寂滅工夫欲得無上妙道此外更有超方一件委悉參徹骨看妙中有真玄所有路此謂異中異爲同中同故云鷲鷲立雪不同色明月蓮花不似他了了常知明明常真與麼參到辨取依那邊不住不守閒田地此時消息風前野馬過陰裏相似古德云寶殿無人不得立不種梧桐免鳳來貞治四年十月初示有微疾二十日夜半寂

日本撰述

本朝高僧傳卷第三十一

〇二

沐已遺詠諸徒書偈曰合成皮肉九十一年夜來休舊橫身黃泉置筆長往停龕七日容色如常開維得五彩舍利無算四衆悲慟如喪考妣門人胥議塔于本山西北隅

贊曰碩公長養閒房餘二十年人天推出紹董師席接出四七之嗣法今其孫葉播于東西大概道者五世而衰是常數也如碩公承永平五世其法還盛蓋知識門庭以有格外之玄也與

奧州拈華山正法寺沙門良韶傳

釋良韶字無底姓藤能州酒井保人年過弱冠俄厭

世相拜，我山於總持剪髮得戒，隨侍年久，辭參明峰  
香公于大乘看香嚴擊竹話工夫，不弛得有省處，還  
參我山。一夜聞僧堂啟聲，廓然契悟，趨丈室，啟山曰：  
良部與觀音薩埵同圓通門，山察其機，許可。興州檀  
信長部重義貞和四年夏，建精藍於黑石，請師開堂。  
說法山號拈華寺名，正法有衆千指，此我山門下開  
伽藍之權輿也。文和四年秋，受請住能州洞谷，住職  
一回，退鼓而歸。正法延文三年春，馳書諸嶽，欲請  
我山。山答書曰：其地遠，阪吾已及耄，期佛法唱導有  
幾年矣。幸長老爲我上足，而新開梵刹，旺化東關，總

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十一

〇三

京兆萬壽寺沙門令淬傳

釋令淬，號龍泉，後醍醐天皇子也。其母始夢有一神  
人身，懷中冒手捧寶塔，放光觸身，因有娠焉。其在胎  
時，帝賜母於源氏某，生於尾之海東郡。誕彌之夕，果  
祥孔多，孩孺口吃，一日忽叫曰：韋駄天自爾能言，乳  
母平氏好學，通佛理，口授諸神咒。淬卽能誦，卽年讀

書，聰慧過羣。一日問乳母曰：吾平生眼見耳聞，身觸  
意想，總是由一此，一個無形而主衆體者，果是何物？  
乳母曰：此是衆生，本有實相在，諸佛不增，在凡夫不  
減。淬點首焉。乳母謂人曰：此子今既如此，後不可測。  
父知是有夙緣，乃投虎關和尚于濟北菴，執童役，關  
師器重之。及薙髮進具，勵志叩請，關師住勢洛，諸刹  
淬皆從侍，不離左右。內外載籍，無所不通。建武元年  
首，衆于濟北帝召于便殿，問示要，厥後罷，遇益渥，帝  
寫疑難數條，問淬。淬造釋疑論，以進。皇帝大喜，買和  
二年，淬在瑞松南王後村，上帝賜詩，求淬海東牡丹。

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十一

〇四

淬次御韻曰：夢破春闈塵事空，芳心一點遠相通。同  
根知是在天地，花發南山與海東。蓋南帝淬之兄也。  
虎關順世淬居海藏，觀應元年擢東福第十座，職滿  
主榜伽圓通筑之承天洛之萬壽，率夷禪客歸之如  
市。上堂昨日定野菜，折鎚底添油，滋味新踐，呌作三  
徑踏，啖成四隣。今日不定手把鉗斧子，來稱住山人。  
將渥兩度，王草辨五合陳，向東家說事事，無礙法門。  
向西家論彼彼，互換主賓。昨日今日畢，竟如何。十方  
諸國土無刹不現身，拍膝云：千年桃核裏，只是舊時  
仁。淬在圓通時，賊盜鉢去，淬作偈曰：應供隨身三寸



年幾乾，幾渥口朝天夜來忽有人拏去，感得誰家貓鉢傳是日鉢大鳴于空而還，眾僧驚異。元亨二年虎關和尚撰述釋書，請入藏函兩回上表，朝議散散而不行。延文五年，卒償先志，誦關表奏聖王有簡赦許入藏。貞治四年臘月十一日示寂。海藏著松山集三卷，海藏紀年錄一卷，其行于世。

京兆建仁寺沙門至遠傳

釋至遠，號孤山，紀姓，紀州人也。初在母胎多諸祥異，及生聰慧，出羣稍至。齠年投法燈國師，國師試授聖經遠誦之如舊習。國師摩頂曰：汝再來人，他日必興。

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十一

〇五

吾示矣。年方舞勺，落髮登南都戒壇，受滿分戒。俄得病，瀕外遠向佛誠禱，夢麗僧瑠璃鉢盛茶飯，令遠啖，味甚甘美，寤香氣在口，其病即瘳。從此華髮，終叩溪叢法本去遊，諸方謁約翁儉禪師於建長，命侍燒香尋曲，藏教翁舉古則徵詰，遠酬對的當，翁極稱之。見明極俊禪師，需法燈國師真贊，感圓像跣跳事，見法燈章見清拙澄一山寧西礪臺諸大老，因不蒙許可，歸出世，鷲峰歷在大雄建仁等諸刹學，若追隨大括示綱，遠律身精嚴，不儲長物，所獲檀施登便與入又善起廢支頰，所在黑白崇尊，稱為光明幢，貞治五

年七月九日遺訓諸徒吉祥，趣寂享年八十九。坐夏七十六，敕諡實照禪師。

江州永源寺沙門元光傳

釋元光，號寂室，姓譜藤氏，作州人也。生時神光照室，親族稱異。妙齡睿智秀發，羣兒相率釣小鮮，屬光護焉。光憐其有命，皆放之。及壯歲入京師，從無爲元禪師學，出世法十五，削染受戒，辭去遊方。寓江州田上縣，見僧閉關坐禪，心竊愛慕。一僧謂光曰：子才氣不庸，胡抱繫於茲方？今東關有約翁和尚天下宗匠也，大開爐韞，鉗鎚學者，子能就之，必成大器。光即挫其

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十一

〇六

僧而往。時翁居禪興，疇昔夢諸聖降臨，光照山河，及光至，喜許參堂，名以元光。於是研精證夏，德治二年翁王洛之建仁，命侍湯藥。一日翁不安，光問如何，是末後，一句翁劈面一掌，光豁然大悟。時年十八。明年作雪達磨偈曰：暫借空拳示半標，普通生事未迢迢。西天此土飄零恨，縱使春風吹不消。一山國師一見拊掌稱賞。延慶己酉翁歸鎌倉，令光從金澤慧雲律師學毘尼。甫九旬盡其梗槩，復侍東里會一山寧東明日二大老益受重灼，元應二年與可翁然鈍菴俊等渡海入元，直登天目山謁中峯本和尚，尋訪元叟

竊古林茂清拙澄靈石芝之絕學誠無見觀斷崖義等  
諸尊宿悉蒙獎識泰定三年已理歸帆一時諸彥皆  
有贈言海中風作怒濤排空舟人失色光至心默禱  
忽曰衣大士現於空中遂風息浪恬著長州濱寓三  
角縣建武初備後吉津平居士創永德寺延之光素  
厭喧塵考槃雲宜輟晦備作間二十五年觀應初年  
僑攝之福嚴繼居江之往生濃之東禪甲之棲雲延  
文五年江州刺史源氏賴佐佐木氏戴欽光德望獻  
輿爲雷溪曰此一境吾州山水皆且也師任性居焉  
光入雷溪見其僻遂甚愜素心乃錫祖獨歲續梵宇

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇七

勝邑士庶競至誠夜未幾殿閣堂樓涌出林標雲永  
源寺當是時四來龍象二萬指若玉琬芳一關天月  
心園大拙巧等倚品傍澗縹緲樓臺寶山榜之盛事  
也信尼慈源施山下腰田若干畝以充香積光明帝  
屢賜手詔旌乎其德康安身治間源副帥有相之東  
勝建長之請鈞命起以豐之萬壽俱不赴光明帝降  
天龍之詔春屋範公中巖月公寄書從吏光力辭不  
就帝復賜手詔問法要光乃報案以法常禪師問馬  
大師如何是佛大師曰卽心卽佛因緣曰恭惟陛下  
辱蒙被下手詔懇求一句子禪私願某法社庸流叢

林晚學全昧宗乘退守頑愚耳竊念古德云五言無  
語句亦無一法與人此說之下間不容髮直得三世  
諸佛編子歷代祖師吞聲然雖若斯賜詔且及再無  
處逃避勉強繕寫如上因緣謹以進奏伏願陛下萬  
機餘暇一切時中將個卽心卽佛之四言置于宸襟  
起大疑情勇猛精進舉覺提撕當闢大疑之下有太  
悟小疑之下有小悟疑來疑去忽爾疑情破則頓見  
本來面目明徹本地風光那時覓心終不可得寧復  
佛之云哉非翹坐斷報化佛頭亦須懷與唐虞帝業  
者耶帝見忻然有簡錄舍元帥源基氏遠齋手簡諮

日本書紀 本朝高僧傳卷之五

〇八

心要光示僧偈曰個事明明呈似君不須特地策功  
勳風和日暖黃鸝啼春在花梢已十分其長篇短偈  
婉雅如此貞治六年化緣將終命彌天靈仲二門人  
預撰祭文九月朔集諸子於合空臺遺誡託書偈曰  
屋後青山檻前流水鶴林雙趺能耳隻履又是空王  
結空子擲筆卽化世齡七十又八法臘六十又二諸  
徒營塔空于全身牘曰太寂緇白哀慟如喪父母所  
度弟子千餘人授衣號者不可勝記平生所置齒髮  
後悉綴設利光善楷書逢火字畫不壞皆往往在焉  
小師道證初學密教欲拜弘法大師定身誼高野山

宿于塔下至心祈求弘法感夢曰子欲觀我乎今旺  
化江州稱寂室是已證詰且赴江州中路遇靈一燈  
子者展而觀之則光之真也證意異之既躋瑞石山  
山下有村曰高野益信前夢之有驗即更求拜手就  
弟子列云有語錄兩帙盛行于世賜諡曰圓應禪師  
贊曰知者樂永仁者樂山豈必親魚鳥愛林木之謂  
乎哉此單介性所至也圓應師續焰佛燈規風普應  
宗說全禪文熟一生愛烟霞不蹈京華然亦枯木之  
東逐臭於巖磧間蜩結蟻聚者四千指可謂得趣之  
時也或者作圓應師傳贊曰憤當世惡知識痛自韜

■本集是 本朝高僧傳卷之五十一

○九

晦余謂是欲褒圓應師卻諷圓應師也夫達道之士  
皆能色空等觀物我都不何嫌擇之有其廢眾單丁  
名利窮終任性所至而不一其跡當是之時本朝叢  
林豪傑輩出宗風爲盛孰爲惡知識耶若果如所言  
隋唐之世慧思普寂懶瓚法常隱之純古者降迨蒙  
元石屋栢堂中峰隱之蘊藉者也是爲矯世憤俗乎  
凡評藻人者據己量之所稱或者胡若見之隘也耶

京兆南禪寺沙門義天傳

釋義天宇無雲實茂氏山城州人厥先世掌太史天  
釋歲師事建仁鏡堂圓和尚年十七圓公順世遂就

靈龕剃髮初侍規菴圓禪師于南禪大依蒙山明公  
後杖錫遊相州參靈山隱和尚于建長既而入支那  
謁雲外岫和尚于天童且爲本師圓和尚求安牌法  
語去見諸知識歸本朝寓洛之東山時石梁恭公重  
席接四來延天爲版首及清拙澄和尚遷住亦屈天  
復其職貞和二平開法橋之法雲乳香醜鏡堂時年  
五十七有洛之安國之命辭不應文和六年有遷住  
建仁構光澤菴養老晚領南禪貞治六年五月二十  
七日寂于東山本菴壽七十八臘六十三遺偈曰一  
靈皮袋皮袋一靈四大分散作甚麼形阿呵呵休定

■本集是 本朝高僧傳卷之五十一

○十

論木馬嘶火裏泥牛吼海門

京兆東福寺沙門一清傳

釋一清字無夢嗣法普門玉溪瑤禪師又在南京廣  
闡教乘嘉元年中入元遊諸老之門謁龍巖真于廬  
山樵隱逸于雪峰又依東陽輝和尚于百丈命居後  
版結制秉拂翼日輝公上堂對衆稱之歸來寓備之  
寶福延文四年夏住東福上堂拈香曰此香熟向爐  
中供養元國所參見諸大知識以報一句一語請益  
之恩復拈曰此香全無香氣不直半文今日對衆拈  
出奉爲前住普門先師玉溪和尚不是報恩酬德要

且知有來所自笑作曰世間誰管事紛紛靜坐茅簷  
到夕曛白髮重添今歲雪青山猶帶去年雲晚逸老  
于天得菴應安元年五月二十四日逝有辭偈曰一  
願審珠祕人我山今日擊碎地濶天寬

京兆東福寺沙門士偈傳

釋士偈號友山始名士思字友姓藤山城州山崎人

也齠齡英俊有離俗之志投東福南山雲公及染稟  
具父母見其爲僧相俱謂曰唯有二子今歸釋種於  
世幸無拘束不如出家去矣同時圓顯染木文保初  
南山領圓覺之命偈隨侍焉參闡提于蔣山爲侍香

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○十一

謁潛溪于瑞龍司藏教嘉曆三年與法兄正堂顯公  
同遊太元時年二十八周歷兩浙來敲樵隱逸月江  
印南楚說古智哲平石砥無見觀了菴欲參堂聖之  
門皆有所啟迪最所宿適者月江南楚也首謁月江  
于具淨呈偈江和之曰山河大地本天然何用千言  
與萬言拈卻扶桑并渤海倒騎佛殿出山門風頭稍  
硬難回互爇處商量就討論二十鳥藤輕放過要知  
一滴出曹源去見空林果公于松江時有水災吳中  
禪刹鐘鼓聞備行脚者無納屨之地空林念偈異邦  
之客歎雷過冬遇之如骨肉因往來其門殆七年矣

是時國僧在元者石室玖無夢清此山在無涯浩

一峯玄古鏡千古源邵等互加鞭勵至正四年偈在

姑蘇承天南楚會中居後放冬至秉拂偈錄呈月江

江贈偈賞之南楚贈以長偈有序曰扶桑友雲首座

命居第二位說法機圓語活有作者之氣樂職滿東

歸異時當大有爲以恢吾宗吾尚翹首東望故說偈

以張志云眉間掛劍血射北斗全殺全活全放全收

株過西天此土坐斷四海九州個是英靈烈漢不同

捕影迷儔更奮九天扶搖鵬搏之壯志漲起扶桑那

畔百萬里逆水之洪流至正乙酉夏與此山在公同

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○十二

理歸棹僅經兩月到博多津當此方貞和元年尋入

洛陽明年訪柳溪愚公於西山臨川三十年前相州

鹿山之舊遊相得甚驩分席以居二年丁亥應甲州

淨居之請一住三載大播禪化觀應三年移京師安

國相二門曰百千毘盧樓閣門八字打開了也普請

諸人從這裏入延文二年春建精舍於山崎扁曰正

續慕徑山圓照也康安元年釣帖荐至主東福及臨

川勉退臨川逸老于慧日山萬年菴應安二年六月

一日屬病書偈曰生是何物死是何物打破虛空風

生八極書畢而逝享年七十法臘若干夏



相州圓覺寺沙門契閑傳

釋契閑字不聞晚號萬休叟姓平武州河越人也母感奇夢而產里中有講主言人禍福壽夭甚驗見聞摩頂曰此兒多奇相若歸釋氏必作苦海津梁也聞警敏絕倫一切文字不由師訓自然通曉伯氏有禪者攜往鎌倉投東明和尚于圓覺執童子役明俾讀法華六日七軸記誦明乃執卷覆之問誦誦至審塔品琅琅不差一字明大驚歎十四剪髮登具睿山戒壇還依東明于建長典賓客職滿上洛周旋虎關鍊雙峰源二老之門日增智證正中二年歲二十四發

日本書紀

本朝高僧傳卷之五十一

〇五

南遊之志西抵豐州時闍提照公路將山熾接方來聞卸包依之翌年帆海入元徑登公州天台山見無見觀公于華頂遊方廣度石橋既下入浙謁東嶼海于靈隱靈石芝于淨慈請益交多一日遊錢塘江官吏怪異域人禁收送武昌聞譽譽若公題詩館壁曰孤筇遠入異鄉雲滿耳語音渾不分唯有蒼頭深夜雨蕭蕭猶似舊時聞會高昌王子請居在州讀其詩有感召見大喜乃請有司遂爲義子聞從惟凡日誦金剛般若經凡一百部又瀝指血寫法華六部又宗爲梁王時自金陵往武昌到帝師殿適遇帝師不在

唯聞一人在焉王將設拜聞遠起避之王曰我見釋氏必拜非獨拜卿也聞不復已而受拜高昌王赴召于燕京欲將聞俱行聞以夙志未果辭抵金陵謁古林茂月江印斷江恩三二道諸老皆加意慰誘如杭再參靈石于南屏服勤三年凡在元九白東明寄書東歸乃省明於圓覺東堂一日入室廓然了悟作偈呈明明倚韻印之清拙和尚住圓覺舉聞掌箋翰及明再遷建長擢居第一座曆應庚辰東明寂于鹿山白雲菴囑聞以後事聞廬于塔下心密三年武州藤氏天覺居士延居瑞應精舍無何出世駿之清見一

日本書紀

本朝高僧傳卷之五十一

〇六

坐十年遷相之淨智圓覺所至湖海之士歸湊輪下貞治初歸隱瑞應新築梵音丞相義詮源公聘補建長聞辭以偈曰老病相侵氣力衰鳥飛西欲入崦嵫國恩曾荷乾坤大放待昏鐘一杵時應安元年七月遭病十一日書偈曰也大奇也大奇末後一句無人知大洋海底遭火熱虛空產下木羊兒擲筆坐逝壽六十八臘五十三門人斂靈骨塔于瑞鹿山等慈菴肥後正觀寺沙門元恢傳

釋元恢號大方姓菅肥後人拜秀山中禪師於筑之圓覺剃髮爲驅鳥參從久之命居待局依嵩山中公

于相之建長司輪藏去叩諸刹飲聞飽參後旋故鄉  
征西親王南朝皇子及太守菊池武光並爲檀越聘住正  
觀寺又遷筑之顯孝鎮西道俗悉歸法矣晚返正觀  
應安元年六月九日入寂門弟子曇聰入元參天寧  
楚石琦和尚持大方肖像爲請贊略曰其出也說妙  
說玄儼臨大衆其處也收綸罷釣高臥閑房

### 京兆大德寺沙門義亨傳

釋義亨號微翁世姓源氏雲州人母氏夢抱劍而娠  
誕日多奇祥甫六歲便知有此事稍長入洛禮建仁  
鏡堂圓和尚爲師昕夕惟以坐禪爲務堂遷化後十

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇十五

九祝髮稟具問其法兄曰天下今方有真善知識否  
兄曰東關有佛國禪師京城有大光國師亨卽日參  
大光于南禪光一面器重及再參光亦順世亨方慨  
歎有異僧指見宗峯禪師峯時韜藏洛東雲居寺數  
至拒不許見亨懷香通報曰某甲爲究明己事而來  
若不受面命永失出家之志峯知其誠懇許之享決  
意依附峯看臨濟語問曰不與物拘透脫自在意旨  
如何亨連下語不契緣是益加勉強殆忘寒溫一日  
大悟作偈呈峰峰以牛過意棉話話之無礙峰卽印  
之嘉曆初峰開堂龍霽山朝昏侍奉請益酬唱分座

說法聳動人天有僧告別亨送到門首僧行數步亨  
喚上座僧回首亨曰我不如你僧無語亨舉似峰峰  
曰我會中僧豈無後語亨曰縱有又是賊後弓峯乃  
吐舌有僧來議亨問清風凜凜正與麼時如何僧曰  
從者裏來者多從者裏去者少亨曰未在更道僧便  
喝亨曰我被你一喝僧又喝亨曰二喝四喝後作麼  
生僧連喝兩喝亨曰待與你把手共行僧舉似峯曰  
首座敗闕也峯曰那個是他敗闕處僧曰某甲四喝  
總無空處首座曰待與你把手共行方是敗闕處峯  
笑曰他是大人境界一挨一拶皆是從上諸聖行履

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

〇十六

你且歸堂子細究決看建武四年冬峰將入滅命亨  
權手事明年春奉敕開堂都下雲衲競來盈門指紳  
貴官問道者無虛日三寶院玄俊僧正就亨問教外  
之旨結夏上堂上根人向虛空裏安居中根人向拂  
子頭上安居下根人向枯木堂裏安居龍寶一衆不  
是下根向虛空裏安居底多向拂子頭上安居底多  
請各自道來看要識多般底示禪者曰今時學道人  
十個五隻以無念無心而凝坐矣不知爲甚麼事若  
以是爲大道現前時節無心猶隔一重關有甚交涉  
若也爲趣向時節無情不解道有甚麼相應時節須

知以心傳心以心明心如云見色明心聞聲悟道豈是無心而見色無念而聞聲亦如云即心即佛即今心外豈別有佛非心非佛亦豈可無念無心而承當既云非心非佛豈不是呈心佛語行住坐臥造次顚沛不是非心非佛時節著衣喫飯何屎送尿不是非心非佛時節所以道經行及坐臥常在於其中若此知歸則不以無心無念爲道不以無心無念爲而於天然無理會處著勇猛志忽然明見即心非心即佛非佛矣思之亨設三語以驗學者曰者個非目前目前非者個若人透過此兩轉語心徑若生無有

日本漢書 本朝高僧傳卷之三十一

○七

契其機者至老歎曰我會中究竟教內者甚多悟教外者且無一人三十餘年徒弄唇吻暨結制日乃於佛前誓曰今夏若不得入我必斷舌盡未來際不開口也遂令大衆不分晝夜咨參請益至中夏言外忠卓然立二子果有開悟亨便謂衆曰此二禪和知老僧舌頭落處亨就寺前別開一寺鑿池鑿石宛有塵外之風致煥曰德禪自治六年秋大將軍義詮源公奉朝廷乙大德德禪兩寺遞代皆俾亨之兒孫甲乙住持又請亨主天龍堅辭不就一日示有微疾端坐書偈曰觀面當機佛祖吞氣一機轉處虛空落地投筆

而化實應安二年五月十五日也世齡七十又五法臘五十又六茶毘奉骨塔于德禪教誡大祖正眼禪師亨靈臺宏邁道岸嶮巖雖老叢林者禪見其面有語錄二卷行于世寬永間亨遠孫澤菴彭公操履俊爽道聲鳴世太上皇召宮闈法皇情大喜將賜國師之號彭辭曰古來蒙徽號者皆名德之宗師也某甲何敢當焉徹翁禪師大燈國師上足吾門宗祖也未有此號伏願重賜追諡以光偉德於後昆焉上皇善其言加亨曰天應大現國師贊曰續佛祖之統寄爲人天之導師者厥生質必出

日本漢書 本朝高僧傳卷之三十一

○末

常流之隊焉余讀大現國師行狀巍然有傑出之家臨終封一帖子曰如來正法眼藏無付於人自荷擔至彌勒下生噫嘻臨濟大師與三聖問答畢曰誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅卻與國師之言一般無二焉且道諸人正法眼藏滅卻即是不滅卻即是不誤弄精魂焉

### 相州建長寺沙門正因傳

釋正因字明嚴不詳姓氏相州人久隨建長西禪曇和尚把注禪源初住建長後移圓覺學人景行法儀肅如晚逸居鹿山正傳菴應安二年己酉佛誕生日

說偈而逝。偈曰：寂滅爲樂，猶涉多岐。厥蛇出，卿踢倒。須彌葬于本菴，敕諡大達禪師。

### 相州建長寺沙門慈永傳

釋慈永，字青山，姓紀氏，紀州玉津人。幼年英發，讀孔老書，日記千言，性好桑門，無經世意。依本郡傳法院，習釋典，粗通義理。一日出遊，抵一茅菴，見僧宴坐，投誠。法僧察其不凡，曰：法門雖廣，頓斷生外，無過禪宗。永聞得，感發，即日剪髮，直拜東福南山禪師圓具。戒法隨衆入室，永善音聲，輪命爲悅衆，辦事繁，輒執金剛經書其陰，以此生若不大事，因緣冉不出。

日本僧錄 本朝高僧傳卷之十一

〇九

人間起軍遊方，華夷叢社足跡殆遍。夢憲國師于天龍，親炙二十餘年，發明大事。時年四十二，國師舉住甲之慧林。此時以諸兄未出世，永讓于德弗受。國師笑曰：若圖德出世，我也不能只要佛祖慧命長，不斲子往，懋哉！國師遷化，天龍虛席，衆議指永。東陵璜和尚補香，請永乃解印上洛，帝召宮問，示要奏對。愜旨，留食舍，三日每日入內，睿寵甚渥，即賜天龍住持之黃牒，永謙退，不住。遷居多福，未幾，領播之瑞光大將軍義詮源公請，主洛之等持軍務之暇，入寺聽法，移相之淨智洛之臨川。太皇太后詔，權伏見大光明

寺時，光嚴光明兩上皇落飭，在手著僧伽梨，與大衆衆禪大臣長官雁行入室，法苑光華無盛於此時也。康安年中，董建仁僧俗歸向，如衆星拱北。開山以來，寺未構法堂，諸堂亦傾覆，永竭方興，建修營一新。膺先師十三回忌設齋，請衆源公親銅錢若干緡，入寺預法會，居三載受樞府鈞帖，住相之建長自寺罹回祿，丈室未建，廢頽相次，永以檀嘍捨充修補，成之。不日得復舊觀，晚構大統菴爲終焉處，應安二年十月初八請同門耆舊設齋，告曰：吾明日去矣。又書遺誠，禁身後供具，翼日諸檀悉集，樞府夫人遣使問安，永譚論移時，體貌無異，使者出，剃髮洗浴書偈曰：無榮無枯，鐵樹開花，萬象吐舌，虛空咬牙，置筆焚香，怡然而寂。壽六十八，臘四十九，門人遵命荼毘，奉靈骨塔。平本菴及建仁大統菴永其淡薄，不事華靡，聞說人是非，低頭即睡，沈靜寡言，言必驚人。朝日賜諡佛觀禪師。

### 尾州定光寺沙門處齊傳

釋處齊，號平心，千葉氏重胤子，肥前小味莊人。夢地藏菩薩杖錫到門，其母有妊，及誕，離考由是蚤有出家之思。林叟瓊禪師歸自支那，偶居小味，母攜齊投

日本僧錄 本朝高僧傳卷之十一

〇十



爲驅鳥與得禪與之請無何而去十七歲上延曆寺  
從興圓僧正學顯密法明年往相州待林叟於壽福  
清拙和尚相尋童席命充侍香宇以平心授偈曰山  
非崇也海非卑一等曾襟自坦夷饒汝七凸并八凸  
我儂方寸沒躡踏去如野州叟高峰和尚於雲崑峰  
問關梨其處來齊曰東門西門南門北門峰曰此是  
趙州道底關梨作麼生齊曰主山高安山低峰休去  
時夢窓石寂室光同在會中互相敲磕及峰還國覺  
命掌教至節兼拂列利稱賞職畢抵濃州丹坂謁  
竹翁和尚留止三年請益日多辭歸錄倉依叟于桂

■本集 本朝高僧傳卷之五十一

○三十一

光菴每入室參尋唯遭打罵一夜月白風清齊獨出  
庭宴坐于盤石之上不覺睡倒豁然開悟一笑而起  
乃作偈曰海本非凹山也不凸等閒并吞虛空無骨  
叟見賞之一日叟拈起竹篋曰脫體現成坐斷虛空  
黑漆竹篋振起宗風齊曰孝子不使爺錢叟曰作麼  
生受用底齊拂袖即出叟令侍者把法衣來曰此是  
大覺先師說法之衣吾今付汝表信汝善護持齊退  
有南遊之興辭返關西俄告林叟之訃即還錄倉守  
桂光之塔齋閑出龜谷賴光參遠聞元德元年實相  
一峰一禪師應京兆東福之請招齊居版首職解旌

叟州蒼黃楊縣久移設樂雲崑院尚嫌地淺求居溪  
幽沙彌聖眼告曰尾之水野有一高山蒼翠鬱鬱溪  
河前流阻絕人煙二十餘里齊欣然而往陰松班荒  
蕭然燕坐山內氏某建菴而居自爾遠近崇尚興建  
不日及開殿其衆僧多有神僧告曰此是定光古佛  
之地齊因號曰應夢山定光寺海衆奔湊盈一萬指  
尋開退藏洞雲等精舍延文元年濃州郡牧勅長藏  
寺延齊爲開山始祖齊於諸州凡建寺院十六所皆  
檀越所聘請也應安二年齊在長藏寺適老病臘月  
二十九日集門人及衆僧開示出世始卒湛然而化

■本集 本朝高僧傳卷之五十一

○三十二

世齡八十有三法臘七十又六如法火浴舍利無數  
現闍維場永和四年敕諡覺源禪師  
贊曰余昔隨水野定光寺前後兩回寺主與余舊識  
也卸包憩息數日寫開山行狀年譜而還寺離村里  
二里餘怪石奇巖山又山圍自謂非道情純熟而人  
乎町畦孰始居此溪遠者耶禪師滅後主席無人樵  
夫村僧猥雜逸居法道不行者幾乎二百餘年矣頃  
世初綴其行狀故取他人之語而爲禪師之事者多  
至所載遺頌者東福東漸易公之辭偈也其紛雜屬  
本推可知焉或者國奉不知真偽漫筆之書可以辨

笑今刪訂考覈而繫于傳燈及僧傳焉

本朝高僧傳卷第三十一

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十一

○五十五

音訓

續

止忍切

撩

通條切

淬

七醉切

撮

胡貢切

孺

而遇切

吃

漱質切

髻

披已切

叩

苦偶切

支

章移切

鮮

蘇前切

葩

蒲交切

挫

千臥切

咀

子余切

蠟

上圭切

提

提撕

上杜兮切

下光齊切

偲

倉才切

蒼鬱

上烏紅切

訂

丁定切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鏤

本朝高僧傳卷三十一

茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘

識

本朝高僧傳卷第三十二

濃州盛德沙門 師覺 撰

淨禪三之十四

相州建長寺沙門法忻傳

釋法忻字大喜參州人。世姓源家。今川基氏之子。參太平準和尚親受法印。歷住淨智圓覺建長道德共邵。羣徒歸嚮如衆星圍月。多建禪刹。爲開山祖。當時道俗莫不知其名也。勉築精舍於瑞鹿山。以爲歸藏處。日萬富山續燈菴。應安元年九月二十四日。化于本菴。辭世偈曰。諸佛降跡。處續燈。大光明巖上。開一

日本僧徒 本朝高僧傳卷之三十二

〇一

豆州國清寺沙門妙謙傳

室一坐五百生。賜諡佛滿禪師。提唱謨可。兵燹亡失。釋妙謙字無礙。未詳姓氏。武州人也。少參諸名宿。奉嗣佛國禪師。辭去入元。與雪村梅天岸廣等並。嗣。期于江浙禪林。後謁中峰本和尚。卷祇而還。崇報行中仁公送偈曰。回首博桑若個邊。春風萬里上歸船。神龍饋世雲迷海。仙女吹花月在天。密意西來端有得。新詩東去豈無傳。若逢石室頻通問。歲晚南湖學種蓮。謙初出世。相之壽福嗣香。爲佛國拈出。尋從圓覺僧問。如何是。大唐行脚之事。謙曰。笠重。吳大。雪。飄。

香楚地。花住職稍久。構如意菴。而養老身。東部侍郎藤憲顯上杉建國清寺於豆州。奈古谷聘諳謙爲開山始祖。州民瞻禮如商賈。歸市應安二年七月十二日說偈而寂。敕諡佛道禪師。

京兆南禪寺沙門一以傳

釋一以號大道。姓平雲州。爲根縣人。生而異相。頭有肉角。掌有印紋。父母以爲不祥。潛棄野外。牛馬不踐。叔父收養爲子。叔父亡。歸父母。方七八歲。好學坐禪。無意處。世天資慈仁。親同儕。捕鳥獸求價於母。贖以放之。年十一投本州枕木山。剪髮十四。登層山。升壇。

日本僧徒 本朝高僧傳卷之三十二

〇二

受戒行業純白。慕別傳之宗。隨光明院藏山空和尚。山一見器許。誓侍久之。辭謁約翁于建長。參規菴于南禪。菴遷化一山補席。以隨侍。二大老最久侍。南山雙峰二師于東福。至峯移瑞龍。以任高職。虎關和尚出世。東福招以充後版。及再住。擢居前堂。關應南禪之詔。延以俱住。關室中舉曰。一人發真歸源。十方虛空悉消殞。以聞之。頓脫蒙滯。不覺動有。關視問。笑而已。從此罷參。退沐永明塔下。康永元年夢。意國師請住阿州。補陀送以偈曰。龍淵通徹。日花涯南海。潮音震法雷。莫把鳥藤輕靠壁。他時必有善財來。數載。

之間威儀棣棣，禪風大振，寬寄書稱美謝事，退居于淡州。太守源氏春忻然，改所居宅爲安國寺，請以爲始祖。衆又隨集，未周二載，大雄之殿演法之堂，僧堂山門等煥然一新。國人始知有禪宗也。以嘗曰：福昌善法昌，遇雖少，徒衆不欠法度。古既如是，今豈不然耶？凡叢林當行之法，所在一日匪懈。文和二生，藤丞相請居洛之普門，延文元年住東福尋陞南禪。二利法令爲衆所畏，貞治末解印歸淡州。應安三年二月二十六日逝，辭偈曰：無生一曲調，滿虛空。陽春白雪碧雲清風，壽七十九臘六十六。

日本撰述 本朝高僧傳卷之三十三

〇三

### 京兆建仁寺沙門圓見傳

釋圓見號月蓬，姓藤，相州人。母平氏禱于觀音大士，像夢吞珠，娠既誕，穎秀有相者見之，曰：是兒非世綱所羈，當爲釋門棟梁。年甫七歲，同郡性相寺道律師勸其出家，父母不之禁。十三從律師祝髮學沙彌法，日記經論數千言。律師奇之，謂曰：凡諸佛言教渡河筏耳，我聞禪宗有向上一著，汝往參之。見遂上京禮無爲元禪師于東福，爲大僧侍。左右久之不契，辭參東明和尚于圓覺，問曰：如何是佛法大意？明便喝見曰：也只尋常明打一擲，曰：這掠虛頭漢見言下，有省。

命居侍司入室辨詰，及明遷建長，偕往典藏鑰，尋分座康安年中出世。肥前壽勝辨香證東明之嗣，繼遷聖福大將軍義詮源公以鈞帖主洛之建仁，海衆雲集，滿一萬指。貞治六年戊申見屈越之善應寺觀法兄別源旨公之舊場室之南隅，有可休亭，旨公應東陵與南禪之招時題川八偈，門人書版掛壁，見和其韻曰：路入江邊見利竿，長松脩竹遠門欄。牀連片石客投宿，居下高樓人問山。往事蒼茫流水急，禪心淡苾白雲閒。再歌調轉新豐曲，哩哩囉囉唱八還。見執性純敏，律身緊嚴，喜愠不形於色。四處開山三會。

日本撰述 本朝高僧傳卷之三十三

〇四

說法能整綱宗，既倦匡徒，逸老於東山雲龍菴。一日白衣大士相現于香爐中，若母氏所禱者，衆咸異之，爭圖以傳。翼日微恙請中岳月公囑以後事，笑語移時，乃澡沐靜坐書偈而化。實應安三年臘月初二日也。春秋七十六夏坐五十九門人空全身於本菴塔。日無相明杭州靈隱住持見心復公銘塔承事郎工部主金陵杜環書見公遷化之年紀塔銘誤爲貞治三年。明僧高泉僧寶傳相襲就錯，余視建仁住持籍爲應安三年，又貞治六年見公在越之善應寺和別源之偈證以兩條，系于應安三年矣。



相州淨妙寺沙門法菊傳

釋法菊字芳庭自承太平之記掛錫洛之天龍從正覺國師請益日久江州刺史源高氏佐佐木氏父子

號道譽

見其靈利歸抱侍應安元年夏住相之淨妙列刹衆僧驩逢嘉會太平和尚嘉曆元年遣僧太元求大藏經置金峯山延文二年冬火于隣家延而及寺藏經爲灰矣煙氣所及舍利流石蘇林葉盡燼如貫珠遠近道俗競拾歎未曾有起信者多矣菊撰藏經舍利記文長不載于茲其在傳燈其尾示偈曰金口五千餘卷說每談一字一如來不知那個泥洹也八斛

日本書述 本朝高僧傳卷之五

○五

摩尼照冷灰三年三月二日俄得中氣叙于正源菴

黃金閣遺囑茶毘于武州河崎其寺

能州總持寺沙門宗真傳

釋宗真字大源久振本峨山碩和尚之室傳承洞上宗訣爲總持第三世後住如州佛陀寺江湖雲衲四時盈堂示衆云洞上之宗乘以五位究事理以君臣分上下雖然任麼無回互轉變之機則卻失乃祖之旨當須位中辨位言中遣言而有相應之分不見道莫守寒巖異艸青坐卻白雲宗不妙真擬真源院而居應安四年十一月二十日寂得其法者總持梅山

本補嚴了堂覺佛陀幻翁壽

相州建長寺沙門聰秀傳

釋聰秀字實翁久侍福山葦航然禪師又參高峯和尚于野之雲巖南詢入元徧遊禪肆秀工於筆翰元天子詔不許浪書及還本朝漫遊關西遊備之吉備中山作詩曰三月三春盡風光一夢間偶逢無事且遠尋有花山路與巖高下人隨雲往還兩天教我反隱約自來攀出住相之淨智及建長貞治間開長福寺學者來歸請益宗要晚年休居福山大智菴應安四年三月二十七日寂遣偈曰末後一句佛祖不知

日本書述 本朝高僧傳卷之五

○六

掀翻四大海踢倒五須彌

京兆建仁寺沙門良聰傳

釋良聰號聞溪不委其姓氏信州人蚤抵鎌倉參諸名宿謁東明和尚於圓覺即問如何是洞上家風明曰待洞水逆流即向汝道聰當下有省後拜一山國師於建長執師資禮及國師遷圓覺可維那騰聰整頓紀綱呵罵童行衆中有沮聰者潛隱槌子既而大衆入堂展鉢膺唱十佛槌子無有聰出袖裏香合拈用代之衆服其奇捷參禪益久遂有實悟將還鄉省母而作偈呈國師國師乃付信衣正和年中國師住

南禪泉聰及石梁爲兩堂首座聰性氣嚴率衆會忌憚嘗寓建長常居復閣上有幕下士會友雜話聰乃翻瓶水於閣上自政中峰垂誠曰中峰和尚爲人句句叮嚀今時蒼生凡有客來先喚歡伯而爲相伴高聲譚論甚無慚愧耳其志操之偉大概類此初住洛之西禪播之法雲後主建仁禪客仰風掛搭者多聰夢中值初祖忘有偈曰蘆葉蕭蕭天水遙飄然無意戀梁朝今日無端再相會只應劈脊與藤條應安五年七月五日終于建仁大昌院壽若干歲塔曰普明教證佛海慈濟禪師

日本書

本朝高僧傳卷之三十一

〇七

贊曰佛海禪師博博強記而有文材住西禪法雲建仁提唱語句若干萬言然誠門人傳不記隻字故無傳於世其遠孫天隱澤公慨然憶先祖之勳於敗楮斷簡中纂拾成卷且撰行畧以續于卷末其政有言非繼香林紙襖遺風要者大慧一炬手段今尋求諸錄行實皆成烏有今傳全據行畧焉

### 京兆南禪寺沙門光林傳

釋光林字放牛久參闍提具禪師得其心髓住洛東八坂法觀寺常令建仁衆入室問答決擇宗且歷從建長建仁天龍南禪諸大刹道風大煽應安六年八

月九日寂于東山護國院遺偈曰一來一去全生外虎咬大虫蛇吞鼈鼻

### 京兆等持寺沙門周諡傳

釋周諡號默菴不詳姓氏武州人及壯年發南遊之志將與古劍快等人入元夢窻國師留之曰子縱到太方不可得過我之師諡因不果志依雪村梅無極玄二師請益不懈得決所疑出世江之金剛嗣香獻夢窻後遷洛之等持應安六年六月十七日屬疾集衆上堂舉世尊滅度不滅度話以拄杖畫一畫曰若不逢流水定應過別山喝一喝下座歸方丈說偈辭衆

日本書

本朝高僧傳卷之三十一

〇八

曰君立船頭我船尾逆風把舵解張帆而今檣神俱拋卻欸乃一聲山水藍至時復書辭偈曰藍繩牽斷海嶽忽昏欲求蹤跡日月倒奔擲筆而逝春秋五十六諡道聲高時四衆崇嚮在金剛寺時母氏自武州尋來踰驢迎構小菴於門外定省不倦一生孝養母氏得瑞多云

### 城西地藏院沙門周皎傳

釋周皎字碧潭鎌倉副帥北條氏之裔也幼冲出家從京兆仁和寺禪助學真言教密乘祕隨摩不該貫常在關東凡遇日月星宿之變旱澇兵疫之哉有禱

必應常以自負不信有教外之旨會不弘之亂平族  
凋殘皎逃難去投夢寢國師推下微語數返遂折慢  
幢自點首曰我過矣我過矣國師笑曰這鈍根閣梨  
何知非之晚耶於是易衣伏事冥契玄機天龍龜頂  
塔落慶之日國師特付僧伽梨尼師壇命皎爲供養  
導師一會榮之後醍醐帝狩于城南駐蹕輿於平等  
院手詔召皎賜坐問法帝心悅可康永壬午國師命  
皎住西芳大將軍義詮源公丁北堂之憂廬于等持  
招皎講大乘經一百日矣公卿大夫奔競問道一夏  
久旱請皎法雪即日大雨鄺野歡抃樞府囑金錯刀

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十三

〇九

一口管領源賴之暇日問禪所得頗多建地藏院於  
嵯峨皎爲開山祖皎祖乎國師自稱第一世常講經  
論誘化道俗獲益者多有竊議者曰已棄教入禪合  
提祖令何用講說耶皎聞之曰豈不見道經是佛語  
禪是佛心諸佛心語必不相違況又西天祖師自大  
迦葉至優婆塞多皆兼弘三藏逮于馬鳴龍樹始開  
塵訶衍著論釋經加以震旦禪祖大寂南陽鵝湖司  
空山等諸師廣引經論以印佛心初不以禪教二其  
心豈似今世爲禪教徒者各宗其宗黨其黨才看相  
爭互招暗證循文之議乎議者信服焉皎素歸地藏

菩薩刻像誦經供養讚歎不可勝計屢感異靈一夕  
夢有人請菩薩贊乃贊曰八萬四千者一日于恆沙  
功德大摩尼寶其於菩薩有因緣如此頂囑徒日月  
之二十四日乃菩薩感應齋日也老僧滅後當取斯  
日爲吾忌辰設齋讀誦本願功德經報菩薩慈是卽  
與供養老僧一般也應安七年正月五日化享年八  
十四賜諡宗鏡禪師

贊曰入宗門者以悟爲則不雜餘事矣德山臨濟教  
家龍虎及一得悟也入門便棒入門便喝是可以證  
焉學禪者不法一師縱使說得辯如建餅但是義學

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十三

〇十

沙門而非本色衲僧也皎公於瑜伽密乘不謂無靈  
感矣暨其依佛語佛心一致禪教從而爲之雖死似  
慕舊集焉鷄寒上樹鳴寒下水爭奈何古人之答話  
自然有出身之處

### 相州建長寺沙門印元傳

釋印元號古先世姓藤氏薩州人也生有異徵及稍  
垂髻輒刻木爲佛像持以印空八歲偕父往相州歸  
圖覺桃溪悟公執童子役十三剃髮登其足戒徧參  
諸師杳無所證文保二年奮然入元年二十四謁無  
見觀公于華頂峰直問心要見愛其俊發謂元曰中

峰本公唱道於天目山爐竈正赤學者咸受其煖煖  
子當急行元往侍左右屢呈見解峰呵之曰根塵不  
斷如纏縛何元涕淚悲泣至於飲食皆廢峰憐其誠  
志乃與法語秦曲示誨元闔之通身汗下晨昏參勵  
未嘗輟拋一朝得悟現前境界一白無際急趨丈室  
啟峰曰印元撞入銀山鐵壁去也峰曰既入銀山鐵  
壁來此何爲元珍重而出峰再三囑之曰善護持當  
是時虛谷陵古林茂月江印東嶼海了菴欲各據一  
方元咸問津皆觀其悟證親切機鋒穎利以叢林獅  
子兒稱之元復遊西浙諸大刹靈石芝笑隱訪斷江

日本書述

本朝高僧傳卷之三十一

○五

恩別源宗無言宜各有餞別之偈依古心誠公於大  
仰一歲有餘泰定二年夏歸吳松曹溪時真淨住持  
清拙澄禪師受日本之請控元東渡嘉曆二年拙住  
建長元典教藏曆應二年天龍夢窓國師請董甲州  
慧林寺辦香酬恩歸于中峰明生左武衛將軍源直  
義革城都等持教寺爲禪刹延元主之遷真如住萬  
壽關東連帥源義詮以建長敦請元辭讓無隱晦公  
後徙相之淨智其秋解印遊化興州元之兄藤氏建  
普應寺迎爲開山祖延文三年源連帥初長壽寺於  
鎌倉招元翌歲領圓覺院建長年垂不惑應機說

法華摩心黑白輻湊如萬水之赴源元知化緣索  
歸老於長壽應安七年正月二十日示微恙二十三  
日夜半召門弟子曰吾明日逝矣爾等卽龕瘞之母狗  
世俗行祭典之儀更可徧語諸刹舊弟子恪守吾所  
訓使法輪永轉可也二十四日賓朋候問起居應接  
與常不異及午時喚侍者曰時至矣可持厭輪來復  
曰吾塔已成唯未書額耳大書心印二字跌坐而化  
世齡八十僧臘六十又八諸徒依遺命瘞全身於曇  
芳菴揭以心印元專以舒布大法締構梵刹爲事若  
丹之願勝攝之保壽江之普門信之盛興武之正法

日本書述

本朝高僧傳卷之三十一

○五

房之天寧成大蘭若又建長之西構廣德菴命其徒  
守之前後所度弟子一千餘人受戒法者不可勝記  
平素端嚴如神目光爛爛射入雖燕居之時儼若臨  
衆見者若未易親炙及聞其誨言溫若春陽莫不心  
服有來求法語偈頌者濡毫之頃翩翩數百言不敢  
經意不加點而成元不自以爲是也取語錄外集按  
于火中曰吾祖不立文字單傳心印留此糟粕何爲  
有法雲寺中峰忌應請拈香語曰樹凋葉落正清涼  
風露滿天巖桂香其道先師過去久堂堂面目不覺  
藏恭惟道契王臣德被遐邇智如汾海辯似懸河言



滿天下而無過迹混塵中而不汚拒諸利之請深藏絕登窮山應他方之緣多是放光動地欲隱彌露善應無方此是先師平生行履處且如今日不離天目山中太寂定中來赴太雄山中忌齋之供養一句作麼生道法雲蓋覆大千界慈雨洩沱盡十方其示人之體裁如此敕諭正宗廣智禪師明國翰林學士宋景濂撰塔銘焉

贊曰古人見學者之集文字即取燒之和漢其多矣雖其事沿襲已古而反復有深意矣何者文字言句此思慮計較之本也思慮計較此礙悟之基也古今

日本書述 本朝高僧傳卷之三十二

〇十三

多滯此而不前非翅不前卻生慢心焉先覺所以嫌義學者然而非是實悟之人又不能知之也古先禪師臨順世燒平生之著述示入之深切者也焉

甲州棲雲寺沙門本淨傳 義南

釋本淨號業海落節東西研幾祖示文保二年與同志數人凌海入支那歸中峰和尚之鉢下並單叩請稍歷九白傳法而回性愛烟霞不願出世貞和四年遊甲州菴居遂化寶坊號棲雲寺其山似西天且因以名焉淨嘗拾十境系以偈焉龍門瀑曰石翁筆勢活如龍嘗在龍門第一重只恐青天轟霹靂掀翻羽

瀑雨千峰雷闕峽曰劈破巍巍萬仞崖玉龍倒掛關風雷虛空踣跳山河走散沫飛成白雪來山神廟曰誓向山門護佛來古祠尚在白雲層直將北樹移東嶺驚動那伽定果僧靈石泉曰古木寒巖一道泉流添竹篴遠相傳靈泉湧處靈蹤在彷彿桃花洞裏天忿怒石曰怒石千尋拔地輪薛痕帶得劫初春寒毛卓豎望崖退突兀橫空猶趁人餘載傳燈錄淨有一牛山厨空時知事僧放之門外牛徑往正法寺正法知事臥粟米菜蔬牛復回山其間相距三十里路人知是天目山之牛添附菜果避路率以為常隣近相

日本書述 本朝高僧傳卷之三十二

〇十四

謂曰天目山庫厨在數里外斯亦可見化物之一端也文和元年七月二十七日化於本山又同門有釋義南姓源雲州人太德徹翁和尚族弟也久遊律場粹于開遮莫教外之宗更不參大燈國師又入元參中峰和尚解悟堂徹順示欽其智德賜菩薩號觀應二年偕無文選公歸煒化於關西機鋒亦峭不假人情痛斥禪徒學虛頭無實解別峰殊公遊方之日參南問示要南以枕子投中其面血流至地峰便有省其辛辣至此

贊曰中峰和尚之法嗣或隱叢寺而化州民或住名

藍以接海衆皆能法師道而聲華烈于寰塞矣如義南菩薩之接別峰特有寒水之作也

### 京兆東福寺沙門士啟傳

釋士啟字東傳筑前人幼而英特久侍南山雲和尚得法之後徧歷東西嘗在南禪分座說法出世洛之普門經載董東福後住相之崇壽圓覺建長所在雲衆盈堂塞宇風規高古不事緣飾常謂衆曰夫參玄之士切須子細慎勿容易古人曰參須實參悟須實悟勉哉構廣嚴菴養耆而居上野太守慕其道義建崇禪寺強起而住適病命待僧求石塔於鎌倉負馱

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十一

〇十五

### 京兆南禪寺沙門祖禪傳

釋祖禪號定山不記姓氏相州人敲磬諸方二十年矣所至欽之稟嗣東福雙峰源和尚開法洛之大聖徒筑之承天歷昇東福南禪智德兼貫繼日歸祀應安七年十一月二十六日逝辭世偈曰順緣逆緣冠地履天打翻筋斗歸路坦然壽七十七塔于芬陀利華院在慧日山敕諡普應圓融禪師

### 京兆長福寺沙門紹清傳

釋紹清字月菴侍奉月林皎禪師多歷年所得其道骨林臨滅度顧謂清曰求病起處竟不可得且道老僧有什麼過清曰和尚慈悲大於山嶽林首肯而化一衆請清踵跡住持清有達磨譜曰底事當年斷臂人填溝塞壑還相似聖體廓然現半身脣藏敗齒袖藏手清後退休于藏龍菴而終

### 京兆東福寺沙門祖應傳

釋祖應號夢巖雲州人自幼英發早慕桑門禮東福潛溪謙禪師落髮稟戒司藏經鑰後歸邑里鎖門卻

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十二

〇十六

掃殆二十年名震遐邇翔問道者衆矣遂承鈞帖出世東福元宵上堂十五日以前銀山鐵壁十五日已後鐵壁銀山正當十五日孟春猶寒吹滅燈燭悟去鈍刀不斫骨捲起簾見天下萬里望鄉關腳跟纔點地進步百人竿睜目揚眉處憑君子細看解夏小參寂寞非內一毫穿衆穴寬廓非外衆穴一毫收佛滅二千三百載克期何證又何修結也左提茅繩縛山鬼解也斲頭船子下揚州也不結也不解打麈還他州土麥所以道秋初夏未東去西去向萬里無寸艸處去或道出門便是州也衲僧家住杖頭從來有個一

升三合活計如水動今靜今誰所作如雲卷舒今  
本自閒直得廓十世古今於當念攝無邊刹境於毫  
端秋風淅淅秋露溥溥艸間蛩唧唧松頂月團圓一  
一明妙一一天真森羅顯煥萬象歷然纔起心動念  
早是不是了也任是不起心動念亦未堪爲吾家種  
艸好大衆頭哨五嶽眼生三角右割龜毛左截兔角  
舉手揭籬金剛大士天靈蓋擡脚踏斷釋迦老子鐵  
脊梁楊岐一頭驢祇有三隻脚倒騎又橫騎笑翻黃  
繡綽因憶東山五祖和尚道今年諸莊皆旱損我總  
不憂只憂禪家無眼一夏百餘人入室舉個趙州狗

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十二

〇十二

子話無一人省得此爲可憂東山老大侶憐兒不覺  
醜東福公夏諸莊不生旱損但與現前半子衲子隨  
例作自恣佛事終不將古人閒絡索繫綴於人母自  
謂有永皆是苦無求乃真樂真樂之中何憂有之雖  
然不是少林客難爲話雪庭山僧與麼道爲是出古  
人一頭地邪又是借古人鼻孔出氣邪若無猿臂將  
軍手爭射林間金僕如應博覽雄辯而善屬文嘗與  
月中巖齊名又據大方而負時名者若大岳崇東漸  
易大愚智岐陽秀惟肖巖等皆遊其門應安七年十  
一月二日安序生滅門人昇全身空於本成塔側敢

證大智圓應禪師有語錄并外集曰早霖集

京兆南禪寺沙門普在傳

釋普在號在菴阿州倉本縣人父源姓母藤氏夢日  
光入口而孕及生異香滿室容貌嶄然與常兒異見  
佛像則膜拜見僧歸敬甫十歲父母送郡香谷附寶  
覺律師受經典能作大字又通外書稍長就覺得度  
圓具忽自歎曰爲僧當求最上法何可區區沈於此  
耶卽棄所習挾包遊方叅東海源和尚於鷲峰服勤  
左右有年既得契悟辭造相州侍秋澗泉公於壽福  
掌筆翰於建長一時尊宿若明極俊清拙澄竺三仙僊

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十二

〇大

咸器賞之暨東海應建仁之請在往輔佐海問諸佛  
未出世時如何在曰海晏河清海日出世後如何在  
曰天昏地黑海上堂舉狗子無佛性話在以偈呈所  
見海忻然印證會豐之圓通虛席衆請開法爲東海  
之嗣州之巨族宇佐公光創光隆寺延在爲開山之  
祖續遷備之善昌紀之鷲峰四方禪客雲屯水匯承  
相義詮源公請主相之禪興房州太守源賴秀執第  
子禮受菩薩戒建興源寺聘請未幾赴洛之妙光居  
三年移備之常興源丞相聘董建仁源公奏朝廷天  
龍歷三寒暑奉詔升南禪管領武州太守源賴之承

曾割寺之南地爲在營壽塔廟曰覺照菴曰太定晚  
年管建長經二夏以微疾解印居龜谷勝因寺一日  
集衆附後事畢淨髮洗身夏衣跌坐次日未刻恬然  
示滅實永和二年閏七月初四日也閏七十七  
夏六十六停龕三日火化收靈骨窆于塔下後一  
有赤白二光貫於化壇門弟子驚往攬殘灰獲五  
堅固子數百大如菽粒救護佛慧廣慈禪師在簡默  
端慈梵行謹嚴過中不食不資不飾書則持經不輟  
夜則禪坐達旦至臨機說法則千變萬化妙用無礙  
一順道人寫在肖容需贊語在贊曰鬚髮既除架柴

日本書述 本朝高僧傳卷之三十一

○九

著體真嫌身猶未全現自然服威儀何壞這般相貌  
因其圖画是相非相無在不在得度弟子不記其真  
嗣法應世者有建仁日巖光壽福祥麟岸曾籍文一  
四神足

贊曰廣慈禪師行狀者其上足日巖光公所撰也機  
緣之顯未遷化之始終具記不漏使讀者興起感誠  
焉夫如禪師非超悟解真正有達文藻住持十二大  
利必當有提唱也然狀中不載一言半句爲可憾耳  
余周探本朝禪策纔得自照贊及一覽亭偈喜載延  
寶傳燈錄及此章

京兆東福寺沙門心涼傳 海翁

釋心涼字檀溪因州人也隨侍虎關和尚而承印記  
開執之正法寺接引海衆後住東福歷年閒休龍眠  
菴當題自具日本來面目如何分說剎界三千一輪  
明月應寄七年八月八日寂又同門有海翁類禪師  
自既獲證開法浴之普門及虎關和尚寢疾于海藏  
特往省觀容儀既闕頰便面壁趺坐脇不沾席數日  
脫去

京兆南禪寺沙門妙在傳

釋妙在號此山不詳姓氏信州人也拜佛國禪師出

日本書述 本朝高僧傳卷之三十一

○三十

家參究年久國授記剎辭去入元遊諸師之間嘗在  
石霜典藏經鑰冬節秉拂曰以大圓覺爲我伽藍認  
驢鞍橋作阿爺領身心安居平等性智隱在黑山鬼  
窟裏堪堪堪笑老瞿曇曰日青天成寐語石霜門下  
個個眼蓋四天下氣吞五須彌盡是嫌佛不肯徹底  
菩薩乘不踞寂滅行不修鵝護雪臘人永是甚繫驢  
轅豈不見道休去歇去一念萬年去一條白練去古  
廟香爐去冷秋秋去如是禁足如是安居如是剋期  
如是取證一年三百六十日日好日一日晨昏十  
二時時時好時因甚九十日中無繩自縛秉拂上座



到者裏通身是口分疎不下今夜不免借上方威光爲你諸人分疎去也。拈拄杖卓一下曰：「一劒倚天寒，清風生萬里。」在歸國後首聚于天龍，住建仁南禪圓覺三道場，隨處雲衲爛盈門。晚居鹿山，定正菴永和二生。李太病遺詔，門弟曰：「請正統菴可。」翁悅，公爲卷以行。茶毘儀不可諸山入牌，并設祭奠。明年正月十二日晝，偈曰：「賣弄一生過，彌天罪犯多。今朝機轉位，無佛亦無魔。」置筆坐化。春秋若干歲，火後分靈，覺塔于本菴及洛之十如是院。

明國秀州圓通寺沙門德久傳

日本書志

本朝高僧傳卷之三十一

○五

釋德久字約菴，史失姓氏，泉州日根縣人。幼齡割愛，拜高山照禪師於紀之大慈下，髮受業。年至舞勺，登南都戒壇，稟具足戒。得照公之微因，有所妙悟。又浮海南遊，徧踵叢席。太寧楚石琦靈巖，了菴欲待遇稠密，久在靈巖侍于燒香。又掌經藏，而翻閱至再，強記細尋，善通旨趣。律儀尤謹，三十餘禩始終如一。檀信厚幣，主嘉興府圓通禪寺。了菴製疏勸請開堂演法嗣香。嗣高山道俗數千，奔波拜瞻，以洪武九年九月二十四日順世，壽六十四，臘五十一。久州高山行狀，請楚石和尚撰塔銘，又持生絹求了菴和尚自述葉

至高山通代祖師各題一贊，附日巖光侍者之歸船寄置建仁之靈洞院云。

贊曰：日本禪僧入支那住持，大利開堂說法者，雪村梅龍山見無我吾及約菴師也。而一師歸國無我及約菴，或化真丹夫，世俗塵中有彼此之疆，真如法界無自他之隔。然大丈夫兒猶抛下，一邊中道而先夭爲心之祖焉。達磨大師所以踰海而來者，欲示此祕也。約菴師宴坐大方，名藍揭示單傳宗旨，祖師高蹤續得甚妙。若四師實扶桑之華也。

京兆妙心寺沙門宗弼傳

日本書志

本朝高僧傳卷之三十一

○五

釋宗弼號授翁，山城州人，俗名藤房，藤原相宣房子。奕世華胄也。妙齡好學，博覽強記。仕後醍醐帝至黃門侍郎，當時推爲儒林翹楚。一時命諸儒講尚書，弼能解首縈，帝特寵任，嘗問宗門有向上事，公退之暇屢奏大燈國師所得頗多，受衣鉢法號，執弟子禮。元弘之變，從帝于南方，致忠烈多及帝復位，遂加上卿。帝後盤遊無度，屢諫不聽，弼知不可而棄官遁去，抵城北巖倉，就不二大德剃落冠簪，髮受具足戒，而匿跡山叢。時年三十八矣。帝聞之大驚，敕宣房諭還，宣房物色到北巖倉，大德曰：「其人今朝他去，不知所在。」宣

房入視壁上書，垂恩入無爲，眞實報恩者之句，并古人題大義渡偈，曰：白頭望斷萬重山，曠劫恩波盡底乾，不是曾中藏五逆，出家端的報親難。宜房知其迷，不歸潛然而還。彌初聞大燈國師稱關山實得道髓，心記不忘，曆應初關山應詔住妙心，彌來請益，不全晝夜，年已四十二，山令看本有圓成，詔一日廓然太悟，乃作偈曰：此心一了，不曾失，利益人天，盡未來佛祖，深恩難報謝，何居馬腹與驢胎，徑趨呈關山。山問此心在何處，彌曰：遍塞虛空。山曰：未審以何利益人天。彌曰：行到水窮處，坐看雲起時。山曰：佛祖深恩如

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○三十一

何報，彌曰：頭戴天，腳踏地。山曰：馬腹驢胎爲何不居彌優禮拜。山呵呵大笑曰：上人今日大徹矣。即日報衆曰：要會我禪，參得彌上人，去矣。關山滅後，彌欲遁去，一衆以嗣法無入，堅請住持，門牆高疑，克紹箕裘。上足無因，因公寫彌，昭容請贊，贊曰：朝遊夕處，威音王前，不山家國坐斷大千，無因無果，曰：日青天，七凹八凸，佛祖不傳其辭，令可。既見矣，康熙二年三月二十八日，端坐入寂，享齡八十五，坐夏四十三。諸徒關維收設利塔于本山，天授院萬治二年七月 敕諡神光寂照禪師。

論曰：世儒之言妙心寺二世授翁，非藤黃門藤房其徒，謬爲藤房也。因引異本太平記曰：藤房土州歸時，沒海而死。凡嫌乎名公鉅儒之歸釋氏者，古來庸儒之常弊也。是故杜斷者多矣。夫授翁之事，法印玄慧親見而載于太平記，雪江溪親聞而載于妙心寺記，東陽朝親承雪江而作之行狀，皆實錄也。我徒何謬爲授翁耶？然在二百年後，證僞本曰：沒海而死，其立言之膚也。人誰信之？且我法者，不貴氏族，所貴者道德而已。直饒授翁非藤房於我，何痛之有？然而記實者史法也，不獲已而論焉。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十一

○三十一

### 信州安養寺沙門勇健傳

釋勇健字大歡，姓藤，信州伊那郡人。母氏憂無嗣，禱訪神夢，神賜鬚髮，乃而娠焉。以元德元年六月生，俊逸厭染塵父，察其志，纔及五歲，入邑之澄心寺，執別山長老之童役，健不弄戲，日課佛典，祖錄山以爲奇。攜往紀之大慈寺，附高山照和尚，照教內外書，曉析義理，逮舞勺歲，就照剪髮納戒，受今名。上平安城掛搭建仁，康永初，東海源公來，董建仁，健以法姪之好，近侍，兩文呈坐以亭頌，源賞爲俊才。二年癸未秋，高山寂于紀之楞嚴道場，付健以法衣，貞和間，雪村

梅別傳胤相繼補席健或侍巾瓶或司羹飧日至資  
淡及冬節胤命秉拂問答提唱聳動衆聽尋知賓客  
以迎接頓繁妨道起單詣諏訪神祠祈成菩提志于  
南詢偶看筆嚴條然有自寓居澄心與寺主愚大拙  
商略琢磨看峰翁和尚之語健意真大善知識也乃  
掘衣登遠山相看同月菴光爭先參問一日入室將  
開口翁劈口便堂健茫然不會翁累示偈曰因行一  
掌穿破頭上忽然血脈通急急敲方丈健憤懣不已  
著精悟徹文和四年翁囑付曰汝當成人天眼目今  
以拂子爲信我滅後水邊林下須隨分過時健又遊

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十一

○三五

東關之諸刹歸寓建仁謁見龍山月中巖九旬酬唱  
夏末衆選任以高職健聞而竊逃作偈留呈曰只合  
捐軀整祖綱何堪引頸受名疆青山深處更深處猶  
欠松風夢一場徑行豫州見大蟲岑公綜錯宗義誓  
止三年岑有病時命健接學徒貞治元年拜三光國  
師於大雄國師證明承洞家五位君臣之訣是夏國  
師遷化海藏海雲和尚及同門法眷請健補紀之太  
慈席健堅辭不就一衆累請不散健無已入寺開堂  
辦香爲高山拈出移住鷲峰公卿侯伯聞其道貌厚  
幣俛請健復道如信州移安養於妙峨地爲第十世

鸞嶺衆僧齊議以游泳拄杖送安養寺此拄杖者法  
燈國師歸朝之時忘而遺于宋國不彌月而游泳海  
上到由良湊本末完全頃嗽粘著國師懸記曰這本  
上座他日扶起宗乘必有時矣付囑吾兒孫大歇焉  
歇里住鷲峰  
爲三十七世以故送妙峨山也後納州之戶隱神祠  
云健永德三年九月四日示寂春秋五十三載諡正  
眼智鑑禪師

贊曰夫資師承者唯在釋迦氏焉千佛萬祖其則不  
或禪家特嚴載在五燈健公雖於高山有受業之分  
然得大曉翁之百計垂手悟大事因緣且有拂子之

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十二

○三五

親囑其因緣於滄海矣健非忘此恩只是志操不持  
也故爲衆之所強遂嗣高山吁健雖承法燈拄杖之  
應識而達大曉拂子之契券亂從上佛祖之大義矣  
傳曰君子之於天下也無適也無莫也義之與比聖  
人之言健蓋思之耶

本朝高僧傳卷第三十二

音訓

燬呼委切

翮胡得切

棟度耐切

樞古伯切

訖直呂切

澡子葉切

叮上當切

慨丘蓋切

襖烏考切

柁待

可洗滌切

滂郎刀切

戔同災切

廔吉逆切

鸞盧官

切當經切

杵皮面切

錯七各切

者止野切

煨煨煉

上都玩切

忒傷德切

索昔各切

觚攻平切

藎同羣

下郎雪切

覓古典切

距去詩切

辛斯鄰切

漸思積切

莫胡切

屯徒孫切

領戶感切

幣皮意切

遍大計切

箕上堅切

析思積切

領戶感切

幣皮意切

遍大計切

日本

本朝高僧傳卷之三十一

○

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷三十二

茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘

識



本朝高僧傳卷第二十三

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪二之十五

上州吉祥寺沙門圓月傳

釋圓月號中巖相州鎌倉人姓平土屋之族桓武天皇之遠孫也自幼磨發年至八歲投壽福寺爲僧童十一隨道慧大德讀孝經論語翼歲依梓山律師剪髮稟戒學顯密於三寶院每日遠寶篋印塔一面禮弘法大師像百拜率以爲常知禪宗有大事因緣某就寬通圓公閱諸家語錄謁約翁儉嶮安雲屋輪

日本書紀

本朝高僧傳卷第二十三

〇 一

二天老呈謁頌見稱掛搭鹿山師東明和尚扣以兩下旨文保二年到太宰府將入元國州牧不許上洛歸寓萬壽絕崖禪師會裏冬如越前參永平義雲禪師略得五位訣元應元年回鎌倉觀東明和尚參玉山璣公於淨妙靈山隱公於建長元年初上京見關提具公寄錫南禪肯虎關和尚退濟北菴撰元亨釋書掩關謝客獨許月參敲越年歸建長掌箋翰正中元年秋遂達江南時年二十五當元泰定二年也是冬寓雪竇值鄉友全珠侍者同往共興參靈石芝公於天寧明年見古林茂於保寧冬謁濟川機於雲巖

日本書紀

本朝高僧傳卷第二十三

〇 二

見龍山會在單位以故鄉英傑日就參敲四年夏往吳門參絕際中公甚受溫顧辭謁雪巖欽禪師於淨慈天曆元年參東陽輝和尚於百丈命司記室時建天下師表閣月作棟梁文冬節乘拂陽大稱賞不幾陽密付受去遊諸刹借路盧阜訪龍巖柏壑一老行過鄱湖見竺田心於永福所到諸老待以高賓二年春歸吳門絕際既逝作文祭之初夏偕玄一峰過于湖東駕日本舶著博多本朝元弘壬申歲也寓顯孝寺裏歲入洛依南禪明極和尚乃歸蒙堂建武二年旋鎌倉東明和尚主建長命充後殿四年二仙和尚坐淨智講居講堂曆應二年江州刺史藤貞宗大友於上州利根郡吉祥寺請月開堂辦香醕東陽法乳相大住下總之龍澤相之萬壽豐之萬壽洛之萬壽月上書東陽曰拜別法席一紀週矣渴仰之勤不在言也蘇海萬里非鴻飛之所能到故人書爾不得容易通之憶昔親沐法誨開發冒昧恩不知所所以酬也但以待奉之日不久爲恨耳古人議洪覺範離師早故未盡其道也惟覺範之才尚如此何況非其才者乎思之嘆臍而已茲者商舶發無由自起座下親陳區區之情不云東陽以爲答之延文六年秋菴於萬

善東北之隅。廟曰妙喜世界。後移康安。一主奉詔住。

建仁寺董等持建長所住。名藍。客影附焉。上堂教

中曰。我不敢輕慢於汝等。汝等皆當作佛。北磬師祖

曰。己所不欲。勿施於人。月召大衆曰。富與貴。是人

所欲。苟以其道。何不可之有。下座。巡堂喫茶。結夏小

參。鼓聲已絕。鐘聲相接。就中鼓寂。鐘沈。時好看觀世

音菩薩。長在諸人。眉毛眼睫。入流忘所。所入既寂。動

靜一相了然。不生。諸人亦得出息。不涉萬緣。入息不

居。陰界一念萬年萬年。一念何須。越期九旬。以爲安

居。外不放入。內不放出。淨裸裸。赤灑灑。忽有一僧出

來云。且緩緩。和尚有問話者來也。師曰。何不早出來

僧云。和尚一向割。實學人無插嘴處。師曰。無割嘴

處。正好薦取。僧云。便恁麼不顧危亡。出來了也。師曰

且容你問話。僧云。已蒙許問話。權借一問。爲影。時

如何。師曰。老僧不答你。這話。僧云。和尚因甚不答者

話。師曰。我若答者。話教你生身陷墜。泥犁。僧云。前日

已蒙和尚使某甲向鍾湯爐炭裏安身。去豈可更怕

生身陷墜。師曰。是。是。僧云。是。則龍女頓成佛。非。則曇

摩生陷墜。師曰。好個善。是。奴婢僧云。謝師印證。師曰

西天斬頭折臂。乃曰。適間向鼓寂鐘沈中。舉揚安屈

佛事。無端被曇摩出來打。作兩極。卽今尋思。那一

更無討頭處。還有人能接得者。一極麼。出來接。一接

看。如無。山僧自接去也。遂合掌曰。波羅羯諦。菩提耶

薩婆訶。上來功課無限。勝因回向。伽藍土地。但願水

牯牛寒山子。九十日內。梵行清淨。無諸魔障。無諸病

患。摩訶般若波羅密甚深般若波羅密。喝一喝。舉應

菴和尚偈曰。一十二州七十僧。驢馬領得人憎。諸

方若具羅籠手。今日無因到淨層。不肖遠姪敢以狗

尾續貂去也。四來相聚。水雲僧莫把疎親分。愛憎不

向諸方爐竈熱。寂寥同守對危層。上堂前近江太守

大友直菴居士平生與山僧相忘於形骸之表。神交

道合。捐館之後。二四年每逢諱日。閉目打坐。以當追

薦。亦是相忘於形骸之表。故也。今年斯辰。因什麼不

能相忘。形骸之表。特地設此供具。仍請數個無心道

人。齋僧表願。以作佛事。大衆二四年底卽是。今日底

卽是。於是辨明。不唯回巖直菴太守報地。爾乃能使

盡十方世界四聖六凡。普同會聚。大圓鏡中。自他不

隔毫端。始終不離當念。若也。不然財法一施。功德無

量。月住江州龍興寺。尋有南禪及天龍之命。以老辭

焉。應安七年冬。屬微恙。永和元年正月初八日。病彌

曹侍僧求末後句。月厲聲叱之曰。吾平生口過不少。今尚何言。至午時就正寢安詳。而逝。門人依遺命。奉全身塔于東山。妙喜世界之後。春秋七十六。常謂徒曰。吾祖大慧禪師七十五。順世老僧亦同年。而行矣。是歲立春。屬正月初九。其不食言也可知焉。越凡朝廷賜諡曰佛種慧濟禪師。所著有語錄文集若干卷。併一曰東海一漚集。

贊曰。慧濟禪師資性天啓。覃思祖宗大凡。日域支那英雄之所。不擇濟洞投誠。參究。而是故悟解純粹。心地無塵。此方傳大慧之派者。唯禪師一人而已。錯

綜三藏。收其秘詮。驅逐五車。嗜厭肥潤。揮毫萬言。立

五

就胸中。要奮動而愈出。本朝翰林有文章。以還無抗。衡者可謂尤前絕後也。若其原民原僧上建武帝書。登但扶於宗教。抑亦益於國家矣。曆應年中撰日本記。暨已。錢梓有勸不行於今。操觚之士。憾不見之矣。

京兆建仁寺沙門曇生傳

曇生號頑石。嗣法福嚴相巖禪公。永源寂室禪師。七周忌辰。隨請陞座。曰。無住爲本。無著爲宗。三世諸佛歷代祖師。天下老和尚。從無住。本立一切法。於無著處。演出。具足無一法。不是具乘。無一物。不是妙用。

全體恁麼來。全體恁麼去。不見道於一毫端。現寶王刹。坐微塵裏。轉大法輪。所以圓應禪師。雖坐那伽定。安詳而起。不離本際。入諸塵勞門。成衆生行。願海塵。塵刹刹。皆現風光。物物頭頭全彰。勝相諸人還知此。老去來無跡。動靜不一生前。然後博敷法施。麼其或未然。山僧更下注。開達大道。今過量通佛心。今出度。不與凡聖同。顯超然名之曰祖。生後歸休。東山之定。慧院。永和二年七月二十七日終于本院。

常州楞嚴寺沙門祖能傳

祖能號大機。相州錄倉縣人。姓藤。母蔭長谷寺。觀音太子。感而生。在孩提。嬉戲動爲禪坐。善福寺大川通公見其骨相不凡。乞父母。俾出家。志之所好。不他十二能詩。登處落髮。上落山登壇。通具十七。儀雙峰源公於東福歸侍。大川和尚於大慶掛搭。建長參。嶺崖安東明日。二尊宿川移。國覺命掌記室。提。綱趙州狗子話。屬不著席者有年矣。一日闢庫前。版。有者自謂。此只暫時。破路非究竟處也。愈加激勵。譚夢窓國師於天龍。曆應二年大川訃。至奔喪。寓止。國覺藏六菴侍香。天外高輪下。康永元年忽思遠遊。常以南詢。父母忻然。便行。明年春與同志數十人汎。

宣于溫之江心宣示偈曰吾祖虛能久不來暮然相見亦悠哉曾窮大海蛟龍窟那畏粘天雪浪堆快振金鎚擣萬鼓便催石臼舞三臺明朝赫日東邊出赤縣神州金色開時東陽輝禪師居參之雙林化權隆盛能往謁見呈偈曰尋師訪道入中華却與扶桑事不違若有少林春色在黃梅確肯又生花陽依韻答之曰獨存真寶落浮華動古搖庸事即登未跨船舷三千棒千竿鐵樹正開花參千巖長和尚於伏龍山巖間開藥名什麼能曰祖能巖曰能是六祖即今在

日本書紀卷之五十二

○七

什麼處巖邊前又手而立巖依無言宣之韻示偈羅尼版自一夜坐至五更聞鐘聲豁然大悟黎明具威儀上丈室巖望見遠問曰太外底人却活時如何能達前巖乃付中峰國師法衣上堂告眾能拜辭謁月江印了卷欲行叟素無用貴諸老皆有贈言十年庚寅夏抵明州依無印證於定水相者梅溪先生至印曰吾來中真真異日為太宗師者咄溪見能曰此其人也一會奇之十七年丁酉夏千巖遷化明年五月與同參泛海以本朝延文三年著薩州帆島居肥後之承德寺九州編白大摩風化藤那部大友氏氏時聘能

開堂之顯幸寺辨香為千巖指點尋銀豐之天目萬壽寺貞治二年歸相州省父翼巖住上州吉祥寺歸舉悉集竟成法庫駿州太守大江氏初上之真福寺武州肥塚氏創歡喜寺皆延能為第十一世應安六年大相國義滿源公聞其德望以國覺寺請之不就藤刑部將命而至遇應公命住僅十日去抵常州管間郡主忻然執弟子禮草律寺請能曰佛頂山楞嚴寺後園獻帝下詔傳種洛之天龍席能謝恩竟謂天使曰貧道嘗處巖泉待殘喘之盡耳豈許不起有僧如林相以知足寺永和二年在楞嚴寺建構僧堂

日本書紀卷之五十三

○八

會中應顯有二高僧指能舉即心即佛語應機接後嘉祥十月源相國起以建長大道場公卿二至乃承勅源賴朝氏滿為先考玉巖新公墓瑞泉寺請能持齋入禪祖久仁山居士之忌設齋長壽寺延能置座講說深要鉅快盡伯國不勝禮二年六月謂使曰我本欲以全身還國者今不要之只隨處消一堆火是實能後託之七月二十四日值大覺禪師百年忌西來塔主方巖主公及門下諸師請能置座能乃讀法華經下會禪觀八月五日示違和十八日回國覺壽松巖明慶舉僧問候應接知常入夜門人各請歸



讀點燭，援筆皆應其需。二十日夏衣，跏坐莞爾而逝。  
保齡六十五，坐夏五十一。明日就崇福寺茶毗。學府  
哀號，山林變色。門人收靈柩，瘞諸青松巷。所度弟子  
二千餘人，白衣弟子不可勝算。勅諡廣圓明鑑禪師。  
贊曰：千巖禪師承中峰和尚之印記，而隱於伏龍山。  
道貌嶮嶮，學人望涯入其室，得其法也。難自取，驪龍  
領下之珠。明鑑禪師聞鐘聲而入，聞知覺蕩盡，灑灑  
落落，反復酬唱，遂受信衣矣。及歸本朝，不居華地，坐  
佛頂山待接來學。其操履與千巖師自茲相肖矣。

京兆晉門寺沙門玄球傳

釋玄球字天琢，丹波人也。少依鈞叟江禪師於川之  
弘誓寺，得度。參詳不倦，機緣相契，辭去抵平安。城隍  
慧日之籍，踐歷清要，至司大藏，秉拂說法名馳江州。  
受請開法，豐後崇禪嗣香供鈞叟四來，翫翫翫然，仰  
慕播州太守赤松氏聘州之圓應大將軍源公聞其  
道義，請住洛之晉門以病解印。播州檀越創東禪寺，  
請球爲開山鼻祖。佛龍之定光石井之慈恩皆球之  
捕艸地也。永和三年夏在定光示疾。六月二十六日  
早晨危坐，激勵諸徒，問酬如平日。午前呼筆書偈曰：  
全生全死如是如是。日照十虛月印萬水。怡然而寂。

停龕三日，顏色不變。火後布舍利，無算樹塔於定光  
壽六十八。

丹州慧日寺沙門妙奇傳

釋妙奇號特降承嗣，雲巖高峰和尚嘗入元謁諸師。  
既旋，肥遯丹州，橫山披素，負囊而至者衆矣。右京兆  
源賴之細川氏建慧日寺，令奇行大方之叢規。僧錄司  
晉明國師招以洛西臨川寺，奇堅臥不就。以永和四  
年三月八日化于慧日。東福性海見公贊奇真曰：佛  
國真子，佛光的孫，氣吞佛祖，眼蓋乾坤，漢掩松關，影  
不出山，胸次涵海。古本釋觀應化八旬，接物利生，道

風永厲，慧日益明。

京兆萬壽寺沙門圓覺傳

釋圓覺字竺三堂，依明極俊禪師發明亡事，及極遷建  
長命居，版首秉拂提唱，有聲叢林。應檀越請出世，繼  
之廣嚴，嗣香供明極爲第一。代尋開棲賢爲第二。世  
應安末遷洛之萬壽，棲之法雲，緇白歸仰如蜂得王。  
焉永和四年十月十八日終于棲賢。臨終偈曰：不隨  
前釋迦，不待後彌勒，出世於中閒，分身千百億。

京兆南禪寺沙門靈致傳

釋靈致號天境，未詳姓氏，甲州人也。早歲剝染師事

清相澄和尚禪餘好學博綜羣籍特以文雅知名徧遊諸山歷任清要之職首聚于建仁秉拂說法七衆仰興及觀清拙密受心印康永三年十一月出住肥之淨土寺貞和二年遷豐之萬壽文和三年董洛之萬壽延文五年遷建仁貞治五年初夏陞南禪應安元年住播之法雲六年冬董天龍永和二年再住東山四方禪徒隨處雲聚皆請運材上堂影隨形轉響逐聲生然則爲法忘勞人曰銀爲壁黃金爲地飽飯安眠底喚洋銅汁臥熱鐵牀戒之哉戒之哉出乎你反乎你上堂利衰譏譽稱毀苦樂譬如空華不可把

本朝高僧傳卷之三十三

○七

捉無煩惱業障顛倒妄想之可遠離無真如解脫菩提涅槃之可求見騰騰任運應諸緣流水浮雲無定跡夜榻團蒲午盂淡羹亦能落得一場快活致晚解還龍山善住菴一日示有微疾自作入壙語曰一身清淨多身清淨是故十二處十八界諸有塵勞悉皆清淨一世界清淨多世界清淨是故山河大地州水叢林色空明暗悉皆清淨我此一壙能於眞淨明妙虛徹靈通之處建立無爲樂土收萬象於一毫空三世於一念諸佛常轉清淨法輪普使人人領會大般涅槃眞常眞樂眞我眞淨之旨原夫佛與衆生同

源異派瓶盤釵釧一金所成乳酪醍醐一味所變聖後聖同道同心全主全賓無一無別須信佛身無有生而能示出生法性如虛空諸佛於中住復言辭世偈曰色身幻化無在不在以空塞空以海添海奄然就化實康曆二年十一月十八日也開世九十有一有諸會語錄并外集曰無規矩勅證寶鑑圓明禪師語

贊曰余嘗聞圓明禪師常喜風雅雖坐病牀與客聯句今看無規矩體製高格遙離文字之性若入壙之語與金粟如來之說自成極裏矣以載於傳中爲學者之粉式焉

本朝高僧傳卷之三十三

○七

相州圓覺寺沙門是英傳

釋是英號傑翁綺年入相之大慶寺拜之慈覺禪師嗣聚得度決心參得洞徹心源嘗在圓覺依東峰川大川通一老皆權居後堂年四十四結制秉拂曰靈山會上破顏微笑向空倒屣少室門下斷臂安心離水求波既然東西密付狼藉不少及乎南北宗分異端太多或說蠟人水鶴護雪或道會一片栗一羅子細點檢將來都是淨地撒柯秉拂上座忍俊不禁要雪此屈去也豈拂子云直得光明殿裏燈籠目瞪直

相堂前露柱口吐便見溪邊石女吹無孔笛而作舞  
嶺上人打拍板而唱歌雖然如是上方長髮翁  
未點頭在何故收拂子云清平世界切忌動干戈元  
弘三年出世于甲之心經寺貞和觀應開創長谷實  
福一刹遷住羽之資福相之大慶淨智圓覺上堂德  
山白棒臨濟喝趙州布衫洞山麻拍膝曰黃梅時節  
家家雨青青池塘處處蛙元宵上堂好個那一燈光  
明徧十方以拂子擊禪牀曰松梢曉月照山堂涅槃  
會上堂如來證涅槃永斷於生久將謂是實語年年  
二三月何處不桃李上堂諸佛說底法祖師傳底禪

日本書紀

本朝書紀卷之三十三

○上

日本書紀

相山會義庵角紅塵堆頭白雲邊結制上堂九十  
日安居一千半聖朝山僧門下僧亦復隨此例喝一  
喝曰下座巡堂喫茶上堂前半夏已過高聲喚不回  
後半夏未至擡手拂不來即今又作麼生良久曰寄  
言途路客聞取下馬臺英以永和四年二月十二日  
寂子鹿山歸源菴勅益佛慧禪師

相州建長寺沙門元圭傳

釋元圭字方涯生質俊機久侍佛燈國師參詳明眼  
肯出世驗之清見後舉建長應安己酉冬尾之定光  
寺平心齊禪師遷化入牌西來菴祖堂主佛事略曰

我大覺祖翁以大法付囑桂光太士桂光大士以付  
定光古佛定光古佛至尾陽應夢山建法幢正宗旨  
釋佛祖鉗鏈驗證禪子及於化權既戢涅槃時至尚  
喜末後光明鑑天輝地金剛設利逼塞虛空敢問太  
衆與他釋迦老子當時進出八斛四斗底是同是別  
若是謂同二千年前釋迦老子設諸人去若是謂別  
二千年後定光古佛設諸人去雖然如是諸人還見  
定光古佛真實履踐處麼舉牌曰祖堂有位次當頭  
親坐額主臨以書揭曰標示雙趺手攜雙履入定此  
摩屈千歲豈得起

日本書紀

本朝書紀卷之三十三

○上

日本書紀

攝州福嚴寺沙門元壽傳

釋元壽字太虛父聖德太子庶弟世傳稱七百歲云  
母氏亦非常人也幼禮佛燈國師為師親附久之懸  
解真宗雖性州率學業以優國師順世後相偕元旨  
墨韶臨海入元謁靈石芝月江印竺田心等諸名宿  
各承許可因出佛燈語錄以請諸師之題跋復謁上  
天竺三悟菴講主需佛燈之塔銘而歸出世攝之福嚴  
寺晚年寓居相之錄倉應安七年淨智虛席春林翁  
方無外來勸補處元辭不受二師至圓覺講義堂信  
公曰太虛天下名師而天性風顛老益甚願煩嚴命

信公乃制疏從史尚堅拒不就

丹後安國寺沙門浮玉傳 桂萼

釋浮玉字寶山晚號凡山藤姓越中人母平氏夢持法華僧來投宿即妊誕而方晬偶見僧誦法華輒抱持其衣躍然喜十歲禮郡之興聖寺三山源禪師受染受戒山授以法華伊吾能上口十六入京參檢約翁于南禪每有聖堂玉出衆進語翁稱英靈翁順世後通翁圓夢窓石相次住持玉歷參一老職在知賓聞嵩山在西禪爐轉方熾特往參問機語投契及山住南禪命典藏教從於山退休丹之幸泉秋月山應

建仁之請以秋月付玉曰夫天橋臺區往來之僧落袍之地也汝其盡力興建以何層閣高堂飛出林壑山招居後版山受圓覺之命玉辭旋丹州山臨遷化付與法衣一襲玉展遺像始獻嗣香曆應二年天下每州置安國寺秋月頂其數焉放牛林公住東山日玉分座接納應安元年出世伯之禪永寺居二年歸丹之舊院檀越創西林寺力請爲開山始祖又移幸泉殿堂像設爲之一新康曆年中大將軍義滿源公以洛之真如相之淨智請帖荐至固辭不就稱子數輩道聚寂寞之濱永德二年二月以風痺疾持不食

二十四日澡浴剃髮垂誠諸徒此日性海見和尚持來問候笑談至晚翌日玉使侍僧謝訪僧未復命玉索紙筆書偈曰不替輪回悟了輪回悟了底吟無去無來關筆如假寐然提之逝矣俗齡八十有奇僧臘六十有六塔於西林矣又同門有釋桂萼字少林入嵩山室親承授記應大將軍尊氏源公之請住丹州安國寺雲水常奔湊示衆曰明自己心與祖佛同如何明自己心勿強生節目

相州建長寺沙門慶芳傳 通妙

釋慶芳字少室嗣法空室空禪師空公高麗國人觀

光此方得高峰日和尚之法歸國居水精寺弘佛國之禪芳首住淨智圓覺後移建長龍象踞踞集兩會下永和四年大休寺祖堂安覺智禪師顯點眼偈曰一十三年歸太定首容長阻慕恩情今朝忽爾起三朕烟烟碧眸秀色橫後構正源菴於鹿山爲菴焉之處永德元年臘月十日化遺偈曰生也快活死也快活更問如何快活快活又釋通妙號高山得法壽福寒潭雲公千光禪師六世之孫初住壽福後興圓覺盛秉法機接示來機伏老龍門菴某年月日書偈而化偈曰呵罵佛祖七十八年未後一句臘雪連天



相州圓覺寺沙門妙積傳

釋妙積字大岳蚤入樞翁環公之室傳其玄奧又觀光中國謁諸宗匠及客歸帆楚石琦和尚贈偈曰除却須彌山總小只消芥子都吞了與他拈起一微塵富士嵯峨接蓬島中國岱衡華霍當寶刀削出青芙蓉回光返照方寸裏積塊浮漚三界中捏不聚吹不碎是何物在乾坤外臨崖望海海茫茫觸石起雲雲隊隊積及歸國錄倉源元帥請住淨妙圓覺爲國開堂不考其然所

肥後成道寺沙門元志傳

釋元志字寰中小足氏肥後合志郡人其父常信北野天神勸讀治府赤星和曼無子禱神其妻夢神賜屬子有娠而生自幼英敏不樂處俗拜大方恢禪師於正觀寺錐髮習業入洛遊建仁南禪間諮詢諸師歸正觀參大方受決辭入中華侍香中依天寧楚石琦和尚瑋公器許作寰中歌付之曰一二三四五大地無寸土五四三二一半夜日頭出天上天下稱獨尊衆生被我一口吞山川草木悉依舊依舊夏熱而春溫捏聚放開皆在我呼來喝去無不可免角籃盛石女兒龜毛杖縛空華朵東西南北又何拘畢

竟男兒卽丈夫日本大唐但坐纈釋迦彌勒是他奴

洪武初告辭石又贈長偈略曰道入日本來可拍佛祖肩駿馬不受羈長途自騰鶩日馳二萬里頃刻撫八埏妙喜鼻皮襪楊岐金剛圈臨濟正法眼滅向瞎驢邊鼻孔略彷彿諸方誰敢穿志歸國築西鶴軒爲憩息處檀越菊池持朝建成道寺延志爲開山祖九州編白拜禮絡繹年八十二化于本山臨終偈曰日本非生土大唐亦客鄉虛空兼法界平等我家常或者曰師參琦楚石發明大事親受印記不及歸國于支那又無行狀傳記蓋考索不精傳虛爲實也

亡意而作識者不取也

京兆大德寺沙門道壬傳

釋道壬字虎溪參大燈國師發明宗旨旁有文材所作偈頌格律高妙名著叢林後入元國徧謁諸名宿共蒙許可至元間大燈國師計至壬作偈曰虛空惡發咬牙齒沙竭吞聲寄信來愧我胸中藏五逆大唐國裏獨聽雷壬將終身於元地徹翁和尚遣僧招之歸來出世大德

尾州妙興寺沙門宗興傳

釋宗興號滅宗世姓源氏本州中島郡人其先嵯峨

天皇之夢也。父嘗謂相菴意禪師曰：若得生男，與師爲弟子。菴曰：若然，須爲大應國師之徒。菴蓋應之高弟也。興生而秀拔，甫七歲，習經書於光明寺。良澄法師十九歲，授圓興寺鍾髮，登具見相菴于福山。天源菴一見器重，陶冶數載，一日辭菴。菴與大應頂相，以爲法信，囑曰：你已於法無餘，他日當嗣先師。又先考之遺意也。興返本州，創妙興寺，而居殿堂，悉備衆盈一千指，相尋建梵刹。凡八所，又江尾駿三州構接待菴雲水之徒，悉受其惠。興詣熱田神祠，視其毀壞，竭力修治，不日而成。在昔弘法大師修此祠，識曰：却

日本書

本朝高僧傳卷之二十三

○十九

後七百年有重修者，其名與興者弘也。卽我再來也。地藏寺觀勝法師粹密教，一日觀念之際，忽神童至，報曰：弘法大師至，速出拜迎。勝愕然趨出，興正踵門。勝問童曰：大師何在？童指興示之。勝曰：此是滅宗興和尚也。童曰：弘興與豈有二耶？言訖不見。勝恍如夢覺，乃知弘法之識如合符矣。興應安年中遊京師，定山禪公夢巖應公與興友善，請居東福第一座。菴之崇福虛席，延興不赴。後住洛西龍翔，不久歸妙興投老於天祥菴。菴之西南二里許，有一林丘，松竹幽茂，興自掘一穴，置龕於內，顧謂徒曰：我死卽葬于此中。

永德二年七月十一日，跏趺坐化，去停龕，二日門人遵遺命，瘞於全身塔。曰：天瑞報齡七十三，勅諡圓光大照禪師。弟子聖翁菴繼住妙興，後居瑞芳菴。智雄和尚開龍獻寺於丹後竹野郡，爲第十世丕振法義。天子召內屬問法要，特賜號曰弘宗慈濟禪師。贊曰：宗門之中，稱弘法大師之再身者有，寂室光與滅宗興焉。夫大師者，第二地之聖者也。入唐之時，中華諸刹禪法鼎盛，也當是之時，心無慕之耶？以其答嚙峨帝之事，可爲徵焉。故那伽定中分身托生於圓應圓光之一師乎。

日本書

本朝高僧傳卷之二十三

○二十

### 元國牛頭山沙門省吾傳

釋省吾號無我，京城華胄。子幼慕佛門，年五入教寺，落髮進具學顯密法，粗通大義。夏衣參禪，依宗峰國師于大德峰，稱其偉器。嘉曆二年，月堂禪師住洛之龍翔，利羊高揭，吾往翼從。命典輪藏堂，遷崇福。吾亦從侍，一日堂舉紙燭吹滅，話吾言下契悟。呈偈曰：金剛疏鈔重，雙肩放下虛空打。喫頭將謂德山太奇特，油養債得兩三錢堂仰手曰：還我油養錢來。吾優禮拜，堂曰：神光來也。吾云：某罪過堂深肯之，卽付無我號，授一心戒。貞和二生石城山妙樂寺成，吾建

丁機名曰吞碧以爲月堂禪宴之處四年春辭堂入  
元謁仲銘新于承天用章俊于淨慈用貞良于靈隱  
皆蒙賞識司輪藏於杭之中天竺天寧楚石琦本覺  
了菴欲育王月江印愛其英敏殷勤啓迪上徑山拜  
虛堂和尚塔月江作偈贈曰天澤餘波至海東兒孫  
個個起吾宗黃金充國無人識三扣浮圖問祖翁楚  
石了菴同贈焉吾上五臺金剛窟親拜化佛受妙戒  
訣尋往靈隱謁見心復公乞吞碧樓記於是時諸  
名宿皆有題贈因道俗之勸住金陵牛頭山吾乃拈  
出辦香供月堂陞座說法開感紫雲降太華墜緇白

本朝高僧傳卷之三十三

○十一

噯未曾有置元十年至正丁酉秋解印而歸楚石了  
菴作無我銘送之恕中愔古林茂頌無我號與之季  
潭泐偈饒送曰大坐牛頭啓祖關真燈照世古風還  
一菴高臥夜堂寂百鳥不來春晝閒白下正提新劍  
斧日東猶憶舊家山鐵船打就渾閑事滿載清風不  
可攀吾屆石城拜觀月堂康安元年堂最化象外越  
海請吾於妙樂吾曰吾之風顛先師之所放遂不就  
貞治二年吾再入明坐心華堂元明亂後牛頭荒廢  
吾命弟子凝禪栢堂爲化主恢復殿堂衆僧隨喜宗  
吾稱住持明太祖素聞吾道望洪武六年延見問法

吾奏曰貧道投老於和氣中守愚了殘喘耳何以謝  
聖恩奏對愜旨賜紫金衣陞座說法吾乃豎起拂子  
曰一毛吞却無邊法界佛祖聖賢混入裏許欄柵因  
甚在山僧手裏良久曰還會麼若又不曾聽取諷說  
收拂子曰衆星拱北辰萬國歸皇化便下座龍顏悅  
懌百官感嘆帝欲置吾擬已思入吾力辭曰心是良  
師陛下勿外求帝曰如何保任吾知帝至信授木叉  
妙訣曰宸襟內祕四海來王吾遂再不下山帝在位  
中麟鳳甘露之瑞屢至是特知戒德使然亦未嘗入  
十四年二月望吾在心華焚平生文字數十卷曰快

本朝高僧傳卷之三十三

○十二

哉快哉世尊一字不說達磨不立文字今日一炬却  
較些子召法弟無方應曰吾將逝公切守先師遺誡  
莫墜真風卽瞑目應勵聲曰如何是末後句吾作書  
勢應度與筆便書曰此岸彼岸一蹈蹈翻迦求藥  
并吞乾坤拋筆坐化世齡七十二法臘五十九火浴  
一柱骨不燒其色青白佛形宛然衣體如雕舍利黏  
綴警珠璀璨門人奉持納于心華塔帝聞訃音哀悼  
曰吁天喪朕良師遣中使資大栢檀香衣龍紫帽珊  
瑚念珠贈以菩薩之號賜金餅百錠以資香華諸山  
名宿赴弔集祭南堂清欲哀悼文曰噫無我月堂真

子南浦的孫髮嘔器盛天澤水破砂盆脈少室門實  
是末世僧寶無依道人清欲接高風二十年愁遺一  
老拂袖胡適使我空思寒灰煨芋魁雖有膏膠誰與  
續沒絃空索索地絕後光前愛中竺月杓折輪指披  
臺山雲移出金仙藏身根葉苦提薩埵吁嗟無我  
扶桑東枝迴佛日皇明北極照龍筵玄機獨朗龜毛  
拂冲天此日何日同佛唱滅妙心只許迦葉傳嗟無  
我真寂定中首肯也否朝五臺暮中竺行藏不問清  
欲何宜嗟

贊曰本朝諸師住支那之名藍開堂匡徒者大率可

本朝高僧傳卷之二十二

本朝高僧傳卷之二十二

○五

真焉無我吾公初遊元住牛頭山感雲天華之瑞  
及再南遊明太祖召賜紫金衣對萬乘主敷揚真風  
屢視榮遇超然高去與一時龍蟠虎踞之尊宿爪牙  
逐馳未後盛大帝降御香籠以佳名如吾禪師遊華  
夏之雄者也乎南堂之文言實且麗宛似真贊故系  
傳尾而我贊贅矣

### 豫州興禪寺沙門本空傳

釋本空寂禪師密邇孤峰明和尚參究有年受記之  
後但愛岑寂樂佛祖之道豫州大野正公居士建興  
禪寺起之住持禪客慕風者多永德二年初秋十七

日謝世膺三十三周忌同州善應寺朴菴敦公隨請  
附座提綱其散說曰共惟本空禪師雲樹連理孫枝  
心華聯芳子葉道化緇白氣吞佛祖早懷遍參之志  
移錫於鷲峰親侍三光之巾匝朝參暮請凡受藥誨  
前後四十餘年殆無虛日其道德如傳一器水於一  
器矣二光散化之後屏跡於寬閒之地遊心於無何  
之鄉取友麋鹿忘機鷗鷺隨處周旋任緣放蕩只以  
松花荷葉充溫飽爲足而已寔是懶殘大梅之遺風  
宛然可見焉於盛德大業非蠡測管見之所能及也  
況蘊奧乎不料千載之後重瞻古人之風寂師之事

本朝高僧傳卷之二十二

本朝高僧傳卷之二十二

○五

史失行實而朴菴散說粗舉其顯末因以立傳真公  
字朴菴聖一國師四世之孫見于傳燈錄

### 京兆東福寺沙門寶洲傳

釋寶洲號南海上野世良田人姓源山名種族也年  
甫七歲投郡長樂寺從桃源勤公剃髮就學及長掛  
搭相之圓覺參仙竺二仙聞不聞一師十八與中巖月  
公往關西將入元公府有故不許渡海貞和初與同  
志數輩遂泛海至洋中船破洲附一大櫃抵高麗地  
如有冥助登岸暫憩日將三竿見一龐眉僧著金縷  
衣負簪持經方欲與語俄失所在既而歸國掌藏鑰



於圖覺又參法雲復菴天龍夢窻左金吾源時氏山名  
 鄉州德望建少室山少林報恩山光壽於伯州州  
 太義山理濟於作州請州為開山始祖貞治二年出  
 世上野長樂寺嗣香供桃源先是寺僧其夢月船禪  
 師據丈室區何州至因知州即月船之再來也雲水  
 赴會禪道不榮應安元年構靈雲菴以退居焉又住  
 洛之萬壽庚戌歲觀象東福晚還作之理濟永德二  
 年十一月二十九日寂春秋六十三塔日增輝

相州建長寺沙門全快傳

釋全快字鍾夫從事靈巖昭公參究有分又觀光元

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十三

○ 二五

國偏識諸老久依育王月江印禪師江證其所悟付  
 自頂相贊其上曰人根有利鈍道無南北祖俊快底  
 祇僧兩手親分付金園七穴八穿栗蓬東吞西吐要  
 人直下便承當曹溪佛法無多子快歸開信之善應  
 寺為第一代開堂然香為靈巖之嗣四旁水雲懷法  
 津溪後稟府帖住圓覺建長心傳顯居士上杉掩土氏  
 佛事曰四月八日開無來芳庭梅結實漸將黃南薰調  
 轉無生曲鐵作心肝也斷腸茶人現宰官身列威里  
 族胸吞九流八索眼飽三略六韜中興王家視生民  
 如赤子外護佛法建精舍布黃金二十六年前覺智

室內傳衣鉢二十六年後釋迦堂外歸山止無端透  
 過生人關直得高安毗盧頂正與麼時且全身奉重  
 一句如何舉揚無影樹三丈土便是慈氏率陀天  
 晚柳華光菴退休至德元年八月十四日書偈而逝  
 偈曰未後一句應用無虧手把明月倒上須彌壽七  
 十六塔曰瑞應余讀月江和尚贊似授記親又宋文  
 憲以快公為月江之資然嗣香供靈巖者何也此方  
 先達此類儘多無關於倫斷橋白雲於曇希叟等是  
 也或以臨濟嗣黃檗雲門嗣雪峰為例者相似而不  
 同余不能無嫌疑後學辨焉

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十三

○ 二六

江州積翠寺沙門宗雲傳

釋宗雲字白翁姓源雲州人大德寺微翁和尚之族  
 弟也依大燈國師甚久具向上眼目國師付法語印  
 之有欲知其父先見其子他家自有通霄路之語後  
 適江州創慈翠寺枯淡淵默羣徒趨風有挾書策者  
 雲躬巡察秉典炎火機鋒捷疾風規森嚴眾苦其辛  
 辣臨終據座說偈曰生也苦屈死也苦屈畢竟如何  
 苦屈苦屈泊然長往塔于本寺

攝州妙觀寺沙門了義傳

釋了義字海岸海部氏阿州人早遊教場綽有志操

歲及弱冠欲擇師參禪昔大燈夢憲一國師望高一時義詣賀茂神祠祈定機緣夢神告曰當依夢憲義詰朝而出路過大德寺門忽惟曰丈夫見隨神脚跟而轉堪作什麼大燈國師雅我所景仰也直入請謁國師一見器許從此參究針芥相投命居版首後開攝之妙觀寺接引海參建武年中天下擾亂南北分爭義棄寺歸洛省觀國師移居江之興禪寺一日國師使義於南帝關吏問來處義以實告吏曰子已有德之士若歸夢憲國師乃可宥之義笑曰出家兒豈畏死而易師承乎要頭便斬取安坐引頸吏遂加刃自乳涌出流地關首屬吏駭嘆悔謝

贊曰義公初不墜者於明神之後者當得悟之象也後不驚回於關吏之前者燥迎羅心之所定也自乳涌出者實悟妙用之驗也觀其始卒真出家大丈夫兒也

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十三

〇 二十七

本朝高僧傳卷第三十二

本朝高僧傳 卷之三十三

音訓

都 蒲禾切 制 之列切 牯 公土切 捐 于權切 爾 綿兮切  
躡 諸廷切 粹 須允切 躡 跡也 麗 唐何切 登 和加切 顧  
龍 都切 入 日執切 入 流 重 想里切 釵 釵 上初皆切 爆  
步 木切 痺 冷淫切 脚 吟 爾者切 陶 徒刀切 愕 逆各切  
金 烏貢切 資 才資切 區 沈手切 蠶 良以切 引 延也  
舞 也 飯 餅 切 區 沈手切 蠶 良以切 引 延也

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十三

〇 二十八

江府住玉泉軒成九居士信施淨財集  
本朝高僧傳卷三十三 茲其  
上報四恩下資三有蒙道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第二十四

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十六

京兆南禪寺沙門良芳傳

釋良芳號蘭州若州人橘姓諸兄大臣之胤母氏祈觀音菩薩而生幼落髮于教寺年及志學觀光上國聞一山國師道望幡然夏衣抵南禪大雲菴國師已入寂矣乃謁無相真公真一面器重獎諭久之辭遊講肆探盡諸家祕蹟菴居睿山橫川冬夏一裘長坐者三載登愛宕山誅茅禪坐樵夫饋糧山鳥獻果繇

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十四

〇一

是聲光日顯建武元年夢窻國師再住南禪招芳侍內史攝之溝杭檀王建善法顯性一精舍請芳而居曆應元年清拙和尚再遷南禪令芳司輪藏貞和乙酉雪村梅和尚董東山芳趨謁入室梅公顧記之曰今日掛搭他日此山長老我門有賴也芳時年四十一師資緣熟及雪村順世退守大龍之塔龍山和尚住持建仁舉芳居第一座兼拂說法文和元年出董甲之淨居山何歸洛天境致別源旨聞溪聰中山間諸老王建仁日舉居版首播州太守源則祐赤松人氏參雪村與芳昵交也初大義金剛一刹爲演法之場

康安元年冬橘正儀楠氏源清氏細川率南軍入京師

大將軍義詮源公奉主上避於江州武佐寺嗣子義

滿年僅四歲左右抱持夜投芳室匿于衣中芳躬自

乘輿晝夜疾馳入播之白旗城免虎口之危明年源

公歸洛謝芳甚至特割攝之濱田莊永充衆供貞治

二年權相之萬壽四年乙巳領洛之萬壽永和四年

住建仁果應雪村所記定心院殿尼大喜從芳聽法

捨勢州樂庭腴田若干畝以資食輪康曆二年奉詔

興南禪入門云萬仞龍門一超直入畫大地人不須

佇立時台旆臨筵僧俗歡呼山川爲之增輝上堂十

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十四

〇二

方二世諸佛各現夢幻身晉說夢幻法使夢幻人盡證夢幻佛果所以道設有一法過於涅槃吾說亦如夢幻苟能於夢幻中如實而證如實而解如實而修如實而行以如實之法能自調伏起大悲心作種種方便卽云一道清淨平等解脫若又令他怎麼會去豈夢見到初僧本分之田地麼拈拄杖曰你且道作麼生到本分之田地底一句卓一下曰眼若不睡諸夢自除上堂好個時光六月方半直須努力時不待人所以道莫待耳聾眼暗頭白面皺老苦及身眼中流淚身裏悵惶未有去處到怎麼時整理手脚不得

也縱有福智多聞都不相救爲心眼未開唯緣念諸境不知返照一生所有惡業悉現在前是自心貪愛所見悉變爲好境隨見重處受生都無自由分若能對五欲八風情無取捨垢淨俱忘如日月在空不緣而照如香象截流更無所滯斯人天堂地獄所不能接也何故良久云但離一切有無諸法透過三句外自然與佛無差上堂一切諸法皆從心生心無所生法無所住無所住法沙界流傳無所生心常時顯現乾坤壞不壞虛空包不包只個心法諸佛出世說不說祖師西來傳不傳畢竟心之與法拈向一邊著佛

日本書

本朝高僧傳卷之三十四

〇三

日本書

之與祖是甚破草鞋且道山僧恁麼告報還屈著諸人麼若道屈者多言復多語由來反相悞何故啼得血流無用處不如緘口過殘春芳歷三寒暑佚老東山清住院至德元年十一月月初六日因病沐浴淨衣據坐趺坐其夜有信官來受戒而去至二更書偈曰須彌倒卓虛空消亡日面月面常時寂光投筆長逝壽八十越後三日門人奉全身塔於本院勅諡弘宗定智禪師有諸會語錄傳于叢林贊曰孟子曰羿之教人射必志於教禪者之所志以悟爲教造次顛沛必於是豁爾悟之則大地虛空一

時穿破至者裏貴什麼神通妙用笑什麼奇特靈驗支那本朝歷代諸師皆一射甲科之人今見其語句瞻望其高蹤耳余讀蘭州和尚諸會之語其玄辯無礙如下坡丸非佛祖大機歸于掌握焉能如斯或者不見全錄取靈會獻果一件贊辭評語猶如不知根源徒摘葉尋枝也又誹澆漓以楚雞冒鳳碌碌混玉殊不知著他獅子皮自作野干鳴矣

### 相州圓覺寺沙門識桂傳

釋識桂字香林承嗣肯山悟公天資英達道貌出羣當時與九峰度中山穎齊名永德二年秋住圓覺寺

日本書

本朝高僧傳卷之三十四

〇四

日本書

禪客請掛搭者多後靖退慶雲菴至德二年二月十八日順世春秋七十二有遺偈曰久似脫袴生如著衫全無生人討甚生人前二三後二三勅諡等慈禪師有法子若干人

### 京兆大德寺沙門宗立傳

釋宗立字卓然津守氏攝州人稟徹翁之印攝之住吉縣州創慈恩精藍接化四來後奉詔住大德寺又歸慈恩將願寂預占葬地書遺偈曰日用三昧佛祖不知機輪轉處橫身乾維既而自入棺內俾人釘之謂衆曰并汾絕信真活計言訖無聲越二日門人埋



葬樹塔其上實至德二年臘月一日也

贊曰卓然師龍寶二世之孫觀其臨亡之舉厝與晉化和尚相似也平生真率皮袴桃禪於是乎露實有遁祖之骨格耶

### 相州建長寺沙門林芳傳

釋林芳號神堂得龍山見和尚之記寓相州叢社陸沈衆中應安七年夏關東元帥源基氏蒙其道貌聘補壽福堂辭不就義堂信公將命勸之無已而應指山門曰此門廣大該括法界透得一重重重無礙上堂總大千沙界爲一伽藍約十世古今作一期限說

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十四

○五

什麼九旬禁足論什麼二月護生要行便行要住便住昨日在報恩住底今朝來壽福開席不拘如來聖訓元是衲僧家風然雖與麼克期取證未審當示乘真正舉揚爲國開堂一句作麼生道良久曰岫嶠峰頂八字碑記得文殊二處度夏迦葉攜出纒近提邊便百千文殊佛言汝攜那個文殊迦葉罔然文殊用盡神通萬化千變者野狐精將謂多少奇特迦葉盡其神力推不能舉者龍頭蛇尾頂門無眼腕頭少力山僧今夏兩處度夏衆中莫有人要攜出麼幸是太平無事客相逢何必動干戈下住六年張皇祖業時

入曰千光一燈復燃矣康曆己未揭鼓上堂辭衆曰千木隨身知幾回傷人贏得笑哈哈今朝與盡散場去脫却布衫歸去來退閒鹿山龍興菴後升建長終于龍淵菴未考其法嗣

### 京兆南禪寺沙門通徹傳

釋通徹字清溪自號天遊三浦氏相州人自少出俗拜壽福寒潭雲公下髮納戒上洛遊學壯歲入元歷尋諸刹二千餘載掌藏輪於雙徑及理歸機風暴船碎徹乘片板者無人境忽童子來與雪梨大如瓜嘗之得活又有神人刺船既還本國依夢憲國師于天

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十四

○六

龍國師付衣出世甲之淨居次據臨川遷住天龍綸命荐降權南禪大相國義滿源公賁合輪贈紫衣徹述偈謝之上堂一機纒發萬象明明宇宙寬一句單提三際堂堂全體現脚踏下了了常知知亦不立方寸中如如獨照照亦不存大千沙界解脫門百寶光中正覺路漚生漚滅水流元在海雲散雲收月落不離天且道是甚麼境界泥牛吼處山河靜木馬嘶時日月長上堂廣大門風威德自在上來打個不審消得萬兩黃金下去打個珍重消得四天供養六六三十八東方甲乙木畢竟如何好將堯德振吾宗仲冬

聖佛殿成上堂極大同小極小同大看看南禪拂子

頭上毗盧遮那覺自寶殿彈指圓成煙煌然巍巍乎

如兜率天如夜摩天過去諸佛坐此中現在諸佛坐

此中未來諸佛坐此中法身報身及化身刹說塵說

雖然說三際一佛土三世一切時所以謂於寸毫端

現寶王刹坐微塵裏轉大法輪直得燈籠起舞露柱

交參瓦礫堆是瓊樓玉殿一莖艸上丈六金身不從

天降下不從地湧出元來不假他術全是自己三昧

世界新日月乾坤舊山川諸山宿德大家棟梁兩序

耆年法門柱石祖道歷歷玄風蕩蕩正恁麼時畢竟

功勳顯何處拂子云將此演心奉塵刹是名便爲

報佛恩光嚴上皇召微商略碧巖集至僧問夾山如

何是夾山境山曰猿抱子歸青嶂後鳥啣花落碧巖

前之語上皇契省微付袈裟以爲表信微後居丹之

常照寺以至德二年十一月四日書偈遷化曰五彩

圓虛空空何有形容虛空乃萬象萬象乃虛空事年

八十六茶毗于吉祥塔處門人拾遺骨投之大井河

邊遺囑也微室無餘蓄單丁靖休以治葺古寺破房

爲務修微摩法至臨終不關善屬文辭及其操觚濡

毫然可觀有語錄若干卷

### 京兆建仁寺沙門良永傳

釋良永字相山藤姓嗣西禪無著緣公之法出世建

仁唱一山國師之道靈洞院正仲禪師圖迦葉達磨

二尊者至其祖高山照禪師二十八代省修請永點

眼供養永散說畢復說偈曰濫觴一自迦葉波太法

東漸列派脈稽首四七個諸尊各成八百諸功德一

點未下以前看盡賴筆端三昧刀身毒震且日本東

一樣眼橫鼻自直焚香跪之并禮之拜手以贊亦以

式永晚退休祥雲菴至德三年十一月二日或曰八

寂壽五十七或曰十八

### 賀州祇陀寺沙門大智傳

釋大智字祖繼肥後州人幼時岐嶷輕蔑塵世七歲

投寒巖尹公于大慈寺就童役及長學業據羣後往

相州謁南浦和尚于建長機語不契去抵賀州參瑩

山禪師于大乘山令看百丈野狐話提撕七年一朝

立東廊下見僧從西廊過忽然了悟急趨丈室高聲

叫曰錯錯山領之智便禮拜一日山問曰子歸就父

時如何智曰古鏡臺前不借燈山曰還有鑑照也無

智曰鑑照不無不見兒孫邊事山曰你洞上之宗種

也師呈二偈其一曰建化門中表嗣承天南地北覓

究情誰知父子相逢處古鏡臺前不借燈時明峰爲  
首座智就而請益造詣日深延慶二年東明日和尚

東渡住圓覺唱新豐曲智往拜謁呈偈曰洞家春色

興將闌一徑苔封到者難只有杜鵑枝上語夜深獨

自哭空山東明稱賞回辭明峰附舶入元謁古林茂

雲外嶼中峰本無見根諸名宿悉承青顧遍踏名場

禮諸祖塔淹留年久有維桑思天子下詔駕本國舶

智進偈謝恩曰萬里北朝宣玉詔三山東海送歸船

皇恩至厚將何報一炷心香祝萬年既至洋中風濤

鼓怒飄泊高麗舟楫皆破智作偈呈王曰曠劫漂流

生於海今朝變被業風吹無端失却歸家路空望扶

桑日出時王賜船返國省觀明峰於大乘洞洞上法

入鳳凰山誓不下山者殆垂一紀因有偈曰艸屋單

丁二十年未持一盞望人煙千林果熟攜籃拾食罷

溪邊枕石眠四衆歸嚮土木興作號祇陀寺臘八示

衆曰果滿三祇道始成放光動地度羣生一聲鷄唱

五更月林上誰人夢未醒涅槃會示衆曰枿暗花明

二月春雙林示寂赴泥洹兜羅綿布不能蓋露出紫

磨金色身佛生日示衆曰閻浮八萬四千城不動千

示衆曰二月安居半已過二千年遠事如何若云佛  
法無靈驗中夏爭知毒熱多門人嚴侍者編其偈頌

成一卷盛行于世矣

贊曰大智禪師日域元國鐵鞋無底只以此事爲急

務故能續家法見其示衆自有正偏五位之體裁矣

京兆南禪寺沙門善育傳 善益

釋善育字大林相州人自幼脫白拜無象照禪師於

相之淨智剃具及長參遊履歷諸職回無象龕下密

受心印大將軍源公以天龍請之不就後住建仁南

禪風規濟濟犀麝最嚴晚屏居正宗菴應安五年臘

月二日示滅於濃之瑞巖寺勅謚僧海禪師有弟子

一人諱善益字大中歷聖建仁南禪年七十四逝臨

終偈曰一機嘗轉閃電猶遲掀翻大海陽側須彌

京兆東福寺沙門師振傳

釋師振字起山豐後州人不詳氏族證解無礙文才

有餘凌霄同門來連疏住洛之圓通尋遷二聖莊一

辨曰此香不涉鉢兩全無價數諸人還知落處麼若

知落處一任添取其或未然燒向爐中供養前住常

山後住圓通愚直和尚用酬法乳恩應安五年壬子

軍源公聘請住洛之真如時年膺大衍世人僉曰名  
字膺長老如稻麻竹葦之叢生本色真住山如芝蘭  
玉樹之鮮儼藤源兩檀越依僧錄司擇法眼請若作  
家大興臨濟下宗可謂人能弘道上堂劈開秦華還  
他巨靈神百步穿楊須是由基手所以其職得其人  
則宗社改觀此道得此人則祖室繁興真如今日已  
進者出手成夜已退者戮力替助祖教回春泉石增  
光今時風規重鼎新古佛宗風再振起擊禪牀云我  
見燈明佛本光瑞如斯永和戊午再住三聖永德壬  
戌與東福結夏上堂護鵝之戒如雪守蟻之行似水

日本集卷之二十

○土

也是田單火牛我者裏無結無解無修無證或時執  
竹所松鳩之涼或時照東廊西堵之月只如雲門太  
師道還我九十日飯錢意在那裏喝一喝上堂舉拈  
華微笑公案頌曰黃面空拳誰小子飲光笑裏露鋒  
鏑不因風撼庭前樹爭得幽花撲鼻香冬至上堂六  
文未動轉聯珠於象外一氣潛回論消長於今朝拈  
拄杖曰不爲七十一候邊變不爲十二時辰所使底  
伴塵生施設盡一晝下座振晚往江州往東禪千光  
玉田來迎等寺至德二年十月十八日化于來迎眷  
秋六十九塔于東福心源菴有四會語錄

因州大興寺沙門心王傳 宗岑

釋心王初徧問諸刹後登濃之遠山從峰翁一禪師  
辛勤叩請爲法忘軀因爲飯頭看仰山推枕子話一  
日在庫下忽爾得悟翁下來問所見王便拈起木杓  
翁肯之服侍數載增入玄微因州檀越建大興寺請  
王開法參徒來格者甚多又豫州宗昌寺大蟲宗岑  
禪師稟印剏於峰翁道山險峻學人來問岑曰放汝  
三千棒擬議便曰閃電過了也勅證大證禪師

相州建長寺沙門性珍傳

釋性珍號藏海山城州人弱齡出家徧躋叢席掛錫  
東山司書南禪又依夢覺國師于臨川參江西湛公  
終得罷休菴居江之山中物外什公董相之淨智招  
珍居後殿及遷建長舉轉前堂秉拂分座聲光煥著  
物外縱輿出世丹後普濟開堂之日嗣香爲西江拈  
出示不忘本也有啓瑞藏主物外之徒出衆致問舉  
雪竇還道者因緣往復諸難至八十二句珍機辯淥  
然若雨注河翻一會長服晚受府帖住建長寺府帥  
壁山居士忌辰陞座說法偈示大衆曰於諸供養中  
法供養第一法者是何法所謂一心法心法無形段  
通貫十方界四聖并六凡皆依此法住所有所作事

日本集卷之二十

○二



無不依此成今此一集會七七所修善供佛并施僧  
妙經頓漸書熏修圓通懺讀誦及禪寂塵裏出大經  
毛端現寶坊皆由此一法一法一切法一切法一法  
一月萬水月萬水月一月分明爲伊舉一舉四十九  
珍之爲入道貌豐肥起居重遲雅富內外之學聖堂  
之暇講經論諸錄湖海包笠川輪而至退院上堂說  
偈曰浮雲南北有離合人世古今多是非離合是非  
都不管百花溪處一僧歸休居福山之吉祥菴歲七  
十五寂于菴中

甲州向嶽寺沙門得勝傳

日本傳述

本朝高僧傳卷之二十四

○主

釋得勝號拔隊藤姓相州中村人母感奇夢而生四  
歲喪父膺大祥忌其家齋僧勝問僧曰吾考已久無  
形云何享之僧曰形雖亡而神尚存隨感而應勝思  
忖神已存今在何處疑情不輟稍長思二塗之苦日  
生怖畏又疑卽今見聞覺知者是個什麼注念單生  
殆廢寢餐一時忽爾胸中洞明自喜自笑尋以所見  
質諸時輩無能辯者或謂勝曰子靈利人盡學書文  
勝曰若實靈利當學出世法何黏著世間文字乎乃  
往州之治福寺隨應衡禪德受業年二十九落髮還  
瓊侍者瓊單丁住菴二十年頗飽參士也與語蒙發

隊曰吾自少時常疑此事中聞有所見只是識量依  
通未真解脫吾有大願豈以得少爲足瓊曰大願可  
得聞乎勝曰吾願道眼分明當續佛祖慧命接上根  
問進安令一切人天俱躋覺路如有不幸墜入三塗  
者我代彼受苦縱經千萬劫終不退轉瓊合掌曰善  
哉是實諸佛之大願也從是用功益緊或經行息移  
或或露坐不避風雨邑人爲結州廬當窗設齒長坐  
不臥偶聞溪聲有省徑趨鎌倉謁青山悟公往常州  
見復菴已公遊遍武藏上野謁諸知識皆受優賞乃  
返訪瓊曰徧問諸方皆但稱我若只怎麼不用參詳

日本傳述

本朝高僧傳卷之二十四

○主

不如山居自修瓊勸見雲樹孤峰園師勝轉往雲樹  
隨衆入室一日參次峰曰趙州因什麼道個無字勝  
擬開口峰咄曰你將情識爲卜度那勝於言下大悟  
感泣揮淚明日詣禮呈投機偈峰助喜曰我門猶未  
寂寥密授信印且曰你見絕倫玄號拔隊勝至因州  
有道全菴主開室集百餘衆勝到一居士宅士問此  
菴主道眼如何勝曰不知士曰某甲非慢心爲一太  
事故問勝曰者漢脚跟未點地在而敢開室說法太  
龍其許之乎未幾菴主果卒勝歸粉里寓七澤瓊聞  
其得法曰公今正菴居時至矣勝又相之彌勒寺濃

之桐山駿之鷹打遠之天方等駐錫寓居初，靡定處，或山神野鬼現形，聽法，或佃獵漁捕者捨業受戒，抵江之永源，訪寂室光和尚，道話次，叙參禪，告上室大，稱歎時學者數輩隨室求開示，做工夫，室指勝曰：但依他，恁麼做足矣。謁峨山碩禪師，于能之總持山，素聞勝名，掃榻而待，留錫九旬，傾倒懷抱，會裏僧曰：公胡不畱此間，相承菩薩大戒，嗣洞上之宗旨乎？勝笑曰：佛祖直示之道何墮？諸相我已，有師去，菴于豆之鍋澤山，山下居民悉歸禪化，纔歷兩夏，移相之，毛毛山有學徒三千，指又菴于甲之高森，三年國中，大化。

本朝高僧傳卷之二十四

本朝高僧傳卷之二十四

○主

有秀菴主相，攸於鹽山，創精藍，延勝繼曰：仰信崇殷，高堂成，太守刑部源信成武田尊駕其德，戮力外護，日向岳禪寺會中，稱于盈一萬指，示衆舉雲門藥病相治，話曰：釋迦老子歷代祖師，說是說，非說，心說，性說，禪說道，以至一切語言，皆是應病底藥，且道：那個是自己佛法？難遇今既遇，人身難受，今既受，放下，一切看，山僧恁麼說，諸人恁麼聞，畢竟是何物，示衆覲面相逢，渠是阿誰，道得也，蹉過道不得也，蹉過畢竟你麼生？刹竿頭上，橫牛生子，至德四年二月二十日，端坐示衆，曰：端的看，是什麼？恁麼看，必不錯，言訖，入

滅壽六十一臘三十二諸徒奉全身，瘞于本山，大正十六年六月五日，勅謚慧光大圓禪師，有語錄行于世焉。

越中長慶寺沙門運奇傳

無盡

釋運奇字，絕巖初遊，耆宿之門，明洞上之旨，趣後屈，賀州傳燈寺參恭翁良禪師，傳持衣鉢，越中檀越慕奇風義，開護國山長慶寺，請爲開山始祖，向北之禪侶多歸，輪下臨終，集徒曰：汝等於末後，全機良久，曰：喫茶珍重，奄然就化，有弟子無盡號藏海，賀州檀信林龍興山妙雲寺，招爲第十一世矣。

本朝高僧傳卷之二十四

本朝高僧傳卷之二十四

○末

豐後泉福寺沙門妙融傳

釋妙融號無著，出于隅州藤姓，自幼俊邁，眼光射入，年十九，往日州大慈寺禮嗣中柔禪師，剃髮具戒，精苦勤辛，日夜不寢，謁三光國師于鷲峰，問如何是學人修行事，國師曰：一切不可思量，融曰：不思善，不思惡，還可趣向否？國師擒住，曰：恁麼道，底是誰？融無語依止，不契回鄉，掛錫靈山，興聖寺，九旬燒手香，端坐功夫，至夏末契契，大見香煙印鉢水，有省抵薩州，副田卓菴而居，誠精楷尤有同參，僧到能之總持時，無外照公居第十座，因語融之修心，外知是法器，曰：歸

吾國國祚得者漢一日見傍僧定中展開兩手融叱日光陰可惜勿虛睡僧曰夢有人負大般若經至日此經安置菴中吾欲接之故展兩手爾是日薄暮無外還自總持融喜曰總持是般若體也傍僧所夢豈在茲乎即至參問遣外怒罵含淚而歸詰曰若無微證分不再參見其夜跪坐至第四鼓慘然開悟急喚告外及外聞皇德融亦從行商推宗旨妙契益深外返總持命融踵席外付衣且囑曰你不居城邑隱棲山谷宜護持祖道莫使斷絕既得付屬遊化諸州貞治五年開日之太平山結夏安居衆後十餘員至

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十

十七

夏末滿八百指應安初住菴勢之弱見有祭主來問曰我閱神書有一段疑處參訊諸禪師未有決了分和尚慈悲決示所疑融曰問將來主曰混沌一氣清以爲天濁以爲地且如混沌未分時清濁在何處融曰清濁不是清濁未分不是未分發語底是濁未發語底是清發未發外引一句來主擬開口融便與一掌曰這天地來漢地作什麼主當下契悟執弟子禮受菩薩戒融往豐後改教院爲禪刹熾唱宗乘康永元年太守田原氏欲建梵刹誘融相偕而計無水忽有童子手執如意指曰此處有水言訖即隱融以錫

卓其所於泉隨秋涌出役成曰泉福置五百僧永德三年春回本州卓菴於天山陽衆亦跡來秋移松浦醫王寺信濃守藤季高夫人了本郡玉林寺於肥之佐嘉郡融爲關山祖會中衆僧盈一萬三千指又如筑之大聖豐之永照融皆開之明德三年返泉福明年七月初示微疾八月十一日剃髮沐浴易衣坐禪書偈而逝檀越野州太守聞訃急至融微開眼慰勞遠來少選長往壽六十一臘四十一葬于寺之西北隅樹塔曰智門

京兆南禪寺沙門周信傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十四

十八

釋周信字義堂號空華道人平姓土州長岡人母蔭氏禪五臺山文殊太士夢白氣出厥入懷乃妊在胎十二月既誕豪爽識超羣童從淨義法師學出離之法至年十四剃髮上睿山登壇受戒依道圓梨稟密法傳諸徒墳泛覽無遺夙習所熏發慕別傳之宗參問久之遂契玄旨一日國師上堂信出衆問話機鋒捷速驚動一衆國師下座與以紫扇信謂同袍曰唯此一柄一生受用不盡國師遷化後依龍山見公于建仁靈利真參聲馳華夷貞和年中錄倉管領源

基氏招信掛搭圓覺時大喜忻東山丘不聞聞交代住持共舉信居第一座貞治五年住善福應安四年上杉氏就鎌倉城北棚報恩寺請信爲開山始祖信宗趣贈博有照入鑑四方雲衲見偉器者則告府選舉是以三十餘載列剎得入康曆元年左丞相義滿源公下鈞帖董浴之建仁入寺之日白旆入山冠纓繡紉填堂衍廊寺僧僉云雪村和尚住持以來無如斯盛也左丞相爲無相禪尼就等持寺請聖座拈拄杖云諸人還識這個麼昔在靈山喚作正法眼藏在小林喚作直指單傳在雲門喚作一字關在臨濟喚

本朝高僧傳卷之二十四

七

作四賓王子細檢點將來未免喚鑊作鑊今日在山僧手裏但只依舊喚作拄杖子諸人若能識得個拄杖子即能識得諸佛本源識得諸佛本源即能識得眾生本源識得眾生本源即能識得生从本源識得生从本源即能識得涅槃本源即能識得世出世間一切諸法本源加復憑此御天下則四海晏清憑此建皇德則風雨以時憑此上報四恩則無恩不報焉下資二有則無有不資焉是故道識得拄杖子行脚事畢正與麼時便見一品大禪尼適從無相三昧起在山僧拄杖頭上放大光明轉

大津輪演大法義智告諸人曰是法住法位世間相實住諸人還聽麼其或未然山僧且煩拄杖子重敲了也卓一下至德三年奉旨與南禪寺四海龜菴事失而臻至德丙寅夏左丞相義滿源公奏朝廷京兆鎌倉禪剎之位大傳僧拾級而升陞南禪位居五山之上信上堂謝恩拈香祝聖罷據座乃曰步步登高不離最初之步心心進道不離最初之心直得似地擎山不知山之孤峻如石含玉不知玉之無瑕四海浪平百川潮落挽回聲嶺之真風喚起龜山之仙駕本摩八大金剛王歡喜合掌筆描五百阿羅漢款

本朝高僧傳卷之二十四

七

本朝有維然如是美舜之君猶有化在且如報稱之恩則無爲之化一句又作麼生道擊拂子曰只在天曆上更無山可齊復云客從遠方來道我徑寸璧中有四箇字字字無人識雪實此偈美則美矣其奈隱語不分曉南禪則不然有一偈分明舉似諸人昨日在丞相賜一封書中有八箇字字字皆炳如且道是什麼字以拂子作書勢云天下第一五山之上自悲夜夢白雲端和尚來訪曰化緣既畢當隨吾來是秋謝事休慈氏院嘉慶二年春適逢和浴禪之溫泉旬餘歸龍山舊院又夢與永嘉真覺大師對談太師



以生於事大無常遲遲之謂信謂左右曰吾此不起矣乃命作龕四月二日自製銘曰生於事大無常遲遲永嘉大師騎牛上座三玄五位芳聯始續寒年之續款歲之較空事道人曲不藏直木龕八楞聊復願俗揚示諸子至祝至祝於是緇林兄弟輩下士庶問疾者盈門信送迎如常伏見南內上皇勅近臣問安信即具威儀對天使裝香謝恩西園殿下來訪信被架婆對談擇送二日初更集眾說出世始率侍僧請歸信曰吾四十年來被入抑逼枉上祇墨者豈能謝耶因問今幾刻侍僧曰五鼓已鳴乃端坐

詩邪其外學如斯其粹于內典推而可觀焉其所著述諸錄及空華外集日用工夫集若千卷又選取宋元二代禪林偈頌以作十卷曰貞和類聚祖苑聯芳集其行于世其餘記鈔等尤多矣  
信曰緇林之先達歸終作龍銘者如康絕地不多見焉本朝義堂信公之龕銘天境致公之壙語前後兩三八而已立語高妙俾讀者興感焉信公稟英粹氣辛勤道成清操實行始終如一加旃有翰林才其文與義應則也是以學者以博雅而稱殊不知文章者德之主也也正覺國師之門有七十子大槩如龍此也余以信公為魁真焉其政教然者色香中之類未云  
京兆普門寺沙門通玄傳  
釋通玄字一峰自竹島比從東福天柱吳禪師重業出家歲月多積參禪研窮漸蒙洛之普門移居雲州安國延文初釋書有勅入藏禪林諸師以偈賀之凡上軸者五十餘員無比況公編號獅子筋玄跋其尾曰佛法自入中華以降梁魏唐宋有史筆者假文以明釋氏之宗故支那之釋傳續續而其姓名道德至本顯於世者多矣吾日域未有修僧史者然天下事

書同安無之乎三藏十二部諸子百家書咸有之又東方之人極愛讀書囊螢寫雪動勤然而究備焉但寄情於風雲月露之間五字七言口吻聲鳴而已固無長於文字而短於史者非不好也不習而不作耳虎關禪師神智秀傑聲馳寰宇中提唱外妙達性理而筆端有無礙辯才矣探蹟海國中名山大剎或破衣壞衲而居巖間樹下與草木同腐有道者禪欽律之傳錄私記纂著釋書二十卷簡而足繁而整明行解感應之分科而無阿私偏僻之謬誤噫俾同傳而載之者耀于聲名於百千歲下惟慈善極力之所致也

大哉雄辯也能論司馬歐陽之國史讀潛子覺義之篇書將獨步翰墨場中而點胸發聖叢裏者也書成元亨自表而奏國讀入大藏並行奉照不明便不為人藏悲哉果散之國君王猶以如此矧乎下至百官而淺識不足掛齒矣其徒令湮起弓冶之思上表以償先志廷文天子勅入藏中一朝榮遇萬世徽猷也諸禪翁各賦一偈慶贊其盛烈休光與日月爭之高第單况攜此軸求余以跋甫亦其瓜葛也且乍入叢林之時親聞傳燈之釋義於余一字師也牢辭至再不獲已而書其後焉

本朝高僧傳卷第二十四

音訓

具位切 闍 事 弗 朝 呢 尼 質 切 日 攝 力 達 切 隔 嚴 日 也 瑞 希 念 切 跋 五 交 切 嚴 關 立 切 付 趨 本 切 吒 丑 亞 切 起 也 瑞 放 切 齋 山 黃 切 齋 也

江府住玉泉軒成九居士信德淨財樂

茲其

本朝高僧傳卷三十四

上報四屬下資三有宏道業興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

識

本朝高僧傳卷第三十五

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十七

京兆萬年山相國寺沙門妙範傳

釋妙範字春屋自號不輕子甲州人父平姓母源姓夢窻國師之族姪也其母祈觀音夢吞靈而妊年甫三歲母抱謁夢窻國師曰此兒非凡器宜投師出家窻口授心經範就口而誦窻曰今已如是往向不可量汝能保養焉七歲投窻于濃之古溪教以法華七日終窻人食曰神童十二歸甲依道滿翁于慧林嘉

曆元年春範年十七與默翁誠相偕上京拜窻於南禪下髮進具此秋窻退龍山元翁元公來補席範侍講兼研究宗教明年知相待窻于瑞鹿齋三仙仙于淨和建武元年春清拙澄住南禪招範爲悅衆暨三仙遷舉居後版乘佛提唱江湖樞之貞和元年秋天龍落慶請諸山修法會命範爲紀綱朝昏參叩窻問興化打克省意旨如何範曰五逆團雷復詰以古德機緣隨問而答窻叱之曰你趣向非無來由只是解路上作活計範退默究長坐因看圓覺經至居一切時不起妄念忽然契悟乃呈一偈窻見之付以法

衣依法兄無極玄公于天龍居第二座延文二年大將軍尊氏源公請住等持明年春天龍火範領幹事未至期年盡復舊觀康安元年臨川災同門者宿請範稱位其落亦如天龍貞治初後光嚴帝屢召開法要受衣孟虔禮甚篤賜國師之號範奏曰先師夢窻道契三朝特賜徽號然而佛光佛國二祖未蒙此號願謚一師恩莫大焉某何敢當之上善其言重謚佛光曰圓滿常照賜佛國曰應供廣濟焉武州刺史源賴之細川邦阿之先勝院延範居焉時國中大饑餓殍相枕範作檀粥以救之太守吏民隨喜効之蘇息

者果矣二年甲辰遷伏見大光明寺爲皇太后陞座說法上皇臨御法筵仲冬有旨升天龍盛行叢規輪揚玄風明之恕中愷楚石琦了菴欲西白金諸老遙聞範名寄以偈文六年丁未高麗國使臣金龍等二十五員來謁于西山禪範道望皆受衣孟執弟子禮今茲春天龍復燬範再領寺務百廢俱興應安二年南禪新建三門疆犯延曆之故封山徒訴公府將毀南禪範語管領源賴之曰南禪乃朝家重崇之道場禪林第一伽藍也且大將軍世秉國鈞素歸宗門然恣山徒之嗾訴非但吾宗陵夷抑亦國家俱失威權

人浚恩茲賴之諾而不果山徒奉日吉神輿將入內  
廷南禪一衆拂衣分袂罷退居丹後雲門菴江湖飽  
參慕來請益代別頌古躋酢頗多門人編曰雲門一  
曲會明國使臣趙秋可肅朱本來館防之大內爲之  
序跋雖隔路千里書問相續又天寧關仲猷瓦官勤  
無逸奉使同來寓于博多聞龍聲國贈袂扇印石以  
表信意龍居丹丘慮十年猶如一日康曆元年春  
有旨住南禪一期未周殿堂樓閣皆復輪奐鐘鼓改  
鑿帝入宮闈法持於內道場受戒傳衣明年正月賜  
徽號敕書曰天下太平興國南禪禪寺住持春屋和

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五

○五

尚乃正覺國師之上足親受國師付囑發明心法  
源道著一代德被萬邦所謂僧中之龍法中之王者  
也朕辱迎內殿受付衣之儀而執弟子禮聞法之恩  
皇天罔極爰加智覺普明國師之號以旌普天之下  
一人之尊左丞相義滿源公奉敕總僧錄司事本朝  
此職權輿于龍也於是舉賢興廢諸方叢社規制一  
新且如東福寺其疆界爲豪貴所侵久矣龍告官復  
舊又開山祖塔與殿堂之交有欄澹數丈龍架長橋  
以便往來扁曰通天作偈賀之曰揮袖風斤支落霞  
虹霓千尺截奔波通霄一路腳跟下來往人從鳥道

過又升普門列于十刹於是一衆議將住東福三講  
不就丞相源公一管感異夢建梵刹於城西號覺雄  
山雲幢寺聘龍爲第一代慶讚日源公入山膺其演  
法有雨華之瑞源公增發信心寺後於小院爲龍壽  
塔所以其地有白鹿來謁曰鹿王也永德元年鎌倉  
元帥源氏滿氏足利請以建長龍將應聘源丞相托之  
日先國師遠忌在近宜辭建長以主天龍龍遵命不  
行明年二月復住天龍三年秋九月爲正覺師祖講  
禪教衆僧設大會齋是日源丞相入山拜會公卿伯  
侯扈從嚴重至大衆轉經令人奏樂感二百年下親道

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五

○四

俗歎未曾有退居金剛院至德元年源公卜地城北  
建大伽藍號萬年山相國承天禪寺講龍爲開山始  
祖龍追請正覺爲第一世又如洛之景德僧夜天寧  
豫州安國羽之崇禪皆爲神刹之祖至節上堂普天  
市地氣回一氣凍破泥團花開確當浩浩叢林各開  
機智賣牛底賣牛賣被底賣被山僧未可効陀開熱  
薦拈拄杖云祖師門下客只貴知慚愧卓一下下座  
上堂拈拄杖云易易直下是難難也大難梅林落葉  
金彈荷沼擎碧玉盤祖師直示只者是面前推出幾  
重山解夏小參靈山密付迦葉破顏引得東西承虛



機響，少林妙訣神光暗傳，灼然兒孫勞形，捉影自爾。天下老和尚，擔水賣河頭，看佗釋迦未出世前，那裡指天作地，達磨既西來，後那裡呼北爲南？好個現成受用，更欠少個什麼？人人要行，卽行；要坐，卽坐。所以道：釋迦不出世四十九年，說達磨不西來。少林有妙訣，忽有個漢出來，道：汝只見面前驢脚，不知背後龍鱗。何也？見山，山不是山；見水，水不是水。直饒棒頭取證，喝下承當，未免尚坐在窠窟裡。格外一句作麼生？道：大湖三萬六千頃，月在波心。說向誰？嘉慶元年秋，示微恙，移居鹿王院。明年八月十二夜集衆，永訣。且

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十五

○五

書遺偈曰：幻生七十有餘年，了卻先師未了緣。一國黃金收拾去，古帆高掛，令同船。黎明蛻化，世壽七十又八。法臘六十，又四門人昇全身空于鹿王之塔，緇白慟哭如惑。考妣分平日所剪爪髮，塔于瑞龍龍華萬年大智巨福龍興焉。龍平居身行口言意思同時，辨之屢顯神異。誦求聞持咒時，感舍利如雨，持曼殊五字咒，日米粒盈匱。一日異僧來請受，龍架案，龍問來由。曰：家在四條四衢道，龍乃脫袈裟以與之。僧頂受而去。所度四部弟子八千五百餘人，有語錄行于叢林。

贊曰：非萬頃之津溪，難容萬艘之舟船。世之領幹事也亦然。易曰：鼎折足，覆公餗，其形渥。晉明國師度量廣恢，心地明白，始統僧錄司之重任，以五山十刹爲吾屋裡繼絕興，廣審察，入選通一法者，莫不登庸。當時叢林禮樂一新，振古擇才居人之上者，良有幾哉。又可以爲難焉。

相州淨妙寺沙門信虔傳

釋信虔字九峰，續燈明徹宗禪師道山峭峻，學海浩渺，與中山賴公馳名。當世平生守泊，不要出世，晚衆請相逼住，相之淨妙華夷禪客輻歸。輪下住職三稔。

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十五

○六

退院上堂：稻荷山下債，宿債把牽羣拽已三年。春風吹得鼻繩斷，芳艸原頭好放眠。至德元年某月，日終于祥光菴。茶毘之後，現設利羅如琉璃者無數。

京兆南禪寺沙門周澤傳

釋周澤號龍秋，姓源氏，武田甲州人。初誕，齒髮已具，父母以爲不祥，輒捐諸野。經宿黑白二犬周遊衛護，由是收歸。生育六載，割愛隨夢，憲國師爲驅烏稍長，圓具辭參。諸方回得悟，夢憲輪下初住。甲之慧林洛之臨川，應安初開大興寺於濃州。當經始，日有龍含珠而出，澤以拄杖打落，埋以鎮山門，名曰龍珠峰。及

落成。且天雨霽華，繽紛亂墜。觀者起希想，後歷遷建。仁南禪天龍王，臣緇曰摩然，嚮化上堂。東山法窟古佛，精廬我我，我渠渠渠於此，禁足於此，安居，心心無不妙智，物物無不真。如何妨朝在第五橋上，聞水澎湃暮歸，三層塔下見雲鬢，斫旋俯仰無非，解脫自在。舉足下足無非，遊戲三昧。且道承誰恩力，良久云：功業蓋代，七月旦上堂。葉落歸根，人悉知我。悟意在鳳凰枝，鳳凰枝老，秋風至。二世如來口似，秘開爐上堂。白雲淡處撥寒灰，少室春從爐底回。太智堂中緘口，坐星羣紅綻，爛枯柴。若問個無賓主話，此時傍有。

本朝高僧傳卷之三十五

○

本朝高僧傳卷之三十五

趙州老鼻孔，透天笑滿腮。臘月上堂，少室峰前瑞龍山下風飄六花天。衲萬馬人有古今，境無真假。荷要安心，雪團打擊，禪牀下座。澤平日不夢夢，必有驗。下管夢傳無準和尚，不翼日果有脫衣者。一時請老貳，偈賀之。號曰應夢衣，又得密菴和尚竹篋室中常用之。接龍象，朝廷聞其道，僉拜為國師。澤力謝不受，喜而不動。筆妙入神，靈驗尤多。至今得之者，秘而珍焉。以嘉慶二年九月九日終于西山壽寧院。春秋八十又一。塔于南禪慈聖院。澤在日不許編年譜語錄，竊有書者，澤見即丙之，故其道蹟罕聞于世。滅。

後其高弟仲項曾座於七會語，編成若干卷，併入明僧譜。育王山住持宗體原為之序，又有外集，日隨得集矣。

贊曰：嘗聞龍湫和尚天機純朴，不拘章句。今看遺錄，震震靈舌，制夏七會，秉向上鉗鎚，露衲僧巴鼻，言言句句自有風規。可謂宗說該達焉。觀其初生時齒牙已具，又面不動明王，屢現靈感，豈其昆盧內證之權人也與。

### 京兆東福寺沙門玄柔傳

釋玄柔字剛中，豐後州人。自少禮，玉山提公十四圓。

本朝高僧傳卷之三十五

○

本朝高僧傳卷之三十五

頂栗具十七上洛，然無德孝虎關鍊，二尊宿。又掛搭南禪，嘗有南詢之志，歸告玉山山以躬逼暮齡，托之及山，示宗接踵居大慈，一居四十年。不演宗乘，平田董南禪之日，招居後版，柔遣十禪客入明求大藏，歷三霜得二藏而還。一藏收于大慈寺，一藏寄于東福寺。永德癸亥夏入洛，修玉山忌，僧錄司春屋范公與柔舊父，喜其來告，相府住晉門。一日柔訪屋日和，尚近日嬰網，公也。柔曰：奈何金鱗屋日有滯水，處柔日恁麼則作禮而太屋呵呵大笑，未幾解印，守常樂祖塔。嘉慶丁卯秋，膺鈞選主東福上堂，舉世尊陞座。

迦葉白槌話頌曰世尊橫吹無孔笛迦葉倒弄連拍  
版聲若多神笑滿腮情梵波提咬舌斷除夜小參我  
有、一句子詠作送篇文急急如律令洞山麻三斤人  
人有一頭露地白牛不放黃金糞不鳴白玉蹄千松  
林野外慧峰欄圍中尾焦影瘦臥雨眠烟但念木脚  
飽騎駒地收底者欺不知騎底者騎不覓諸人還要  
識牛麼以拂子作鞭勢云噯叱這畜生當個羊竊歲  
盡時急著一步明年朔即宗菴而退居俄索湯沐浴  
著新淨衣自入龕而化實嘉慶二年五月二十七日  
也壽稀年添一關維收舍利無算門人頂禮塔于本

菴焉

### 但州大明寺沙門宗光傳

釋宗光號月菴姓大江濃州人母夢釋審蓋踞山頂  
終于朝日覺而有娠嘉曆元年四月八日生風姿爽  
拔眼中有光幼穉投峰翁和尚於大圓寺年方志學  
祝髮因尚觀方嘗然古先元夢宣石二太老共愛異  
器飯三仙仙于南禪遠仙遷建長命待香觀應二年  
歸省峰翁伏膺久之將遊元國翁曰汝何不著一鞭  
盡我蘊奧若向上更有事則支那西天一任汝公光  
遂實行一日翁喚光與建侍者來纔入室翁曰是甚

麼一人茫然無對翁叱之曰多年費多許廚米養得  
兩個飯袋子一人潛然而歸侍者察徹夜極精寢  
光頭變白見者歎異從此工夫純壹不雜多慮一日  
晚參後翁召光及建曰汝等造詣粗至然不可得少  
爲足更大有事在所以道未後一句始到牢關老僧  
滅後當晦迹林巒相共商量遂以拂子付建以蒲團  
付光曰你當爲人天眼目復付袈裟曰此是老僧四  
十年說法之衣也汝善保護延文二年翁順世光往  
常州謁復菴己公明年侍玉林璨于大圓寺造雲州  
依孤峰明公命掌輪藏叩問請益不捨晝夜究審鏡

本菴集 本朝高僧傳卷之三

七

三昧五位要訣一日問曰心言所及盡是實德麼則  
嘆甚作主峰擲下手中扇子光當下釋然峰謂人曰  
遠山一派化日當屬斯人矣無何峰人宗光將往北  
地見峨山碩公忽自惟曰大虫岑公先師嫡嗣現在  
豫州宗昌庵室不換來學若涉遷延失契機則先師  
之道恐墜地耳乃往謁見虫即問諸方參詳之因緣  
光下一舉呈虫抗聲罵曰這脫空謾語漢光言下大  
悟從前珍秘和身放下虫更以趙州勘婆話激之光  
對無滯虫乃印記既而南紀勢洛開隨緣陸沈貞治  
丁未秋遊但之黑川愛其幽奧駐錫宴坐藤爲牀楮

爲不枯淡與世遷然未幾羣侶雲集拒之不可相共  
除茅夷險自成叢刹號雲頂山大明寺太守左金吾  
源時熙山名氏號巨川欽重其德執弟子禮先又開圓通大  
同禪昌諸制學實益多元且示衆一處止處處正一  
處真處處真開單展盆上來下太左之右之七顛八  
倒悉是諸人大安樂處此外更覓何事山僧與麼告  
報也祇隨時應節切忌作實法爲何故今日又新結  
夏示衆古人道護生須是殺殺盡始安居會得個中  
意鐵船水上浮山僧亦有一偈護生須是活活得始  
安居會得個中意人人大丈夫山僧恁麼古人不恁

相本傳

本朝高僧傳卷之五

十一

麼古人恁麼山僧不恁麼渠渠我我我是個非個  
無可不可東家點火西家暗坐喝示衆諸佛出世好  
與二十棒祖師西來好與二十棒山僧恁麼說好與  
二十棒諸人恁麼聽好與二十棒何故黃鶴樓前鸚  
鵡洲康應元年三月二十一日修示微疾酬對如常  
二十一日中夜端坐脫去春秋六十四夏臘五十門  
人開維塔舍利骨石于本山曰正法嗣法上首日圓  
通理有太圓毒林餘不可殫紀源巨川居士奏其德  
於朝敕謚正續大祖禪師有語錄四卷盛行于世

相州建長寺沙門善玖傳

大義

釋善玖字石室不詳姓氏筑前州人文保戊午與古  
先元無涯浩等同船入元一特禪匠無不敬其門久  
叅古林茂和尚于金陵鳳臺遂稟許印嘉曆之初偕  
諸友東歸時竺仙和尚主南禪掃榻而待會中巖月  
公退萬壽席輦下道舊封疏而補尋遷天龍和合僧  
中悉歸禪化大幢國師忌枯香語曰法身常住住印凝  
然正體圓明離念緣欲識國師真面目老梅枝上月  
團圓茶罷頂門堅亞摩醯正眼隻手敲碎虛空靈骨  
金陵城頭笑出達磨觸忤梁朝主正字堂畔救小釋  
迦落賺大禪佛列祖陳年葛藤橫枯倒用遊刃於眉

相本傳

本朝高僧傳卷之五

十一

素昔炎大幢條號天臨日照騰光輝於帝國道契君  
臣德益民物只如古人道無影樹下合同船壩琉璃  
上無知識且道即今向甚麼處與大幢國師相見也  
棒香云二十年來曾苦辛爲君幾下蒼龍窟大梅山  
清涼塔新賜御筆額請以陞座慶讚語曰圭章麗九  
天之雨露露臺吐萬杵之馨香廓爾殷盤周諸古篆  
發揚隋珠趙璧耿光豈啻山川現瑞便看龜龍呈祥  
親遵太上法皇尊師之遺訓黍慶同門諸子選佛之  
靈場直待毫末動文彩自彰雖然如是諸人多是  
傾心效葵藿祈願望恭桑只如上酬帝恩兼報師德



底丁句手又作摩生以手相額曰看看百億乾坤歸掌握十二華藏入封疆錄倉元帥左典厥源基氏問其道華招以圓覺以持錫移住義堂絕海相得友從應安元年六月遷建長住持六年構金龍庵於福山側解印而居頃郭隱號曰無棹呈後古渡舟隨波逐浪老巖頭無蹄辣手打婆子驚起白沙灘上鷗永和元年檀越建平林寺於武州巖築延玖爲開山始祖康應元年九月二十五日化于所住春秋九十六玖在元時與崇報行中仁公友善行中送謙上人偈有若逢石室煩通問歲晚南湖學種蓮之句又有大義

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十五

○十三

遠州方廣寺沙門元選傳

詮公室于甲陽之源姓受玖公之法脈緣楠禪熟出世瑞田遷豐之萬壽宗于恩光寺  
釋元選號無文後醍醐帝之子也母某氏初懷妊時渡藏出宮元亨三年產選於梅津私第孫之第五格邊有一官士久以無嗣常求清水寺觀音太士其夜夢或人纏兒於錦袍授之寤而異之寢晨偕婦詣清水寺橋邊得兒容貌殊特清真如面喜抱歸家幼學跌坐不事嬉戲七歲喪乳母悲戀不輟人問其故選曰久者人之常也何足以哀而渠受女身未修一

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十五

○十四

義前往是可哀矣聞者歎異焉年及小學入山寺讀內外書十八至建仁禮明憲鑑和尚爲大僧會中僧輩數百人無出其右者時可翁然雪村梅相次住持選親炙一老日至資溪康永二年南詢路經筑之聖福謁無隱晦公隱殷勤指南辭浮渤海著溫州界遇一官人頗爲敏博選與語得益淹留數日譯語相通既而遊歷諸州叩知識門至正七年造福州大覺寺參古梅友禪師問答數十返卽許掛搭伏膺久之遂得密契梅授法語并大戒又到仰山謁子有有公命歸侍司尋見楚石琦于天寧了菴欲于本覺各贈偈稱之太禮名區拜應真於石橋感薩埵於補陀抵北地拜德山塔寓居二年陟石霜及廬山跋涉既遍登伏龍山謁千巖長禪師信宿而太見笑隱所和尚于龍翔寺隱年八十餘頂上湧舍利無數示以生處爭大至正十年將東歸與義南菩薩碧巖瑤峯座登船者博多本朝觀應元年也翌歲入京卜居城西巖舍扁曰歸休故舊道友欲起選住名監選曰吾天性孤貧智德俱闕寧將此身投熾然猛火終不據大方之席謁豪貴之門甘休林壑可與艸木同麋耳抵濃之武義有偈曰邪師說法數如麻般若靈根正苗芽祖

道危安非我事柴門淡掩送生涯。移居數載移參州。  
廣澤衲子雪委盈三千指時遠州與山是英居士隨  
衆而參招以所居之地至德元年選杖錫造與山喜  
其淡遠誅茅而居變荆棘林成菴主利日方廣寺禪  
客蟻聚盈一千指澗飲蔬食遞相警策選韻徒日馬  
祖百丈法幢盛時亦但如是然今時兄弟趨向不正  
工夫不純是不及古可憂而已復往濃之楮洞開了  
義寺包笠跡來者不下三萬指選性慈仁無瞋色行  
悲敬二由或與疥癩者沐浴髮髮或捨不益飯僧有  
台密性相之徒來問難者以宗旨不傳之妙答之咸

日本書

本朝高僧傳卷之十五

○十五

服膺而本前後三十年以論導爲後是以遠近崇仰  
雖兒童走卒逢路則膜拜晚歸與山雪衲慕來及二  
千人選不設拒日望上堂應接無闕俄示微疾遺誠  
門人畢說偈曰生平顛倒今日即當末後下句雪上  
加霜復曰生如出岫雲死似行空月丁念認性相萬  
劫繫驢橛寂于正寢實康應二年閏二月二十二日  
也世齡六十有八僧臘四十有九茶毘建塔於本山  
之西隅遊提唱之語不傳唯遺禪詩數首耳題廬山  
開先寺曰參差喬木藏樓閣烟霧忽開山色清瀑落  
高巖翻雪浪風生遠嶽起松聲雪間寒鶴驚僧定霜

外啼猿動客情此太再來知幾日題詩青竹獨空行  
贊曰選公蚤聞諸夏虛往實歸匿王種姓修杜多行  
不規北闕不趨南朝淡遊巖谷曠懷水雲龍象數千  
常隨高步道德之感人也一何多哉至其風什自有  
盛唐之格律是特胸襟風露任運流出者焉已

### 京兆大德寺沙門宗忠傳

釋宗忠字言外姓越智豫州人也年方十九忽厭塵  
俗竊入一小院削染受具衆白翁雪禪師于江之積  
翠翁枯淡嚴緊學者無契其機者忠衆叩不倦翁出  
器之指令衆徹翁住掌知賓提撕不與萬法爲侶者

日本書

本朝高僧傳卷之十五

○十六

是什麼人因緣一日豁爾翁命居德禪師自粉電次  
翁問再入蒼龍屈還登得領下珠麼忠曰不設翁曰  
試呈露看忠近前叉手曰不審翁休在尋受印記永  
和二年秋奉敕住大德大闢玄化衲子駢集忠慈愛  
一衆同其苦甘常謂衆曰參學之士須一示一益行  
腳若蓄長物非我徒矣丁日微疾諸徒環擁忠慕登  
起拳頭上足雪公出衆曰此是和尚拳頭忠曰意到  
句不到雪曰車不橫推忠收拳頭奄然坐逝明德元  
年十月九日也壽七十六臘五十八塔于如意菴豫  
之雪門攝之長蘆廣德皆忠行化之地也賜諡密傳

正印禪師

京兆天龍寺沙門清曇傳

釋清曇號獨芳久矣。清拙澄和。向復入中華。歷叩諸刹。曇行潔才秀。元人號曰曇菩薩。永德年中。歸來東。拙之面證。大相國義滿源公。聘住天龍。至德二年。依衆請移萬壽。緇白懷德。如在元之時。藤玉菴居士崇其道化。請住豐之萬壽。關西大摩靈交和尚忌拈香。偈曰。行脚當年遊大唐。趨吳歷楚觀國光。雲巖堂中分風月。眉間高掛金剛王。歸來海國用不著。直下盡精都。地卻首衆福山。大徹堂便見趙宗。并越格號令。

日本書紀 本朝前代傳卷之三十五

〇七

人天開首肇大振龍峰。將墜風及至來。據此山。廣威謂西來正脈。通可惜不久。便示寂。三十二年過。目擊靈光。短赫自天具直。至于今。明歷歷寧馨。真子求宗。原能爲佛事。醜深恩。一爐芬釁薰沈水。市市香風來。未已。曇後創大智寺。爲終老計。明德元年在洛之興聖寺。八月初六日。示有微疾。寄手簡并架樂於玉菴居士。以爲永訣。至八日集衆。遺誡泊然而化。門人靈品持曇寫照。入明國。天界住持季潭泐公作之。贊曰。萬壽之真水中。之月影。不可狀光。不可徹靈機全露。今斗轉星回。玄音普應。今山遙海闊。恆自牧平水枯。

衆獨芳乎優益慈悲喜捨。懷奉熱渴。益管偏衆中華諸老。未免指鹿爲馬。而於大鑑言下。因之證龜成蛇者也。

泉州大雄寺沙門智訥傳

釋智訥字古劍。參二光國師。悟解純真。爲衆所依止。出世泉之大雄。學實奔會。爐鞴煥熾。南朝後村上帝。聆其偉望。召諸法要。龍遇特懸。帝嘗與訥商量。傳聲錄數則。因緣訥曰。陛下勿取山僧口辯。帝有所得。特賜徽號曰佛心慧燈國師。陞寺比於洛之南禪云。

京兆南禪寺沙門宗渭傳

日本書紀 本朝前代傳卷之三十五

〇八

釋宗渭號太清。世姓。藤系相州鎌倉縣人。父左金吾母某氏。所子長谷寺觀世音求男。一夕夢梵僧授智門品。曰汝嗣之。必得男矣。從茲有娠。及產六歲。母試授智門品。渭復誦不輟。父母信皆夢之。不虛矣。十二知厭塵世。辭親出家。乃上洛依雪村梅和尚。于西禪村觀其類發。容爲驅鳥。十六爲太僧。及村移。播之法雲命。知賓職滿。歸京。歷遊瑞龍東山。間夢憲古先等諸大老愛其偉器。授以要職。至再參雪村。遂蒙記別。復歸南禪。從後跋轉。前堂秉拂。說法名翼高翔。檀越聘請住。濃之龍門。然香供雪村。永和康曆間。歷遷相。

之東勝淨智七月旦上堂金神按節玉宇生涼一華  
秋聲索索千山月色蒼蒼燕子將歸海國鴻鴈忽度  
衡陽古佛真機頭頭漏泄祖師心印物物全彰直饒  
有人這裏見得個儻分明拈拄杖云寄峰拄杖未可  
點頭何故大海若知足百川須倒流冬夜小參冰河  
焰上古佛舒光石笋枝頭墨華現瑞不勞彈指直入  
慈氏樓閣寸步不移徧遊普賢毛孔塵塵總是華藏  
世界物物塵不淸淨法身慈明揭曉僧堂前作此相  
題其右曰若人說得不離四威儀中宛似賣卜漢等  
閑擲得雷天大鼓曾座一見謂衆云和尚今日放參

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五 ○十六

忽展變作地火明夷拈拄杖云寄峰拄杖亦能解  
下卓一下云七日來復利有依往應安五季夏移攝  
之害林解印入浴居南禪蒙堂大相國義滿源公入  
山犬一見道契延之府第講金剛經源公相揖心肆  
辯瀾翻源公大悅請住天龍永德壬戌冬奉敕陞南  
禪上堂佛未出世殺天下人佛已出世笑殺天下  
人出與未出黃金鑄出鐵毘盧拈拄杖云三句可辨  
一鐵遶空退居雲門菴再起住南禪入三門日向上升  
玄關十方通徹重開出世門不踐舊途繼嘉慶二年  
源公復聘補相國席滑所至請刺建大法幢參玄之

士遠方來集公卿士庶無不望塵而拜夢窓國師三  
十二日忌辰源丞相請滑就三會殿前陞座讚揚佛  
事特贈金襴伽梨副以偈曰久聞法要結緣滋奉獻  
金不表信心預約龍華三會日相逢彼此莫忘今時  
人以爲際會也晚築雲巖於相國側以居明德二年  
夏示微疾六月十二日台駕入山感問滑憑几對談  
入夜書傳法偈并入藏語付之請徒至十九日清旦  
燒香書偈曰夢幻空華不生不滅發轉太機虛空逆  
裂置筆而化世齡七十一僧臘五十七緇白聞訃群  
胸歎曰法梁摧矣此夕昇定身塔于龍山雲門菴有

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五 ○十七

六會語錄行于世矣

京兆相國寺沙門支山傳

釋支山號雲溪潯州太守源賴清土岐氏于良得法於  
雪村梅禪師如播之長良縣開護聖寺作第十世遠  
通靡然嚮風久之受京師安國之請開爐上堂迅景  
頻驚節序隆二秋已破一冬來貧營掃戶寒風透骨  
袂圍爐暖氣回只任口邊生白醅何嫌頭上積青灰  
無賓主話商量絕雨後荒庭落葉堆進升萬年山上  
堂相國只依本分住初非有奇特商量隨分飢餐困  
臥灼然一切平常無法令可施設無宗乘可舉揚哉



日鶯啼綠樹殘春蝶戀紅芳聞無聞而聞盡見無見而見忘聲色純真處絲毫不可覆藏妙德空生齊讚歎狸奴自牯發毫光結制未日上堂日照月臨物物同入大光明藏天高地闊塵塵盡開大解脫門便見全真即安全安即真真安同源脫縛無二不守九旬禁足何拘二月安居無修之修爲宗滅行無證之證即菩薩乘一切處任性逍遙一切時隨緣放曠我個山中一衆盡住自三昧各各不相知譬如虛空普徧一切於諸國土平等隨入不是強爲法如是故山僧不曾踏口道著佛法二字雖然與麼拔萃任汝拔萃光

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○上

靴任汝光靴以拂子擊牀下座山機語圓轉才藻映發毳衣之士莫不羨慕退靖玉龍菴明德二年十一月十四日示疾坐脫壽六十二有語錄并贈隱西巖二集

### 京兆南禪寺沙門法序傳

釋法序字不遷姓平

二階堂氏

相州人入夢覺國師室親

蒙許可出住江之德雲升洛之天龍至重南禪太本相義滿源公親臨法筵贈金襴僧伽黎尼師壇香令等都下榮之冬至上堂問答罷乃曰古今日月古今山河古今人倫古今節令好個清平世東無有絲毫

滅漆便見李四張三今日相逢互相賀云羣陰剝盡雪藏古巖一陽復生梅開寒谷直得三門閣上白鳥歌劫外春佛殿裏頭金龍吐太和氣靈龜背上呈露萬仞吉祥卦文法雷堂中普集無邊刹界聖衆拈拂良久曰平吞乾坤更向何處通個消息擊禪牀下座序以永德三年十二月四日書偈而化塔于西山三秀龍山下生有行卷曰菩薩蠻救謫佛照慈明禪師

### 京兆臨川寺沙門妙誠傳

日本書紀

本朝高僧傳卷之三

○下

稍久國師一日拈竹篴曰你作麼生食誠茫然不能答激發洋礪一朝契得命居後成結制分座問答罷乃曰圓覺伽藍大施方所平等性智細入鄰虛所以塵毛刹海是凡是聖齊於個中一禁禁住立期止限有證有修處處全真頭頭全露只有俊快稍子不肖點頭直得掀翻圓覺伽藍裂破平等性智朝遊西天那蘭陀寺暮歸東土靈龜山中蠟人冰鷄護雪賞甚汗衫子破草鞋量外真機千聖圓搖聲前一句列祖難窺縱橫不干他解結都在我拈拄杖曰忽有上方拄杖子忍俊不禁出來便道汝恁麼說話於唱啟門

中便得若約納僧門下遠之遠，靠拄杖日覆水難收，下座出主阿之寤陀及興洛之臨川光嚴上皇召宮問法，奏對稱允，晚居華藏院不幾而終，壽七十四臘六十一，備中之華藏阿州之妙幢，誠州創之地也。

京兆南禪寺沙門明麟傳

釋明麟號聖徒，受印孤峰，遠禪師博涉內外，南朝帝聞其道學，常召問法要，崇信甚渥，歸建仁之衆，居慶光菴，後奉詔，與南禪指紳鉅公車馬填門，又構禪棲院，休居贊，自肖日我元非聖徒，又不人之奴異類中，行漢華伴卻上圖。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五

〇三十五

京兆南禪寺沙門周佐傳

釋周佐字德交，姓源氏，常州人，自少慕正覺國師之禪，漆不東關，果印西京出世，龜山歷遷龍山，道貌高邁，爲衆所欽，後勘正因菴以退居，臨順宗命侍者持平日所著語錄文集來於面前，一炬丙之，有自贊曰：「一生元元又癡癡，向人間試便宜，日面月面好風彩，倒拈芭蒂，盡蛾眉，滅後教誡，宗猷悟達禪師褒其德焉。」

京兆大德寺沙門宗嘉傳

釋宗嘉號大象，親承徽翁之要訣，又南遊入元，編講

諸山名納，揆不東歸，住龍審山，不詳其終，住紀之興德，日有東山十境，序日蓋聞山川形勝，乃聖賢往來之地也，也在晉裴相國叩禪於黃檗山，白居易題詩於

天竺寺，蘇東坡留偈於東林，黃山谷轉機於山行，莫皆不緣地之靈人之傑焉，縣是紀州太守光祿大夫大賢居士往往遊于東山而講道於春風座上，論詩於夜雨燈前，因分其境賦十首詩，雪韻霜詞玉轉珠回，泉石增輝，僧徒拭目一時之盛，無愧乎先賢，命余爲序以期後賢繼作，學者覽之莫作境會皆從自己清淨性海中流出者也，萬年絕海津公作嘉真贊可

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十五

〇三十五

以補行狀之缺，日松筠之節，冰雪之襟，探七閩勝而飲靈家水，聚九州鐵鑄方寸心，徹交室中如麟如鳳，龍審山頂爲雨爲霖，激天源一派之流，滔天浴日，續大燈萬丈之焰，輝古騰今，嶽色橫雲，青未了故家喬木正蕭森。

本朝高僧傳卷第三十五

音訓

葩 披巴切 枕 職任切 燬 呼委切 火 梔 乃里切 黎 明 上音

比也 丙 補永切 項 許六切 葵 渠爲切 芥 賴 上音 拜切 落 蓋切

品 初減切 茗 帚 上田聊切 下止酉切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷三十五 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日 識

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘

本朝高僧傳卷三十五 〇三十五止

本朝高僧傳卷第三十六

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之十八

京兆南禪寺沙門法類傳

釋法類字中山不知姓諸相州人嘗南參遊現國歸承太平準和尚之印學密內外道允東西康曆永德間住相之壽福及建長至德二年奉旨重天龍類性無緣飾著舊衣開堂說法緇白皆嘆其有古風也是日伯義堂信公請源相國源公設座欽抱請領南禪住職一回辦事返福山長生庵康應元年十一月七

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇一

日將示涅槃小師慧世侍者持頂相請讀類授筆贊曰鬼面神頭全身半身機變機兮毒攻毒更得後手不擇人慧世便問己是天下善知識還不識本命元辰落處在類抗聲曰森羅萬象自己家風非是餘境界即就寂矣  
贊曰鎌倉元帥基氏問義堂曰關東禪林誰為知識堂曰度九峰類中山桂香林人皆所推其餘不可勝計又芳庭菊公曰洛西有默菴諸老關東有中山伯子余觀類師行履內善徹本源外不馳華靡實本色之衲僧也爰哉為時錄所稱耶

丹州永澤寺沙門寂靈傳

釋寂靈號通幻山城州官士基氏于其母詣清水寺禱觀音太土願生賢男子期一百日福晉門品千卷無何有妊將分娩其母俄亡墜于古廟之側自後行人聞廟側有嬰兒聲往告其父父感嘆視之靈已產矣肌膚鮮潔祖母躬親撫養及二歲父亦亡靈至齡年間祖母曰人皆有父母我獨無何也祖母告之以實靈潛然悲泣曰我不幸不見覆蔭當出家以報其恩祖母隨喜許之十歲上入睿山肄業天資穎敏大小經卷一經其目輒誦於口宿學稱賞十四披削受

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇二

具丁日出列論席問止觀大意講師博引經釋靈意不有始基禪宗有別傳之旨乃往龍之總持寺參峨山碩公山曰甚處來靈曰天台來山曰欲求何事靈曰某甲於止觀之理未決所疑請和尚指示山曰莫妄想莫妄想便起太靈疑心益熾歸單研究一日聞山上堂舉心身脫落語豁然大悟曰我會也山曰汝作麼生會靈曰和尚莫藏人好山曰心身脫落時如何靈曰倒騎佛殿出山門山曰莫亂走靈曰羅籠不住呼喚不回拂袖便太山微笑因以古人公案節角諸訛處件件詰徹靈酬如應河山即付洞山宗且武



州太守源賴之飲靈道義於丹州創青原山永澤寺  
延爲開山始祖靈常往來總持越前刺史基建龍泉  
寺爲中路憩止之所應安年中後圓融帝賜洞宗僧  
錄司禪侶歸之如水赴壑永平之道於是爲盛上堂  
釋迦前不出世雲日垂時字鴈橫彌勒後不下生夜  
蟾落處孤猿叫須知雲樹一聲鷄解報山家六戶曉  
荐三光國濟國師上堂五五二十五霖雨肅肅氣未  
晴九九八十一半夜金鷄報五更玉人覺夢石女無  
掌脩功明位時蘆華映明月脩位明功時明月映蘆  
華諸人不脩功用作麼生委悉太破曉青山鳥下聲

日本書錄

本朝高僧傳卷之三十六

○三

小參第一義諦諸佛心源第二義門衆生事有毘盧  
頂後看神光舜若體前分活眼見聞不到言詮不及  
同中異脩功明位用在體處異中同脩位明功體在  
用處一步密移玄路轉全身放下鳥道通若如不脩  
功不脩位諸人如何通得個消息太乳月泥牛能入  
海嘶風木馬解遊春卓拄杖一下下座明德二年四  
月示疾至端牛日撞鐘上堂午時召大衆垂誡曰我  
滅後汝等諸人當屏息諸緣究明大事因緣俾洞上  
玄風不墜於地若食著文字言句名聞利養非吾徒  
也時至吾其行矣衆請遺偈靈乃書曰閻浮往來滿

七十年轉身端的兩腳踏天擲筆而化停龕二百面  
色如存門人扶奉全身空于寺之西北隅  
贊曰通幻師不涉雕琢而詞義幽妙洞下宗旨幻  
公以前不見有此作也然終告戒嫌著文字言句  
者猶劍術者誠子不傳似於己焉實離常流之謫見  
故接出十弟子能使懸絲慧命不墜於地矣方今弘  
道東西海者自幻公之下而興布焉

相州建長寺沙門妙快傳

釋妙快字古劍蚤脫離塵羈受夢憲之託萍遊江海  
請益知識又入支那謁恕中愷楚石琦穆慈康等悉

日本書錄

本朝高僧傳卷之三十六

○四

蒙器許既而東歸寓居龜山光明上皇在伏見大光  
明寺召快詢法賜資相續一日賜官茶并御製詩快  
次韻上謝曰春風煮雪吐奇香碧玉甌中水一枝白  
髮野僧從眠起薰爐日煖讀新詩後承鈞帖歷住東  
光建仁建長等諸刹佛涅槃會日月落瑤臺曉半開  
木鷄啼曉有餘哀殷勤寄語梅花樹一曲春風歸太  
來海印歌覺海圓湛寒光潤萬象森羅同一印四七  
二三何有傳塔破虛空應自信鐵牛之機爛似泥同  
條句子誰能提擔得盧陂樹一掌玉犬夜吠金鷄啼  
君不見瞿曇指婆心切曹溪脫出未奇絕兩岸明

月水無文鷺鷥飛入蘆花雪海印覓我海印歌等閑  
撥火揚清波湘南潭北無影樹花敷劫外春風多快  
富有藻才初歸自明時船中逢結制作偈曰圓覺伽  
藍海上滬安居禁足渡頭舟蠟人解唱還鄉曲然乃  
一聲山水幽有僧入明以此偈舉似穆菴康公銘以  
解唱作喚作菴日恐誤傳也喚作之二字非古劍之  
作矣其得賞識如此快終於西山壽光菴有語錄并  
了幻集

### 淡州安國寺沙門一雅傳

釋一雅字大全其先世居江州甲賀縣父有賢行徙

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

○五

備州金河生雅於州雅幼聰敏經史過眼輒記然傾  
心佛教不嗜世典誦賀州安國寺依星山道公薤髮  
稟具辭上京師諱名東福典賓客貞治初謁大湖奕  
公于筑之承天丁夏助化有人元之志俶裝行具俄  
患痢疾既發船有日此夕夢地藏薩埵告曰你慎勿  
逾海再三叮告雅怪而止其船至大洋覆沒風濤方  
知夢有驗再回京師掛錫慧峰寺大和尚望高輦  
下尤慎許可雅投誠入室契當道之真旨貞治四年  
秋道應詔于南禪雅從侍翌歲道退休于慧峰智覺  
菴檀越淡州太守源氏春氏來訪道指雅曰此僧

佗日吾道所寄也公幸成禪之氏春延以淡之豐財  
院應安己酉應夢巖膺慧峰之選招雅司藏鑰明年  
二月大道唱滅於宗鏡室雅守智覺塔時臨冬節偶  
闕書記住持南海洲公釋雅舉任雅拈拄杖垂語云  
這條拄杖倒吞乾坤未知機變難透龍門有麼問答  
訖乃日橫拈倒用十方通徹聲前一句敗陀側耳覲  
面下機情梵吐舌諸佛得之廣度羣品菩薩得之慈  
悲施設二乘依佗因緣觀行列祖依佗單傳直截且  
道畢竟是甚麼豎拂云看看有意氣天然別別別一毫  
罕衆穴復舉夜來堂頭和尚舉雪門有三種人古則

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

○六

拈云三盞酒裝公子面一枝花種美人頭堂頭將丁  
轉語濕雪韶陽窠窟裏拂上座未免以賤雪實契茶  
珍重歇於是泉改觀名重叢林轉遷後版日峰東  
公尋住東福舉爲堂中第一座永德壬戌春承大相  
國義滿源公之命出世淡州安國寺然香供大道翌  
歲檀越氏春革圓鏡教院爲禪利雅爲開山祖嘉慶  
元年秋雅往伯州冬聞氏春臥病入京問候示末後  
之要徑再住安國前後十年黑白布薩朔望陞座凡  
叢林典刑一無闕焉太守源滿春承父之業事雅益  
欽上堂毘盧自性海水無邊般若寂滅太智現前非

有無非內外如來禪祖師禪德山臨濟倒退三千是  
何時節以拂擊禪牀曰鑑在機前上堂舉圓明禪師  
云癡病不假驢馱藥三角云癡病須假驢馱藥後來  
聊耶覺云圓明可謂小慈妨太慈三角貪化一斗米  
失卻半羊糧拈曰棲賢今日事不獲已強著一轉語  
太西瞿耶尼擊鼓東弗于逮坐道場結夏小參二千  
年前西乾有古釋迦設行號令雖設種種條科因之  
圓覺你藍不圓備平等性智不平多棲賢今夏張鐵  
網羅籠罩四果三賢十地二覺收拾人畜豺芥魚龍  
螭螺同人圓覺海不敢動一波這裏還有透鐵網底

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇七

麼以拂擊禪牀曰謹白諸方參請士九旬炎景莫空  
過嘉慶二年棲賢昆盧法憲輪藏成雅慶讚供養因  
閱一藏滿春俾其嗣滿沒執弟子禮且捨莊園於圓  
鏡寺父子二人崇嚮之渥如此應永甲戌秋滿春狀  
雅名於源丞相源公延之幕府相見厚遇丁亥夏示  
微疾秋九月歸圓鏡寺遺書於太守分法具於門人  
二十五日法眷道舊自遠來訪談笑如常入夜侍僧  
請遺偈雅笑曰吾行在來且今何要偈明且召需侍  
者索紙筆書偈曰來恁麼太恁麼著眼看是什麼泊  
然坐化應永二年九月二十六日也壽五十五臘四

十三蛋龜三日顏色不渝如法奈毘收拾靈骨安於  
寺之西南爲樹窰堵日心香有語錄偈贊等

京兆南禪寺沙門靈見傳

釋靈見字性海號不還子姓橘生于信州橫山縣七  
歲讀書敏悟過同儕十一得度于建長十九參清拙  
和尚於建仁命領知賓服侍稍久探華嚴於南都聞  
台放於北嶺能通太義氣性高邁不止解路棄虎  
關國師於南禪在知客寮不時請問一日看圓覺經  
豁悟本有欲觀中華之風康永二年入元歷過江之  
南北請益一時之高德謁空海念公于天寧自擊機

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇八

契丁夏掌藏典洎見月江印即休了竺源遠所至優  
賞見謂無踰於吾師者遂入鍊國師之牌於徑山正  
續庵以至正十一年附舶而歸先是國師遷化遺命  
淬龍泉以伽黎一頂付見見既受屬隱丹之藥山溪  
處遐適崇信建寺延請若長壽禪居典勝鬱然一方  
貞治二年大將軍義詮源公招住三聖見作休休歌  
辭之劍命三至入寺開堂應安元年大將軍義滿源  
公移見主東福相尋升天龍南禪以衆望所仰帝心  
所簡住五岳第二者兩會坐五山之上者三回至其  
陞堂展拂電卷雷奔學者無處稍足晚閑居於慧山

退耕菴自非江湖飽參者不安開門。永德三年相國義滿源公聘以常在光寺堅辭不許住。僅二年歸于退耕。應永三年春三月感小疾。源相公入菴問候。見屹然坐。接相公請示誨。見舉龐居士示迦丞相語告之。相公領旨。二十一日午時遺誠諸徒。不許造塔。歸壙之後。植青松一株。可以表塔樣耳。乃索紙筆書偈曰。天上人間休覓我。大千沙界絕行踪。不須榜櫂水裏月。誰設縛住空中風。奄然化去衆尊遺囑。空于本菴西南之隅。扁塔清淨覺地。語錄偈頌等極多。日石屏集。

日本書

本朝高僧傳卷之三十六

〇九

贊曰。見公奔波日域支那。入作家爐。薊月鍛香鍊。博綜圓備。遊戲翰墨場。筆端黼黻。宗猷當時名宿藉。其制作道蹟存者多。實濟北師翁克家子也。石屏集者。湮沒不傳于世。惜乎。

### 京兆萬壽寺沙門德濟傳

釋德濟號鐵舟。下野州人。嘗入元國。徧謁諸師。歸依無極玄公。於天龍分位。後感冬節。秉拂日陽極。則陰生。陰極則陽生。陰陽未生。前更有一著子。仰之彌高。鑽之彌堅。蕩蕩乎。無能可名。無能可尚。明如日。照徹十虛。是故過太諸如來已用。不識現在諸菩薩。今

用不知未來。修學人當用。不會正恁麼時。有個銅頭鐵額漢出來。呵佛罵祖。驚天動地。直說無量法門。無量妙義。無量國土。無量因果。無量方便。無量行願。此時大覺世尊。文殊普賢。觀音菩薩。及十六太阿羅漢等。各於覺皇。審殿普明閣上。讚歎證明。而太檢點將來。總是鬼家活計。且道。陰陽未生前。一著落在何處。擊拂下座。開法阿州審院。嗣承正覺。後移京兆萬壽。僉侶集會。住職周期。退休西山之龍光院。有述作日。閻浮集。東陵璣公書跋曰。其文燦然如夜光。結緣不覺使人。心自開明。可以垂裕後昆。可以照映千古。他

日本書

本朝高僧傳卷之三十六

〇十

日必有其眼者。同此證明。濟妙于艸書。隻字片牋。得者。審焉。至于今。士人家往往收蓄焉。濟初在元時。順宗崇其道義。特賜圓通大師之號云。

### 相州建長寺沙門周應傳

釋周應字墨芳。久從夢窓國師。參叩不闕。羅脫龍頭。典藏龜山。結制秉拂。問答罷。乃日一機。管轉天寬地闊。千眼頓開。月白風清。直得普明閣高照。十方刹絕。唱溪急轉。太法輪。日日聲色。頭上坐。夜夜聲色。頭上臥。不拘二千年舊制。全超九十日嚴規。左顧右盼。非佗物。舉手動足。是道場。便見山河大地。日月星辰。滿



情無情有想無想總在者裏安居期限長短總不相于說甚修證階級雖然如是未免隨在功勳邊且道衲僧行履畢竟在什麼處以拂子擊禪牀曰不是桃源客徒勞話神仙下座應依鎌倉源管領之請住圓覺寺移建長寺兩利垂範學侶欽德後退休廬山福林菴應永某年九月七日順世應宗說俱通想有圓覺建長馭衆舉唱接訪不見定可憾焉

京兆南禪寺沙門海壽傳

釋海壽字椿庭稱木杯道人姓藤遠州人也弱齡往相州淨智寺拜竺仙和尚髡髮得度穎悟異於諸僧

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇十一

四年仙公奉旨住南禪俾壽侍不益一日召侍者壽應諾仙曰念麼日不會仙曰向上事一星也無壽即契悟起立三拜尚侍左右質諸諸訛貞和六年與同志者截洋入元保天寧空海念公主藏鑰秉拂示衆一會推獎職畢見南堂欲月江印了堂照三尊宿受優賞僑居陳氏宅勘閱大藏教其室幾容膝揭以木杯二字辨默堂琦楚石康穆菴儒雅蘇大年作歌贈之聲聞於叢林穆菴招居淨慈第二座職滿偏遊浙東名區莫不登踐掛錫應天府天界時明太祖命住持白菴金公遜一時名繼點太藏教壽亦預焉一日

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

〇十二

帝詢白菴曰和僧通方言者有諸菴奏以壽首座召見于奉天殿問日本四方遐邇皇運治亂帝心大喜慰勞隆至洪武五年白菴奉旨舉壽出世郵縣之福昌寺乳香拈出供竺仙示不忘本也道風鼎盛緇白仰瞻住持一期解印維維桑之典諸師作偈以饒其行楚石長偈略曰有佛無佛俱是誑即心非心盡同誦放網高張未入微宗門直指還流浪所以道正法眼破沙盆古今此道宜乾坤黃金滿國難酬價付與休居的骨孫椿庭提起百樣碎不要被渠相負累擲過那邊更那邊尋常只守兩關地便與麼實可哉諸方大可笑贊飯饌嬰孩但恐空中釋梵來曇華又爲無心開壽留在元朝二十三年以本朝應安癸丑來歸明年受大相國義滿源公之請住洛之真如遷相之淨智圓覺洛之天龍南禪以解行兼備雲衲景附又善文翰一時尊宿爲其師求行狀碑銘者多俱東福直翁假公塔銘略曰道絕太來法離聞見獨露堂堂日面月面繞屋青松敲窓翠竹雨滴風聲利說塵說智不到處依依如矣證太圓覺發光明藏且古且今照臨萬象晚創語心院而逸老焉應永八年閉止月十一日嬰病燒香端坐垂誡諸徒泊然就寂報終

八十有四坐夏六十有九

河州光通寺沙門大珠傳

釋大珠號別峰防州人也生而俊逸才識超倫父母知是法器乃許出家納戒之後遊方會義南菩薩闍化關西殊往謁見問答有省見于義南傳參三光國師於雲樹國師證其省處後依靈嶽穆於備中吞海寺機語相契嘗歎曰古人得法之後巖棲穴居二三十年毀譽不動甘守飢寒不累其心心念在空寂我何人哉於是深隱林嶺端坐習定或經旬不食或終夜行道如是者數載陰德陽施自然不可掩人爭請之和

本朝高僧傳卷之三十六

○五

之興聖勢之清水橋之臨濟備之定林河之光通紀之西苑是也永德二年夏殊詣伊勢天照太神宮祠內禁沙門是日有白蛇導殊而入神排闥面問法要殊退寓蓮臺寺是夜大神夢告神主曰本朝神祠神主吾靈別峰和尚法來無以為噫嚅有藕絲僧仰黎可以施之連夜頓夢神主遂開審庫出以獻殊是由良法燈國師在宋登天台山日文殊太士所賜之衣後有沙門大隨作記傳世又謂熊野神祠歸舟涉河靈龜出水殊為與三歸五戒在定林寺江神入室聽說戒法履水而太中流不見衆人異之住西光寺

南朝熙成王後龜山院幸南紀日在駕問道賜以大珠圓

光國師晚居光通寺鄰州道俗翹寺來瞻殊將行是夜八幡大神告曰和尚緣在此不可去殊笑曰老僧豈有生外本來耶神喜而太未幾以疾而化實應永九年八月二日也開世八十二僧臘若干年先是殊患膠疾發而為疽所拭膿血滅後變成舍利連紙累累如色珠顯明之姑熟沙門太方還公換行道記旌乎其德焉

京兆安國寺沙門紹榮傳

釋紹榮號枯木參正覺久遂得密契由藏王寮居第

日本僧道 本朝高僧傳卷之三十六

○十四

一座冬至秉拂日枯華嶺上度月橋邊中有一物不方不圓明如日黑似漆下柱地上撐天全超象外絕因絕緣不逐陰陽消長豈涉寒暑變遷三世諸佛說不出六代祖師不相傳夏說什麼時老布裋懶洗鏡清不展臥單進前又手又手進前子細檢點將來未免為物所轉若是出格英靈不作者般公就大人具太見淨舉舉絕安排太智發太機赤灑灑勿張乖直得天回地轉否極泰來冰河焰發鐵樹花開雖然如是且道畢竟喚什麼作一物以拂子擊禪牀曰昨夜寒山逢拾得風前把手笑哈哈應檀越之請住藝之

長保寺正覺作偈送之。日親炙多年。緣身熟。丁朝告別。下西州。住山。秘訣休求。竟錫斧。元來在手。頭後遷京之安國。

京兆南禪寺沙門德俊傳

釋德俊字伯英號青丘遺老。武州人也。久隨了堂安禪師。宗說俱傳。時人言一切智人。應安年中與登大軍同船入元徧遊。巨利參見名師上。天童山謁了道一和尚。命司藏函久之告辭。一贈偈曰。畢傳直指絕學無爲頓空華藏海。林過毘盧師。無量法門都來在汝。百千億劫不出今時。逆施倒用見。敬微德山臨濟。

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十六

○五

還堪追俊及歸國住。相之圓覺。審爐辦香供了堂和尚。歷遷建長奉詔。升洛之南禪上堂問答罷。乃曰。諸方爲人解黏。公縛直截根源。使果脫籠頭。鉅角獸。若以思量測度之心。更言與諸聖同體。同用動轉施爲。不離個事。大是錯了。也。丈夫不用回頭轉腦。臨機一著何處。其空把住。則枯一草艸。作瓊樓玉殿。將一塊石。作丈六金身。放行則天寬地寬。海晏河清。長者長法身短者短。法身把住也得。放行也得。拈拄杖曰。慣從五鳳樓前過。手把金鞭賀太平。俊暮年退居大寧。應永十年八月十二日寂。遺偈曰。生入涅槃全不相。

子須彌跢跳。虛空展顏。行卷曰。萬松葉。

京兆臨川寺沙門善均傳

釋善均字平山。久從夢窓。大事了畢。命居後堂。冬至。秉拂具宗。無著木道。虛玄徧在萬物之上。超出二儀之先。佛佛授受尚虧一半。祖祖相傳未得完全。仰之彌高。鑽之彌堅。英靈漢子。跢跳出來。輕輕一踏。踏翻不妨萬里。不掛片雲。大地迥絕。人烟雖然。如是天龍門下。未爲周圓。且道應時納祐。一句又作麼生。良久曰。泊乎錯下。名言後承。鈞帖出世。臨川。

京兆普門寺沙門利開傳

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十六

○六

釋利開字鐘谷。嗣法東福。因山。鞏公。開攝之善住。後住洛之安國。普門。其道德爲叢林所欽。有自贊曰。華嚴會上。善住比丘。回途異轍。一種風流。性海見公。贊聞寫照。日緇林。根株宗社。棟梁海口。河目石心。鐵腸手段。高邁氣宇。如王四緣已熟。三坐道場。領徒匡衆。家法審詳。學業籍甚。永明正光能事已畢。六十四霜。胎厥嘉猷。續焰聯芳。

能州總持寺沙門良秀傳

釋良秀字實峰。不詳其姓。其許初參諸方。依峨山十餘霜。得其道。隨由妙圓遷總持上堂問答罷。乃曰。丁。

滴漚源五派流傳諸聖辣手段曾難得快便有棒有  
喝不待口頭之聲色枯槌豎拂不因言語之所詮變  
境挫銳則嚙鐵戲口前應物極慈則垂手入市廛入  
頭也超百太劫而吞盡三世佛出身也破一微塵而  
轉出界大千拈卻太疾趙州七斤衫受用不盡俱胝  
一指禪或時施鎮州羅葛寨斷後人口或時酬盧陵  
米價與費多少錢皆是悟上三昧也擬議思量佇思  
停機堪爲甚用也諸人且道如何行履太轉功就位  
偏分俗路在位僧功一片妙圓住住不礙道人藏  
王戶行行沒蹤跡石馬著金鞭如愚如魯朦朧臃

日本書影 本朝高僧傳卷之三十六

〇七

潛行密用連綿綿山僧怎麼說話未免口叨叨更  
有不落鑒照底一句作麼生承當良久云凍柳含風  
落寒華路月鮮下座秀後住備中永祥寺而終實應  
永十一年六月十一日也有語錄下卷

相州建長寺沙門歸整傳

釋歸整號大綱久從樞翁環公於福鹿間明究心地  
首住圓覺次從建長後領豆州國清寺值檀越藤桂  
山居士上杉氏遠志陸王座日羣靈一源假名爲佛三  
界無法何處求心體離斷常性無垢淨坐斷法華化  
按定古來今包利界於毫端促塵劫於食頃烈士夢

中更兩世木客座間過四朝物我皆如琉璃不動猶  
猴探水月炎影但認目前飛鴻踏雪泥東西難尋踪  
跡大哉法性號之心王蕩蕩乎無能名昭昭然不可  
見迷之則醉人失不裏裏情之則男兒得膝下金大  
地依此而覆載日月依此而照臨星宿依此而建立  
王者依此而御宇宰臣依此而補衮兆民依此而樂  
業色空明暗無處不周遠近高低悉皆廓徹出生入  
死越聖超凡未審因甚如是良久曰丈夫自有衝天  
氣不向如來行處行整晚歸巨福正濟菴而終

相州建長寺沙門存圓傳

日本書影 本朝高僧傳卷之三十六

〇八

釋存圓字天鑑隨侍無礙謙禪師于圓覺針芥相投  
開法豆之國清寺宗風丕振初子奔會圓嘗負釋書  
入藏曰救自延文太子承元亨釋史有規繩瞿曇不  
說此經卷雷與扶桑五百僧永德三年秋八月受府  
帖住相之淨壇後遷圓覺建長而逝賜諡佛果禪師

伯州退休寺沙門玄妙傳

釋玄妙字玄翁姓源越後人也年過志學入州之教  
寺繫染稟具十九參我山和尚于總持進修稍久遂  
破疑團而承印契遊化諸方我山下有嗣法三十人  
山滅後各分處諸方說法浩浩地於是大源通幻等



五哲晉議，擯出其俗，遺誠者二十餘員，而不俾出入。永平總持，二本寺妙其，一歎也。初到伯州檀越，起退休寺，請爲第一代。四衆歸崇，文和三年，屈野州結泉溪禪院於五峰山安居。七年，上庶廢風，不極華嚴，開堂說法，結城府主屢來聽法，於安穩寺延之，歷四載，抵輿之會津，開慶德寺，鄰里有寺名慈眼，本密宗道場也。住持歸師德與刺史勳力革成禪利，請師主之，乃改舊號曰護法山。示現寺高登法幢，野州那須野有妖石一，觸其氣，則人畜皆斃。時人名殺生石，妙一日行對石，日汝元來頑石頭性，從何來靈從何起，便

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇十九

以杖打石，三下石不爲祟。云應永三年正月七日，遺病書，傷日四大假合，七十年末後，歸的踏翻鐵胎，即時逝矣。余按殺生石，事化書不見，或謂砥礪之類，也想好事之者擬破龜，而爲言彼林下，即碎其跡永泯矣。此以毒石於今存焉，且隨世說，闕疑而載，校覺甄焉。

京兆東福寺沙門希讓傳

釋希讓字，在先越中人也。早拜龍泉淨公出家，了事太然，無挂滯。頑石生月心，圓相山永諸尊宿皆承證明，屢歷諸職。至德元年，出東山第一座出主三聖明

德元年遷晉門，應永戊寅秋八月住東福，病起上堂，山僧一月半臥，聞鐘鼓聲，花落作綠陰，絮飛作青萍，謂山水牯牛角瘦，皆長國清，寒山子不甘餓飯殘羹，疑枯拄杖，腕頭乏力，擬舉拂子，兩手戰栗如來禪也。所出祖師禪也，吐出何呵，何向日面佛，月面佛，五帝三皇是何物，以拂擊禪牀，下座佛誕生上堂，肌肉玉藕，水拍金盆，看看滄溟，滄出，轉桑，數應永十年三月四日寂于海藏院，享齡六十九塔曰靈源，有三會語錄。

京兆天龍寺沙門大闡傳 周明

日本書紀 本朝高僧傳卷之十六

〇二十

侍夢，愈國師入室登真，又萍遊諸方，悉蒙推獎，依嵩山中，公子東山應安元年承府帖住，相之淨智嗣香，燕向夢，愈居七年，移圓覺，應源丞相之請，興京城之天龍，視衆不欠，年七十九，化賜諡佛範，宗通禪師，建長，雲澤菴慶讚，新羅釋迦尊容，闡安座點眼，語曰：充塞乾坤，宇宙間巍然不動，紫金山釋夫日月隨化，轉焰慧光明，從此還伏，惟本師大覺世尊，萬德盡莊嚴，三界導師十號全具足，九有津梁垂慈，於無緣施惠，於羣人千百億化，二千年前一體分身，二千年後放光及現，瑞應世七度生法體，儼然佛事，了畢只如正

法眼，欠一點功，今日爲點開，以筆點，日青蓮時視後，笑破顏，又同袍有釋，周朗月庭相州人，精於密教，棄歸禪宗，初住天龍後，董南禪，應永十年五月二日化，辭偈：日八十二年幻生幻滅，機轉一機，虛空迸裂，塔于明日菴。

濃州妙應寺沙門宗令傳

釋宗令字大微，開州人也，弱歲出家，建具以後復陪，兼席而無入處，聞我山和尚開法，總持奔忙，學者不憚千里往，詣其室，山問鐵牛生兒時如何，令曰：石女動後，偃機密，回山曰：切，道者令擬開口，山打曰：妙。

日本撰述 本朝高僧傳卷之三十六

○壬

唱不干口，令忽然有省，後得悟人受，同門請主，能之總持，乳香供我山，濃之井益縣有大江靈妙菴，主歸，暫師法華，妙應教寺，請令而居，僧俗來詣，大化靈坊，令奉我山爲始祖，大將軍義滿源公聞其德望，捨山林田園，又越中檀越建精藍於新川郡，聘師主之，叢規整整，四衆趨化，如津眼，目山立川寺是也，上足竺山仙公得攝之檀請，開護國寺，奉令爲開山祖，應永十五年正月二十五日說偈而寂，壽七十有六，塔于獅子菴，令出神足十六人，枝蔓相牽，豪傑輩出矣。

本朝高僧傳卷第三十六

音訓

覆上敷救切 諸訛上胡茅切 款乃上於到切 下音落 謁下吾禾切 牽蘇骨切 盼普患切 維桑上 聲式竹切 螭蒲光切 非考委切 疽子余切 叨佗刀切 瑯琅上旬緣切 切上綿兮切 視篆上在 下胡鉤切 視篆上在

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄

本朝高僧傳卷三十六

茲其

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺

知藏比丘

識

日本撰述 本朝高僧傳卷之三十六

○壬

本朝高僧傳卷第二十七

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪二之十九

京兆相國寺沙門中津傳

釋中津字絕海號蕉堅道人世姓藤氏土州津野人母惟宗氏禱于五臺山文殊像夢大士授劍覺即有身建武二年冬吉祥而生十二歲名於洛之天龍勤服師訓啻啻琅琅夢覺國師見其神秀甚器重之翼載茶葉陪驛馬列憲在西芳講圓覺經同學有所未曉津爲覆講不差一字衆皆驚異既暨入室應酬建

日本書錄 本朝高僧傳卷第二十七

〇 一

飯國師忻曰他日扶起宗門者你也善自齋十八受戒國師爲大僧坐禪禮佛日課不虛十八參龍山見公于建仁與義堂信天錫壽樞衣入室大林育公交代董補命侍湯藥東堂放牛林和尚結制冬節就入坂法觀寺請五頭首輪次登座說法一時闕問禪牛公請津津出衆問話機辯如流津在東山十有二載雖風雨寒暑禪誦無懈皆稱精進幢因看楞嚴明自己心貞治甲辰將遊相州萬壽石室玳建仁別源自贈偈稱其靈利及抵鉢倉省義堂青山二兄依大喜忻於建長元帥源基氏待遇稠厚津歷遊福鹿間助

化於同門者前後五載應安初年與佐汝霖等同船入明當洪武元年矣往杭之中天竺依李潭泐潭一面器許命典藏鑰又謁清遠渭于道場良用貞于靈隱了道一千天童皆優賞焉逮李潭住徑山招津爲座元不就九年正月太祖聽津聲譽召見于英武樓諮詢法要奏對稱旨帝復指日本圖顧問海邦遺跡熊野古祠有勅賦詩津輒應制曰熊野峰前徐福祠滿山藥艸雨餘肥只今海上波濤穩萬里好風須早歸帝賜和曰熊野峰高血食祠松根琥珀也應肥當年徐福求仙藥直到如今夏不歸因授與衣鉢褐襖

日本書錄 本朝高僧傳卷第二十七

〇 二

拄杖并寶鈔若干詔許歸國康曆元年入洛寓雲居菴昔性海見公主天龍舉津任第一座明年春赤松義則以橘之法雲請津登袈裟霖代之是秋膺鈞選開法甲之慧林英禪繼華堂宇至無所容津提唱之暇講法華楞嚴等諸大乘經隨機誘掖居二年歸龜山至德元年以直言忤源相國長揖而去隱於攝之錢原二年秋源武州桂巖居士就阿州建大雄山寶冠寺聘津爲開山始祖冬十月源相國發專使徵津以疾堅辭源公重下手帖命桂巖居士起津居士乃抵寶冠強曰法門汚隆陋邦安危係於師之出處矣

津無已而七京卽命董等持鐘鼓鐃鐃不振玄綱龍  
湫澤和尚臨法筵感嘆曰先師說法體裁在焉便贈  
夢窓國師法衣嘉慶二年秋源公詣函丈乞津所著  
安院衣受持而出冬十一月有藩臣叛凶軍立敗禪  
林諸老人慕賀捷源公著法服相見指田衣曰此回  
頓獲勝敵者是袈裟之靈驗也移董北山之等持一  
日源公持十牛圖請示宗旨津曰宗門直指之旨非  
紙墨言說所能及然古德十牛之設爲中下機於無  
途轍中而啟途轍無功用中而顯功用也自始尋牛  
至於人牛俱忘此是相公自己本地風光非從入得

本朝高僧傳卷之二十七

○二

會得則離門瓦子耳源公作禮而退明德應永開源  
公諱津二住相國寺兼管鹿苑院檀越源丞相建三  
門新開寢室上堂我本無心有所看來今此寶藏自  
然而至諸仁者還委麼大檀越有威神力量於一  
念之間現出慈氏樓閣豁開解脫法門施底無心而  
施受底無心而受了知三輪體空寂我此法門咄囀  
開汎失寢室大開家風有加拈黑竹篋分賓主定龍  
蛇舉玻璃瑤呈機關驗作家雍雍穆穆枏枏植檀山  
中更有一段奇事也要諸人共知何也招得神陀巖  
上主大家共喫趙州茶謝都寺進退上堂諸方談玄

談妙以爲宗乘我這裏玄妙束之高閣諸方行棒行  
喝以露大機我這裏棒喝置之不壁金穀出納自有  
人勾當土木興建自有人任勞山僧只管端居大室  
現前受用耳來者如龍得水去者似虎靠山快活快  
活總無閑事挂心頭便是人間好時節若也作快活  
會入地獄如箭射咄津以應永十一年四月五日歸  
寂有辭偈曰虛空落地火星亂飛倒打筋斗抹過鐵  
圍俗齡七十僧臘五十六津自少聲諸翰墨之場既  
及壯歲珪璋煥發嘗在明時與竹菴渭浦菴復等以  
詩往來俱稱美焉有四會語錄明之淨慈道聯公爲

本朝高僧傳卷之二十七

○四

之序又有外集焦堅臺僧錄司左善世道衍大師題  
卷首共行于世滅後五年後圓融上皇勅諡佛智廣  
照國師相尋後小松帝加諡淨印昭聖國師奉持津  
之僧伽梨永置於內以伸供養焉

贊曰佛智國師抱秀發之機而師於名師友於勝友  
步履周流歷年殆淹矣自謂我嘗有笑笑之分跨歷  
明國受大方虛左之禮見萬乘主拜壇瑤之饒賜歸  
來權都下之官寺緇林頭角金苑股肱靡然挹才華  
是雖國師之士宜也所謂以文字揭示第一義者也

京兆南禪寺沙門祥登傳



釋祥登字大年建長了堂安禪師之高弟也應安初  
偕法兄伯英俊公入元請益歸朝出世建仁後住南  
禪叢旬仰真風一日同諸山尊宿到齊于丞相義持  
源公之第源公曰有一幅画開軸之間敢請諸老之  
題贊語絕海津公謂登曰應丞相之需者非和尚誰  
歟我當執筆耳源公召入掛之壁上乃達磨大師頂  
相也登衝口唱曰九半面壁架一張弓盡取天下置  
吾轂中源公拊掌稱嘆列座感伏焉

相州建長寺沙門等益傳

釋等益字友峰鏡前人也初禮雪澗存和尚執童役

本朝高僧傳卷之二十七

五

有長髮進具存公嚴化後參古先元禪師于等持  
其如間無德孝王東福招掌內記職滿歷謁夢窓石  
虎關鍊乾峰墨蒙山明龍山見放牛林此山在東陵  
嶼石室玖太虛充諸尊宿古先歷遷甲之慧林相之  
淨智圓覺建長益皆從行不離左右去訪師叔復菴  
亡公於常之法雲命居後版又回福山轉前版兼拂  
說法價聲四馳應諸山請出世野之長樂拈香供古  
先尊遷淨智建長前後克踐先規誘導學徒後退居  
長壽檀越野田氏棚普慶精舍延爲開山之祖應永  
十一年正月嬰疾二十一日更衣書偈曰幻生亦不

滅非幻不生滅方外立乾坤壺中掛日月放筆泊然  
就化壽七十九塔曰澄心

京兆南禪寺沙門韶奏傳

釋韶奏號九峰雲州人也東福靈鋒慧和尚來住州  
之華藏寺奏自少隨侍遂稟記別出世豐後萬壽寺  
解印伏居華藏東菴者尚矣藤丞相聞其道價招之  
入洛目擊道合請住東福尋升南禪棚定光院於龍  
山之側退休道義穩實晚節彌堅一日徧辭山中諸  
老歸入石龕中肯本寺住持鳴鐘舉衆而至有僧出  
問如何是末後一句奏豎一指指示之乃令大衆誦楞

本朝高僧傳卷之二十七

六

嚴咒至第五會自閉龕戶實應永十一年中冬十二  
月也保齡八十一歷臘六十六

贊曰坐脫立亡火化水定支那禪策中班班觀焉蓋  
是達人至其滅度者風流灑落遊戲三昧矣如九峰  
師其入石龕者似晉化之舉其豎一指者似俱胝之  
禪先覺後覺皆同一三昧也

播州瑞光寺沙門周徹傳

釋周徹字靈光福嚴本朝知識之門又截海入中壘  
歷遊諸刹專事參尋久依古林禪師於鳳臺發蒙多  
矣歸來承夢窓國師之印首衆于天龍應檀越之請

開堂播州瑞光州創寶光寺爲第十世國中化歸臨終說偈曰欲知居處不離神仙金剛腦後那吒面前端坐而卒

### 京兆南禪寺沙門全用傳

釋全用字大用稟印萌於少林草禪師出世野之長樂盛弘西澗祖翁之道後奉勅往洛之南禪參玄雲禪堂中輟湊晚倦老期構聚松院謝事而休自知化緣盡會關山衆遺誡訣別對觀自在像唱辭偈曰七十有一大事了畢虛空紙窄閑須彌筆回於本座恬然長往遠近見聞者莫不歎息矣大用師遷化亦與

九峰之終可併案焉

### 京兆南禪寺沙門祖濟傳

釋祖濟字哲巖播州人佐伯氏母紀氏夢入授明珠而有妊焉偶逢占者原之曰胎中必育男子但非塵中物卽是僧鳳翔翔五嶽矣及誕彌骨相不凡聰敏出隊父母愛爲文殊童子年及志學投本州長福教寺讀梵教能記不忘龍谷雲公遊化播陽濟拜附爲師雲公爲下髮剃戒侍左右久辭上睿山稟密法於座主聽一心三觀之旨慧解日長義辯無礙却回侍雲公受印記應安二年應府帖住攝之澄心辦香供

龍谷國民歸向至德二年徙洛之普門明德二年領萬壽翌歲董東福所在歸敬百廢皆備暮年退守本成祖塔藤丞相以濟年德奏朝主南禪占者言於是符合矣居三載退居慧日常喜菴應永十二年八月初示微疾十七日中夜集諸弟子遺誡畢說偈曰側臥橫眠八十二年失脚踏斷利界三千置筆坐脫茶毗獲舍利無數享年如偈臘六十七

### 京兆相國寺沙門中諦傳

釋中諦字觀中日奉氏阿州人也母夢沙門杖錫至家錦裹利刀納其懷中寤後有妊及生英敏拔萃不

樂塵垢應唐貞年甫九歲僧人入洛拜正覺國師

執童役累年親樂進戒此秋國師遷化因就諸兄習學不息又遊南北教肆棄往相州咨叩諸老俄附商舶入元從台州抵福州時有黃巾亂道路不通卷被東歸依春屋莊公于天龍命掌記室朝銀暮錄遂徵玄旨無何分座說法出主本州之寶陀嗣香獻正覺周載遷洛之等持應永七年太丞相義滿源公聘董相國檀護日煥英初推奉如蜂得王焉上堂僧問古德因僧問月半前用鉤月半後用錐正當月半時如何德曰泥牛踏破澄潭月還的當也無諦曰可恁的

當僧曰今朝正當二月半未審有什麼條章。師曰好語不可說盡。僧禮拜。師乃日月半前用鈎。易狗趁鐵牛。月半後用錘。玉兔長。鳳兒正當月半時。如何嘉州大衆念摩訶作麼作麼無常殺鬼。念念不停。只在利那寄語。傳大士幾日。歸率陀囉囉哩哩囉囉囉。處因其鍾鐵猶多以拂子擊禪牀。下座。二月上堂。一羣開而世界起。一塵飛而大地收。豎起拂子云。看一毛頭上有幾種法界。文殊當理。普賢當行。觀音普照護方所。彌勒多遊。族姓家理者。真空無礙之理。行者求相無盡之行。一一法界一一證人。蝦蟆跳上。

日本漢文史籍叢刊

本朝高僧傳卷之三十七

○九

日本漢文史籍叢刊

梵天虹蜺抹過東海是第幾法界。師倦極拂謝院事。源丞相相乾德庵。以爲休憩。地京兆源賴之細川建氏永泰院延之。一日示疾集衆說偈。一喝便逝。實應永十二年四月初二日也。壽六十五臘五十二勅諡性真圓智禪師有二會語錄及青嶂集若干卷傳于叢林矣

### 江州永安寺沙門永釋傳

釋永釋號彌天。不詳姓里。資氣榮粹。善綜內外。行脚諸方。之後參寂室于永源。久看狗子無佛性。話脫然。契悟室授法券。又作字說曰東晉安公僧中之龍德。

名俱高。靡有出其右者。故自稱彌天釋道安。良有以也。今釋侍者以彌天爲別號。且喜吾門復獲希顏。慕蘭之徒也。辭遊甲州。衆幸其來。請董淨光寺住職。未久又返江州。無功忠菴主創永安寺。敦請居焉。室贈偈曰。凝滯頓釋。灑灑落落。電卷星飛。龍驤虎躍。疎慵老頭陀。一生投丘壑。同志遠方來。慟愧當永藥。酷愛移茅入。淡蕪火煨芋。標格古風。不振久之林下。年年蕭索。千峰玉立。掃秋旻。冷翠巖屏掛飛瀑。今朝君已下。名義誰共同。看山月白。釋有偈示衆曰。爲勸後生參學。士光陰如箭。莫空過。人人有個靈臺。在拂拭塵埃。急琢磨。釋又開甘泉太恩。一刹爲第一世檀越。悉恭信。貞治六年秋八月。寂室將願世命。釋預作祭文。其詞曰。師胡棄我。忽哉化權。滅昏衢之明燭。失苦海之慈航。天耶非天。耶雙淚竭。而寶血命乎。非命乎。中心熱而探湯。風吹雙林。宜揚拘尸之遺教。石瘞隻履。顯揚少室之舊草。天地震悼。鬼神哀傷。秀氣低壓。諸峰瑞石。翁鬱正服。分列萬派。永源在洋維。孫維子以繁。以昌。煮北焙之茗。熱南溟之沈。寂定不昧。鑑斯微忱。稿成以呈。焉室覽而甚懼。釋住永安二紀。臨付微疾。遺誡門人曰。老僧滅後。汝等胥議。不問自他。誦一

日本漢文史籍叢刊

本朝高僧傳卷之三十七

○十

日本漢文史籍叢刊

老成辨道人以充菴主其勤行業不然則各自散去諸子勉旃言訖蝶化實應永十二至六月初五日也法弟英靈仲主其後事茶毗收靈骨于寺之後築塔曰實相菴名龍井勅謚見性悟心禪師

### 明國二峰寺沙門啟原傳

釋啟原字大初未考鄉氏九齡禮建長物外什禪師綢染得度及十九歲與宗猷等十八衆參遊大明歷見天界季潭泐仰山了堂天童無著等四十五員善知識末於徑山傑峰英禪師處頓釋疑網英公付以頂相大衣拂子法語住羅陽二峰寺及山父龍護院

本朝高僧傳卷之二十七

○ 十

禪客歸風永樂五年二月一日集衆書偈曰生也鐵面皮外也鐵面皮一椎百雜碎白日遠鐵團柳筆坐脫壽齡七十又五行化四十餘年列刹知識傳聞稱嘆有三會語錄云

贊曰禪人何爲者也以悟爲則開物成務綜二界而置之闔如斯者也何際限之立有夫日本震丹者南瞻浮洲粟散國土僅隔一瀛耳是以諸師航來開法虛往傳法而開寺弘化不歸而終瓦屋于唐大初于明原公之事載在釋氏稽古略

### 京兆天龍寺沙門明應傳

釋明應字空谷別號若虛姓平江州淺井郡人其母

連生女因禱瘡瘵神以求男遂以嘉曆戊辰祭神日生年甫九歲投郡之廣濟寺志徹爲驅烏天資聰敏經籍觸手卽記徹見其偉器攜附夢窻國師命受業於上首無極玄久之辭依高山照公於建仁山嘆曰這沙彌穎發如此他日不可量也復回臨川服勤無極十七受具足戒侍國師日增慧解一日觀臨川長老禪坐堂中屹如枯株竊念衲僧風儀當如斯從茲奮志禪觀及無極補天龍命歸侍局嚶緊參究果徹格外無極退後東陵禪師來繼其席登掌知賓依林

本朝高僧傳卷之二十七

○ 十

教牛於東山典司藏經至節秉拂僧問藏主少年升座有什麼長處答曰虎生二日有食牛氣一衆注目又從皎碧潭論默菴月中巖二大老自三藏教卷五家禪燈至夫九流百氏之書涉閱無遺明蒙山在此山主南禪時招應掌筭翰在春屋葩清溪徹二師叔會裏分座說法永和乙卯冬開法濃之天福四年戊午州守土岐氏延以管內天寧其寺僻在山間應茹蔬被葛若將終身焉崇光帝聞其風範下詔管大光明寺皇華再至應進偈曰紫詔飛來入白雲三呼萬歲謝天恩者回至化逃難得但慮何由補法門帝屢



召問法崇遇日渥至德二年相國春屋範公告老謝  
事丞相義滿源公敦請補席辦香記無極之嗣此時  
寺未圓備應遷裁二霜飛樓湧殿幻出夜摩觀史之  
壯麗也華夷包笠雜遘叢集上堂瑞巖頻喚主人翁  
南泉亦索一身價只有臨濟門下常在家舍不離途  
中常在途中不離家舍何故渾崙無縫罅上堂多言  
多慮轉不相應絕修絕證作麼生折合去暮拈拄杖  
曰頭不欠尾不利結制上堂檻前水綠山青水牯牛  
橫眠倒臥天際日上下月下寒山子胡吟亂嗽處處古  
佛道場塵塵大人境界因甚南方禁夏不禁冬北方

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十七

○主

禁冬不禁夏可憐為方隅所關鎖為時節所羅籠向  
何處出氣拈拄杖卓一下端午上堂二世諸佛病多  
諸藥性歷代祖師病者聚醫門入芥田不揀拈來州  
救膏肓於必死除勞瘵之根源拍膝曰忌口更須二  
十年嘉慶初退休鹿苑明德元年源丞相奉金縷僧  
伽梨請再任因奏應高行於朝帝召見內殿問法大  
悅乃受衣孟執弟子禮翌日遣中使特賜佛日常光  
國師之號二年秋八月源公修相國新寺落成供養  
五山十刹及諸山住持皆集法會是日源公率文武  
官僚請應慶讀就覺雄寶殿附座云妙莊嚴域恢恢

會吐十虛法菩提場落落爾綸羣有既非眼耳所及  
豈可心識能量雲橫北極水通南津呈露劫初勝槩  
金烏東昇玉兔西墜發現格外喉機直得物物全真  
頭頭妙用舉足下足皆是道場得念失念無非解脫  
擊拂子下座源公施帛布三千緡黃金百鎰文馬十  
匹及種種珍物委積若山應不沾一芥悉歸之常住  
源公聞之益加崇敬迺割丹州腴田若干頃以贖常  
德壽塔無何回鹿苑應永初年相國寺火應復起住  
閱兩寒暑諸堂一新源公欲令十禪客易衣入教應  
因執曰下喬木入幽谷理豈然哉因上堂舉南陽醵

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十七

○主

肅宗話曰空中一片雲悠悠任天地釘釘著還非懸  
掛著不是顧視大眾曰借問從何起擲下拄杖即返  
鹿苑時絕海津禪師與應道望並高人謂之二甘露  
門五年戊寅有鉤命住北山等持居三載退守雲居  
塔憶先師箋註之勞與衆講宗鏡錄謂學人曰若約  
吾宗元無實法老僧不畏披舌犁耕貴圖諸人粗識  
來源耳今如來慧命將絕為兒孫者無意紹續何其  
鐵面皮耶聞者激起大將軍義持源公入山問法應  
示以臨濟語復乞法名授以顯山二字並偈源公從  
茲歸仰日熾十一年冬董天龍四衆懽呼以為是壽

一現明年春復休。鹿苑源丞相問曰：「圓覺境界，弗容妄心測量。今某等日用無非，妄心敢請開示。」應曰：「何傷乎？」經曰：「知幻即離，離幻即覺。」檀越既能知妄心，則日酬萬機，全是圓覺。知之一字，衆妙之門。切莫忘却。一日又問某自登台輔，日課金剛般若經，未曾聞歇。其報如何？應曰：「能摧諸物，而不爲諸物所摧者，謂之金剛。以譬般若，體用檀越愛和陰陽，致君堯舜，亦可謂般若熏用之力也。源公悅服，應爲入也。疎眉秀目，昔吐如鐘，機鋒峻峭，不可觸犯。而居恆仁慈，人望見意消受。王侯寵錫，而奉身守約，衣服垢弊，躬自補浣。」

日本書志 本朝高僧傳卷之二十七

○五

不煩弟子從踐此道，脇不着席者四十餘年。老而脚疾，扶杖勃鞞，朝曉燒香，一日不闕。塵尾一揮，則學海濶。翻當時僉曰：「禪林豪傑也。」十四年正月十一日示有微疾。源公父子及諸官員問病候者，相續道路十有六日。晚湯沐淨髮更衣，跏趺坐。侍僧請遺偈，應曰：「揄曰：堪作何用？」衆請殷勤乃秉筆書曰：「倒騎木馬，踏破虛空，覓踪跡，結網繫風，移刻遷化，報齡八十生夏。六十二門人及檀越輿奉全身，送慈濟院停龕。一日顏采不變。源公哀慕不止，賻葬尤渥。塔於佛慈禪師，率堵波西偏嗣其法者二十人，白衣受戒者若干人，有。」

語錄行於叢林。

贊曰：後小松帝顧問，一休純公曰：「空谷性海，一師孰爲本色？」稱僧卿審擇之純奏曰：「以某前見性海文字，性未脫焉。空谷名利兩忘，本分宗師也。於是空谷爲師，賜國師號。余觀行狀，參履詳實，悟解資深，色空鈞觀，名利都亡。純之奏許，特爲的當也。語曰：視其所以，觀其所由，察其所安，人焉廋哉？人焉廋哉？若常光國師，不可慙聖人之言矣。」

### 攝州報國寺沙門單況傳

釋單況字無比，自幼冲隨虎關和尚。宗通說通，延文

日本書志 本朝高僧傳卷之二十七

○六

年中勸法，兄龍泉淨公上書重奏，釋書有旨，入毗盧大藏。於是諸山尊宿聲價，實之況亦有焉。曰：日域新編釋史，文此非梵語，與唐言紫泥時下入龍藏五百高僧朝至尊，況編成巨軸，題曰：獅子筋，況後住攝之報國寺爲開山第一世。

### 京兆南禪寺沙門一麟傳

釋一麟字天祥，別號一菴。京兆華產藤姓，右族生於攝錄九條家。麟幼而穎發，依東海源公于東山，大中菴執侍童役十七，得度進具遊南禪建仁，閒參諸名宿。旁嗜文墨，時以才名與中立鸞公有連璧之稱。鸞

乃東海子法燈，承出世南山，蒙重南禪，聞當世者也。雖在太龍，集如任職，乘拂後謁龍山，見公山曰：甚處來。師曰：天台普說南嶽雲遊。山曰：若是活底龍，一任自在。去。師復禮拜，服止，席下。又隨山于建仁南禪，叩問詳切，機鋒提出，每晚誦動至四鼓，不命之退，終不起。山嘗呼難得子，延天二年，山還天龍，舉任，編維明年正月，天龍火，山中夜退北山，歡喜寺事出，倉卒與夫欠一人，麟代了躬昇其，敬至此，今竊中冬山寂于龜山，麟提調後事，歸歛于東山，知足塔喪關首，聚于南禪，乘拂接新聲華燭，起叢林間，永和二年出。

卷之三

本朝高僧傳卷之三

七

七

作戈矛，參韶石，不肯韶石，參趙州，不肯趙州，何故。魯人不敬東家丘，結制上堂，護生須殺，殺太無轉智殺盡始安居已落第。一大地都盧解脫門是誰，無一坐具地因甚。大家坐這裏喝一喝上堂前四十五日過去，心不可得，後四十五日未來，心不可得，正當今日現在，心不可得，二世既不可得，不可得中只麼得時，如何以拂子擊禪牀。曰：六月買松風，人間恐無價，解夏上堂翠巖一夏為兄弟，東語西話勞而無功，雲門索取九十日飯錢，壓良為賤，山僧初秋夏未任汝諸人南往北來，忽然躡步，磕著腦門，不得孤負老僧。麟晚守東山護國之塔，一時名稱為義堂龍湫太清默菴，絕海空谷等，莫逆倡和，凡檀越嚙施不沾一毫，用充起廢。一日遭病，顧侍者曰：吾行矣，侍者出紙求偈，麟書曰：有有有，有無無，無無無，裂破鐵絲網，擊碎驪珠閣。筆曰：老僧滅後座，全身於祖塔後。我欲從祖師於定中言訖，就化。實應永十四年臘月初一日也。壽七十九臘六十七嗣其法者雲岳孫子龍雲江西派瑞巖惺九淵縣各據大利，所著有佛祖歷年圖一卷，藏堂十卷語錄一卷，龍湫集一卷，塔院在東山，曰靈泉。

卷之三

本朝高僧傳卷之三

八

八

京兆萬壽寺沙門智至傳

釋智至

智或字

愚溪嗣法龍泉泮禪師行履確實不

苟世緣師叔性海見公勸化諸方重刊釋書至一筆

繕寫南禪二仙和尚寄偈曰元亨釋典祖翁編喜見

愚溪續斷絃胸大春秋僧史筆袖中文字祖師禪風

吹襟草催歸夢雨長苔花憶舊蓮其數龍泉湧黃土

衝星更有小龍泉初住鏡之承天遷洛之萬壽至當

日太圓鏡智果因轉平等無礙見非功若一絲毫許

凡情聖量未盡還據師位者為偷示號矣門人錄其

行業至阿曰汝等圖畫虛空作什麼即令好却其平

日事實大率此類也

京兆南禪寺沙門仁與傳

釋仁與字香山自少侍夢覺國師汲汲于參禪如救

頭然遂稟印記呈頌曰扶桑國裏大宗師值遇恰如

浮木龜賜我安身立命處虛空拍掌笑舒眉辭往東

濃盤結艸菴藏跡林間永和四年同門眾招主臨川

繼住天龍遷升南禪與嘗夢國師賜金襴袈裟而作

偈曰夢見心空定裏顏熙怡微笑授金襴黃梅夜半

付盧老添得秦時轆轤鑽後柳禪度而居

京兆南禪寺沙門慶圓傳

釋慶圓字月心自受記荊於月翁規公遊衍諸方又

驗海人元福誦諸尊宿而見地淵偉學術博依元人

稱大乘菩薩東歸出世濃之定林歷任建仁建長余

負其語句不能得焉有賀釋書入藏偈曰公道無私

編史成時當季運法門榮祕收海藏也徒爾詔許流

通天下行後返鎌倉終于福山大雄菴

京兆寶幢寺沙門良佐傳

釋良佐

良一作

字汝霖姓藤遠州高園人自少出家奔

遊華夷宗說該通兼長屬文聲喧叢社應安元年與

絕海津公俱入大明掌筆翰於蘇之承天寺繼同五

山諸大老入鍾山點校大藏經同袍皆良而敬之又

遇文章鉅公研精翰墨翰林學士宋景濂見佐文豪

而大賞跋其尾焉太祖召絕海汝霖於禁殿問熊野

三山事書賜甚渥洪武九年春同絕海歸丞相義滿

源公聞其才德遣使於泉州堺邑邀要嗣法普明國

師應其歸受業師也康曆二年受赤松義則之聘開

堂播之法雲是歲源公建寶雄山寶幢寺於城西請

普明為開山始祖仍命佐補處住持無何遷化時人

惟化門之不用也霖偈詩不存收拾一二今記于此

其所著併傳遺稿曰高園集慈恩寺殿海寶居士乘



炬佛事曰北風撼撼拂林園水在瓶今月在天烈焰堆中清淨土本來面目正昭然題號之吞碧樓曰石城之寺跨江濱上有層樓最不平風捲浪花晴似雪天疑海氣曉如雲龍公窟宅凭欄見鯨女機梭欲枕聞萬里鄉關未歸客登臨猶自對斜曛

系曰汝霖與明朝諸儒從事筆墨翰林學士宋文憲振知辯以跋其文然但宋氏之意而非可作汝霖之行實也昔張無盡按部過分寧逢克率悅禪師曰聞公善文章悅大笑曰運使失却一隻眼了也從悅臨濟九世孫對運使論文章政如運使對從悅論禪也

日本書紀 本朝高僧傳卷第三十七

此本色禪僧對儒者之言凜然不可犯觸者如斯與汝霖之撰自分涇渭也復汝霖與絕海謁明太祖賦熊野徐福事而絕海四句立成焉汝霖欲作律詩經意之間不覺覆茶杯夫文章者道之緒餘非禪人之所務也霖何吟佔筆偏至于茲耶

京兆養源院沙門道芳傳

釋道芳字曇仲自幼侍空谷應公學業成熟為無已聖劔關提所稱速應住相國命司輪藏結制秉拂垂語問答一眾聳聽尋受正印大周齋公董南禪招芳居第十一座既而謁性海梅庭太清春屋義堂絕海

師皆推重器惟肖仲方太白岐陽數彥敘衽服膺源丞相義滿父子聽芳玄談不知日將暉諸方以巨剎講掩門却掃構養源以屏居玄徒挹風戶外屢滿矣應永十六年二月二十九日值病淨髮更衣書偈曰四十二年不坐不禪掀翻大海抹過青天置筆坐城門人收靈骨變于長生焉

本朝高僧傳卷第三十七

日本書紀 本朝高僧傳卷第三十七

音訓  
泐 歷德切 琥珀 上火五切 叛 薄半切 珪璋 上居為切  
較 居候切 邱 重律切 原 遇玄切 藺 良慎切 藥 博尼切  
岩 上笛聊切 廣 古衡切 焙 步昧切 枕 時潑切 枕 航  
度 下餘招切 變 悉協切 浣 同許 勃罕 下蘇切 鈞 同均 驟  
玉禁切 泐 覓筆切 齋 丁公切 實也

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鏤  
本朝高僧傳卷三十七 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十七

○

三三止

本朝高僧傳卷第二十八

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之二十

丹州天寧寺沙門周及傳

釋周及號愚中濃州岐阜人藤姓父母嘗憂無嗣宅邊構堂安觀音像晨昏禱之遂得感而妊逮生異光滿室年方五歲執普門品就父求誦請僧授之即便能誦以爲夙熏觀音像前有盤陀石及每坐其上禮拜誦經一日有僧授性海無風金波自涌之句而去問來處曰自奧州來及奔告父父怪而追之失其所

日本群載

本朝高僧傳卷之二十八

○

一

在年逮小學父攜投郡教院令就童列竺墳魯誥如探懷物時父有難將罹刑舉家惶怖及獨詣觀音像至心祈禱父果獲免從厭世相請歸沙門慧論不可遂任其志及喜曰若然空歸禪宗年十二上京師禮夢窻國師於臨川國師見其骨格神異卽爲剃髮安名因其身長常呼高沙彌俾依春屋葩教以禪策過目能記葩曰高沙彌伶利我今事繁不能成禪命侍首座鑑翁翁鉗鏡妙密德望高時及辛勤奉仕請益不怠又親龍湫默菴二師日增慧證國師有友雲菴偈命及和焉及應聲曰巖樹陰森日易曛無心來往

日本群載

本朝高僧傳卷之二十八

○

上

洞中雲凝然一榻乾坤闊物外逍遙趣不羣國師稱賞或者曰子盡習儒典恐闕博識及曰若論本分佛語祖語尚不可學況異端乎十七到睿山登壇受具十八掛錫於建仁值住持上堂出衆問難一會傾聽曆應十四年秋乘商舶入元明州太守鍾萬戶以爲賊船舳艫數千遮于海上商主通書太守益疑踰年防嚴船中水盡人皆將死及與同侶修圓通懺摩法以禱雨水密雲忽布甘雨大降船中數百人各滿器得活鍾氏奇之許商賈貿易有一商客聞及爲求法來夜棹小舟迂及登岸時月江印禪師居曹源兼程進謁晨參暮叩唯恐不及印公視其舉措兀兀如癡書愚菴一字并偈以贈之及以爲號後自改爲中印公謂及曰老僧退居不行叢規富抵大方觀禪席盛矣乃與偈曰贈君一滴曹源水漲起西江十八灘八十四人艸窠裏齒牙交下觸體寒去到道場偶遇本邦密禪人相偕上金山拜謁卽休了和尚了公先一夜夢佛印元禪師至逮及來參大悅遇之甚騰因指面前柑子曰日本有麼及曰有又指栗子問之及曰有了公曰佛法偏在一切處來此間作什麼及曰若不到此間如何見得和尚了公曰目前無關梨此間無老

僧及便禮拜乃命以記室及善筆翰一眾喚稱專侍衣鉢一日入室呈解了公叱曰不見道言無展事語無投機滯句者迷承言者喪及泫然而退經數日了公謂及曰昔大慧在梅陽入室時鼓山長老在眾慧舉竹篋曰喚作竹篋則觸不喚作竹篋則背喚作什麼山出眾奪取竹篋慧敲卓子曰喚作卓子則觸不喚作卓子則背喚作什麼山便踢倒卓子慧指虛空曰喚作虛空則觸不喚作虛空則背喚作什麼山打筋斗而出言未訖及脫爾即呈偈曰不知禪者非禪者二十餘年只一疑打破鼓山塗毒鼓曾天匝地盡

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十八

○三

須彌將歸歸本朝了公自題頂相付之曰妙高峯頂山船揚子江心走馬唐人不識這容儀付與日本及者時朝廷勅金山修水陸會了公留及典經藏月山楚石夢堂諸老寄偈賀之石室玳龍山見時時律互加琢磨及有癸亥集了公序其首儒官虞伯生以其尾名聲廣達叢林至正十年了公示微疾謂及曰來歲孟春吾必取滅殘喘未絕時子速歸日本示以偈曰裴寺相親閱幾秋左探右索出時流機輪三轉輪元淨定慧雙詮慧匪修睡虎耽耽拋故穴遊龍矯矯奮靈湫好翻一滴長江水漲起東方廣海州又

囑曰子歸鄉國不要出世須居山林做靜地工夫長養聖胎他時必向孤峯頂上發揮吾道去在明年孟春即休喪闋二月中旬發明州初夏著博多本朝觀應二年也龍山見喜及還相伴上洛直抵天龍拜觀夢窓國師國師欣然慰勞是秋國師遷化眾僧分散及獨留塔下心喪二年龍山住南禪屈及充書記結制兼拂僧問唱誰家曲宗風嗣誰及曰揚子江頭楊柳春楊花愁殺渡頭人其夜果有不意之變寓少林院竺堂瞿公主萬壽招掌紀綱職解遊方四年乙未寓攝之棲賢住持教外藏公明極上足高識博達名

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十八

○四

重叢林晝夜道話外稱高論貞治四年大中臣宗泰虛丹之天寧席延請以及有緣于山乃往而住眾僅十餘員風規凜如應永二年遊化紀州運勝居士擬龍門菴請及駐錫四眾競集夏末示衆曰龍門一衆玉稜層內證還如寒谷水不向鑊湯爐炭避頓明心地絕炎蒸仲秋將赴關西路經藝州右近將監平春平川小早氏建佛通精藍雷及爲第十一世取衆立規一如天寧八年遊播州雲門寺愛其幽邃卓菴曰景德冬依檀越請還佛通年已八十餘雲衲千指別置向上菴以容方來上堂說法四序無闕十一年退居肯心



菴痛斥參徒商量浩浩地結制示衆曰老能題壁左何物古佛趙州只道無爲報祖師門下客萬般不若青盧都十四生相國義持源公遣專使求法請及述勸發文示之登歲源公命州守平則平請及入京及到山崎源公命高山細川二臣迎館于伏見藏光菴源公往謁其欽命鄂隱齋點城外寺院五所令及擇而居及辭不就自寓等證院源公參見問法要及曰此事元來不從入得今遠遠地喚老僧來將求什麼雖蒙所問都無一法爲公可說亦無一事爲公可付直饒說得浩浩付得密密於公分上翻成剩法是故

日本書紀 本朝書紀卷之三十八

五

曰從門入者不是家珍還會老僧不說底道理麼若能會得佛語祖言皆爲施設又出金剛經請爲講說及舉經曰會麼二世諸佛及一切法皆從此經出未審此經又從那裏得來世尊飯食已訖敷座而坐未審須菩提讚歎曰希有世尊善護念諸菩薩善付諸菩薩且道護念個什麼付囑個什麼世尊一曰跏趺坐文殊白槌曰諦觀法王法法王法如是世尊便下座正與此段一般於是見得餘段自然水到渠成不用費力卽與老僧不說底道理如合符而已源公信受都城縑素競求拜謁及堅拒不接卽背道去

至紀之禪頭寺源公遣使賜紫方袍回天寧任性住持中夏謂衆僧曰我在此不久秋來必行脚去矣道俗聞之受衣蓋者不可勝計八月望日及扶杖登山定茶毗場其夜侍僧夢殿梁折翌日示小疾二十四日自書楮銘曰學得無爲日心空及第時胡笳十八拍箇外復生枝二十五日施主設齋及示衆曰在昔純陀獻如來最後供養得福無量今日飯我且道有何所得良久曰有利無利不離行市齋畢謂左右曰待我氣絕卽時開棺其移刻莫刷髮莫澡浴其營忌齋晝夜禪誦如我在日卽說偈曰出行得好日快馬

日本書紀 本朝書紀卷之三十八

六

痛者輒萬回瞻其後雲門豈爭先脚跌而化實應永十六年八月二十五日也顏色微笑宛然如右手足屈伸不異生時門弟檀越如法茶毗分靈骨塔於天寧佛通兩寺平日所剪爪髮皆生五色舍利遠近士庶拜瞻嚙嘆保齡八十有奇歷臘七十有坐有語句若干卷及冥明鈔一卷勅謚佛德大通禪師贊曰弊之善財必志於教入宗門者以悟爲志古人不惜身命險山渡海擇師參究至一得悟則十方世界一時開發千佛妙玄說諸儒性理談分明歸於掌中茫茫天地間何物加之愚中禪師以聰明才養志

於茲遊入諸夏即休言下得出身之地歸隱乎邊鄙  
裴寺守金山遺囑說源相國則不視其巍巍然橫示  
宗乘去華居儉確爾克終吁五濁塵堪世見摩尼寶  
珠哉

攝州廣嚴寺沙門以倫傳

釋以倫字無等嗣龍山見禪師之法出世攝之廣嚴  
退居建仁護國塔下道俗歸法者衆檀越爲考妣設  
齋請倫陞座問答罷過云真性無染本自圓成得之  
於心超越十聖二賢之上失之於身沈淪四聖六凡  
之閒所以道但願空諸所有勿實諸所無若能於是

日本僧尼 本朝高僧傳卷之二十八

〇七

會得或時現宰官忠孝俱全或時爲隱者身親兼備  
或時悟法華三昧捨方便示實相或時入觀音普門  
開慈眼視衆生此是自己本有事如珠走盤似鏡  
像頭頭上顯露物物上現成淨裸裸赤灑灑隨處遊  
戲任意自在說甚生於涅槃菩提煩惱正無塵時如  
供養一千僧聚會四部衆畢竟功歸何處將此淡心  
奉塵刹是名爲報父母恩以八十一歲歲于所住

防州正法寺沙門智碩傳

釋智碩字大圓不詳姓氏防州人在幼閒雅不羨處  
俗及其爲人投州高山寺茶山仙公削染得度服勤

不袍造詣日深承山密記巡遊京師掛錫於建仁東  
福間一時諸老見其有發發之機舉任高職久而歸  
國開法高山視其廢壞事於建興殿堂復舊室多  
衆結制上堂古佛家風豈到今心頭斷絕始安心三  
千里外有知己熱喝喚拳不可禁示衆云鷲嶺一枝  
少室禪古今天下未曾傳向漸愧裏通斯意在樹  
頭月在川應永康辰歲豐後府守大友氏啟碩名於  
朝聘以萬壽鉤帖既下京輩列剎館牘胥慶碩峻拒  
曰夫高山以先師塵履之地承乏而繼掃誠分之宜  
也蔣山乃海西望制而龍象之所踞蹈也吾儕可敢

日本僧尼 本朝高僧傳卷之二十八

〇八

冒進乎況又出世非老夫之志也其徒哀告而不從  
後開正法寺掩關靜晦某年終於所住碩純誠泛受  
發於天性逢入則無尊卑疎戚溫顏軟語禮敬如一  
臨法則如銅崖鐵壁不可攀躋矣夢窓國師虛天龍  
之席招茶山仙公堅臥不起大友使君請碩居謙高  
道求寺貪利者讀此師資之風豈得不池其類乎

京兆南禪寺沙門梵芳傳

釋梵芳號玉晚稟法普明國師性在隱逸沈退守志  
同袍勸開法謙辭不就大將軍義持源公拒其風俗  
歸依特渥強起住南禪列剎欽高儀晚構投老菴謝

事而休。因有作曰：軒前脩竹綠，婆娑玉立三竿不用多。好是滿山風雨夜，虛心相對亦無他。一日讀金剛經，至于若爲入輕賤，是人先世罪業應墮惡道。以今世人輕賤故，先世罪業則爲消滅處。忽扑躍曰：吾年過古稀，於其中閒經幾般事，無如今之喜矣。乃脫紫服，向佛誓曰：自今而後，不可出頭叢林。苟違所誓，則生受惡疾，死墮泥梨。又作偈曰：經過七十餘年，事罷辱悲，懼夢一場若得。山中安樂地，看雲日日快移牀。留呈丞相義滿源公父子并同門諸老杖錫徑如江州盤結艸庵，歷年而寂。芳善丹青，好畫蘭於今往往。

存焉

贊曰：夫沙門者，克己復原，布褐其服，山叢其居，齋鉢時中，不微其外，如斯而已。如何末法以來，自他宗乘駸駸然馳名利場，割據寺院，蕩流華靡，澆弊百出，特以爲酷焉。哥哉！玉晚師此其志操蘭香雪白矣。

能州總持寺沙門明見傳

釋明見字，不見雲州三澤人。姓源清和天皇後胤也。七歲喪母，有出塵之志。九歲禮雲樹孤峯明和尚，受別解脫戒。十三入郡之妙音院習學。嘗登高野山，誓不下麓。值凶母，追忌始歸鄉里。父正善請古劍許。

禪師，墜座說法，見聽其提唱，慕佛心宗，因欲捨俗。父拒，不許。二十二離父喪，闕下東關拜大拙能公於圓覺，剪髮進具執侍。八年又參大徹令于如意。大源真于洞谷古劍許于高石，邀無所契。謁通玄和尚于丹之永澤，便問末後一句。始到牢關時，如何？幻曰：我亦不知見曰：大善。知識豈有恁麼話耶？幻打曰：道甚麼？見亦不契。一日聞二僧商量，則監院參法眼，因緣忽然徹底，如獲舊物，深藏不語。侍幻巾瓶十八年矣。幻知其真，證付禪版。几案辭歸桑梓，結菴坎止。應永二年出主，越之龍泉，端居二載，創興禪精藍，大開爐範。

銷鎚四來丙戌年受總持之請，庚寅年遷丹之永澤。一夜山鳴，谷答聲如誦經，一衆怪之。見曰：我住世不久，無幾示微疾。五月晦日修布薩，不與常異。六月三日端坐而逝，壽六十四，臘四十一。

城州大智寺沙門理有傳

釋理有字，大有金氏，興州人。也在始言時，謂父母曰：我前身良辯也。父母異之。捨而出家，受業於江之青蓮寺。性慤聰察，早覽羣籍，壯歲知賓慧日，侍香龜谷去。遊教肆，研究性相淵源。有一禪僧問曰：聞梨遊聽諸方，還知作佛麼？有不知所對。僧曰：欲得作佛，須究。

自己自退心愧直往。但州參月菴光禪師于大明菴令看。卽心卽佛話。有精修辛勤忘廢寢食。一日感手中香。合自開。忽現舍利一顆。光彩耀耀。譬爾發悟。詣室呈機。得菴許可。首出世。但之圓通。次移大明。後往城州。和束創百丈山大智寺。爲第十代海東超風滅後勅謚大觀禪師。

### 京兆妙心寺沙門宗因傳

釋宗因字無因。尾州人。姓平。荒尾之族也。九歲上京。投東山天潤菴拜可翁然禪師剃髮。給仕十七。爲大僧。天資高潔。不事世緣。善熟杜詩。又精周易及翁住。

建仁舉爲請客侍者。翁策示云。雪峯云。僧堂前與你相見了也。烏石嶺與你相見了也。望州亭與你相見了也。這公案因侍者如何領略。若於此著得一隻眼。他日建法幢立宗旨去也。尋掌紀綱。常抱參方。志同袍。胥議將任。後版因辭不就。屬授翁新公問法妙心。浸養其風。振衣隨衆。參請久。勵果造大休歇之地。翁付法語印之。翁滅後因踵跡住持。且妙心寺自國師開創以降。唯以個事爲要。而不拘威儀禮典。至於因住叢規全備焉。於是湖海禪客翕然歸德。雲州太守藤重通波多野氏遷代歸曹洞宗爲越之永平寺外護朝。

觀在洛陽參因室。頗有省處。創退藏院。請因爲第一世寄。腴田若干畝。以充衆供。丞相義持源公聞其偉望。欲迎請相見。因辭以老病。俄命駕投老於攝之海清寺。作山居。偈曰。居處幽邃。遠朝市。不聞人間非。與是煙引淡墨。山橫屏。不知身在畫圖裏。應永十七年。洛之大德虛席。專使齋疏。堅請待駕。因無已。入洛。先庚三日。俄得微疾。不及滌篆。而以六月四日泊然遷化。春秋八十五。夏臘六十九。門人分靈骨塔于海清及退藏焉。

### 京兆南禪寺沙門宗蘭傳

釋宗蘭號香林。久依月菴禪師于但之大明寺。問如何是衲衣下事。菴劈面便打。蘭曰。臘月火燒山。意旨如何。菴曰。再犯不容蘭。不契菴作。偈示之。久之契證。蘭寫菴照容。請贊菴乃題曰。三關把斷撥轉一機。如龍得水。雲騰雨飛。枯樹吐英。呈瑞色。叢林無處不光輝。初開法濃之大圓。興洛之萬壽太德南禪。晚居真乘院而終。

### 相州最乘寺沙門慧明傳

釋慧明字了菴。俗姓藤氏。相州槽谷縣人。周旋巨福瑞鹿間。歲宗匠之門。後參通幻和尚于永澤參峨山。



和尚于總持聞山上堂舉古人得太休歇因緣搭然契悟呵呵大笑曰正是諸佛本源卽是慧明自性也山曰你見什麼道理明曰說似一物卽不中山便打明休去山遷化後再謁通幻舉居啟首遂付宗印住江之總寧寺禪風丕播應永元年明歸粉里大田氏尊信相攸於狩野建最乘寺延之雲水大會鬱成鉅刹其法規一取制永平上堂僧問如何是慧日光輝明曰如人夜間背手摸枕头僧曰如何領會明曰天曉不露夜半正明奇栖居士問道人命終多得自由却有旨訣麼明曰有居士曰作麼生明曰待老僧久

日本集述

本朝高僧傳卷之二十八

○ 圭

去

卽向你道居士拜退明在鎌倉時西欄雲和尚神足空叟體公赴天皇請建長圓覺兩會下僧作偈而送明預衆曰偈伴經過異類中耕雲種月起家風靈機豈墮今時路蘆雪交光似不同明以應永十八年三月二十七日化於所住春秋七十五有代語錄二卷宏智小參鈔二卷今江左以東郡縣閭巷洞上禪刹基布櫛比皆自了菴而分焉

贊曰余志學之比屢遊最乘寺而無意問師之事蹟矣因修此書兩大登山生緣姓氏記畫像上而古記失矣後於江之青龍寺求得行實其小參鈔於永關

求之其跋曰雖深切懇望之人不可使之容易覽焉蓋有曹洞宗旨五位君臣重離疊變寶鏡三昧等之祕訣提挈宗綱曲暢審盡矣欲到其家者見此鈔則思過半矣通幻下有十哲禪師爲首

### 江州曹源寺沙門禪英傳

英字靈仲氣稟睿秀才兼品藻歷參洛之諸刹己見未忘後歸寂室輪下棄平生所學單單要究玄微室授趙州狗子無佛性語策以法語英從此行住坐臥痛著精彩松嶺秀公在備中時招英居松泉菴往來道話英誠實請益忽徹無字因呈偈曰慶喜稟

日本集述

本朝高僧傳卷之二十八

○ 古

承

迎葉尊破菴痛懇老松源我今參請猶過彼廣大深恩超厚坤乃回永源告所悟室喜印之付自贊頂相曰衆角叢中得一麟隄巖老衲慰孤貧因思歲晚天寒日少室峯前立雪人貞治年中丹之大中臣宗泰招住金山會及愚中歸自支那英以舊友與檀越謀請及公補其席自往江州開曹源寺爲第一世狗同門之請遷永源英名聲素馳江湖是以海參津集左丞相義持源公遣使諮心要英進法語曰萬法歸一一歸何處這個是三世諸佛骨髓六代祖師眼目百千法門無量妙義從此話頭上流出將來照映古

今燦破天地只將此公案切置鈞抱語默動靜歷緣對境處逼起疑情究來究去則必有大悟大徹底時節夫謂之橫按鎖鑰截斷魔軍過量大人者也英示寂後源公畫英照容供養于府第仲方伊公奉鈞命作之贊曰短衣勃窣懶髮婆娑甚無準則却有諸訛獨脫抹過生涯天魔牽不起等閑拶空禪縛佛祖無奈何這般不受人拘束底褊局老骨過其空拋向猿崖鳥道之外一任終身雨洗風磨何故玉帳之傷黃閣之上描画將來禮敬頗多咦一釋迦二元和三佛陀賜諡圓智悟空禪師

日本撰集 本朝高僧傳卷之三十八

○ 十五

### 濃州大安寺沙門常新傳

釋常新號笑堂姓橘攝州兵庫縣人年甫十二剃髮稟具肄業洛之建仁涉歷歲月學通內外舉擢記室去參月菴光禪師于大明及菴順世大有踵席令究藥山見月因緣一日方丈災一衆蒼皇救火新奔次喫顛擲破瓦盆豁然開悟有公見而知之不覺踴躍曰方丈燒損吾總不憂且喜今日得人新抵濃之鵜沼創大安精藍海衆稍來盈一手指自肖贊曰大安樂界門風廣大天上人間縱橫自在數載遷大明寺應永十八年七月九日化世壽五十法臘二十七勅

### 諡圓應大機禪師

#### 京兆大德寺沙門宗碩傳

釋宗碩字德翁濃州弓削縣人童齒依大德徹翁亭禪師圓具已後啟磕諸方之門戶還侍徹翁看香嚴樹上話晝夜危坐廢寢忘食如此者七年肚腸潰爛臭氣外發一日條爾契悟入室呈解翁告衆而證出世大德後居長勝臨叵書偈曰鍛佛鍊祖七十六年一機瞥轉虛空穿天

#### 濃州妙勝寺沙門圓心傳

釋圓心字月堂播州人弱歲禮曇溪芳公於州之明

日本撰集 本朝高僧傳卷之三十八

○ 十六

禪寺創染得度依附有年參無雲天禪師于法雲窰明己事歸省曇溪溪以其得旨於無雲送附嗣之又依聞溪聰公侍于建仁湯藥調特峯奇愚中及二老共稱器掛錫東福居第一位真巖古公住建仁延心首衆冬節秉拂機辯從容衆會側聽有檀越請開法濃之妙勝遷越之龍溪單丁滾居而德光難掩尋徒盈門心嘗作偈掛旦過壁以示行脚僧曰參禪學道無多子喝下棒頭雷電奔絕後再甦入魔界倒騎佛殿出山門年七十餘化于江之智海寺

#### 武州國濟寺沙門令山傳

釋令山字峻翁武州秩父縣人幼慕秦關不關世務縣有了機道人時稱飽參山十三歲隨執薪水役學出塵法十六祝髮登脊山受具足戒歸參洞翁禪德于大陽山掛搭野之長樂隨衆八年而胸次未穩盡取書籍或焚或與人而曰吾今拋軀徧問諸方若不明大事永不休見乾坤長公于赤城山便問生火事大如何用心坤曰怎麼問來是何物山不契去參拔隊勝和尚于相之須須登山便伸前問隊曰怎麼問來是何物山又不契服勤數載精苦勵節非人所堪時時叩頭流涕自責隊移居青山山又從侍一夜坐

日本書紀 本朝高僧傳卷之三十八

〇七

睡驚寤將起忽然徹證呈隊偈曰參禪學道似吞劍徹骨徹髓圓相鮮李陵元是漢臣下虛空放火燒黃泉徹之酬對如響隊尚未許見大拙能禪師於上野寶林曰香嚴樹上話請和尚代一轉語拙曰樹上則且致樹下作麼生山作退勢拙曰後園驢喫草意如何山便豎一指拙曰者漢七顛入倒山因語拔隊示衆拙嘆曰實本色宗師也汝速歸親炙山輒却回青山隊問寶林有何言句山舉前話隊點首之山頌香嚴樹上話曰勘破六門如盲聾東西南北路難通鐵牛吼落青天月無齒於菟咬木虫隊見領之山辭勘

通諸方謁月堂心于越之龍溪特峯奇于丹之慧日通幻靈于永澤皆承稱賞後回粉里菴居成木山仰獵之疇捨業受戒歸仰者衆移居金峯山一室蕭然過十餘霜有偈曰坐斷千差通十方任緣隨性宿閑房百花叢裏出身路萬仞崖頭選佛場喜心忘雲吐月利名夢覺席侵霜山林自是家風在百鳥不來春日長及隊開鹽山招居知藏寮職滿旋成木菴至德四年正月山夢明月落西山謂左右曰向岳和尚順世不久二月初吉果告隊違和山急趨省親近奉養隊激揚宗要面付印囑曰子緣在武州住香積菴

日本書紀

本朝高僧傳卷之三十八

〇八

三年之後有同袍請當補此山及隊遷化徇命住香積於是遠近緇白受戒受衣結法緣者不可勝記康應元年秋果得同門請住向岳雲堂之衆盈八千指刑部侍郎源信成武田氏相繼崇信受菩薩大戒翼年春慶讚大雄殿源刑部率僚屬護法延闔國道俗屯聚如雲山陞座說法聞者信伏謝事返武州開廣園院於橫山長井道廣投誠歸仰吏民戮力興建聲飛一年秋上杉憲房於武州番羅縣建常興山國濟寺請山爲開山始祖會中龍象有一萬餘指猪俣石典廩柳光嚴寺致之若武之東皎瑞巖長契野之西

方報恩諸刹所在檀越請山爲開山祖應永三至後  
龜山法皇降雲州雲樹之詔山辭以老病六甲夏國  
中大旱民心如焚山作祈雨偈曰薄福衆生枯渴恤  
針鋒影裏摧殘殘倒騎鐵馬入東海擊碎驪珠灑雨  
飛應時雷雨大對山臨終書偈辭衆坐脫勅諡法光  
圓融禪師

贊曰萬治庚子夏余遊歷東關抵淡谷國濟寺偶逢  
住持於門外就尋峻翁禪師之事曰無行狀之記因  
開影堂肅余而入其堂疎隘中安尊像衣色古不分  
威嚴逼人實有道之相也謹消二拜而出

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

○ 九

### 京兆南禪寺沙門元禮傳

釋元禮號履中參東福南嶺越禪師究大事因緣又  
觀敘海游泳南北博辯捷機名高當世在天龍時講  
金剛經輩下尊宿陪其席一日同諸師赴丞相義持  
源公之第時廬山寺明導華王院主在座共敘門之  
義虎也明導問曰達磨大師生來自在未審分段變  
易之間居那個生來禮曰吾祖已出陰界何涉一種  
生來導問指源公曰不涉一種生來意作麼生禮曰  
八角磨盤空裏走禮權管諸刹升至南禪滅後塔于  
清泰院

### 攝州護國寺沙門得仙傳

釋得仙字名山姓平江州人幼歸佛乘年及十九禮  
洛東大辯訥公落髮慕戒服侍三載去參寂室光平  
心齊二大老杳無所證往上海吉祥寺依大拙能  
和尚會裏久之告辭拙送出門仙轉身合爪拙忽把住  
曰燒作一堆灰後向什麼處安身立命仙於是省  
遂見白翁雲于積翠謁不昧志于真如後從大徹令  
禪師於濃之妙應注念大事如喪考妣聞大徹冬至  
示衆舉洞山曰有一物上拄天下拄地黑如漆因緣  
條然大悟出衆禮拜徹曰汝見什麼道理仙曰獨掌

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十八

○ 十

不浪鳴徹曰未在夏道仙便擲下坐具徹曰如是如  
是親附六年得徹衣法徹指見大乘祖舜和尚舜者  
明峯哲公之嗣一時宗匠仙至請益日得鍛鍊康曆  
二年創攝之護國請大徹和尚爲開山祖徹開堂後  
命仙禪席法規嚴密悉納歸集丞相義滿源公聞其  
法幢之盛將使護國準于五山仙告情嚴辭應永初  
振錫東遊寓上海杖林山肯下野宇都宮檀越建在  
林精藍請爲第一祖四年春住越之立川五年秋上  
能之總持會值叢山祖翁三十三回忌設齋賑衆事  
竣歸護國十五年正月走大徹之喪再住立川解印



回護國源丞相招仙問法仙示直說源公不契去不再見總州太守赤松性松居士以播之佛果寺延之仙以老辭十七年秋領能之永光住職三祀遷濃之妙應桂林檀越發使而請無已再住癸巳正月庭前樹無故忽枯衆不知由仙曰世尊滅度雙林變白當知老僧住世不久矣二月示疾集徒分遺衣物移榻於嘯虎亭起居如常三月十七日剃髮湯沐細書家訓翌日告衆曰吾明日行矣至期侍僧請偈仙卽書畢拋筆而化應永二十年三月十九日也世壽七十九法臘五十一茶毗收塔于本山西南隅

日本書述

本朝高僧傳卷之三十八

〇 壬

京兆天龍寺沙門周仲傳

釋周仲號無求不詳族出甲州人也幼讀魯論一聞長不忘志慕出家投夢窻國師命讀琅巖集憶誦無勞國師器之下髮累戒練磨稍久出問諸方回來受國師之印有一檀越新造精藍欲仲爲開山之祖仲不受令爲二會之下院扁曰環中自守資壽塔一時遊和州立野郡主規信福寺以居焉仲有詩曰棲息不應過一枝雲林隨處是生涯昨非今是俱忘却只聽松風十二時後歸浴之龜山側卓大慈菴假居奉鈞旨住相國和恩中及公偈曰曾訪大唐國裏禪林

翁室內祖燈傳英檀特製金襴賜振起類綱祖右肩伸天生慈仁出外則持阿堵物以與丐者若有得嚙施必分贈獄囚路逢棄兒攜歸募入乳養日給二百錢以成長焉如是者數次人崇其德云應永二十年十二月八日卒於環中

但州宗鏡寺沙門明昶傳

釋明昶號金山山或作峯姓藤藝州人也母夢吞朝旭而妊及生名焉稍長入洛拜慧日山大道以公爲師參學年久禪教該貫爲衆所識南遊往元旣還出世董歷播之圓應淡之安國駿之清見之諸刹但州檀越

日本書述

本朝高僧傳卷之三十八

〇 壬

創宗鏡寺請旭爲開山鼻祖後住東福寺法幢之盛不滅師德臨終有偈曰法界卽五蘊五蘊卽法界法界無可說五蘊無可名次也無次生也無生阿呵呵時應永二十年十一月十二日也世齡六十五

本朝高僧傳卷第二十八

音訓

賈莫侯切交汧胡大切裴蒲枚切耽都含切矯吉了切

齋呼括切泚此禮切穎蘇朗切徹古堯切駸七林切

杭牙八切髓息委切鵲杜兮切肚董五切於菟上音下

同都切楚人聲呼回切祖尺亮切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鏤

本朝高僧傳卷三十八 茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本撰述 本朝高僧傳卷之三十八 ○二三世

本朝高僧傳卷第三十九

濃州盛德沙門 師鑾 撰

淨禪三之二十一

京兆南禪寺沙門圓伊傳

釋圓伊字仲方不詳世譜長州人也年甫八歲拜南  
嶺越禪師於筑之聖福髻髮隨侍長往南都從西大  
寺高湛律師聽五篇七聚入洛參禪林諸老及掛錫  
慧日分座接納應永九年開法播之法雲辦香供南  
嶺一居五載移住廣覺遷洛之建仁元且上堂以拂  
子打圓相曰看看太功德天清淨摩尼毒珠忽現東

日本書紀 本朝高僧傳卷第三十九

〇二

山拂子頭上放聚雲光明照徹應利土隨衆生欲雨  
一切害其根性所宜莫不滿足其一「先明能具足  
微妙音聲演說新年佛法諸人還聞麼收拂良久云  
元正嚴祥萬物惟新第五橋落慶供養其觀說曰安  
寧世界南瞻部洲大日本國山城州平安城東有橋  
橫二水交流之要衝當九重第五之通衢故名之第  
五橋比年以來積潦漲沙派分岸圯河流失古道橋  
梁亦朽壞往來士民久困濟涉爰有信心施者慈恩  
出淨財二百萬以集巨材又有設計之沙門慈鐵化  
緣善巧克幹其事凡人之所難談笑而成故京師衆

庶靡然起信富者施財貧者施力萬工舉斧神人贊  
殺始乎戊子秋成乎己丑春其長也以文計者八十  
有六其廣也以尺計者二十有四柱欄宏壯勢將飛  
揚聞見緇素莫不隨喜焉於是慈鐵捐吉日應永十  
六年四月八日欽聞于朝廷嚴奉鈞命來告建仁住  
持比丘圓伊曰第五橋乃地接寺門爲東山一境慶  
讚新成非請和尚而復誰求乎因率現前一衆就于  
橋梁之北設法座唱宗乘以當眞法供養大凡爲地  
丘者以慈悲利物爲務是以莊嚴殿堂修治道路往  
往出乎浮屠氏之手況作橋梁吾佛置之八福田一

日本書紀

本朝高僧傳卷第三十九

〇二

數也是故持地菩薩往昔在普光如來會中爲比丘  
常於一切要路津口或作橋梁或負沙土如是勤苦  
經無量佛出世毘舍浮佛時世多飢荒持地比丘運  
太神力拔其苦惱毘舍如來見其功德摩頂示平心  
地後即心開見身界二塵等無差別得無生忍成阿  
羅漢回心入菩薩位中及蒙伽出世統御印土列于  
楞嚴會上自說其曾因皇位妙圖通其餘支竺扶桑  
從事于斯者布在方冊不遑枚舉由是觀之慈恩之  
施慈鐵之勤不可勝稱焉伏願天界仙衆水府龍君  
雷公電蛇海若河伯城隍道路幽明神祇各不失其

衛職積功累德共天地相始終無有傾斜淪落之慮  
專冀聖天子永鎮乾坤賢宰相久保祿位萬姓以  
本危齊濟仁壽之域三有九類離苦煩到安樂之鄉  
記得福州洪塘橋上數僧列坐有一官人問曰此間  
還有佛麼僧皆無對後來法眼禪師代云汝是甚麼  
人伊曰數僧無對猶可最苦法眼饒舌即今問者裏  
還有佛麼即答佗道今日四月八日後奉旨陞南禪  
暮年退居東山長慶院應永二十年季夏染微疾門  
人竊驚謂伊皆應需八月十五日書偈坐逝春秋  
六十矣

日本書紀卷之五十九

○三

### 江州退藏寺沙門秀格傳

釋秀格字超漢不詳其姓其許志操貞亮痛嫌世緣  
年垂志學參寂室先禪師于江之永源寺以躬服勤  
須臾不離輪囷周旋無事不辦而面無矜伐之色口  
絕勞苦之言室令看僧問古德溪山巖屋還有佛法  
也無德曰石頭太底大小底小公案格在寂衆請久  
之契悟室付法語印可之格後開退藏寺於江州爲  
第一世應永二十年四月十九日寂教誡圖照佛慧  
禪師

### 野州淨因寺沙門方喬傳

釋方喬號律仙下野州人世姓藤氏結城太極政光  
七世孫也父園田光氏禪佛求嗣母夢神人授審察  
受而收懷覺即有妊在胎十三月建武元年中秋夜  
生三歲其父歿于軍行喬六歲聞其緒由傷父非命  
而求出家母忻然許之投本郡鉸阿寺明範阿闍黎  
執童役其性俊偉墳誥粗習記十六落髮登睿山戒  
壇受木叉歸就範浴兩部密水遊東關講肆究華嚴  
法華俱舍及律部十九忽謂曰三學雖富心地不明  
以何出離生外乎更衣依大喜忻公于圓覺涉五寒  
暑無所悟太衆復卷己公于常之法雲卷日久了燒

日本書紀卷之五十九

○四

了且道那個是上座性喬言下頓悟親服三載巷謂  
日子再來人必與宗乘厚自保任喬登野之補陀山  
居中禪寺三年之後下山省母鉸阿寺住持榮濟請  
仙於莊嚴室殿講法華自率徒衆每日講經是國內  
講經之權輿也徇野州前司小山義政之請講四十  
二章經而感天華亂墜遠近緇日歎未曾有喬又寓  
常之筑波野之樺崎及洛山三閭藏經性素愛丘壑  
永和三年相攸於行道山此行基菩薩所開基也石  
山嘈囂喬木秀茂瀑泉巖落常聞窟中鈴音隱隱實  
勝妙幽境也仙附巖架蓬萊蕭然獨坐未幾道俗羣



信或供食或施衣爾欲建精藍而安觀音像作化緣  
傳在傳 勸發檀越四眾隨喜殿堂廚廊工役速成

日淨因禪寺而禪客放省嚮風來止以堂宇塞不許  
參請則皆雷門廊乞受接化爾禪餘爲衆講華嚴法  
華楞嚴圓覺等諸大乘經復建白蓮社兼修淨業應  
永己丑上杉大全居士齋源帥府帖請以豆州國清  
寺仙峽辭不赴嘗於室利殿行基窟之間預度定處  
謂門人曰吾與一大士有因緣滅後葬于茲無何遽  
病吉祥而化實應永二十一年正月二十五日也保  
齡八十有一生夏六十有五有弟子若干人昇全身

日本書紀

本朝高僧傳卷之十九

○五

寔於所命之處樹塔日等慈建長觀堂光公塔塔銘  
以旌其德焉今之傳者全據塔銘矣余居東國時或  
者之徒竊其神稿而遽書叨寫載僧書傳故其誤不  
少別楮質之

贊曰偉仙禪師自敎入禪不摘枝葉直截根源者似  
永嘉師也博綜諸宗兼修淨業者似永明師也得悟  
大光而嗣法佛滿者似臨濟師也日若贊古實不慙  
德者也余嘗陟行道山斷巖疊疊如圍石屏飛瀑湍  
激繞寺而流可謂堂中天地神仙之所窟宅也時經  
季夏而有臘後寒而主盤素肴有江湖之面識因僧綿

服而著歟雷七日拜禪師遺像寫其行狀卷卷而出  
上州泉龍寺沙門審生傳

釋審生號白崖俗出桶姓河內人其爲形質也曾自  
清秀風神俊逸自幼齒有出羣之志及長益堅所全  
剛峰將成佛子暨于禿髮逢麗僧問曰何之生曰  
欲離塵時入此山僧曰愛線牽強佛道懸曠不有極  
省木心奚能修其難行乎若欲求真出家須入禪門  
而遂志願毋滯于此相揖別太生奇其言因訪山中  
舊識鬚髮黑衣即日著鞋杖包直下關東抵於鎌倉  
拜清隱寺至一上人稟具足戒一願密名望尤有感

日本書紀

本朝高僧傳卷之十九

○六

通然非其所慕太禮房州虛空藏菩薩所求得法因  
緣適與一老僧同寓楫而言曰徂日禿坂所邂逅者  
非子乎雖已入禪難遇名師江州永源寺有寂室和  
尚亟行莫後生抵永源屢蒙示誨久之不契辭歸河  
內道經吉野聞風憂作聲恍然有省即歸告寂室室  
日後生安保任以成其器慎勿造次又服勤四載及  
室順世參月堂心公于越後未幾堂化生慨然失望  
會大拙能和尚歸自元國在上野吉祥寺盛唱千巖  
之禪生聞得若渴驢赴水頃謁呈所解拙不肯更令  
看德山托鉢話生宴坐一室不出戶者二年及大拙

赴請圓覺生遊叩於中路語亦不契尋入日光山人  
煙霞絕巖巒峭峻山頂有湖水幅員四十里生止於  
湖上自詠日不明天法誓不下山一日早間煮粥偶  
粥鍋爆裂豁然大悟作偈曰太平廣澤開房裏今歲  
日光巖巖邊不覺同生同處孤峰拍手嘯青天時  
年三十一趨告大批拙便印可且謂曰古人得法之  
後潛處山谷保重斯道暨霜露果熟人天推轂無已  
而應汝自今十二年後自詣晦慎勿開法從此一蒼  
雲遊勘驗諸方謁見勝枝隊奇特峰先月菴靈通幻  
融無著武藏達西堂土佐林藏主等五十五員知識

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十九

〇七

所至虛左以待後寓筑之正傳精舍四來乍集棄本  
自高麗寺遊化若州又抵武州受秩父某請住興禪  
同郡日奉氏迎遷圓福上野郡波大江氏創泉龍寺  
講生為開山第一代法席雄盛眾盈五千指武州圓  
福有一處女稚奇疾命在旦夕俄發狂言求生法請  
父母入山號泣懇求生書與之其疾乃瘳郡有一僧  
淡居習定談笑之間乍外乍生有時逾旬而蘇道俗  
異之生召至對驗遂不能化婉謝為弟子有異比丘  
極其頭顱便出舍利巨細衆然生待來講一陷陷倒  
自斃而後舍利不現越後檀越藤氏設大會齋講生

摩訶說法雷滿旬餘邑有神祠安表冠木偶從祠前  
過者多為祟生至削冠圓頂背書法號從此往來始  
安一日在圓福示疾集眾囑後事書偈坐化實應永  
二十一年九月初七日也春秋七十二夏臘五十三  
門人樹塔曰法雨丙午歲丞相義持源公追慕生德  
聞于朝廷賜諡普覺圓光禪師

薩州福昌寺沙門真梁傳

釋真梁號石屋薩州伊集院人姓源島津忠久之後  
裔也母阿多氏夢白木大士降臨尋而有梁及生詭  
異年甫六歲投本州廣濟寺從僧讀經能記不忘一

日本書紀

本朝高僧傳卷之二十九

〇八

日族長圓鑑召祀酒器梁掉頭日如來金口嚴制豈  
可犯乎鑑喜曰真出家兒也十五上城都禮南禪蒙  
山明公為師連年落髮進具東陵瑛公寓西雲菴見  
其挺秀授以今名出講中巖和尚於建仁命侍藥局  
職滿與法兄虎森到江之永源參宋室禪師看趙州  
無字久而不契及此山在公董南禪招掌賓客應安  
四年詣丹之九世度策之志賀島禪道果於文殊木  
土夢太士授以福玉二字梁曰太士曰我所願者無  
上菩提之法世福者非所欲也太士曰無誑第持太  
作時當自知之覺而歡喜經兩載又夢初祖告曰時

至矣。母滯于此詰朝。下僧持渡蘆像。至宛如所夢。乃傾囊贖之。即日發足往泉之高賴見古劍訥公機語。贈合參丹之永澤問通幻禪師。曰生以來到來時如何。幻曰把將生以來。梁無語從求。拈搭合看。天台韶國師偈。梁坐臥繫念。幻問曰。既是心外無法。爲甚卻曰。滿目青山。梁於言下的然契悟。乃指面前曰。滿目靈幻。冒之。梁尚服勤益造密旨。一日幻問曰。觀音菩薩爲甚。害冠戴彌陀。梁便著帽出。太幻呵呵大笑。聆大柑能禪師。莊化東野。永和初杖錫依輪下。拙編辟詰問。梁酬答如流。拙極口而稱。及拙住建長辭。畱宇都

日本書紀

本朝書紀卷之五十九

〇九

宮翻閱藏經。涉五寒燠。幻摩總持之誼。招梁偕行。付梁。以表信。明德元年。牟島津大道居士創妙圓寺。請梁爲第十一世。應永改元。薩州太守源元久島津氏建梵刹。梁爲開山始祖。梁揭以玉龍山福昌寺。標符日所夢也。龜尾隨風梯山。航海東至。一千五百指鐘鼓交鳴。規繩井井。成一方望刹。開堂祝聖。嗣香爲通幻。藝向僧問如何。是佛法太意。梁曰。後崖竹筋鞭。僧曰。和尚先住此山。先住梁曰。用人境作甚。應僧曰。築著磬著梁。便打常樂韶國師偈。以接學人。復謂徒曰。縱使不得一個半個。吾家種種地。而盡不可以藥水銀。

當九轉丹砂。本也。故參徒始苦其難。湊泊久。則眷戀不吝。通幻遷化。後有冒稱傳法。修名執刺。通謁者。梁日獅子窟中。無異獸。若其真證實悟底。如兩鏡相照。豈瞞得山僧耶。逮出來相見。下一勘過。其掠虛頭之輩。匿跡而太。梁以香片與尼智泉。泉珍藏者久。化成舍利。光彩耀目。泉爲未曾有。持以白梁。梁勵聲曰。日這泉老婆無令妄傳。有就梁受菩薩戒。僧梁授。從上相承血脈圖。一日其唐還。回祿其圖。毫不損。十五年秋。住總持周歲。而歸。梁自畫肖容。竹居猷公請贊。卽書曰。六十六年何所成。進前退後太。僧生松風江月。

日本書紀

本朝書紀卷之五十九

〇十

夢回本。破曉青山島。一聲二十三年國內騷擾。梁避亂。如作之坪和郡。守某建西來寺。而居。癸卯歲。值通幻先師三十三回忌。率衆屈永澤設萬僧會。謂衆曰。我保殘喘。老正期。此遠忌也。今願已滿。吾當去矣。沐浴更衣。恬然坐。蛻。壽永三十年五月十一日也。壽七十九。臘六十四。廿本風吹。林木折。諸徒奉龕茶毘。舍利綴牙齒骨片。平生所積念珠不壞。塔于永澤之側。分舍利心珠。葬於福昌。梁居肥之天。神島時住吉明神託。一信士曰。吾祖。三世如指掌。石屋和尚古佛應化也。有神足六八。其中有竹居禪師七世。善知識也。

後果爾也。梁亦通幻下之十指也。南禪惟肖巖公撰其塔銘焉。

贊曰：農夫之播於五穀也，必期四時之候而得其秋成矣。我法之中有種種熟脫之三焉，為學道之序者能近取譬，然教家貴熟時矣。故合教有前番前熟後番後熟之語。禪宗尚脫時矣。歷代諸祖靡不經此時也。石屋禪師自師蒙山明公，而東請西參至三十歲，辛勤不已，通幻之言下，契悟作得洞下尊宿，猶如洛浦之不契歸濟而承嗣夾山焉。若此是因種熟之功而得脫落之秋，與於是開大道場，高唱新豐之曲，今其宗

本朝高僧傳

卷之三十九

○十一

### 能州總持寺沙門善教傳

釋善教號普濟，藤姓，賀州河北郡人。髫年投州之觀法寺，執童役。十二拜淨住寺宋室亮禪師，下髮塗緇。十五稟戒在越前永昌寺習禪策。十七下東關，依天關先于東勝壽福十九還鄉之洞谷，衆中庭可公依附。七年掛錫洛之建仁，從別源旨和尚於洞春，衆中巖月禪師于妙喜巖，見其法器授普濟號。經三載歸淨住司，紀綱以太事未明，衆通幻有尚于永澤待命。

侍司晨昏列衆時，年三十四及幻住總持歷任諸職。前後七年，康應元年臘月六日隨例定坐，半夜觸事忽然開悟起，詣丈室告幻曰：「救即今拾得金針。」幻曰：「如何？」拾得曰：「通身是眼，幻曰：「作麼生？」通身是眼，幻曰：「井觀。」幻曰：「日與驢觀。」井有燈異麼？」日毫釐有燈，幻曰：「這般諸訛善能，可看證明印可。」分座說法出住。賀州聖興寺歷遷數刹，禪客千指，追隨海會，明德奈西冬董能登總持寺上堂，諸佛密印諸祖單傳，太機太用，不存軌則，全放全收，不涉周旋，功轉劫外，妙在體前，不屬明暗，不隨正偏，偏正不曾離本位，無生那涉語因。

本朝高僧傳

卷之三十九

○十二

緣正當與麼時應時節，納祐下句呈露人天卓拄杖。下下云：「皇風永扇，三祇劫佛日增光，億萬年元宵上堂，佛祖傳燈只一燈，燈燈相續，百千燈本光瑞現，威音劫五個山中挑法燈，八月旦上堂三片四片落葉飛，一聲兩聲新鴈行，時節已到，佛性理彰，佛性現前，徧界不藏，山雲冉冉江水茫茫，正不居位，徧不屬倚，正當與麼時作麼生，行履太良久，云：「夜明簾外，主不落偏正，方應永二年秋解印回，聖興寺明年董丹之永澤寺二年寓越之龍泉，七年康辰應願成寺之讀是歲冬又歸聖興與海眾共歲，十二年乙酉越前懷。



越白澤永幸居士創禪林寺請教爲開山始祖永期月剋能之永光居丁年返翼歲同門衆及國守敦請再住永光一夏味終告老退居遂以某年終于舊院壽臘不詳有語錄二卷現傳于世教亦通幻下十哲之一也

能州總持寺沙門妙光傳

釋妙光字明憲出田部氏日州白井郡人也十九禮皇德寺無外和尚鬚髮學禪二十一果具足戒腰包遊方參諸尊宿後抵能州定光寺謁實隆秀禪師研精七載徹本源而呈偈充諸職後任第一座至德二

〇十三

年中秋夜峰召光入室傳付洞下宗乘并法衣明日歸往藤州繼白大歸風開永源大明泉德三精藍及諸書院所到結制集衆既歸粉里結安居寺又捨私財作父母墳院傳親屬悉受戒法以報罔極之恩遷兜率寺一坐二十二年法道大播周防州守北原玄昌居士敬師資禮崇信且厚應永己丑春膺請住能州總持寺能越碩德四來學賓慕其風化會於輪上上堂道者非神通修證之所到禪者非多聞多智之所辨得意通宗何能言詮信手拈來著著無礙且道如何得表裡虛通徹底相應太也還會麼四海波平記

越前九天雲靜鶴飛高既而退休兜率二十二年六月二十二日順然示宗行年六十六坐臘四十七門人等昇全身定于本山西北隅塔曰養老得其法者十二人受戒受業者不記其數焉

越前慈眼寺沙門自性傳

釋自性號天真藤姓家世爲興州刺史性少有智勇又歸心佛乘達一禪僧謹問宗要情示以證道歌法身爲一無一物本源自性天真佛由是起居動靜注念工夫下日出軍場與敵交鋒之際忽然有省及凱歸家抱櫛弓劍直住越前龍泉見通幻和尚呈所省

〇南

幻曰知你所見但升堂矣未入於室也乃請衆堂幻爲繫度授今之名掌東座職作務純信爲衆所稱幻傳實南泉新菴話性盡在庫下辨於百事夜坐蒲團單單參顯幻曰典座近日見處如何性曰被鑑元舊鑑幻曰未更道性擬進語幻即劈口與一坐具性當下領悟禮拜而退或時檀越饋一籠飯幻召一衆指籠問曰籠中有物白如漆軟似鐵喫者則百味具足且道是個甚麼衆皆下語幻皆不宥性開筵其蓋露位而坐幻大笑曰大衆籠中法味遭與座喫卻了也於是下衆改觀性隨檀請住越前宅良相山水清

絕建一精藍丁年其基得大悲金像因名山曰普門號寺曰慈眼法儀偏則青原參徒齊會叢制周備住丹州永澤寺移太平又開隅州楞嚴寺到處熾盛法幢皆題自号曰天真自性不屬正偏牛頭馬面此土西天應永二十年正月十三日罹病集眾遺誡唱化嗣其法者機堂應希明良英仲俊爲稱普都有八人觀世有好事者附益衆說而著洞上諸師傳矣余嘗逢最乘派下宗匠而獲求禪師行狀質問考定以立正傳焉所謂碧落碑無實本者與

越前龍澤寺沙門開本傳

開本號梅山不詳姓氏澤州人齡年授州之律寺務童役稍長影崇從事開遮嫌其拘外貌而不據內心棄往賀州依大源真禪師于佛陀寺夏衣盧已純壹參究修杜多行化米執爨供一會衆真加意接示一日出過曠野見獨鶴在洲中忽然識得本性回通所悟真舉公案而徵詰焉本機辯如流真便印之服侍七載請益厭屬焉出世總持據丈室云彼客三萬二千座我著尋常五尺身今歲曾無癡愛病一禪牀上一閑人越前坂北郡有檀信正壽創龍澤寺招本爲開山祖於是禪侶臻者多僧問諸方匡徒立宗如

何是和尚佛法本曰我不知你僧日和尚無瞞人好本曰果然不知你示衆臨濟三玄洞山五位皆是扶樹宗乘底之屬橫也吾無一玄一位汝等作麼生會自代曰大衆歸堂喫茶大丞相義滿源公聆其義貌命本州刺史請本赴京堅辭不應大將軍義政源公寄莊田若干畝應永二十四年九月七日罹微疾浴罷而出跏坐繩牀普賢會衆吉祥告化

尾州正眼寺沙門祖師傳

祖師字天鷹姓藤賀州人幼歲聰明眼有重瞳有元圓僧見祐曰此兒不凡他日開正法眼大興佛乘

年二十三遊郡之教寺見佛前香烟忽觀世無常義滿義僧經卷論略探玄顯一日喟嘆謂是皆清世務方非見性法更不遊方矣通幻靈禪師於永澤開曰生來事大無常迅速得要下句請師開示幻曰諸家動靜總是總不是你向這裏來得太祐禮拜歸衆坐臥研精衆究契悟得幻印可頂禮而太尾州太守直正聞其道義聘請問法應永元年於尾之下津建寺正眼寺割寄莊田以資檀越延旆爲開山祐奉通幻和尚爲初祖居第二世始唱洞上之宗旨遠近踵法傾衆六載捨任州之白坂結茆茨以居納子數

百跳路而來遂成巨剎號大龍山雲興寺一日罹病遺誠門侶湛然而化嘗應永二十三年正月二日也世齡七十有一法臘四十有九祐亦通幻下十哲之一也延壽初年夏余抵大龍山自寫師之行狀一宿而回

丹州永谷山圓通寺沙門法俊傳

釋法俊字英仲平安城人大將軍源公季子也夙抱出離之志及爲人投某寺圓頂進戒發奔洛下關東參謁諸大老後依天真性禪師于慈眼寺性公示衆舉詔國師真通玄峰頂非是人間心外無法滿

日本書紀 本朝書紀卷之七

〇七

日青山俊聞契悟承性印記如丹之冰上那菴於永谷山修光隱遁多歷年所道香發越細白歸精大木相義滿源公迎請相看禮遇甚至就建圓通寺延爲開山始祖爲置莊田若干畝於是江湖參徒盈五千捐遷往越之慈眼丹之永澤到所審利化儀肅如晚還永谷以應永二十三年二月二十六日述偈而寂余三十年前詢圓通寺主寫禪師行狀其文略而其事實也頃世有好事之者新作行記事涉附會或者不辨采載僧史今之傳據于古實焉

豆州臨濟寺沙門道秀傳

釋道秀號松嶺姓藤武州河越人父名尊嚴母平氏夢一高僧與鬚髮刀宿卽有娠及其誕彌齒牙全備目睛有光父母異之甫三四歲穎敏邁羣父教以二墳轉能暗誦見於儕流活魚盡然傷心不如葷膾十二投豆州走湯山萬代法師爲童役曹源默翁涓公乞爲弟子十四落髮參竺仙仙和尚於建長仙甚器重十六稟戒於睿山參夢窓國師于天龍從侍一載還於東關依實翁秀公于淨智翁責其學解痛加針剌從茲手不把書冊太參復菴己禪師於常州法雲經一冬不契回省默翁思己事未明向觀音像晝夜

日本書紀 本朝書紀卷之七

〇八

禮拜頻禱冥助得吉夢大喜將入支那往告實翁翁強尼之相見寂室光和尚室時在備中慈光寺秀便到彼先見殿裏有觀音像宛如所夢自謂寂室真吾師也因掛搭焉一日謂棟上座曰吾爲一大事不遠千里來和尚尊嚴未發一問未審平生有何言何律日我問今時諸方學者多以疑與不疑爲商量未審那個親那個疎和尚曰疑底三十棒不疑底三十棒秀聞而心服周知不契備前有高菴丘公錯綜內外眼空當世秀參謁丘公嘆曰秀侍者卓識超邁不顯其善戒德威儀助荷佛祖之道實肉身菩薩子也秀

再侍寢室于因州。誓不垢面敷執薪汲室甚歡賞下夕侍坐。秀舉疑底不疑底三十棒語曰當省銘其和尚屈棒。今則不然只要直下薦取。室曰直下薦取底是什麼。秀曰生處事大無常迅速室曰者學語漢秀曰雖然恁麼爭。斯得和尚便禮拜。室即擲住托開曰莫錯舉。人秀當下太悟汗流發背親附久之辭往相州拜謁實翁於建長。自爲知事以報法恩。乃沽寬所持書籍或購香積或施浴室無事不辦衆高其志操夏畢如備後。鐵山誅茅駐錫。楊日牛欄有藤師景數來問道。初精藍於備中。延秀而居。未幾師景行軍。

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十五

○九

戰死其父備前太守景貞繼志崇信益弘基址號貞德寺。居久付與上足空極省寂室於永源庵。雷數日許商古今室付法語印之。秀又備之佛原山卓菴紙衾布衲一坐四載人具瞻孤院上杉天樹居士招人東府議以禪興秀陵拒不就天樹曰余所治內從心所欲願駐蹕錫秀到豆州虎杖原見山林幽鬱繚聯清菴與初子三十員枯澹燕居有不甚其憂者秀責之曰夫本色行脚高士爲生死事大不顧危亡尋師友於寂寞之濱。吾決已事豈似若等遊州獵縣虛過歲月常計這邊寒酸那邊溫潤。任麼行脚何時有合。

日若有信州求彌陀寶島壽文殊則速出本不欲再見一衆聞之有恥且格藤天樹聞其食輪不給割肥田充衆糧秀不受唯請其地禁田獵藤師遵其言康曆元年膺圓應先師十二辰忌同門耆宿請秀領永源秀請諸山設大會齋住持十年道風大振赴備之檀越景貞請新建佛殿明德初知天下騷亂遠歸歸濟明年果兵戈起檀越舊友戰歿者多上杉大全居士將延請爲國清中興之祖大綱整道菴顯以偈招之秀不肖應應永榮未秋發背癰氣息將絕衆僧奉坐悲泣秀曰汝等勿爲慮者回不臥有神告曰更延。

日本書紀 本朝高僧傳卷之五十五

○十

十六年以何即薨一日請侍者曰明日當有江州之信。果果竹侍者持越溪格公書請永源主既抵永源請衆僧曰吾老病相仍如有氣底外人豈堪主宰汝等舉拳翼戴莫設忌諱不爾相率入火坑誠可畏焉衆皆感伏越百廢具備大將軍義持源公卿秀道化遣僚臣及諸工齋衆衆十二葉并香信等代躬禮謁持提秀照容歸府供養其後源公命駕入山諸官扈從聯轡盈山秀坐接之源公曰某自少歲信禪宗而爲世務所礙未能純一又職秉兵馬之權不能止刑罰動積地獄之因如何得免秀曰夫禪在心不在。



事定由己不由他相公夙乘願輪來爲羣情之依怙行於一政則庶黎咸悅出於一言則諸官悉和檢邪標正勸善懲惡罰獨加于有罪刑不及於無事一天保太平兆民樂無爲悉是流出於台襟毫髮不由他矣世尊曰一心清淨故多心清淨世界及佛土皆悉清淨祖師曰十世古今自他不離當念無邊利境自他不隔毫端此是相公日用三昧也閉目凝睛靜念欽情然後以爲定耶唯所貴不昧正因不失太機所以調達在無間獄中猶如三禪定樂爲有大機相公素得其機者又何怕地獄之苦乎公復請聞說法秀

本朝高僧傳卷之十九

○十一

授以大慧客李參政語曰老僧口門窄不如老之親切酬談移刻秀卸紙帽置傍源公把看重其節儉臘別特贈紫袈裟秀謙辭卻之源公退後秀謂侍者曰我本山林之士今對太臣非我素志翌年春歸歸濟源公遣使齎書追至潯州勸諭不可決然而歸耳州僧俗獲再見秀歡喜以爲慈尊降於觀史參徒復陪于前時應永二十四年春正月屈寺北隅謂徒曰我夙當以遺骸瘞于此不用正塔但植松下株矣二月十二日示疾翌旦曉令侍者扶起著僧伽黎而坐侍者請遺偈秀呵呵笑曰要偈作什麼優結定印

泊然蛻化享齡米彊年坐臘八九候焉源公以秀行業著於朝賜諡圓明證知禪師贊曰有信而學道者必得悟其法源于佛萬祖乘是機燈龍樹太士曰佛法大海信爲能入歸濟大師開口則言你爲信不及是故不得焉證知禪師包笠跋涉以至爲師舉廢無不依於信者不荷官寺之任不歆紫衣之榮屏營山林樂佛祖禪其誠卒不已至其答源丞相問而伸佛法正理者與彼圖澄逢石虎而說福祚求那對宋帝而談持齋何以異焉哉

京兆天龍寺沙門原冲傳

本朝高僧傳卷之十九

○十二

釋原冲字謙嚴性質淳美參究匪懈日由涉公器許傳付正法冲又有才藻以詩偈鳴初住東福因雪上靈慧峰今日雪漫漫無位真人毛骨寒世界三千銀世界欄干十二玉欄干禮舍利偈曰雙樹烟消灰也冷二千二百有餘霜三回輕屈黃金膝五色新舒白玉光興善院殿壽岳保公起龍佛事日勿謂悟則輪迴息勿謂迷則輪迴始人間日月常寂光元來無生又無死其人早登佛智門願識祖師意即知自家屋裏底不干他人分上事世俗諦中只麼行履正當一機瞥轉自然四稜蹈地雖然試問生來中有佛印是

生於中無佛卽是撫龍口有佛處不得往無佛處  
走過祇須別立生涯切忌坐在這裏後遷天龍寺  
永二十八年九月二十一日逝

京兆南禪寺沙門健易傳

釋健易號東漸姓藤遠州人母源氏夢龍石娘卽名  
龍石子七歲拔華峰一公稍長剪髮稟具素好讀書  
漁獵內外徧遊列利典實於建長嘗衆于相國明德  
間以台剎出主遠之華藏攝之廣嚴移備中之瑞光  
歷遷洛之安國東福南禪上堂舉放中道一切衆生  
種種幻化皆生如來圓覺妙心且道三世諸佛是幻

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十九

○三十一

一代藏教是幻達磨西來是幻天下老和尚乃至乾  
坤大地日月星辰竹木叢林無不是幻作麼生是圓  
覺妙心良久曰松直棘曲鳬短鶴長冬夜小參問答  
訖迴云來朝亞歲今夜小參夫小參謂之家教何謂  
之家邪是世俗家五蘊家三界家也此三家能出不  
入故謂家放蕩離父母方袍圓頂不涉衆緣安處林  
野是名出世俗家悟淨法不滯塵勞不膠惑執是  
名出五蘊家騎聲跨色超聖超凡打破虛空得大自  
在是名出三界家既是出家宜辨端的端的作麼生  
辨山僧不啻眉毛更爲諸人直指惟衆自己莫受人

瞞惟是此間冷啾啾空索索不抗洞山果子不提皓  
老布衲不舉趙州茶不示雲門餅浩浩商量不許開  
熱何也豈不見道朕聞上古其風朴略應永三十年  
四月在常在於寺示疾十四日大將軍義持源公入  
寺問疾易令搥鼓上堂曰山僧入此門已經七十三  
年薙髮於此老成於此今欲歸就處源公請誦  
就處麻舉拂子曰一毛頭上定乾坤下座歸僧  
日源公遣使求法語易便上堂辭衆下座書其提唱  
之語以進之十七日端坐書偈曰威音一箭虛空兩  
片腳頭腳尾日面月面擲筆示滅壽齡滿八十門人

日本書紀 本朝高僧傳卷之二十九

○三十二

如法茶毘而塔于東福回輝菴有諸會語錄龍石彙  
等若干卷

贊曰東漸師年登八表病中陞堂示衆書以應源本  
相之語而翌日薨太寂滅其遊戲三昧綽有餘裕  
始知平日之言語文章悉皆爲實焉今時和明之僧  
依打觸途漫弄筆墨而及其外期手脚忙亂不得取  
使一字然則其平日之言語文章皆悉僞也已烏乎  
天理人欲同事異行到此不能正則迷悟公私何以  
別之

賀州佛陀寺沙門梵清傳

釋梵清宇太容承洞上禪於了堂覺公住賀州佛  
應永壬寅冬出世能之總持寺指山門云八萬四千  
法門以總持爲第一顧視左右云關外風災也瑞雪  
皚皚人門垠云關中氣象也祥雲密密入寺小參虛  
明田地絕荆榛清白傳家一味真冰鑑齊平分夜色  
玉壺晴倒拭霜旻細中有路機旋動密處通風錦綺  
漸適意攜來成化事縱橫分付飽參人好兄弟此下  
段事見是焉照徹十世古今燁燁乎周流無邊利境  
是諸人分上本有底消息祇爲一念迷封諸緣籠絡  
所以不得自由太先聖憐之建立化門也謹白參玄

人直須自休自歇太恁麼休歇得底時節掃地煎茶  
尋常向上關候把針補衲撥轉格外機輪見色也摩  
塵彌勒機雲在嶺頭關不徹聞聲也處處觀音殿水  
流彌下太忙生黃頭老漢於此付正法眼藏微妙法  
門若眼明悟於此俾直心人心見性成佛若向這裡  
偏黨分明會否有什麼事必竟作麼生以拂子點一  
點云地靈步步雪山州僧害人人滄海珠正月望上  
堂楊柳風輕鶯燕市芙蓉月白鳳凰臺人人我見燈  
月佛一段瑞光從本來退院上堂豎拂云鉗斧持來  
參祖闍黎拂云卽今放下是和非春風養得烏藤翼

江北江南適意飛清訂正日用課誦半月布薩等儀  
規以貽後學一家宗匠至今取則有語錄一卷

京兆建仁寺沙門彥洞傳

釋彥洞字明交參蘭州芳禪師傳太事因緣初出  
勢州神應次住播之法雲後興洛之建仁上堂垂語  
日第一義諦一推擊碎立百十法門成無量妙義衆  
中有向一推未舉已前領旨底麼問答罷復舉僧問  
虎丘和尚爲國開堂一句作麼生道丘云一願皇帝  
萬歲二願重臣千秋虎丘師祖只知一生二未知二  
生三三生萬物今日有僧致這般問端不涉數量對

他云人物車書南北混江山襟帶古今同不詳所終

京兆南禪寺沙門宗器傳

釋宗器號廷用未詳姓氏平安城人也少隨壽林僧  
山周禪師參究不弛悟得宗要出世天龍兩住南禪  
博才高德學者歸心開闢前之臨濟寺器嘗題偈於  
亭曰華亭新架轉幽閑一穗香雲繞博山塵世還無  
塵世味木光樹色不凡聞後化于龍山德雲院永亨  
十年秋秋諡德光曾照禪師先是義滿源公籍沒妙  
心之遺產以昇青蓮院後又附器永亨初器感其廢  
亡與寺產復還于本山事具在日略傳

贊曰佛刹僧房者雖出纏之境而逢人情時勢則不能免於廢興矣義滿源公恣一己之權威而廢花園法皇之離宮以卑化山門族之主名藍荒蕪作狐狸場者幾乎三十餘年若器公不還之法山尚連五獄下豈有今日枝孫之蕃榮耶器公展也法中檀興之人也余求其機緣提唱而不得繼拾小偈遺什載傳燈及斯書俾人知古德之公矣

本朝高僧傳卷第三十九

音訓

衝 目 中 切 衝 求 於 切 圻 恥 格 切 涓 圭 淵 切 姥 莫 補 切  
亮 力 伏 切 幹 蠱 上 古 干 切 周 旋 上 職 流 切 矜 伐 上 居 卿 切  
下 房 權 胡 封 切 嚙 嚙 上 財 勞 切 下 力 悵 尺 亮 切 匱 戶 切  
切 通 幅 員 上 方 六 切 爆 裂 上 布 耗 切 婉 居 胃 切 濡 余 人 切  
也 滯 水 偶 下 語 口 切 崇 神 須 兌 切 贖 神 六 切 標 音 標 未 余 人 切  
也 水 銀 切 猪 泰 車 切 黎 憐 題 切 窄 側 格 切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑒  
本朝高僧傳卷三十九 茲莫  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識



本朝高僧傳卷第四十

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之二十二

京兆南禪寺沙門方秀傳

釋方秀字岐陽號不二道人佐伯氏讚州人母源氏夢獲珠劍二物無而有妊及生州亂父清泰奔北越母攜秀入洛依外祖父祖父業儒見其英敏曰孺子可教授以詩書不幾誦誦及祖父卒從石窻泉公于東福執童役十二拜靈源濬和尚於安國親炙八年大增知解辭往相陽掛錫龜谷謁諸禪師周期回洛

本朝高僧傳卷之四十

〇一

諱名南禪遊南北講肆大小經論靡不探賾二十歸東福乃司藏鑰相繼自後版遷前堂秀嘗從愚中及禪師得發藥多後寄及公偈曰象王行處絕狐蹤一喝何妨三日聾即此用今離此用虛空突出妙高峰愚中得偈大稱應永九年大明天倫尋禪師一菴如講主奉使來朝秀欲面謁官禁不許屢以書往來二師稱其博才大將軍義持源公軍務之暇常請問法崇敬尤膺初開法讚州道福嗣香記靈源大據京兆普門遷東福入寺日源公贈以金襴僧伽黎上堂問答罷乃云大覺世尊曾於靈山會上以無上正法付

本朝高僧傳卷之四十

〇二

屬國王大臣有力檀那外護流通母使斷絕二十餘年代不乏賢山僧復得祇受鈞旨來此住持入寺開堂官施臨筵羣賢畢集既然事出意外所貴正法流通拈拄杖云同行本上座出來歡喜讚歎道潤水松風廓爾大人境界朝鐘暮鼓恢張古佛規繩一一如鏡當堂頭頭似珠走盤殿裏三世佛共樂堯年門前五社神同欣舜日卓一下云止止你知太平無象麼便靠拄杖復舉靈雲勤禪師因僧問佛未出世時如何勤豎起拂子僧云出世後如何勤亦豎起拂子拈曰靈雲雖則竭力爲人爭奈遂無分休各辨見白底手段且道出與未出相本多少擲下拂子曰未證據者看看秀年五十八應天龍之請俄嬰風痺退請栗棘菴又起升南禪不幾謝事構不二菴於慧日山側以居舊病頻發菴稱即世春秋六十二實應永三十二年二月三日也秀識量廣濶署文特麗多鈔經錄以便于後學別有琴川錄不二遺彙行于叢社矣贊曰岐陽禪師天性充實好飲聞思資之左右以其著述有功於宗門雖濟北師而有所不讓摩五嶽紅蕖之秋禪心高標凜然立焉猶如松柏之不凋寒也嗚呼間出之人時及澆漓亦有與

京兆南禪寺沙門周崇傳

釋周崇字大岳自呼全愚道人一官氏阿州人也蚤  
嫌俗了淡慕禪那父察其志投州審陀寺附默翁誠  
和尚其性敏利內外經書觸手輒識而通太義翁甚  
器寵隨翁遷歸川圓頂稟具禪餘好學不登冠歲百  
家之篇靡不涉獵又往相州閱金澤庫書諸利名  
匠咸埽軍待之歸洛受默翁之記別丞相義滿源公  
尊信禮接應永壬午春出世相國辦香供默翁繼遷  
天龍是日也源公奉以金襴伽黎率諸官員入山臨  
筵聽法如無續功牧菴忠七十餘員門人濟濟列班

本朝高僧傳卷之四十

本朝高僧傳卷之四十

○

世稱得多士矣特賜龍命重陞寺位為五山第一主  
南禪寺時畿內旱久朝廷敕諸宗碩德法雲於神泉  
苑久而無驗矣源公乞崇抵神泉苑唱偈曰泉苑欲  
尋空海蹤靈山佛意救神龍方今天下憂枯涸一雨  
安沾萬國農即時靈雨降注蓋國拈舞遷鹿苑院職  
僧錄司萬年山慧林靈龜山性智皆崇退休之地暮  
年復住天龍應永三十年九月十四日化於審積閣  
世七十九坐夏六十六

越前審土山願成寺沙門祖嚴傳

釋祖嚴字芳菴二階堂氏弱冠出家遊涉諸方瞻風

蹈通叅通幻禪師於龍泉發明洞上宗旨幻付法不  
并自贊頂相以證之檀信智本尼崇仰其道建願成  
於越之敦賀請嚴為開山始祖禪客益繁常滿百員  
嚴示眾云天童淨和尚曰參禪須使身心脫落只管  
打睡堪作什麼汝等兀坐昏昏似棺木裏瞠眼相似  
須急著精彩入古人脫灑之域若是皮下有血當生  
慚愧爾後相尋住能之總持丹之永澤越之龍泉共  
底法續應永二十五年四月二十三日化于願成有  
偈曰本離殺活今絕本來不住偏正豈滌塵埃有嗣  
法十六人嚴亦通幻下十哲也

本朝高僧傳卷之四十

本朝高僧傳卷之四十

○

京兆天龍寺沙門慧嚴傳

後承

釋慧嚴號野隱然後人自弱歲依絕海禪師肄學業  
天生聰警善楷書富辭藻覃思宗旨卒承印記至德  
末入支那歷叅諸山名師久催歸梅承天仲銘新公  
送偈曰蕃航轉舵浙江濱歸到扶桑二月春海若朝  
迎霞似綺天吳夜舞浪如銀心傳列祖源流遠身被  
中朝雨露新鄉國君臣應共喜鄉門幢蓋擁朱輪又  
崇報行中仁公有送行偈不載于茲嚴及歸國逸居  
土佐吸江菴以風雅送歲月覺苑殿閑花野草自芬  
芳即是如來妙覺場雲網交羅金碧耀隨機也解寧

時粧探玄號擬於靜處覓玄微當面依然隔鐵圍金  
關朝隨天仗入鳳池莫帶御香歸要關號門門不鎖  
八方通塞外全歸掌握中別有一重樞要處銅頭鐵  
額伎云窮臨濟三頓棒頌曰烏藤六十沒人情大樹  
陰涼早已成饒舌高安灘下水爲佗容易泄虛名贊  
佛印元禪師肖像曰三韓王子玉堂仙據一禪林正  
令全身後風流難自逞倩佗寫照李龍眠細川賴之  
招請住阿州靈冠寺歷遷相國天龍稍久歸休萬年  
長德院應永三十二年二月十八日示寂壽六十有  
南遊薰行于叢林康正二年冬後花園帝追崇其德

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

〇五

賜諡佛慈正續國師敕使奉給紙入山令人奏樂順  
溪和尚陞座慶讚又同門有西胤俊承策後人出世  
相國退居雲松軒以偈詩鳴題曲肱亭曰龍辱驚人  
易白頭誰知陋巷百無憂曉趨不蹈宮街雪一臥能  
輕萬戶侯先歲三軍而寂

越後耕雲寺沙門能勝傳

釋能勝字傑堂河內人楠正成之季子也少有勇略  
十七從兄出戰左膝爲流矢所射覺覺爲勞因捨弓  
馬業而入緇門拜古劔訥禪師剪髮稟戒晝夜不寢  
銳志此事劔公順世之後參永澤通幻禪師幻示以

智不到處切忌道著話勝提持數載粗有省處及幻  
遷賀州大乘勝從侍焉一日與同侶詣白山神祠路  
經佛陀寺同侶謂勝曰梅山本和尚洞上宗匠也特  
可來拜今幸過于此益設見焉乃通謁入室呈三  
所解山便當面唾勝曰某甲從今去不離和尚會裡  
山又叱起之勝遂掛搭疊疊參尋山示衆舉仰山問  
僧到五老峰麼因緣衆皆罔搭勝後到山理前話發  
關數返勝不契而退山機急起出檐端呼勝閉絜勝  
回首山以手指曰卻看安山麼勝當擡眼廓然開悟  
白汗通暢乃具威儀詣方丈山笑曰你緣在山先拜

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

〇六

安山應永元年春入越之杜澤拔榛安居羣徒胥集  
成耕雲寺請梅山和尚爲開山始祖二十四年秋梅  
山寂于龍澤門人檀越松勝繼其踵勝堅坐不起道  
貌嚴直影不下山三十餘載臨終垂語示衆又召浴  
主曰吾滅後三軍勉此主爲常不聲唯唯而退勝乘  
竹轎出山門前徘徊松杉下眺望安山少選入浴室  
歸正寢而逝實應永三十四年八月七日也保年七  
十三坐臘四十八諸徒收骨石塔于本山

江州禪興菴沙門宗疊傳

釋宗疊號華交藤姓播州舞西縣人八歲上京師微

翁亨和尚習讀經錄十四則。待巾匝爲入純粹嚴正越俗之象。自然內湛。翁呼以佛心。十八離翁。依雪翁盛公于河內。日長知證。壯年歸大德會祥山禪公。據丈室。臺入室請益。山曰。老僧住持事繁。叅取言外。師兄太臺。卽隨其教。外日何。不問堂頭。臺曰。堂頭放某甲來。叅外示。世尊拈華。公案臺寅昏提持。不記寢。一日經行。驟石而顛。凝滯頓釋。趨丈室。通所悟。外大稱賞。因授今號。令掌筭。及外順世。蟄居江之禪興菴。足不越閭者殆十年。慕道之士推門。遍奉養交。順公屢來問答。往覆交日。自吾得先師之印證。二十

本朝高僧傳卷之四十一

七

洛東嘉隱菴沙門清祖傳

釋清祖字柏庭。大將軍義詮源公之庶子也。自幼俊敏。及長。慨然志於桑門。往夢憲國師。剪除鬚髮。稟承

木叉禪誦之外。勤探內外。國師順世之後。依青山永公學。學。叅究得山左證。置于龜山。兼拂演法聲。于叢林性樂隱約。不與世競構。一字於東山。旣日嘉隱。閉門拂迹。不應諸方之請。應永五年六月二十八日寂。遺偈曰。說甚安居。說甚禁足。隨處道場。天堂地獄。救謚佛運禪師。有嗣法七人。南禪遊交藝相國友山師。建仁釣文渭南禪。心田播建仁。嘉泉慶建仁。瑞雲嘉玖書記。

京兆大德寺沙門宗範傳

釋宗範字大模。久頡頏。言外忠公。門道眼明日出世。

本朝高僧傳卷之四十一

八

大德宗範。風塵聲高。華下丞相義持源公遣使問範。不與萬法爲侶者是什麼人。範曰。面前逢著。使者不命。源公嘉歎之。經數旬。源公偕大岳崇仲方伊二禪師入山訪範。齊罷。仲方問範。面前逢著。底如何。範曰。露方舉。扇子日與這個是同。是別。範便喝。相尋問答。往返源公及客而歸。範不詳其所。終嗣法三人。太德格堂越德禪。春作興海印和尚。

京兆南禪寺沙門周聖傳

釋周聖字。殿中九條博陸經教。藤公第七子也。蚤出家。門。嚮歸。盡不入。春屋國師室。發明大事。閱內外書。



願有雅思丞相義持源公常欽其德由住相國歷遷  
太龍南禪包笠歸唐指紳填阿長德院殿羣山大居  
士贈一品羽林義量源公秉炬語曰二月春濃花向陽驚看玉

樹忽凋傷雲愁霞慘山會哭情與非情共斷腸其人  
圭璋粹質麟鳳嘉祥生為兆民父母鬱然王室柱梁  
麗覽令於細柳之營丕承上台洪業傳不立於太幢  
之室益騰廣照遺芳加以專修蓮社淨業期生安養  
樂律仁聲遠播萬國威風遐颺人荒將謂一世得邪  
邪其奈巨川失舟航夢幻境中雖似有沒真寶際地  
本來無有無亾貫通古今包宇宙堂堂正體是金剛

日本書紀 本朝南傳書卷之四十一

○本

正興慶時諸人還見大居士即今現自在神力人本  
生三昧普照無邊利土太摩擲下火把日萬象森羅  
齊合掌紅輪夜半上林桑後移鹿苑為僧錄司晚退  
西山持地院止長元年六月二十六日吉祥而化享  
年七十火浴多現舍利教誡智海大珠禪師

京兆南禪寺沙門周勝傳

釋周勝字古瞻稱離幻道人京兆華族唐氏子管領  
源賴之養而為子焉神宇魁梧立志梵教如蓮華在  
淤泥中而淨植賴之察其不羈投不遷序公俾執童  
役混遊同隊戲玩又異十二落山就大僧列丞相義

滿源公愛其俊邁召居左右勝素信己事不惑華靡  
隨歷太清渭義堂信絕海津空谷應等諸名彥共蒙  
啓迪常欲遊方而源公不許勝截小指血書一偈下  
夕竊遁有公後是非總無管水邊林下一閑僧之句  
自爾一錫飄然山川之佳勝仙佛之靈區大叢林之  
所在有道者所廬無不登踐詣謁凡巡觀國中餘十  
五載丞相義持源公及登台輔四方訪問勝治回輦  
下既踰強羊首于萬年無何出世景福天從等持應  
永己亥秋興相國源公製金襴伽藍贈之閱三寒暑  
退守三秀之塔翔瑞芝菴於相國為終老之計奉源

日本書紀 本朝南傳書卷之四十一

○本

公命慶讚阿之桂林新寺開堂演法景雲蓋空雨華  
翻廣源公捐館長子義康秉鈞軸崇信繼任請住天  
龍寺移鹿苑領僧錄司永亨元年有敕主南禪開堂  
日源公森儀仗而臨法筵衣冠閃爍車馬駢闐都下  
爭馳巷無居人及相國大嚴成勝陞座慶讚台旃入  
山四年壬子冬源公及太夫人就鹿苑院受勝衣盂  
執弟子禮賜兼金一盤練緯十襲金錢十萬勝歸之  
常住一分不及私賴之及玉淵夫人捨西山別墅為  
審性精舍延勝而居焉一日興微疾源公日馳使問  
候時對如常越三日坐椅焚香瞑目而逝壽六十四

臘五十二永亨五年二月十二日也源公不堪京幕贈金錢十萬以贍其塔嗣其法者順溪助心境致敬芳欽皆住天龍相國敕誡鏡智法明禪師

### 京兆南禪寺沙門中淹傳

釋中淹字在中能州良家子也其母上京拜瞻東西靈跡抵天龍寺見山川明媚殿堂莊嚴眾僧威儀整肅善心頓發而誓曰我若得男子必投此寺當為僧詣清涼寺觀音像殿精祈七日忽覺如有身既而歸國賴月生男端嚴清真其於羣儕稍長母思夙誓攜之入洛會龍湫澤和尚住天龍母具敘其緒由澤公

日本僧錄 本朝高僧傳卷之四十一

○十一

奇之即日繫髮往比睿山登壇具戒學業日進思超同袍徧問諸方再參龍湫悟徹個事親承付屬出世相國歷住天龍南禪淹天性溫淳福慧兼全凡所有檀施咸歸公常住以備修造焉永孟之外毫不潤身三利住持有慈愍諸方崇仰興建精藍備瞻而請若之安養一之總持丹後慈光丹之妙樂皆淹駐錫之地又上雲於瑞龍山為淹焉處正長元年十月初七日保齡八十七淹有自照贊曰住山五處薄福渡應法可說無禪可參僧問安心有誰會海月雲山共對談

### 江州佛日山大光寺沙門曇貞傳

釋曇貞字天德姓橘江州志賀郡人母山名氏方娠夢日輪入懷正慶元年生焉八歲上睿山執役僧坊漸長舅添稟戒習學台教祖通圓理基軍傳之貞棄依通幻和尚于青原參侍數載工夫精進不虛寸陰遂有所契一日幻問曰不思善不思惡時那個是上座本來面目貞顧左右卓爾而立幻曰未在更道貞進一兩步叉手而立幻曰正與麼時如何貞便與幻一掌幻呵呵大笑貞辭回鄉邑結菴而居時守山縣有台從祐元阿闍梨屢來問禪事所住之醴泉教寺

日本僧錄 本朝高僧傳卷之四十一

○十一

以為禪利遊貞為開山始祖諸檀越來有請說法貞曰我不知為諸人所說之法檀越曰已稱長老因甚不知貞曰以我被稱長老實不知說法若後聽說法請座主上人問之里民初誣之後信受歸依檀越充初殿堂鼎建號大光寺洞上方來欽其法儀大將軍義滿源公近請問法重興諸堂寄附莊田若干畝貞後遊化防州士庶崇信開大陽寺留貞唱法不久還大光寺明德二年夏五通玄和尚取滅於越之龍泉諸兄弟請貞補席年已耳順凡住院者垂五十年矣正長二年秋遷丹之永澤未期月示微疾中秋初上

退居越之宗生寺九月六日右脇而化壽九十有八  
余四十年前住大光寺尋禪師之事住持卽以行狀  
與於余曰此外無餘事也與今行于世傳檀那歸依  
寺宇檀興年數大差今依古傳而授

上州總寧寺沙門明宗傳

釋明宗號大綱不考姓氏本貫久隨了菴明禪師於  
最乘禪晨究曠唯以工夫爲急請益住復間契當宗  
機菴付洞上五位祕訣維時會中龍象其衆皆爲賀  
稱焉宗初出世永平尋住最乘繼白歸仰不減師德  
上州檀越某欽其道義建營總寧寺招宗爲開山始

日本書紀 本朝書紀卷之四十一

○十一

祖於是東西海水雲乘嘉會而集示衆曰吾此宗乘  
不黏文字不拘經論只要純壹否決心法不決心法  
縱吐妙言妙句皆是成野干鳴若能決心法則語默  
動靜俱是成獅子吼今此會衆須著力若又因循  
沈凝歲月花解路上何日得不穩位時勿道不受針  
刺大衆聽得一等感心焉宗性貞素素衣麤飯與衆  
過時歸終齋誦門人跏坐而化

贊曰大綱禪師有神足二人曰春屋能日吾審察而  
屋下出在中宿安養坊卽菴覺天與順壽山秀月交  
澤聖交俊七師毒下出拈笑英雲岫龍南極星檀菴

範秀菴彭五岳是謂大綱十二派苗裔繁衍而能準  
其遺誠則今東關八州滿縣盈間巧曆不能算焉根  
蒂深固者枝葉必長吾於大綱師乎歟焉

京兆建仁寺沙門義稜傳

釋義稜字伯師姓蔡氏山城州稻荷人九歲投柘水  
教寺習內外書月堂心公寓慧日龍吟菴稜歲十一  
拜以師焉及心公守東山瑞光塔從侍巾帨十五鬻  
髮爲僧隸名本寺十七司寶筵春作興在首座寮結  
制秉拂稜出衆問話機辯如涌十九司藏經二十九  
轉後版解職守光澤祖塔大修廢頽五十一居第十

日本書紀 本朝書紀卷之四十一

○十四

座夏制秉拂任持希文繪和尚居現座側盡問答提  
綱應承丁未春出世伯州安國齋香供月堂永享初  
遷轉後萬壽七年乙卯冬東山左麓火住持告退大  
將軍義教源公命山中遺老擇人補席一衆稱稜乃  
以公帖而入寺說法源公割攝之莊田以充寺產列  
刹歌美二嚴備矣稜視象於東山前後三回達磨忌  
上堂展鏡堂圓和尚拜片岡達磨塔偈頌日上官目  
擊心泰胡画出芭蕉雪裡圖一曲和歌無韻續寒岡  
日暮鳥相呼臘月且因雪上堂昨夜粉碎虛空骨乾  
坤變成白銀闕普賢高揭象上務遊戲重重毛孔利

名大衆云未得個入路者來。埭門前雪上堂空手把鋤頭步行。騎水牛人從橋上過。橋流水不流。善慧大士恁麼奇策良籌。直至子今。結納子。雙東山今日續四句。要以効。風竊狗偷。露柱元木頭。是馬不成牛。八坂塔倒卓五橋。水逆流。稜年過。古稀取滅。於瑞光菴有東山二會語錄。

京兆南禪寺沙門清播傳

釋清播字心田別號春耕九歲侍柏庭而習學聰敏出家十四削染納戒十八遊方從一菴麟大中益聖徒麟于建仁南禪間。悉究錄銀者十年矣。司藏鑰於

日本書院 本朝高僧傳卷之四十一

〇十五

東山結制秉拂社中稱其提唱。庭授印記。諾菴肇公主建仁舉播爲第一座。年已四十八丞相義持源公下勅。帖出世勢州正興寺。嗣香獻柏庭居之。十年猶如一日。將軍義教源公命移冷之。審幢隔數年。董建仁南禪時年六十九。皆承源大樹之鈞選也。臘八上堂水結爲冰。謂之諸佛心內衆生離冰。無冰名之衆生心內諸佛全絕。冰淨迷悟。寧有取舍得失。到這裡說甚。六載修行。鶴巢蘆蓆。說甚半夜成道。能事既畢。在山泉水清。臘雪年年寒。出山泉水渾。明星時時出。枯杖云。看看同參。黑柳標萬行不修。僧祇不歷。千佛

衆中位居第一。且道與瞿曇老漢見解孰優孰劣。豈

不見適來禪客云。古佛今佛同口一舌。至竟作麼生

卓一下云。今朝是臘月初八日。除夜小參。建仁今夜

年盡。月盡。日盡。時盡。枯杖云。未審拄杖子盡也。無無

端放出。一枝佛法不隨年月日時變遷。別立生涯。如

如不動直得豎究。二際橫且十方。且道拄杖子有甚

神通恁麼快活。卓一下云。來年更有新條在。記得北

禪賢禪師除夕示衆云。無可與諸人分歲。且烹露地

白牛。大家喫了。唱村田樂。北禪老漢口甜心苦。東山

今夜分歲。分松上雪。敲梅花冰。供養大衆。太晉何故

日本書院 本朝高僧傳卷之四十一

〇十六

人情若好飲水可肥。三月望上堂古德云。世尊有密

語。迦葉不覆藏。一夜落花雨。滿城流水香。只此一則

諸禪德若未薦取。世尊有密語。若能薦得。迦葉不覆

藏。只如一夜落花雨。滿城流水香。喚作時節因緣。也

得喚作佛性。義不妨如何。定當公且聽。同參本居士

舉揚。卓一下。偃下座。結制上堂。薄伽世尊二千年前

與十二大士入光明藏。主伴交參。結網四面。禁護規

嚴。直得逢聖殺聖。逢凡殺凡。爾來禍及今日。誰能問

閻未免。坐夏閱九期限。立三雖然。恁麼只如道。趙州

老漢在青州作一領布衫。諸和尚如何。折合公也拂



一拂云柳葉鳴蜩綠暗荷花落日紅酣攝住龍山時  
有三門修造厥其繁事退院上堂說偈曰輔宗燕力  
舉千鈞白髮秋風一葉身五鳳層樓修造手還化本  
分作家人大將軍義政源公鈞命董伏見常在光寺  
住職不久解印退院清居東山大統院文安年中其  
月日遷化年七十二有四會語錄及鷲雨集春耕集

京兆相國寺沙門慧珙傳

釋慧珙字元璣山城州人弱侍絕海津公釋典儒語  
莫不透爪承嗣津公應永榮帝春住相國寺大將軍  
義持源公平日欽珙道義接遇過等是歲夏源公於

日本書紀 本朝書紀卷之四十一

〇七

等持祝髮珙獻寶頌并序曰昔釋迦文捨金輪之位  
脫卻珍御之襲而踰城入山出家修道矣竊惟大檀  
越位高于三台之上而不居其高德重于四海之間  
而不矜其重矧軒冕爵祿之榮視之如棄敝屣往往  
從法中之士事方外之遊問法參禪且以爲務焉於  
是奈明之夏落髮圓頂像迎文之律儀修菩薩之慈  
行以度生爲急一彼一此易地皆然故在靈山會上  
則四聖六凡圍繞如龍虎之雲於扶桑國中則九夷  
三韓朝宗似赴經之水吁其盛矣欽奉鈞命製伽陀  
以祝贊日結髮表冠累劫因一刀截斷便超塵十帛

不掛民廬廣萬德莊嚴妙色身珙以正長二年三月  
十五日取滅於本寺壽五十七

薩州靈福寺沙門覺中傳

釋覺中號字堂姓藤薩州人母氏懷娠時胸現十字  
相因以爲名生時瑞雲覆屋鄰人異之孩齒英利父  
母見其不凡投京兆南禪寺椿庭壽公削染服侍二  
十餘載受藥誨多又往南都學性相敬歸闍藏經爲  
衆講初嚴能分理義衆皆稱之椿庭順世後還鄉巷  
居扁以泰鑽自適五載移祖臘邑於玄豐寺開竹窓  
嚴和尚開法於北越住依瑞川意訓徒之暇講華嚴

日本書紀 本朝書紀卷之四十一

〇十八

十六歲示星焉日一二三四五五四三二一逆順十  
玄全自燃念呂律眼前流水屋後山對談夜夜兼日  
日出雖智辯俊逸以未實悟爲憂一日聞意提唱皆  
地徹底作頌呈所悟實宜之付不拂年已五十八矣  
歸入本州之熊嶽行杜多法端坐石上不避寒暑  
衣本食者三年矣有一獵人入山見其日師何人耶  
出日僧字堂也獵人感苦行歸邑率友結卷而居於  
其室稍拔穢至者千指稍化精靈號靈福寺國王正  
作少尹源久豐氏 嗣子與州刺史忠國悅其道義  
靈福東山也靈福寺多妙終至今一衆規之不

先是其地險隘，無由容衆，徒衆從遷，止日待老僧，向山神之，地即以名盛，米繞山，飲之，一管震動，自爲平地，聞者嘆異，出有偈曰：此山未住誰先住，不識元初舊主翁。今日偶然來坐地，一蒲團上干虛空。影不出山，十有六載，永亨九年九月七日奄然而化，世壽八十有一，法臘若干歲，僧俗聞訃，舉哀，門弟子等昇遺骸葬于熊嶽東南隅。

贊曰：釋已洛之慧日山，有宇堂，中公諱字共同，其悟達高標亦相似也，但分濟洞之宗，異大小之隱耳。

### 江州香積寺沙門周宗傳

本朝高僧傳卷之四十一

○九

○九

釋周宗字南英，別號懶雲，姓秦氏，武州人。母氏夢異光射室，寤即生。其家歸佛，常飯雲水。宗甫五六歲，見僧來，則躍迎，延之十載，得建長古天誓禪師之童花十六，薙髮進具，居侍司，雅好文學，通串典籍，從藏家參大羊，登古劍快三師，探其蘊，伯英俊公權，隔山命宗司藏，束包入，雜謁春屋，絕絕海津，諸老皆看其，備頌擊節稱賞，還相陽，連病不起者三年，熟念生，從事大前路，茫茫平生所學一字不能用之，且立且，誓曰：我知疾愈，決求無上菩提，勉勵生，从根源，既而，卒復入武之清水山中，不出五年，棄絕文書，專注禪。

釋者將不食旬，餘定中，屢感觀音太士現形，聞僧，白崖生和尚之禪風，特往參謁，崖令究即今土人，性在什麼處，因緣宗晝夜端坐，無雜用心，夜間聞僧，漱口吐水聲，條然有省，作頌呈崖，崖粗稱之，自是機辯捷出，衆皆鑽仰，凡古則因緣因不釋然，唯於德山托，益話所疑未決，請益於崖，崖曰：不見道，未後一句，始到，牢關切須猛著精力，始得崖遷，圓融，命宗補泉龍，應永成寅，越州織田大隱居士創牛耕寺，延宗，爲衆講，揚最，先有一僧不知所從來，常於街市，群在行化，時來聽講，至二十五，太士各說圓通處，其僧亂叫作

本朝高僧傳卷之四十一

○十

○十

釋而還，謂人曰：牛耕和尚，古佛也，忽失其所在，宗住居五載，太肥，遂亡之，朽木山若將終身，爲一日定坐，豁然微見，托益話作偈曰：托益來，今托益歸，烏鷄夜半鳴，天飛，巖頭密啟，聞天上不許，稱成，未後，後御史臺中原實齋居士力請出山，館于洛之私第，懷香問法，文武官僚履滿戶外，實齋於江之泊內，創建香積，講爲開山祖，黑日雲集，成叢刹，宗遊山，天以往杖，就地上畫一圓相，中點花片，曰：汝等作麼生，會衆無語，宗便以杖掃太花片，以靴抹卻圓相，僧問：如何，是香積境，宗曰：臘雪連天，白僧云：如何，是境中人，宗曰：

怕寒懶剪髮髮受暖頻添楷杷柴僧云入境俱變時如何宗便打大江氏招以泉龍不赴關東源元帥聘董建長府內諸老製疏縱與宗亦不行永亨十年四月初謂左右曰今方不寒不暑老僧行脚太矣因書遺誡數條而體無恙眾皆訝至十五日晚示有疾疾左右進藥餌宗抑掄卻之即屬曰老僧滅後聞維畢以骨投河勿建塔勿設齋勉強辨道慎勿怠慢夜將三鼓踟躕而化世壽七十六法臘六十二宗豐顯秀眉音吐如鐘性剛直無祿飾檀施川輪視猶泥芥觀飢寒者則與不食脇不沾席終身長坐所度弟子

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

〇三十一

若干人有語錄行于世矣

京兆南禪寺沙門得巖傳

釋得巖號惟肖備州人也年十六上京師從草堂芳禪師髮落寡具參詳歲久有所私淑性氣肅敬經史子集無不搜括以文馳名大將軍義持源公招居相國西堂盛待顧遇歷住攝之棲賢洛之真如萬壽天龍陞董南禪寺小參垂語曰鐘鼓鐺磬燈燭交羅見聞歷歷無自無化於此領略太百州頭上罷卻干戈其或不然柔金繞指亦須按過問答罷乃曰拈鎚豎拂祖師門下以黃葉而止啼說妙談玄衲僧面前望

樺林而感渴今朝開堂有餘攀條今夜小參謂之家藏太卻之乎者也更不指東畫西向三世諸佛命脈中六代祖師骨髓裡盡情傾倒爲諸人說破太良久云知人上山各自努力上堂天何言哉四時行焉地何言哉萬物生焉春陽已謝來候云更千村萬村綠一片兩片殘英直石鷺聲老鳥不啼舞輕塵塵利利普門境賺殺善財奔百城卓拄杖曰莫有直下構得底麼看佗佛是一生成嚴構雙柱院於龍山謝事燕居義學扣門者衆巖又玩莊子始齋腐齋口義作鈔十卷蓋以其中多用禪語而世人難曉也有語錄

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

〇三十二

外文若干卷曰東海瓊華集

京兆南禪寺沙門性智傳

釋性智號大愚不悉其氏族山城州人童齒脫塵于東福學業博瞻名于五嶽自印心於大海弘禪師潛隱洛濱以養宣堂鐙彩藏用餘四十年應永丙子秋應同門請出世勢州安養辦香供大海一住四年遷駿之清見兩寺住持偉績可選丞相義滿源公以名藍致之住東福南禪兩回從天龍建仁普門鹿苑常在於寺七處九會玄化大布每有其開堂退院台拂入山侯伯擁戴上堂拈拄杖曰全體怎麼來卓一下

曰全體怎麼住。因甚。總太不得盡一晝日。太太那邊。自有通霄路。結夏上堂卓拄杖曰。這水上座親見。無上法王。入得所謂大陀羅尼門了。也是故。不軌一念。超越三祇劫。不移寸步。徧歷四天下。乃至上三十三天。與帝釋鼻孔相拄。打坐。遂過天竺。那蘭陀寺。掛搭。終日長連牀上。隨意橫眠倒臥。復起繞須彌山。三市。還向藕絲窠裡倒騎大鵬。夏向蟬蛩眼裡直走。駱駝。一切微塵境界。一一皆得經過。今日依舊歸來安住。這裡說與現前。太衆相共。禁足相共。結夏。即說安。居。偈曰。綠樹陰濃夏日長。樓臺倒影入池塘。水精簾外。

日本書錄一 本朝高僧傳卷之四

○三十五

微風起。滿架薔薇。一院香。解夏小參。豎起拂子曰。恁麼恁麼。佛祖未辨。端倪橫拂子曰。不恁麼。不恁麼。魔外。窺覷。無路。秦時。轉轉鑽頭。大漢祖殿前。樂會。甜瓜。微帶甜。苦瓠。連根。苦。集知風。穴。知雨。因甚。婆伽世尊。強立期限。設規矩。障菩薩乘。以取其證。修寂滅行。以要其悟。只是刻舟。尋劍。守株。待兔。雖然。恁麼。下夏將盡。二期已具。人人如何。安居。個個如何。薦取。喝。下喝。日鳳棲。不在梧桐樹。智以。永亨。十一年六月。晦日。取滅於慧日山。堆雲菴。壽八十餘。住南禪時。值通。翁國師。一百半。正。眼院主。請智。陞座。其散。說舉。與。

八宗角論之事。具在錄中。余取其大略。載大光國師傳焉。

### 京兆南禪寺沙門宗播傳

釋宗播字叔英。不知氏族。播州人也。自少隨逐。太清。渭和尚。于諸利。聞切問近思。遂辟疑情。學綜支竺。才。善辭藻。性尤朴實。撝謙。綺靡。大將軍義持。源公。召見。杜播。二侍者。親播。蠶服。由是禮遇優渥。開法相國。大。升南禪門。風高峻。不整宗規。諸方景仰。爲允明。幢。晚。居龍山。慧雲院。嘉吉元年九月十九日。化于本院。播。著五燈會元。鈔二十卷。復纂自唐至元尊宿入寺之。

日本書錄一 本朝高僧傳卷之四

○三十六

語隨類分部。編成三卷。曰曇華集。而便于住。諸利者。之龜鏡焉。屬者。壁山之徒。添項世僧之譏。想號而。爲己。作好事之弊。甚以可笑。

### 上州龍驤寺沙門慧徹傳

釋慧徹字無極。不詳姓氏。徧參諸方。以究己事。爲任。在越之天明和尚會裡。脇不著。鹿。參尋八年。自謂有。所證。後抵最乘了菴。問曰。汝名什麼。曰。慧徹。菴曰。未。審徹什麼法。曰。通達大智菴。曰。智不到。一句又作麼。生。徹擬進語。菴。著。雨。拳。徹茫然而退。遂折慢掛搭。菴。偈。看。我山和尚對月悟道。因緣。徹單提。而至。移。



垂，一夜入室見侍者點燭來，灼然悟入，高聲叫曰：「兩個月現菴。」曰：「未在。」夏道徽曰：「不勞再舉，近前與菴一掌。」菴印記曰：「我山祖翁之後，這話不行。今汝徽矣。」卽補其席，移能之總持相之最乘丹之永澤，漳州檀越建補陀寺，請爲開山始祖。千指禪客不速而至，僧問：「承聞和尚在了菴處，見兩個月，是也。」無徽曰：「是僧云見處作麼？」生徽曰：「曾子唯不如趙州，無僧問生處到來如何得自由？」太徽曰：「誰礙汝行履？」徽又開龍穩寺於上州，爲第一世，得其法者，月江正文顯總和尚。

京兆南禪寺沙門通恕傳

日本美術

本朝高僧傳卷之四十一

Cii

釋通恕字惟忠稟具已後禪利敬場探問周徧以通  
內外爲衆所稱初住建仁然香供無涯浩禪師天據  
南祖輩下士庶歸法者衆恕提唱之外善篇什集曰  
雲壑猿吟其偶作曰遠遊齋志是耶非雨雪千山更  
落輝矯頭天涯倦飛鳥翩翩認得舊巢歸

上州雙林寺沙門正文傳

釋正文號月江，不考其產神機朗爽，智辯超倫，親近大綱宗公，專尋徑要，一日看真覺，太師證道歌至，江月照松風吹，永夜清宵何所爲，豁然默契，深藏不語，將大綱命使，濃之燕極和尚處，翌晨極使行者撞朝。

參鐘文見衆少不覺失笑行者願告極名文曰夫朝  
然者宗旨家訓不可依衆多少古人聚頑石猶且說  
法今我會裏僧雖僅有十員皆能志於道叢林法規  
不可闕焉你何生憍慢邪曳棒欲打文投誠悔謝近  
侍契合後爲法嗣出世總持開法最乘開尾之楞嚴  
武之普門爲第十一世長尾左全吾俊叟居士建雙林  
寺於上州白井招高第一州伊公以爲住持伊公迎  
文爲開山始祖自退與泰叟康司策翰臺英密山永  
林大林大菴等主營諸職名衲來集叢規大備夏終  
回楞嚴寺以寬正三年正月二十二日無病而逝

本朝高僧傳卷第四十

日本撰述

本朝高僧傳卷之四十

○千本

立訓

**𦵏** 庾切。𦵏同。**𦵐** 歷切。必歷切。下六切。**孤硬** 上及乎切。𦵑 莫佩。

切  
藿音壘  
壘也  
璜居嫌切  
璜匹各切  
矧若忍切  
敝盤并下  
蹠一同

音徒草履也  
𡗗 萬  
𡗘 式竹切  
𡗙 毀遮切  
𡗚 上蒲紅切  
𡗛 息宗切  
𡗜 髮亂

猥  
 裱 悲廟切  
 輅 託甲切  
 藍 昌改切  
 膚 牛建切  
 選 須寅切

也速蘇谷切橋慢上堅姚切

一、關於

江府住玉泉軒成九居士信施淨財銀  
本朝高僧傳卷四十 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本僧表

本朝高僧傳卷之四十

○二十七止

本朝高僧傳卷第四十一

濃州盛德沙門 師蠻 棋

淨禪三之二十三

京兆妙心寺沙門宗舜傳

釋宗舜號日峰姓藤城州磐城縣人母源氏素有賢行嘗誦法輪寺禪男子於虛空藏菩薩期以百日期滿夜夢有一高僧出自堂中持荷花而授寤即有瓶及產顏貌非凡小字曰菊夜叉父試教書善記不忘顯僧祖梵文合爪側耳至九歲投龜山本源菴侍岳雲登公執唯諾役雪夢覺國師高弟見其俊機嚴密

日本書紀

本朝高僧傳卷第四十一

○十

○十

英論十五剪髮十九稟具辭太觀方未遇明師或棲棲公欲決意禪坐曾在勢州光讚寺度夏見旭光影聖僧龕忽然有省而無人作證聞無文選公道高江左往星所省文大賞曰老僧始在先師處悟得這境界故住此山今吾會裡五百徒衆無知你見地者雖然恁麼却州因其道個無字舜猶口無對衆久不契太抵濃州謁南山薰菴主山亦老作家埋光罷休者也見舜推重一日謂日子眞法器也慨吾老耄不能成子今天下具宗眼者無因因和尚見在攝之海清轉大法輪子當往參之舜聞慈誨不忍太之山再三

日本書紀

本朝高僧傳卷第四十一

○十

○十

勸諭付手簡爲介出衲不阿堵物以贖行且屬之日上人到彼非得大休歇不可復出舜謝之不受感泣而太無因示以德山托鉢因緣舜晝鍊夜鍛須臾匪懈因移河內觀音寺舜亦隨行經五寒暑會大悟菴關主舉舜住之其菴距寺十八里舜常往來請益因應京師圓福之請舜復從焉一管夢佛殿前有龍旛珠舜覺人懷中翼展入室一挨一拶豁然大悟便承印可因每稱舜和楚師之作矣因順世之後屏跡濃之無著菴鎮門而居登尾之鹿尾山就寄教寺看大藏經多送災京山下居民聞法懷德將營練若駐舜杖錫使弟子玄瑞相勝卜地鄰邑有山林木蕭森而虛無水忽巖泉涌出清涼澄澈乃誅榛蕪寺請舜而主舜即名以瑞泉之號端居一榻呵風罵雨未幾緇白尊信華構輪奐輝映林表特奉無因和尚爲開山始創日塔其右海衆輻湊或二百或二百常滿堂內時人稱大山法窟焉應永己卯冬大內義弘遣柁幕命而義弘與妙心住持相堂有禮要義弘平後義滿源公移怒花園封疆山莊皆悉籍沒家青蓮院後青蓮僧正與南禪廷用器公凡妙心寺住山所管二十二年矣永享初器公啟告嗣將軍完全舊疆莊園遷於

吾山於是門派遺老胥譚曰興此廢者舍舜公誰擬耶因封疏三請舜始上京瞻被法山殿堂頽敗園林茅蕪獨有微笑祖塔存焉舜慨然不忍日與衆僧希剔荒蕪拾除瓦礫勞勛百計得復舊建槌拂之暇講說經論濟洞禪徒絡繹垣門暮年勩小院於山傍甌曰養源兼卜壽塔爲歸藏所嘉吉二年秋源京兆春轡居士細川持之寢病將卒請舜第中問曰生久到來如何回避舜曰日本來生無生來久無死公更說什麼回避居士聞得脫然有省合掌而逝矣文安丁卯奉敕住大德同門耆宿如養叟頤季東溟日照光等

本朝高僧傳卷之四十一

本朝高僧傳卷之四十一

〇三

製疏縱史爲舜入寺指門曰虛堂八十再住山老僧八十初入寺闢無處回避喝一喝上堂提綱曰世尊拈華迦葉微笑日麗天清風匝地清風匝地有何極所以昨日正法山中眠雲嘯月分甘枯淡今朝太德寺裏拈槌豈拂懷關宗要淨躰線絕不當赤灘灘沒窠臼直得拋出楊岐栗蓬徹向松源黑豆供養天下衲僧本也雖然恁麼以何爲驗拈拄杖卓一下曰國清才子貴家富小兒驕住持三日上堂辭衆曰龍峯山中老懶牛今朝特地脫籠頭國王水卿恩難道溪北溪南任自由下座擔杖直歸妙心翼歲正月二

十六日無病而脫世齡八十有奇法臘六十有偶諸徒奉全身瘞於養源之塔扁曰菊光識前夢也舜自以律身老益嚴懲無僧俗貴賤叮嚀教諭所受檀觀悉納常住以充修造是故諸堂百廢一世全備滅後衆議立舜之牌爲妙心中興之祖禮也後土御門帝追崇其德敕謚禪源大濟禪師

贊曰古人曰登山須到頂入海須徹底此語至要爲禪者之先務列祖所以傳燈垂統皆無不然也大濟禪師初周遷伊洛遠濃之間心憤憤口排排如渴鹿求水焉間有半省半悟而不以爲足之到頂徹底後

本朝高僧傳卷之四十一

本朝高僧傳卷之四十一

〇四

渡居湖默眼見雲霄追擬古德暨出乘嘉運而住本山卑服菲食恢典既廢於數十年後狐兔之蹊再成龍象之場河雖廢與係時有常數之存焉言今日之盛備舜師之有功宜也稱中興之祖哉

京兆南禪寺沙門龍派傳

釋龍派號江西別稱稱菴京兆人平姓總州太守東師氏子也蚤隨事建仁天祥麟公入室升堂資性俊逸楚漢博記以文辭鳴于社中衆僧望席公卿伺門首住建仁後興南禪上堂乃云神龍蟄居乘時而出佛祖應世感機而興法無一定之相道任萬般之緣



所以管年仍移三處之幢不離本際不住本際今日  
高踞五山之上也。沒來由也有來由直得羊角嶺高  
合澗水急重重總是真機鳳樓鐘動禁城鼓鳴拍拍  
莫不妙用祖道參皇道以催行宗風體仁風而齊扇  
正與應時功歸何處。州木叢林新雨露乾坤一統舊  
山川記得東寺會禪師因僧問某甲擬請和尚開堂  
得否會曰待時物衆頭煖即得。拍曰這僧開關延敵  
東寺滅龜添兵山僧若值這問頭但道戰必勝攻必  
取。派晚退居東山之續翠軒。文安丙寅八月五日寂  
于所住未詳壽臘。平日述作有江湖集鈔天馬玉津

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

○五

沐續翠臺若干卷

京兆南禪寺沙門以篤傳

釋以篤字信中姓三善氏淡州三原人嗣法於慧日  
山大蔭樹公大道以和尚之孫也永享初出住淡之  
棲賢居六載遷京之安國丙辰歲應藤丞相之台金  
住東福歷五寒暑主天龍隔歲昇南禪時年六十八  
別利欽德舉都拒風此歲秋慧峰南麓構宗鏡菴解  
印而休未幾戰化寶德三年十月一日也篤學通梵  
漢才優文翰先是明國潘少卿使于本朝或者編篤  
詩疏脩刺官驛以求一語潘曰一見使人驚駭禪林

中有如是已學乎詩猶可商榷惟如疏語非區區所  
及也若序跋者持太嚴名公大人而作之云篤遊錄  
舍慈恩寺作日孤錫東遊客相城慈恩佳境勝聞名  
仙山海上幾塵隔佛國人間何故成翡翠護巢溪雨  
暗虹霓射牖嶽雲晴猶思塔下留題處滿塢梨花照  
眼明余盡其住諸刹之語記室失之有聞香林住大  
德山門疏載以示後覺疏曰天老譽賢世稱山公啟  
事宗師起典復觀漢官舊章呈龍翔鳳翥之祥萬壽  
香鼉寂之弊伏惟香林禪師探蹟曾典早秋韶陽話  
頭鉤玄竺墳晚爲香林名稱禪餘快活李羣玉作梵

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

○六

語詩格外玄談張無垢註揭諦咒應機拈生名亮隨  
處豎精進幢琉璃地黃金繩在管駐天主釋珊瑚月  
銀枕雪此日供先師恩是乃祖道所存實爲學者之  
表黑川分南浦水派有淵源紫氣望北極雲慶充靈  
宇篤所著疏稿日晦夫集

京兆南禪寺沙門英文傳

釋英文號景南生干常州佐竹義基第六子也幼冲  
穎發不欲處俗稍長上洛拜東福大方用和尚爲師  
前夜方夢文關西至因名英文後自號景南釋典儒  
籍無不遊目故博達之名早聞叢社出世萬壽歷遷

東福南禪安座開光，偈曰：兩輪日月，一雙服百億須彌一座，山安座開光，只恁麼不容，何觀設機關，夢愈國師百年忌，景同門法孫請文，陞座文拈香曰：門外河聲熾然，說屋頭山色，本來身百年三萬六千日日，龍華三會春又移，常在光寺，永亨庚申春，丞相義欽源公修興洛東八坂塔，就法觀寺設大會齋，供僧慶讚詩文，為導師陞座說法，是日源公率諸官員臨筵，聽法不冠車馬，勝驪山谷，文年七十六，詞辯渾然，闡揚妙義，聞者皆生信心，退休龍山東禪院，享德三年九月二十二日，喚侍者點茶來喫，訖告衆曰：汝等

日本書

本朝高僧傳卷之四十一

〇七

果能究親平等，純一無雜，掃蕩萬有，無一點繫念重於佛境界，相見言訖，入太滅度，壽齡八十有三矣。贊曰：景南禪師出於源家，本朝名流之將種也。及歸系門，修證之綱也。亦出於萬人之上，後有豐錄之餘勇矣。其雜著班班散在策中，以非提唱不採錄之，縱有千萬首之妙語，不如末後之痛切也。

### 丹州圓通寺沙門性餘傳

釋性餘字牧翁，平安城藤姓，冠纓近衛丞相季子也。五載辭家入丹之永谷，從英仲俊公十三落州受戒。俊公知其法種，特加提誨，餘晝夜勤苦如救頭然，如

斯者數年，一日問答，大言下發機，俊曰：莫有妙悟麼？欽云：設有妙悟也，須吐卻。俊微笑，親近三載，應永甲申抵葛野，結菴禪坐，十有三年，稍成叢席，號松山寺。丙申春，俊公順世，遵遺命補其席，居之十載，寺羅鬱攸獨，聖德太子所造如意輪聖像出於灰燼，一毫不損。朝野拜瞻，靡不感嘆。欽募力化財，任以歸己，數載役役勞復，僣功晚年住永澤高登法幢，會裏禪客殆餘萬指。文安五年，率衆五百遷越之慈眼，明律還永谷，康正改元臘月十九日，隨例入浴畢，欽不據座，俄命撞鐘，衆僧赴集，欽誡之曰：山僧世緣已盡，汝等當

日本書

本朝高僧傳卷之四十一

〇八

精進修持，勿違佛制，衲衣下失卻人身，則萬劫難復。慎之，慎之。我絕息後，應舉由知客主席，以安衆望。復唱罷偈，日收得牯牛，住七十有一年，如今和雪放端的臘梅天，又手當胸而寂，衆奉遺殖塔于山間。

### 勢州大樹寺沙門玄朔傳

釋玄朔字桃隱，京兆人，自幼志於道，登東山受染，參講之暇，喜翰墨，以詩名稱。年邁弱冠，典輪藏，永亨年中，日峰舜公住妙心，爐竈孔熾，朔往受陶鑄，責己體究，無雜用心。一夜坐，意下霍然，悟證作偈曰：白日青天三十棒，都盧大地黑漫漫。夜來依舊開窗坐，蘿

月松風毛骨寒。辭如讚州。結茅菴居。肩日慈明。風雨侵坐。薪水纔給。而佳聲稍聞。學徒叩寂。莫道山孤。峻無契機者。因有偈曰。烟雨三年南海涯。一簣空。睡釣魚臺。幾多蝦蟇食。香餌未遇金鱗衝浪來。居四載。住勢之保保鄉。郡守朝倉氏某。建大樹寺。請明為開山祖。緇曰。歸禪者眾。安同門縱與。董尾之瑞泉。供香開山。兩祖曰。這香教子葉。於威音先。天眼不見繁孫枝。於婁至。後佛手難攀。咄拈來。天下與人看。恭惟一個生前菴箇一個。後顧頤百醜千拙。各恣癡頑。於我無隔宿恩。已是無隔宿恩。為什麼薦以續薪。焚以栴檀。

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

○九

檀大衆聽取。山僧點破。青龍窟裏。二龍蟠。領下明珠。照騰寒。以香鑿爐。曰。今日一棧。棧碎了。臘梅吐出鐵心。所達磨忌示衆。離根殘菊猶堪。雨溪畔。寒梅早著花。具眼若知。今日事。老胡未必過流沙。宣德三年。春。退院示衆。一住五年。如履冰。春風捲。柳下危層。不知何處得安枕。萬里江山七尺藤。復返大樹。以何蓮。病據。坐拈竹篋。示隆侍者。侍者不契。朔便擲下。竹篋而化。不記其年月。壽臘賜諡。禪源大澤禪師。

濃州汾陽寺沙門玄祥傳

釋玄祥號雲谷。首參洞下尊宿。究五位。秘訣寄鏡三

昧。後依日峰。輪下。機語投契。從茲與胡桃隱在峰會。祖評商古今。各有出身處。濃州郡守齊藤氏利永。越前。刺史。崇其道。望於武藝郡。建立乾德山汾陽寺。請為開山始祖。於是四旁雲衲不遠千里而來集。其山高峻。為國中名利也。康正元年。住尾之瑞泉。據室橫按拄杖。曰。正按傍提佛祖。乞命。橫拈倒用。魔外。潛蹤卓一下。日從前汗馬無人識。只要重論蓋代功。雨開山。真前拈香云。兩個老凍膿叢林。太妖孽。慣用東山暗號子。壞卻松源黑豆法。從此父子遞相飽置。金兒孫。扛沒折合。果然一馬生三寅。何免特地成途轍。諸

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十一

○十

人於斯。明得一雙。孤鴈撲地。高飛。諸人於斯。不明得一對。鴛鴦也。邊獨立。祥創龍濟菴。而退居山中。不久復還。汾陽二年。丙子。七月初八日。入寂。教諡佛智廣照禪師。

筑前崇福寺沙門宗宿傳

釋宗宿字春夫。號不昧子。京城貴胄。子自少嗜學。鄒翔。翰苑。俄慕緇門。棄選。南北講場。又謁五嶽諸老。後參無因和尚。於妙心機契。承記出世。筑之崇福。不化。鎮西。後回洛。開普門山福聚院。而居。嘗題自照曰。祖師心印印定。乾坤須彌芥納。巨海毛吞。疎影橫斜。花

一朵暗香浮動現梅魂宿持律精嚴日望布薩沒身不弛滅後樹塔日湛寂南禪愚極才公贊宿具日面孔雄偉心機敦龐性盡勤勞三餘春秋機易坐忘寢寐十年雪案螢窗故如新硯試利器竟似巨鐘噓後撞定正定邪握蠲梅陽之竹篴子入粗入細舉起松源之苔帚檮美翅開豁禪關亦能抹豎律幢派脈必長餘波自歸定水常湛聲價猶重魏貌與橫岳相雙者也

### 京兆大德寺沙門宗頤傳

釋宗頤號養來世姓滕氏生于洛東年甫八歲禮東

本朝高僧傳卷之四十一

〇十一

福九峰處為弟子及祝髮納戒列居侍司既而遊方掌藏鑰於東山職滿往土州參大周喬公于吸江菴辭往播之書寫山點台啟於心空上人再還東山居第二座時聞僧稱華及之風即如江州禪興菴謁問交日還識禪興麼頤曰幾辨來風交日辨個什麼頤曰露交日轉向那邊去頤曰再犯不容交便打服膺執侍餘十六霜密銀顯鍊盡其底蘊交為授記付水為信住菴城西梅烟山中後回龍峰山居大用菴文安二年秋有詔住本山大德寺建武初奉給言位齒于南禪至德丙寅丞相源公貶列十利於是頤聞

于源公得便舊位賜紫入寺上堂乃云大丈夫漢脊梁硬如鐵在乎進退之間初無喜難之色釋迦不先彌勒不後所以其退也古寺閑房焚香清坐通報佛祖恩其進也要使彼網令不墜我本無心有所希求今此法王大寶自然而至大寶既至諸人如何領會拈拄杖曰新太德強作灰馬醫太卓一下曰咦復舉三聖道我逢人則出出則不為人興化道我逢人則不出出則便為人新太德不然或時我逢人則出出則為人或時我逢人則不出不出則不為人何故莫道非非想天無人紀州贊川氏某劫德禪院招之頤愛其風景為終焉之地源京兆勝元遣使請之無已再回大德一日寺火頤乃竭力建重門塔後花園帝召頤內殿問禪興奏對協且特賜宗慧大照禪師之號晚應檀信之請休居泉之陽春菴長祿二年六月二十七日示微疾侍者持紙筆請末後句頤連喝兩喝云孰主孰賓具眼者辨取忽爾瞑目春秋八十三夏臘六十七頤嘗曰吾必與先師同日而取滅金吾兒孫同修忌齋矣果如其言

### 備後種月寺沙門謙宗傳

釋謙宗字南英姓滕氏薩州人年甫臨歲頻慕空門

本朝高僧傳卷之四十一

〇十二



父攜上洛投相國寺大岳崇禪師爲童役及長雉系  
諫稱萬年山十九遊方隨天巖越公替止五年次參  
龍澤梅山本黑川笑堂訢俱無所契歸掛錫於天龍  
應永辛卯回本州依石屋梁公五迎寒暑辭往越之  
杜澤見傑堂勝和尚問學人不遠千里而來請和  
尚示徑截一路堂曰觀面無回互宗禮拜而退待十  
二年因看黃檗傳心法要堂問曰個中何處最要訣  
宗曰法身卽虛空虛空卽法身堂曰不作虛空解不  
作法身解正與麼時如何宗不契堂叱曰汝於是不  
會得一生空過耳宗汗流發背愈加憤勵一日晚參

○三

○三

罷下殿課逢與頭條爾開悟語呈偈曰法身空解  
一箇爲蛇一移當頭故若何昨夜春檐風雨惡和根欠  
倒海崇花堂便印之命以待香職滿入備後牛頭山  
卓菴安居扁曰種月學者推門永亨己酉移越之耕  
雲朋羊退居東岡祕澤山有瀑宗題偈曰飛流三級  
活龍門萬仞嵒嶽雪浪翻忽地青天雷一震虛空迸  
裂鐵圍奔赴州守之騁住房之天寧筑前太守眞祖  
俾宗領作州西來寺寺興兵戈火後荒涼從宗住持  
起廢百備文安乙丑越後檀越藤朝房建精藍招宗  
尋應滋川常昕之請開備中常照寺初州太守藤厚

氏招主玉泉二年歸耕雲郡之赤田氏女久作幽魂  
宗禪坐救脫其父捨私宅爲洞福寺講宗爲第一世  
寬正元年五月十九日取滅於牛頭山壽七十四臘  
六十一歸終有偈曰一片祖翁開田地耕雲種月已  
三年功成身退是今日觀後輩勤不上肩宗精于洞  
曹宗自作五位祕訣其竭玄鎖學者傳而爲珍焉

和州補嚴寺沙門眞覺傳

釋眞覺字了堂叅大源于佛陀親承印記出開法於  
和之補嚴薩之金鐘遷移能之總持賀之佛陀博鑑  
四來有智嚴者叅徧諸方粗有所見一日來謁覺徵

○三

○三

其所見嚴機辯無所讓覺呵云你實未透徹只認得  
知見解會以爲至當若恁麼行脚到處鼓弄口皮誰  
辨問闍公也若要生久到來得自在無礙把你意藏  
裡所審落一時放下向空蕩蕩虛豁豁處處著精彩  
當下裂破古今踏翻乾坤當可始得嚴從此傾誠參  
究一日陞座舉首山竹篋話云不觸不拜亦是勞生  
擬議且道諸人如何卽是嚴大悟出衆掀倒繩牀覺  
拈拄杖曰何不道取一句嚴云昨日道取了也覺曰  
未教打得你且太擲下拄杖便歸方丈覺居日州皇  
德寺訪無著融公因問曰釋迦彌勒是佗奴且道佗

是阿誰著云嘆覺曰向上更有事也無著云有覺曰作麼生著云侍者點茶來薦高賓覺嘆賞而歸

京兆南禪寺沙門龍惺傳

釋龍惺號瑞巖一字仲建自稱蟬菴泉州石津人世譜源姓父因州刺史號南樵母佐佐木之族教智氏自有懷妊身崇清潔口卻酒葷至德甲子生焉天資英邁與羣兒遊每出其右父喜其才特加鍾愛及七歲從父入洛周覽靈蹤見佛菩薩必合爪膜拜戀慕踟躕不能輒去至北山闍王堂觀壁間地獄變相謂乳媼曰汝速出家我亦從釋爾粗大奇之父母以門

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

〇十五

闕高常愛其志明德二年泉州擾亂族黨罹禍家人攜惺避溪山投一古寺主盟密宗慈其幼冲匿護摩壇下躬登其座手印口咒至心誓謂此兒離難我亦俱灰仰冀諸天垂法救焉既而還兵跡來搜索無所不至唯不顧壇下而公惺遂得脫而依同姓之人十一從東山一菴麟和尚為沙彌操持凜然肄業純如菴甚器重謂左右曰張皇吾門者此兒也十七試所習得度進戒嘗曰不精世間文字焉知聖賢之所為邪乃採經史百家之書旁古今雜記吹糠糲米唯恐不及菴謂惺曰文字之學不為無益然出家人不以

佛法為急務而專吟佔畢豈得不悞哉菴先詢以外

書應答如響乃展手曰我手何似佛手惺茫然不知所謂菴曰適來口吧吧地才至舉手早成隔礙病在甚處惺曰不會菴曰一切現成更放誰會惺不契因棄所學專壹禪觀菴歷遷天龍南禪惺從侍不離商略古今親受印記時年二十四矣尋菴順世惺恨辭師太早一初一鉢守志不移厠跡諸山屢進高職嘗在東山分座說法守護國祖塔若賀之福昌駿之清見筑之聖福或同門疏聘或僧錄司選取惺堅辭不就文安丙寅大將軍源公請任建仁審德庚午源公

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

〇十六

奏朝主南禪人寺之日宿初鉅德凌晨雲集合施入山官僚扈從冠蓋星爛輿馬載路都下僧俗無地投足上堂事得理融十聖三賢一場懽躍理隨事變水鳥樹林皆演法音是故生光瓦礫失色真金參學人或知事上建立不知理上掃除或知理上掃除不知事上建立事上建立則只須善用心悟明心地是善用心成佛作祖是善用心看經講教是善用心行住坐臥語言三昧是善用心著不喫飯屙屎送尿是善用心一動一靜一來一去是善用心更有一處是善用心理上掃除則切忌錯用心悟明心地是錯用心

成佛作祖是錯用心看經講教是錯用心行住坐臥  
語言三昧是錯用心著衣喫飯屙屎送尿是錯用心  
一動一靜下來一本是錯用心更有一處是錯用心  
畢竟道不涉二途諸人如何用心若是伶俐底漢實  
知林過太虛翻身一擲到這裡眼若不睡諸夢自覺  
心若不生萬境無侵諸人還會麼卓拄杖云赤肉團  
上壁立千尋庵部臨臨上堂未開口前有一句子  
已開口後不說一字畢竟如何蘇盧悉哩下座住持  
半歲告老解印退休東山之靈源蒼然山中關繫如  
住職之時值泉州大雄開山三光國師百年遠忌一

日本漢文

本朝高僧傳卷之四十一

〇十七

衆迎置升座說法所得觀金悉備其修塔之需衆皆  
感服長祿四年秋示有微疾諸徒欲用藥餌惶曰我  
能事畢何有所待叱不受言笑如常接納不倦僧錄  
司瑞溪鳳公自持藥劑問安薦之惶拜而不嘗臨終  
接筆書偈曰通貫三際彌綸十方一機瞥轉石火電  
光書其末曰送於祖塔塔傍掩土頽九淵和尚唱無  
常偈諸公珍重長祿四年閏九月初五擲筆坐脫世  
齡七十七法臘六十停龕十三日顏色紅潤如生諸  
徒遵遺命窆于護國塔下一菴與江西之左有一會  
語錄并外集

防州龍文寺沙門正猷傳

釋正猷字竹居自號化化禪薩州伊集院長氏子父  
母共歸佛鄉稱善人有一男子父欲使弟出家投郡  
之妙圓寺石屋和尚室及將鬚髮叫喚出門太猷胡  
跪石屋前曰我弟因緣未到願代弟以出家爲屋敷  
曰爾言如斯殆宿習乎卽爲剪髮親附衆詢久歷歲  
月一日當僧衆問屋打曰速道速道其僧茫然欲在  
視忽然而悟通身流汗屋曰徹矣猷時年尚壯自謂  
日我宗本不立文字然不涉內外於化門有所闢焉  
乃負笈京之南禪依惟肖巖公三載肖鄭重誨獎與

日本漢文

本朝高僧傳卷之四十一

〇十八

竹居號遊相之龜谷遠之楞嚴益進慧解歸省石屋  
分座化衆出董具林福昌兩刹雲水津湊歷任能之  
總持丹之永澤越之龍泉武庫即大內弘忠招住長  
州大寧未滿一紀凡百整理開薩之了心松仙堅忠  
德住防之龍文爲第一代在所安衆盛唱祖道又應  
太守大內教弘之聘再還大寧僧問隨處成主時如  
何猷曰柳絮毛毬水上萍僧曰個中誰訛作麼生猷  
驀面壁頌風幡話曰不是風幡心是動將軍止渴說  
梅林一聲牧笛黃昏月不解邊城兵馬侵猷禪餘講  
法華楞嚴圓覺維摩等經導引初機讚覺隱本公具

日殺無明父破轉法輪入火刀途歷極聖向覺城東  
隱全身興既廢梵刹於榛蕪裡激將洄曹溪於性海  
濱捏怪破盤太子產這舜若多神阿呵呵不在前  
峰雲闕水中月疎木林梢掛寸銀關東將帥上杉憲  
實祝髮號長棟辭管領職遊歷諸方謁猷太寧構居  
槎留酥一日告衆曰卻後五日吾當取滅於是緇素  
省問相繼檀越放弘相隔兩日程急來問候猷對譚  
如平日放弘退過槎留軒與長棟語話侍者俄報曰  
和尚逝矣有辭偈曰混沌破了一十二年蚊虻眉上  
好打輾轉實寬正二年十月二十五日也門人昇棺

日本撰述

本朝高僧傳卷之四十一

〇十九

茶毘放弘長棟俱衆法葬焉遠近傳訃無不舉哀矣  
石屋居肥之天州島時住吉明神託于其鄉信士曰  
我觀二世如掌果石屋和尚古佛應化也有弟子六  
人皆成太器其中號竹居者七世善知識也後如其  
言也雙桂和尚之命字者暗與受記乎柳亦識文乎  
爲異已矣

### 京兆妙心寺沙門玄詔傳

釋玄詔號義天土州人姓蘇氏入鹿大臣之裔也小  
字王法師俊邁出倫十五依州之天忠寺義山恩公  
落髮山三允國師之高弟也十八稟戒觀光洛之東

山中知賓侍燒香古芳菊禪師住山日舉掌藏經結  
制秉拂酬應逸格源京兆滿元臨進聽法謂左右曰  
此子稍少辯音如鐘我國之萃也職畢兩載依春夫  
宿公於福聚振錫東遊尾陽參日峰禪師于瑞泉銳  
志趣向如勇夫攻城或定坐盤石或經行月下如是  
五載觸境大悟即作偈曰并吞東海鐵崑崙利界三  
千一等昏瞋卻娘生眼睛了當陽突出破砂盆峰有  
印記乃付法語會丁父憂旋故鄉鄉人喜謂值烏鉢  
華因創一字留想住持名龍門山瑞巖寺始唱關山  
宗又往濃州開愚溪菴尋移尾之瑞泉監院有年及

日本撰述

本朝高僧傳卷之四十一

〇二十

峰順化入洛守養源塔下衆請住本寺值日峰太祥  
忌設齋唱偈曰阿鼻無間鐵夏大日償口業已三年  
並吞熱鐵數枚太吐作梅檀一炷烟右京北細川勝  
元一日訪詔曰先考春巒臨終之日請日峰和尚得  
安樂地以故特來拜謁佗日建寺迎師當償先志審  
德二年勝元擇地北山創建伽藍號太雲山龍安寺  
聘請外護詔奉日峰爲始祖自擬一世焉桃隱朔公  
寄偈賀曰韓愈傾心衆大顯晦堂垂手接庭堅飛樓  
湧殿曼陀雨二十年前娘手烟於是四來雲衲會湊  
是秋隨請遷尾之瑞泉據室拈拄杖曰三世諸佛在



者歷代祖師在者裏第上座在者裏即是不在者裏即是卓一下日自今家業興一舉九萬里居僅踰月過鼓鼙衆詔與僧錄司瑞溪鳳禪師以爲道交一日訪鳳公於鹿苑豈建仁瑞嚴惺公同來在座瑞嚴問日君嚴集有只許老胡知不許老胡會之語世人以爲會淺而知深不知如何詔曰蓋此一放一收之語而已達磨分上登論會與知之淺深邪又曰先達以不與萬法爲侶之語爲爲人之句以汝是慧超之語爲直示之處此大不然古人明言帶事者悉逐句者述二師服詔之精于宗旨矣瑞嚴寄偈曰肇破同

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

○十一

風那一句君歸青嶂我紅塵誰知大法下衰日臨濟兒孫有此人其得時彥之稱如斯勝元復丹州治內勸龍興寺延詔居焉其邑曰八木故號米山取陳尊宿之緣也其經始日與源京兆躬運贊土以先衆勞丹已距洛纔一日程詔每往來勸發學人雖逢風雨而無開小根者多畏難而退長祿二年值妙心開山百半忌預以十月十二日就龍安寺設大會齋請五山十刹同門江湖詔乃拈香又出衣資十萬錢分送五嶽諸山以贖贖大衆亨德二年冬奉敕住大德至入寺日天使臨筵源京兆勝元率諸僚屬護衛法會

開堂罷詔闕謝恩入對便殿住職八日復回龍安凡住山前後十餘年道風振聳下寬正三年三月十八日集衆垂誡泊然蟬蛻享齡七十歷臘五十三諸徒奉全身塔於太雲山西北之岡詔眉稜凜然不假人情慎重許與嗣其法者雪江深公一人而已

贊曰關山國師示衆曰柏樹子話有賊之機意可謂千古無對也詔師承祖五世評古人公案如轉掌珠復能繼高蹤者矣鳳瑞溪惺瑞嚴當時五嶽之鸞鳳也而能稱服其說二師出人也遠矣凡看禪錄者如詔師則可以講焉不則辯似懸河舌端瀾翻若瞽者

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

○十一

演舊史也諸方浩浩地弄精而講不知墮於詔師所斥之繼續又益陷口業邪

### 京兆相國寺沙門周嚴傳

釋周嚴字東沼號雷月道人詳本座佩南禪遊交藝公之心印演釋儒典當時推重初以鈞帖出世相國土地堂日五通廟裏靈鑑昭然作墮勢日侍者衆十得鞭後升南禪桑門者宿欽名槐下公卿貴風寬正三年正月二日化于五葉菴遺偈曰東沼行脚北斗藏身露于江月萬國春遺藁若干卷曰流水集

### 京兆大德寺沙門宗愈傳

釋宗愈字泰交嗣法春浦禪師文明初住大德上堂  
 世尊拈華迦葉微笑人天因捨公案現成正法眼藏  
 增高價破砂盆子發金聲連代承虛接響便見巧盡  
 拙生棒喝交馳敲枷打鎖照用同時奮飢驅耕拈一  
 機則千機萬機齊赴了一句則千句萬句頓明只這  
 一句如天普蓋似地普擎森羅萬象色空明暗情與  
 無情悉無不向這裏該括更無絲毫滲漏更無絲毫  
 欠盈通變自在七縱八橫聖君以此救萬世之有極  
 宰官以此致四海之晏清兆民賴之樂業萬物出之  
 遂其性情直得宗風大振叢林向榮雖然恁麼諸人

日本撰述 本朝高僧傳卷之四十一

〇三十三

還識得者個一句子麼慣從五鳳樓前過手把金鞭  
 賀太平文明十一年閏九月十日化有遺偈曰佛界  
 魔界一踢踢翻末後句寧

贊曰泰交禪師句語之鮮不減諸寺之作也但以後  
 世不委其名故載提唱一篇令讀者知焉

本朝高僧傳卷第四十一

音訓

儼即貌切 榛鈕舉切 春刷上布庚切 暴魯果切 豚伯

切博麥切 瘡於會切 縮直也 蝦呼與切 小給 芥

菌上母蠶切 凍上德紅切 敦上郡昆切 厚也 礪

吳輕切 噎於歇切 楷側霜切 噴大以切 撥都奪切 薄

荒胡切 吧芭巴切 蚊上無分切 輟上此由切 戲

也分等

日本撰述 本朝高僧傳卷之四十一

〇三十四

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
 本朝高僧傳卷四十一 茲冀  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 謹

本朝高僧傳卷第四十二

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之二十四

京兆南禪寺沙門一慶傳

釋一慶字雲章平安城世家左丞相藤經嗣之子至德丙寅夏生于桃華坊第從幼逸羣不顧衣冠之榮六歲投山崎成恩寺前宵寺主通言夢謂春日神祠取青蓮華植于殿前翼日慶至十六落巾受具諱名東福應永九年明之天寧天倫彞公上堂一菴如公奉使而來慶造謁倫見器重乃賦贈曰十二年前蚤

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十二

〇二

出家因緣傳得祖架染黃梅夜半曾分付把住無容失左早往城北聖壽寺參叡陽秀公朝昏辛勤綜究內外遊學南京聽永賢首慈恩教疏陽領東福充典輪藏分位後堂秉拂說法常與叡陽許論碧巖集至其羅紋結角之處陽抵掌而賞慶嘗看奇山然公語得旨乃曰薦福古公豈欺我哉永亨二年開堂普門嗣香爲奇山拈出乙卯後小松上皇賜手詔入內講元亨釋書嘉吉元年遷東福叢林法令四序不闕審德元年夏太上皇寫御照容敕慶作贊上皇亦製和歌御書其後道俗以爲榮是歲公奉詔主南禪寺道

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十二

〇三

振筆下住職三月伏老慧日山審道享德癸酉冬左金吾源德本就建仁西來院預修七朝請慶降座說法乃曰是法住法位世間相常住松直棘曲烏玄鵲白長者長法身短者短法身到這裡心佛不二物我一如便能拈一莖草作丈六金身用將丈六金身作一莖草用善財一彈指頃人得彌勒樓閣廣額一口屠刀放下千佛數中金粟如來放光明空生巖畔花狼藉文殊不入海中龍女不向南方一念普觀無量劫無去無來亦無住如是了知三世佛超諸方便成十力應用縱橫與變無礙自利利他無施不可是謂無盡藏陀羅尼門又是謂法界無量回向必竟如何季悉拈拄杖曰樹影不隨流水空花香時逐好風來慶律身甚嚴且永亨乙卯至審德辛未脇不沾席者一十七年嘗慨正宗日就隱微而流弊滋盛居恆與衆講百丈清規因會諸家說撰清規要綱又以五燈錄取捨不一互有異同作五燈一覽圖以備學者之檢尋也每喜誦程朱說製理氣性情圖一性五性例儒圖審德元年嬰病作偈曰丁十五年坐不臥一百餘日臥不坐放屁合著大石調釋迦彌勒難作和或看採以爲辭偈者誤也病瘳延壽丁十五年寬正四

年正月二十三日吉祥坐化敕諡弘宗禪師

京兆南禪寺沙門德輔傳

釋德輔字惟宗受業千巖大公諱名東福掌藏經錦  
轂畢徧參諸方再參千巖透徹自性作偈曰抵掌論  
心心豈佛遺情忘我我爲誰鐵牛踏破虛空骨膝下  
蒲團笑展眉巖乃證焉出世勢之安養遷洛之普門  
應永未住東福丞相義持源公率幕僚臨席聽法嘉  
吉辛酉秋董天龍文安戊辰依教住南禪指門云个  
門一句舌不出口振轉天關是誰知有一喝而入住  
職不久辭回慧旦文正元年二月六日自知老死使

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十二

〇三

人擣鼓上堂說偈曰閻浮界九十七年打著南邊動  
北邊劫折拄杖底時節驀口吞卻盡大千泊然唱化  
扶拳全身空于舍空得法者南禪證夫衲聖福天祐  
麟聖福中岳本真如慕林元真如全牛爲聖福大有  
觀東福載之興

贊曰弘安庚辰聖一國師欲潮音堂上說末後句而  
入大涅槃諸弟不聽嚙牙而止輔公後於國師一百  
八十餘年矣軀垂上壽鳴鼓陞堂報衆唱偈遊戲坐  
脫誠能繼通祖之志者也非只繼其志復足使後教  
之人知禪人有別生涯焉

京兆南禪寺沙門祖默傳

釋祖默字存畊承嗣東福少室量公初住東福遷陞  
南禪入門拈拄杖云拄杖先來山僧先來喝一喝云  
同音乳同得入日日龍門特地雷就打住菴修無隱  
和尚百年忌應請陞座畊說偈曰踏徧支那四百州  
扶桑國裡立宗猷法雲重起九天上獅子峰飛入鳳  
樓還慧日山以應仁元年二月十四日宋

越後耕雲寺沙門中珊傳

釋中珊字朔海姓平氏備中人也生質溫雅聰慧曠  
等早慕祖道入種月寺從南英宗公勤侍衆究稍入

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十二

〇四

辭太偏遊叢社永亨六年附舶入明掛搭天童歷謁  
諸老在明十九年及飽參歸覲呈一偈曰月時全體  
迷空東失處通身達本源曲罷晚來人不見江村依  
舊月黃昏英月之開法越之慈光移洞福耕雲二刹  
化導共盛文明元年正月二十四日寂壽七十七珊  
在天童時自出不財買燈油田若干畝附如淨和尚  
塔所南谷菴一衆德之議道元見孫永免守塔之輪  
奩矣

贊曰慎終追遠者人之所易忽也珊公之納油田急  
於人之所忽焉其誠之不可掩永得衆免之議慶流



來者蓋能合爲人後之道乎哉

京兆建仁寺沙門真玄傳

釋真玄號太白不詳姓氏於太清渭公鉅下究大事  
因參博涉廣見辭華樞秀屢遷諸刹後視象東山建  
仁禪波羅蜜文字般若應來者之機如鐘在虛上  
堂須彌山故不著是什麼空橋陳會得什麼事還在  
恁麼人衆中還有會得什麼事底者麼舉拂子云通  
身是口只是說得這個通身是眼只是見得這個且  
道離卻這個那個作麼生擊禪牀下座上堂星霄如  
雨石言有譚露柱與燈籠夜耳語石人與木女暗奔

日本書

本朝高僧傳卷之四十二

〇五

波暴風起而偃艸急雨來而落花顧視左右云何邪  
此是一場春夢巡堂與茶上堂本來無一物直下絕  
攀援萬里無雲青天喫棒寸節不掛赤體猶存淨躰  
畢竟把著活鱗酸莫來跟咄一咄云看看無位真人  
出入於爾面門玄後寂于龍山之大周軒有語錄并  
鶴具集

京兆相國寺沙門周鳳傳

釋周鳳字瑞溪號臥雲山人泉州界縣人明德三年  
佛成道日生干伴氏旬餘州亂全家徙居丹桑田郡  
鳳年十歲丹邦亦兵寇父没于軍族徙母入京師事

外祖舅性菴主性明極和尚之係本色住菴之士也  
十四依無求伸和尚于相國性禪敬嗜學斐然成章  
十六下髮納戒諱名天龍侍大周喬公隨嚴中聖公  
于鹿苑居擇木寮又遊南都謁普一玄啟二講師聽  
賢皆慈恩之教兼學小乘却回侍嚴中分誨學徒及  
嚴中遷相國掌藏秉拂以強年轉後堂永亨丙辰分  
憲華座今茲丞相義放源公素聞德音擢舉景德開  
堂出世辦香酬於無求未及瓜期命移洛北等持丁  
巳關東元帥源持氏與家臣上杉憲實不相善東藩  
將亂源公使鳳往諷克成講和凡驛程所歷山川之

日本書

本朝高僧傳卷之四十二

〇六

俚詭閭巷之殊事及佛宇僧廬縷記不遺入東記是  
也庚申夏源公修八坂塔落慶供養舉十高僧以行  
法事鳳膺其選是秋遷相國寺朝野瞻禮如一佛出  
興於世嘉吉辛酉夏義放還慶鳳終夏槌鼓退休于  
壽星院嗣子義政相續崇信講以鹿苑任僧錄司明  
年返壽德康正中再住鹿苑總僧錄司居職五年退  
于北禪菴源相公請就知恩院講演法華日與藤末  
人列筵而聽施錦繡香合兼金若干鳳毫不可悉納  
崇壽與壽德以充修廢矣應仁丁亥京師大亂鳳布  
衣葛巾入北山巖藏投閑事者達焉時諸方叢席弊

出相仍鈞命復起掌僧錄司鳳年七十七諸山八文  
僧中庶務坐而斷之無設犯者文明辛卯帝召行在  
所降南禪詔加以紫衣堅辭不受帝益感歎將署國  
師而受戒法鳳復不就源相國奏曰追請正覺國師  
使鳳代之制曰可即齋正覺頂相衣盂杖上殿公  
卿百官嘆其儀容高古也重謚正覺曰大圓以為七  
朝帝師焉癸巳夏六月值源相國善山居士二十三  
回忌樞府建管廣院於營中預請鳳陞座鈞命頻至  
鳳曰今年八十三命在日暮況期有餘月且緩命待  
之五月七日微疾使作冷淘名諸使侍食曰是永訣

也某日早晨坐談即化顏色不變實文明五年五月  
初八日也春秋八十三僧臘六十八門人奉全身塔  
于北巖之麓鳳博識多聞善屬辭章壯年精于蘇詩  
香華諸說作莊說二十五卷補遺一卷或者謂曰佛  
氏鈔儒說非相諱乎鳳曰披發五祖再生而照覺為  
佛印佛慧為方外友如文關西夫鐵腳肩拍袂抱  
以要言之則曰釋曰儒假也安也不二境中何異之  
有年為不惑講法率圖覺榜嚴榜伽并傳燈碧巖等  
號進四來是以諸山名和日四函文令其餘論中臚  
後學者多矣又天性孝順掛搭萬年之日值其母喪

盡典書籍治辦後事焉有語錄二卷外集若干卷其  
餘著述巨多人天眼目批仰竹齋集夢語集善鄰國  
審記各下卷日件錄六十卷刻楮集二百卷是也後  
土御門帝追崇鳳道望敕諡典宗明教禪師  
贊曰明教禪師英奇寬度而自少至老勝人者四焉  
樂取善於人者一順孝於父母者二博涉內外盡其  
蘊奧者三再辭南禪之紫詔不履作帝師者四也時  
屬離亂干戈縱橫五山十刹共時廢頽三輔傳宗  
賢舉能絕者與焉廢者修焉皆自四勝中成破來者  
也余求其語錄校扶五藏書府者數矣卒未得之蓋  
後人唯事文墨而忽禪策諸家語要完者不殫煇殘  
蠹爛半成焉有悔乎

京兆南禪寺沙門素瑛傳

素瑛字蓋田承法大業基公聲價重於禪林出世  
南禪居金地院夢覺國師二百年已門商講瑛拈香  
供偈曰二百年前堅固香餘薰薰微盡扶桑法身不  
動如如體天上雲居日月長

防州龍文寺沙門為璠傳

璠為璠字器之別稱天遊姓藤氏隅州飯島人受業  
之小院參太宰竹居禪師觸事開悟傳居林拂依

惟肖巖公於雙桂請益益浚巖公以羅之稱焉復隨  
居于越之龍泉璠到永平拜璠塔傳曰璠祖自後魏  
化權宗風墜地百餘年兒孫無復矣璠漢魏起覺  
續斷茲越州刺史陶盛政創龍門寺璠門寺璠在山  
公璠示宋後請璠開堂璠據室云萬仞龍門生璠時  
如何以篋打案云佛祖立下風宰官居士奉戒參禪  
求法益才與馬坡門肥州太守天交居士對州刺史  
伊香賀氏淨久泉州太守有馬氏忠清外護思衆四  
事供億福道不振衆議欲璠爲中興璠奉竹居爲  
開山祖一日行者及晚歸寺神人倚立前溪橋上行

本朝高僧傳卷之四十一

九

者問曰在此何爲對曰和尚明日有大寧之行爲致  
爾從也翼日勝至果如其言實正四年移丹之永澤  
會中疊稱七百餘身示衆古人曰世界未起時卽有  
此性作麼生此性衆皆著語不契其意璠代曰月裡  
無纖不圓爲覺希明良公眞曰人天師表佛祖究竟  
萬古名猷四海九州聖處迄龍文構視雲亭簡禪燕  
處應仁二年五月示疾命上足大菴令補其席二十  
四日委順而化塔于觀雲亭側春秋六十五矣

遠州雲巖寺沙門慧濟傳

釋慧濟號川僧參州人也自少入邑之華藏寺慧濟

受戒讀書通義調一時尊宿問己躬下事皆以傑出  
稱之後在遠之一雲參真巖空公巖察大機而痛利  
乏濟研精參究得洞宗訣巖命補席受請任總持臨  
山門云未離一雲已登諸嶽指云是謂總持門驟步  
云老鼠入牛角濃州太守安仲常州刺史北條聖全  
賀州太守了巖三州牧劫山居士等執弟子禮聘請  
問法管贊梅山如仲不琢同幅眞云一生二二生三  
團圓同途異轍別別別也是證龜成鼈讚茂林繁公  
肖像曰大智太辯如訥如愚太華友實有古人模針  
在綿裡時睡於菟龍溪老子親授其贊嘆少林枝葉

本朝高僧傳卷之四十一

十

年年茂福東聯芳德不孤實正元年住越之龍澤居  
周歲歸一雲文明七年七月九日化太永四年夏後  
相原帝賜號敕書曰遠州地靈玉山擎洞龍勢雲巖  
寺古朱榮照鐵鳳形慧濟和尚久汲永平之餘流專  
探曹宗之奧蹟一絲九鼎傳重石於陀那尺壁寸陰  
資工夫於默坐蚤歲克行李透得機關同參稱耆英  
先登壽室肆下微號衆揚芳聲特賜法覺佛慧禪師

京兆大德寺沙門宗純傳

釋宗純字一休號狂雲子母藤氏南朝晉纓之女爲  
後小松帝愛幸逮其有娠所詣后宮出產民間純僅

六歲及安國像外鑑禪師爲童子聰慧絕倫剪中納具後學風暨於東山其哲樊聽教乘於壬生清更仁棄衆謙翁爲於西金寺翁妙心無因因禪師高弟本色之補僧也服膺高風執侍六年及翁捐世聞輩更疊和尚鉅鑑嚴密抵謁江之堅田叟拒不容止宿漁舟或臥露地懇求旬日許相看會裡枯澹而純貧窶甚齋孟不潔俗逢支寒令究洞山三頓棒因緣一夕聞鴉鳴脫然領悟詰旦呈機叟曰此是阿羅漢境界非作家境界也純曰某只喜此境界不喜作家分上叟領授記復以徹翁以降傳來印書付之蓋表授受

本朝高僧傳卷之四十一

〇十一

不妄也純便擲地而出叟托之宗橘夫人曰吾滅後什宗純橘字華林於叟之輪下究明大事總持未山之流亞也橘托帖子於源丞相純一日在源第自謂日今時佛法陵遲罕有具眼者龍蛇不辨黑白不別纖持一紙證則曰吾嗣某宗風爲某的孫膺徒浩浩如麻似粟哉叟便把遞代印記投之火中從此放曠漫遊靡有定處浴之尸陀攝之酬恩泉之慈濟松樓等其卓錫之地也後小松帝讓位之後召純入宮常問旨意寵遇甚厚後花園帝相繼崇信初稱光帝青宮未上睿心猶蒙純密奏日咨天曆數正在彥仁時

不可失帝喜曰朕儲定矣彥仁後花園帝也是以純承三帝之靈所在衆常盈席示衆曰凡學禪道者切須斷絕惡知惡覺至正知正見也惡知惡覺者古則因緣理論文句學得底勞而無功者也如此之輩對問羅老子面前有甚伎倆正知正見者日用坐斷涅槃堂裡全身墮在火坑底子細看來苦中有樂若能見得不昧因果境若見不得永不成佛汝等勉旃冬至示衆獨開開門不置方可中誰是法中王諸人若問冬來意日自今朝一線長須野狐話日千山萬水山僧居甲子今年五十餘枕上終無老來意夢中猶

本朝高僧傳卷之四十一

〇十二

讀小時書到一樓家樓有老牛純書一偈掛其角端曰黑麤行中是我曾能候境也境候能出生忘卻來歸路不識前身誰氏僧其夜牛驚矣牛主來日師領渡我牛純只一笑以三轉語接學者曰天高地厚赤肉白骨過塞乾坤底太人境界也無三二了達漢是如來禪是祖師禪欲知此兩轉語須到慈氏下生文明六年春同門者宿梓救黃來請視象大德純作二偈謝恩自誓終不住但賜鳳書紫袍耳七年在新之虎丘門人作壽塔純隨日慈楊作頌示衆十三年十月初示疾十一月二十一日就座書偈日須彌南畔



誰會我禪。虛堂來也不直半錢。眼目而化。壽八十八。門人昇全身座。于慈楊之塔。純憤當時不。會祖意。而蓋主大法者。尋常混跡。不拘威儀。巡行城邑。聚落。論誘。縮口。吹尺八。腰木劍。賦偈頌。詠和歌。頗恣其言。如風狂。然侍奉交。病手。自雪襪。又大德。火後勸化。四方。總建法堂。慨龍翔寺頽廢。勸力募緣。還復舊觀。是豈狂也哉。偏大信根之所作矣。平生偈語。門人編輯。曰狂雲集。盛行于世。

贊曰。有摩醯眼。而可見。四天下。也。純公出陰界之人。摩醯不能窺其度內。然憤世矯時者。危言危行。焉今。

之人。叨謬許。或以爲隨。撥無。或以爲馳。遠矣。夫有格外之機者。有格外之事。非墨守規中者。所得而甄別焉。觀純始卒。所謂虛堂東海之兒孫也。辭世之語。不復誣而已。

京兆妙心寺沙門宗溪傳

釋宗溪號雪江。攝州人。源姓。其先野間侍中某。爲大將軍。尊氏源公之麾屬。以雄武聞。食邑野間。因家。居焉。溪生質穎利。早有出塵之志。稍垂舞勺。辭膝下養。親鍾愛。不許溪竊遁。入洛途遇一僧。與之偕行。及第五橋。僧曰。子將何往。溪告素志。僧誘至東山。投五葉。

○

○

○

菴文瑛瑛公瑛。佛源禪師之孫。一時英衲也。一見器。解專攻習業。剪髮納戒。請問耆德。以明心地。常爲急務。聞日峰舜和尚盛化。乃往尾陽。參于瑞泉。一承提。示。服止。著精。及峰再興。妙心。平居枯淡。衆不堪其憂。溪任。綱維者。二年。不與常住。飯。峰母。向人稱溪維那。器度宏大。佗日多。接人。公矣。指依義。天于瑞泉。天風。骨孤硬。不輕許。可溪每請益。必遭呵罵。溪不屈抑。倍。鍛倍鍊。密得罷休。時天已默識。命守養源之塔。乃臨。遷化。付法語。而印之。細川京兆勝元崇溪道貌。延請。補龍安會雲谷。桃隱相天。順世。二叔。參徒皆歸。鎚下。觀音尾之瑞泉丹之龍興。皆以溪一人權之。上堂古。來衆學。衲子或句到。意不到。或意到。句不到。或意句。俱到。或意句俱不到。意句俱不到者。恰如牛毛。意句。俱到者。如牛雙角。汝等諸人。善委悉。結制上堂。舉釋。迦老子曰。無上法王有大陀羅尼門名曰圓覺。伽藍。諸禪德。今日以大圓覺爲我伽藍。安居禁足平等性。智底。一句還。委悉麼。芳艸渡頭。韓幹馬。綠楊陰裡。載。露牛。示衆古德道。年。閑餘也。不知月。太。小也。不知是。爲衲僧行李。將爲顛頂。龍洞。自代。云不見道。可中有。

個漢牙如劍樹口似血盆一棒打不回頭東陽出衆  
日三月懷遊花下客一家愁閉雨中門溪日爲是初  
僧行李爲禪預備伺陽日恁麼也得恁麼也得溪  
日二千里外摘楊花寬正三年大德寺虛席溪奉教  
入寺天使入山龍象駢闐源京兆勝元源金吾持豐  
俱率士屬擁衛法筵實一時盛事也開堂罷誦開謝  
恩三日解印應仁元年天下大亂妙心龍安悉雅兵  
變溪避亂於龍興攝政兼良藤公寄詩曰聞說龍興  
雲亦浮雲龍變化卷潭湫喝雷棒雨無途轍天下蒼  
生蘇息不溪和答曰喝雷轟起盡闔洋解道龍興百

本朝高僧傳

本朝高僧傳卷之四十一

○十一

人秋廢下仁風處原野等閑吹散陳雲不文明初源  
京兆權建龍安於城中迎溪而居九年丁酉帝敕左  
中丞藤兼顯廣賜妙心再興之詔溪感皇恩隆至日  
務修營未周期年土功奏成帝大悅賜龍馬并銀券  
若干晚年得風痺左腳不支投老正法山中衡梅院  
雖在病牀臨對不倦一日召侍者曰我久便埋莫移  
時言訖脫衣實文明十八年六月初一日也報齡七  
十有九坐夏六十有二諸徒奉全身藏于衡梅之塔  
溪志操剛介饑寒不撓奉日峰者十九年侍義天者  
十五年前後三十餘禪始終如一攻苦食淡古來鮮

矣然賦性急率師叔桃隱以急世爲之凡所居  
院菴脇日妙喜洋嶼衡梅慕閣大慧泉之風也及提  
綱振領森嚴不可觸犯其機和氣則聞提歸降以故  
英和達官瞻禮無虛日路傍兒卒無不望風而拜焉  
教誡佛日眞照禪師

贊曰關山國師壁立家風不任文字之伎巧直示本  
分之宗乘雪江溪公正統六世荷一縷之重寄而迺  
祖之禪道一跌踈踏焉接出景川隆悟溪頓特峰傑  
東陽朝四神足雷同于震中雨澤于塞外方今妙心  
宗派瓜瓞綿綿華衍天下者自雪江師而副之也

本朝高僧傳

本朝高僧傳卷之四十一

○十一

### 上州雙林寺沙門正伊傳

釋正伊字一州姓藤氏防州人母夢白玉入胎寤而  
卽娠誕時異光照室入本州般若寺執童役十二  
落髮納戒習顯密法年過弱冠歎日教相繁多縱窮  
得之知入海算沙耳棄去上京依日峰舜公於妙心  
請問禪策誓止久之碧巖公案下一衆訕譏謂牧翁  
飲公於丹之圓通下日搜紫伊卽擔以頤翁日所作  
已辨還得己利也無伊日不修萬行不歷僧祇翁謂  
衆日新到禪客非凡流見希明良公於越之慈眼問  
答酬酢間忽爾省發明日璞玉渾金堪作何用伊日

本自天然不假彫琢便拂袖太拜月江和尚於大川間日江月照松風吹水夜清宵何所爲江日可憐許暫待別時祇對伊日祇謝和尚答話江呵呵大笑伊傳十餘年師資機合江什信衣太田道眞創精藍於相之山下請伊不就讓法兄華交夢公左金吾長尾俊來建禪林寺延之伊勸請月江和尚爲開山祖盛揚宗乘諸職得人禪徒來萃七千餘員後住能之總持庵移尾之楞嚴初之玉泉石井三結寺三遷相之最乘晚返禪林長享元年十月四日俄色大衆親履後事奄然坐脫世壽七十二法臘五十九有四弟宗乘矣

丹州瑞巖寺沙門大通傳

釋大通尾州源姓新田之族也精通宗說善持毘尼得法春嶽喜公隱逸於伊勢朝熊山此虛空藏菩薩應現之靈地也一夕定中菩薩告曰丹有勝區曰半雲山子緣在彼勿滯於茲通即移錫其山奇秀絕於人烟下里餘矣通披荊榛端坐盤石無復營營日有二僧相供之里民相傳歸依饋給聲化稍流羣客

〇七七

本朝書卷第卷之三

〇七八

請以相之淨妙通不希命道俗強之不得已而人稍荷山一香供春嶽居之一回解印返丹丘長享三年正月十日罹病遺誠問人又告里民日因果歷然賞罰可懼恬然化太壽九十二臘七十一諸徒奉全身建塔扁鵲足通題自照日瑞巖真蹟主人公觀面分明一禿翁底事欲言言不及龜毛漏泄太圓通延壽丙辰余登安樂山住持見外方公出庭而迎余日胡居勤也方公曰瞻翁夜夢當寺開山手持笠杖來入丈室吾終朝怪之今公來而尋開山事益以爲異余日足下安住山寺作務無怠故大通禪師感之定中

京兆南禪寺沙門景三傳

釋景三號橫川不得俗諺京兆人也年甫四載投其父執童役及年十三依安國龍淵禪師性敏好學蚤著文墨諱名萬年值學仲芳公三十三回忌赴會齋建拜其肖像有屬于心自爲之嗣長謁諸山名宿皆承推許屬于應仁之亂諸刹焦土僑居江之飯高山有小舍松齋居士長和歌者隨三學禪構識廬菴延之六夏寒暑迄萬年山營築斗室扁曰小補文明辛

王太清軍義政源公聘出世淹之等持上堂祝聖畢  
恭香曰昔岳林禮馬祖塔頭發大機無心可傳薦福  
見雲門錄直得大用無法可說雖然如此只者無說  
無傳只是眼中著屑別別舉香曰者個山僧甫十三  
歲於蒼源塔冷地裡拾得底木樛日往月來與無影  
樹連其陰霜半雪苦與不萌枝同其節忽被業風吹  
本向爐中薰徹郁郁芬芳塵塵利利供養相國第一  
座疊中老拙不敢報答深恩與起先烈只要人知三  
十年後生惡芽孽次住相國以何謝事休居小補十  
七年乙巳再住相國上堂以拂子打圓相曰諸佛出

本朝高僧傳卷之四十一

○十九

世各現常光前釋迦出現於世一尋常光明明歷歷  
後彌勒出現於世十里常光燦燦煌煌結拄杖曰山  
僧拄杖子前年入此門一尋常光未為短今朝入此  
門十里常光未為長塵塵清淨法界處處圓覺道場  
所以拄杖子結夏安居禁足乾坤大地一時安居禁  
足拄杖子破夏入院開堂森羅萬象同且入院開堂  
講是法這常光中流出安堵普天率土利益三世十  
方何以爲驗卓一下曰皇天開闢大佛日上扶桑長  
亨元年遷南禪寺源丞相贈以金襴伽梨年五十九  
以臘臘高當時仰止明應二年十一月十七日寂于

小補壽六十五歲東遊集開門集京華集十卷

講曰或問十三童子實有得悟乎余曰不也宗門下  
之大法不可容易得英傑之人二三十年盡性理之  
說衆窮鑽磨一旦廓然投格外之機是謂得悟也或  
有上機散化之人先未嘗修不記一丁一撥便轉而  
得悟亦未有不待明師點發之時也是豈童蒙之所  
自見而獨得哉夫禪法之盛也無如唐宋然只俱祇  
和尚之童子年十二知得一指頭禪前後一人而已  
以悟所分明天許焉人許焉載之輝于燈錄矣橫川  
三公等持開堂供祠香於墨仲日甫十三歲於蒼源

本朝高僧傳卷之四十一

○二十

塔拾得此獨自許而人誰許之耶吾佛稱大偏生知  
猶且六年入山見星廟悟自爾已還歷代祖師靡皆  
不經此時節故一言半句動天地感鬼神傳爲公案  
而有益千萬世矣余閱京華集但是尋常蹤徑文字  
而不見驚人之語也載法語二篇以備後人之誣焉

### 京兆大德寺沙門宗熙傳

釋宗熙字春浦本姓源氏播州赤松縣人母夢吞劍  
而娠及生聰察受業於東山乾心禪師十八圓具典  
司藏鑰二十四歲繼養叟和尚於大德寺自發誓曰若  
不究宗旨竟不退休矣妮妮叩請觸事有省持淨三



年見月，在餅中見發，祖意，更不肯示，以雲門關字，一日摩爾，投機呈偈，曰韶陽一字關鎖重重，臂透過步步清風，更付先師法衣，以爲信證，命守雲門祖塔，更滅後太居洛東，大蔭菴，聲名日著，戶外履滿矣，寬正二年出世，大德當晚，小參曰，山僧昔日掛錫，此山與諸人看毛，團結堂中，聖僧卻誦之，今朝薰席，此地與諸人鼻孔相拄，殿裡燈籠笑展眉，鳴鼓小參，說家調，則沒巴鼻，沒交涉，禪子訝中看垂，更答話，也得理，無曲斷，不要答話，也得，事不橫推，兩條紅燭盡，更說鐘沈時，不是佛法，大意全非，祖師西來，畢竟如何，系

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

○五

悉拂一拂，日如今枕上，燕閑夢太小，梅花一任吹，初贈左相源滿詮建妙雲院於洛東，其女通玄寺長老尼竺二英承鈞，且草額，養德以奉考妣之香火，請熙主之熙後移之城北，應仁軍烟紫野，罹焚燬，避亂止于攝之城，福寺泉之陽，春菴索居，八載有旨，再董龍雲，起火後之廢住，未數載興復就緒，文明辛丑建清泉精舍於伏見，翼歲構松源院於龍霽山爲終焉計，後土御門帝聞其德望，特賜正續大宗禪師，熙臨滅度，拈拄杖示衆，曰遮木上座遊戲神通，常在家舍不離途中，有時拄天拄地，有時作蛇作龍，灰活猶然口吞

別祖與養自在牙呀，太虫臨行，添得腕頭力擊碎，華山千萬峰，喝一喝又喝，曰老僧滅後汝等不用建塔，聞吾偈，曰全身無舍利，鼻骨一堆灰，掘地淺埋處，青山絕點埃，諸徒請辭，偈熙復書曰倚天長劍急磨刃，來祖佛共殺，五逆聽雷擲筆，冷笑一聲而化，實明應五年正月十四日也，壽八十八臘七十一

京兆南禪寺沙門龍統傳

釋龍統字正宗，別稱蕭菴，山城州人，姓平野，州木守東益之子，垂髫依瑞嚴，惺公于建仁，及鍾髮納戒，叩請得其編，江西慕哲共統之族叔從二師遊，鈞玄索

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十一

○五十一

隱括書史，辭章凡富，出世建仁後，陞南禪，常居東山，靈泉院，統賀天龍藏主，偈曰四十九年胡亂說，瞿曇舌上鼓雷風，龜峰藏主談鋒別，不在五千金梵中，明應七年正月二十三日化于靈源院，所著語集曰秃尾鐵舌帝秃尾柄帝秃尾長柄帝

京兆南禪寺沙門宗純傳

釋宗純字溫中，不詳其姓，諸州里童齒出家，依春夫宿公久經浮彌，薦得密旨，又浮海入明，謁諸名宿，既歸出世，建仁嗣香，燕向春夫有教住南禪，道俗歸嚮，晚年居福聚，嘗題自照曰大唐日本一身隨緣，蒲團

本朝高僧傳卷第四十二

**鴉臭** 上於加切  
下尺救切

璆於京切璆符艱切璆同璆璆七迹切璆皮意切璆死也璆

杜結切  
副贊通切割也劑與  
者既劑又四折之 恆音遄切  
鴿古育切  
隲

磨也 晨輒切  
 躑 昨也 上除雷切  
 羆 麋也 麋歷切

日本經濟叢書  
本邦主要物產及產之第一  
○千三

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鏤

本朝高僧傳卷四十二  
茲冀

上報四恩下資三有家道繁興種智圓明

寶永丁亥佛成道之日

濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第四十三

濃州盛德沙門 師蠻 棋

淨禪三之二十五

京兆妙心寺沙門宗隆傳

釋宗隆號景川，姓平氏，勢州人，自綺年比縣量，隨隊恩其脫俗，歸真如良駒，止廐像鸚鵡，望香父母，察志棄州之圓明寺，剪髮肄業，早知法有本專，修禪觀十九，逢累遊方，參雲谷祥公于尾之瑞泉，看東山阿誰話，竭方參究經三寒暑，而不啟發，依義天詔和尚于愚溪寺，寅夕加精彩，往讀州慈明菴，問桃隱朔公曰，

何是佛法的，大意隱曰，我宗無語句又無一法與

○

入隆曰，滿把驪珠撒向人，隱曰，識這般事，便休，隆依止不倦，追隨勢之大樹，提係屬茶本因緣，久之不契，隆心口憤懣，道洛之龍安，再參義天，復訪大樹，勢洛往來至三四回，隱曰，來來太公，有什麼用處，隆曰，始隨芳草本，又逐落花，回隱呵呵大笑，凡在樓下，餘十三日，隱愛法器，福加針刺，湯雪江湊和尚于龍安，備心親附，江門風聲，止事人慎進，一日入室，纔欲開口，江便打隆，豁然大悟，乃作偈曰，痛棒機先不讓師，一拳拳倒五須彌，威風凜凜，大地三拜殷勤依位。

王來也，州瞿然曰，大王萬福，侍者曰，未到和尚，州曰，

○

時唱酬相契，如兩鏡相照，和州高市郡主橘榮家建興雲寺，隆為開山祖，禪客齊濟，鬱成叢社，文明七年奉敕遷住洛之大德上堂云，大雄拈華大龜微笑，平欺一會聖果，鈍置無量人天，依之傳付，金襴於教外，倒卻門竿於機先，西天四七東土二三，依之終始授手，歷代祖師天下宗匠，依之的的相傳，以至王道依之安，文武於四海敷德，恩於三邊，衲僧依之藏機鋒，乎手裏得法門，乎百千阿呵呵，新霽山依之今日開堂，端為祝延召大眾曰，會麼，其或未然，拈拄杖云，了卻常笑菩薩，魚緣復舉，趙州一日坐次，侍者報曰，大王來也，州瞿然曰，大王萬福，侍者曰，未到和尚，州曰，又道來也，後來黃龍南禪師曰，頭頭漏洩，遇仙陀侍者只知報客，不知身在帝京，趙州入脚求入，不覺渾身泥水也，拈云，太大小老黃龍，恁麼拈撥，可謂土上加泥，鋪上鋪花，霽山更述一偈，打破趙州關，特地呈示諸人，太也大王來也，大王來，趙老機鋒太俊哉，萬福聲前，若試看麒麟現瑞，鳳凰臺隆後，歷遷洛之妙心龍安尾之瑞泉丹之龍興勢之大樹，諸利石京兆細川政元於洛城中建大心院，請隆住持，涅槃會上堂大覺世尊，今朝於鶴林樹下入太涅槃，若謂佛

滅度入地獄如箭射。若謂不滅度。既示涅槃相。怎麼說話諸人。且道意在甚處。良久。曰。佛滅二千年比丘。漸愧元日上堂一條拄杖。自天真八角磨盤呈。本身真道。新年無佛法門前楊柳舊時春。雖然恁麼賀新年。底一句作麼生。道盡茶淡飯隨家。豐儉元宵上堂。今宵處處燒燈。一燈分爲百千燈。且道那一燈從什麼處起。遂喚直歲。曰。拈卻門前下馬臺。明應九年春在。大心院示有微疾。三月初一更衣端坐。自書偈曰。元本無明七十六歲。末後牢關三千條罪。連喝兩喝。擲筆而化。諸徒座全身於法山之龍泉菴。隋塔曰。

大龜救謚本如實性禪師

贊曰。柳示雙趺。棺遺隻履。所以佛祖臨終。表密印也。從唐以降。禪門諸師。偈以蔽之。本朝特然。見景川禪師。末後句。自出常情。有衲僧氣息。夫妙心法流六世之下。派分成四。師居上流。焉此時。關山國師之道。爲未寂寥也矣。

京兆萬壽寺沙門梵報傳

釋梵報字。天祐。承嗣天龍。雪心安公。夢窓國師四世之孫也。以內外該貫。爲時所推。宣正癸未。春依鉤命出世。浴之萬壽上堂。舉福州祿禪師開堂僧問。今日。

一會何似靈山祿。曰。徵古傳。今拈曰。恁麼問答。趙昌面花新。萬壽靈山會未散。八部尚光輝。解夏上堂。荷甘風翻白。蓮腮雨退紅。一面鏡沼涵得秋空。以拂子點空。曰。見麼。鷺鷥飛入碧波中。乃曰。華嚴四會覺。林菩薩偈曰。若人欲了知。三世一切佛。應觀法界性。一切唯心造。答京兆。人生不修善因。久入冥府。地藏願王。懲深罪。誡教此偈。誦當誦。偈。地獄受苦衆生。皆得解脫。故謂之破地獄。偈。大衆今日爲多少。父母一切幽靈。三解脫門頭請誦一遍。山僧更著注脚。太若人欲了知。三世一切佛。泣露千般。艸應觀法界性。一。

本朝高僧傳卷之三

○四

切唯心造。吟風一樣。松豎拂子。曰。龜毛子橫點頭。云。靈應注脚。如郭象注莊子。別下一筆。好嘴智不到處。切。道著上堂。舉慈雲慧禪師示衆云。大衆會麼。五月十五日。即不問胡盧裏走馬。一句作麼生。直饒道得。也是。胡盧裏走馬。萬壽不然。胡盧裏走馬。即不問。五月十五日。道將一句來。若道不得。三條椽下七尺。單前放出胡盧裏馬。看喝。一喝下座。報所著。有萬壽語錄一卷。萬壽書記一卷。

京兆妙心寺沙門宗頤傳

釋宗頤字。悟溪。尾州丹羽郡人。不記姓族。母氏方。瓶。



夢高僧投宿至生而三意氣不凡歲及志學入邑之  
 小院剪髮受戒禮日峰禪師於瑞泉侍奉巾鉢峰遷  
 妙心之後留侍于義天學內外典辭太省問峰于妙  
 心參雲谷祥公于濃之汾陽進退籌室殆于十年謁  
 桃隱朔公于大樹投誠年久後依雪江于龍安一日  
 問答江震威而喝當下豁然太悟從前諸師垂示至  
 此洞曉無餘偈呈所悟江付印荊便旋粉邑青龍山  
 翼構臥龍菴休居長養濃之郡守越前刺史齊藤利  
 永嘗入日峰雲谷之室字稱古巖與頓有素其子越  
 前刺史利藤法諱妙稱號持是院相攸於稻葉山麓葺天台啟

由參本朝高僧傳卷之四三

事之舊趾殿宇輪奐甲于州治以奉其生源成賴之  
 香火請願為第一世山名金蓋寺號瑞龍後花園上  
 聖陞為官寺賜宸奎寺額後土御門帝重降綸命準  
 別十利之位利藤問道參禪執禮欽尚雲水海會七  
 百餘員文明二年夏奉敕住洛之大德當晚小參拈  
 提雲門太師示眾云聞聲悟道見色明心觀世音菩  
 薩將錢來買餅餅放下手却是饅頭踈脚阿師恁麼  
 說話大似鄭州出曹門頓上座則不無卓拄杖云泉  
 聲中夜後山色夕陽時十二半冬移尾之瑞泉據室  
 日德山奉臨濟錫山僧東之高閣放下竹篋云大海

從魚躍枯木日迦葉添蛇足盧能刻劍痕搭云祖禪  
 不了殃及兒孫翼歲告退再遷大德上堂舉拂子云  
 龍峰山中那一審光明燦爛照河沙大燈國師信手  
 擊碎了散作花園園裏花世事管拈一枝拄泥帶水  
 迦葉獨解微笑逐惡隨邪以至馬祖百丈以之提振  
 正令坐斷千差德嶠濟北以之放惡氣息弄毒小牙  
 天下老和尚以之殃害衲子結得冤家頓上座以之  
 蕩除活業別立生涯敢問大衆受此恩力耶若道受  
 波斯人關市若道不受啞子喫苦瓜不涉二途如何  
 看到太金爐八流月金殿殿景般記得僧問雲門佛

法如水中月是否門曰清波無透路恁麼酬對諦當

則不無爭奈放此僧輒州寮裏拈拄杖云當時若是  
 雙脊與痛棒管取光前絕後雖然恁麼如雲門答處  
 諸人如何細素得卓拄杖云南北東西無路入鐵山  
 當面勢難鬼視象三日提鼓而退十六年結夏日住  
 妙心四節日聖陞堂示眾畫規無漏記得浮江禪師  
 因雪峰領眾到門云即今有二百人寄院過夏得也  
 無江將拄杖劃地一下云者不得知浮江恁麼道意  
 在那裏各請致別來衡梅雪江老師云一人在孤峰  
 頂上小靈頂下人行淡淡海底不涇脚頓代云把斷

要津不通凡聖示衆扇子踰跳上三十三天築老帶釋鼻孔東海鯉魚打一棒雨傾盆頓代云禍不入德家之門弄泥團漢有其限頓代云見罷青青竹和衣自在眠頓住妙心瑞泉共至于再及解印返瑞龍官族吏民靡隨歸法朝廷聞其偉望特賜大興心宗禪師之號明應九年九月六日示微恙蛻化壽八十有五臘六十有奇塔于瑞龍及妙心之東海菴扁曰虎穴頓妙心四派之一也出神足九人皆出世大德妙心有六會語

贊曰古人之三上九登勤苦無代只欲見本來自性

本朝高僧傳卷之四十三

〇七

也心宗禪師歷抵雲谷桃隱等四老學等匪懈漸及半直雪江室內時時熟一喝機先擊碎須彌其辛勤得悟自合古人之風矣今其支流展轉溢餘源深而流不絕之謂與庶幾就中有續佛心宗人矣

京兆建仁寺沙門龍澤傳

釋龍澤字天隱蒲州博西郡路陽子也慈恩寺僧收而鞠養年甫十歲上京之東山拜寰洲衆和尚執驅鳥之役依羊雍染侍二十年其性聰睿博覽羣書後爲天柱之嗣柱嗣聞溪壑澤初出世洛之真如文明軍間十住建仁冬至上堂拈拄杖畫一畫曰擊開混

泥放出鐵良崙左邊一卓曰大哉乾元右邊一卓

曰至哉坤元四時行矣天何言哉百物生矣地何言

哉孟軻謂之浩然氣老聃名之玄牝門山僧一條羅

練繫三冬雖無暖氣無端抽太極仁根看看天人羣

生皆承此恩解夏上堂統三千刹海爲圓覺仰藍融

十世古今爲自恣時節佛佛萬行總在這裏人人三

昧不離此中不分太素小乘何論持戒破戒今日幸

是布袋頭開高挑盞盞東本也得橫擔拄杖西行也

得前途若有人問一夏九旬被幾枚鐵彈子又且

如何咄今日是立秋上堂明月露露平蕪迢迢秋風

蕭蕭落葉索索雁過長空影沈寒水燕知社日夢歸

故園不是時節因緣亦非神通道力自然暑往寒來

不覺面雖頭白生從事大無常迅速諸仁者放下諸

緣工夫純熟麼如古廟香爐麼如一條白練麼如寒

灰枯木麼若又不焦麼端坐思惟與堂中聖僧商確

澤退居大昌院遁老而化著翠竹集如集默雲集等

著千卷

系曰澤公劉覽內外遺於後學者多矣然建仁開堂

有言嗣法有三上士嗣怨中士嗣恩下士嗣勢這片

名不見其面天柱禪師鼻孔夫宗門者以直指面命  
的的相承谷古塔主距雪門百年而稱其嗣青華嚴  
未始識大陽而嗣之洪覺範評謂曰於已甚重於法  
甚輕益以茶授受之要也澤公非不知之今天來前  
何其言也不訥邪

京兆妙心寺沙門禪傳

釋禪傑號特芳不審姓系尾州熱田人少上京師受  
業妙喜院瑞昂禪師昂法燈國師之裔也掛搭慧峰  
日長才華聞關山派下禪道鼎盛參義天詔于龍安  
依雲谷祥于汾陽桃隱朔于大樹周回累年無開發

日本書紀

本朝僧傳卷之四

〇九

處雪江輪下得慧坐地出歷在丹之龍興禪之海清  
禪客靡風爭先盈釋文明戊戌秋奉敕視察洛之大  
德師門曰雪門禪新定機願視左右曰皆天無處不  
光輝陽棟室曰二鐵圍可透金剛圍難透四大海可  
吞栗棘蓬難吞以竹篋打案曰還我命根來上堂拈  
拄杖曰今朝拄杖始開封四海八紘雲也從卓一下  
日一聲霹靂動天地龍霧山頭化作龍噴用化作什  
麼靠拄杖曰到者裏明暗色空各歸本位山河大地  
不改形容淨裸裸赤灑灑風凜凜水淙淙且道是什  
麼時節倘於此薦得佛恩皇恩一時報畢矣其或未

日本書紀

本朝僧傳卷之四

〇十

厥舉拂子曰聖代祇今多雨露萬竿松在祝融峰冬  
至上堂鴻蒙未分先一氣不散伏犧初畫後三才既  
昭是故一陽來復君子道長羣陰剝盡小人道消樹  
頭一雙鯉魚擺尾石上丈二玉笋抽條葛拈拄杖云  
與麼說話子細點檢將來只這陳年曆日更有新條  
在懸取拄杖子說著卓一下云本是太平無事客不  
知身世在唐堯復舉首山僧問如何是學人親切處  
山曰五九盡日又逢春這僧舍元處裏問長安首山  
老終心切爲他詳解今日若有問如何是學人親切  
處壁口便打何故官不容針私通車馬傑由住妙心  
移尾之瑞泉兩祖具前拈香曰二株嫩桂久昌昌枝  
葉垂陰遍十方慙愧拙疎乏攀折等閑拈作一爐香  
且道爲是報恩足矣無復家醜向外揚麼那伽定裏  
笑具一場檀越開丹之龍潭精藍延招唱道石京兆  
源政元聘補洛之龍安歸嚮殊渥構西源院於山之  
側自上壽塔永正三年九月十日化壽八十八傑妙  
心四派之一也有西源錄載蓋大寂常照禪師  
贊曰特峰禪師初以才雅鳴五嶽入雪江笏室嗣盡  
舊習胸襟流出句語清絕雖宋元諸師而黃絹幼婦  
不減高價矣大德入寺佛殿落句自點胸云天下太

禪佛即是萬人傑吾不以爲雲居羅漢也

長州大寧寺沙門須益傳

禪須益字大菴久在上州雙林寺參一州伊公俊依  
奉之瑞禪師而得證悟補長州大寧移住防之龍文  
又受請董龍之德持解印回龍文室中舉女子出定  
話示學者衆下語益不肯有一僧曰睡美不知山雨  
過覺來殿閣印生涼益曰是則是只是弄精魂僧曰  
和尚作麼生益便起本

京兆大德寺沙門英朝傳

釋英朝號東陽土岐氏濃州賀茂郡人五歲上京禮

本朝高僧傳卷之四十三

本朝高僧傳卷之四十三

〇十一

天龍玉岫種公執童役稍長落巾圓具資性逸發內  
外經籍過目即記親附岫于南禪久之辭太偏踵叢  
席聞雪江澄禪師道貌掛錫龍安決志依之受江開  
示傳持心印出住丹州龍興文明辛丑奉詔興洛之  
大德周歲遷妙心歷三寒暑主尾之瑞泉渡之源司  
農卿少林寺請朝爲第一祖尋徙州之大仙定慧二  
寺所到數創建太法幢道俗宗仰如衆木歸巨匠焉  
半夏上堂一夏半過任運騰騰人人護鷄之戒如雪  
個個守蠟之行似冰雖然與麼如臨濟半夏上黃檗  
諸仁者曾夢見也良久日半夏猶在各自努力看珍

重中秋上堂人問月半天上月圓王道天地未分已

前個月在何處良久日無人知此意令我憶南泉冬

夜小參否極泰來陰剝陽復小人道消君子道長爰

觀易中陰陽之變化足知天下佛法之興衰方今宗

門之弊危如累卵微似懸絲諸方稱明眼者或抱妻

罵釋迦或醉酒訶爾勤撥無因果自謂快活初僧似

則似是則未是或侵掠常住恣自己利貴鬻豪奪

權謀世住著寺院如蛇蛇戀窟不循規繩魔魅男女

學者隨之拋卻雪竇承嗣德山盜法負恩乃稱誰某

的子弟孫安坐師位者如稊花杏子相似連磨一宗

本朝高僧傳卷之四十三

本朝高僧傳卷之四十三

〇十二

將掃土而盡法道元氣至此五陰剝盡悲夫雖然與

麼一陽來復唯在諸仁者一機撥轉三條椽下七尺

單前忽然豆爆一聲則有甚麼德山臨濟人人鼻孔

透天本也咄朝八坐道場四十餘年應機演法耄期

無倦在妙心時多講祖錄五山衆僧負我填門永正

元年八月在濃之少林示微恙二十二日作偈示徒

日造化小兒休騁入靈臺不執一微塵侍僧勞苦以

何謝離菊半開楓葉新二十三日源司農爲朝照容

諸賢即贊曰呼翠竹爲眞如錯喚黃花爲般若錯舉

竟有若非仲尼画師画師莫將五生鐵鑪一大錠歸



二十四日端坐書偈，日涅槃，四柱下時，柳折看，看珊瑚枝枝撐著月，憑甚魔官化墨，魔膽落，喝置筆而化。壽七十七，坐六十四夏塔于少林，朝著正燈錄二十卷，八會法語門人編緝爲十卷，曰無孔笛，朝亦妙心四派之一也。賜諡大道真源禪師。

贊曰：世人漫評稱才，東陽不然，實是本色衲僧，也不信者，請看小參語，不離文字之性，而如此言，哉！蓋妙心門下謂之命世宗師，亦未爲僭之。若夫文才，佗之小技巧，但以出後時，不能無少渾厚之嘆，惜而已矣。

越前永平寺沙門慧應傳

釋慧應，字曇英，本貫山城州，藤姓，有故產于防州。至三歲，偕父母寓遠之見付縣，偶有相人見之，曰：此子爲千人之英，旅店之主乞爲義子。及甫六歲，投金剛寺，一所習學，不勞再訓，年至舞勺，蓬髮受戒，遊學掛搭相之圓覺洛之相國寺，衆頌頌十九，往上之學校，聞東魯書，一日誦金剛經至四句之偈，自省，日時不待人，豈可拘文字乎？徑如越之慈眼寺，問天叟和尚，日生從事大無常，迅速請師直說，叟曰：這顛頑不可向他求，翌日入室請指示，叟曰：你除卻平生知解，一向修禪觀，應專一繫念，殆忘眠睡，一夜大雪，寒月交

映定，起見之，忽然契悟，拍手曰：佛法元來無多子，時叟巡堂把住，曰：你見個何道理？速道，速道。應募面一掌，叟大笑，歸方丈。應隨後拜，叟曰：且坐契茶，應拂袖而出，侍叟五祀，益探玄樞，辭遊長州，謁竹居和尚於大寧，問曰：天得一以清，地得一以寧，未得一時如何？居曰：卽是大寧，應曰：如何？是此中，生居曰：眼橫鼻直，應曰：未具面門，時相見了也。居曰：猶隔萬重關，應曰：門前金剛空，捧拳往防州龍文寺謁器之璠公，之曰：尋師訪道，得何邊事？應曰：鼻孔依然，樹脣上之曰：奈無位，與人面門出入，應曰：這般閑事，還和尚之便打。

日本釋教 本朝高僧傳卷之四十五

因居版首，依月江和尚于尾之楞嚴，又表率一衆，江順世後，然一州伊公不伸一詞，機機相契，出補上野雙林，文明壬辰秋，隨州在相之最乘，復爲六百衆，上首州一日謂曰：古人於先祖道場傳法，傳不續，佛祖慧命今在，你乎卽付洞上之宗記信衣，應後住玉泉最乘，又創越之林泉上之長年，居第一代同門，胥議主，越之永平，盛化四衆，不久回雙林，文龜初構小屠麻號，宿盧謝事，休居不後，取滅焉。

京兆大德寺沙門宗真傳

釋宗真，號實傳，林氏，濃州慧那郡人，幼慕父母，四歲

入大圓寺服僧役十四上都居東山天潤菴依晉舉才禪師專學文墨十七爲大僧居知客寮二十八司經藏鑰結制兼佛衆皆褒之真奮起謂文字義學豈決生从耶卽出東山參春浦熙和尚于大蔭菴浦下面許參堂盤桓席下餘十二年遂了畢大事浦仙今號并偈曰虛空無人容易過機權一句辨龍蛇天真獨明爲君決的的持來分付佗文明十八年奉敕住龍審山浦遣侍者授養叟衣晚參拈拂子云山僧今夕隨例小參大似依樣畫葫蘆雖然與麼家訓一句如何施設抄著釋迦彌勒則不拘範模棒喝交馳與

本朝高僧傳卷之四十三

○十五

臺縱橫殿上烏龜腹壁吁鞭通裡奴白牯則不滯有無直截根源立地成佛變毒藥作醍醐且道夜渡燈花落盡底時節諸人還委麼柳拂叉手曰和盤托出夜明珠元日上堂拈拄杖曰太平時已至祖咸開三元好個時節法堂前與你相見了也作麼生是相見處三世諸佛出來橫說豎說向上向下論有無分真假如此千般萬般樣總是沒可把非與你相見處歷代祖師出來有時七縱八橫喚驢作馬有時喝下查機棒頭辨的恁麼活手段又是成佗話懶非與你相見處到者裏諸人還知相見落處麼卓一下曰八

摩那叱不憚索三目摩醯難覩破何故鐵丸無縫解眞後歸休養德院朝廷聆其德音特賜佛宗大弘禪師之號永正四年四月初八日遘疾示寂有遺偈曰末後牢關快活快活會麼只餘一喝享齡七十四坐夏五十八門人遵遺命塔于伏見清泉寺

### 長州大寧寺沙門東純傳

釋東純字全嚴壯歲入京遊講席後在大寧寺參大菴益禪師發明大事接武領衆會下參徒有三千指有檀越居士語曰明之帝王深信佛乘夢下道人立於殿陛王問曰卿何人道人曰日本僧猷竹居明日

本朝高僧傳卷之四十三

○十六

問羣臣無知之者王以爲奇事詔中書舍人史盛書竹居二字頒布民間日州小內海黃頭郎入明國親聞此事持史盛之字歸現在某處也純聞之遙向日州三拜居士曰應化非眞拜個什麼純擒住日那個眞那個假速道速道士擬開口純托開日寐語作什麼純後遺偈求竹居之字樹之丈室云純之示寂未詳其年月日

### 京兆南禪寺沙門桂悟傳

釋桂悟號了菴嗣法眞如大疑信公宗說泛通文明年中出世勢州安養遷京兆東福結夏小參青春送

七、空華水月六度萬行蒸砂作飯何人咬著十分滋味應就成銀幾個魔破一段光明神通妙用降遊魔魔法備如然鵲噪鴉鳴正與魔時般活自在與查蹤橫本來無礙說甚守口如瓶防意如城剋期取證論甚九旬禁足二月護生拂一拂日鐘中無鼓響鼓中無鐘聲朝廷聆其名召問法要旨情大喜特薦展說大書了一卷二字賜之退院上堂密傳官命住山僧失照宗門日下燈不賜展奎了菴號五湖風月一枝藤僧年八十二奉使人明明帝詔住育王山悟臨門云育王門戶八萬四千毘盧樓閣雨華現前進步云幾處一步東土西天是日遣中使賜金襴僧伽袈即杜承云畫像恩榮北闕天黃梅夜半不聞鐘育王山頂橫雲霧無相福圓擔一肩海有上堂緇日觀呼公卿緇緇崇德來謁正德八年解印東歸諸儒題言王陽明序曰世之惡奔競而厭煩瑣者多趨而之釋焉為釋有道不日清乎澗而不濁不日潔乎相而不滌故必息慮以洗塵穢行以離偏斯為不義於其道也有不如是則雖歸其髮緇其衣其義亦逃祖跡而已耳義難逃而已耳其於道何知耶今有日本正使堆

雲桂悟字了菴者年踰上壽不能為學後彼國王之命來貢珍於大明舟抵鄞江之流寓龍於顯于嘗過焉見其法容潔脩律行堅羣坐一室左右經書金采自闕皆楚楚可觀愛非清然乎與之辨空則出所謂預修諸般院之文論散異同以並五聖人遂性閑情優不譚以肆非淨然乎且來得名山水而遊賢士大夫而從摩曼之色不接于且淫哇之聲不入于耳而奇邪之行不作于身故其心日益清志日益淨偶不期離而自異塵不待洗而已絕矣茲有歸思五國與之文字交者若太宰公及諸縉紳輩皆文儒之擇也

廣州淨眼寺沙門玄虎傳

釋玄虎字大空武州生產未詳姓里入邑最寺剪髮就學雖口肄教而心傾禪邑有文殊堂每夜入堂禮拜定坐年過弱冠遊歷叢社最乘寺間洞上風雷遠之石雲然崇之俗禪師知經藏鑰隨眾辨道二十有年之一日問曰世界壞時此性不壞作麼生會虎

日世東塚時此性俱壞之日意趣如何虎日畢竟空也之養面掌虎當下契悟乃起禮拜之日你見什麼道理虎猶倒禪牀而出之官可印住繼住石雲長亨二軍移越之龍澤開龍雲寺付其徒東木樹而回石雲明年蒼居勢之淺香鄰丘有凹谷晝夜炎燒熱湯涌出村民名地獄谷虎禪坐其側火湯自熄庶黎感歎郡守隨喜建淨眼寺延虎住持寄附莊田以充供億後移本州廣臺寺遠近崇信又成巨叢朝廷聞其名特賜佛性通活禪師之號永正二年七月二十三

京兆大德寺沙門宗後傳

釋宗後字東漢藤縣筑州太守府人母夢三日並黑而產七歲投州之妙樂寺明照和尚出家十八就西關文公參禪一紀參春浦和尚于審山歷十寒暑浦師歿願命依寶傳具晨銀腰纏懸微祖意收從三師凡二十年母氏三日夢至是有徵矣永正二年春奉詔出世大德時是雨俄降收指門日雨太法南還太室隆驤步日直饒有相隨者猶隔雲關萬重上堂問客說過日請佛妙義不盡言至道無方室有哇町

分界於微塵刹十來為龍兀坐於雲巖石洞何曾所以曠蕩蕩不隨萬法不滯一境或開眼金鋪於貧人屋裏或流疊毒水於佛祖頂顙扼向拄杖則透過婆娑羅龍鼻孔踴躍上天拈起拍板則震裂紫微羅王宮殿轟動雷霆雖然恁麼今日開堂祝聖一句作麼生道若擊拂子曰康衢只見歌太平四海千秋皇祚永復舉首山示眾曰佛法付屬國王大臣且道付個什麼有是迦葉師兄始得拈曰首山提唱口邊生荆棘新龍雲則不然拂一拂日落雲孤驚天一色牧道譽喧時後相原帝特賜號佛慧大圓禪師永正

野州大中寺沙門明慶傳

釋明慶字快春蘆州生緣處童出家為大德之後獨遊華夷幾二十餘員之善知識悉蒙優賞自謂我於法有過格焉行脚偶過溪之祥雲山下覽其地之幽美乃就南谷卓庵而居暇見雲霄氣吞佛祖時華叟夢和尚居關隴龍泰寺戲唱洞宗慶不覺驚見歷半許年更使僧觀之僧到便問關隴在裏許為個什麼慶日一事亦不為僧日因其處得為個不為慶慶情然不答但問上座個何誰僧日華叟禪師慶日尋



常以何誘獎學人僧曰尋常教人長連牀上伸脚而臥慶聞得高聲叫曰是真知識爲人抽釘拔楔本也乃偕行拜謁悔相見之晚從茲不遠山路日往問安久之相承洞宗祕訣又明年中越後檀信創顯聖寺延之延德二年郡主小山重長建大中寺請慶爲開山始祖會中禪徒或二百或三百童衆五載以明應癸丑臘月二十六日謝世春秋七十二有代語錄一卷

京兆建仁寺沙門龍崇傳

釋龍崇字常菴自號角虎道人詳其姓其許師建

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○壬子

仁正宗統和尚執童蒙役其性明敏早讀羣籍年始十歲有人詰曰小兒未解作詩乎崇應聲吟曰庭賢生八歲口始解言詩今古同中異何恨二年遲其逸羣之譽爲時美談及稍成人剪髮棄戒坐臥嚴密稟承師印開法薩之大願歷遷洛之真如建仁佛生日上堂佛身充滿於法界一夜落花雨音現一切羣生前滿城流水香隨緣赴感靡不周薰風自南來而常處此菩提座殿閣生微涼所以二千餘年前無上大法王未離兜率已降閻浮說甚思藍園裏右脇降誕未出母胎度人已畢論甚開權顯實扶律談常大衆

會慶其或未然下座各具威儀詣大佛殿隨例紫金炎聚頂上潑著一杓香湯解制上堂今朝七月十五諸方隨例滿期東山布袋頭元未曾結何用解之夜夜燈籠沿壁上天台徧十方莫非通霄活路日日露柱著衫衣南岳盡大地是個無孔鐵鎚雖然如是前程有人若問今夏東山法道如何又且作麼生以拂子擊禪牀曰百不會百不知行到水窮處坐看雲起時崇住建仁三十四會上堂說法循守制典有語錄二卷角虎集寅闇景若干卷共傳于世矣

京兆南禪寺沙門周麟傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○壬子

釋周麟字景徐別號宜竹嗣法萬年用堂材公多識屬文凡住相國前後四度上元上堂冰泮雪消星移物換莫有不干節序底麼冬至寒食一箇五上元定是正月半參除夜小參人生一世白駒過隙只遮白駒王良造父不能執御太宛渥洼未爲絕足無常殺鬼騎之踰鐵圍越奈落利那而至衆生迷醉不知不覺今年三百六十日今夜小盡二十九擊石火閃電光叉手曰如少木魚是有何樂祇思無常慎莫放逸麟常投閑萬年之宜竹軒年過古稀終于軒中外集若干卷曰翰林胡蘆集

京兆妙心寺沙門宗受傳

釋宗受字天縱初在東福永明菴馳騁文字棄本務悟溪頓禪師于瑞龍未幾脫然投機作偈曰黃頭魯眼不曾知黑漆屏風月蝕詩大坐當軒鎮寰宇數峰如畫雨晴時溪爲印可受開濃之慈雲寺爲第一祖及住洛之妙心學徒影響太休問曰永明一湖水流歸松源一派時如何答曰涇流不濁渭大休以亦出於永明也永正年中有旨住大德特芳傑公製山門疏後遷尾之瑞泉菴室枯杖日棒喝機先家國晏然德山臨濟十萬八千又手曰吾個室內無多子不許

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十三

○壬子

禪徒來扣玄退休慈雲永正九年正月十一日寂

京兆南禪寺沙門景莊傳

釋景莊字蘭坡稟法大模軌公夢窓國師四世之孫聰慧夙發於諸書史靡不該研歷遷諸刹後住南禪上堂舉三聖道我逢人則出出則不爲人興化道我逢人則不出出則便爲人枯日一人如董賢相漢一人似范叔歸秦且道山僧卽今爲人不爲人以拂子擊禪牀曰雷破羣蟄何州不春謝事居正因菴文龜元年終於菴中有仙館集雪樵獨唱集莊在世日後土御門帝屢召問法後柏原帝追褒賜諡佛慧圓應

禪師

京兆妙心寺沙門宗棟傳

釋宗棟號鄧林細川氏子山城州產資性爽邁才華粹達久待特芳和尚明禪不下事滌豪大德主權妙心永正庚午秋住尾之瑞泉入門云遊履三眼國透過萬重關驟步指云山上那一路拔虎頭關喝一喝據室枯竹篋云膝下黃金拈拄杖云掌內日月擲下篋杖云無隱乎汝龍山路滑棟依細川右京兆乞奏妙心賜紫之寵命京兆執奏後柏原帝允詔制可特降紫泥綸旨於山門曰正法山妙心禪寺者大燈國

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十三

○壬子

師上定之州創花園仙院御願蘭若也是以綸命復舊再興得時然則須著紫衣刷入院儀式位次等大德寺前後可守年月也門徒相互專佛法紹隆宣奉祈壽祚延長者也自爾住妙心者奉敕黃天使歸建開堂祝聖登林之功永以爲光矣後入丹之山中州屋終老云

參州泉龍院沙門契巖傳

釋契巖字克補從字崗禪師得洞上之旨續泉龍之席煥唱宗乘一日集衆曰穢惡國土不樂久居吾且歸矣衆不爲意翌朝巡堂忽爾不見尋之茫無方肯

大永三年五月二十八日也門人以此日爲追忌嗣  
法三人全入院光國靈嚴寺希聲王寺琴臺

本朝高僧傳卷第四十三

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十三

○三十五

音訓

蔽 必弊切 蔽 舉雅切 謹 苦戰切 聃 都含切 枚 莫不切  
 切而震切 棘蓬 上吉逆切 需 余六切 穗 吐田切 棚 尼  
 切戲相 屏 孫祖切 草庵 下 虛訝切 租 蘇下切 餘 招切  
 擾也 人質切 鈴 夷然切 陶 徒刀切 靡 曼上切 禮 淫注  
 上夷今切 迴 上戶頂切 貨 花蓋切 康 衛上切 道 五達切  
 下鳥瓜切 楔 私列切 干 居來切 陸 目改切 造 父七  
 之 鶯 莫卜切 刷 兼滑切  
 到 盤 直立切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財鑲  
 本朝高僧傳卷四十三 茲冀  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 謹

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十三

○三十六

本朝高僧傳卷第四十四

徽州盛德沙門 師發 撰

淨禪三之二十六

京兆妙心寺沙門端匡傳

釋端匡字大雅從東陽于少林日陽示衆曰宗門極則要在棒喝所以道藏得拄杖子一生參學事畢久參上士往往半青半黃衆中還無有渾鋼打就生鐵鑄成底漢麼出來施爲棒下無生忍臨機不讓底商量看匡出云昨夜文殊普賢起佛見法見各與一十棒趕出了也陽曰說甚麼文殊普賢匡曰和尚也須

本朝高僧傳卷之四十四

本朝高僧傳卷之四十四

○

本朝高僧傳卷之四十四

哭一頓絕得陽日過在何處匡曰有一頓在陽呵呵大笑匡禮拜歸衆相繼懷服永正三年夏住尾之瑞泉兩祖真前拈香偈云玲瓏層塔聳並脚脚柱爛柴翻祖恩今古冤讐不回避依然左右又逢源尋出世妙心永正十五年四月二十六日示寂大仙門弟奉全身葬于寺後翌歲冬州亂衆慮賊發其塚將開維之及啟窺定儀儀在舉扶火浴頂骨不壞人皆嘆異京兆建仁寺沙門德昌傳

釋德昌字桂林又號薜菴五歲入東山稍長下髮周涉內外聲達當世嗣伯州安國和甫忍公爲寂室

禪師之四世延德己酉出世建仁結制上堂四月十

五日頭頂天脚踏地七月十五日脚踏地頭頂天其結解了不可得元來無結可結無解可解解亦不後結亦不前畢竟向結解未判已前會取作麼生是未判已前擊禪牀曰受衆三十年解制上堂此事如青天白日增一絲毫則重減一絲毫則輕朝朝日自山頭出夜夜月在波心明個個人喫粥了也洗盃盂太也騰騰任運任運騰騰因什麼證龜作鼈截鶴續是切忌涉後許途程今朝七月十五正是休夏自恁人人功成東行西行到這裏山僧無一法可施呈

本朝高僧傳卷之四十四

本朝高僧傳卷之四十四

○

本朝高僧傳卷之四十四

何故是法住法位滾樹騰黃鸞喝一喝日殺生也住建仁十回終於江州山上石頭菴有青松錄行于叢林余按昌未達和惠而供嗣法之香此亦當時五嶽之葉幣也

京兆妙心寺沙門宗松傳

釋宗松字興宗承悟溪和尚之法鄧林解大德之印松繼祖家文龜三年十月奉旨翌歲二月入寺歷徒妙心龍安住尾之瑞泉周期退院上堂退鼓聲中下翠微秋風千里早知機蘆花淺水白鷗底也好攬泉帶月歸灘之郡土齊藤利國法諱創州之大審寺腰



松爲第一世國民歸嚮太永二年六月二十日寂  
春秋七十人教誡大猷慈濟禪師

京兆建仁寺沙門永瑾傳

釋永瑾號雪嶺別稱識廬嗣九峰成公以華嚴鳴叢  
林永正戊辰春住建仁指門曰十如十界法門重重  
喝一喝曰春雷變一震雲雨東山起臥龍結制上堂  
諸方叢林是日結制人人踞菩薩乘個個修寂滅行  
以大圓覺爲我伽藍如魚在網而求活身心安居平  
等正智似鳥人籠而悲鳴吾這裏不涉化安居護生  
全體如是而住全體如是而太縱橫卓厲如孫吳允

日本書紀

本朝高僧傳卷之百十四

〇三

且道恁麼修證與諸方結制相本多少拂一拂日露  
柱證明上堂雨前花開雨後花落自然妙理不得卜  
度以幽鳥作說真如是錯以燕予作談實相是錯以  
溪聲作廣長舌是錯以山色作清淨身是錯東山與  
麼說亦是錯何故開口便錯

京兆妙心寺沙門宗松傳

釋宗松字柏庭從景川禪師久參徑要下日開悟偈  
呈所見川爲證爲參州檀越創三玄寺松爲開山祖  
又尾之犬山縣開德聚寺兩處法會緇白歸信受與  
請住洛之妙心文龜辛酉秋移尾之瑞泉指門曰正

眼流通不在規則喝一喝曰太施門開無壅塞住持  
三年便回三玄永正己巳春後柏原帝陞妙心之位  
賜紫方袍闡衆以松臘德共仰齋疏而請松已耄期  
如應榮舉暨入寺且管領右京兆細川氏季士衛護  
開堂已畢詣關謝恩解印歸休太永七年五月端午  
無病示寂壽齡九十有奇

京兆妙心寺沙門德樹傳

釋德樹字天蔭入東陽室多歷年所紹續法焰宇養  
源之塔同門衆勸住尾之瑞泉拈衣語曰一頂金縷  
非長非短無易無難搭起日侍者側卻門前利筆著

日本書紀

本朝高僧傳卷之百十四

〇四

奉詔興妙心兼杖拂僅一會輒退鼓上堂辭衆曰挑  
燈祖室拂毒苔爲謝皇恩太師來屋裡揚州存長物  
回首又見隔年梅構居聖澤院於本山側太永六年  
四月十六日化

京兆建仁寺沙門壽桂傳

釋壽桂字月舟別號幻雲江州人嗣法正中曾座中  
嗣古先元公元入元嗣中峰和尚桂初住越之弘祥  
善應二寺永正間遷洛之建仁結制上堂太悟堂前  
望闕樓後回作主此遲留維摩利界竹篋下圓覺伽  
藍柱杖頭紅藥著花春尚在黃梅綴子雨初收山僧

不結九旬網，鳥自高飛，魚自遊，上堂拈拄杖，曰：窗外梧桐樹昨夜已秋風，顧視大眾，曰：噯！人冰鷄護雪，爲甚？僧夏未終，早一下桂，視衆，建仁二十五回晚，居一華菴，天文二年臘八，示寂，有語錄并幻雪集。

### 相州早雲寺沙門宗清傳

釋宗清字以天，自稱機雪，京兆人，隨東海朝禪師于大德，密傳心印，永正末，有詔住大德，上堂拈拄杖，曰：丁頭，鸞龍翔翔，天下有時，著香象王，務高高峰，頂獨立，有時，刷金師子衫，深深海底橫，朕說甚，上載下載，論甚，表詮遮詮，是故求者轉遠，不求還在，目前吐雲。

日本書紀卷之四十四

○五

雨氣蒼陰，陽則天子以之作祥，作瑞，現奮迅力，跳天門，則初僧以之說實，說權，銀山鐵壁，誰說鐵旂，雖然，恁麼，今日開堂，祝聖一句，作麼生，道草一下，日萬波聲歸海上，千峰勢止，聲邊後柏原帝，聆其道，僧特賜正宗大隆禪師之號，相州太守北條氏綱創金湯山早雲寺，招清爲開山始祖，下日謂侍僧曰：老僧滅後，不要建塔，聽吾偈，曰：利界三千一塔，渡骨頭節節也，由他，那須設利發光彩，月在青天影在波，少頃復書偈，而化，維時天文三年正月十九日也。

### 京兆妙心寺沙門玄訥傳

釋玄訥字景堂，山城州人，自少親炙景川和尚，參禪究決，受屬，踵跡住大心院，開堂妙心，進寺兩次，後董尾之瑞泉，據室，曰：正當三五夜，何處不禪，娟拈竹篋，曰：者裏還有超物外，底麼？打案，曰：令我憶南泉，退院上堂，叉手叮嚀，離祖翁住山，今日謝無功，同行有個，烏藤杖，不御鵬程，九萬風，徑旋大心，細素歸之，如市冬至，示衆，舉古德曰：冬至月頭賣被，買牛，冬至月尾賣牛，買被，今年冬至在月中旬，且道賣被，便是賣牛，便是自代，曰：有利無利，不離行市，僧問：如何？是平等大心，訥曰：一點梅花，藥三千利界香，天文十一年十月二十丁丑夜，賊伺其室，加刃，傷病，寺僧皆議，當闔于宮，而犯賊，訥聞之，曰：此風業所爲，非彼咎也，慎勿誣官，言訖，辭世。

### 京兆南禪寺沙門宗香傳

釋宗香字梅屋，攝州兵庫縣人，參香林蘭公於龍山，發明心地，兼有外學，有詔住南禪，上堂以拂子打圓相，曰：個大圓鏡，照破十方，本無定相，體用全彰，圓陀陀，阿羅漢，明歷歷，露堂堂，堂內外絕瑕，髮頭頭無虧欠，背面現影像，物物不覆藏，雖然與麼，更有那下面即今，拋向諸人，面前顯露，舉揚新長老，以此報聖恩底。

一句作麼生道拂十拂日萬里無雲海波穩一輪月出照扶桑

但州圓通寺沙門一東傳

釋一東字日菴一色持勝之子年甫九歲侍大蔭于棲真圓具以後寓但之宗源寺又登睿山習學台教真乘華屋禪師講楞嚴經學侶雲集東亦預聽講畢參景川隆和尚于大心川加痛剴多所策發太掌南禪記室文明末山名政豐延以但之圓通包立瑣門年七十四終焉東當依虎關和尚五家辨作五派一海圖舉道原夢堂虎關之所系外爲三段便于學者

日本漢文史籍叢刊

本朝高僧傳卷之四十四

○七

棲真相國橫川三公作序以稱之有嗣法春輝禪師住南禪

京兆大德寺沙門宗亘傳

釋宗亘字古嶽佐佐木氏江州蒲生郡人母感吉夢而孕四歲從父遊州之菩提寺住持笑菴授文殊五字咒一聞輒誦菴摩首數異八歲投諸間寺義齊落髮授以法華八日終業濟歎日之子聰敏後不可測且問濟日此外更有經典否濟日五千餘卷溢龍宮充海藏且日誦之可得作佛否濟日誦一大藏教心地不明則不可得且日心地如何明得濟便書教外

別傳不立文字直指人心見性成佛之句付之日吾此禪宗以心傳心他日自悟太在且心記不忘十上洛依建仁喜足蒙公十七受具典侍藥結制之節頭首秉拂且出問話雲興登衆二十三參春浦和尚于大德不契謁實傳真公于如意慈服勤二十二年聞舉世尊枯華因緣言下契入傳舉德山托鉢話日即今代雪峰一句道看且日托鉢隨德山後傳代德山日老僧被你勘破且代雪峰日某甲卻被和尚勘破傳日代德山又作麼生且日把手共歸方丈傳月之付印記日你見地明白久矣然到于今不授記別者

日本漢文史籍叢刊

本朝高僧傳卷之四十四

○八

大燈國師日雖舍利衲子一旦悟人不輕許可作時證人則須隨上祖之訓也永正六年秋奉旨出世大德樓室釋教黃云這是大乘皇帝說了三世諸佛出世本懷底太陀羅尼經二千年後流傳至吾菩薩太子今日九重天上紫鳳銜來度與個赤牦生俗驢譯於虛空口付宣揚於海潮聲梵衣云西天金襴付慈氏東山屈脚止曹溪舉衣云看看三祖翁別放開線路虛空無縫縛拈作一伽藍上堂虛堂和尚住育王當晚小參今夜略太佛法玄妙機關單單與諸人說些細大法門以表進寺識面之初諸人又不可作

等開入在情識裏胡卜亂卜大小虛堂未審呼什麼爲細大法門雖然恁麼山僧今夜表進手識面之一句如何品目拂一拂云堂前一椀夜明燈簾外數竿清瘦竹退居大仙菴名公鉅卿問道者多丞相義植源公黃門侍郎藤房冬羽林次將滕公光是其首也至受不孟法號者不可勝記焉後相原帝聞其聲望特賜佛心正統禪師後奈良帝即位詔且入宮待以師禮御問不絕敕許著帽子御對肩輿入宮重賜正法大聖國師天文十七年夏五示有老病六月大漸帝遣藤亞相尹豐問疾二十四日起坐書偈曰拄杖

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十四

○九

竟末後句倒擲萬仞龍峰請汝試卓破看滅卻臨濟正宗拋筆而化壽八十四臘六十八復救藤亞相賜金剛經及青銅錢若干粒以資寒儀門人殯全身葬乎本菴北隅立塔其上植之以松號曰松關

### 京兆妙心寺沙門宗休傳

釋宗休號大休不詳姓氏妙齡入東福永明菴繫染進戒普見山中知識學業出衆後發特芳和尚于龍安密受宗記永正月初奉敕黃出世妙心冬至上堂欲識佛性義理當觀時節因緣作麼生是時節因緣冬至在月頭則賣被買牛木人倒吹葭管冬至在月尾

則賣牛買被收童遙指金轡僧堂今朝掛著慈明隨首座昨夜撥退洞山禪塞北天寒牡丹開雪內江南地暖梅花綻臘前拈拄杖曰正與麼時諸人還委悉佛性麼卓一下曰大樹大皮裏小樹小皮裏復舉古德冬至上堂曰恁麼也是不恁麼也是恁麼也不是不恁麼也不是恁麼不恁麼總不是何故如此陽氣發生無礙地拈曰古德提要強判鴻蒙兩處失功竊則變變則通清風拂明月明月拂清風卜法山側松靈雲院解印退居駿州太守今川義元聞休道聲敦請以州之臨濟寺雲水之徒輻湊輪下再住洛之妙

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十四

○十

心尋移尾之瑞泉間一歲歸舊院禪餘開講方袍指袖離陪爭席後奈良帝召休問法奏對稱旨帝欣庵禪執弟子禮屢召參訃帝有契人特賜圓滿本光國師之號天文十八年七月二十四日跏坐而化壽八十二樹塔靈雲

### 京兆妙心寺沙門慶浚傳

釋慶浚字明叔幼依景堂和尚稟戒已後雲遊諸方歸省景堂精一叩求入室欲呈問堂震威一喝浚脫然悟入呈偈得證出遊甲之慧林寺久無主浚見門庭荒落將一新之餅錫爾然極其枯淡慧福兼修百



廢具舉海眾推爲中興之祖。公居濃之恩溪州。族藤景前聘補大圓上堂。真諦俗諦不涉。一路祖意放意。遍布大千。所以卽處開五五圓通門。接入鮑魚肆。平地現重重。華藏海。敷設龍象筵。荷葉蓮華全機獨脫。蓮華荷葉公案現成。暮拈拄杖曰。雖然與麼。今日開堂祝聖。一句作麼生。敷宣卓一下。曰。續焰聯芳億萬斯年。奉詔興妙心住尾之瑞泉移居大心院。大文二十一年八月二十七日化。

京兆妙心寺沙門崇孚傳

釋崇孚號太原。駿州太守今川氏親之子也。自幼入

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

○七

洛之建仁爲僧號雪齋。綜襲內外。居西堂位。向慕大休和尚道風。參問稍久。打破漆桶。作偈曰。平生底不受化。曠大地都盧鐵。一團劈破。將來無寸土。三更紅日黑漫漫。呖翅呈大休。休徵曰。如何是平生底。不受化。曠乎曰。會分八字。休曰。如何是大地都盧鐵。一團乎曰。上透霄漢。下徹黃泉。休曰。爲什麼無寸土。乎曰。大千捏聚。休曰。三更紅日黑漫漫。時如何。乎便喝。休燒香證明出世。妙心住駿州臨濟太守源義元營善德寺。延乎爲國開堂說法。遐邇悅豫。安衆千指。上堂黃面老子向百萬衆前。以佛法付囑國王大臣有力

檀那有力者何也。戒力定力慧力神力事已繁多。釋漢以感通爲力。菩薩以慈悲爲力。諸佛以妙用爲力。各有階差。釋迦已太彌勒未來吾大檀越乘此中和。不以國守權勢爲力。只營寺院以崇僧伽。俗修造手。於乎上座大小僧房如綴蜜菓。於是人人以得穩坐地。個個以爲安樂窩。是故殿堂落成之日。白日忽雨。曼陀非信力堅固。焉能得如斯麼。且道付國王大臣底佛法。不涉感通慈悲妙用。又且如何拈拄杖卓一下。曰。三段不同收。歸上科。乎以弘治元年十月十日寂於臨濟寺。不詳其壽臘。救謚壽珠護國禪師。

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

○七

京兆妙心寺沙門禪愉傳

釋禪愉號龜年。源姓遠山之族。平安城人。蚤歲禮特芳和尚。下髮滌衣。納戒以後。遊徧諸山。親近桂月舟璽雪嶺于建仁二師。以英物稱焉。既回靈雲。依大休國師。傳續祖燈。出世本山。號令六載。巨橋宗乘元且上堂。垂語擊拂子。云。左邊麒麟現。右邊鳳凰儀。要知中間事。麼蘭重羅奈。太梅香入室來。大燈國師忌拈香。偈曰。太燈高照。日東禪毒氣傷人。二百年今日一吹吹滅了。梅花初綻。雪中天澤州大智寺默宗洲公瑞世。法山松製同門疏曰。正法山正法海臥龍和尚

蘭堂大智日大智雲雲祖翁出世百花園裏一夢  
兩覺萬松嶺上寸步不移共惟密啟雷轟迅機電掣  
默時說說時默孫思邈不二維摩詩中禪禪中詩陶  
靖節第一達磨集鳳皇於東海探虎穴於南方松源  
運菴曼玉鏘金同聲相應楊岐九峰華嶺拽把摩角  
雖多一喝提金剛王九旬驗鐵彈子隨處作主易地  
皆然高枕遠江之聲臨朋鷺友結社對牀連夜之語  
鶴兄鶴弟在後後奈良帝素受大休之屬相繼崇悅  
恩遇甚至屢宣問法特賜照天祖鑑師之號每有  
歲時朝覲待愉之至後許作師之入內暮年謝事還

日本書紀

一 本朝高僧傳卷之四十四

○七

居退藏院永祿四年十二月十三日遷化于本院

### 京兆妙心寺沙門玄密傳

釋玄密字希菴弱臘月谷岫禪師得度建仁依雪嶺  
瑾公傍習文墨馳英才名棄太東濃參明叔和尚于  
愚溪從前所學一字用不得虛已求心達得宗訣從  
叔付命居大心院藤景前聘請住濃之明覺山登座  
拈懷中香云這小木標初托本根於東山下左邊底  
前建仁月谷老禪禪林中長枝葉於前南禪雪嶺古  
佛佛土末後紫風吹撞入大智山上明叔和尚室中  
無端觸著忙辛辣手著地被拗折直得七花八裂從

前餘薰一點也此因棒喝雷雨之奔施結惡冤果爾  
來祕在懷抱者十年矣即今拈出人天衆前欲爲  
月谷則月谷爲我太愚欲爲雪嶺則雪嶺爲我太孤  
不如熱卻雷爐供養前住妙心當山中與明叔老漢  
以酬法乳之恩一時禪客瞻風會同永祿末奉敕興  
正法山上堂舉曹山因僧問佛未出世時如何日曹  
山不如問出世後如何日不如曹山拈曰這僧問端  
千人排門曹山答處一人拔關今日有人致恁麼問  
便與他出世三十棒未出世三十棒密住妙心前後  
五回聲價高都下兒童走來莫不知之甲州太守源

日本書紀

一 本朝高僧傳卷之四十四

○八

晴信

武田氏法諱信玄

諱以慧林密堅辭不起使者三返焉

已入寺上堂舉法雲善禪師開堂僧問和尚今日開  
筵如何演說禪師曰雲從家家月春來處處花拈云  
學者問端燕金燕價禪師答處處趙壁無取新慧林若  
有人致恁麼問如何祇對拂一拂云竹隱相逢無別  
事大家同喫趙州茶禪流駢集檀信曰盛告老後衆  
復還明覺爾後屢招不赴作偈謝守曰老來一枕黑  
甜餘使者敲門頻起予但恨風流賢守識閑名幾度  
上除書文龜元年中今二十七日賊黨窺室委順而  
藏燕何其黨皆發狂外云

京兆大德寺沙門宗套傳

釋宗套字大林平安城中藤姓冠纓入天龍天源院拜肅元嚴禪師就別列早善華什長掌太藏一朝猛省日文章一小枝不若尋明師決擇大事參東溪和尚于大德依玉英阿公于勢陽後到古嶽和尚會真嶽一日受請陞座舉南泉斷語話日谷日南泉斬前兒與今日檀越供養太衆是同是別套出衆日洞山設罽疑齋嶽日意旨作生套日一生一嶽日畢竟落在甚處套日水到瀟湘一樣清嶽打日斷頭船子下揚州酬唱相投嶽付大林號作頌證之轉第一座

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十四

○十

居京之德禪泉之南宗菴天文七年春有詔住大德上堂舉大燈國師上堂僧問一峰雪片片雙湖水落潺其此一千年前消息麼燈日認春卻不是松日者僧問端下和抱璞國師答處野人野鼻若有人致恁麼問祇對他道好事不如無套至聖門菴拜祖塔大有僧出問如何是雲門一曲套日座中盡是江南客莫向樽前唱鷓鴣嶽聞之大稱焉天文辛丑春歸泉南開栽松軒筑前刺史三好長慶屢訪禪關崇信時敬其家族子弟欽風者多此時長慶程弄重兵顯揮畿內過寺四封則必下馬弘治丙辰改南宗菴移地

新營講堂爲開山祖混日集衆開堂慶讚今南宗寺是也後奈良帝特賜佛印圓證禪師之號永祿十一年正月二十七日化壽八十有九臘七十二正親町帝重賜正覺普通國師

常州福泉寺沙門殘夢傳

釋殘夢或號害山不詳其嗣承永祿中遊化關東往常州福泉寺東唐山慈眼大師少時逢夢聽禪要後謂人曰吾參殘夢和尚而得長生之術矣宇都宮興禪寺物外播公包笠之時謁夢有問答往返常陞州民月之六齋郡邑之直往往見之其顏貌如可七十

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十四

○十

者天正四年三月二十九日至夜二更無病俄化少頃蘇生呼筆書偈日隨花無間五逆聞雷喝下瞎瞞从眼豁開喝一喝擲筆長往壽秩一百三十有九顏色鮮潤不與常異國中四衆香華奔瞻

贊日余歸自水戶俗路鹿島過福泉寺歷覽殿裡有十六世殘夢和尚之牌以出佛法陵夷之秋無人知之觀其本住自由實大解脫之人也頃世儒生之言殘夢平生好飯枸杞天海學之至以長生矣夫域外之人神兒心安浩氣充實自致長壽何有所不足而外假藥餌之力耶以祈年之見妄意推測始不成二

師之輕重焉

甲州慧林寺沙門紹喜傳

釋紹喜字快川生于濃之土岐氏承法仁岫壽禪師宗機偉端氣宇高尚出世妙心住本州崇福寺太守藤義龍昏惑不敬喜拂不知甲太守源晴信素聞其名迎請住慧林寺禮遇甚腆挈包之徒盈二千指上堂舉永興祿禪師開堂僧問闍王請師出世未委今日一會何以靈山祿日徹古傳今若是山僧即對花道陪驢不受靈山記正親町帝聞其偉望特賜大通智勝國師之號闍國益摩風與希菴密公齊其價名

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

〇七七

矣天正壬午春平信長父子與府守源勝賴有隙攻拔城壘全家潰滅府內禪衲會慧林寺相議曰國已所查外護覆以有何面目出見佐人乎平氏請見喜肯不出偶江州太守佐木義滿作敗軍將驛食在府竊脫依喜轉逃北國平氏大怒遣武夫數百人驅山中衆趕上三門門下積薪四面放火士卒持戟露刃四立森如竹塢毒泉寺雪峰存東光寺藍田青長禪寺高山壽等及學者一百餘人皆整威儀在烟焰中依位而坐喜據座垂語曰諸人即今向火焰裏如何轉太法輪太各著一轉語爲末後句衆皆下語喜

代曰安禪不必須山水滅卻心頭火自涼猛火著不恬然不動與衆定化實天正十年四月三日也

贊曰先達或雖有逢無道之主爲橫賊之害而隕命者未聞如平氏之慘毒亦未有若快川國師坐火刀堆撥轉法輪千餘指佛子俱入火光三昧者夫業有現順順後三而報必不減焉平氏僅隕兩月軍寄洛寺爲家臣行篡逆所圍而外壁小臣焚蕩佛廬以灰其屍矣胡居現業之甚速耶喜公能於千載平氏遺惡後代離夢幻塵世業感其念諸

京兆妙心寺沙門玄津傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

〇七八

釋玄津字月航平安城人稟蒙妙心遷寂之清見應讓住帝州筑波山禪源寺里民開永興寺津爲始祖化門廣運翕然挹風會津太守聘禮興德寺上堂曰宗門禪判官家有柄一柄審劍不是銀劍無復碾碾開作家爐竈下惡辣劍鈍臨濟喚作金剛王則豎靜三邊德山呼爲木居士則橫絕八夷鐵蛇鑽不入裂破魔網不懸寸帛到這裡觀音袒手倒騎鐵馬文殊畫眉坐跨金獅直饒普度羣生或爲諸佛師未爲太師住山鉏斧皮膚脫盡其體甚離披爲龍非龍如平非平信口呵佛罵祖蓋以佛法不掛口唇皮曾不



摩太雄叢規諸人還見摩三千禮樂在下毛頭上人  
絃金氣浮燃壯丹鐵牛髭復舉如來無上正法付屬  
諸國王太臣宰相及四部衆祖師禪不然五宗無語  
句更無一語與人何故梅瘦占春少庭寬得月多大  
休遷化津守靈雲之塔天正十四年七月十一日罹  
老病書偈而化壽齡九十有餘特賜普濟英宗禪師  
京兆妙心寺沙門宗興傳

釋宗興字南化一柿氏濃州人從本州邦叔楨公圓  
頂納戒學內外書通曉禪教後入京輩請益者宿隨  
侍快川千崇福慧林傳佛心中州將稻葉一鐵劫濃

日本撰述

本朝高僧傳卷之四十四

○十九

之花溪延興禪參徒雲集名播諸方天正初奉敕  
出世妙心上堂與南禪遇緣禪師開堂之日有一官  
人問曰和尚住處後生爲什麼卻稱尊宿禪師曰千  
歲唯言朱頂鶴朝生便是鳳凰兒拈云禪師答處雖  
答得妙猶有帶人我見今日若有人向法山致恁麼  
問祇對化道拂一拂與茶珍重歇卽詣關謝恩咫尺  
天顏太正十八年冬應尾州妙興之請寺正百生主  
法乏入殿堂荒涼鐘魚瘠久興至修廢負荷爲任大  
閣豐臣秀吉公宏建洛南祥雲寺開興道望迎爲開  
山祖有衆千指僧規濟濟達磨忌上堂七條纏裹三

日本撰述

本朝高僧傳卷之四十四

○二十

千東隻履踏翻四百州版築英雄少林祖梁江都海  
汝爲舟垂示云龐行婆人鹿苑設齋維那問意旨婆  
卽拈梳子拂向髻後曰回向了也行婆作略在那裏  
代云一毫端現審主利微塵裏轉大法輪後陽成帝  
名興禁中問卽心卽佛話帝心有契祖意恩問相續  
郡國豪武向風歸法各營墳院聘摯頻至土佐太守  
藤忠義創大通院有京兆少尹稻葉貞通建智勝院  
淡州刺史脇坂安治勸柳花院並興法山稱第一代  
慶長九年夏以微恙移柳花院五月二十日安卒告  
寂壽六十七封于無礙塔翼歲周忌內降全章載傳  
聲錄

聖帝準在日之報恩特賜定慧圓明國師

濃州大仙寺沙門東定傳

釋東定字愚堂本州伊自良縣伊藤氏子在幼歲點  
記誦梵咒入東光寺持瑞雲禪師十二披髮十九遊  
方在橋之三友寺南景岳會裏一夜坐至三更有省  
謁說心宜于清見物外權于興禪共居版首又參鐵  
山鉅于臨濟天長長于備前大安聖澤庸山庸聞定  
舊然呼來相看問參得事定打一坐具山罵曰恁麼  
見解何無禪客寔退不憤罵九拜寢夏夜入後林危  
坐達旦賊訥嚼肌不覺痛痒受山印記分座法山應

趙葉氏之招出住東漢正傳州之太仙寺乃祖東陽和尚演法之場廢積歷年定與檀越謀移地北山再造移居寬永五年奉教董妙心前後三遷達磨忌示衆少林谷日安禪地雨洗風磨石亦泯只有梅花枝上月夜溪寫出祖師真歲旦上堂拈拄杖曰橫川其禪師歲首上堂云舊年說話新年說話一法從萬法生萬法無一法實橫川與麼說話事理已分明山僧新年不要說話何故卓一下云官梅飄粉發清香御柳搖金抽淺黃品物春來漏消息更無一法可商量解夏上堂長期短期日上下結制解制物換星移

日本書紀 本朝高僧傳卷之百四

○五

安居功成自恣日至諸禪德俱向什麼處去記得來時路麼以拄杖畫一畫云還念麼其或未然秋風吹渭水落葉滿長安復舉虛堂和尚解夏小參云靈山結夏結本不曾結與聖解夏解亦不曾解解結既無拘本來無作相正法門下別不用結解之二字何故時節已至其理自彰更賦一偈辭大眾太半半改換往來人何事三回預勝倫項上鐵枷今日脫山林城市自由身後水尾太上皇召對便殿宣問禪要上皇語源亞相通枕中曰寔道貌峻言辭清悟解可知知又問今時碧眼胡也詔就于清涼殿敷法座行等室

事是日兩宮垂簾百僚排班教寺門院五嶽耆英會同列聽寔舉天親問無著因緣勸喻利子橫機電掣實宗門盛舉也皇情大悅內賜官茶御果翌日遣中使賜僧伽梨一日宣問日迷人與悟人外後如何寔日不識上皇日因何不識寔日山僧未外聖心因格重奏本分一著屠機猶豫寔在座日有什麼疑著上皇有省屢召仙宮隆遇龍光至離御座聽法恩免冬月著帽皇太后亦問法禮信齡登八表對御玄談困倒龍座側鼻息齁齁既寢從容謝恩而退明曆初帝召內禁問宗門旨奏對審格上傾玉冕寔容貌魁偉

日本書紀 本朝高僧傳卷之百四

○五

橫額豐鼻耳輪厚而長眼眶極而光見者心服胸宇恢廓發譽不動與人夜話必達寐且說人之短則不聞者之爲舉人之善則擊節而稱貴介達官至村翁販婦亦盡瞻禮所在有牛太樹家光源公延見府中寔日太樹召老僧有何用處源公不答稱之左右太和太守松平氏某請問法要寔日求法作什麼守無對就參禪肥後太守保科定之招寔私館揜手延座有儒士問日夫雷吾家以爲陰陽所致不知佛家爲何寔啟背後步障而作聲日轟轟轟當知斯也士稱日退守聞之日真禪師也主殿頭石川忠綱建龍翔

精廬出雲刺史溝口氏某市正松平親英內藏助谷氏某相俱捨財助正燈寺一刹在武陽遷定遊化邀格居之親英復豐後采邑開養德寺請定爲開祖定又開勢之中山寺濃之高井寺其餘數宇門弟檀越奉爲第十世不殫記焉萬治二年丁妙心開山國師三百年回一衆主議門派戮力鼎建法堂預消季秋凡請五嶽諸刹之雲衆設大會齋定爲導首拈香唱偈日二十四流日本禪僧故大半失其傳關山幸有兒孫在續焰聯芳三百年晚居城之華山寺一日微疾自書遺誡數條及辭世偈日今日利益老僧稍存

日本書

本朝高僧傳卷之五

○主事

化日利益付囑兒孫四方問病者絡繹不絕侍者問尊候如何定曰老僧肚裏無病欠伸一聲泊然就化時寬文元年十月初一日也世齡八十三法臘七十靈全身於獅窟東北之隅日本瑞塔其嗣法弟子紫方袍者八人分本山第一座者六人僧尼優婆塞優婆夷受持法誡安名號者不記幾千人矣賜諡大圓壽鑑國師

贊日宗門傳此方大率有二十四流才至五六世其法寢衰或流乎文字辭章之末或囿乎知解計較之中而失本源者多幾乎二百餘載矣壽鑑國師出於

祖道乾枯之秋主盟大法於是雲居膺大愚築一節守諸師相繼而出宗風起禪化行此又國師先倡之續也且夫假寐于降龍之傍鼻雷震天闢者世復稀聞答育王崇祚禪師明太祖屢召對或時假寐鼻息有聲鄰坐引裾覺之太祖嘆曰此老人無機心誠善知識也與國師之舉廢有遺類矣法山有四流而東陽一脈爲寂寥焉暨乎國師之出支派浩沚匹稱聖澤下之中興焉乎哉

武州東海寺沙門宗彭傳

釋宗彭號澤菴但之出石邑人三浦介平義明之後

日本書

本朝高僧傳卷之五

○主事

也父能登刺史秋庭綱典仕山名家彭十歲投郡寺習淨業及十五歲入宗鏡寺從希先西堂得度學禪先妙心龜年輪之門人歸寂之後掛錫大德請益春屋國師又往泉之大安住真如文西仁是時一凍和尚居陽春及南宗屢啟密室遂作跨窻分座大德前後住浴之德禪太仙泉之南宗慶長己酉出世大德住山三日擣鼓退席豐臣秀賴公招之不赴越中刺史細川忠興豐前治邑招一精舍三請不就筑前刺史以宰府崇福招亦卻聘後陽成帝詔赴關辭免乙卯之寇南宗罹災彭竭力求鼎新但之宗鏡亦火于兵

彭說都主小出吉英興本藥場新安開山大道以神  
師像慶讚陞座寺衆德彭墳室延請彭太不願隨緣  
兼瞻寬水已已因事請羽州大德玉室珀妙心單傳  
印東源寅同配初會由利津經之三處請居四歲得  
遷俱還後水尾太上皇召仙關問法又講原人論  
此書備明人身本末因果始終彭破斷見而演真詮  
大稱皇情恩賜有優加以國師之號彭奏言臣僧蕪  
穢有損聖明吾祖微翁未蒙榮膺回此寵光休揚先  
德上皇嘉納特遷奎章重證微翁賜天應大現國師  
先是太將軍家光源公相攸武之品川劍營東海巨

洞已弗春命彭住持爲開山祖莊田若干以寄香廬  
彭母謝人乞太德妙心出世之事一日台命日出世  
開堂其餘典刑當齊委之彭曰貧道暮景已過爭堪  
重任不欲榮聞惟法社衰耳太樹默止辛巳季春得  
命復舊號解之勞實惠彭力受王公信譽然自處溫  
慈濟物中無難疎至論離教片言不讓草屨齊敬見  
者歸慕四品拾遺補川先尚肥後治內建妙解寺但  
州刺史柳生宗矩和之采地柳芳德寺泉南土人谷  
氏宗印建祥雲寺皆以彭擬爲第十代一夜台命入  
萬松山止彭日和尚年尊未有嗣法我意迎葉於佛

亦猶龍附驥尾以其法相承至于今羣生蒙益會中  
若有省悟底者須許可以紹續慧命彭退語曰台命  
至重而吾蕪心相續也正保甲申上皇召論曰蓋夫  
正法難相續而易泯滅矣當開脚將斷絕法脈朕常  
感焉門弟之中擇發明士付囑正法當爲世間之眼  
也彭謝天恩退乙酉夏彭畫一圓相自下一點用擬  
寫照紫微一幅置在于東海及南宗自畫其上曰仰  
瞻已燒六代圓相龍孤蒼海重錄九十九箇蛙蟻泥  
沙南泉曾畫一圓相歸宗坐其中麻谷作女人拜趙  
壁元燕環顧相如浸莊秦家今此圓相包天地無外

窮塵刹燕涯無邊世界如交似豆此裡衆生似粟如  
麻九流分列門戶六藝起修離世彼爭麟鳳此決龍  
蛇人物是太簇俊人亦不些十方薩埵列星宿五百  
羅漢出雲霞我爲其主張法王法身全體顯諸人見  
我麼時雖中間不待後進彌勒下墓前來釋迦阿難  
捧寶蓋迦葉抱茶盞宗彭杜多卻增聲價阿闍世王  
矣起嘆嗟不尊文殊師頻呼不蒲童子課湯果不窺  
維摩詰急引金粟如來役舒茶下方聲聞侍我履四  
果聖者御我車有意氣時添意氣請看閻羅老斫額  
以望我冥官等踴躍如得爹我猶來勢縛欲卒施相



械捉情鬼負鐵枷五逆來生於野喜奈落罪人得時  
 義快然快然我這裏今日萬般已治藥病相瘳佳納  
 子只其所取無好底法莫所捨無嫌底法若任違順  
 境家山路猶賒意此法從前絕等差求中正者落邊  
 邪佛經祖傳錄方語點檢將來空裡華彭謂人日諸  
 方唱末後可山僧杜口而太仲冬老病台府賜醫日  
 間劇安臘月十一日衆頻乞得彭書夢字微毫坐化  
 世齡七十二法臘五十七豫誠徒日全身打疊可掩  
 土太營齋立碑安像掛真年譜誌狀一切禁之門人  
 遵命收寺之西北焉

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

〇三七

贊日釋迦出世爲論太事也達磨西來欲示見性也  
 若無迦葉慧可則佛祖空蓋棺而已賴得付屬千燈  
 渡傳而師資嚴密不容毫髮奈何季世斯道墜地冬  
 人印樓欄拂動以定授受澤菴和尚嘗懲如此慎重  
 祖風遂斷其嗣焉嗚呼守古之道不蹈覆轍者也歟  
 暨其以罪章讓于乃祖滅卻江南行言師之聲華矣

本朝高僧傳卷第四十四

音訓

銅 居即切 塵 於容切 稗 奴登切 訥 奴骨切 覆 敷救切  
 肆 息悉切 市 寓 烏禾切 斫 竹角切 壘 魯偉切 戟 吉逆切  
 臂 作各切 袞 同秩 販 方謀切 疹 所斬切 窰 昌瑞切 肝  
 古汗切 抓 側絞切 斂 之或切 瘥 楚解切 瘥 病瘥也

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十四

〇三八止

江府住玉泉軒成九居士信施淨財錄  
 本朝高僧傳卷四十四 茲葉  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷第四十五

濃州盛德沙門 師蠻 撰

淨禪三之二十七

武州東禪寺沙門崇六傳

釋崇六號嶺南守永氏日州飯肥人父母祈觀音太  
士而生自幼俊秀歸慕禪門依郡之角隱西堂志學  
剃髮住佐土原侍定山慧和尚上南北京開差別教  
到駿之清見寺講說心宜禪師復歸京師掛錫大心  
院隨彭澤恩和尚喫緊參究獲恩印付分座沙心將  
遊東武其夜觀音大士夢告曰我在攝州大坂某商

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十五

〇二

家長住南津尋商家所大士果立活套物中講求泊  
桑奈津伊勢兵部某在船相語大悅及達東府兵部  
先份送飯肥郡守伊藤祐慶之館祐慶境第盛遇甚  
敬府西櫻田創東禪寺請爲開山高唱宗乘海衆千  
指侯伯禮謁檀施日豐衆勸出世賜紫方袍一日參  
徒遊增上寺閣步堂上寺衆叱之相成煩言徵難宗  
義有玄昌者逐問答破衆惡辯利手歐裂衣六聞之  
口是不可舍將申公府論決宗曰長束寺主先告其  
事觀智國師書報以勾下黨輩七十四人之名禪衣  
追察寬永之初應妙心之輪請開堂祝聖敕使貴臨

入山門云東禪獅子再跨正法門大衆聞聲一聲哮

吼震乾坤喝一喝佛殿前釋迦後彌勒是什麼假名  
底別別真佛無形真道無體習歲自恣之日上堂餅  
衆云只今終身居州菴一回何幸住名藍老梅含蕊  
待吾久又伴烏藤歸嶺南下座自擊鼓荷拄杖歸佛  
日山其後相攸移寺芝縣門通大道下視大海營治  
小堂安觀音像櫻田之舊址於今俗呼嶺南坂寬永  
二十年七月二十七日得小疾委付後事於定州陶  
公安然而化齡六十一葬寺之西塔扁曹溪出法嗣  
二十二人其中賜紫沙門五人琉球國揚化者一人

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十五

〇三

奧州瑞巖寺沙門希膺傳

剃度弟子六十餘人明年六月賜諡大天法鑑禪師  
釋希膺號雲居源姓土州畑人慕禪沂洛入大德寺  
從賢國良剃染納戒掛搭妙心侍一亩和尚于蟠桃  
院勇士塙直之避亂在院察膺實踐給與飯錢俾其  
徧徂元和乙卯塙氏應募入大坂城灌訪塙氏欲同  
條死塙營數日本寺喚回或人訴曰膺黨塙氏軍吏  
捕之徧歷在外追逮一亩膺聞亟回自到尹廳而就  
囚源君聞而曰義之所存雖沙門亦當然也共許返  
山承宣印記分座法山遊化若州小濱初寺唱禪府

主歸向。偶有沮者。卽與一偈。曰。三毒生時。雙眼暗。萬緣脫處。一身安。衲僧行李。只如是。傘下杖頭。天地寬。徑適豫之松山。太守加藤氏聞法。因勸出世。妙心嗣子無度。遂復棄公。隱攝之勝尾山。後水尾上皇仙宮召對。恩遇至渥。卽日還山。再詔不出。與州太守伊達正宗招以瑞巖。三請不往。其子忠宗以父遺命。聘請不已。膺幡然。自負複子。行據瑞岩室。太守郊迎。雲衲翕集。僧規有序。鐘鼓改聲。正保二年。秋受輪請。住妙心。結制上堂。踞菩薩乘。修寂滅行。法本法無。法同人清淨。實相住持。無法法亦法。以大圓覺爲我伽藍。今

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○三

付。無法時。身心安居。平等性智。法法何。唯法有心。而安居。豈是妙心。無法。而住持。實是正法。同人清淨。作麼生。住持。無作。無止。無任。滅身心。安居。是什麼。性智非體。非相。非心。法無見。一性是見。性不說。一法真。說法人人具足。個個圓成。歷代列祖。因什麼。論見性。頭頭顯露。物物全真。三世諸佛。因什麼。解說法。側有在杖子。出云。怎麼。怎麼。邪人說。正法。正法成。邪法。不怎麼。不怎麼。正人說。邪法。邪法成。正法。寧將此身。代衆生入地獄。道眼不精明。莫爲他說法。卓拄杖。一下云。心存月想。正憶念。還同如來常住。法舉。六祖大鑑禪

師。偈曰。兀兀不修善。騰騰不造惡。蕩蕩離見聞。寂寂心無著。若有此箇漢。向者裏。薦得。可謂。日日禪談。談話未嘗說一法。夜夜禪誦。禮懺未嘗行一事。節節錦衣繡服。未曾掛一縷。時時餽僧。飲食未曾喫一味。處處遊化。經行未曾進一步。直饒是呵。諸佛菩薩。罵羅漢。辟支。有什麼過惡。雖然如是。欲得不招無間業。莫謫如來。正法輪。卓拄杖。一下云。是什麼。解夏上堂。說偈。辭衆曰。佛祖深恩。當欲酬。這回卻作阿毘由。英靈德望如雲湧。檀越願施似水流。廣堂高閣多憂畏。破笠瘦筇任太雷。只願滿山諸大老。聖胎長養保春秋。

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○四

洛陽路上。意忙了。萬里身閑。東與州散。瑞巖席。居祥嚴寺。常上山菴。不出旬餘。通宵禪坐。白鹿馴。後西院帝特賜慈光。不昧禪師之號。萬治二年。值圓成國師三百年忌。將登法山。炷拜塔下。門弟國老難。遠涉勞強。柅其行。膺快然止。乃在山菴。從八月朔書佛菩薩之名。號古德之語。分與諸檀。又封一紙。遺屬侍者。八日常午。忽下祥巖。擊鐘數杵。便回山菴。衆皆驚訝。入菴問訊。端坐爲衆說。出離之始。卒畢。悠然而化。顏采紅潤。頂肉煖氣越宿不盡。侍者啟封。有遺偈曰。後釋迦文出生先。阿逸多人滅。滅生二佛中間。我是生

非是滅變于白鹿山頭壽七十七磨道骨如石與世無營而不與馬終身不近平居不用茵枕夏夜不設幃帳遷化之前異鳥悲鳴凶星隕室嗣法上足賜紫四人琉球僧住本國圓覺王賜紫袈裟者一人奉奉法山成一方之師者十人受三歸五戒者不知幾百人矣

贊曰義與仁序倫而道品之所成僧而無義則不能了大事矣雲居禪師初太邑主之不義逢累入勝尾山中出權大利亦不變塞其戒體之不餒也禪心之增嚴也頃世誰能及高蹈之髣髴乎余曩在江府東

越前大安寺沙門宗榮傳

釋宗榮號大愚武藤氏澤州武儀郡人自見志氣出羣十一人郡之乾德寺得度狀元老禪稍過冠歲參侍一宙和尚于華嚴院嗣智門雁任第一座元和初武江諸士建南泉寺請榮為主榮子來見來請秉炬渡問幸蒙慈悲我于何之榮不能答婆痛哭太榮曰將謂自得被婆子問不知落處住院何爲棄太行脚

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○五

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

○六

過檜原峰逢一道人問詰數返語路栗棘進退惟公榮益發憤疑情堆山直到參州須瀨盤結州庵影不出局又移江州堀田信濃守某迎建圓鏡小院一夜工夫頓破從前未了冰消諸方有志施文字禪道聚山居士尼混坐流言訾謗本寺默攬衆欲訴之榮曰法盛則魔盛時節至理自彰若訟公府早是汚我宗了以信士勸乃如丹州住慧日寺山門佛殿巡見丁而據方丈云深山幽邃正好棲遲因作偈曰夏無朝市累何有是非爭秋掃溪邊葉春聞樹下鶯常默禱云見處是則諸佛列祖爲我其說不是則直下蒙訶又作偈曰春到人間廣大慈一花擎出一如來無端殘雪消鎔盡萬象森羅齊展眉於是舊參相聚榮便罵辱不假人情除夕告衆曰舊臘已盡新年將到汝等諸人不改舊時面如何又逢春枯棒趕出元旦榮自鳴鐘擊板祝聖說偈曰水繞山圍獅子窟更無異獸搖足處冰花一片太丈夫春風入門推不空明關哲公朝鮮人妙心派下名衲宗乘爲念居和州吉野山問行腳僧嘗逢明眼耶僧曰大愚和尚辛辣甚暴罵諸方出言無方因測崖際關口是真師友即日在見如舊相識關後在勢州坐椅遷化顏色三百不



變二五竟永丙寅以天海僧正之言復于本籍拜。微笑  
塔燒香偈曰不是鴟鴞不鳳凰實能伏竄實翔翔應  
時節曲不藏直人我山崩盡十方不幾奉教出世妙  
心上直宣召堅辭不應阿州太守以與源寺招聘不  
往播之法幢寺夢覺國師開闢之地湮沒既其築居  
興廢鳩材役工里民謂云先是野中氏夢國師告曰  
自今五年道人來止德行勝我寤以語人今方五年  
矣總州太守源忠弘主姬路城聞築道風復寺疆地  
台府朱篆賜田除賦天龍寺僧僧曰此寺我徒輪住  
之地須還本寺築曰既是輪住爲什麼無住道得即

日本書紀

本朝書紀卷之五

〇七

還其僧無對但之雲原山人天絕路狼鹿交迹築持  
斧鎌纒通某路法幢相太四十餘里九折道腰包  
往來至無虛月及梵宇建頒賜朱篆寄山前田衆推  
爲中興祖受輪請住濃之瑞龍入寺指門云此門露  
柱空梁不假雕琢何解思量佛殿百億分身衆生良  
藥小信根人卻作毒藥正保丁亥秋往江府大樹家  
光源公命尼祖心將延見之其夕潛遁明曆丙申浴  
賀之溫泉取路於越前寓龍雪居士宅過冬惠堂亦  
來太守源光通聞一老至喜招問法築以雙趺不仁  
坐蒲團守拳蒲團送座盛待堂云太守聰明恐是短

命築作色曰愚堂老漢不識好惡叨許可人這白面  
郎識個什麼太守嘆謂實足爲師建大安寺延爲知  
祖一日守問碧巖集宗門第一書是也無築曰是太  
守曰請和尚爲我講一兩則築曰只恐不會太守頻  
請築勵聲曰廓然無聖守曰不會築曰果然把不住  
寬文六年朝廷特賜號諸相非相禪師九年己酉在  
法幢日行脚時至歸越七月十四日書偈曰西天的  
子東海崑崙平生受用不二法門其尾書二日前十  
五日夜顧侍者利脫索紙脫過與來築便下掌翼日  
示化齡八十六臘七十五如法荼毘封靈骨於寺西

日本書紀

本朝書紀卷之五

〇八

贊曰大愚禪師機歷海山不飾人情磨盤鐵鎚當面  
擲出叢林之一鴉非文字禪之所及又不可言晚唐  
以來無師也

### 丹州法常寺沙門文宇傳

釋文宇字一絲工部尚書源具亮第二子母藤氏孕  
胎分娩少無苦惱龍領鶴三垂手過膝筮者占曰此  
兒化日爲王者師遠十四歲待萬年山雪岑峯公清  
敬守約居未數歲終託羣從過僧友房偶看禪策傾  
意宗門參一老宿看一則語老宿許之又與一則守  
念古人悟得一則大事了畢即知所安尋非實悟願

通明師頓收聲氣潛出萬年徑過澤港禪師。泉南呈從前解題乞開示。菴笑云我這裏無添開話頭而黑學人將一丸瘰癧病加意提訓。稱非常器。十九歲拜槓尾山賢俊。剃髮稟戒安居。九旬講習。毘尼再參。泉南粗著精彩。菴東講日省侍。一年洛西岡里。營結閑夢。分衛過時。守官幼時侍于內宮。在泉南日左。集財信尋藤公與菴相善。屢在合駕。初識守。被招致。私第博談佛理。僕射篤信。奏太上皇云臣見僧多未有如守。便殿召對。有低皇情。繼白扣禪者。無虛日又卜丹之九路峰下。結屋枯坐。後來廣基號稱。菴禪寂。

自本集

本朝高僧傳卷之四十五

〇九

之士共嘗冰藥。舉揚古道。藤亞相光廣入山。忝扣微。初子話。一日齋後過菴前。柑樹下脫然。大悟。應接異。常無機者。將入明國。而受明師之證。以國禁不遂。志承嗣。愚堂定。皆雲居膺雪竈崔在。妙心守往。道契太上皇命。近臣建靈源禪院。於賀茂辛巳。又詔鼎新。丹之舊菴。為太梅山。並賜住持。守拈樹枝示眾。眾無對。便擲下。日盡情彈了。無人賞。憶得。伯牙曾絕絃。夜話示眾。若能轉物。即同如來。諸人恁麼。信得。麼。僧云。信得。守指燈臺。曰。汝如何轉。僧云。燈臺守喝。曰。失卻鼻孔。頌德山托鉢話。曰。湖上遊塵半點無。歸蓑一片。

將瞞世間多少丹青手。細著工夫入。圓圖。頌狗子話。曰。苦咬。無字。下工夫。那個丈夫。絕後蘇撥轉。趙州關。樣子。倒騎。佛殿人。紅爐。未住。江之。永源寺。正保二年。罹病。上皇賜醫。登歲再發。頻詔就醫。守知。不。不敢入京。語左右曰。道俗來者。非。問疾。擬令。我。遣。汝等。而。準。今時。杜撰。耳。我。行期近。汝等。宜。順。當。寺。開。山。願。余。此。外。更。無。說。三月十九日。晨。粥。不。是。案。末。坐。至。午。時。右。脇。臥。瞑。目。淨。因。欲。移。手。診。守。忽。開。目。叱。之。蛇。然。保。年。三十九。坐。夏。二十。冬。全身。於。屋。山。收。遺。髮。于。太。梅。山。塔。日。湖。默。撰。述。繼。門。靈。藏。註。垂。誠。并。有。

自本集

本朝高僧傳卷之四十五

〇十

佛祖百首頌。童行談苑。孤誕五葉等集。延寶六年。春。賜諡。定慧明光佛頂國師。贊曰。遇嘉會而得者。如順風。花。或易得之。當。漢。期。而求者。似。逆水。帆。絕難。悟。焉。非。具。宿。根。安。得。成。獲。乎。一絲。國。師。出。於。禪。道。否。塞。之。時。未。弱。冠。而。志。于。大。法。體。窮。鍛。鍊。得。太。徹。底。遂。要。接。得。一。個。半。個。使。佛。祖。不。傳。妙。再。流。狀。桑。津。天。不。假。年。惜。乎。亦。與。今。時。無。異。真。者。不可。同。日。而。語。也。

### 城州萬福寺沙門隆琦傳

釋隆琦。字隱元。明之福州福清林氏子。母葉氏。萬曆

二十年生九歲就學習冬廢學而事耕樵露坐仰觀  
天河運轉日月流輝心竊異之欲明根源有慕於學  
附進香船至普陀山禮拜觀音發心持素奉昌元年  
禮鑑源壽難深黃藥年二十九檀興梵宇遊講經龐  
密雲和尚來應金粟寶舟而造入門便問學人初入  
何甚處做工夫雲曰我這裏無有工夫可做要行便  
行要住便住琦疑不決目不交睫第七日雲過堂前  
擡頭一見有省便拜曰某甲會得雲云道看琦便喝  
雲云再道看琦又喝雲云三喝四喝後如何琦曰今  
歲臘貴如米雲云走開不得擬人路頭天啟六年爲

日本漢文史籍叢刊 第三輯

〇十一

茶堂主遇五峰西堂登座曰識得者個天下太平識  
得者個天下爭競如何決斷峰云者個從什麼處得  
來琦便喝峰云那裏得來琦又喝峰便打琦再喝  
峰又打琦喝兩喝峰打兩打衆謂老隱今日敗關琦  
憤憤地平且而行一日立窓外忽一陣風吹入毛骨  
遍身白汗識得源本僧謂峰云老隱徹也乃呼勘驗  
琦曰道即不難只恐驚羣動衆峰云何妨琦打筋斗  
而出崇禎三年住獅子巖費隱和尚住黃檗舉琦爲  
西堂頌百丈再參馬祖因緣曰一聲茶毒聞皆悉遍  
野聞聲沒處藏三寸舌伸安國劍千秋凜凜白如霜

隱即貼法堂前示衆喝或陞座授與拂子十年丁丑  
主黃檗席巖側塊石側時如舟衆患不平一夜默禱  
此公法道行于世間石自可平黎明如言本朝承應  
三年應肥前興福寺主逸然之招達于長崎即住興  
福移崇福寺妙心派下一三耆宿以琦在西偏化未  
遠及歿訃公府許入畿內明曆元年始到攝之菅門  
寺上堂若論個事如天普覆如地普擎如日普照如  
月普明如風普震如雨露普潤如霜雪普照如冷  
海普納百川如深山普藏羣獸等觀豎一毫端普攝  
無邊利海偶爾聊露片言豈收無量妙義諸人於是

日本漢文史籍叢刊 第三輯

〇十二

明得便知雲門餅趙州茶曹山酒金牛飯雪峰謎玄  
沙虎德山棒臨濟喝一串申過盡淨盡餘信手拈來  
無非家宴取用不竭然世間之害汝等盡知法主太  
審如何理會以拂子敲桌一下云會麼達觀直下絕  
疑猜個裏何曾惹點埃果是濟家真種州一齊抄入  
管門來下座結制集衆堂裏千指萬治元年妙心之  
耆宿又告京尹而承鈞命偕往江府寓大澤寺侯伯  
士庶拜禮作羣謁源大樹承賜歸櫛翌歲賜太和田  
地乃開萬福庵第十世台命復寄莊田若干太上法  
皇宣旨內奏法語寬文三年設禪門大乘戒座受者

千指退休于松隱十二年春有微疾上皇遣使存問  
進傷謝恩四月初三早刻謂左右曰今日不得遠離  
吾行期逼矣至午時遽起跌坐衆請遺偈琦即書曰  
西來柳栗振雄風幻出驀山不宰功今日身心俱放  
下頓超法界一真空書罷奄然瞑身三日顏色不變  
門人龕奉封于壽藏世齡八十二法臘五十三嗣其  
法者二十八人宰官居士清信士女聞法結緣千有  
餘人有七會語錄雜集若干卷後水尾法皇賜大光  
普照國師之號

贊曰禪宗諸師來于此方東陵以後寂寥不聞將二

百半屬明季運隱元禪師來投聖化宗教才識雖不

及古人而勝於今世焉未幾付拂之子孫分處浩浩

自及二世特以其多若真正探討不在本色其奈杜

撰禪師矣

論曰世尊拈華迦葉微笑以至西夫四七東土二三  
五燈錄所載今姑置之大鑑下分於青原南嶽有馬  
祖石頭燕之江西南湖馬祖下獨盛轉傳臨濟曹洞

爲仰雲門法眼之五派分而復副於楊岐黃龍之二  
流總之五家七宗也直截本根契佛之內心而的的  
承稟教外傳之謂佛心宗矣以其行貌似定止自李

唐始名禪宗焉而非六度之禪所謂教外別傳祖師  
禪者也唐宋僧傳立習禪一科不知其所因而教外  
宗接本度中放禪同篇混濫難求多爲後覺所擬之  
非天下豪傑太信實者安能得究此宗哉本朝白雉  
初進嘉瑞玄英三藏而教外傳禪唐道璿佩皆寂之  
印來授行表又義空至廣鹽官之法傳最和承行表  
再授備然受牛頭法慈覺逢蕭慶中親稟心印厥後  
不傳二百年矣承安年中覺阿人宋衲佛海遠得悟  
而緘默不說能忍遠乞佛照光之證稍倡義內暨於  
文治三年明菴來虛庵傳黃龍之禪貞應二年道元

復知源得洞山之訣始稱臨濟曹洞禪也自爾東

越南通海路絡繹聖一嗣無準法燈承無門大覺嗣

無明開建長元菴僅住回支那佛源卷龜谷佛光坐

鹿山南浦西澗同船異口一山通元主之命來住南

禪清拙應平帥之蕭明極竺仙來董南禪東明東陵  
宏智之孫說五位正君臣無隱古先遠溪業海明更  
復菴並弘中峰道中巖獨續大慧焰煥才美輝妙喜  
世界無文師友古菴高蹈果山愚中嗣即休了隱靈  
丹丘大拙嗣長千巖開舖席於常州月林承茂古林  
揚古風於城西撫谷鏡堂別傳東里會靈山隱傳自



大方三世而絕無關宴坐妖潛南禪鼎建大燈出惡  
 辣手接得關山徹翁關山華花園六世四派支徹翁  
 補紫野五世一休出夢窓國師七朝春屋僧錄五岳  
 義堂絕海宗說雙璧石室天龍祝楓宸瑩山總持拜  
 紫袍我山籌室正令五英通幻爐韞履過十傑石屋  
 震法雷於西國了菴流洞水於東關澤菴愚堂雲居  
 大愚一絲以心要鳴頃世之光明燈也余比冠歲親  
 聞見之凡五山就時華夷十刹列于東西名蓋上刹  
 某布相齒先輩科判有二十四流又瑩山隱元鼓盆  
 續紛行中峰禪今世釋儒之人開口便言道充於天  
 地塞於古今若近取譬之則本師於我何又外求乎  
 備我之道人不知之識情害之也所冀此科之先達  
 者庶本具之性而出陰界之人也機緣語句分明記  
 之不可以容易看焉

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

〇廿五

本朝高僧傳卷第四十五

音訓

傘 蘇簡切 囀 吁塘切 僚 連窠切 鵲 吁驢切 桌 竹角切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財興  
 本朝高僧傳卷四十五 茲冀  
 上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十五

〇十六

本朝高僧傳卷第四十六

濃州盛德沙門 師蠻 撰

感進四之一

百濟國沙門義覺傳

釋義覺百濟國人也此方征彼國時伴軍士來詔住難波百濟寺覺長七尺博綜梵學持般若心經同寺慧義夜半見覺室光明熾曜窗隙窺之覺端坐誦經光從口出義以驚懷明朝告衆覺語徒曰吾一夕閉目誦心經一百許遍開目視室四壁空洞庭外皆見吾身布有之想起而摸之壁戶皆關歸座誦經空廓

本朝高僧傳卷之四十六

〇十

知先是般若不思議之妙用也徒皆增精進焉

覺曰定慧均等斷除煩惱與物一致有何罣礙菩薩羅漢往來於三千大千世界皆以由之也覺之洞見者殆乎隣聖地與

和州法器山沙門多常傳

釋多常百濟國人也本朝太皇后天皇御宇慕聖化來住和州高市法器山寺誦大乘經神咒專事度生應死之人承載再蘇病者盈門奇異甚多嘗卓錫杖二條於阪上當其經行互用一物無作妙用如鑿而樹焉天皇后尊重供養斯乃修行之功獨流芳名慈

悲之德長存愛敬也

和州藥師寺沙門祚蓮傳

釋祚蓮三學該貫名達朝野白鳳八年十月天武帝皇后病帝誓曰此病平復當作藥師佛像建立堂塔而供養百像后病有瘳將建藥師寺無知營佛之規者蓮乃入定見龍宮之伽藍護矩盡美定後摹圖奏進乃用其式營藥師寺最極妙麗敷蓮居之

和州多武峰沙門定慧傳

釋定慧相國太織冠鎌足藤公長子也初孝德帝有克懷妊賜鎌足爲夫人詔曰生子若男爲卿子女爲

本朝高僧傳卷之四十六

〇十一

朕子生慧開雅聰敏出家遊學白雉四年與道嚴道昭十三員僧隨遣唐使吉士長丹浮海入唐高宗永徽四年也直往長安謁神泰律師於慧日寺稟戒習學辭巡諸刹擇師質經在唐二十七年調露初元伴百濟使而歸白鳳八年也父鎌足已薨矣問弟丞相不比等曰先考墳何在丞相曰在攝之阿威山慧曰先考曾嘗曰和州談岑今日多畿武峰內靈勝之地不亞唐之五臺花日墳於彼子孫益昌總章二年我在五臺十月翌夜夢上談岑先考告曰我已生天矣汝當就此地建梵刹修佛乘吾亦降此

爲擁護焉丞相泣曰先君之薨實某年月日也慧乃率門族陟阿威山自取遺骸遷葬談岑其上立十三級塔慧在唐見清涼山寶池院塔雇良工摹之作爲緣棟梁船楫不能悉載遺一級於海墻矣建畢慧淡恨不圓備一夜雷電風雨山嶽動搖黎明見之所遺一級依然架上千村萬瓦一無殘缺朝官州民莫不驚歎焉丞相乃刻文殊木土像安於塔中俾天龍鬼神知所敬仰慧又塔南建四面堂號妙樂寺堂東作方三丈殿底大織冠像靈感逐日新藤氏至今榮和銅七年六月十二日順世壽八十餘矣

贊曰蓮之入龍宮慧之來道級者至誠無息之所感也可謂羅漢僧耶

### 越前越知山沙門泰澄傳

釋泰澄姓三神氏越前麻生津人父安澄母阿野氏夢白玉入懷從此有妊白鳳十一年六月十一日生皆天降瑞雪積庭寸餘澄及五六歲不交羣兒百戲喧巷未嘗出見唯聚泥土作佛像伐艸木構堂宇獻花薦水以充娛樂持統六年道昭和尙遊化北地適至其家見澄頂上現於圓光覆以寶蓋謂其親曰此神童也善加保愛十四夢身坐蓮臺傍有沙門語之

曰汝知否我卽汝之本師也家在西方汝所坐者此觀音所持之花也汝當示比丘身施十面利生普照之德耳既寤大喜慎不語人從此每夜出外父母疑怪使其兄安方竊伺往所澄到越知山品洞中禮數百拜高聲唱曰南無十面觀世音神變不思議者唱畢出洞陟峰頂雲路孤絕兄不能從竊止洞中運明歸家未及脫履澄已先歸矣後自削髮棲此峰頂精勤練行衣藤皮食松葉修懺積年發得意解神授密來文武帝聞其名望大審二年敕侍臣伴安以澄爲鎮護國家大法師是歲有小沙彌自能登島來

謂澄舍笑曰汝來也我遲汝久矣便付鉢多羅令其守護焉澄不捨晝夜長時行道苦修非一而沙彌服勞不離如影隨形常臥雪裏澄名爲臥行者客比丘來謂沙彌曰勸進趣是名爲行臥者怠倦之義也何稱行者耶沙彌舉臂答曰行有二種一身行二心行子之所論者身行也予之所修者心行也當八苦之寒風臥罪障之積雪仰阿字之太空見大日之光照淨菩提心觀慧相應念念增進豈非心行之微趣乎客聞之感歎伏膺沙彌元無學業忽說深志人以爲奇且有神異逢過海稅船飛鉢乞米率以爲常和

銅五羊有羽州運糧船沙彌飛鉢乞米船師神部淨  
定曰此官米有定數不能充供沙彌還山告一船米  
如鴈相行飛來峰頂淨定歎未曾有入山禮澄曰俗  
情卑怯不獨淨供然是官物願垂慈顧澄笑曰非我  
所知沙彌所爲也汝當謝渠淨定如教沙彌曰只置  
小供餘盡還汝淨定曰今此峰巒崎嶇場廩許多糧  
米如何運移澄曰汝只歸船沙彌自能之淨定即歸  
其米不吝豪索如前飛還淨定感激益深輸官租畢  
不歸本邦入山事澄採果拾薪百役不倦澄名爲淨  
定行者澄語客曰沙彌心行者也淨定身行者也澄

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十六

○五

常望白山曰彼雪嶽必有神靈我登見之養老元年  
持鋤入山果感妙理大菩薩及逢屬輔事在神之章  
中菴居白山僅歷四生優婆塞等尋來相集漸成多  
衆苦修益勤法驗彌著六年秋天王弗豫百方不效  
詔澄赴關淨定隨行及彌澄願定曰吾三鉢杵在白  
山室汝急採來定承命歸山乃持鉢杵黃昏入宮舉  
朝驚異曰澄不可言之定又奇故澄近歸晨把三鉢  
杵誦念怒明定憩息殿陛形貌甚醜起居豪逸宮人  
嘲笑之定怒觸柱宮殿震動羣臣驚悸上病益甚澄  
以鉢杵擬于玉體還和立瘳崇其法効權爲供奉賜

號神融禪師神龜二年行基法師登白山見澄微笑  
如舊識基問白山靈應澄詳語之基感歎曰元正帝  
號公神融良有以哉又公託生三神氏宜乎顯三聖  
之應跡也吾歲已五十七末路多難不憚嶮峻來蹈  
勝地幸聞神化吾心足矣再會在西方欸密而太天  
平年中聖武皇帝弗豫敷澄加持還和即時愈帝喜  
授大和尚位改號泰澄澄奏曰願以證作澄不忘父  
諱龍顏潛然乃從其奏澄剃髮已來世只呼越大德  
從此始爲泰澄和尚八年天下嬰痘瘡王公士庶久  
者不可勝計救澄攘之澄修十二面觀音法瘡疾不

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十六

○六

日而息古志郡國上山寺有一檀越造雷塔至落成  
日雷電擊破三造三壞檀越病諸澄往謂之曰亟作  
塔我爲加護焉檀越喜造之澄坐塔頂誦法華經俄  
雲雨降灑雷電鳴輝檀越悸曰佗時擊塔其光皆爾  
澄曰勿怖誦經自若忽一童男隕自雲中年可十五  
六頭髮蓬亂形貌可畏被縛五處流淚曰願聖者救  
吾暴惡澄曰汝緣何爲災曰此山地神與吾善塔立  
此地無彼住處是故爲障礙今依妙法力地主移去  
我已受護仰聖慈耳澄曰汝罪重此寺無水若出甘  
泉爲供佛僧當解汝縛又此寺東西南北各四十里



不可作雷聲汝能此一事乎童曰謹遵命言已縛解  
電光閃爍上空而太即時崑中清泉湧出夏冷冬溫  
燐滂無異又結界四十里不聞雷震一事至今不替  
矣天平審字二年歸越知山休居仙窟其山形似三  
鉗杵澄喜爲靈場神護景雲元年正月作三級木塔  
一百萬基其高六寸刻雕妙絕華夷緇素爭走乞求  
二月以書與僕射吉備公辭帝曰吾將還西方願留  
睿情於佛乘僕射以聞帝哀歎親灑宸翰以答於澄  
澄拜誦御書誠其徒曰聖筆審札置之高案慎莫忽  
諸三月十八日結跏趺坐定印而化壽八十有六頂

日本書紀 本朝書紀卷之六十六

〇七

放神光山谷變金天雨蓮華門人闕身身於石函澄  
平生時時頭現金光人有見即隱有宿疾者僅食鉢  
飯其病即痊雖萬里道一時而至驅役鬼神使令鳥  
獸皆降焉肅卿役小角以石索咒縛一言主神纏繞  
七市澄欲解其縛持念作法三市已解忽空中聲叱  
之澄乃止咒縛又如故神驗多端不遑具記焉雲居  
寺淨藏撰泰澄傳江帥匡房本朝神仙傳載泰澄事  
論曰余讀澄公傳幼慕佛乘者報得也長有感進者  
修得也記秘咒持密器者又非報修之所得也必逢  
審在而承之其傳中曰雖萬里道一時至然則遊天

三震丹本朝猶如巡家集其在白山逢善無良等瑜  
伽師而傳受之不可計知焉何者密乘實耳提面命  
一咒一印者若夢境間有感受者全咒全印者雖十  
地薩埵不能私淑矣是所以密教之異於他教也而  
澄公密乘奧秘皆悉知之此豈無師承如斯耶儻謂  
有聖知者自然感悟是又不爾弘法大師爲三地菩  
薩及其間大日經茫然不解逢惠果師傳而知之此  
其徵也雖凡夫傳修則有契聖業者淨定始爲船師  
被擬海客事澄公後飛行山川可復並案焉虎關和  
尚論云無故而感感之靈者也恐不然焉

日本書紀 本朝書紀卷之六十六

〇八

### 和州子島寺沙門報恩傳

釋報恩備前津高縣人天性好梵行十五歲家二十  
入吉野山持大悲咒歷四五載已得靈感太平勝審  
四年孝謙帝不豫救恩加持帝疾即愈時恩爲小沙  
彌有教訓染賜以今名固辭回山益勤持念桓武帝  
在長岡宮久憊沈疾國璽拱手帝嘗曰佛法威力若  
痊沈疾朕勤護法若無威力佛法於國家何益聽者  
寒心恩應詔入宮閉目持根本咒五十遍宮中震動  
大悲菩薩現形殿上帝病立痊感嘆無量因問曰法  
師蘊何行業神驗如此對曰某久居深山專誦神咒

又無他業矣帝起作禮給賞甚豐不幾潛回山帝遣內臣昇鳳輦追送於路恩辭不乘天平靈字四年三月恩紹精藍於和州子島安大悲聖像高一丈八尺脇侍四太王像極有靈應號子島寺帝賜封戶又詔親族賜官祿延曆十四年六月某日化太贊曰至誠感神矧佛法妙咒無感哉只要修者誠精純密苟誠精純密則一咒而足矣若謂不然恩公屢以太悲一咒致感飛龍焉

### 泉州卷尾山沙門法海傳

釋法海攝州豐島郡人父兄以漁獵爲業海性慈仁

每見殺生不任愛類人行基室出家納戒研習法相雖學業成嫌居師位或謀東大寺或居長谷寺只樂隨衆聞道靈龜之初住泉州卷尾寺九旬安居有一客僧從結制日汲關伽水持香花來每日無閑海感其信心到時必響及解夏日以法事繫食皇不覺僧不苦而太齋了海自悔跡路而行漸到海濱見僧著屐蹈海西大海悲泣拜手立渚招之僧回顧曰汝勿悲泣我施無畏者也家在補陀落山仍現千手真相重告曰汝圖此具容安卷尾寺利諸有情每歲十月十八日我當影向言訖即隱海不勝感歎歸慕繼焉

雕大悲像造堂安置每年初冬招集衆僧轉佛名經講法華經名卷尾大會近遠人民至今雜沓拜瞻焉

### 越前白山沙門藏緣傳

釋藏緣泰澄和尚之徒也形極短小又甚醜徐徐步行人不能及專持地藏名號又無他業遊化北土不在他方毀譽不遷好行施利人問其年曰八十然其顏可四十感通如響縛鬼降神白山立山爲修練場晚締菴於白山筭筵臨終夜高唱地藏寶號院中衆僧以爲緣勤持念誦朝至暮見之向西端坐合掌而化異香薰於院中矣

### 和州大安寺沙門慧勝傳

釋慧勝居大安寺從衆習學常持法華寶龜年中遊方至江州御上山宿陀我神祠側其夜夢一人來請轉法華天明疑之忽見一白猿謂勝曰我管爲東天竺國王國多比丘雖我未廢佛法曾下令禁私度今受報爲猿神願師置此轉經脫我苦趣勝曰我無糧不能久居猿曰我當設供勿爲慮也又曰淺井郡頗多淨衆當相勸誦勝即往彼陳其事時有山階寺僧滿預曰此事難信衆僧皆疑忽一童子來曰堂上有白猿衆僧趨見之九間堂材俄傾仆於是知神猿所

爲乃俱往而誦法華經

備中湯川寺沙門玄賓傳

釋玄賓姓弓削氏河州人稟唯識於興福寺宣教性厭羣塵銳行勤業嘗患緇侶營僧官又惡操人道鏡媚稱德帝潛出和州或作奴僕在路養馬或作渡司爲入栢丹後嘉遜伯州山桓武帝病述詔山中乞冥助至化難免自負鉢囊而入宮帝疾即愈辭而歸山平城帝詔召輩下聞僧官敕潛遁去在備中湯川寺斗絕不出嚙啖帝貴其操履詔問相續每歲贈布且賜宸書曰賓上人晦迹烟雲凝思練若春向覺花而

日本書紀卷之四十六

〇十一

獨坐夏隆提樹而閑眠持戒之光能曜昏暗護念之力自濟羣庶比來炎暑禪居如何朕機務之暇不忘寤寐地遠心近一念即到羅綺錦繡想在斥逐白布一束聊備法資願師領之約文仰意又救誓多郡賓之在世免租貢賦勞其供費也賓在興福寺秋篠寺善珠奉詔爲僧正自宮還時扣賓之門無敢答者時寒雨淫衣殊煩扣門賓漸出接入珠日夜未央若未寐開門何晏賓曰念僧綱人欲令止門外苦身志也珠笑歎談以弘仁九年六月某日寂於所住年八十餘初賓建阿彌陀寺於伯州會見郡居民崇信施入

寺田二町九段四十步清和帝貞觀七年秋追實其德敕免租稅

贊曰沙門者在勤道而息諸緣故鰓以勤息剃髮黑衣是其表相也賓兮賓兮其名實相契之至矣哉

和州東大寺沙門實忠傳

釋實忠不考其姓其許稟經法於良辨僧正權感不可思議也嘗神遊兜率內宮見四十九重摩尼寶殿有一所隨日常念觀音院見其修法儀軌心甚歆羨便乞聖衆得軌而歸欲修其法無大悲像常祈求不輟一日遊攝之難波津忽見閼伽器浮浪來中有銅

日本書紀卷之四十六

〇十二

像長可七寸相好妙麗其溫如人膚忠願出望外奉持而歸朝廷聞之敕安羅索院從此每歲二月對像修兜率宮軌二七日自天平勝寶四年至太同四年五十八載未嘗闕之至今尚然又二月仲旬修涅槃會自天平寶字五年至弘仁六年五十五歲遂不闕爲初忠修法時至初夏必請本朝諸州神讀名簿供之若州有遠敷明神預此懺會聞忠法音生崇仰附入謂曰願獻閣伽水俄黑白二鵝穿地而出飛止倚樹自其鳥迹有甘泉涌出忠其畔斲石爲閣伽井病者飲之多愈爲一時旱歲并潤修中欠水其徒集井

遷向若州持念須臾井水盈溢遠敷神前有河此時絕流無音衆人大怪後聞此事自茲名曰無音河忠容貌甚美一日召宮供齋適皇后窺見不覺就睡夢與之通既寤見忠其頂現十四面觀音儀相嚴如后出合掌懺謝其神異多此類也忠在東大寺補苴大佛殿者若干所以弘仁年中得少恙安坐吉祥而順世焉

贊曰孔子見南子矢之曰予所否者天厭之天厭之聖人之言極確實也忠公頂漏大悲之相者非啻矢之言直顯真身耳此吾法中修得之所成而孔老外

愛所絕而無也

### 河州西林寺沙門等定傳

釋等定從金鐘寺實忠傳華嚴旨名聲聲聞詔住河州西林寺此寺素天智帝之所建多歷歲月殿堂荒蕪及定之住百廢具修桓武帝在東宮時屢召聽法定一時登龜嶺山忽見獅子現無畏之身大聖示老翁之姿而獅子復本形老翁作童子定爲奇異之思登頰而歸奏於東宮乃幸龜嶺見文殊所現之處及其踐祚崇定甚渥任大僧都教主東大寺住職亦白講演不懈以延曆十九年七月某日取滅受其法者

桓武天皇藥師寺勝長僧都東大禪雲律師東大正進律師等

### 京兆西寺沙門守敬傳

釋守敬不詳其姓里自少游南京隨勤操等諸師學空有之法兼通密教與空海聲價並馳弘仁十四年帝以西寺賜敬東寺賜海於是兩門始開學徒合集天長元年春三月畿內久旱救海修法敬奏曰臣僧世齡法臘俱邁於海義當奉救乃命敬敬以七日爲期至於散旦陰雲厚覆都下俄暗須臾雷鳴暴雨大降救見其所詣東西京而已復命海海亦期七日敬

乃咒諸龍內一蛟龍是期至不雨海入三摩地觀敬威障奏朝重祈而雨事在空海傳從此不稱述修謂伏法一日海陽死令門人覓喪具敬聞訃舉哀修懺悔法其後敬化海亦修懺悔法皆降三世明王忽現於壇上曰我是守敬也爲令闡揚汝法屢成怨敵言訖而隱

贊曰經云作大魔王者皆是住不可思議解脫之地菩薩權以方便教化衆生夫提婆調達者俱是登地之薩垂也乘因緣輪以示橫逆耳世人以敬之與空海爭法雨只知惡之不辨如何以神力咒諸龍歷大



權者之修法者是豈凡庸而爾乎全是聖者之所作也撰以俾知敬公有本焉

和州大安寺沙門行敬傳

釋行敬世姓紀氏備後州人山城守兼弼子孝元天皇二十一世之喬仁和寺益信之族兄也居和之大安寺學三論及密教道骨堅強勤修不撓德業上聞任傳燈大法師位常持念寺之鎮守八幡大神貞觀元年詣豐前宇佐八幡神祠一夏九旬晝讀諸大乘經夜誦密咒夏滿將歸其夜夢神日久受法施淡契我心師回王城我亦隨行居王城側當護皇祚故以

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十六

○十五

中秋著山崎縣其夜神又告曰師當觀我所居之處夢覺起見東南男山神光一道現錫峰上凌晨至其處實靈區勝境也敬始構茅社敬獻法味錄事表奏詔稱工部準宇佐之祠新建神廟祭禮相繼實貞觀元年九月十九日也其後朝廷爲國家安寧於豐前國爲一切經納宇佐祠命敬檢其事世傳敬嘗祈見神之本身俄爾陀觀音勢至現袈裟之上因是殿內安三像云

贊曰神者靈鑒不昧居清淨之地有感而無不通之夫一心法界者清淨之基也故十方諸神來于佛會

誓護正法此方之神崇佛子依此義也宇佐八幡神感敬之清修影降男山遂定闕宮義亦在茲論神道者或有應化合一之說於理不周焉

和州興福寺沙門願安傳

釋願安不詳姓所興福寺仁秀僧都之高弟也蚤敏先覺之門性相之蘊結悉解紛加又悲智一嚴兼備時人呼願安菩薩承和二年秋將往但州乘舟湖水及至中流暴風俄吹逆波大起舟將傾覆衆人恟懼安獨端坐默念觀音于時白雲忽降掩安之頂雲中現金色大悲之相安及衆人瞻仰誓願須臾猛風止

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十六

○十六

逆波靜衆皆舟下拜安而太安後開金勝寺而講經論南北義學會集盈席釋書作安願寫者誤乎願安之名相宗之人嘆之熟矣東福岐陽秀公訂之余亦改焉

贊曰縫掖之不畏風波者晉有謝安宋有伊川其守敬字養志可稱吾緇衣之門還傳靈感者安師之餘不逞僥倖指其妙驗之不可思議也不可與他教同類而語焉

攝州勝尾寺沙門證如傳

釋證如時原佐通之子也母藤氏以無嗣每月望日

詣佛塔瞻漸及二年始以學如以天應元年四月五日產子儒之豐島郡及至七歲母謂夫曰兒已長大我無所慮許我出家夫曰吾志復然如聞二親語悲戀不已父母摩頂慰誘翌朝有分衛僧夫婦請人俱語素志僧曰二人春秋方壯共求作僧真火中蓮也如聞僧語亦索出家夫婦相喜二人同日剃髮粟戒留僧受教朝夕勤修三年後忽失僧所在延曆十四年二月十八日父母沐浴淨衣至於中夜同時化去如時年十五爲父母修常不輕行十六萬七千八百家轉彌陀經五千餘卷其行脚間暴風甚雨不敢露

本朝高僧傳卷之四十六

〇七

衣所過第宅必薰異香後入郡之彌勒寺隨侍證道上人學顯密教性耐修練居十五年旬二飯一月六食其經行時等身禪徒隨於前後弟子窺之只見身體不見其面別構艸庵晝夜閉戶忘言念道一夕天樂鳴空有人扣戶曰我播州賀古郡教信也今往極樂明年是日上人亦當生樂國故來相告耳光射菴中少選乃滅翌日使弟子勝鑑往決其真既到其宅有一婦一子曰教信者我夫也常修念佛稱彌陀丸某日往生鑑歸告事如乃猛省曰我多年勤修不如教信從此巡聚落讚說經乘勸諭念佛一日沐

浴畢謂門人曰教信之報今日相當矣汝等宜努力莫有怠惰乃入室定坐及至半夜金光耀煌香氣氤氳雲上有樂西向而太天曉門弟子等開室視之手結定印結跏而寂貞觀九年八月十五日也春秋八十有七弟子等不進哀慕延葬三七日其間奇香尚薰茶毘之後手印不壞門人諸檀越石塔藏於靈骨并不壞者

系曰如信之業定散各別真俗相隔其感者何也通曰定散者理事之二本不相離何言各別真俗不二寧隔緇白邪蓋以感應道恆而來矣

本朝高僧傳卷之四十六

〇八

### 京兆清水寺沙門延鎮傳

釋延鎮南京報恩法師之上足也寶龜九年夏四月登洛東乙輪山嶺頂有瀑側有艸菴白衣老翁居鎮問其姓名曰我名行睿隱約此山已二百歲持大悲神咒待公者久我將東行此地好建精藍乃指庭枿曰我以是擬刻大悲像我若還歸公先造之向東而太期迹不還鎮巡見山中山科東峰遺履一雙即知老翁大悲之應現也鎮無資刻像在再送年延曆十七年鎮守府將軍坂上田村麻呂獵鹿到菴鎮語緒由將軍感喜移宅爲寺造像安之號清水寺尊信日

渥二十年春將軍奉敕征伐興州高九人山謂鎮曰  
 我將討賊不假法力恐辱王命願師加意鎮輒諾將  
 軍已到興州與賊交鋒之際王師箭盡俄有小僧及  
 童子拾箭與將軍遂射殺高九獻首帝城及歸王都  
 詣鎮謝曰此番非法力不至於此不知師所修者何  
 鎮曰我法中有勝軍地藏勝敵毘舍門我造一像供  
 修將軍便說二人拾箭事登殿見像偏身刀矢痕又  
 泥土粘脚將軍奏朝不詳鎮所終  
 贊曰行磨延鎮者大士之化也田村亦然楞嚴經曰  
 若諸衆生愛統鬼神救護國土我於彼前現天大將  
 軍身而爲說法令其成就縑素雖異而至于假現應  
 身守護王民者俱是菩薩之誓願也矣

本朝高僧傳卷之四十六

〇十九

本朝高僧傳卷第四十六

音訓

募

蒙哺切

孺而宜切

頻阿邊切

涸曷各切

煜余六切

氣

上伊具切  
下於云切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財契  
 本朝高僧傳卷四十六 茲冀  
 上報四恩下資三有蒙道繁興種智圓明  
 寶永丁亥佛成道之日  
 濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

本朝高僧傳卷之四十六

〇三十

本朝高僧傳卷第四十七

濃州盛德沙門 師蠻 撰

感進四之二

攝州勝尾寺沙門行巡傳

釋行巡不詳其氏稱蘊顯密學爲勝尾寺第六座主年德共邵緇曰欽之貞觀年中清和帝不豫詔諸山名師入內修法金吾校尉藤佐道傳詔赴關巡不肯起金吾曰我聞普天之下莫非王土率土之濱莫非王臣師雖出俗寧不居王土乎願速奉詔巡乃卓杖於地敷座而坐曰我不居王土矣金吾曰杖下豈非

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

〇十

〇十

王土邪巡又踊身空中凝然而住金吾驚歎歸奏帝僞生敬仰重下敕曰師已不來願垂覆護巡獻以法衣念珠使至中途一物自飛入雲徑到御几上群臣歎異帝起身作禮病即愈大悅賜莊田永充寺產初名彌勒寺以巡不應詔御賜大眷敕改額勝尾寺巡又青縣開菩提寺元慶間帝幸勝尾寺巡已歸寂門生以爲榮矣

贊曰漢河上公逢文帝昇天離地一百餘丈夫道家者流以故作意純心修煉尚或飛行尸解矣有似佛法身如意也然至于菩薩之意生身佛之百億分身

彼勤學不及足勝也巡公飛法不念珠帝病愈者是薩垂之事列聖堆中爲不慙德矣其坐於杖頭住於空中者神通遊戲之士查歟

洛西高雄山沙門智泉傳

釋智泉讚州人空海和尚之族姪也且弱歲侍海之巾幘二十四年遂承兩部密灌實諸秘法喜怒不遷舉止契度海見其氣象爲高尾山寺三綱司後解職居東寺其性淳順慈母泉毀過制乃禱諸聖求知已母之生處如是數歲夢高僧告曰汝當墮地獄泉益悲泣啓海公曰所生母在奈落以何方使出彼苦趣

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

〇十

〇十

海曰儼然地獄法必可得救焉因授地藏軌泉即純心精修一夕夢母莊嚴美服告曰我依公法救今已生天上矣泉夢覺歡喜無垠天長初先海而卒海作蓮觀文傳之語在性靈集中

和州金剛山沙門滿米傳

釋滿米不詳其師承居和州金剛山寺俗曰天戒寺純真謙讓小野篁崇其道望執弟子禮篁又奇人也身列朝班而神遊瑤宮瑤王一時對冥衆嘆曰澆漓有憐罪障至淫我雖精直頗難餘殃是其所夙業之不純也故我得雙王之名矣如何免此殃皆曰太王



受菩薩戒。琰王曰：奈何？府無戒師，何堪？答曰：我有師友，戒檢純淨，在閻浮洲日本國可謂焉。琰王悅，曰：卿早請來，當詣寺告事。米便伴，直至地府。琰王肅米，登師子座，受菩薩大戒。琰王曰：戒德重，何以表？觀米曰：我常見地獄苦報，願大王許之。王即將米往阿鼻城鐵門，銅金火聚刀山，諸苦具殆不可言。又至一所，熾焰迸騰，一比丘隨焰上下。米問琰王：彼沙門爲誰？何等極報？在此火中？王曰：師自問。彼米待隨烟下，近比丘，問其名。比丘曰：我地藏菩薩也。子來此界，幸說戒法，地獄衆生離苦者多。我甚隨喜，我得牟尼親屬。

不墮猛火，大悲代苦，化諸衆生。雖我行等慈，無緣衆生不能濟度。子返人間，告四衆，使投歸。我復言：地獄苦相，米已辭地府。琰王令冥使擎一漆篋，賜於米。米持歸，啓篋，白粳充物，隨用隨滿，竟不竭。米素持地藏尊，乃相良工，刻獄中地藏相，苦堂安之。其像今尚在，長五尺，米本名滿慶，得琰米後，時人改今名。

豫州神宮寺沙門行信傳

釋行信，初出家來，不慕名利，淡山幽谷，禪坐安居，誦尊勝陀羅尼，遊巡至豫州神門山，修練苦節，齋飯屢空，日課無輟。有神女問曰：禪師何求？來送數日，信曰：

我修菩提，期積盡命，沒耳女歸敬，而太即厭齋饌，曰：我此山神，感師德來，此淨飯食，實非穢物也。從此日送供，不解。一日，女曰：我有一願，請垂慈悲。我夫往管獵者所，害數千歲，間骸骨暴露溪谷，神術無由殯斂。貴依法力，燒失醜穢，信即隨女至其骸所，拾聚一所，誦咒下炬。女拜謝曰：願今足矣。難酬此恩，敬獻五百戶封，即指封至，而太信遂就其地，營構神山神宮寺。云。

和州藥師寺沙門慧達傳

釋慧達，俗姓秦氏，豫州人。從藥師寺仲繼大德受法，相性篤誠，任法規，初住藥師寺，後歸江州比良山，修練者久。孔有威徵，文德帝弗豫，召達加護，帝疾即瘳。優詔歸山，貞觀五年，清和帝就于神泉苑，祭崇道天皇伊豫親王，藤后吉子，橘逸勢，文室宮田麻呂等，怨魂設施，几筵盛陳，花果恭敬，薰修衆會，清衆演說，金光明經般若心經，詔建爲導師，命雅樂寮奏音，樂令藤基經及常行監護法會，是謂御靈會也。是日，詔開苑門，都下四民賜觀法事，尋任達僧綱。元慶二年八月二日，化。年八十三。達嘗於藥師寺每歲修萬燈會，自年二十八至於終歲，不曾缺焉。

江州廬山沙門成意傳

釋成意爲廬山定心院十禪師性簡潔無繫著不拘齋時或喫哺食弟子諫曰山中皆持齋師獨何否邪意曰我本貧窶廚饌不給齋食多缺故隨有而食古稱心礙菩提食不礙之弟子杜口而退一朝命曰今日早炊飯又倍常弟子如命意分鉢裏飯一兩匙帶與諸弟子曰汝曹喫我飯只今日而已飯畢命弟子曰汝往無動寺相應和尚所如我詞曰意聞衆問許今當往生安養未及面辭化日於彼土相見又至千光院增命和尚所如是言弟子曰師尚無恙事若不然寧不謂我矣乎意曰借使不然則咎在我於汝何有焉弟子乃往兩所未旋踵意向西合堂坐脫矣

江州無動寺沙門相應傳

釋相應江州浚井郡標井氏子其先孝德帝之裔也母氏夢吞劬而娠天長八年生是日瑞雲覆庭香氣盈室及年志學從廬山鎮撫十七剃髮入座主圓仁室投誠習學仁公見其勤愿以爲良器曰朝廷賜度必得汝焉不幾度牒下仁卽與牒應讓同儕仁謂諸徒曰此後生先化後亡陰德陽報徒善哉齊衡二年春藤公良相與書仁公曰雖戴冠纓志在薙染皇眷

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

○五

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

○六

優渥不能遂心願得俊才代吾奏度仁公呼應告曰藤公求度者是汝良緣相應也今名汝以相應蓋取藤公一字也因拜牒得度學例居山十二年矣仁公授不動別儀護摩法應修練精勤早顯法驗天安二年藤妃多賀幾子嬰在病萬方不愈藤公招應應辭曰丁紀未滿恐違寺規仁公召應曰八福田中看病第一諸朋友內外護無雙況殿下度汝符其身也若不赴失素又似背恩汝其往哉不可拘禁應乃入宮諸山宿德看護病牀應披蠶衣謙退著座誠心加持神藥妃於屏外躍而至應前舉聲叫喚應制還帳中頃刻靈怪託妃陳謝狂疾速息貞觀二年敕於宮中修阿比舍法咒縛二童子應問何人童曰我是松尾明神也帝怪之令源僕射問睿情所疑之事童決數事皆愜帝意時典侍藤氏侍側問以化事童皆不答少選典侍病狀還私宅經四日死敕給度者御衣謙辭不受此年藤妃又病藤公又召應加持便愈藤公大悅施巴子國舍劬是藤公之淡友從唐國所送時爲奇害者也五年應準等身長刻不動像六年創一字安置號無動寺八年抗表曰南嶽天台皆有敕號先師圓仁願賜太師之謚朝議曰最澄法師未有此

稱師資之道自有次序何超其師獨獲弟子應重奏  
日祖澄父仁如龍如象各赴西唐之域共傳東漸之  
燈弘法之功不易優劣然先仁者系嗣也聖恩若降  
於二謚祝慶併歸於兩宮依是賜傳教慈覺二大師  
謚號本朝大師號權輿于茲寬平二年秋帝有齒惱  
敷應加持誦理趣分五更帝夢高僧八人與應加持  
寤後所漏之齒忽不知所在帝以夢詢應奏曰理趣  
般若有八大菩薩即八十俱胝菩薩之上首也臣僧  
五更誦經是彼大士所擁護聖躬也帝感悅焉應已  
歸山其齒在經篋上持以上進帝歎曰應師非凡人

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

〇七

也卽賜僧官兼度牒應受其牒而辭僧官五年藤原  
后明子殿受狂疾諸師祈咒更無驗后曰非諸佛出  
世誰能降我乎帝召應加持二日不能降乃歸山持  
咒禱於不動明王像前像忽西向應卽西持像轉東  
西應亦隨之悲泣誓首言以無二心久致歸敬有何  
觸忤而相背至此願垂神慈示我明誨閉目懇祈恍  
惚之間聞明王告曰管金峰山僧持我明咒有大精  
力而彼有一念之惑誤墮鬼趣我以本誓思護彼且  
背汝耳今后所狂彼僧之靈也汝之誠精至此不能  
固拒示汝一訣汝至后邊密語之曰汝豈無金峰山

之僧邪彼聞必有愧色當登時以大威德明王之法  
加之決得降伏汝但持我咒不能降彼何故彼是同  
咒故此亦大慈善巧回彼邪心令人正道應感喜微  
隨頭面禮足翌日詣闕如故而修后病立止延喜三  
年玄昭病重左僕射藤時平請應於昭房下七日修  
不動法至第六日毘盧舍那并不動尊現於爐壇猛  
焰上應與昭共見餘不能見昭揮淚曰依和尚德見  
毘盧身重病立愈十五年應白明王曰願示來世  
所居夢明王擊應坐須彌頂盤石上普見十方國土  
如掌中卷摩羅果明王曰汝隨意取生夢覺歡喜十

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

〇八

八年十二月二日應向西唱彌陀右脇而化俗齡八  
十八僧臘六十四是日大津浦民聽睿山南峰有木  
樂各出宅望之慶雲繡布峰頂應性住精苦斷穀食  
弃鹽味落飛鳥止霖雨行植太樹自相交纏暴漲流  
水忽使迴洄矜伽羅制多迦二童常侍左右云  
贊曰信者內隱者謙者外顯者也持明王者信也故  
左右逢源讓度牒講祖父之謚者謙也故神人以雍  
易日謙尊而光卑而不可踰君子之終也者應師之  
謂也

城州鞍馬寺沙門峰延傳

釋峰延東寺十禪師也當望北山有紫氣心乎怪之  
丁日遊行至鞍馬日已暮乃拾柴燒火禪坐誦經愛  
山深遂殆越數日一夜有鬼女至延避入堂後枯木  
中鬼乃隨至翌日切齒延默念毘沙門枯木俄倒壓  
殺鬼女翌日地主太中大夫藤伊勢入山見延困  
臥問其故延曰我不食者五日故臥耳太夫便洗梗  
米飲白漿因語以件件太夫即請延爲寺主夏中修  
護摩有巨蛇來目如閃電舌似燄火延即又誦毘沙  
門咒蛇忽段段而壞三日後太夫來見歸朝以聞敕  
發役夫五十人棄巨蛇於靜原山從此俗呼其地爲

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

大蟲峰其後延以延喜二十三年閏六月二十日向  
西念彌陀正心而卒歲八十

丹州玉泉寺沙門覺如傳

釋覺如不記本貫久居南都東大寺通博三藏精于  
密教常欲求勝地而權所業矣昌泰元年杖錫登丹  
之於道山是觀音大士之靈區也愛其清境駐錫安  
居持律苦節且課蓮經小野氏某崇信供待學徒瞻  
風茅宇爲窄而山中無水設覓置符以備朝昏其勞  
役殆難堪如嘆曰古人卓錫剎地禱水得感我亦何  
入哉乃坐崑崙純壹修持一夜崑崙汎汎泉涌出

於是晨餅暮羹掘之彌出冬夏不涸道俗見聞莫不  
稱嘆學人歸法檀越發心未幾殿宇構成因名玉泉  
及如太世義龍律虎相尋住持皆能演法歷二百季  
悉廢壞焉寬喜初洛北于本大報恩寺義空上人聞  
其靈場承乏住持說經講論百廢亦復寺衆稱爲中  
興矣

贊曰山居之僧所水得感者此書往往記之蓋感應  
非外在我心而無古今之隔也知公能知此理故不  
獨益可知理事俱本于心焉

和州東大寺沙門觀宿傳

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

釋觀宿不知姓系幼年出家歲二十三登壇稟具嚴  
道義法師之門學華嚴入真維僧正之室受瑜伽傳  
灌頂於聖賢僧正學涉內外延喜十年爲內供奉十  
七年管東大寺務延長二年六月旱有詔七月朔於  
神樂苑修請雨經法至第二日雷鳴雨濺赦曰可重  
修使實五穀越延七月修中大雨賞賜甚多二年春  
任律師秋八月爲東寺長者五年秋任少僧都聖載  
轉大僧都母上僧繼超延歡智愷基繼益以有智德  
也十二月十九日化年八十五臘六十二

江州金勝寺沙門光空傳



釋光空江州人居金勝寺持誦法藥其音清雅聽者  
樂悅有兵部郎中平氏某者將門之族勇悍武夫也  
延空其宅供給數歲空者諒曰空與室通兵部大  
怒將空至山繫之樹下令僕從射空觀懼諱遭害必  
宿殃也專意誦經僕連五發箭折不透兵部自射二  
十九矢皆悉摧折兵部驚懼投弓乞謝歸家厚遇除  
於先時也其夜兵部夢金色普賢菩薩乘白象而至  
其腹數矢兵部問菩薩因何受多許矢普賢曰汝依  
護射持經者故我代受苦夢覺兵部大恐向空益悔  
過驅其家人空居三日猶避嫌疑夜中出太其夜兵

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇十一

### 江州延曆寺沙門增命傳

釋增命京兆人左太夫桑原安岑子也父母無子祇  
佛而生骨相不凡纔有奇理天性慈順少無兒戲夢  
有梵僧來摩頂曰汝莫退其提心年及舞勺登睿山  
師西塔院延最齊衡三宰降敕八宗選秀才者山田  
春與才智博洽蘊鳳鑑之術承詔行諸寺見沙彌少  
學之者看命驚曰聖主降旨爲道擇人適得斯子實  
豫章之才也因登試席奏音宏亮文義渙放細素稱

之時年十四越二歲登東大寺戒壇受具足戒只觀  
九年稟菩薩大戒於睿山感慈覺門習學台教仁和  
元年得三部灌頂於圓珍座主寬平二年夏西塔釋  
迦堂後結菴禪坐南峰側有木崑其形似蛇齒舌皆  
備故老相傳學徒居此多太凶者遭此蛇吞命即對  
崑持念七日白晝雷殛其崑摧崩斷片于今在路傍  
云昌泰二年任園城寺長吏延喜二年秋齋宮公主  
有病詔無動寺相應持念十日無効召命持誦不日  
疾愈是歲長公主迎命於六條院出家受戒又稟灌  
頂五年四月寬平上皇幸睿山隨命受戒壇上現紫

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇十二

金光相尋受灌頂十一月於總持院受蘇悉地法明  
年爲睿山座主十年九月上皇幸千光院受阿闍梨  
位上皇手賜磨衲袈裟香爐數珠并御衣右僕射源  
光一答夢一人告曰汝五十九當須修延年法請  
命修觀自在軌源公夢長五寸男子以羽覆面語曰  
我是施無畏者也我能活入汝知乎施無畏者即睿  
山座主增命也汝命已延六年矣源公語人曰命師  
者觀音之應化也六年後源公復命命修前法源公  
又夢比丘告曰汝壽復加三年十二年春源公薨皆  
如其夢十五年秋天下痘瘡帝亦弗豫詔命入宮帝

口頭痛身熱殆不可忍也。命合眼持念香爐烟連念珠音亮熱惱忽散。聖軀安泰任少僧都。延長元年春。管靈齋。宮城騷動。太子俄夢詔命侍官凡百餘日。侍臣多夢神兵森列。看護宮闈。五月晦日辭宮歸山。敕爲僧正兼管法務。台徙此任命爲始。二年秋帝患瘡。敕命加持御惱。卽經時湛譽法師亦在。宮白日見鬼。下殿。太延長五年十二月初示微恙。十日使門人掃室曰。人生有限。本尊誘我。汝等不可親近。今夜金光紫雲。且天音樂。聞空香氣盈室。命起燒香禮拜。唱彌陀號。據凡氣絕。壽八十五。中使弔臨。命納戒以後。

本朝高僧傳卷之十七

○主

賜不著席客來。不分貴賤皆起。送迎有沈痾者。與命鉢飯。莫不平復。是月十七日追賜圓珍於智證大師。依命之遺奏也。卽以命諡靜觀。延喜延長之間。台密諸師以法力驚世者。難枚數。命師立其中。特擅神驗。觀音應化不可議焉。

### 江州延曆寺沙門玄鑑傳

釋玄鑑。羅津守高階義範子。仕清和帝爲給仕中。元慶三年。夏天皇歸法落飾鑑從。而剪髮。時年十九。翠巖上睿山拜智證大師受大乘戒。回仕法皇於水尾山。爾後就遍昭良男二師學顯密法。粗得要領。復隨

玄昭僧都於清涼院。稟灌頂法。辭登和州談岑。修法華三昧。屢見靈感。延喜二年秋七月。昭公奏朝。爲元慶寺主。延長元年秋。爲延曆寺座主。持律絕清。齋戒無虧。一時風疾。知事菜汁加酒以薦。當之甚甘。乃知加酒持戒。吐出時天井有聲如爲物被傷。風疾卽瘳。後保數年。延長四年三月十一日安庠而逝。壽六十六。其後弟子依檀越病至宅持念時。鬼魅託人而言。汝師鑑公修法精進。我欲妨其善心。匿居天井。日夜窺隙。一日感典座僧進酒。鑑公卽吐。時護法神捕我打頭。我彌忿怒。欲妨歸終。而無量聖衆來迎圍繞。不

本朝高僧傳卷之十七

○主

得爲障。吾子鑑公弟子故我。今告此事。檀越病卽時瘳焉。

### 江州延曆寺沙門尊意傳

釋尊意。姓丹生氏。平安城人。或曰江州其先應神天皇之季也。母憂無嗣。禱觀音像得靈夢。而妊。貞觀八年二月中旬生。意甫六七歲。好讀書籍。不食肉葷。不害羽鱗。口咀南無心樂。山林鄰僧思其梵種。授千手多羅尼。意能暗誦。入城北度賀尾山。就寺主賢二。誦咒三年。元慶二年。賢一入越之白山。臨別曰。我將遠行。再遇難期。因以所持藥師佛像付意。而太十四。躋白檀

師事增全僧正見稱法器十七耀髮習學有聲二十  
一禮座主圓珍受具足戒一紀之間鎔究台教案兩  
部密法於增全傳蘇悉地於玄昭諸尊祕軌多品密  
咒且誦萬及又修護摩一千餘座觀音文殊金剛薩  
埵不動明王夢中現來摩頂慰誘從此感應盼靈延  
長三年夏旱宣於延曆寺修祈雨法意率六僧修佛  
頂尊勝法四日雨降舉朝嘉歎從此尊勝法鄉於朝  
廷四年五月皇后產難敕意修法天使藤元方宣曰  
若母子難全獨救護后意奏曰能生所生皆悉安穩  
明王本誓何有疑哉即修不動法明日皇子平誕天

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

○五

皇大悅任延曆寺座主七年春三月京畿多疫詔曰  
聞密教中有除疫法速懷災厲意任二十沙門於豐  
樂院修不動法時疫即熄賜度者二十人八年六月  
大納言藤清貫右中辨平希世侍臣數輩在清涼殿  
爲雷被擊天皇惶怖玉體不豫乃遷於常寧殿意  
持念意在睿山一日菅丞相化來曰我得梵釋許與  
欲償夙懃願師道力勿拒我矣意曰諾然普天之下  
皆王民也若承皇詔我何所辭乎管作色而起道薦  
柘榴取含吐座忽化火燄坊戶烟騰意結瀉水印檄  
之火焰即滅既而雷雨來旬鴨河大漲詔意赴宮車

至河濱激浪止流水不涇輪入宮持誦帝夢不動明  
王火焰熾然厲聲誦咒加持聖躬夢覺聞之即意之  
聲也帝謂左右曰意聖者也承平元年冬於宮中始  
修佛名懺悔永爲恆例四年春弘徽殿庭樹有鳥作  
巢詔意持念七日移徙天慶二年夏旱修尊勝法於  
延命院至第七日晝夜大雨賜度者二十二人三年  
二月睿山講堂修不動安鎮法降平將門壇爐焰中  
將門帶弓矢立助修之僧皆見之不幾平氏伏誅二  
月二十二日剃髮沐浴謂弟子恆昭曰我年來願生  
極樂今華欲生兜率華送之法不擇日時吉凶不用

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

○十六

陰陽鎮宅加持淨水誦五字咒灑其點地結四方界  
標一石柱令來見者結觀史之因又我弟子等七七  
之忌集居舊房修唱念佛各於自房益勤修學若有  
思我祇願所業是報恩也明日早晨著新法服洗手  
漱口步出乘輿赴習禪房無疾示寂春秋七十四夏  
坐五十五間維之間聊無暑氣弔慰之人皆爲奇異  
是日烏百餘集房悲鳴見人不避移時飛去意常分  
飯與鳥以水叩板集生飯臺及此哀慕矣二十十八日  
敕贈僧正弔一七也

贊曰顯密之中高德不少如意公者不復爲多醍醐

聖帝聖者之稱，睿簡蓋當而已矣。

### 江州睿山沙門平忍傳

釋平忍，或作仁，從睿山座主尊意學，台密教，居東塔法華三昧堂，其性簡潔，僅著衣鉢，課持妙經，不思佗業，年八十餘，意欲高脫，當夢受兜率請修法華會，翌朝自意曰：忍今日將往兜率，內院所憾失和尚謝世，含淚而出，意謂弟子賢信，曰：忍之言可怪，遣使候問，復命曰：上人已逝矣。意歎，翌日至人行行李，慮難測，忍臨終告門人曰：空中伎樂，汝等聞否？兜率天人來迎我，言畢遂殂。天慶元年某月日也。

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇七

### 江州睿山沙門明達傳

釋明達，名真仁，姓土師氏，攝州住吉縣人，十二歲隨藥師寺勝雲剃髮，稟戒，寬平元年十月二日，栖原寺勢春夢，一老翁告曰：住吉真仁，再來人也。後生此國中，選入唐博綜儒教，唐帝愛其才，賜名韓衡，仕至諫官，不歸而終。又生此國，出家歸道，必為明師，化緣已後，亦生彼土。我是坂本之翁也。松尾明神達十五就天王寺，尋仙受太白止觀，又登睿山，隨座主尊意，得顯密奧旨，靈徵之應不減，師德天慶三年正月二十四日奉敕於濃州南宮寺率三十僧修四天王法，降平將

門權授內供奉十禪師。二月十三日午時，赤雲來自東而入，爐壇須臾，鼻氣滿道，場助修之僧各掩其鼻，十四日將門伏誅。冬十一月又奉敕往住吉神宮修毘沙門法，降藤純友，翼歲五月純友夷族。天曆九年九月二十二日寂，年七十有九。

### 城州醍醐寺沙門貞崇傳

釋貞崇，姓三善氏，以貞觀八年生于山城州，自少傑出，初從貞觀寺惠徂學密教，後依醍醐寺聖雲稟灌頂法，兼質三論，出住和州鳳岳寺，移藥師寺道賴高妙，為時所挹，延長八年補醍醐寺座主，是歲帝病，詔

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇八

崇加護，一夕若有入共語者，帝怪使侍臣伺之，更無有友，崇獨宴坐，帝召詢之，崇不敢隱奏，曰：頃有荷神光臨，言陛下不久，獨羣臣而陟，方太矣，無何帝崩，承平三年，董東大寺，冬十月加東寺三長者，天慶元年任權大僧都，五年十月領金剛峰寺座主，明年上表，曰：貞崇，昌奉二年，謝東寺二十僧，依有本願，隱金峰山，結構艸廬，二十餘年，夏絕出山之思，一生之間，欲遂臥雲之志，而延長五年，頻蒙恩詔，俄候禁闈，於今十七個年，勵朽邁之愚性，奉二代之明時，偏忘烟霞之舊機，忝沐雨露之厚恩，況乎無為之化，自及不尤。



之賞頻降。歡娛有餘。還恥肥鴈之貌。涯分已溢。如何腐蝶之身。齒是八旬。命期一夕。耳目漸失。視聽之勤。手足且止。舉動之便。雖報壯日之管心。不堪暮年之老力。望請殊蒙慈恩。罷歸本山。將送餘喘。若雷露命。於艸菴。過霜資。於松岫。則拭一心之觀月。而遙添金輪之曉光。回六時之念殊。而藏所玉衣之遐算。帝許奏表。天慶七年七月二十一日順寂。壽七十九。

京兆東寺沙門貞慶傳

釋貞慶。大田氏。濃州人。從本州延命院承俊僧都受兩部灌頂法。又入洛都。負笈密場。陪承諸師善。究其

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇十九

蘊。延長七年主東寺。承平三年春有詔住貞觀寺。天慶三年冬任律師。七年夏司勸修寺檢校。行法靈感。學侶歸心。七月八日卒。年七十二。

城州法琳寺沙門泰舜傳

釋泰舜。姓藤氏。城州人。初從蓮舟阿闍梨薰大灌頂。就小栗栖。命藤供奉。承大元法。藤者常曉之孫也。承平元年遷藤師。命住法琳寺。敕任大元阿闍梨。天慶三年平將門叛。于下野救諸師降伏之。舜修劍輪法。其軌有六印。當結祕印尊像。所持獨鉈杵。半折。臨壇是日。將門伏誅。賞任律師。其折鉈杵。門流傳焉。四年

爲東寺長者。七年兼司法務。天曆二年十二月二日得病化。年七十二矣。

和州藥師寺沙門濟源傳

釋濟源。不詳其姓氏。其產所。心志潔白。高出物表。從藥師寺延濟僧都習學三論。究空宗。蘊兼修念佛三昧。任權少僧都。七太寺衆徒皆敬恭。天德四年四月五日示有小恙。以米五石納藥師寺。曰。我天慶七年奉旨主藥師寺者。六年其間用常住米五石。今日將終。故償之耳。既而天樂響。天奇香演。院須臾入寂。常所騎白馬。跪鳴云。

日本書紀 本朝高僧傳卷之四十七

〇二十

江州延曆寺沙門義海傳

釋義海。姓宇佐氏。豐前州人。緝年英發稍長。入都師。睿山清涼房玄昭。剪染得度。顯密二法粗能。錯綜隨座主尊意受。兩部密灌。寬平八年稟菩薩戒。於座主康濟。又奔南都。究性相學。延長四年尊意奏。朝以海爲睿山阿闍梨。尋任權律師。承平六年春。皇帝不豫。

令海精祈玉體平復轉正律師賜砂金千兩天慶二年春補延曆寺座主年已七十是歲冬轉權大僧都四年夏五月奉敕修太威德法調伏朝敵即日得驗帝賜優賞海欲知受業師昭公之生處精祈三案一時定中登太金山高可百由緒其頂上有金銅宮殿華棟壁瑤眩耀人且前設金門四無雲氣觀大千界如粟米粒海轉盼間自宮中聲曰客奚自來海曰磨山義海欲奉拜先師玄昭和尚以行解不淨身來願而來又聲曰其言可證大聖明王良久矜伽羅制多伽二童子排玉扉而出日上人相隨我來引至太

日本書

本朝高僧傳卷之四十七

○主

聖明王處玄昭和尚安坐玉牀海殷勤三拜昭公告曰我在磨山時禮生不動明王住所誓願不虛今得生此城比磨山過五十餘代爲座主者當興隆顯密法汝早還本山誠祈三寶當來此城矣定已覺海歡喜無量八年四月餘內久旱奉敕修孔雀經法於神泉苑修中得膏雨至結願且敕任法務五月上旬行尊星王法御願成就賜年分度者十二人臘月四日祝延王家事伴僧二十人修熾盛光法本朝修此法以海爲始九年五月六日偶得微疾十日入滅壽七十六

贊曰古稱誠者天之道也誠之者人之道也海之具專見誠者於此乎有徵矣

### 江州延曆寺沙門延昌傳

釋延昌姓沔御氏或曰賀州江泥郡人容顏端嚴聰氣滿眸幼投州之敬寺讀諸經論彈記超隊及歲十三始還鄉宅父嫌歸見昌大怒曰我欲使汝入寺學文成就救自救化旌父母名也今何退至家耶以弓逐打昌惶惶本居越前荒知山會平泉寺僧見昌於途攜登磨山與座主玄昭昭刺髮就業放以顯密年二十一受菩薩戒於座主長意又入仁觀慧亮之室

日本書

本朝高僧傳卷之四十七

○主

傳灌頂法究諸密部學於下山承平五年冬辨日阿闍黎奏爲法性寺阿闍黎天慶二年冬任座主明年補內供奉十禪師九年臘月任延曆寺座主天德二年昇至僧正昌每夜誦尊勝咒一百及每月望日檢同門衆唱彌陀讚對論法華與義爲朱雀村上二帝師人內加持老父來自賀州目歡迎者遇授菩提聖月爲還鄉之餘昌謂徒曰我臨亡前三七日修不斷念佛當取滅也一夜夢異人來告曰子欲生樂國爲一切衆生書寫法華經一百部乃捨不盡書寫供養應和三年臘月之末命門弟子修念佛明年正月

十五日沐浴淨不向佛像結定印而化享壽八十五  
自往補陀落寺山中之水誦尊勝咒閉目加持清泉  
涌出寂後三日賜諡慈念

本朝高僧傳卷第四十七

日本書紀

本朝高僧傳卷之四十七

〇五十五

音訓

霽 曰許切 廚 上長魚切 匙 仁之切 櫬 倉回切 怩 女九切

江府住玉泉軒成九居士信施淨財契  
本朝高僧傳卷四十七 茲冀  
上報四恩下資三有家道繁興種智圓明  
寶永丁亥佛成道之日  
濃州路加納盛德禪寺 知藏比丘 識

日本漢文史  
籍叢刊

維  
史





[ General Information]

□ □ =14664066

SS□ =14664066